

日本美術年鑑

昭和十八年版

美術研究所

## 序

美術研究所編纂日本美術年鑑の第八冊、昭和十八年版は當時已にその編纂を了り、將に公刊を見んとして、不幸にして組版を焼失し爲に、遅延を重ねるの已むなきに至つたが、茲に漸く印刷所の協力を得てその再生刊を見るに至つた。文化國家としての我が國運の消長を絶えず記録せる本年鑑の逐年發行は、最も有意義なる文化事業の一部として、本研究所の恒に努力編纂しつゝある所であり、幸に諸方面の理解と支援とを得て、目下出版物印刷並に用紙等に幾多の隘路あるに拘らず、本年鑑が却つて記事の壓縮精選を以て登場するを得たことは、本所の寧ろ欣快とする所である。ただ返す／＼遺憾なるは、この種年鑑に缺くことを得ざる圖版の全部を省略したことであつて、是は已に完成せる大部分を焼失し、その復興は容易でなく、而かも本書の性質上その公刊を一日も早くと急ぐためであつて、洵に已むを得ざる事情として、大方の看過を願ひたい。又便覽の一欄に於て、記事の現狀に即せざる遺憾の極めて深いことも、容易に推想し得られるが、その調査に更に多くの日時を費すを許さず、暫く舊版の儘を襲用したことも、一時應急の便宜に出でたるものなることを諒とせられたい。

本年鑑の編纂に當り、多數資料の提供、並に寫眞の寄贈を以て懇篤なる協力を與へられたる文部省教學、社會教育局、其他諸官廳を始め、帝室及び公私の諸博物館、美術館、學校、公私の研究諸機關、雜誌社、並に個人研究家及び美術家等に對し、本研究所は特に深甚なる謝意を表する。

本年鑑の編纂執筆に就ては、主として所員隈元謙次郎、助手河北倫明、同黒川光朝をして之に當らしめ、現代建築の部門に關しては囑託山田智三郎に其分擔を依頼した。

終に臨み本年鑑中前述の便覽等の調査不十分は言ふも更なり、其他の記事に於ても、若し誤謬其他不備の點あるに於ては、切に江湖諸彦の叱正と教導とを仰望し、次年度以後の改善に資する材料にしたい。

昭和二十一年三月



## 凡 例

一、本年鑑はその内容を「本欄」「挿圖」及び「附録」の三部に大別する。本欄は我が國美術界の全般につき、昭和十七年度即ち同年一月から十二月に至る一箇年間に現れた主なる出来事、製作又は發表された注意すべき作品、發表された文獻等を記録し、挿圖は右に添ふ作品の寫眞を主として掲げ、附録は便覧として行政、教育、觀覽等に關する官公私施設の重要なもの、美術家團體一覽、美術家及美術關係者名簿を便宜上輯録した。記事中「本年」とあるは昭和十七年を指すもの、月日のみを擧げて年を記さぬ場合亦同様である。

一、美術として本年鑑が取扱ふ範圍は、從來一般に行はれる狹義の解釋に従ひ、繪畫彫刻、工藝及建築に限ることとした。繪畫のうちで「日本畫」及「洋畫」の區別は、嚴密には困難の場合もあり、又その稱呼も字義として好ましいものとは言へないが、便宜のため姑く一般の慣習に倣ふこととした。建築は用途に従つて種類も多く、殊に近年の傾向に在つてはこれを美術として取扱ふことに問題も多いが、茲では吾人の見地から注意をひくものの範圍に止めた。

一、人名を記す場合には敬稱は一切これを省いた。

一、本欄、現代美術の中、美術展覽會の項には、明治、大正以後活動した作家の遺作展觀、回顧的展覽會及外國美術展覽會等に關しても、便宜上茲に含めて取扱ふこととした。

一、同、展覽會以外の作品に就いては、その範圍を擴げる時は際限なきため、茲には多少とも公共的性質を有するもの、或は記念碑的意義を有するものに限ることとし、主なる作品少數のみを選んだ。

一、同、美術教育の欄に於いては、これに關する彙報的な記事若干を輯録するに止めた。普通教育に於ける圖畫教育は、美術とは關係が深く、屢々美術教育とも呼ばれて混同されてゐるが、本年鑑では特殊な場合の外はこれを取扱はず、専門の美術教育の範圍に止めることとした。

一、同、國寶略説の欄に於いては美術關係の作品の解説のみに止めた。

一、附録は、昭和十七年十二月末日現在の記録たることを原則とするが、使用の便を圖り、その後の消息をも例外的に記載、若くはこれによつて訂正した部分もある。

一、本欄中美術文獻目錄、並に附録中美術家及美術關係者名簿に就いては、夫々その項の初に凡例を記した。

一、本年鑑の編纂は昭和十八年中に完了せるもので、本欄及び附録の記事中には若干今日の事態に適せぬものもあるが、すべて當時の記録として、殆ど改訂を行はなかつた。

## 目次

## 序凡目

## 例次

## 本欄

美術界彙報  
美術展覽會

## 一

三井コレクション陳列―川端實個展―新壁畫展―小山敬三個展―富岡鐵齋遺作展―春臺展―白日會展―朱玄會展―等

## 二

青衿會展―伊谷賢藏個展―日本美術院獻納作品展―太平洋畫會展―光風會展―新美術家協會展―等

## 三

綠菴會展―旺玄社展―獨立展―獻納大壁畫展―塊人社展―上杜會展―園外社展―日本畫家報國會獻納作品展―東光會展―連袖會展―大輪畫院春季展―春の青龍社展―新興美術院展―國畫會展―等

## 四

三巴會展―邦畫一如會展―秋保鐵太郎紫峰花鳥木版畫展―朱葉會展―全關西展―三雲祥之助個展―日本畫院展―京都繪專回顧展―美術創作家協會展―三井コレクション陳列―双臺社展―青丘會展―春陽會展―日本彫刻家協會展―東陽會展―工藝燦匠會展―鈴木信太郎個展―試作會展―第一美術協會展―新古典美術協會展―等

## 五

京都市展―東丘社展―讀畫會展―一水會小品展―日本水彩展―大阪

## 六

市展―小糸源太郎個展―燵土社展―南薰造水彩展―現代陶藝展―狩野晃行個展―直土會展―青鸞社展―阿部六陽個展―新制作派春季展―新美術人協會展―正統木彫家協會展―海洋美術展―林鶴雄個展―小室翠雲個展―美術文化展―朝鮮美術展―等

## 月

三三

## 七

泰西古畫展―日本漆藝院展―岸浪百舛居個展―翔鳥會展―歷程美術展―全日本彫塑家獻納展―山南會展―日本版畫協會展―創造美術協會展―兒玉堯展―岩田藤七個展―女子美術院展―構造社展―野口彌太郎個展―現代水彩畫會展―大日本美術院展―等

## 月

三六

## 八

一采社展―三井コレクション陳列―富田溪仙展―南方從軍畫展―清光會展―香坂茂吉個展―南洋美術展―きつゝき會展―日本木彫會展―松木滿史個展―日本劇畫院展―ブアブサヤ―展―等

## 月

三九

## 九

從軍報告畫展―忠愛美術院展―五采會展―新水彩協會展―青龍社展―等

## 月

四〇

## 十

國風彫塑會展―院展―二科展―山本春舉展―劉榮楓個展―創元會展―明朗美術展―山南會展―棟方志功個展―航空美術展―瑞々會展―三々美術團展―大輪畫院展―新制作派展―一水會展―美術新協展―東京工藝綜合展―等

## 月

五三

## 十一

滿洲國慶祝繪畫展―獨立秋期展―二見利節個展―鐵道美術回顧展―文展―福澤一郎個展―美交會展―日本輸出工藝聯合會展―大石俊彦個展―等

## 月

六五

## 十二

藤島武二展―村川彌五郎個展―三井コレクション陳列―京都工藝展―青々會展―名古屋市綜合展―七弦會展―濃晨會展―乾坤社展―大潮會展―日東美術院展―等

## 月

六八

長谷川昇邦畫展―天心遺作展―新燈社展―宮本三郎素描展―等

展覽會以外の作品.....七〇

日本畫—洋畫—彫刻—工藝—挿繪—建築

物故作家及美術關係者.....七五

美術行政・教育.....八四

美術講演・講義.....八五

古美術關係彙報.....八九

古美術展覽會・展觀.....九一

博物館新收品.....九六

美術市場.....九七

古美術保存.....九八

昭和十七年度國寶指定、御料歸屬及所有者變更等.....九八

同 國寶修理補助金交付額.....一〇八

同 重要美術品等認定、御料歸屬、資格消滅.....一〇九

同 朝鮮寶物古蹟指定.....一二一

同 指定國寶略說.....一二三

同 國寶建造物維持修理實施狀況.....一二七

同 朝鮮寶物古蹟維持修理實施狀況.....一二九

同 朝鮮總督府發掘調査事業概略.....一二九

昭和十七年度美術文獻目錄.....一三一

凡例・目次.....一三一

定期刊行物所載文獻.....一三二

現代美術關係.....一三三

古美術關係.....一四四

西洋美術關係.....一五七

單行圖書.....一五九

現代美術關係.....一五九

古美術關係.....一六一

西洋美術關係.....一六四

## 附 錄

國寶保存會—重要美術品等調査委員會—朝鮮總督府寶物古蹟名勝

天然記念物保存會—帝室技藝員—帝國藝術院—文部省美術展覽

會—美術研究所—東京美術學校—工藝技術講習所—東京高等工

藝學校—京都高等工藝學校—京都市立繪畫專門學校—京都市立

美術工藝學校—工藝指導所—陶磁器試驗所—東京帝室博物館—

恩賜京都博物館—大禮記念京都美術館—大阪市立美術館—奈良

帝室博物館—朝鮮總督府博物館—李王家美術館—主要觀覽施設

一覽.....一

美術家團體一覽.....二〇

美術家及美術關係者名簿.....四五

## 美術界彙報

一月

岡倉天心偉績顯彰會成立 近代日本美術の功勞者岡倉天心を顯彰する岡倉天心偉績顯彰會が、豫て侯爵細川護立、横山大觀、前田青邨、平櫛田中、福原信三、齋藤隆三、黒田朋信等に依り發起されてゐたが、七日財團法人として認可された。役員は會長侯爵細川護立、評議員理事長横山大觀、同事務理事齋藤隆三、同事安田叔彦、小林古徑、前田青邨等である。

近代美術館建設協議會 東京市は豫て皇太子殿下御誕生記念事業として日本近代美術館の建設を計畫し、去歲その建設案を發表したが、十四日華族會館に於て第一回資金募集懇親會を開催、藤山愛一郎、侯爵細川護立、男爵團伊能、五島慶太、金光庸夫等都下財界諸有力者と市側大久保市長、橋本助役、谷川部長等と正式懇談を行ひ、建設費七百五十萬圓の内五百萬圓の寄附を財界より仰ぐこととなつた。

朝日賞贈呈式舉行 昭和十六年度朝日賞受賞者は、十日決定發表されたが、同賞贈呈式は二十日午後四時朝日新聞東京本社貴賓室に於て舉行された。美術部門に於ては安田叔彦の「黄瀬川の陣」が選ばれた。尙同日午後六時より同講堂に於て記念講演會が開催された。

全日本畫家報國會結成決議 文展無鑑査級、日本美術院同人及び青龍社々人等

在京約九十名の日本畫家は、三十一日比谷三信ビル東洋軒に參集、全日本畫家報國會の結成を決議し、その最初の事業として展覧會を開催、その賣上金を以て軍用機日本畫家號を陸海軍に獻納することと決定した。

金洋風美術家大會舉行 美術家として職域奉公の誠を致すべく、三十一日洋風畫家八百名は東京府美術館に參集、一人一點の獻畫を決議し、その委員を擧げて實行することとなつた。

きつつき會結成 創作版畫の發達と普及を圖る爲に平塚運一、橋本興家、前田政雄等の木版畫家により新しくきつつき會が結成された。同會は展覧會を開催し、又自刻自摺の年刊畫集を刊行する豫定。

二月

竹内栖鳳獻金 三日竹内栖鳳は陸海軍省へ一萬圓宛金貳萬圓を獻金した。

女流畫家作品獻納 全國女流畫家の會員藤川榮子、三岸節子、佐伯米子等は、十一日海軍省を訪れ、建國の佳節に際し全國會員七十四名の作品八十四點を獻納した。

第三回福日文化賞決定 西日本文化奨勵の爲設定された福同日々新聞社の福日文化賞は、自然科學、文化科學に亘つて決定したが、その美術賞は二科會々員坂本繁二郎に授けられた。

日本美術院同人軍用機獻納展開催 日

本美術院では陸海軍に軍用飛行機を獻納することとなり、同人各二點宛を製作、十四、五、六日その完成作品を谷中同院に於て展覧した。而して作品は擧げてこれを匿名の篤志家に提供したが、同人からはこれに替へて金貳五萬圓が同院に寄せられ、同院はこれに故富田溪仙の遺族より寄贈された一千圓を加へ、十九日金七萬五千五百圓宛を陸海軍省に夫々獻納した。(本欄一二頁參照)

木村武山作品寄贈 木村武山及び墓生等は十八日作品二十餘點を水戸通信學校に寄贈した。

小室翠雲滿洲國皇帝陛下に獻納 滿洲國建國十周年を記念し、小室翠雲は滿洲國皇帝陛下に「蘭花」(幅三尺、縱六尺)を獻納した。

東邦彫塑院解散 彫塑界の最大團體たりし東邦彫塑院は、時局に鑑み日本彫塑家聯盟の結成を期とし今同解散した。

潜水艦に水彩畫三十餘點獻納 日本水彩畫會々員石井柏亭、小堀進等二十三名は、その作品三十餘點を横須賀鎮守府を通じ各潜水艦に贈つた。

三月

日本畫家報國會結成さる 文展系、日本美術院、青龍社其の他の日本畫家の殆んど全部を網羅せる日本畫家報國會は、川合玉堂、川端龍子等約百名參加のもとにその結成式を十九日九段軍人會館に於て開催、宣言、決議、事業報告等を行つた。尙その第一回事業として十九日より二十二日迄日本橋三越に於て展覧會を開催した。(本欄一七頁參照)

日本畫家報國會獻納 日本畫家報國會では飛行機獻納の爲日本畫新作展を開催したが、其の全出品は三越の買上ぐるところとなつたので、賣上金二十萬圓を陸海軍恤兵部へ十萬圓宛獻納した。

陸軍省派遣畫家壯行會 陸軍に於ては皇軍將兵の姿を再現する爲作家十六名即ち藤田嗣治、伊原宇三郎、中村研一、宮本三郎、寺内萬治郎、猪熊英一郎、小磯良平、中山魏、田村孝之介、清水登之、鶴田吾郎、堂本印象、川端龍子、福田豊四郎、山口蓬春、吉岡堅二を現地に派遣し、戦争記録畫を製作せしむることとなつた。而してその壯行會が朝日新聞社の主催により二十四日タニウグラランドに於て開催された。川端龍子、山口蓬春、吉岡堅二、福田豊四郎、藤田嗣治、谷萩陸軍報道部長、濱田海軍少佐、主催者側より村山朝日社長等が出席した。

四月

日本劇畫院創立 十數來年の日本劇畫協會は發展的解消を解け、三日劇美術人二十一名により日本劇畫院が創立され、その創立發會式が日比谷三信ビル東洋軒に於て開かれた。

レオナルド・ダ・ヴィンチ展披露會 日本世界文化復興會主催によるレオナルド・ダ・ヴィンチ展覽會の披露午餐會が二十二日帝國ホテルに於て同會及びイタリア大使館共同主催により催された。

故岡田三郎助記念像除幕式 故岡田三郎助記念像除幕式が二十九日東京美術學校々庭に於て行はれた。

## 五月

美術家聯盟結成 美術團體聯盟は、四日解消し、新たに美術家聯盟が結成され、同日上野公園精養軒に於て辻永、石井柏亭、有島生馬、木村莊八等四十餘名の作家と大政翼賛會文化部陸海軍報道部代表者出席のもとに發會式を舉行了。

海軍省美術家派遣 曩に陸軍省に於ては戰爭記錄畫製作の爲作家十六名を選抜現地に派遣したが、海軍省に於ても吾が海軍の活動の様を製作せしむることとなり、作家十六名を選抜、これ等を南方に派遣することとなつた。これ等の作家は安田靫彦、矢澤弦月、三輪晃勢、江崎孝坪、藤田嗣治、中村研一、奥瀬英三、川端實、御厨純一、有岡一郎、宮本三郎、佐藤藤、三國久、石川滋彦、藤本東一路、中村直人である。

福田翠光獻畫 日本畫家福田翠光は第九回帝展出品の「擊搏」外作品二十點を海軍記念日に當る二十七日舞鶴鎮守府に獻納した。

## 六月

故土田麥僊七回忌法要 十日は故土田麥僊の七回忌に當るので、京都知徳院に於て遺族、門人、知友により法要が営まれた。

住料文化研究會設立 世界未曾有の大戦時に達着し、混沌を來しつつある國內建築工藝文化に新しき方向を劃する目的を以て本野精吾を理事長として住料文化研究會が京都に設立され、十四日その發會式及び第一回總會を開いた。

## 七月

日本美術協會々員有志作品獻納 日本美術協會第一部(繪畫)有志は、海軍傷病兵慰問の爲作品三十五點を獻納することとなり、一日上野公園同會列品館に於て内見會を催した。

岡倉天心遺蹟赤倉山莊更生竣工式 豫て岡倉天心偉績顯彰會がその第一回事業として計畫中の天心終焉の地赤倉に於ける記念館赤倉山莊及び記念碑が竣工したので、二日竣工式を舉行、同夜同地香嶽樓に盛大なる祝賀會が行はれた。

日本自由畫壇解散 創立以來二十三年を経過せる京都の日本自由畫壇は、時局に鑑み解散し、五日現在に至る迄の物故同人、其他關係者の追善法要を京都南禪寺天授庵で執行した。

造營彫塑人會結成 國威の宣揚とモニユメンタル彫塑への完成並びに記念造營に關し挺身隊たらんとする趣旨のもとに、高村光太郎、清水多嘉示、中村直人、泉二勝麿等帝展、院展、舊國展等の彫塑家を網羅して造營彫塑人會が結成され、十五日上野精養軒に於て結成披露を行つた。

扶桑會結成 片山健吉、角浩、泉二勝麿等油彩、染色、陶器、産業美術、書道に關係する有志により扶桑會が結成された。

## 八月

大東亞美術協會成立 美術を通じて我日本民族の傳統的特質を、東亞諸國に紹介し、亞細亞民族の文化昂揚を圖る爲豫て

設立準備中の大東亞美術協會は、會長に伯爵有馬頼寧を推戴、七日日比谷三信ビルに於て發會式を舉げた。

皇藝會結成 舊皇國藝術聯盟は新しく皇藝會と改稱し、京都日本畫家聯盟に加へ、研究團體として杉本哲郎外同志により皇藝會國畫研究所を設置した。

牧野義雄歸朝 英國に在つて其の名を知られた洋畫家牧野義雄は、日英交換船に依り凡そ五十年振りに歸國した。

## 九月

大東亞博物館建設計畫 文部省及び博物館協會等に於て豫て大東亞博物館建設計畫が進められつつあつたが、その内容の充實を計り、資料の散逸、群小機關の濫立を避ける爲、民間團體その他一切の分散的計畫を中止せしめ、強力なものとすべく、情報局は七日附を以て「大東亞における天產資源政治經濟文化民族等に關する資料を綜合展覽すべき大東亞博物館(假稱)建設に關して政府において目下考中につき、當分の間類似施設の設計計畫はこれを進行を差控へしめる旨本日の大官會議において決定を見たり」と發表した。

滿洲國國寶展覽會開催さる 滿洲國建国十周年を記念して日滿文化協會の斡旋により滿洲國建国十周年慶祝會、東京帝室博物館の共催により、十日より二十五日迄東京帝室博物館表慶館に於て刻絲、刺繍を中心とする滿洲國國寶展が開催された。(本欄九三頁參照)

高松宮兩殿下滿洲國國寶展へ御成り 高松宮殿下には妃殿下と御揃にて十日表

慶館に開催中の滿洲國國寶展に御成り遊ばされ、渡部帝室博物館長の御先導にて約一時間餘に亘り御巡覽遊ばされた。

## 十月

滿洲國建国十周年慶祝獻納畫展開催 滿洲國建国十周年慶祝會は、日滿文化協會及び帝國藝術院の斡旋に依り帝國藝術院會員の製作にかゝる日本畫及び油繪を滿洲國政府に寄贈する事となり、その發送に先立ち一日より七日迄帝室博物館表慶館に於てこれ等の作品を展覧した。(本欄五三頁參照)

東京美術學校天心祭執行 東京美術學校興亞部では故岡倉天心の三十年忌に際し、五日同校々々天心銅像前に參集、天心祭を舉行し、又講演、展覧等を行つた。

高松宮殿下滿洲國獻納畫展に御成り 高松宮殿下には七日東京帝室博物館表慶館に開催中の滿洲國建国十周年慶祝獻納繪畫展覽會に成らせられ、日滿文化協會副會長子爵岡部長景、渡部帝室博物館長の御説明にて御覽遊ばされた。

東條首相滿洲國獻納畫製作者招待 東條首相は七日滿洲國建国十周年を壽いでわが慶祝會から滿洲國に獻納する繪畫の製作者及び滿洲國皇帝陛下に獻上した花瓶の製作者の勞を犒ふ爲これ等の美術家を首相官邸に招待した。出席者は横山大觀、河合玉堂、荒木十畝、安田靫彦、前田青郎、鍋島清方、松林桂月、小室翠雲、西山翠嶂、上村松園、安井曾太郎、山下



新太郎、有馬生馬、南薫造、小林萬吾、藤田嗣治、中澤弘光、清水六兵衛の外、陪賓として清水帝國藝術院長、渡部帝室博物館總長、澤田東京美術學校長、岡部日滿文化協會副會長、竹内、宮田兩慶祝會長等であつた。

滿洲建國十周年慶祝畫獻納式 滿洲建國十周年慶祝畫獻納式は三十一日新京國務院貴賓室に於て張國務總理、武部總務長官、花輪大使館參事官其他祝典事務局文藝聯盟、日滿文化協會の關係者列席の上、松林桂月、有馬生馬の兩使節より張總理へ目錄を贈呈、總理は謝辭の後感謝狀を贈つて獻納式を終つた。

横山大觀「正氣放光」を寄贈 横山大觀は第二十九回院展出品の「正氣放光」を展覽會終了後海軍省を通じて江田島海軍兵學校に寄贈した。

軍用機獻納作品展覽會出品畫東京帝室博物館に寄贈さる 日本畫家報國會は軍用機獻納の資とする爲會員の作品を去る三月日本橋三越に於て「軍用機獻納作品展覽會」として開催、續いて大阪に於ても同作品の展覧を行つたが、會場を提供した三越は日本畫家報國會と協議、これ等百八十四點の作品を購入し、東京帝室博物館に寄贈した。

## 十一月

興亞造形文化聯盟結成 日華兩國の工藝、建築其の他の造形運動の連絡提携を圖り、以て中華民國の造形文化を指導振興し、延て東亞諸國の生活文化の連絡に資する爲日華兩國の工藝家、興亞院、商工省の間に國策的な文化團體結成の計畫

が進められてゐたが、藤山愛一郎を會長として興亞造形文化聯盟が創立され、四日丸の内大東亞會館に於て結成披露會を行つた。

生産美術協會創設 美術を通じて勤勞者の生活に豐なる創造の温床を與へ、優秀なる技能と正しく美しき生産と更に健全なる新文化の發展を期し、大政翼賛會及び大日本産業報國會後援のもとに桐原葆見を理事長として生産美術協會が結成され、七日日比谷三信ビル東洋軒に於て披露式を舉げた。

岡倉天心五浦遺蹟復興並に記念碑除幕式 岡倉天心偉績顯彰會は、茨城縣大津町五浦の天心遺蹟を米山辰夫より寄贈を受けたのを機會に、これを保存し併せて同邸内に記念碑の建立を計畫しつゝ、あつたが、その工成つたので、八日除幕式を舉げた。

東伏見宮妃、賀陽宮妃、伏見若宮妃殿下展覧台臨 東伏見宮妃、賀陽宮妃、伏見若宮妃殿下には、九日文部省美術展覽會に台臨遊ばされた。

久邇若宮、賀陽若宮殿下展覧台臨 久邇若宮、賀陽若宮殿下には十三日文部省美術展覽會に台臨あらせられた。

李王妃、李健公妃殿下展覧台臨 李王妃、李健公妃殿下には十四日文部省美術展覽會に成らせられた。

戰爭記錄畫 天覽の榮を蒙る 天皇、皇后兩陛下には長くも二十九日皇太子殿下、孝宮、順宮兩内親王殿下と御揃にて宮中千種の間及び豐明殿に於て入江侍從の御説明にて陸海軍部隊の模様を描ける陸海軍作戰記錄畫三十九點を天覽並に台覽

あらせられた。

竹頭會結成 繪畫研究及び日本畫材料による試作品を發表する爲に洋風畫家猪熊弦一郎、伊藤廉、碓伊之助、林俊衛、林重義、曾官一念、野口謙藏、里見勝藏、木下孝則、須田國太郎、鈴木保徳、鈴木新太郎等に依り竹頭會が結成された。

## 十二月

朝香宮殿下太平洋戰爭美術展覽會開會式御成り 朝香宮殿下には三日太平洋戰爭美術展覽會に御成り遊ばされ、緒方朝日新聞社主筆の御案内で出陳の繪畫を御覽遊ばされた。

李健公、李錫公太平洋戰爭展御成り 李健公、李錫公、同妃殿下には五日太平洋戰爭美術展覽會に御成り遊ばされた。

賀陽宮殿下太平洋戰爭美術展へ御成り 賀陽宮恒憲王、同妃殿下には邦壽王、治憲王、章憲王、文憲王、美智子女王各殿下と御揃にて六日太平洋戰爭美術展覽會に御成り遊ばされた。

李王垣、同妃、王世子殿下太平洋戰爭美術展御成り 李王垣、同妃、王世子殿下には御揃にて六日太平洋戰爭美術展覽會に御成り遊ばされた。

「文化大觀」第一卷成る 肇國以來現代に至る吾が國史の跡を回顧し、皇國文化の發展の様を傳へ、わが民族文化の振起と顯揚とを圖る爲紀元二千六百年奉祝會では國家的記念事業として「日本文化大觀（歴史編上・下、現勢編、圖録上・中・下の六卷）」を刊行することになり、昭和十四年二月官制により日本文化大觀編輯會を設け鋭意編集中のところ、その第一

卷（歴史編上）特製版七百部が刊行されたので、十四日歌田奉祝會幹事長は宮内省に出頭、皇室並に各宮家に獻上の手續を了した。書型は大約規格列B4番型、背及び角革麻布表紙、本洋綴、見返しは正倉院御物色紙中の雲麒麟文様を薄墨色に複製し、用紙は千年の保存に堪へる三桎製局紙、天金、背文字金を使用せる豪華なものである。

野間賞授賞式 野間奉公會昭和十七年度野間賞贈呈式は、十七日小石川區音羽町大日本雄辯會講談社講堂に於て舉行された。受賞者は野間美術賞（賞杯及賞金壹萬圓）平櫛田中、野間美術獎勵賞（賞杯及賞金壹千圓）中村研一、挿繪獎勵賞（同上）川上四郎であつた。

川合玉堂作品獻上 日本赤十字社に於ては、豫て皇太子殿下御降誕奉祝記念會としての獻上屏風の製作を河合玉堂に依頼中であつたが、搖ぎなき大和島根なる六曲一雙の屏風が完成したので、二十日獻上の手續を了した。

藝術界の獻體運動 陸海軍將士に報ひようとの氣運が藝術界に澎湃として高まり、二十四日及び二十六日の兩日、藝術各界の代表者が大政翼賛會に集り、これを全藝術界舉つての愛國運動とすべく打合せ會を行つた。兩日は日本畫の安田靉彦、石塚彰吾（小室翠雲代理）、洋畫の梅原龍三郎、木村莊八、彫刻の石井鶴三（北村西望代理）や日本文學報國會事務局局長久米正雄、日本音樂文化協理理事長中山晋平をはじめレコード文化協會、藝能文化聯盟等の各代表者が、あらゆる機能を總動員して戰艦獻納の舉國運動に邁進す

ることを申し合せた。

**寶來賞設定** 前興業銀行總裁寶來市松は今回斯學の權威に諮り、昭和十六年度を初年度とする東洋美術史論文獎勵賞を提供することとなつた。本賞は單行圖書を除き毎年一月一日より十二月末日までに雜誌に發表された東洋美術史關係論文中最秀一篇に賞金五百圓を贈與するものである。

**日佛印派遣教授決定** 第二回日佛印交換教授は國際文化振興會の派遣による日本側教授として京都帝國大學教授文學博士梅原末治に決定、佛印側からは佛印圖書館總長ポール・ブーデと決定された。

# 美術展覽會

一月

柚木久太近作油繪展 四日―十一日

大阪・大丸

三井コレクション第四回陳列 十日―

三月二十八日(毎土曜) 麹町・三井邸

## 陳列目錄

洛北風景

安井曾太郎

舞妓 川島理一郎

老女と小供

池部 鈞

靜物 ベルナル

青衣のテレーズ

内田 巖

秋の川邊

ジ エム

ささやき

オーチャイ

ドソン

牛 ステーリンク

踊子 小磯 良平

風景 シニエツク

本 岡田 謙三

三里塚の馬

青山 熊治

女の顔 ワイリー

初秋の夕

中川 八郎

乳兒 片多 徳郎

黒牛 青山 熊治

雪景 佐伯 祐三

眠る女

老人 岡田三郎助

林中の小徑

ヒュ・スタ

ベニス淺井

ルコント夫人

コロー

岡牛士ギユーイス

公園の婦人

モンテセリ

鏡臺前の女

藤島 武二

ニンフエン

道化と馬

三岸好太郎

酒場 山本 鼎

二人の女

アマンデヤン

稽古 木村 莊八

田村信義遺作展(洋) 十一日―十三日  
銀座・青樹社

高間惣七第二回日本畫展 十一日―十

三日 銀座・菊屋

新版畫會展 十一日―十七日 大阪・

阪急

鬼原素俊新興中支風物スケッチ展 十

三日―十七日 日本橋・高島屋

日本兒童美術展 十五日―十九日 銀

座・青樹社 教育美術振興會主催

川端實瀾歐作品展(洋) 十八日―二十

三日 銀座・三越

東日一渡佛後間もなく戦火をのがれ

て、主に伊太利に在つた間の作品廿數點

による最初の個展、作畫傾向はや、クラ

シックで、主調の褐色がや、變化に缺け

る憾みはあるが、力作「憩へるフランカ」

の陰影の美しさ、廢墟の音楽會」の光と

影の柔かな諧調は注目すべく、ローマの

博物館前の彫像を描いたものカンパニヤ

の廢墟風景は色感澄明で佳品といへる。

坂口一草新作畫展(日) 二十日―二十

二日 大阪・高島屋

東日一小林源太郎氏を指導者とする  
「成層」會員七名の壁畫試作による第一  
回展、出陳九點、いづれも國民學校内に  
掲げられるのを前提としたらしい主題  
で、赤い運動帽をなか／＼効果的に使つ  
てゐた。佳作は共榮園の少年たちの交躍  
を描いた「集ひ」、河邊實の「發掘」二  
點、航空機整備に協力する少年たちを描  
いた共同制作「勤務」は努力の割に感銘  
が薄い。

小山敬三個展(洋) 二十一日―二十五

日 銀座・青樹社

讀賣一この畫家の今までの作品は樹の

葉でも花でも彩色されたコンクリートの

やうな嫌な堅さがあつて、質感といふも

のが殆んど表されなかつたが、この近作

廿點はさうしたものが影をひそめて「木

會胸ヶ岳」「南國風景」「晚秋河畔」等な

か／＼に良く殊に色彩も豊富新鮮である。

正宗得三郎油繪展 二十一日―二十五

日 日本橋・三越

富岡鐵齋遺作展(日) 二十一日―二十

五日 日本橋・三越

正宗敬洲の肝煎で、頼川、住友、辰馬

田島、高橋、紫垣、丸山等諸家の藏品を

陳列、畫幅四十五點、畫冊五帳のほか、

畫卷、扇面、素描等があり、主なる作に

は、豊公秘話、山上憶良貧窮問答、豊公

北野茶會、美作之御遺跡兒島高德、掃蕩

俗座、白隠訪白鬍子、東坡茶品、隱居放

言、東坡安蔬、教祖渡海、醉餘遊戲等が

あつた。

矢橋六郎、山口薫、森芳雄三人展(洋)

二十三日―二十五日 銀座・資生堂

東日一創作美術協會の新鋭會員三人の

近作十五點を展示したもの。矢橋六郎の

滿洲に取材した諸作のなかでは娘二人を

後向きに座らせた「娘々祭の日」が色彩

計畫として面白く、山口薫は「流水」髪

がこの作家にめづらしくサラリと描いて

るてしかも美しい。森芳雄はいさ／＼か素

描の味に墮して淡いが、二十號の「呼ぶ

聲」はちよつとした野性がでてる。

富岡鐵齋作品展(日) 二十三日―二月

六日 東京府美術館

主催國民美術協會・東京日日新聞社

「維新以來勤王敬神の精神を一管の筆に

托して南畫壇に異彩を放つた我が鐵齋富

岡百練翁の如きは今日の畫家が以て學ぶ

べきである」との趣旨により、清荒神山

主坂本光淨の蒐集作品中から三百餘點を

選んで展覧した。若描きから最晩年のも

のにまで及んでゐるが、主要な作品に次

のやうなものがあつた。

「鳩峯五瀬春日三景圖」「二見浦雪景圖」

「楠公血戰圖」「楠公訣別圖」「赤穂義士

像」「藤娘圖」「蓮月鐵齋觀月圖」「不盡山

全景」「年々如意圖」「七福神圖」「落花遊

魚圖」「竹窓夜雨圖」「名所十二景圖」「壽

山福海圖」「梅溪清隱圖」「春鳥啖桃圖」

「大江捕魚圖」「東瀛境圖」「朝晴雪圖」「五

福祥集圖」「東坡醉歸圖」「人世無名醉圖」

「吉祥聚草圖」「古佛龜圖」「觀音菩薩像」

「嚴栢十六羅漢圖」「大平歡樂圖」「蓬萊山



圖「漁家快樂圖」「忠孝双全圖」「弘法大師在唐遊歷圖」「聖者舟遊圖」等

春臺美術第十七回展(洋) 二十三日—二十六日 東京府美術館

東朝(前略) 春臺展では有岡一郎の「奥利根の村」が場中を壓してゐる。平凡な題材ではあるが雪に埋れた農村の雰圍氣と、その季節感に推稱に値する。これに反し田村一男の風景は莫とし和田清の「嵐の海」は力が足りぬ。人物では中村研一の「畫室」が、伊藤悌三の「老人」と共に出色のもの。その他高宮一榮、窪岡了一を取る。

(岡田賞) 田村一男「春臺賞」高宮一榮「日氏賞」岡村三夫、秋元松子、熊澤欽三、大井基「F氏賞」坪井甚喜、上野ふみ

白日會第十九回展(洋、彫) 二十四日—二十六日 東京府美術館

東日—四人の歸朝者大河内信秀、松平齊光、松平康南、佐藤功を新たに會員に迎へて、來年度廿回展を前にこの會も大分賑かにはなつたが油彩では島村三七雄の「南方の女達」を除いて力作らしい力作はなく、中澤弘光の「海」富田温一郎の「櫻」は温雅な好小品といふにとどまる。水彩では荻野康兒、渡部菊二がよく、前者の「戦車」は粗雑だが「南の國」は美しく、後者は「花と女」が佳品。西歐作家の特陳ではマルケの「海水浴場風景」ボナールの小品風景が見るべきもの。

(搬入) 繪畫一五三一點、彫刻六五點

(入選) 繪畫一五五點、彫刻一五點(新會員) 松平齊光、松平康南、佐藤功、大河内信秀、大石七風、川口榮、坂江重雄、故山口敏夫(新會友) 矢戸章、三橋ふじ、大嶺正敏、安次嶺金正(岡田賞) 長明(日賞) 梅津泰助、内田豊(佳作賞) 山本道業、加藤弘之、坂上政克、坂本良武、(會友獎勵賞) 高橋隆比古、川口榮、市原義夫、前林章司

杉本哲郎佛敎的作品展(洋) 二十五日—三十日 大阪・大丸

橋本欣三舞臺裝置展 二十六日—三十日 銀座・菊屋

癡草會日本畫展 二十七日—二十八日 銀座・養生堂

會員八名のうち今回の出品は、小林古徑、安田敦彦、中村岳陵、山口蓬春、小倉遊龜の五名。

朱玄會第五回展(洋) 二十七日—三十日 日本橋・三越

東日—宮本三郎は技法についての研究に精進「午後海」「梅薫る」等には點描法を用ひ對象の複雑性を再現せんとつてめてゐるが、渾然たるまとまりには程遠く、むしろ「箱根」の色感や、「ばら」の端的な描法を買はれ、がいて嘗ての滯歐作に劣る。田村孝之介の「晩秋の富士」「古城の櫻」は構圖の面白さはあり「漁港」の美しさをもとらへ得てゐるが、一がいに綺麗事をのみ追ふ低調さには再考を要し、栗原信は變り榮えなし。

七三會覽美術展(綜合) 二十七日—三十日 日本橋・三越

松宮左京日本畫個展 二十七日—三十日 京城・三越

名取明德第三回油繪展 二十七日—三十一日 日本橋・高島屋

堂本印象塾春曜會第三回展(日) 二十七日—三十一日 大阪・大丸

國粹版畫第二回展 二十九日—三十一日 銀座・養生堂

西宮書院主催。會員は和田三造、堂本印象、大野夢風、林重義。

第二回三人展(日) 三十日—二月四日 銀座・松坂屋

會員は船田玉樹、岩橋英遠、丸木位里

松本俊介第二回個展(洋) 一日—三日 數寄屋橋・日動畫廊

青鈴會第三回展(日) 一日—六日 日本橋・三越

伊東深水の「皇紀二千六百二年婦女圖」山川秀峰の「蕃女と蕃童」をはじめ、寺島榮明の「町娘」岩淵芝華の「待春」小早川清の「綾衣」等があつた。

羊和會彫金展 一日—六日 日本橋・三越

吉田石堂新作日本畫展 三日—七日 日本橋・高島屋

水彩畫推獎記録展 三日—七日 銀座・青樹社

藝能文化協會主催

若狹物外南畫展 三日—八日 上野・松坂屋

京都十匠作陶展 三日—八日 大阪・三越

京都染織繡藝術協會展 三日—八日 銀座・松屋

山鹿清華、皆川月華等の出品作三十四點は陸海軍に獻納された。

大東亞戰必勝祈願獻納畫展(日) 三日—八日 大阪・松坂屋

大阪日本畫家報國會主催、大阪毎日新聞社後援。會員三百餘名各々尺八横物一點を出品。

岩下三四個展(洋) 七日—九日 銀座・養生堂

建國祭兒童作品展 八日—十一日 東京府美術館

文部省及東京府主催

伊谷賢藏油繪個展 九日—十三日 銀座・青樹社

東日—二科會員で京都在住のこの作家が華北、蒙疆の風物を描いた作品二十餘點による東都最初の個展、いつもの大作と趣きが變り、娘子關を描いた「山村の朝」北京風景「景山より北海を望む」青島の鳥瞰など重厚でしかも色感よく、大同石佛も脇佛を一體づつ描いた小品に見るべきものがある。

永樂善五郎陶磁展 十日—十四日 日本橋・高島屋

白鳳會第一回人形彫刻展 十日—十五日 上野・松坂屋

第二回聖戰美術傑作展(日、洋)

十日—十五日 京都・大丸

日出新聞社

陸軍美術協會主催

日本美術院軍用飛行機獻納同人作品陳列(日、彫) 十四日—十五日 谷中・同院事務所

同人各自二點宛の出品で日本畫五十四點、彫刻は二十一點。大觀の「蓬萊神山」「曙の洋」を筆頭に穀彦の「重盛」古徑の「觀音」田中の「漁隱」等いづれも充實した出品であつた。武山も茨城から「八幡大菩薩」「聖觀音」を出陳した。

中川一政第二回水墨展 十四日—十七日 銀座・養生堂

安部治郎吉油繪展 十四日—十八日 銀座・菊屋

太平洋畫會第三十八回展(洋) 十四日—三月一日 東京府美術館

東日一特に一室を設けて「大東亞室」としたあたり、この會にめづらしい新企畫だが、内容は格別のことなく招待出品で川島理一郎のタイ國スケッチ、水木伸一の淡彩素描が目につく程度。注目すべきは寧ろ鹿子木孟郎の遺作展示にあり特に滯歐中の克明な人體素描八點は、若い時代の勉強ぶりが偲ばれる好參考。一般出品は全體に新味乏しく會友では鈴木貫司の「魚屋の父」會員では鶴田吾郎の炭坑夫、布施信太郎の三部作などい、方であらう。

〔搬入〕一三二六點〔入選〕一〇三點

〔新會員〕堀潔、早川芳彦〔新會友〕鈴木滿、佐藤武夫、齋藤茂、關口文雄、吉田遠志、半田圭治、中田信〔會員賞〕玉井力三〔太平洋畫會賞〕鈴木貫司〔獎勵

賞〕棟方一〔岡田賞〕佐藤三郎

光風會第二十九回展(洋、工) 十四日—三月一日 東京府美術館

讀賣一渡邊武夫の「母の像」は笠井忠郎の「Hの像」と共に力作であり、聊かの破綻も見せてゐない。溝江勘二の「運」のマチエール良くその他の作品には藤井芳子の二點、野村陸雄の「N君の像」や池田忠二の「外人村」水彩では増田喜恵藏出色の出來なるも太平洋展の方へ出している作品の方が遙かにいい。會員の作品では平岡權八郎の「娘」斷然秀で近來の傑作である。

〔陳列總數〕繪畫二九九點、工藝四五點

〔新會員〕木村八郎、益山雅衛、本儀信中尾達、森田元子、高宮一榮、白石隆一西山眞一〔新會友〕斧山萬次郎、鈴木三五郎、山村孝太郎、金子德衛、古屋浩藏齋藤齊、永田精二〔光風特賞〕藤本東一郎〔岡田賞〕土佐林豊夫〔光風賞〕大原省三〔H氏賞〕笠井忠郎〔K夫人賞〕米本一郎〔I氏賞〕三上義人、大塚平八郎〔光風工藝賞〕坂本芙蓉〔工藝賞〕横田峰齋、青戸久壽

日本バステル作家協會第二回展 十七日—十九日 銀座・松坂屋

佐藤武造漆畫展 十七日—二十一日 日本橋・高島屋

白宏會第一回展(日) 十八日—二十一日 銀座・養生堂

會員は日本美術院々友横田仙草、丸儀太郎、小谷津任牛、鈴木大藤、鈴木麻古

等の五名

第一回團樂社畫賣美術展(日、工) 十九日—二十八日 銀座・三越

富岡鐵齋展(日) 二十日—三月五日 大阪市立美術館 大阪毎日新聞社及國民美術協會主催

山崎省三大同石佛訪問記念展(洋) 二十二日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊 東日一石佛寺窟内の菩薩像及び脇侍佛などを描いた油繪小品に素描を加へて廿數點、佳作は油彩の方で一聯の「飛ぶ人像」及び「石佛寺廂房」素描では「六美人像」「菩薩立像」が目される。嫌味のない好小品展。

新美術家協會第十四回展(附泰西名家特別陳列)(洋) 二十二日—三月二日 東京府美術館

中商(前略)新海覺雄の甘さや清水刀根の無氣力は不問に附するとしても見るべきものといつては田崎廣助の「風景」一二と「靜物」田邊三重松の「海峡」その他數點に過ぎない、近藤光紀の「靜物」「ザボン」は單なる綺麗事に終つてゐない點をとる。

赤松俊子、西喜代子モスコスケツチ展(洋) 二十四日—二十八日 銀座・青樹社

團丘會第二回展(日) 二十四日—二十八日 日本橋・三越

會員は故御舟門下の金子文平、河村良孝、高橋周榮、角田朱呂、坊坂俊文明、吉田耕三、吉田善彦、若山菊次郎。

津田青楓茶掛展 二十四日—二十八日 日本橋・高島屋

河井寛次郎、濱田庄司、芹澤銑介、棟方志功近作展(工、版) 二十八日—三月一日 駒場・日本民藝館

## 三月

古川北華第四回個展(日) 一日—四日 銀座・養生堂

歴程美術協會第七回展 一日—五日 大阪・そごう

現代大家先哲畫像展(日) 三日—六日 日本橋・三越 月明會主催

鬼面社第四回展(洋) 三日—七日 銀座・三越

塚本茂個展(洋) 三日—七日 銀座・青樹社

吉田博木版畫展 三日—八日 大阪・大丸

内島北朗作品展(工) 三日—八日 上野・松坂屋

綠卷會第四回展(洋) 三日—十三日 東京府美術館

會員神津港人、鳥羽宗雄、本間勘次等及び入選者の作を併せ百七十三點を陳列、綠卷會賞の中川康之は南洋に取材した作を見せた。

旺玄社第十回展(洋) 三日—十六日 東京府美術館

東朝一―大正四年來の牧野虎雄回顧作において「靜物」に示した量感や、花や風景の美しい色彩を見るに、これはすべて

自然に對しての觀照のよきによる。しかるにこの會の一般にはことさらな雅拙感を求めたり、徒らなたくみを心掛けるもの多く、その結果圖案化するの遺憾である。ただ樹下行雄の「磯邊の春」市村雄造の「樂しき日の兄弟」の素直さはその難を救ふ。

〔新同人〕保科米三、梅野順三〔新社友〕大住閑子、沼田一郎、進藤清、原創三郎、三橋兄弟治、山口力雄〔旺玄社賞〕阪井谷松太郎〔岡田賞〕市村雄造〔目白賞〕水戸範雄〔S氏賞〕新井廣治、大住閑子、〔中央商會賞〕杉浦勝人、久保木スミオ〔月光莊賞〕沼田一郎

牧野虎雄作品特別陳列

- 一 裸婦 昭和二年作 二十五號
- 二 亂れ咲く 大正十四年作 十二號
- 三 初秋の庭 昭和三年作 四十號
- 四 房州風景 昭和四年頃作 四十號
- 五 早春 大正十一年作 二十號別型
- 六 ダリヤ 大正十二年頃作 十二號
- 七 路傍新緑 大正十四年作 二十號
- 八 夏の庭 昭和八年作 二五號
- 九 初冬 昭和十五年作 二十號
- 一〇 花苑

- 一 秋の風景 大正九年作 三十號
- 二 靜物 大正十一年頃作 二十號
- 三 廢屋の春 大正十四年作 十二號
- 四 庭 大正八年作 十二號
- 五 崖 大正十二年頃作 十二號
- 六 向日葵 大正十二年作 五十號
- 七 柿 大正四年作 二十五號
- 八 向日葵 大正十二年頃作 二十五號
- 九 朝顔 昭和七年作 八號
- 一〇 冬の遠山 大正九年作 二十五號
- 一一 嵐の前 大正十四年頃作 十二號
- 一二 李の花開く 大正十四年作 十五號
- 一三 波 大正十年作 十號
- 青木繁遺作小品展(洋) 四日―八日 日本橋・白木屋
- 精藝社工藝展 四日―八日 銀座・鐘紡美術部
- 鮮展審査員第五回作品展(日) 四日―八日 京城・丁子屋
- 大阪美術第二十八回展(日) 四日―八

日 大阪・三越

獨立美術第十二回展(洋) 五日―二十三日 東京府美術館

東朝一兒島善三郎の風景や菊は數年來、時には意志的に、時には技巧的に追求して來たものが、いよゝ融和して清麗な整ひを見せた出色の作である。中山巍は南方の人々を描くが觀照が手輕すぎる。これに引きかへ川口軌外の「花と果物」を始め靜物は入念で意氣込みが深い。例年幻想が色彩の間に溶けこむやうな獨異な表現を見せるが今年は堅實な描寫の裏打ちがあつて豊かである。海老原喜之助「馬」二點は粗末にすぎて潑刺たるものが全然ない。齊藤長三の「新開地の少年達」や「雪のマント」は表現は不足であるが、感覺のねらひを純一に守つてゐる。林武「肖像」を始め靜物いづれも甘い表現に流れて密集したもの缺いてゐる。野口彌太郎氏「Y氏肖像」にはまじめな描寫があるが、こなれた色感を器用に捌く風景の方が樂しめるであらう。須田國太郎「冬」は、あまりに色調が沈潜しすぎたやうだが「夏」の方に例年の濃い持味が一層肌目細かにこもつてゐる。小林和作「牡丹」「秋」は共に靜かな觀照が行届いて優雅である。弱いといへば弱いに違ひないが、すなほな描寫が丹念に行き渡つてゐる。豊藤勇の三點はいづれも熱意の澄い作品である。部分的には色感にしる、構圖にしる難がなくはないが、のび／＼とした表現に思ふところを押進

めて屈託がなく、全般的に色彩の捌きも齒切れよく新鮮な素質を含んでゐる。松島一郎「鳥」などには快い描寫があるけれども力作「牛」の方はかへつて多少表面的なものが深い觀照の邪魔をしてゐる。描寫をもつと底深く突込まれたら、なか／＼いゝものになるに違ひない。一般出品の中では鳩川誠一「かもめ」を上げるべきか。(富永惣一)

〔搬入〕三五八三點〔入選〕四二二點〔陳列總數〕五四三點〔新會友〕赤堀佐兵、今井憲一、宇根元馨、綠川廣太郎〔獨立賞〕木村忠太、楠本俊治、宋永胤生、中村善種、長島常吉、鳩川誠一、狭間二郎〔岡田賞〕菅野圭介

出品目錄(○會員、△會友)

- 蕃社三題(其三) 林 織田 彩子
- 午後 綠川廣太郎 箱根秋晴
- 同(其二)射戲 ○兒島善三郎
- 同 夏草 同
- 同(其一)蕃社の人々 菊 同
- 犬を抱くひと 菊 同
- 宮城 輝夫 同
- ひまわり 梅 同
- 河村はる子 樹 新倉 利夫
- 法觀寺塔(2) 雪景 岩岡 貞美
- 奥田 仁 村境○居串 佳一
- 昌慶園牡丹 働く人々
- 小原 雄二 同
- 冬の竹田 風景 山村 猛猪
- 同 室内 義原 晃一
- 冬○菊地 精二 靜物 佐々木 毅
- 路上 同 朝餐 直村のぶ子

晚秋 梅原 茂

西田藤次郎

崖と雪米川 勝衛

あさ 中山次郎藏

好川淺太郎

大樹並木

農家 淺田 欣三

長谷川三雄

同

婦人像

草取り同

吉浦 鈴子

ウキンドウ

樹間 田口 元

海に見える丘

千鳥と貝殻

矢橋 倫道

萩原 遼 晃兒

北川 綱亭

夜の敵前渡河

秋の尖山風景

庭隅 狩野 正治

アンデスの寒村

庭のすみ

二人 岡崎 兼文

休眼 藤田 美里

冬 松島 正人

文 狭 勝

桑原 清

室内 入江 一子

松尾 敦一

鈴木 司眞

少女 岡本 治男

並木 齋藤 紅一

夏 同

ハワイ海戦(想像圖) 同

立つ馬高橋竹三郎

秋 同

緑陰 中村 新

山下 武夫

大同雲崗石佛

樹下初冬

同

はんや風景

ヨリンデとヨリ

秋 同

静谷 根守 悦夫

秋の少女

室内 若林 和夫

同

街景 山本 祐明

北山村景

勤勞戰士(三)

春の水大貫 梯二

残雪 鳩川 誠一

牧場の人

室内 静物(同)

同

近藤 了義

北國の港

同(二)

聖壁 平山惠多路

夏風景山口

薪割り同

赤いセーター

同

モト子ちゃん

同

同(二)

棒(2) 仲村 一男

南満州風景

運河の朝

赤いセーター

同

子犬 大庭シヅ子

建設 池島勤治郎

風雨の出陣

無題 兒玉 範子

村落(2)

樋口 勝三

親子(二)

同

松 坂本 康男

開拓者同

草の上加藤 陽

風景(小島善太郎)

波頭 大内 弘

魚の配給

静物 熊代 駿

同

裸婦 赤木蘇夫二

同

同

松島 同

子 境田 繁

炎華 井口奈保江

ランプある静物

同

たそがれ

同

同

赤いセーター

同

同

同

同

内島 淑了

同

同

同

同

同

同

同

江南風景

同

同

同

同

同

同

同

伊藤 克三

同

同

同

同

同

同

同

少女と金魚

同

同

同

同

同

同

同

平野 勝子

同

同

同

同

同

同

同

乙女椿關

同

同

同

同

同

同

同

文樂人形

同

同

同

同

同

同

同

長尾 完二

同

同

同

同

同

同

同

龍夫

同

同

同

同

同

同

同

文樂人形

同

同

同

同

同

同

同

長尾 匡

同

同

同

同

同

同

同

石膏アル静物

同

同

同

同

同

同

同

林 圭三

同

同

同

同

同

同

同

初春 秋野 健夫

同

同

同

同

同

同

同

曉の合津港

同

同

同

同

同

同

同

川口美喜夫

同

同

同

同

同

同

同

母と子久保田久一

同

同

同

同

同

同

同

作畫する男の像

同

同

同

同

同

同

同

田中 峯

同

同

同

同

同

同

同

大竹 久一

同

同

同

同

同

同

同

警鐘臺ノアル風景

同

同

同

同

同

同

同

景 岡崎 善夫

同

同

同

同

同

同

同

景 岡崎 善夫

同

同

同

同

同

同

同

景 岡崎 善夫

同

同

同

同

同

同

同

景 岡崎 善夫

同

同

同

同

同

同

同

景 岡崎 善夫

同

同

同

同

同

同

同



真山 中島 了象	山峽の秋	大山志津夫	少年達鸛崎	鈴江	立話	岡田 勝	港にて古田	義一
山麓の松林より	小山 保	新聞を讀む女	河口△豊藤	勇	濱邊 木村 武男	牡丹 八木 豐文	捉へてをり、努力の程が察せられる。漆	
琵琶湖を望む	豚(作品)	井上 狐	魚市 同		萩 安田 五郎	埴輪 村田 東作	石老巧なのは鶴田吾郎、北蓮藏だが、壁	
紫陽花鈴木 竹一	帆船 望月 鏡一	少女 秤 安雄	荒磯 同		岩藤 木島 眞二	早春 間間 久	畫としての構成の面白さは若手に認めら	
銃後秋景	風景 大村 光	冬の庭太田 芳朗	山村の秋	梁 達 錫	甲府盆地	湖北 田中 稔	れる。難をいへば壁畫展示の方法で、畫	
大島 正	夕 山中 勝人	冬山 古田 茂正	壺と農具	達 錫	辻 芳雄	拓土 眞崎 直	面の位置がまだ高すぎることと採光の悪	
丹宵 村島 鐵雄	二月の風景	ひばり遠藤 智	三田風景	鶴見重太郎	雪景 實本 仙	枯木のある風景	い點。	
樹と子供	岡部文之助	三田風景	浮根(2)	木村 初男	りんご樹	ローマン・カト		
秋山ミチ子	トウキビ	邯鄲の邸外	北國の秋	菅野勝太郎	同(二)同	斜陽 江本 兼次	仁王 吉田 公	
神奈月藤田 水祥	同	本井 一朗	舊野勝太郎	清物壺古瀬 虎麓	大山魯牛新作展(日)	七日一十日 銀	座・資生堂	
北都 入 來 天	黃寺門野田武太郎	北國の秋	菅野勝太郎	竹林 木村 正夫	小柳倍伸第一回作品展(洋)	七日一十	一日 日本橋・高島屋	
乳搾り片澤 龍吉	濱邊 中村 辰巳	海邊 老 健一	農婦 江口 美奈	夏 光盛清五郎	鈴木旭松齋花籠展	七日一十一日 日	本橋・三越	
風景 藤岡 展次	枯木山岸本 桃子	農婦 江口 美奈	夏 光盛清五郎	晚秋 吉村 勇	上井口村にて	鐵指 公藏	偶成 須永 靜美	
稜線 赤堀 佐兵	梅林 高原 政孝	夏 光盛清五郎	晚秋 吉村 勇	上井口村にて	鐵指 公藏	偶成 須永 靜美	夏 橋本佐紀子	
高原 同	長崎の道	上井口村にて	鐵指 公藏	偶成 須永 靜美	夏 橋本佐紀子	永原 成田 勇吉	風景(A)	
冬の野(上海)	正木 智海	帽子を持つ女	片山 公一	第三紀層	岡 周末	上海の鳥屋	高橋 忠彌	
但馬の山野	李田たけを	第三紀層	岡 周末	上海の鳥屋	高橋 忠彌	上海バンド地帯	同	
横濱 宮岡 賢二	馬の宿	△富樫 寅平	少年 同	萬里の長城	多田 榮二	コンボジション	連作の制壓	
松嶺 清水 鯨徳	田中 秋男	東北の港	遠藤 忠	川原にて	青木喜太郎	室內 橋本 橘	訊問 奈良岡正夫	
外房風景	同	△山道 榮助	歸路 同	殘雪 野村 正二	貞猪森(雪)	遠藤 正三	花 横山 精一	
庭 新井 保雄	梅 同	冬外 同	ミゲミ藤崎 眞	冬ノ市街				
風景 上野 衛								
菩薩像金 晩 炯								

の關係があるにせよ、野心的な力作が見られず、小味に墮した作品が大部分である點は物足りない。

青樹社主催歐洲繪畫展 十四日—十八日 銀座・同店

三好俊一個展(洋) 十四日—十九日 銀座・青樹社

上社會第十五回展(洋) 十五日—二十三日 東京府美術館

東日—小磯良平、荻須高德のふたりが、不出品だからといふわけではないが全體に今年は淋しい。高野三三男の二點では「靜物」が鮮かでき、猪熊弦一郎は裸婦よりカルメン扮裝の肖像が無難、大月源二の風景は筆觸の滯滞が無さ過ぎて物足りなく、中西利雄も凡調。藤岡一は大作「鳥かご」のへんなビカシズムは困りものだが、花模様の陶板三點は面白い。

國外社第三回美術展(大東亞美術展) (日) 十五日—二十三日 東京府美術館

大阪毎日新聞社後援

東日—關岡在任の桂月門下を主體としたこの會の三回展を大東亞美術と銘うつたものだが、畫材に鶴や鷺、神社とか富嶽を選んだといふだけで格別のことはない。力作を示してゐるのは瀧秋方と渡邊大虛のふたりで、前者の四間幅の大作「石上の秋」後者の「八幡四宮」四點が一應注目されるほか、招待出品の河口樂土の小品「村道」が愛すべき佳作。

〔搬入〕一六六點〔入選〕二六點〔陳列數〕三三點

美術展覽會(三月)

獨立春季小品展(洋) 十六日—二十日 數寄屋橋・日動畫廊

川島梅蘭新作展 十七日—二十二日 大阪・大丸

小早川秋聲日本畫個展 十八日—二十一日 岡山・金剛莊

紀元洋畫第三回展 十八日—二十二日 新宿・三越

富本憲吉個展(工) 十八日—二十二日 日本橋・高島屋

山形駒太郎大陸風景小品畫展(洋) 十八日—二十二日 日本橋・高島屋

日本畫家報國會軍用機獻納作品展 十九日—二十二日 日本橋・三越

東朝—現代名をなす日本畫家がどれ位のものを描くかを知る上に、また各畫人の技倆を比較する上に、この展覧は昨今珍しく興趣をそゝるものである。竹内栖鳳の鯛の寫生、横山大觀の春の海濱、川合玉堂の田舎の祝捷風景は、それ／＼各作家の特徴を生かした構想大なるもの、安田靉彦の古代武人「益良男」は前田青邨の白描風の「清正」とともに歴史畫中群を抜くものである、小林古徑の「橋」は珍しい畫材にして畫技洗練され、奥村土牛の「倭鶴」は同種のものでは頭角を抜き新しい研究では福田平八郎の「白梅」堂本印象の「朝顔」等ある外紙數あれば一々名をあげて賞讃し得る作品が三十點近くもあるは昨今稀に見る壯觀さである。

東光會第十回展(洋) 十九日—三十日

東京府美術館

東朝—齋藤與里、熊岡美彦は流石首唱者だけあつて第十回を記念すべく努力はしてゐる。殊に前者齋藤の風景に示した丸味ある筆觸が温か味をつたへ、棒もまた鮮かな色彩をさけて重厚さをねらつたあたり、熊岡の單的に直觀をうつたへた「夏蜜柑なる伊豆」に比して藝術的には一枚上である、佐藤一章の運筆、點描風の行き方は風景を描いた場合時に豊かさを感ぜしむるが、今回の人物は冷たく其感と呼ばぬ、むしろ同傾向の河原修平「茶店の小閑」の方がよし、一體に粗雑な作品多く情感を傳へるまでに至らぬが、境保障の「雪かき」水船三洋の「志摩波切風景」はその難少し、山本日子士良の「老農夫」、河井達海の「春」はそれ／＼の境地でよき素質を示し、渡邊浩三は大休止の形、石本秀雄は無理が過ぎて嫌惡感をいだく。

〔搬入〕一三九八點〔入選〕一四八點

〔新會友〕廣本森雄、西川高次、石田勝堂、大平敬次郎、大木茂、山本日子士良、水野一好、山形光壽、村田安治、高橋雅子(無鑑査) 堀忠、大瀧斗良樹、境保博、向井かつゑ、宮地一夫、譚詰英一郎(東光賞) 桑原福保(岡田賞) 熊岡正夫

特別陳列

少女(油畫) ルノアール

浴ミ(油畫) ルノアール

アンリ・ド・ロシフオール

像(彫刻) ロダン

ブルドー(第一原型) ボンボン

飛天—光背一部(木彫) 藤原時代

菩薩佛頭—龍門第三窟窟陽洞 北 魏

水田塾舊我會展(日) 二十日—二十二日 大禮記念京都美術會館

第二回明治初期洋畫回顧展 二十一日—二十四日 銀座・資生堂 明治美術研究所主催

連袖會第五回油繪展 二十一日—二十五日 銀座・青樹社

東朝—安井曾太郎の風景は美しい色彩の調和から来る濕りを持つが大きな足りぬは畫面構成にとらはれ過ぎ直觀を殺すためである、中村琢二は「早春」の勞圍氣をよく把握しその他創造性には缺けるが眞摯な態度は取る。

大輪畫院春季展(日) 二十一日—二十五日 日本美術協會

報知—回を重ねる毎に出品作が向上して行くのは賀とすべきだ、主宰小林彦三郎の「五族協和」は滿洲の植物を以て伸る滿洲國を象徴したものだがさすがに他を壓してゐる、同人楠泰白の「航空兵訓練」は異色作だが挿畫に墮する惧がある、佐々木順の「見立稚兒文珠」見立に止る、穂坂光稀の「北邊の民」は人物の表情が固い「松影賞」三點「黎明」奈良華泉「薄雪」原田太致「黃蜀葵」小谷日出、他田中鶴三の「微風」諸藤英世の「不動明王」等が光つてゐた。

〔搬入〕一一三點〔入選〕三六點〔陳列數〕三三點

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

美術展覽會(三月)

## 【五三點】

銀金工藝美術展 二十二日—二十六日  
日本橋・三越 銀金協會主催

萩谷巖個展(洋) 二十三日—二十六日  
數寄屋橋・日動畫廊

青樹社主催現代大家新作油繪展 特別

陳列明治大正物故作家遺作並に佛蘭西近代畫 二十四日—二十八日 大阪・同店

春星會新作日本畫展 二十四日—二十九日 上野・松坂屋

德力富吉郎日本聖蹟巡拜記念版畫展

二十四日—二十九日 大阪・大丸

東海林廣油畫個展 二十五日—二十八日 銀座・資生堂

泥谷文景第三回作畫展(日) 二十五日—二十九日 日本橋・高島屋

平井樗所墨藝書畫展 二十五日—二十九日 日本橋・高島屋

河合卯之介陶器展 二十五日—二十九日 日本橋・三越

春の青龍社第十回展(日) 二十五日—二十九日 日本橋・三越

東朝—この會の魅力はまづねらひと構成にある。今も京都伏見の稻荷山に取材した龜井藤兵衛や坂口一草の滿洲情景を寫した「安居路」がそれで、ともに取上げるに足る佳作である。北國の子供らの「雪戰」を描いた加納三樂は、速筆を以て直觀を生かし色彩の配合もよく情感も備はりや、停滯氣味の形から抜け出したことは喜ばしい。山崎豊の「双鷲」もまた力強い描寫力を認むるが福岡青風の

「機略」は生氣に乏しい。川端龍子の「極樂島」はこの作家としては上々のものでなく、むしろ「聖雪」を取るが一段の重厚さが欲せられる、たゞ會につきまとふ騒騒しさは依然たるもので銀冶海雪の「月明」のみがそれを救ふ。

「青雲賞」銀冶海雪、渡邊不二根、林榮太郎、龜井藤兵衛

旭泰宏版畫新作展 二十五日—二十九日 京城・三中井

大阪女流畫家第九回展(日) 二十五日—二十九日 大阪市立美術館 大阪女人社主催

岡田魚降森個展(日) 二十五日—二十九日 日本橋・白木屋

新興美術院第五回展(日) 二十五日—四月五日 東京府美術館

東朝—芝垣興生「爭鬭」森山麥笑「朝嗽」福島秀行「朝風」等新しい形式への努力は認むるが共に畫面に躍動なく、その點や、救はれるは岡田魚降林の「雪景」である。小林集居の「潮光國土」は小波の描法が興趣をそゝり田中案山子の「魚村十景」では「海風」「白日」に示した雲のたたずまひをはじめ自然への直觀がよい。京洛林泉七景」を描いた茨木杉風の

遲筆、肥夏の技法は「寂光院」「天龍寺」「三千院」の持つ清楚な庭園の感じをよく生かしてゐるが、この技法ではこれ以上の深さは出ない。

(新同人)岡田魚降林、並木瑞穂(第三賞)京谷博、村山勳、倉持普一、杉原徹

蕉、林部圭宰(平野賞)岩田彌光  
巴會第六回日本畫展 二十六日—三十日 銀座・菊屋

國畫會第十七回展(洋・工) 二十六日—四月六日 東京府美術館

讀賣—國展はこの二三年、全體として畫風が可成り動いて來てゐる。この會の中心である梅原龍三郎の作風には、極めて官能的な描寫と強い自家主張の表現とが畫面の裡によく醗酵してゐて、その豊

醇な畫面は「趣味的」とか何とかいはれても、一度その畫情に魅力を感じた人なら次第にその鑑賞を深めて行ける奥行を持つてゐる。今年の「北京」風景の柔かなふくらみ「北京の姑娘」の調子の高い決定的な描寫など、この畫家が不退轉の精進をしてゐることを示してゐる。一と頃、この梅原のもつ官能的な側面を徒らに裝飾的に模倣した作品が氾濫してゐるが、この頃になつて、その反動とも見える程、觀念的な造型表情を求める傾向が目立つて來てゐる。例へば庫田葵の作品などの傾向であるが、畫面に觀念的な姿勢が目立ち、味噌の味噌臭いところがあり過ぎる。一方から考へると、これはわが國油繪の様式的進展のやうに思はれる

かもしれないけれども、かういふ造型の觀念的な姿勢が比較的易々として強調され過ぎるところにわが國の油繪を誘惑する一つの危険な陥穽があるのではないかと考へる。この展覽會などには、一見現下の時局的な反映は何等見受けられないやうな氣がするかもしれない。美術家が戰爭を題材にすることはかりが、われわれの當面してゐる時局の體験を反映することでは勿論ないとしても、われわれ民族の精神昂揚が、潤達と高邁と、嚴しさと悲壯の情感をもつて、美術の様式的「内部」に沈潜してゆくことを、この會ばかりでなく、われわれの周囲の凡ての美術の中に人々は切念してゐるのである。國展の畫は概して神經は徹つてゐるが、妙に拈つたつもりでいぢけたやうな作風も少くない。現在わが國の洋畫壇に待望されてゐることは、味ひある風懷や深刻めいた表情を繪畫に求めるよりも、素直に油繪の材質や表現の傳統を噛みしめ、油繪の道を誠實に一步一步地均して行く畫家が一人でも多くなることではないかと私は感じてゐる。さういふ畫家を發見し育てることは、恐らく國展の中などでこそ出来る事ではないかと私には思へるのであるけれども、同人の中で今年は杉本健吉の作品など佳い方と思ふ。い、潮時に筆を離して、畫技の努力感が薄つてらにも重苦しくもなく適當に出てゐる。小林邦報の「風景」は色感に美しいけれども、色價の配慮が難である。青山義雄の「靜物」も溫雅な色調であるが「人物」の方は水つばい調子で賛成出來ない。色調の溫雅なことでは、土田文雄の「花臺」もあるが、強い筆觸のわりに給が弱い。この會の色彩家の仕事は、とすると停滞しがちに見えるのは色調の根本に粘り



が足りないからではないかと思ふ。香月泰男の作品は清潔な抒情を持つてゐるが、近年繪が段々こしらへものになつて來て畫面が瘠せてゐるのは残念だ。今度同人に加はつた熊谷九壽と大川武司のうち、大川も抒情味のある畫だが「叢」は、洋畫らしい空間感が缺如して薄つべらになつて了つた。その他澤野岩太郎、松田正平など佳かつた。今年の棟方志功の版畫には、一種の艶が出て來た。(今泉篤男)

東日―工藝、陶器鈴木清の三品中長皿が殊によろしい。鐵釉の萩、淡い緑の調子には好感が持てる。北出塔次郎の角鉢一對は技術的に釉藥の驅使に、同じ畑の宮本憲吉をしのぐものがあり、齋藤輝子のペン皿、猫柳の意匠は斬新である。この展覧には憲吉の陶器を眞似て非なるもの多きはどうか、染織では矢部連兆の二曲屏風の椿、薔色を基調としたものが優れてゐる。廣本長子の紅型研究になる小屏風、貝盡しは可憐なる作品。竹細工の數點はいづれも繊弱。木工には林二郎の香盒と花生があるが共に多少の難點をもつてゐる。金工、漆工には見るべきものなし。

〔搬入〕繪畫一三七四點、版畫二五六點  
工藝三一一點、寫眞二二八點〔入選〕繪畫一〇二點、版畫四二點、工藝九六點、寫眞四三點〔新同人〕國松登(版畫)川上澄生(工藝)廣本長子、鈴木清(寫眞)北角玄三、長濱慶三(國畫獎學賞)(繪畫)澤野岩太郎、久本弘一、松田

正平(工藝)増田三男(褒狀)(繪畫)二重作龍夫、橋本三郎、島内キミ、宇治山哲平、澁川駿二(版畫)黒木貞雄、山口源(工藝)新開邦太郎、山田詰、森一正、〔岡田賞〕國松登(F夫人賞)澤野岩太郎

出品目録(○同人)

繪畫  
山峽紅葉 宇治山哲平  
山 同  
ハルビン風景 土田 久米  
山 伊藤 彌太  
靜物 原 信重  
雪景 内堀 勉  
代木 同  
かんなく本 弘一  
床 同  
溫室(逆光) 澤野岩太郎  
壺 同  
叢 ○大川 武司  
推古佛○藤田太郎  
喇嘛廟同  
靜物 二重作龍夫  
早春 同  
春眠 平田 茂子  
八角塔(熱河) 原田 成大  
水鏡○香月 泰男  
釣床 同  
窓邊靜物 金井康次郎  
風景 海川 博一  
黒猫と白猫 内ヶ崎光枝  
靜物 大内田茂士  
母子像内本 寛一  
仙娥瀧同  
靜物 清水水咲子  
柿 同  
柿の木鈴木 清  
ミモザ岡田 節子  
石疊 濱田 羊  
廻廊 南風原朝光  
殘雪 岡田 義法  
溪流 濱田 直記  
樟の道同  
集團アトリエ 松田 正平  
枯霞草同  
或るゑかき 同  
梅に鶯山崎 隆夫  
津輕の湖水と馬 松木 満史  
津輕の山野と馬 同  
鮭 齋藤英太郎  
海邊 同  
早春譜遠藤 満男

龜甲模樣 宗像 逸郎  
雞頭 同  
枯れ黍金子 幸正  
叢 國松 登  
春庭 同  
漁村 渡邊 貞一  
秋草 森國 肯彦  
街角 吉田 勇  
繫船 同  
柿紅葉上田 清一  
カンナ同  
子供達(B)  
○喜多村 知  
子供達(A)  
同  
濕地と犬 橋本 三郎  
竹林 同  
赤い服の女 石井 照  
壺と少女 同  
大陸の屋根 島雄 健  
曳く 鈴木 正二  
網を乾す家(銚子) 同  
N氏の像 名久井由藏  
雪と靜物 福井 敬一  
風景 土井 六郎  
金魚 大森 啓助  
顔 同  
青林 中尾 義隆  
花 柿野 平太  
耶馬溪熊谷 九壽  
靜物 同  
北京風景(二) 石切場吉田 虎夫  
梅原龍三郎  
北京風景(一) 同  
同  
北京の姑娘 同  
びわの花 島内 キミ  
獅子と貝がら 同  
晩秋の霽日 川村 浩章  
S氏の像 村上 巖  
椅子による人 同  
貝 杉本 健吉  
丘 同  
填輪 同  
なんばんさいかち 同  
○立石 鐵臣  
ここやし 同  
臺灣の家 同  
團門 同  
こぶしと蘭 同  
山田 千秋  
春雪(二) 貞雄  
○梅 同  
春雪(一) 同

赤い菓子鉢 秦 善惠  
カーネーション 同  
風景 尹 仲植  
虚空藏菩薩座像 同  
樹下觀音 同  
瀝川 駿二  
春堤 同  
古光山○辻 愛造  
宮浦 同  
奈良の秋 大淵 武夫  
揚州の朝 同  
風景○小林 邦報  
れんぎやう 同  
田 伊藤 十一  
早春の谷上 同  
山本 萬司  
安南蕪風(未完成) 同  
○長谷川春子 同  
早春○山田 正  
風景 同  
花曇○土田 文雄  
急須と盆 富田 民治  
徐福廟同 同  
百合 甲田 克子  
ハツ手の花 同  
月草 道子  
裸婦習作 同  
○宮坂 勝  
湖畔雪景 同  
浮彫仁王 同  
立葵 同  
小館善四郎 同  
セロ弾く男 同  
○中村 鐵  
街頭の一隅 同  
靜物○庫田 同  
肖像 同  
無題 同  
靜物○青山 義雄  
人物 同  
梅 ○久保 守  
布片○養田つや子 同  
玻璃器同 同  
蛙雨ノ郷 同  
鳥野 大作  
坂元の冬 同  
漁村秋景 同  
靜物 辻 文雄  
小鳩 同  
髪 松本 茂  
土人人形 同  
中村 好宏  
秋草と面 同

北滿の街	尾田 龍	○眞垣 武勝	樹木 上阪 雅人	かなな黒木 貞雄	吉川 喜作	静物○野鳥	康三	鯉 同	春秋文水指
女 吉野 廣行	同	信濃澁澤の夏	窓前静物	濱のふ咲く鳥	いのり大和 良平	無題 松原 重三	冬鯉 同	葉紋銘々皿	同
寒紅梅	同	淺照淺間	崖 伊東健之典	七星門同	鳥城 根本 元春	葉陰 光村 利弘	本染のあざみ	岩崎 眞也	北野 範二
○平塚 暹一	杉丸 進	嶋と鳥風	古城 橋本 興家	土塀 武田 由平	驟雨霽れゆく	洋剣 同	拔模様色釉陶器	伊豆藏壽郎	櫻拭漆茶檜
地圖ノアル静物	原田 緑	○仰木 茂	『縹緲頌・崑崙板』 畫卷 屏風一雙	梅咲く同	木 諸江 一郎	秋 同	果物盛盤	大久保正堂	螺鈿梅白字小宮
牛若練武	積雪 同	○棟方 志功	御朱印船	エチユード(銅版) 笠木 實	リ シロスチカミキ	凍る湖畔	鳥山 悌成	乾漆香爐盆	同
○河野 通勢	池畔冬色	御朱印船	川上 澄生	顔 同	轍 錦古里孝治	陸稻○福原 信三	春雪 中井 正躬	奥澤 鮎練	菊とつこう
神苑山水	同	池畔冬色	しちやとさんば	静物○川西 英	山羊 加藤 峰雪	冬山の華	山田 房雄	葉文盛器	ばな、ノ花
雲と菜の花	龍沼 青	晩秋庭同	つや 中江 讓	同	承德風景	岩田 一雄	花曇 竹見 義雄	織田 慎一	紙切 酒谷 長厚
自畫像川村 雫子と朱盆	滋	版 畫	電話のある部屋	十和田牛のゐる	波紋 小澤 芳明	安藤不二夫	仲秋 杉野 勝男	解幾尾瀬屏風一雙	紅型染「貝」
○大谷 房吉	立春 塚本 哲	戦況ニュース	同	奥入瀬棟方 末華	南大門紅谷吉之助	斜陽 熊澤 沙郎	曉寒 同	碗豆花ノ圖 飾	花渦文花瓶
早春山麓	同	妙義山前田 政雄	水を飲む人 誠	同	線 村林 忠	門 辻 潤之助	海兵の像	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
クンセイ	同	石垣苺山口 源	南海への思念	春を告ぐ	線 村林 忠	門 辻 潤之助	海兵の像	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
○佐藤 哲三	鏡の有る静物	同	恩地孝四郎	上野 長雄	黒と白魚住 勵	水の幻想	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
コドモ同	同	子供ト石佛藤圖	法隆寺村暮色	米穀増産協議會	同	習作(一)	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
鳥 佐々木節雄	第三 高羽 敏	○平塚 暹一	佐渡春日岬	落葉せる柏の木	習作(二)	○中山 岩太	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
静物 土肥 博隆	春待つ村	同	風(石版)	立 中野 喜平	習作(二)	○中山 岩太	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
熱海秋色	緒方 掃菴	北澤 收治	アマリリス(同)	溪橋奥多摩の秋	散び 紀伊 克美	工 藝	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
驢馬の通る風景	人形 下澤木鉢郎	同	同	鋼鐵増産圖	線 小谷 鐵雄	香盆 飯塚 薫石	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
福田紹太郎	同	同	同	高田 一夫	樹 中島 幸次	扇面風爐先屏風	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
苦力牽引	同	同	同	同	星の降るやうな	井上 秀雄	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
山波○山村 誠	同	同	同	同	夜だつた!!	溜漆筆筒	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
山湖飛禽	同	同	同	同	ハナヤ勘兵衛	犬飼 鳥子	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
練智船大森 茂雄	同	同	同	同	風景 斗光 成公	白菜○稻垣稔太郎	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎
那智觀瀑堂	同	同	同	同	花 齋木 幸子	かぶら同	同	碗豆花ノ圖 飾	齊藤 三郎

簪章飾箱	同	天坊 武彦	盛藍(竹)	林 尙月齋	變形銅水指	樟(色)屏風	桑根宮吉本	壽
百日草飾箱	同	本黛色畫 菜之	花圖大壺	同切香盆	增田 三男	○矢部 連兆	刺繡片側帶	横尾 彰
唐黍角飾皿	同	○德力孫三郎	本黛色畫 魚文	四方花入	二 郎	同	同	彰
琉球紅型染壁掛	同	本黛色畫 柿之	陶陶板	同	同	綴織スツール	前原季代子	同
琉球風物圖	同	同	同	同	同	白品次瓦花壺	宮下 善壽	同
城間 榮祿	同	色繪陶板用 習	作畫帳式	春の花 型染ふ	ろさき屏風	同	同	同
四分一 魚文組	同	○富本 憲吉	同	同	同	鳥瓜圖飾盆	水内平一郎	同
小盆(五客)	同	同	同	同	同	同	同	同
鈴木 昇一	同	同	同	同	同	同	同	同
萩之圖角皿	同	同	同	同	同	同	同	同
鈴木 清	同	同	同	同	同	同	同	同
おぼこ文局壺	同	同	同	同	同	同	同	同
長茄子之圖皿	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
緋ハンドバック	同	同	同	同	同	同	同	同
杉岡 辰男	同	同	同	同	同	同	同	同
谷關 志郎	同	同	同	同	同	同	同	同
和染ティブルセ	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
手箱山茶花	同	同	同	同	同	同	同	同
竹内 泉石	同	同	同	同	同	同	同	同
果實文盃	同	同	同	同	同	同	同	同
高田傳一郎	同	同	同	同	同	同	同	同
色繪壽ノ圖陶宮	同	同	同	同	同	同	同	同
龍口 加金	同	同	同	同	同	同	同	同
色繪小紋陶宮	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同
漆小箱武石 勇	同	同	同	同	同	同	同	同
青梅 高梨徳三郎	同	同	同	同	同	同	同	同
色繪早秋、陶板	同	同	同	同	同	同	同	同
武原 善平	同	同	同	同	同	同	同	同
ガクの花長皿	同	同	同	同	同	同	同	同

三巴會第一回展(綜合) 一日―三日	銀座・養生堂	東朝一奈良に住む美術人最初の展示、	菅原安男の木彫「鹿」に示した豊かさや	後藤年彦の金工「花瓶」における清雅さ	は認められるが、共に技は荒く、栗津魏	三郎の「頭塔」「埴輪」は取材への興味あ	るも畫技平板。	璞友會第二回展(日) 一日―五日 銀	座・松坂屋	小林彦三郎第二回新作展(日) 一日―	五日 銀座・三越	邦畫一如會第二回展 一日―五日 日	本橋・三越	報知一洋畫家の日本畫筆技も大分手に	入つて來たが、この會の同人はいづれも
四月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

その道の練達猛者揃だけに面白かつた、	嗣治の「九十九里濱」は技巧に新らしい	ものあり、一政、莊八の二人は例の通	り、青兒、克巳はまだ餘技の境を脱せず、	鶴三、柏亭二人は全く邦畫家といつて良	い、紀元はすこぶる油が乗つて面白かつ	た。	生田花朝塾會第五回展(日) 一日―	五日 大阪・三越	新燈社春季美術展(日) 一日―五日	大阪・三越	清風會竹器陳列會 一日―五日 呂本	橋・三越	秋保鐵太郎榊原紫峰花鳥十二ヶ月木版	畫展 一日―五日 日本橋・三越	東朝一和田三造の「職人畫繪」堂本印	象の「佛畫」を木版にしたのははじめ、	昨今佳作の生れるのは喜ばしいが、今回	のそれは花鳥畫の權威として定評ある紫	峰氏の花鳥十二箇月を木版にしたもの	で、版木も併陳されすべて二百五十度以	上の摺りである。	脇本樂之軒氏も稱讃してゐるごとく、	最も困難なる羽毛の毛描きをもよく克服	し原作者の氣品を摺師、刻師との藝への	呼吸一致によつて巧みに生かし日本の持	つ傳統的文化を顯示してゐるは、敬服に	値する。	洛西畫家隣組研究會第二回展(日) 一	日―五日 京都・丸物	二科西人社第八回展(洋) 一日―五日	福岡・岩田屋
--------------------	--------------------	-------------------	---------------------	--------------------	--------------------	----	-------------------	----------	-------------------	-------	-------------------	------	-------------------	-----------------	-------------------	--------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--------------------	----------	-------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	------	--------------------	------------	--------------------	--------

朱葉會第二十四回女子洋畫展 一日—

十一日 上野・松坂屋

讀賣會場が餘り廣くないのに數多く作品が雜然とならべられてゐるので、どうも觀にくい。柳瀬彌生の人物、鹽田みな子の椿、遠山陽子の人物等は技法に手堅きものあり、村井靜江の「紫陽花」は壺の描法にやゝ難を認むるも「董」と共に女性らしい柔かい色感を以て實によく纏めてゐる。藤江志津の水彩二點は線を巧に使つたなか／＼に洒落れた作品「ラッパのある静物」は殊にいゝ。佐伯米子の風景は畫面のカサ／＼した汚い感じ、かういふ狐ひ方は水墨による方がその效果を出せるのではないかと思ふ。

全關西美術協會第十六回展(洋) 一日—十四日 大阪市立美術館

大朝—下高原健治君の「子供」は構成にやゝ見るべきものがあり、下高原龍巳君の「馬の居る風景」も同じく構成に面白味があり表現は一步進んでゐる。渡邊信正君の「水鳥」は骨を折つてゐるが效果は「雨の街道」の方にあり、戸島孝雄君の「飼育」は圖柄にふさはしい穩かな調子が快く、岡田俊子君の作も同調である。井上賢三君の「雪の野尻湖」には一種の風格がある。けれども「寒鳥」とともに魅力に乏しく、君家三郎君の「雀飛ぶ」は圖の選び方に一寸した興味がある。平川要、平勇雄兩君ならびに長谷川初女君など筆はたど／＼しいが、注意をひいた。昨年本會の不熱心さに苦言を呈した

が、今年はやゝ見直した。田村孝之介、伊谷賢藏、藤井二郎、小野藤一郎君らは大分奮發のやうである。見るべきものは矢張會員、會友の作で占められてゐる。(春生)

(春生)

赤城泰舒富士山展(洋) 二日—六日 銀座・天賞堂

新京美術院東京分室開校記念展觀

(日) 三日 大森・同校

三靈祥之助油繪展 三日—七日 銀座・青樹社

東日—前年訪れた蘭印の、主として女の風俗による作品二十點を展示したもの、例によつて都會風な器用さはないが、重厚な褐色調の畫面は艶と幅を加へ、踊り子チャワン」の如き立派な風格を持つた佳作を示してゐる。その他「バリ島の祭典」「踊り子キニン」などの小品がよく、群像を扱つた比較的大畫面のものは「供物」を除いてまだ仕事が粗い。

日本畫院第四回展 三日—十五日 東京府美術館

京府美術館

東日—同人では吉田秋光の「芍薬」、野田九浦の「勤王僧」を佳品に擧げる。しかし今回の魅力は招待出品の東山魁夷であらう。壺の花を描いた二點も惡くないが、滯歐中の所見によるとみられる「花賣り」は部分的に難點があるにせよ、生として美しい畫調である。その他同じ農婦を扱つたものだが、關根雅雄の「憩」、伊藤文乙の「雪郷」など比較的よく、淺野正俊の「旗取り」も動きがある點で一

應取上げられる。

(陳列總數) 一三七點(日本畫院賞)(第一席) 玉村吉典(第二席) 望月定夫、太田歳夫、加藤春峰、小野顯山(獎勵賞) 稻垣虎之助、猪俣清明、養父清直、李顯菴、月岡榮吉

京都繪畫專門學校卒業制作回顧展(日)

三日—十九日 大禮記念京都美術館

美術創作家協會第六回展(洋) 四日—十二日 日本美術協會

日本美術協會

東日—抽象派風な作品が益々影をひそめて小松義雄にせよ、難波田龍起にせよ、山や農村の風物を國展調で描き出した點は注目されるが、一面小味な東洋趣味が出てきたことは警戒を要する。その中で山口薫の「驟雨」は詩情豊かでしかも根太いものがあり、矢橋六郎も「堆穂」はまづ／＼佳作といへよう。荒井龍男の「原野」は力作だが、いさゝか裝飾的で、むしろ「廢園の春」にこの作家の持味がでてゐる。その他文學漆の「西廂」、李仲變の「牛と子供」はともに一種の郷土的哀愁があつて面白い。

(搬入) 七三九點(入選) 四九點(新會員) 文學漆(新會員) 和田喜一

三井洋畫コレクション第五回陳列

四日—六月二十七日(毎土曜) 麹町・同邸

陳列目錄

畫室にて  
小出 拾重 和田 三造  
女の顔佐藤 武造 野 濱地 清松  
信州安茂里 女 靜浦 梅原龍三郎  
青山 熊治

海と松崎 伊之助

座像 中野 和高

靜物 須田國太郎

無題 古賀 春江

少女 山本 芳翠

アネモネ

佐伯 祐三

印度洋の波

加藤 靜兒

休息 中村 研一

ブルタニユ

清水多嘉示

芥子の花

青山 熊治

ストロブによる

ヴィヤール

大通り

宮崎會第一回觀賞展(日) 五日—七日

銀座・資生堂 石原龍堂主催

山下新太郎近作展(洋) 六日—十日

大阪・美交社

墨洋會邦畫展 七日—十二日 上野・松坂屋

三浦竹軒作品展(工) 七日—十二日

大阪・大丸

山本鼎近作油繪展 七日—十二日 大阪・大丸

日本俳畫協會第一回作品展 七日—十日

二日 大阪・三越

双喜社第二回展(洋) 七日—十五日

東京府美術館

報知—石井柏亭社中の同展は今年柏亭

還曆記念の百選特別出品があり華々しき

ラファエリ

婆 ベナール

海邊に立つ女

シャヴァンヌ

砂丘 カザン

ヴェニス

踊子 ドーナー

アーチの坂道

三宅 克己

汽車(ターナーの模寫)

白龍幾之助

溜池の午後

湯淺 一郎

靜物 有馬 生馬

芝居 岸田 劉生

陸軍省	磯村	昭和一七	加藤咄堂
中根光一	梅の村	同	同
服部玄三	香山淺春	同	同
日本銀行	子持山	同	同
	棒名潮	同	同
横山長次郎	烏帽子岳	同	同
浮田桂造	堤上櫻	同	同
平野藤三	ぼけの花	同	同
千葉醫科大學		番外	
A		昭和一〇	大野改吉

同

[illegible]

都・面白くなかつた。

四元莊第五回展(洋) 八日—十二日  
銀座・三越

森田恒友遺作展 八日—十二日 大阪

・阪急

高野山根本大塔柱繪十六大菩薩展並堂  
本印象筆宗教美術展觀 八日—十二日

大阪・高島屋

鬼頭壽二郎第八回油繪展 九日—十一日

日 名古屋・丸善

川端龍子大阪個展(日) 九日—十二日

大阪・高島屋

春陽會第二十回展(洋) 九日—二十二日

日 東京府美術館

東朝一故森田恒友、故倉田白羊、山本  
鼎、長谷川昇、林俊衛、小山散三、碓伊

之助、小林和作等をも擁し、他の畫派の

傾向などには眼もくれず悠々と精進をつ

づけてゐた第十回展前後は會自體が他に

求められぬ個性を持ち、それがまた大き

な魅力でもあり、親しみを持ったが、今

はもう、その片鱗すら認められぬ。國畫

會の如き若年寄り然の取りすました傾向

はないが騒々しさが漲つてゐる。

たゞ記念畫集作製のために蒐められた

會員達の舊作が樂しめるが、鳥海青兒、

水谷清を主流とするこの會は確かに弱體

である。

鳥海の「男鹿」をはじめ四點は依然た

るもので明快さを缺き、水谷の「北京散

景」は従來程の雜然さはないが色調、線

ともに整理が足りぬ。

塗ることの多い作家のうちにあつて水  
谷は描くことも出来、意欲も逞ましく期  
待の出来る一人であるが單純化するだけ  
の勇氣に缺けてゐる。

その點小穴隆一「勝負」が整理され「野  
馬追ひ」を描いた高田力藏の描寫力が貴  
い。塗ることをのみ求める作家は兎角高  
田の仕事には關心を持たぬものである  
が、昨今の作家にはこの道程を學ぶ必要  
がある。

原精一の努力作多數中「笛吹き」を取  
るが、これまた油彩が着かず畫面が荒れ  
てゐる。岡鹿之助の美しい仕事は工藝化  
への危險あり、中川一政の「徒然の女」  
は少しの感銘をも與へない。

〔搬入〕二一三二點〔入選〕一四四點  
〔陳列數〕二六七點外特別室二四點〔新  
會員〕上野春香、南城一夫、原精一〔新  
會友〕北野萬平、大嶺政寛〔春陽會賞〕  
今竹七郎、宮田武彦、金敏龜

出品目録(○會員 △會員)

飾棚 横尾 丈夫 野馬追ひ(勢揃  
車上 山田 義夫 ひ)○高田 力藏  
水雨 同 野馬追ひ(殺陣)  
疎林 同 同  
梅林 原田 武男 菖蒲の壺  
櫻の森同 △吉田 達磨  
櫻 同 立像 同  
漁港 宮田 武彦 波 同  
漁船 同 雪 曾根 徹  
漁村ノ道 同 厚木風景 同

丘 今竹 七郎  
雪 同  
石組のある庭 同

玄界島にて 同  
江崎 元

農家 小柳秀太郎  
窓邊靜物 同

△高木 勇次  
隆福寺町(北京)

△上野 春香  
瑠璃塔(北京)

同  
東印度靜物 同

同  
老僧像吉川 清

來迎圖同  
普賢像同

山羊 森松 治

家竝 同  
へちまの窓 同

竹崎重三郎  
雪の山 同

△木下 公男  
會爾風景 同

同  
荷馬△兼平 英示

アマリス 同  
同 同

蟹 同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

北越風景 同  
風景 同  
木立 賀茂 牛輔

墳墓街風景 同  
小野 忠弘

海邊の墓地 同  
同 同

勝負(矛術) 同  
○小穴 隆一

人物 富成 忠夫

風景 同  
平井風景 同

同  
石田 正典

同  
麗日 石黒平之助

同  
冬枯れの蓮池 同

同  
朝鮮の家 同

同  
花籠(一) 同

同  
花籠(二) 同

同  
城 同

同  
花籠(一) 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

殘雲 同  
露庭 同  
雪落ける 同

椿咲く 同  
同 同

朝顔 同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

リホデヤネイ  
口風景 同  
上永井 正

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同

同  
同 同



山水○倉田 三郎	壁 同	男像 同	松 桑重 清	澁川△小栗 哲郎	静物 同	加茂の娘	續雪 岡 鹿之助
庭前 同	ルーマニアの壺	男鹿 同	岩村の港	澁川早春	丁子咲く	琴塚 英一	僧 小杉 放庵
森 石川 武彦	など	張家口の家	草あぢさい	同	須藤千恵子	上着の女	アクロポリスを
葉牡丹△本莊 起	堀 千枝子	同	伊藤 敏博	九州風景	浅間の秋	矢田 桂一	望む 高田 力藏
格 同	室内静物	乳母車	窓外風景	△新沼 杏一	關四郎五郎	甲冑 山林 文子	花 小穴 隆一
牡丹さくら	藤澤 幸夫	ギターを弾く女	△中谷 泰	梅林△田川 勳次	風景 三原 繁	秋草 同	黒い手袋
同	大同石佛(西方)	同	婦人像同	小公園同	静物 永井 保一	貝殻とサボテン	森田 勝
淡雪 同	○伊藤慶之助	少女と馬	温泉 大久保一郎	風景△揚 佐三郎	草枯の丘	中村 巽	牡丹 今關 啓司
同	大同石佛(第二)	同	姉 同	朝顔 笠松 春彦	山田睦三郎	銀座七丁目竝木	窓外風景
麥秋○加山 四郎	十洞)	静物 山田 眞吉	奈良の秋	ざくろ同	菊 △大澤鉦一郎	通バー三井 永一	川端彌之助
薄の庭同	雲嵐の秋	枕太鼓同	○若山 爲三	風景 長岡 一敏	早春 松尾醇一郎	水田 三吉 亮久	薄 加山 四郎
農家 同	樹間蝶倉石 隆	窯場 大嶺 政寛	朝鮮舞踊	日比谷の春	都會風景	杉の葉と實	時化の後
少女 中村 萬平	山中早春	那覇風景	△和田 歳一	石井彌一郎	同	山田 昇次	横堀角次郎
○今關 啓司	展根)	同	琉球舞踊(二)	郷里の秋	紅型○前田藤四郎	特別室	印度婦人
白椿 同	春のひざし	路ノアル風景	同	○横堀角次郎	市場の歸り	琉球の魚賣り	水谷 清
雪のやみ間	日下昌三郎	同	卓上貝殻	洋蘭 同	同	前田藤四郎	姑娘 伊藤慶之助
岩崎又二郎	腕を組む男	壺屋風景	青木 達彌	窓外 同	琉球風景	静物 長谷川 潔	牡丹 田中善之助
桃花 同	△田中壽太郎	風景△鬼塚 金華	エリカ同	春 同	同	静物 中川 一政	ラクビー
静物 同	花 同	静物 同	アネモネ	沼 同	孔子廟(首里)	同	倉田 三郎
スラブヤ郊外	婦人像同	風景△鬼塚 金華	同	海岸 同	樹木 深澤 素一	ある男	岩の湯石井 鶴三
兄玉 彦三	塔 △二見 利節	宿驛 川島昇太郎	夏庭東 晴司	静物 福迫 徹郎	静物 大久保圭子	野崎新右衛門	楊子江と漢陽
祈り 同	森 同	雨 同	山(一)澁谷 修	静物 大久保圭子	吾子高原	裸婦(一)	小林徳三郎
K嬢 同	山 同	こち向きの人	髪をすく少女	○足立源一郎	會津駒ヶ嶽	同	栗田 雄
北京散景(鳥市)	葛家 藤野 龍	北野 萬平	野見山曉治	同	同	風景 同	白馬 若山 爲三
○水谷 清	菊 同	女 同	里の雪秋口 保波	甲斐路早春	同	室内 同	國盛 義篤
北京散景(飯店)	紫陽花同	座れる人	清登 加賀孝一郎	同	同	少女立像	日 東京府美術館
同	羽織 野村 千春	立て膝の人	花を見る人	同	同	同	東日ー今回は昨年急逝した中村七十氏の遺作十二點が注目される。昭和八年文展初出品の石膏着色「女の首」同九年の文展出品など、恐らく大作林立の會場で
支那童女	同	同	まつり同	同	同	同	は殆んど問題にされなかつたと思はれる小品だが、感覺的に中々すぐれた作品である。會員では林是の「ハンガリー青年の顔」が清新でよく、大嶺茂樹は同じモ
同	同	同	同	同	同	同	
北京散景(物質)	枯蓮 河野 重軌	同	彫刻のある教會	同	同	同	
同	畫室 角南 松生	同	小川 緑	同	同	同	
窓邊 田家 秀雄	天津の佛蘭西寺	同	體力検査の日	同	同	同	
燈下 木下 克己	○鳥海 青兒	同	松村 頼夫	同	同	同	

デルの裸像より「裸婦」がしつかりしてゐる。

〔撮入〕四五點〔入選〕二一點〔陳列總數〕六六點〔獎勵賞〕黃清亭、佐藤義重、丹羽康晴、澤村吉光、橋本次郎、高藤鎮夫

大橋康堂新作南畫展 十一日—十四日  
岡山・金剛莊

大貫松三、山下大五郎二人展 十四日—十六日 銀座・資生堂

石井柏亭新作繪畫展（洋） 十四日—十七日 麹町・日佛畫堂

東陽會日本畫展 十四日—十七日 日本橋・三越

讀賣—漫畫界の雄十二氏の水墨で岡本一平の「五月雨の頃」や麻生豊の「春近し」、矢野左行「水郷の五月」等各興味深きものであり、宮尾しげをの琉球廣東等の風俗はよくその郷土的特色を面白く描んで居り堤寒三の「富士」は場中の白眉といへるもの。

皇陶會作陶展 十四日—十八日 日本橋・三越

工藝鑲匠會作品展 十四日—十九日 上野・松坂屋

報知—權威ある工藝展として出發したもの。香取正彦の「花蝶文香爐」北原三佳の「鳳鈕飛雲蝶島香爐」は共に推賞すべきもの。河村靖山の「四方形獅子摘香爐」は華駿場中を歴して堆朱楊成の「蟹文彫漆恭筒」の豪華なると共に面白かつた。山崎覺太郎の「松竹梅詩繪香爐、香

合」飯塚環珥齋の「銘萬歲花籠」はいづれも逸品と賞するに足るものであつた。

京都染織刺繡藝術協會作品展 十四日—十九日 京都・大丸

青龍社大阪展（日） 十四日—十九日 大阪・三越

石橋義三郎油繪展 十五日—十八日 銀座・鳩居堂

鈴木信太郎油繪展 十五日—十九日 日本橋・高島屋

讀賣—風景と静物の近作約廿點で風景ではやはり奈良を描いたものがいゝし静物では紫陽花二點がいゝ味を出してゐる、一口にいへばいゝ境地に愉しく遊んで描いてゐるといつた感を受ける。一體にこの畫家は童心的なものと同時に非常な艶つぽさを持つてゐるので「波」や「雪」のやうなものを捉へるとどうもその持味が十分に出来ないのではないかと思ふ。

華岳、溪仙、夢 遺作展（日） 十五日—十九日 日本橋・高島屋

島あふひ個展（洋） 十五日—十九日 銀座・青樹社

丹阿彌岩吉日本畫展 十五日—二十三日 大阪・そごう

鹿子木孟郎遺作展（洋） 十六日—十九日 岡山・金剛莊 新日本美術會主催

國外社第三回展（日） 十六日—二十五日 大阪市立美術館

高澤圭一第三回戰爭畫展（スケッチ） 十七日—十九日 銀座・菊屋

瀧川太朗近作油繪展 十七日—二十日

銀座・資生堂

赤塚自得遺作展（工） 十八日—十九日 芝・東京美術俱樂部 稻花會主催

筑前美術會第九回展（綜合） 十八日—二十二日 銀座・松坂屋

銃後翼賛第三十一回東海美術展 十八日—二十六日 名古屋・松坂屋

〔授賞〕（日本畫）五八點（洋畫）三五點（彫塑）九點

大東南京院第一回展（日） 十九日—五月三日 東京府美術館

大政翼賛會及中日文化協會移授都—洋畫家や南畫家以外の日本畫家が、審査員、客員、招待出品を以て遇せられ、一般出品にも南畫風でない日本畫が少なくない。南宗の意味を舊來の概念に拘泥しない所にこの南宗展の新機軸があるといへば云へる。

しかし南宗を標榜する以上、もう少し南宗の本質を闡明し、それが現代畫壇に於ける意義を眼のあたり示して欲しかつた。これで見ると南宗畫の現代的適應は南宗の本義から離れる所にあるかのやうに誤解され易い。極言すればここには南宗の技法が生かされて居るかどうか疑問だ。用筆用墨についての的確な動と處理とは南畫の生命である。古來の南畫家はそのため苦しめ、さうして南宗といふ大道が開かれて來て居る。それは立派な、従つて現代を指導し得る東洋の造型だ。それを現代の南畫家は何故素直に反芻しないのだらう。南宗的傳統を恣意に

歪曲することを傳統の脱却、現代的飛躍と考へて居るのだらうか。場中諸作の用筆用墨の脆弱さよ。その幾作が東洋畫獨得の餘白の強靱さを教へて呉れるだらう。

特に氣になるのは散漫に自然の一部を扱つた平遠とも云ひかねる構圖の多いことであるがこれはまた構想力の貧困にも根ざして居よう。現代南畫が南畫的類型から脱れる一手段として自然の寫生に向ふことは不賛成でない。併し畫心のない寫生は結局作品を作り得ない。南宗的技法についての論議は二の次として南宗的觀照の明示されない南宗展を淋しく思はざるを得ない。

大變惡口めいたが、兎に角全體を通じて嫌味はなく、力作の揃つて居ることは第二回を期待させる。翠雲の「薰風」はさすがに南宗の旗幟鮮明、しかも他を壓倒して居る。翠雲近來の佳作でもある。知道人、松南、硯山は審査員中注目されるが其他では樵谷の「激瀉」は構想技術兼備の秀逸、耕南の「喧日」夢山人「春」玉女「陶家遺愛」それ／＼に爽やかである。

招待出品では不染哲二「秋」がカチツとしたものがある。洋畫家の諸作は結局餘技以上に出て居ないので優遇され過ぎて居る。

民國出品畫は粉本模倣の域を出ないが、黃孝紆の「擬白毫居士山水」などが日本南畫中の皮相な新傾向を擲擲するかのやうにも見える。（大口理夫）



〔搬入〕五二〇點、中華民國一〇一五點、朝鮮一〇〇點〔入選〕一一三點、中華民國一三點、朝鮮五點、滿洲國三點〔陳列數〕一八八點、中華民國一八點、滿洲國四點〔獎勵賞〕青木虹興、喜井黃羊、仙田菱畝、佐々木興堂、濱崎左美子、田中若生、坂口龍太郎、南耕州、清水石溪、戸田浩堂、宮原柳僊、高橋暉山、九鬼茶香、酒井拙庵

陳列目錄  
〔招待出品〕〔實行委員〕

蓮華ヶ岡 荒神ヶ丘參道

獨境軟光 下川 苔地 水聲×降旗 箕岳

雨舞×古淵 亞典 野分×横内 大明 西行庵月居 偉光 接戰×高島 祥光

春暖 青木 虹興 主潮×矢野 鐵山 閑林 喜井 黃羊 高原暮色

濤 ○萩田 東嶺 ○河野 秋郎 崖雪點紅 大日新晴

仙田 菱畝 ×奧本 高子 清潭 佐々木興堂 蒼鷺×衛藤 晴村

春暖×松尾 徑成 洛北初夏 ×栗田 槐山 落(二題ノ一)

演崎左美子 寧樂 清水 石溪 同(二題ノ二)

春晴 谷 筑水 △中澤 弘光 月待山中 蒼生 山靜×柚木 笠生

信貴山春色 ×河口 樂土 坂口龍太郎 同(秋)同

喧日 南 耕州 梅雨霽村上 大魯 春曉 渡邊 由來 鴨越×河野 通勢

春 松本 郭南 斜陽 戸田 浩堂

春剩雪宮原 柳僊 適意地

○小川 千穂 昆盛峰

△石井 柏亭 崩ゆる野

雨收雲歸 □田中咄哉州

○水田 竹園 薰風○小室 翠雲

放馬○矢野知道人 枯木蕭條

△藤田 嗣治 淋池清趣

同 初夏○白倉 嘉入 歲旦 湯田眞砂緒

筍 △齋藤 與里 層層雨霽

□高村 眞夫 寧樂回春

問宮 涉冬 峰 彩霞

春曉薰風 ×村岡 應東 斜陽(阿蘇)

×碓 南嶺 古城 中西 清穆

春峽×峰村 北山 泰山登臨

河村 李軒 兔×田岡 春溪

山椒魚 ○水越 松南 池塘童心圖

同 九段坂上 △有島 生馬

ガルドオネ湖畔 詩人ダスンチヨ 別墅の一隅

同 春日神社 □池田 遙邨

梅林 藤原 功牛 昇仙峽―樵路

昇仙峽―夢の松 島 昇仙峽―夢の松

同 昇仙峽―漁磯 啼一聲

木下 青屋 爽氣 高野 櫻亭

雨霽 木内 一焚 山溜×末藤 米圃

勇姿×高須 芝山 野燒×湯川 三舟

淺春 住 千代敷 湖畔 立松 玉泉

鳥骨鶏 ×村上 蘭田 酣春×田岡 春徑

大聖岡曼德迦威 王 平野 長彦 松徑細泉

○水田 硯山 村道○大木 豐平

高雄飄楓 ×高須 白雲 南國和氣

高橋 暉山 秋晴 濱 品雲

南京所見 ×直原 放青 月瀨梅林

鈴木 有哉 鏡泊湖 ×高須 芝山

雨後 牧田多與茂 軍鶏圖

□人見 少華 北京安定門(北京) ○千地 秀弘

秋香 渡邊 黃華 待春×小山 居泉

水郷還日 ○福田 浩湖 永日○赤松 雲嶺

はまのふ海燕 九鬼 茶香 洛北の春

築地 雲溪 親母行路の子を 憶ふ歌

大亦 觀風 風溪秋雨 水田 黃牛

公園惜春 ×横山 春溪 初夏溪流

大西 太白 清香 土橋 泉湛

神境 小林 醒雲 大和路武田 雨水

潮 ×池田 十良 正月をおくる

高千穂映 早春の丘 ×小柴 肇映

里見米山人 秋晨×福田 青藤 春郊 下村 紫光

春郊 小田 碧洋 深潭 小田 碧洋

春宵 白井 石泉 春寒 福與 悅夫

夕陽 於保 博 新緑清畫 暮韻(朝鮮)

小林 雲嶺 ○李 象範 秋郊 富山 行雲

五合庵丸山 翠城 匡廬山竹内 友石

春耕風景 森崎 伯雲 雨後 沈 青 軒

駁者之圖 文 鏡 德 泰園 許 林

初冬 河野 巢雲 晚秋 李 建 英

雲行×峰 富樫 宇放 長部村越川 竹松

曉雲×湯川 三舟 宿譯雪景 中村 達吾

晚雪 矢野 青霄 淵 愛知 耕三

鳥海 山享 飛泉噴々

初夏 栗田 江雲 奇峰鐘釣 山口 越道

秋水 藤田 景峰 山麓 岩永 竹涯

早春 高橋 竹堂 故里所見 岡本 淡雅

激湍×草刈 樵谷 霜朝 中 京山

細雨 谷口 東亞 春光 西田 逸堂

湖風 渡邊 鴻業 湖畔薄暮 疋田 竹夢

石切山 五十嵐勝雲 麓 野本 文雄

東風 久保田王堂 懷古 ×栗飯原大醒子

秀整望樓 德永 玉樹 解雪 藤井 霞郷

徐福×中谷 紀山 濤聲×村上 景雲

霜曉 芳野 智海 和同 新井 滋雲

小行李高橋立州人 松 松田 土笑

山家の春 須藤 幽邨 陶家遺愛 矢鳥 玉女

飛泉噴々

樋口七歩人 春 廣田夢山人

鷄 ×大山 魯牛 池夢 酒井 拙庵

迎夏 山口 良樹 薰風 引田 逸牛

南 □布施信太郎 元元唱歌 ○小川 千穂

靜晨 柳 春堤 東且×小柴 肇映

秋 □不染 鐵 山水 多田 院大

殘雪 許 南 農 秋興 加藤 松溪

湖畔 川端 皐白 寺門 石尾 富丘

早春 山本 雪堂 雨餘 渡部 雲峰

春郊 高橋 可羊 飛鳳雨餘 花井 清巖

煙雨 長野 大原 湖畔 荒居 翠湖

行雲流水 本田 景風 閑林 宮崎 正博

上州箱島 野牛 神杉 鄉山雄姿 小堀 聽濤

幽谷 越智 東豫 溪澗 高橋 春農

溪岸 川村 月堂 春信 建部 官憲

三宅克己近作水彩畫展 二十日—二十四日 銀座・青樹社  
 三果會第二回油繪展 二十日—二十四日 銀座・鳩居堂  
 第一回試作會日本畫展 二十一日—二十三日 銀座・資生堂  
 井上長三郎ローマ・巴里・スエズ作品展(洋) 二十一日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊  
 横井禮士油繪個展 二十一日—二十五日 名古屋・丸善  
 春季二科展(洋・彫) 二十二日—二十六日 日本橋・高島屋  
 燦本社第十七回展(日) 二十二日—二十六日 銀座・菊屋  
 白鷗會日本畫展 二十二日—二十六日 日本橋・高島屋  
 軍用機獻納大阪展(日) 二十二日—二十八日 大阪・三越  
 東京開催の同展に徳田隣齋猿蓑春色を追加した。  
 獨立美術展(洋) 二十二日—三十日 大阪市立美術館  
 第二十一回岡崎美術展(洋畫部) 二十三日—二十七日(日本畫部) 二十九日—五月三日 岡崎市立圖書館  
 高間惣七油繪近作展 二十四日—二十七日 銀座・賞生堂  
 岩船修三滯歐作品展(洋) 二十五日—二十七日 數寄屋橋・日動畫廊  
 造型版畫協會第六回展 二十五日—五月四日 東京府美術館

第一美術協會第十四同展(洋)二十五

日一五月七日 東京府美術館

讀賣一會全體から受けるものは低調であつて單なる感興で描かれた小品が難然と並べられてゐるに過ぎぬ、今年になつて上野でもうかなり澤山の展覽會が開かれてゐるが、かうした決戦下の時勢にあつて獨り美術界のみは舊態依然として只花を、女を、風景を描いてゐる。選ばれた極く少數の畫家を除いては何等この時局にその美術文化の職域を認識して自覺せるものなし。果してこれといふものであらうか。扱て會場からとりたて、みると長谷川富三郎の水道山は單純化された様式と共に色感も重厚よく野村陸雄の婦人坐像は無難の作。その外に石川重信の南洋方面の從軍スケッチ數點あり興味深し。

〔陳列數〕三三六點(無鑑査推薦)田口堅太郎(佳作)門脇俊一、中桐光子、中川芳雄、土肥博隆、門馬小三郎  
岩佐新「采根譚」主題畫展(日)二十六日一二十八日 銀座・鳩居堂  
太齋春夫漆繪個展 二十六日一三十日 銀座・青樹社  
岡美會文人畫第一同展 二十七日一二十九日 岡山・金剛莊  
二見利節油繪個展 二十七日一三十日 大阪・朝日ビル  
クロツキ研究所々員第十二回作品展 二十八日一三十日 銀座・紀伊國屋  
井上陵華個展 二十八日一三十日 廣

島・福屋

福島省三個展(日)二十八日一三十日

銀座・菊屋

硯南嶺日本畫展 二十八日一五月三日 大阪・松坂屋

青龍社第十回展(日)二十八日一五月三日 名古屋・十一屋

九耀會第一回展(日)二十八日一五月三日 京都・大丸

木俣高峰繪畫展(日)二十八日一五月三日 大阪・三越

中堂長陽新作日本畫展 二十八日一五月三日 大阪・大丸

澤田宗山百鑒會(工・陶)二十八日一五月三日 上野・松坂屋

水彩聯盟會員新裝水繪展 二十八日一五月三日 日本橋・高島屋

新古典美術協會展(洋、版、彫、工)二十八日一五月六日 東京府美術館

讀賣一油彩では小岩井長秋の微風が洒落れた作風であり松田侯三の大川、日本橋の二點は巾のある線と澁い色感にて對象の單純化と共に内に持つものがよく溢れていゝ、同じく松田の版畫女人奉請圖は二曲半双の大作を墨の諧調で巧に纏め成果をあげてゐる。工藝にはとりたて、見るべきものの無きもブルデル作のベートウベンの塑像は一見の價値あり。

〔搬入〕一〇一三點(入選)三〇二點  
〔授賞〕(洋畫)猪瀬正  
亞草社農山漁村風物畫展(洋)二十九日一五月三日 銀座・三越

五月

フレスコ壁畫展示會 一日一三日 數寄屋橋・日動畫廊

テツサン複製展 一日一四日 銀座・菊屋

東日一さきにブリウゲル研究展を主催した春鳥會の三回目の企畫で、今回は田近憲三、久保貞次郎兩氏の蒐集にかゝるダ・ヴィンチを中心とした寫眞版複製の素描及び原色版百餘點を展示したもの、ダ・ヴィンチに次いでミケルアンヂエロが多くボテイチエリ、テイチアン、ラファエロその他の珍らしい素描も加へられてゐる、一見の價値ある展観。

現代名家染織美術展 一日一九日 日本橋・高島屋

第二十八回廣島縣美術展(日、洋、工)一日一十日 廣島・産業獎勵館

〔審査員〕(日本畫)原白山外十五名(洋畫)大西秀吉外十五名(工藝)山根三三郎外三名

〔搬入〕二三六點(入選)日本畫三一一點(洋畫)七六點(工藝)二三點

第七回京都市美術展(綜合)一日一二十日 大禮記念京都市美術館

第七回を迎へた京都市展は四月三十日を招待日として例年の如く一月から開催されたが、本年度の搬入數が昨年度より増加を見せたことは注目される。なほ京都美術館陳列品として、川端彌之助「那覇」、松田尚之「女座像」二點が買上となつた。審査委員名及び鑑査成績は次の通りである。

〔審査委員〕(日本畫)西山翠嶂、上村松園、福田平八郎、水田竹圃、榎原紫峰、堂本印象、金島桂華、中村大三郎、登内微笑、山口華楊、池田遙村、松元道夫、勝田哲、秋野不矩(菊池契月、川村曼舟缺席)(洋畫)太田喜二郎、黒田重太郎、須田國太郎、田中善之助、大橋孝吉(彫塑)松田尚之、大西三四郎、矢野利三(工藝)清水六兵衛、山鹿清華、岸本景春、楠部彌式、清水正太郎、堂本漆鮮、小合友之助、番浦省吾、伊東翠壺

日本畫 搬入數 入選數 陳列數  
洋畫 四九四 二五〇 二八三  
彫塑 三九 二八 三三  
工藝 二五七 一〇五 一二五  
計 一〇一五 五一七 六〇六

右の内審査委員の出品は日本畫九、洋畫八、彫塑四、工藝九、合計三〇點、參與委員の出品は日本畫三、工藝六、合計九點、委員の出品は日本畫一九、洋畫二五、彫塑一、工藝五、合計五〇點。

〔授賞〕(日本畫)「潮音」川本參江、

「故郷の山」桑野博利、「春光」後藤貞之助、「縁」澤宏毅、「印度少女」樋口富麻呂、「淺春」平間且陵(洋畫)「簾」西田靜子、「蓮」西田秀雄、「新緑ノ八瀬路」戸島宇雄、「道」高木四郎、「古城」井澤元一、「堂」奥田仁、「山麓の椿」福井勇

「石南花」北原元七、「奈良の秋」島津冬

二九

樹(彫塑)「建國」蘆田岳堂、「座像」清水禮四郎(工藝)總力染屏風「稻垣稔次郎」赤漆彫華紋手宮「黒田辰秋」鐵製八咫鳥置物「黒井光珉」大刀豆之圖手箱

松本祥輝、「土に遊ぶ染屏風」佐野多景夫、「彩色百日草花生」新聞邦太郎、「繪刷毛目花瓶」森野嘉光

第三百十六回日本美術協會展(書、篆刻)

第三十回日本美術協會展(書、篆刻)

第四回研究會展(日) 四日—七日 銀座・紀伊國屋

現代名家日本畫新作展 五日—八日 銀座・鳩居堂

岡田華郷新作繪畫展(日) 五日—九日 日本橋・高島屋

第五回東丘社展(日) 五日—十日 大阪・大丸

この展覧は大阪展終了後、ひきつづき神戸、京都、名古屋等において開催され九月には東京展を開いた。

讀賣—堂本印象畫塾が率先して試みた共同制作「大東亞戰爭畫展」の成果は別として、その壯舉は賛同を惜しまないもの、情報局推薦の「轍の響」「歡迎」は前者は、わが砲兵隊の泥濘進軍の苦闘を描いた大作、後者は征途に着く看護婦を送る譯頭光景の描破で、藝術價值點からも、好感を持てる佳作、他に「凍雪」の北邊警戒小隊を描いたものも良い。

第二回青句會展(工) 五日—十日 大阪・大丸

赤堀信平彫刻展 五日—十日 大阪・

三越

清原重以知油繪展 五日—十日 大阪・阪急

第一回群馬美術協會東京展(日・洋) 六日—十日 銀座・三越

長原坦個展(洋) 六日—九日 銀座・菊屋

第三十五回讀畫會展(日) 六日—十八日 東京府美術館

東朝—地紙をよく生かし「雨後」の雰圍氣のうちに靜寂の境地を傳へた荒木十畝をはじめとして氣をそろへての態度はよし。

永田春水「華香鳥語」龜割隆志「櫻の林」田口黃葵「暈日」は、それ／＼追究は中途半端であるが趣味なきはよし。朝井親波が金屏風に「白鷺七羽」を配した趣向は色彩の映りよく裝飾的に、まづ效を収めてはるが藝輕し。木本大果の「菖蒲」は色彩の整理不足し、森白甫の苦心作「松嶺」は一段の豪壯さが欲しい。その他ねらひ倒れに終つた西澤信畝の「迫る火」竹原明風「獅子」などあるが、がいして十畝を除く現在の花鳥畫家が神を求める中途にして裝飾的效果をのみねらふは面白くない。

【第二賞】「鶴」新山草羊、「鶴」外山徳松【第三賞】「實験室」須田青蒲、「鷺」松井黎光、「鉢の梅」根本正(佳作)「植込」田中廣、「生垣」今井壽々子「暈日」吉田眞沙人、「椿」豊川仁志

精藝社日本畫展 七日—十日 銀座・

資生堂

第三回唐展會工藝美術展 七日—十四日 銀座・松屋

第七回東北美術展 七日—十七日 仙臺・齊藤報恩會館

第一回東邦畫研究會展(日) 八日—十日 銀座・交詢社

野田九浦塾の中堅作家八名によつて結成された研究會の第一回作品發表展。

第六回一水會春季小品展(洋) 九日—十三日 銀座・青樹社

東日—今度の小品展は前年より活氣がある。安井曾太郎の風景「早春」は前景の單純化に疑問があるが若々しいところがよく、木下孝則の「休息」もまづ美しい。山下新太郎も明治調の婦女圖は面白くないが「字治春齋」は好小品。中堅では田崎廣助の「海邊松林」を採る。

油繪四人展(高橋惟一、加藤友頭夫、布施梯次郎、池邊一郎) 九日—十三日 銀座・銀座畫廊

第二十九回日本水彩展 九日—二十一日 東京府美術館

東日—石井柏亭の還曆記念特陳は双臺社でも行はれたが、この會では同氏の代表作十點の水彩下圖に、同じく還曆を迎へた平井武雄のビルマ、インド各地の風景を併せ、それに加へて故丸山晩霞の代表作が展示されてゐる。晩霞の遺作には晩年にみられた作りものがなく、御物「犀川」はじめ、李王家御貸下の「石楠花」「千曲川」その他の風景など、故人の畫

風を代表する佳作がみられる。中堅會員の作では不破章、齋藤求、中西利雄などよく、會友では石川菊壽の「森」を注目する。

【搬入】一二五六點(入選)一六八點

【新會員】石川菊壽、山崎政太郎、石川新一、草野米子、市原義夫(新會友)古川又次郎、牛尾弘、吉松眞司、酒泉淳、渡邊三郎、加藤弘之、板倉國臣(岡田賞)

石川菊壽(會友獎勵賞) 石川新一(以下略)

丸山晩霞遺作特別陳列目錄

所藏者 所藏者

溪流(素描) 山の聲小島 鳥水

山路(同) 安田 義彦 展けたる谷

同 同 水仙 長 谷 寺

稱津村 鬼平卯之吉 英國の春

花菖蒲の村 英國海峽 金剛山萬物相

同 同 印度風景 アンバーパレー

花野の朝 同 同 ス(印度)

同 同 樺太風景 利尻富士

野末の流れ 同 同 山口 公作

湖畔の霜葉 水野 以文 信濃高原風景

千曲川眞野紀太郎 犀川の秋 石楠花

御物貸下品 李 王家

山口敏男遺作特別陳列目錄

上越の家 暮れる雪 竹の子

早春

第二回大阪市展(綜合) 九日—二十四

日 大阪市立美術館

本回の審査委員並びにその鑑査成績は左の通りであつた。

〔審査員〕(日本畫) 幸松春浦、赤松雲嶺、北野恒富、菅橋彦、中村貞以、矢野鐵山(洋畫) 赤松麟作、國枝金三、小磯良平、齋藤與里、林重義、濱田葆光(彫塑) 上田曉、佐伯量良、保田龍門(工藝) 小林美奈、阪口宗雲齋、杉田不堂、中島豐次、安原祥窓(搬入) 日本畫二三七點、洋畫八三六點、彫塑一四一點、工藝三一〇點(入選) 日本畫七七點、洋畫一〇五點、彫塑四一點、工藝五二點(陳列數) 日本畫八一點、洋畫一一五點、彫塑四五點、工藝六一點(無鑑査推舉) (日本畫) 融紅鸞、四夷星の(彫塑) 菅原安男(工藝) 會田裕官(市長賞第一席) (日本畫) 吉岡美枝子、大野博(洋畫) 小島結治、梅澤靜雄(彫塑) 大西金次郎、寺村精十郎(工藝) 會田裕宜、鹽田宏(市長賞第二席) (日本畫) 白屋古代樹、小川雨紅、坂口龍太郎(洋畫) 河井達海、山田千秋、榊井一夫(彫塑) 野村正、美濃村松雲、仲眞弘(工藝) 橋田裕年、川端三義、松澤壽水(大阪毎日新聞社賞) (日本畫) 仲本玄同(洋畫) 石田勝重(彫塑) 八島遙雲(工藝) 中島義夫(朝日新聞社賞) (日本畫) 船場世紀(洋畫) 森國背彦(彫塑) 中川忠雄(工藝) 高田傳一郎

京府美術館

小絲源太郎近作油繪展 十一日—十四

美術展覽會(五月)

日 銀座・資生堂

讀賣—近作十二點小品ではあるが、例のねばりつばい色調と筆緻で破綻なく纏めてゐる。風景はや、もすると造型的處理の行きすぎがあり畫面が重く感ぜられるが、鏡畫室にて等の人體はよく、風景でも春雪や信濃の春等の極く小さなものには作者の感興が素直に表れてゐる。

日本南宗畫會春季同人展 十二日 京都美術會館

第四回五明會展(日、彫、工) 十二日—十四日 銀座・紀伊國屋

煌土社獻納畫展(日) 十二日—十四日 銀座・菊屋

東朝—野田九浦門四十數氏が北滿を護る勇士慰問のための獻畫、吉岡堅二「白梅」藤田隆治「金魚窓」松島義松「垣」をはじめ大部分が眞摯な態度をもつてまづ鑑査には堪へ得る作を示したことは多とするが畫材に注意の足りぬもの數點あるは遺憾。

南薰造水彩畫新作展 十二日—十六日 日本橋・高島屋

東朝—ともすれば乾燥しがちの昨今の油彩より色彩に生氣があり、殊に「マラツカ」「ペナンの港」など南方のものに美しさはあるが、この作家として上々のものではない。

第二回現代陶藝美術展 十二日—十六日 日本橋・高島屋

東朝—河井寛次郎は辰砂、鉛釉ものを主にして奔放な文様を配してゐるは依然

たるものであるが、今回の出来では辰砂の肌合に重厚さなくかへつて花紋扁壺の如きを取る。

これに反して濱田庄司は掛軸と文様との調和あり、その他清水六兵衛の虹彩一輪生、富本憲吉の染付が目につく。

長谷川規矩進油繪個展 十二日—十七日 大阪・大丸

青山義雄滯歐作品展(洋) 十二日—十七日 神戸・大丸

石川欽一郎新作水彩畫展 十三日—十五日 數寄屋橋・日動畫廊

新構造社展(洋、彫) 十三日—十七日 福岡・玉屋

狩野晃行第四回個展(日) 十三日—十七日 日本橋・白木屋

東朝—第四回個展に於てまづ取上げるのであるが、この種の多くの作家が筆先のみをもつての作畫態度は面白くない。塗るを主とした「鵝」も肉も感ぜられず、丕形の佛畫は線描の修練が不足す、神を求めて一段の研鑽を要す、贊助出品では東條光高「獨居」の機智を買ふ。

第二回直土畫影塑展 十三日—二十一日 東京府美術館

東朝—建昌大夢の遺作たる「天使」「生氣」を通しての故人の豪毅な意欲と「感に打たれた女」に示した、つきつめた精進は、それぞれ精神を求めてのたのしい姿がある。

山根八春が「眠に落ちんとする時」を以て、木下繁が「習作」において、師の

道を探らんとしてゐるが、讀者山根はやや近づかんとするの傾向にあるが、後者木下に至つては形を追ふのみである。師が逝くとも地道につきすゝむことを望む上から毛利敦武、大須賀力あたりの行き方に好感を持つ。

〔搬入〕二一點(入選) 九點(陳列數) 六六點(新會友) 石場清四郎、福田弘之、篠田弘、服部不二之、クルト・ドレーベス(獎勵賞) 建昌覺造、今村輝久晃、田淵勝章、クルト・ドレーベス

東京會日本畫新作展 十四日—十六日 芝・東京美術會館

橋田庫次油繪個展 十五日—十八日 銀座・資生堂

津田劉生と村山鶴多展(洋) 十五日—十九日 銀座・青樹社

第一回守眞會小品展(日) 十五日—二十二日 上野・松坂屋

堅山南風門下十四人による發表展 滿・華・泰・佛印巡同美術東京内示會

十六日 小石川・後樂園 皇國藝術聯盟主催

松平齋光第二回近作油繪展 十六日—十八日 數寄屋橋・日動畫廊

岡美會第三回洋畫展 十六日—十八日 岡山・金剛莊

山形駒太郎染色工藝品展 十六日—二十日 上野・松坂屋

第五回白閃社展(日) 十七日—二十四日 東京府美術館

今回は公募展でなく、同人のみの展覧



であつた。

石井柏亭回顧展（洋）十七日—二十四日  
大阪・朝日會館

汎美協會第八回展（日、洋）十七日—二十日  
東京府美術館

長谷川利行遺作水墨畫展 十八日—十九日  
銀座・紀伊國屋

第四回同線尚會展（日）十八日—二十日  
芝・東京美術會館

彦門下新作展（日）十八日—二十日  
芝・東京美術會館

故澤田劉生、森田恒友、小出楯重日本畫鑑賞展 十八日—二十三日  
大阪・天賞堂

第一回青鸞社日本畫展 十九日—二十一日  
銀座・養生堂

東日—玉堂門の三人春潮、玲方、大樸子による會の第一回展。鳥春潮のものでは紙本堅の「きんとき・ささげ」が生新

でよく、中村玲方は鯉を中心に魚群を描いた「寄り」に努力を示してをり、村雲大樸子のものでは「青柿」が誠實な寫生

玉堂の「早乙女」は紙本小品ながら中々氣のきいたもの。

第九回壽山雪哉作畫展（日）十九日—二十一日  
銀座・鳩居堂

加越能美術協會展（洋）十九日—二十四日  
大阪・大丸

秋草彌三郎文樂人形淨瑠璃繪展 十九日—二十四日  
大阪・三越

赤松麟作近作洋畫展 十九日—二十四日  
大阪・松坂屋

日本美術協會第百十七回美術展（彫、工）十九日—二十八日  
上野・同會

阿部六陽山水畫展（日）二十日—二十四日  
日本橋・三越

東朝—畫を求めて塗りつぶし、觀者を惹かためたに、ことさらな構圖をつくらんとする作家の多い中に自然の觀照に没入、素直に受入れての作畫態度はよし、

「早春」「遅日」「丘の春」「水光」など同

似同形のものであるが、透徹せる畫境には一點の濁りもなく、しかも「殘雪」には氣魄をさへ感受出来る、もちろん描線、省略等今後の精進にまつもの多いが、

新人出現を喜ぶ。

現代名家紙本新作畫展 二十日—二十四日  
日本橋・高島屋

新制作派協會春季展（洋、彫）二十日—二十四日  
數寄屋橋・日動畫廊

東日—この春季展は彫刻の方に二、三見るべきものがある。本郷新の牛頭の木彫は原始藝術のやうに素朴な點がよく、

佐藤忠良の首、早川魏一郎の裸婦なども手堅い。繪畫は全體に低調で、小磯良平は泰西名畫の複製のごとく感銘なく、猪熊敏一郎、佐藤敬の仕事には重厚さが足りない。凡調ながらまづといへるの

は三岸節子と坂井範一のふたり。

新興岐阜美術院第二回展 二十日—二十四日  
岐阜・丸物

〔審査員〕川崎小虎、水田竹園、小鹽美州、小島紫光、杉山祥司〔搬入〕一八六點〔入選〕三四點〔入賞者〕五名〔院友〕

二名

現代名家各派綜合油繪展 二十日—三十日  
名古屋・後藤版畫店

第八回日本基督教美術家協會展 二十日—三十日  
神田・東京基督教青年會

第五回新美術人協會展（日）二十日—三十一日  
東京府美術館

東朝—吉岡堅二、福田豐四郎が大東亞戰爭記錄畫作製のため南方に派遣されたため留守部隊のみでは淋しいのは致し方ないとしても、これら多くの作家が地塗を全畫面に施し、泥繪風の技法を以て對象の持つ感情を出さんと勉めてゐるが、

この方法完成には道は遠い。岩崎鐸の「六月の畫室」に示された動物などは單なる張子細工に終り、その他人物など堅くなるか平板に終つてゐるものが多い。藤田隆治の「薰風」にしても對象の感情とこの技法との合致に一段の修練を要す。その點柴田安子の「子供」は苦心をしてゐる。その他三澤孝松の「市場」岡本實の「工場」が目につき、堀文子の「浴場」は取材の點のみを買ふ。

〔陳列數〕四〇點

第六回日本壁畫會展 二十一日—二十五日  
銀座・青樹社

楠瀬日年茶杓展 二十一日—二十七日  
日本橋・三越

津田青楓會展（日）二十二日—二十四日  
大阪・高島屋

第二回正統木彫家協會展 二十三日—三十一日  
東京府美術館

都—こ、は技術の洗練があり様式の完成があるだけに因襲の絆を容易に斷ち切れない惱みがあるやうに思はれる。傳統的な技を見せた仕事には、澤田晴廣の「阿彌陀如來」、故西村雅之の能面の遺作があり、野心的な作としては三木宗策の「大葉子」その他が數へられるが、總じて傳統の支柱を放れた仕事には確信が無く、

卯を割らずにオムレツを作らうとしてのやうなもどかしさが目につく。（柳亮）

〔陳列數〕六一點〔特別陳列〕西村雅之遺作十三點、外に能面三十面

第四回日本醫家美術協會展 二十四日—二十八日  
東京府美術館

小西謙三油繪展 二十四日—二十八日  
大阪・天賞堂畫廊

大毎—昨年の個展開催以後の制作にかかるもの廿二點、總じて前回の個展に比して明るさが加り、樂な氣持でたのしめる作品が多いが、注目すべきものはやはり「冬の溪谷」「奈良郊外」「淺春」「薄暮」等氏の本領と思はれる一連の力作で、こ

こでは前回の個展で示した氏の獨自な方向—ある嚴しさを交へたユニークな情趣をもつて對象に向ひ立つ氏の道がさらに深く追求されてゐる。（後略）

大日本海洋美術第六回展（日、洋）二十四日—六月七日  
東京府美術館

東朝—海洋思想の普及と國民精神作興のために、この種展覧は現下誠に意義深いだけに全畫壇舉つて出品への熱意を持つべきであるが目下をこまで到達せず受

賞者の固定を來たしてゐる點は遺憾である。もちろん油彩畫の安田豊、鯉網揚げ」

日本畫の笠松紫浪「漁」村松乙彦「南島の港」におけるその進境振も認められ、

年ごとに内容の上昇を來たしてゐるが、この程度に満足すべきでない。まづ困難な海戰畫であるが、それには軍艦、飛行機、

水柱、その他海戰における必要な對象をよく研究し寫實的に描寫するだけの力を養ふべきである。戰時下防禦上のことも

あり、これには多くの苦心もあらうが、許される範圍内だけでも精進の程度如何では優品が生れるはずである。現に三國

久、奥瀬英三、三上知治、荒井陸男、高橋賢一郎、八銀四郎、松添健あたりのこの種作品を見ても、過去の作品に比し水準を高めてゐる。また漁撈に關しての作品も、さきの安田、笠松をはじめ濱田邦男「豊漁」等寫實に徹する事からの行き方が次への大をなす所以である。その他

熊野禮夫の工作室における描寫、松山廣幸「造船場」山本日子士良「南海」白石隆一「雪の漁港」等將來を期待し得るもの多く、今後南方その他の海の特異性への畫人の研鑽につれ、この會の内容が充實するは疑ひなきところである。

〔陳列數〕一六七點〔授賞〕〔海軍大臣賞〕笠松紫浪、安田豊〔海軍協會賞〕村松乙彦、濱田邦男〔朝日新聞賞〕松山廣幸、熊野禮夫

林鶴雄新作油繪展 二十六日―二十九日 數寄屋橋・日動畫廊

美術展覽會（五・六月）

赤城泰舒水彩近作展 二十六日―二十九日 銀座・資生堂

小室翠雲個展（日）二十六日―三十日 日本橋・三越

讀賣―近作の花鳥畫約十點、鳥飛來、春睡醒や競妍は畫面に愉しき詩情漂ひその堅實な手法は觀る者を打たずにおかない。孔雀は小幡の方の初夏爽に描かれてゐる方がよく、兎角近頃の南畫はやゝもすると近世日本畫の總てが陥つてゐる様式的處理の影響を受けてゐる中に毅然として翠雲の存在は大きい。

玉村方久斗個展（日）二十六日―三十一日 上野・松坂屋

現代名匠竹籃展 二十六日―三十一日 京都・大丸

池田治三郎新作洋畫展 二十六日―三十一日 京都・大丸

第一回兵庫縣新美術聯盟會員作品展（綜合）二十六日―三十一日 神戸・大丸

舊兵庫縣美術協會と舊兵庫縣美術家聯盟の合同後の第一回展覽會で、大政翼賛會兵庫縣支部及び兵庫縣新美術聯盟共同主催、翼賛會神戸市支部及び神戸市文化課の後援にて開催され、今回は會員及び無鑑査の出品のみであつた。

〔陳列數〕繪畫一七二點、彫刻一四點

大東南宗院京都展（日）二十六日―六月一日 大禮記念京都美術館

北上聖牛個展（日）二十七日―三十一日 銀座・三越

美術文化第三回展（綜合）二十七日―

六月四日 東京府美術館

東日―福澤一郎の再起でこの三回展は一應活氣を取戻した觀があるが、その洋上の戰闘と基地に還る海鷲を扱つた二大

作は福澤の本領を發揮した仕事といひ難く、他の幾つかの課題作品も散漫に過ぎる。努力の窺へるのは吉井忠と濱松小源太で、前者の「山村」、後者の「月明」はともにブリウゲル風ではあるが惡くない。その他寺田政明の小品、森堯之のハルビン風景、鷹山宇一の水彩小品などもまづ佳作といへよう。米倉壽仁の大

作「春の祭」は恐るべき卑俗化。

〔搬入〕一八八點〔入選〕一四〇點

〔美術文化賞〕（日本畫）高津善本（洋畫）加藤太郎、内藤健一、谷口克己、金河健（新同人）藤沼朝保、渡邊武、金子英雄

第八回青樹社展 三十日―三十一日 名古屋・美術會館

第二十一回朝鮮美術展（綜合）三十一日―六月二十一日 京城・總督府美術館

朝鮮總督府の主催による第二十一回朝鮮展の審査員は東洋畫川崎小虎、西洋畫南

薫造、彫塑内藤伸、工藝清水南山の四名で、參與者並びに鑑査の成績は左の通りであつた。

〔參與〕（東洋畫）李象範、堅山坦、加藤儉吉、金段鎬（西洋畫）山田新一、遠山運雄、日吉守、三木弘（彫塑及工藝）淺川伯教、五十嵐三次

東洋畫 一四二點 入選 無鑑査

西洋畫 九二四點 二一六點 八點

彫塑 一九點 一〇點 二點

工藝 一九七點 八三點 六點

〔特選〕（東洋畫）張遇聖、鄭末朝、田中文子、松岡重顯、川村靈邦（西洋畫）林敏夫、朴泳善、趙炳惠、大平敬次郎、高橋武、根津莊一、有働正子、山下一彦、新井淳平、金鐘夏（彫塑）李國銓、金景承（工藝）二科十朗、瀨尾孝正、沈富吉、濱口良光、金田奉龍、鄭寅琬（推薦）（彫塑）金景承

田中實造「海と船」油繪展 一日―四日 大阪・天賞堂畫廊

辻工房近作展 一日―四日 銀座・資生堂

泰西古畫展 一日―二十九日 大禮記念京都美術館

京都美術館主催の現代畫常設陳列のうち洋畫部の特別展觀で、フランス印象派が生れる以前の泰西畫を集めたもの。主として關西に所藏される小品であつたが約半數は初めて公開されたものである。なほ同時に日本畫部では、現代諸家の作品以外に幸野株嶺の畫稿を陳列した。

三三

## 陳列目錄

## 作者 命題

所藏者

作者不詳

聖母子圖

大畑爲三郎

作者不詳

伊太利古畫

樺木信之助

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

作者不詳

伊太利古畫

大橋 孝吉

ロセツチ

愛の盃 和田久左衛門

ドガ

エツワール・マネの肖像 同

同

日本漆藝院第六回展 二日一六日 日

本橋・三越

東日一便利でない素材が却つて效果に

幸する工藝に漆といふものがある。研ぎ

出し、堆朱などがそれで、室瀬春二の二

曲屏風、鯉の圖の好調子も研ぎ出したか

らであらう。山田豊の金華まがひの研

宮は劣作。香盒、手箱、盆鉢の類は凡て構

想が平凡、同じ推賞に擬せられたもの、

うちでは木村天紅の鶯文夾紵盛器が一番

よくその創作的なところがうれしい。益

田益城の襷漆、卓と鉢とは漆の持ち味を

生かし、入山白翁の小屏風は單に技術を

示したといふに過ぎない。しかし漆藝展

にはこの種のものが多數を占めてゐるこ

とは確だ。

鈴木清陶器展 二日一六日 日本橋・

三越

たくまぬユーモアがある。

素描六大家展 二日一六日 銀座・青

樹社

第一回全日本工藝美術展 三日一七日

日本橋・高島屋 工藝美術作家協會主催

商工省、文部省後援

讀賣一染色、漆、金工、陶磁を含み四

百點を越す尠大なもの、新人賞受領の中

では巽勇の染二曲屏風は草花の思ひ切つ

た模様化を艶なる色調にて纏めて秀で同

じく村田與一作品は染の技巧よきも椿

の木構圖に脆弱なるものありて惜し

む、稻塚芳郎の漆の衝立はその面のとり

方に滑かな味の觸感あつて面白く、一般

出品には眞鍋光男、二口志保子の作は各

異つた境地において成果をあげてゐる。

第十七回國畫會展(洋、工) 二日一七

日 大阪・阪急

第五回瀧野川彫塑研究所試作展 二日

一十四日 東京府美術館

きもの、遠藤敦三の新樹の山は色の諧調

柔かく作者の感興や優雅な嗜好が窺へて

よく場中第一の作、欲を言へば松の葉だ

け他と異つた描寫がほしかつた。

水上泰生個展(日) 三日一七日 福岡

・岩田屋

第八回歴程美術展(日) 三日一十九日

東京府美術館

〔搬入總數〕一五三點〔入選〕四五點、

〔陳列數〕七二點〔新會員〕丹生公男、

福井日出夫〔新會友〕山本正年〔研究賞〕

山本正年〔光洋賞〕福井日出夫

島田忠夫茶掛展 四日一六日 銀座・

鳩居堂

晨鳥社展(故西村五雲門下) 五日一七

日 大禮記念京都美術館

第十七回日本南畫松聲會展 五日一七

日 神戸・大丸

全日本彫塑家聯盟獻納展 五日一十一

日 東京府美術館

きもの、遠藤敦三の新樹の山は色の諧調

柔かく作者の感興や優雅な嗜好が窺へて

よく場中第一の作、欲を言へば松の葉だ

け他と異つた描寫がほしかつた。

水上泰生個展(日) 三日一七日 福岡

・岩田屋

第八回歴程美術展(日) 三日一十九日

東京府美術館

〔搬入總數〕一五三點〔入選〕四五點、

〔陳列數〕七二點〔新會員〕丹生公男、

福井日出夫〔新會友〕山本正年〔研究賞〕

山本正年〔光洋賞〕福井日出夫

島田忠夫茶掛展 四日一六日 銀座・

鳩居堂

晨鳥社展(故西村五雲門下) 五日一七

日 大禮記念京都美術館

第十七回日本南畫松聲會展 五日一七

日 神戸・大丸

全日本彫塑家聯盟獻納展 五日一十一

日 東京府美術館



を展示してをり、故人の畫業を知るに大

いに參考になる。出品畫では小松均の

「大原畫卷」は未着だつたが大作「雨後」

は餘り大味で感心出來ず吹田草牧も凡

調、染色の調子が出過ぎてはるるが、山

林文子の二曲一雙「あざみ」岩崎巴人の

「菩提樹下」などがむしろ面白い。

第十一回日本版畫協會展 七日—十四

日 東京府美術館

〔搬入〕一〇三點（四三名）〔入選〕八一

點〔會員搬入〕七六點（三二名）

第九回創造美術協會展（洋）八日—十

二日 銀座・紀伊國屋

東日—阪神在住の二科系少壯作家によ

る會の東京での初の展覽會で、十五人が

それ／＼一點乃至二點を出陳してゐる。

いつたいに堅實な仕事ぶりで好意は持て

るが、少壯の覇氣に乏しく、小林武夫（神

戸）の「馬」「魚」「高須操（堺）」の「南方

の花」がわづかに注目される。

能美會第五回彫刻展 九日—十二日

日本橋・白木屋

第六回兒玉畫塾展（日）九日—十三日

日本橋・三越

讀賣—青年らしい覇氣で、新しい境地

を開拓しようと洋畫の技法など採り入れ

た野心的な作が多多見受けられるが、さ

うした作の前途は未だ遙かに遠いもの、

やうに感ずる。海野旭世の合唱は人物の

表情が單一なるは惜くも堅實なる手法よ

く、田邊莊掬の鯉は量感よく出で片岡京

二の牛と共に出色なり。北村明道の祐覺

は墨色の袈裟よく質感を出し迫力あるも

の。御大希望の贊助出品あり、春の水は

優艶にして情緒濃やかな作。幽邃なる伊

吹山と對照して面白し。

田村一男第二回個展（洋）九日—十三

日 銀座・青樹社

木下克己油繪展 九日—十四日 大阪

・大丸

森尚會第四回日本畫展 九日—十四日

大阪・阪急

白曜社再興小品展（日）九日—十四日

大阪・松坂屋

向井久万、廣田多津新作展（日）九日

—十四日 京都・大丸

第四回現代美術展（日、洋）九日—十

八日 東京府美術館

〔搬入〕二七六點〔入選〕一部四九點、

二部二五點〔授賞〕（一部）長谷川優策、

關口正男、米倉喜代志（二部）坂田虎一、

櫻田精一

岩田藤七新作硝子器展 十日—十四日

日本橋・高島屋

東日—岩田の硝子も漸く本來の好みか

味が出て來たやうだ。しかし硝子器であ

る以上は出来るだけデフォルメを避け、

均整のとれた形からよいものを作りた

と思ふ。本展觀の諸作は氏が嘗て試みら

れたやうな歐風の色調と形體より進んで

東洋風の滋味を狙へる傾きはあるが、そ

れは或程度まで成功してゐると思ふ。

加藤溪山青瓷白瓷新作展 十日—十四

日 日本橋・高島屋

清流會第三回展（日）十日—十四日

銀座・松坂屋

第二回新街社展（日）十一日—十三日

大阪市立美術館

第二回梅津秋穂新作展（日）十一日—

十四日 上野・松坂屋

田邊雀山作陶廿周年記念展 十一日—

十四日 銀座・資生堂

室本一洋新作個展（日）十二日—十四

日 大阪・高島屋

第一回筑後美術展 十四日—十八日

日本橋・白木屋

手工藝展 十四日—二十五日 東京府

美術館 文部省後援

廣瀬薫六古畫印象第二回展 十六日—

十八日 銀座・資生堂

日本畫小品展 十六日—十九日 日本

橋・三越

第二回日本油繪會展 十六日—十九日

銀座・三越

今回は石川眞五郎誕生五十年特別出

品二十七點が陳列された。

第二回現代工藝匠作品展 十六日—

二十一日 上野・松坂屋

第十九回美友會工藝品展 十六日—二

十一日 大阪・三越

第二回日本女子美術院展（日、洋）十

六日—二十六日 東京府美術館

報知—さすが女子美術家だけの會で、

華やかな張り切り方だ。女性特有の微細

な感性は、技法の上では十分感受出来る

が、人物の表情がどの作も同様凡一なの

は、同感出來ない。花鳥を扱つても、安

價な感傷に流れては、作品を甘くする。

日本畫では、矢崎菊江の「蕪風」島田秀

の「女」等があげられ、洋畫では佐伯千

草の「新緑の庭」が拾へるだけ。

現代名匠竹藝美術展 十七日—二十一

日 日本橋・高島屋

第十回童林社繪畫彫刻展 十七日—二

十六日 東京府美術館

第十五回構造社展（彫）十七日—二十

七日 東京府美術館

東日—百餘點の賑かだが、際立つた

力作は見られず、齋藤素巖の「共榮」は

まだ構圖をまとめた試作にとゞまる。瀬

戸團治の裸婦は構造賞を得てゐるが、や

や生硬であり同じく受賞した清田清也の

薄肉木彫「觀自在」も特に秀作とはいひ

難い。調子は弱いが、堤達男の乙橋媛、

鈴木雄の小品「老母」安永良徳のレリ

フ「さ、やき」など一應注目される。

〔搬入〕一六五點〔入選〕五三點〔構造

賞〕瀬戸團治、星野健一、清田清也〔研

究賞〕佐野信雄、齋藤吉郎〔會友推薦〕

堤達男、佐野信雄、瀧川美一

第三回華歌會洋畫展 十八日—二十二

日 大禮記念京都美術館

野口彌太郎上海風物個展（洋）十九日

—二十二日 銀座・資生堂

東日—近來好調のこの作家の上海風物

十二點を展示したもの。そのうち飛行機

から見た上海と佛租界を描いた二十五號

は今年の獨立出品畫の再陳だから別とし

て、風景では同じく二十五號の「黃浦江の渡船」が點景人物と船と水が巧みな調和を示す佳品であり、人物ではコーカサスの服を着けた藝人を描いたものが出色。

一 水會春季會員小品展 (洋) 十九日—二十三日 大阪・美交社

第四回現代水彩畫展 二十日—二十四日 日本橋・三越

讀賣—冊數名の第一線に立つ水彩畫家の一人一點の出陳、その多くは小品ではあるが各人各様の描法が見られて愉しい。不破章の信濃の春は山容や、木彫の如き感あるも作家の裡に持つ烈しい氣魄がよく看取され、相田直彦の風景は畫面に粘りあり諧調や韻律感よし。小山良修、中西利雄の風景は技法の冴え鋭し。

第五回大日美術院展 (日) 二十日—三十日 東京府美術館 東京日々、大阪毎日新聞社後援

大毎—(前略) 中堅級の院僚諸氏の作品はいづれも元氣いづばいだ、平口勝雄「爽沼」は神經のよく行きとどいたすつきりした佳作である。東山魁夷は相變らずの才氣を「スエズ紀行」七點に示し、沖中陽明「芭蕉」葛浦大悦「紅木蓮」の二作も大向うをねらはぬ好感の持てる作品、寺田六華の「鸞鸞」は構圖の散漫なのが惜しまれる。招待西山英雄「火口」は野心的な力作で、これはこれでい、かも知れぬが、やはり民族の連地としての高千穂の崇高さをほしいと思ふ。これと

同様なことが作品のねらひは違ふが受賞作の山田晴齋「八ヶ岳」にもいへる、意圖は意圖として成功してゐるが、山の持つ深い精神への追究をのぞみたい。同じく受賞作の荒木茂雄「山西省古縣鎮附近」

池田尚之「黄昏」月岡榮吉「ぢいや」—いづれもそれぞれの特色を持つ佳作、その他奨励賞では志賀且山「海」の態度の眞面目さ、むづかしい畫題を美しくまとめてゐる五十嵐揆一「穂高新雪」をあげる。一般作品では素直な前田來山「春の日」すつきりとした小品、加藤和夫「ふるさと二題」關泰新「初夏の街」その他満田榮樹「葱畠」渡邊安友「湖畔の印象」伊藤昇「山上の朝」安島雨晶「高原林の春」岡崎朋園「有馬道」等がいろいろの意味でその將來を注目させられる、また異色あるものとしては北村泰山「菜の花」も面白い。同人では青木大乗が力作「白馬と童女」において理想主義的な新しい手法をみせて主宰者としての力量を十二分示してゐる。また川崎小虎は妙に餘情をぶつくりと斷つた「海手」「小鹿」の二點に特異な美しさを示し、結城素明「大東亞」も手固い手法の中に大きい意欲を盛り上げてゐる、常岡文龜「富貴花二題」も目立たないがどこかおほやかな氣品を持つ力作である。

〔搬入〕二三三點 (入選) 九〇點 (院賞) 池田尚之、山田晴齋 (大毎東日賞) 荒木茂雄 (奨励賞) 五十嵐揆一、望月定夫、服部幸太郎、志賀且山、清水保二、田所

量司、月岡榮吉 (新同人) 常岡文龜 伊藤陽三個展 (洋) 二十一日—二十五日 銀座・青樹社

日 銀座・青樹社 草光信成個展 (洋) 二十二日—二十五日 數寄屋橋・日動畫廊

第四回中谷ミユキ個展 (洋) 二十三日—二十六日 銀座・資生堂

陶華會陶藝展 二十三日—二十八日 大阪・大丸

山口玲照、東原方僊新作日本畫展 二十三日—二十八日 大阪・阪急

正統木彫家協會々員作品展 二十三日—二十八日 大阪・三越

内田巖、中西利雄近作展 (洋) 二十三日—二十八日 大阪・三越

川瀬巴水版畫個展 二十三日—二十八日 銀座・松坂屋

二千六百年會第四回展 (洋) 二十三日—二十九日 東京府美術館

濱田庄司近作陶器展 二十四日—二十七日 銀座・鳩居堂

日本山岳畫協會第七回展 (洋) 二十四日—二十八日 日本橋・高島屋

相模金三郎洋畫展 二十五日—二十八日 日本橋・三越

第二回諸大家新作油繪展 二十五日—二十八日 岡山・金剛莊

大橋孝吉個展 (洋) 二十五日—二十九日 大阪・三井堂

倉員辰雄個展 (洋) 二十六日—三十日 大阪・美術新論社

日 銀座・資生堂 金澤三匠會新作工藝品展 三十日—七月五日 大阪・大丸 二名會彫刻展 三十日—七月五日 大阪・大丸 奈良の加藤翠園 (乾漆) 佐藤古明 (木彫) による佛像彫刻展。

七月 院展同人彫塑展 一日—三日 大阪・高島屋 一采社第二回展 (日) 一日—四日 銀座・資生堂 石川縣工藝獎勵會主催工藝美術展 一日—五日 日本橋・高島屋 第二回戸島光阿彌彩漆畫展 一日—五日 大阪・三越 第一回青嶺會展 (日) 一日—五日 上野・松坂屋 二葉會第六回展 (日) 一日—六日 大阪・松坂屋 九元社第八回展 (彫) 一日—九日 東京府美術館 東京美術學校文庫特別展 一日—十五日 同校・陳列館 同校及び諸家所藏の西洋畫素描複製を陳列 三橋武顯個展 (日) 二日—四日 銀座・交詢社 早苗會試作展 (日) 三日—五日 大禮記念京都美術館 物故諸大家油繪展 三日—七日 銀座

・青樹社

東朝―いづれも小品、代表作ではないが、川村清雄、黒田清輝、浅井忠をはじめ数多の點がたのしめる。

〔陳列數〕二十八點〔作家〕二十一名  
三井洋畫コレクシヨン第六回陳列 四  
日―十月三十一日(毎土曜、八月休場)  
麹町・同邸

陳列目錄

鏡の前(素描) 窓際 高間 惣七  
ラブラード 赤城の楡  
男(素描) 青山 熊治  
ドラクロア 女 ローラン  
海邊(素描) 公園の夜景  
ジョーン 傳ホイスラー  
雲とあざみ 牛の居る風景  
坂倉 鼎 ブーダン  
京子 北島 浅一 ナポリコロ  
パリの裏町 室内  
佐伯 祐三 ステヴァンス  
立てる女 海の機軸

冬 須田國太郎 髪 コツテ  
スペインの歌姫 瞑想 コラン  
木下 孝則 松林 黒田 清輝  
護羊犬三上 知治 鴨(水彩) 教章  
ガンの夏朝 兒島虎次郎 孟宗藪(水彩)  
泉浴 石橋 和訓 河合 新藏  
第一回瀧光會展(日) 五日―七日 銀  
座・菊屋

富田溪仙展(日) 五日―十九日 大禮  
記念京都美術館  
故富田溪仙の七年忌を記念する遺作展

で小品が主であつた。

陳列目錄

特別陳列 日本美術院同人作追悼畫帳(形影一如)  
竝に彫塑十點  
畫題

藝術壇(書額) 京都 金島 桂華  
養志者無邪(書額) 同 佐野 光穂  
春寒三雅 同 同  
八大龍王 神戶 今泉 嚴夫  
豐子虎(双幅) 京都 富田 裕子  
蓬萊山 大阪 朝田 卯一  
牡丹 京都 佐野 光穂  
赤壁 同 同  
花菖蒲 高岡 室崎佐太郎  
元寇の松 京都 中島 菜刀  
芍藥 同 金島 桂華  
辨財天 同 同  
石山秋月 同 佐野 光穂  
櫻菊(双幅) 神戶 今泉 嚴夫  
不動尊 同 同  
祇園春宵 京都 松井 はな  
歸去來 芦屋 山田多計治  
川千鳥 京都 佐野 光穂  
彼岸櫻 大阪 八代 武次  
近江八景 神戶 清水 留吉  
大黒天 同 同  
歲寒二雅 高岡 室崎佐太郎  
嵐峽春雪 大阪 木村 磊三  
寶船 京都 富田 裕子  
黃檗(額) 神戶 今泉 嚴夫  
蓬萊山 京都 佐野 光穂  
花籠 同 同  
大聖不動尊 京都 富田 裕子  
同 佐野 光穂

修學院春雪

雪蘭

西湖の歌

問答

三尾紅葉

月鷺

林和靖

松に鷹

竹林七賢

末廣

相生の松

那智瀧

茶摘

宇治

南泉斬猫

長閑

牛祭

扇面流し

端午

無花果と栗鼠

玉椿

嵐峽雨後

達磨

臘月櫻花

雷神

春日宮

紫陽花

大八洲

養老孝子

尉と姥(双幅)

松竹梅

鴨涯明月

白梅小禽

春日晩春

菟道春雪

神戶 清水 留吉

京都 佐野 光穂

同 同

兵庫 靜 藤次郎

大阪 八代 武次

同 舟橋 高信

京都 佐野 光穂

同 池田 遙邨

同 高尾菊次郎

同 辻 宇佐雄

同 富田 裕子

大阪 木村 磊三

高岡 室崎佐太郎

大阪 朝田 卯一

兵庫 靜 藤次郎

京都 末次 喬

兵庫 靜 藤次郎

京都 佐野 光穂

同 富田 裕子

高岡 室崎佐太郎

京都 福田平八郎

兵庫 靜 藤次郎

京都 佐野 光穂

同 同

兵庫 靜 藤次郎

大阪 木村 磊三

兵庫 靜 藤次郎

京都 中島 菜刀

同 佐野 光穂

高岡 宮崎佐太郎

高岡 宮崎佐太郎

京都 池田 遙邨

同 富田 裕子

同 堀田 恵一

同 同

四季色紙(四葉)

百丈野狐(一卷)

日本畫扇面展

朝日ビル

東朝―清楚な感じを與へる奥村土牛を

はじめ、堂本印象、森白甫等花に取材し

たもの多く、魚に取材したものは杉山

寧が目につくが、山本丘人、加藤榮三あ

たりの新人が眞摯な態度を示し、中川紀

元が型にはまらぬ興趣を呼ぶ。

久本弘一北瀾風景展(洋) 六日―十五

日 神戸・阪急

水彩聯盟第二回大阪展 七日―十二日

大阪・三越

大東亞戰爭從軍畫展(日・洋) 七日―

十二日 日本橋・高島屋

東朝―大東亞戰勃發と同時に軍報道班

員として活躍してゐる栗原信、向井潤吉、

鈴木榮二郎および大東亞戰記録畫作製の

ため陸軍より南方へ派遣された藤田嗣

治、中村研一、鶴田吾郎、清水登之、山

口蓬春、福田豊四郎その他の聖戰報告畫

にして、勿々の間に描いただけに、まだ

纏りに缺ける憾みがあるが、清水の淡彩に

よる昭南港、ジョホールバルはさきに支

那事變の際中支戦線を描いたものと同形

の透徹せる觀照による佳作、鶴田の文身

ある捕虜が興深く、山口蓬春のトーチカ

は確かな筆さばきが魅力を持つ。油彩で

は藤田の「パシバル」萩須高徳の佛印

風景、中村の「我が宿」などたのしい。

青山義雄近作小品展(洋) 七日―十二

日 大阪・松坂屋

松村小琴第三回日本畫個展 七日—十八日

二日 大阪・阪急

清光會第九回展（日・洋）八日—十一日

日 銀座・資生堂

東朝—小林古徑の「百合」は胡粉の使用に絶大な苦心をなしたもので、味深く品位も添はる。梅原龍三郎「楊貴妃」の輕妙な筆觸は對象の氣質をとらへ安井會太郎の久し振りの人物「讀書」は荒い豪放なタッチで造型美を追究、坂本繁二郎は「鵝卵」に新しい趣向を示す。

辻愛造新作展（洋）八日—十一日 神戸・神戸畫廊

小村雲岱忠臣藏挿畫展 八日—十二日 日本橋・高島屋

尚美堂日本畫展 十日—十二日 芝・東京美術會館

大日美術第五回大阪展（日）十一日—二十日 大阪市立美術館

橋本多聞洞新作展（日）十三日—十五日 銀座・資生堂

中村靜城と古戰場風景展（日）十四日—十六日 銀座・松坂屋

清瀨社第二回展（日）十四日—十九日 上野・松坂屋

銀鵬社第一回水彩畫展 十四日—十九日 銀座・銀座畫廊

山下竹齋新作展（日）十四日—十九日 大阪・大丸

山南會第三回及土田麥僂遺作特別陳列（日）十四日—十九日 大阪・阪急

松子社第一回展（日）十五日—十九日 日本橋・白木屋

讀賣—桂月門下の同人展、荒川晃雲の鯉は鱗の線描き平坦で魚の丸味出てるず青田に白鷺一羽を描きし西野新川は構想色調共に新鮮、桂月山人の贊助出品あり月並の感あるも枯淡なる墨色に惹かる。

現代工藝美術名作鑑賞展 十五日—十九日 日本橋・高島屋

小林清榮報告畫展（洋）十五日—十九日 日本橋・高島屋

讀賣—海軍從軍畫家の戦地報告畫約卅點鉛筆淡彩は對象の掴み方や表現に力弱きものあり結局デッサン力の貧困に起因するも修理作業、パンコク風景等は、観られる。油にて描きし飛行機、海戦等の大作はパノラマ繪以外の何物もない。

福岡青嵐新作展（日）十七日—十九日 大阪・高島屋

香坂茂吉個展（洋）十七日—二十一日 銀座・資生堂

東日—滞歐當時から今まで迫ってきた諸傾向をひとつの過程として示した方法は、一回展として甚だ良心的だが、ロートレク、ピカソ、ルノアルなどにそれぞれ鼓吹された諸作の間に一貫した體臭がなく、個性のばやけた展觀になつた憾みはある。色感も全體に甘いが、風景が比較的鋭く「フオントネ・オ・ローズの春」「マントの寺」など注目値する。

第二回南洋美術展 十七日—二十二日 銀座・松坂屋

東日—南方に會遊の作家廿餘名で結成された南洋美術協會主催の第二回展。前回に比して内容は漸次充實してきた觀はあるが、中心をなしてゐる南方共榮圈の風物を主題とした十五連作には時日が足りなかつたためか、二、三低俗なものがある。面白いのはスケッチ風のもので、三雲祥之助の水墨淡彩「ジャバの踊り」、赤松俊子のスケッチなどが却つて目につく。

紫草會第一回展（日）二十日—二十二日 芝・東京美術會館 九品庵主催

きつ、き會第一回版畫展 二十一日—二十五日 銀座・青樹社

讀賣—平塚運一を中心とする主に國展販賣の常連の集り。卅數點、小品が多いが各人各様の作風が觀られて嬉しい。岩島勉の熊野灘、畦地梅太郎の樹林や南畫の手法をとり入れた塚本哲の沼などは異つた境地に於て各々出色、前田政雄の八ヶ岳は橋本興家の春、冬などと共に技巧の勝れた作。平塚運一の風雲は雲や浪の線に一つの味を認めるも岩の表現は怪奇である。

第三回日本エツチング作家協會展 二十一日—二十六日 上野・松坂屋

朴人社第一回展（日）二十一日—二十三日 京都・大丸

林雪義淡彩畫展（洋）二十一日—二十三日 神戸・大丸

第十一回日本木彫會展 二十一日—二十七日 東京府美術館

陳列點數十九點。小品が多く、野心的な制作は見受けられない。主なる作は、内藤伸の「狛犬」外一點、佐々木大樹の「無題」、三國慶一の乗馬像「先驅」、森野圓象「益良男」、佐伯量良「武人」、山口伊之助の相撲をとり扱つたもの等であつた。

現代彫塑家力作展 二十一日—三十日 銀座・紀伊國屋、帝國美術彫刻普及會主催

松木滿史油繪個展 二十二日—二十五日 銀座・資生堂

東日—國展の古參で青森在住のこの作家が東京に於ける最初の個展。作品の多くは滯佛中の畫稿に歸朝後手を加へたものらしいが、「アデン」「門」など味深い小品であり、五〇號の人物「タンデム」及び「丘・モンチニ」は手堅く今後の仕事を暗示してゐる。難をいへば展示の作品に統一された空氣がなく散漫な點だらう。

大橋了介夫妻歐亞一週油繪展 二十二日—二十六日 日本橋・高島屋

第一回日本劇畫院展 二十二日—三十日 上野・松坂屋 情報局後援

讀賣—日本の從來の芝居の筋の裡にもつ文學的内容から日本精神の對外宣傳と對内指導教化と産業慰安の三つをとりあげて例へば大和魂を石切梶原、善隣の精神を國姓爺、防諜を忠臣蔵七段目お輕、産業を小鍛冶といつたやうに主題をとりあげて描いたもの。畫の表現様式とか技巧

は別として、かゝる試みは美術家として甚だその戦城奉公の意味から時機を得たもの。清水三重三、宮尾しげを、藤澤龍雄等の作は出色。殊に三重三の芝居スケッチ屏風や大田雅光の筋限之解剖考圖説、平田郷陽の芝居人形等面白し。

古城江親大東亞共榮園風物畫中支海南島從軍畫展(日)二十三日—二十八日 銀座・三越

橘田永芳個展(日)二十八日—三十一日 日本橋・高島屋

チツト・ブアブサヤ一個展(洋)三十日—七月二日 數寄屋橋・日動畫廊 財團法人日本タイ協會主催

東日一泰協會の主催で、タイ國々立美術工藝學校の教諭チツト・ブアブサヤ一氏の日本の風物を含む近作を展示したもの。印象派風の技法に格別新鮮さはないが「曉のパークナム」プラ・バトム寺院「小品では「浮家」など比較的面白く日本の風景では街裏を描いた「雨降り」「忙しい日」など中々よく實感を捉へてゐる。

## 八月

陸軍省派遣南方從軍畫展(日、洋)一日—八日 日本橋・高島屋

東朝一磯良平、宮本三郎、中山巍らは、それ／＼兵の姿を對象に、小磯の靜的なのにたいして宮本、中山は動的な面から入り、戦ふ兵の力強さ、精神力等を藝術に再現せんと苦心する態度には敬服

する。殊に宮本三郎が、山下司令官、俘虜にたいしての研鑽振りは目覺ましいものがあり、鶴田吾郎の俘虜素描と共に腕の冴えを示し、風景では川端龍子の「コイスウエー橋」もあるが須高徳の「アイゴン河」の技術は尊い。中村研一の「マレーの子供」は纏つた佳品として推稱に値するもの。

第十七回バステル畫會展 一日—八日 上野・松坂屋

忠愛美術院第二回展(日、洋、彫)一日—十四日 日本美術協會

讀賣の今年の公募は特に主題を日本精神の發揚といふ點に限られて行はれたもの。陸軍病院の傷痍軍人からの應募作品も數多くあり別室に出陳されてゐる。油彩では本寺轍の田植、高澤圭一の小休止、森や小品ではあるが山田順治の作風に高き繪畫精神が溢れてゐる。花岡萬舟は廿點以上の力作を發表してゐるが敵陣飛行場が構想上最も秀れ彫刻では土田實の上杉博士、木花咲耶比賣の二點眼につく。日本畫には別にとりたてて作なし。

五采會第二回展(日、洋)十二日—十六日 銀座・松坂屋

東日一挿繪界の人たち五人で昨年出來た會の二回展、一種の純美術勉強展とでもいふべきものだが、田代光の日本畫は探らない。志村立美の日本畫も畫品がない點では同じだが「幼女三態」など比較的、岩田孝太郎は肉筆浮世繪調の「獅子」に努力を示したが、まだ「新當町」

「道頓堀」ほど自分のモノになつてゐない。まづ危な氣なく見られるのは吉田貫三郎の水彩と林唯一の油繪だらう。

日華兒童作品展 十五日—二十三日 新宿・三越 東亞兒童新聞社主催

第八回關西水彩畫展 十八日—二十三日 大阪・大丸

國展版畫部同人作品展 十八日—二十三日 大阪・大丸

新水彩協會展 二十一日—二十八日 銀座・三越

東日一この三回展で出色は古川弘であらう。力作は「牡丹」でよく實感が出てをり、小鳥の靜物もまた悪くない。その他三橋兄弟治の「芙蓉」早川國彦の北海道風景などが注目される。若手は全體に不振。

興亞南畫院第二回展(日)二十四日—三十日 大禮記念京都美術館

第十六回竹外南畫院小品展(日)二十五日—三十日 大阪・大丸

野崎華年水彩畫遺作展 二十五日—三十日 名古屋・後藤版畫店 覺王山畫神堂保存會主催

青龍社第十四回展(日)二十六日—九日 日本橋・三越

都一(前略)龍子は南方諸四部作の第一として「國滅ぶ」及び國に寄せるの第二「大和の國」を出品。何れもこねわると十分描き盡くしても居ない。またもつと鋭敏でカチツとした藝術的勁がほしい氣もする。それがあれば畫面の生きる

こと數倍であらう。南島草描は例によつて實にうまい。中でも獅子、漁船など佳什であるが、このよさを作品に生かし得ないのは龍子の弱味である。今年の展覽會では龍子以外の諸家が龍子を壓倒する位に思ふまゝやつて居る。これは青龍展としては異例であり、これでこそいふのだと思ふ。坂口一草の畫境は漸く熟して來たやうに見える。さうして氣のきいた「飛燕」よりも地味な「赤目溪谷」を注目すべきだ。畫面のあちこちに樂しみがあひ、瀑布の生動する描寫もたゞそれだけでなく畫面のたのしみの一つとなつて居るなど餘裕がある。加納三樂の早乙女四人を描く「娘子報國」と絢爛な牡丹圖屏風「花玉圖」とは、會場では後者が、久し振りに三樂の豪快味が出て居るやうで、これがいいと思つたが、アト味はむしろ前者がよく、妙にまとまらないのが氣にかゝりながら兎に角三樂の才を出して居る。近來三樂は技法の本格的研究に向ふ一面畫心の貧困を禁じ得ないやうに見られる。本年作も未だその傾向を免れ得ないが、これで内部から積極的に湧くものが出たら以前より更によい仕事が出来よう、山崎豐も亦次の飛躍の準備中と思はれる。福岡青嵐の「蕃椒酒」はその無氣味な持味と合つた面白い作品であるが、何か澁みがある。味が畫と遊離して居るかと疑ふ。一草の赤目溪谷と並んで特に推賞したいのは、市野享の「七彩鳥」と安西啓明の「寫生」である。昨年私は



## 出品目録

市野享の「牛」に感心したが、ことし更に伸びて居ることを喜ぶ。七面鳥の群を多少裝飾的に描いて居るが、概念的ではなく、緻密でスツキリした肌ざらえを持つ賦彩は他の追隨を許さないし、しかも全體に堅實な大きい氣分が漲る。この畫は青龍社だけでなく今年度の佳作とならう。かつて驚を描いて居た頃は粗笨と評し得るものがあつたが、一轉して内氣な細密描寫に移り、それが再び内氣を吹拂つたとき、昨今年の佳作となつたと云つていゝ。今から思ふとあの細密描寫は單に寫生についてだけでなく、行き届いた緻密な表現を伴つて居たのがよかつた。その方向は青龍社風の弱點を十分に補ふものだ。安西啓明の「寫生」は相當奇智のはたらいいた畫であるが、それが少しも目ざはりでなく微笑ましいものになつて居る。描込みの不足はこの畫にも多少のこつて居るがそれを補ふほどに畫心の大きい動いて居る作品である。この外佐藤本章の「麒麟」は麒麟のびちつと合つたラシヤのズボンをはいたやうなところがよく描けて居る。小島鼎子の本年作は特に優れた作とも云へないが、その受賞は寧ろおそきに失する。（大口理夫）	入選作品	孔雀の如く	磯馴 鍛冶 海雪
〔三人〕（獎勵賞）「首夏」琴塚英一、	寫生	山二越（雪嶺）	安西 啓明
「睡蓮池」小島鼎子（Y氏賞）「春遇し」	新築風景	雨映	利谷 双樹
宅間説（社人推舉）市野享、安西啓明	安東 丈夫	虎視 大塚 榮治	榮治
〔社友推舉〕松宮左京、龜井藤兵衛、渡邊不二根（社人推舉）須藤尙義	コンドル	九羊園松宮 左京	左京
	早春 野村 東山	雪後 須藤 尙義	尙義
	三吉 木田 雙樹	夏野 坂 平安	平安
	靜日 渡會 牽牛	鷄陣 時田 直喜	直喜
	春遇し宅間 説	協同耕作	省三
	植輪 久保木彩光	麒麟 佐藤 木草	木草
	葡萄 山下 蕨	七彩島市野 亨	亨
	國土 山本 昌平	大和の國	龍子
	懸緒 龜井藤兵衛	川端 龍子	龍子
	首夏 琴塚 英一	國誠ぶ同	南島草描
	睡蓮池小島 鼎子	飛燕 坂口 一草	赤目溪谷
	爽朝 直江 義治	同	同
	麥秋 丸山 皎	同	同
	青陽 渡邊不二根	同	同
	白夢 同	同	同
	風 内池 星子	花王圖加納 三樂	三樂
	望嶽 岡部建一郎	娘子報國	同
	南の夢木村庭之介	同	同
	山を覗く	同	同
	高山 晴雄	蕃椒酒福岡 青嵐	青嵐
	春潮 林 榮太郎	娘々祭山崎 豊	豊

## 九月

大東亞共榮圈美術展 一日―十五日  
東京府美術館 大東亞美術協會、讀賣新聞社主催  
東日―先月初旬、有馬頼寧伯を會長に結成をみた大東亞美術協會が、早くも開

いた第一回展。繪畫は特にこの會のため制作されたものでなく、すべて手持作品で間に合せたため散漫だが、丹羽吾朗氏出品の印度ミニエアチエール卅點及びガングラ時代の彫像は一見の價値があり、他に南方諸民族の木工藝、塗器、面、衣類、染色、陶磁器に及ぶ豊富な列品があつて興味深い。（古美術展觀の項参照）  
國風彫塑會第八回展 一日―十七日  
東京府美術館

東日―石川確治の木による浮彫は感心しないが、石膏「女性」は小品ながら流石に肉づけが老巧だ。會員では鈴木賢二が出色で、レリーフ「麥試作」「N君像」など悪くない。濱田三郎「棚上三女」永原廣「大洋を前に」もまづ佳作に數へ得るものだらう。會友では瀧川藤一郎の木彫「空」を探る。新關國臣の大作「中里昌徳郎」は頭部がいかに鈍い。

〔搬入〕二三四點（一二〇名）〔入選〕三點（二五名）〔授賞〕（特選賞）館野親光（研究賞）田村辰治、小川由加里（會員推薦）永原廣、名久井十九三  
第二十九回日本美術院展（日、彫）一日―二十日 東京府美術館

〔日本畫〕讀賣一院展は老舗となつて既に久しい事だが昨今ではこの非常時局の渦巻の間に、何とか格を落さずに昔ながらの品質を確保しようとする努力が見える。若人の歳に似あはぬ古典藝術への勉強や、武者繪への進出などは、成果の如何はともかくとして、院展らしい當然な機

案ともいひ得よう。うつかり現代の戰爭畫などに手を出さず、古典形式の中で靜かな張り切り方を示さうとする態度は、日本畫の現在から見れば、一應賢明な態度に相違はなからう。殊に院展はこの方面で無双の名を擅にする教彦、青邨の二名家があることであり、若人の勉強に事缺く憂ひはない。新井勝利、小松清、眞野濤、上垣侯鳥、守屋正、羽石光志、木下春子等々、いつのまにか古典主義全盛の院展となつてしまつた。これ等を概括的にいへば教彦や青邨の追隨を事とするばかりでいかにも創作性に乏しい。古典主義の陥り易い弊はとかく形式の整頓ばかりに勞して精神と表現とを逸することだ。しかし是等の中では新井勝利の「元寇注進狀」が最も力作である。注進狀の中から老将と若武者との對比を構想し來つて華やかに緊張した場面を生かさうとする苦心は或程度まで成功して、古典主義につきもの、固定化もさほどはない。眞野濤の「二天」も清麗な點でまた教彦系統の慎重さを確めさせる。繪巻風の連續描寫も院展における古典主義の一特色で今年も一二を挙げ得るが、その中で中島清の春日若宮の「おん祭」は小味ながら神經のよく利いた佳作である。古典主義ではないが、多少時局的な脚光を浴びる「眞葛庵の蓮月」を取扱つた北野恆富の作は、恆富固有の色香を部分的に殘してゐるが、無氣味な卵頭の恰好などに何の感興も湧いて來ない。中堅作家で



は岳陽や曉雨の作がまだ着かない。郷倉千艸のしらじらとした「山の初霜」酒井三良の牧歌的な「雨霽、陽炎」等々、まづは無難で現状維持のまゝに過ぎない。たゞ老親大親だけはひとりで日本精神に張切つて、潑刺たる「正氣放光」の一作を成した。例の如く得意の富士山ではあるが、雪村ばりの波頭が雲をかんて富士山の向ふまで取りかこむといふ奇抜さである。正に波高き太平洋を飛行機の上から見おろすやうな面白さで、大親の富士もこゝらでいよゝ佳境に入るといひたい。「野に咲く花」は皆ての「野の花」などに示した部分作のやうなものであるが大親の親しみある素朴さが味はへる。

前田青邨は手なれた武將の肖像畫から轉じて、珍らしく現代の肖像畫に筆を染めたが、畫かれる人は百餘に数ばむ「奎堂先生」清浦翁であつてみれば別に不思議はない。淡墨仕立ての得意の線描で、特異の風貌を活寫するのにいさゝかのぬかりもないが、表現が微温的でないだけに少々活が入りすぎて、思はず觀者を微笑させる點も青邨らしい特質である。

その他中堅作家で目ばしい作を拾つてみると、まづ奥村土牛の「眞鶴」がある。光琳の曲線を近代風の直線に換へて、單純な線と面との組合せに構圖的效果を見せた佳作であるが、後の一羽の立てた首は鈍かつた。

中村貞以「酸漿」を遊ぶ、少女は例の如く神經質でさびしいが、すつきりと洗

練された感觸は他に求め易からぬ特質であらう。田中青坪もまた「雨の日」の現代婦女圖を畫いてゐる。貞以が恒常流から轉化して行くに對して、これは古徑タイブの儘に近い。色調にも表現にも一脈の清爽さを漂はせてはゐるが、どうしたことか創意に乏しい。ポーズなども古徑の「髮」を思ひ出させるに過ぎないではないか。

等しく創意にとぼしい點で惜しまれる作に佐野光穂の「簪簪夕照」がある。淡墨の太い線と黄緑の暗調とを以て畫いた異色ある作風で、描寫力にも富んでゐるが、要するに村上華岳の風景を模したのみで、華岳の深さを生かすことの出来なかつたのは遺憾である。異色ある作風では片岡球子の「祈願二題」もまた目につく作である。これまた力はあるが、奇癖の行き過ぎは戒心を要する。

力のある點で小松均の「黒牡丹」も擧げてよい。片岡ほどに表面に奇癖は現はれてゐないが、銀箔仕立ての満面に遠慮なくかき結めて落ちつきの足りぬ青色調を喜んでゐるあたりになほ片鱗が消え難い。小谷津任牛の「珠數掛櫻」も褪せた櫻花に異調を漂はせてゐるが、前者のやうなねばりがなくて、甘く感傷的だ。

思はず癖の多い作品を擧げてしまつたが、斯うした傾向は、元來革進的だつた院展理論の半面にこびりついた看過し難い特癖の延長乃至變形でもあるのだが、今日ではあまりにすなほでつゝ、まじやかな

な半面が定型のやうになつてしまつた。この方では簡淨で紙糊のやうな婦女圖や、優雅でいけ花のやうな花草圖などを群をなして院展らしい會場風景を呈してゐる。今これらの間に在つては吉田善彦の「塔」鶴岡節夫の「田毎」北澤映月の「好日」島田納郎の「紫陽花」中村春泥の「さくら」等々、印象に残つてゐるが、こゝに「々々」述べる餘裕なきは残念である。(田中一松)

(彫刻) 東朝一今年の院展の彫塑は全體としては、かなり粒が揃つてゐる方だ。肖像彫刻が際立つて多いが、その中で平櫛田中の「鶴鑿」といふ題の道服めいたものを經つた岡倉天心像の本彫大作が場を壓してゐる。作風の重厚な雰囲気と材質の清麗な氣品とがよく出てゐる力作である。

しかし像の姿態がさうだからといふ意味ではなく量感がみな下へ下へと垂れ下り、たるんだ袖の塊の鈍重さなど、木材の材質のもつ上昇性が眞に生きてゐない氣がする。大作としての、いろいろな方向の力感の接合點について、構成の配慮に缺けてゐるところあるからだと思ふ。

この大作についての構成の不備は、中村直人の「楠正成」それから二科の松村外次郎の「タバコ」といふ大作についても言はれる。中村直人の「楠正成」は、この人獨得の少し冷やかに冴えた觸感のある作品だが、體軀を貫流する動勢の氣合乏しく、顔貌の表現もまた含蓄淺い。

肖像彫刻のもつ内容の深さを、もつと追究してもらひたいのである。

辻智堂の木彫は、埃及彫刻の正面性を狙つたやうなところがあるが、何分根柢から生れてゐる形態把握の統一がないから、單に勉強振りを示してゐるのみになつた。「野良の父と子」なども、上半と下半とは様式的にバラバラの解釋である。しかし、この作家は、今の摸索時代を乗り切れば、院展では珍しい新鮮な作風を示すに至るのではないかと期待される。菅原安男の木彫「宮本武蔵像」は、神經はあるが、刀法神經質過ぎる。

彫像では、石井鶴三の作品が注目される。いゝ加減に手を抜いたところのない形の正確な美しさを持つてゐるが、不思議なことには一步を離れた場合と二歩を離れた場合では、質感の印象など非常に違つて来る。近く見た方がよい。

私はこの邊に、院展の彫塑作風全體に流れてゐる瑣末な描寫主義の弱點が感じられるやうに思ふ。松原松造の「腰かけた女」は、關節の部分が、骨格の肉内的なアクセントになつて居らず、皮相な外的なアクセントになつてゐるのが目立つてゐる。

村田徳次郎の「少年」は周りに柔かい空氣のある作品だが、も少し齒ざれが欲しい。山本豊市の青銅の首二點は、いづれも凝集感と柔かさとあつて美しいが、いかに典雅であつても原始的な生命感といふやうなものが發散してゐないと彫塑

の最後の鹽味が消える。

院展の彫塑には、全體として傳統的な氣格はあるが、少しいぢけたやうな感のするものも少くないのは、矢張り描寫があつても構成の追究に足りない點にあるのではないかと感じる。(今泉篤男)

〔繪畫〕繪畫六一四點、彫塑一二三點、選二〇點、彫塑三四點(無鑑査六點、新入選二點)〔授賞〕(繪畫)(第三賞)「薰風梨園」中島榮刀「忠度」羽石光志「珠數掛櫻」小谷津任牛「おん祭」中島清(彫塑)(第一賞)「詩人」辻督堂(第二賞)「青木氏像」關長造「裸婦」古藤正雄(明年度無鑑査)(繪畫)小松均、木下春、鹽出英雄、鈴木鳥心、吉田善彦(彫塑)菅原安男、土井要輔、宮本理三郎〔院友推舉〕(繪畫)南摩朱鳥、山田廣吉、齋藤俊文、緒、座間素賢、原田美智恵、森綠翠、鷹尾兵衛、八島光允、加藤晨明、佐藤金一郎、瀬戸水明(彫塑)長野英夫、村上丙、河内滋子

出陳目錄(同人)

繪畫 向春 中島 萬木 水居 鹽出 英雄 田毎 鶴飼 節夫 塔 吉田 善彦 木瓜 對馬 安正 後苑 森 綠翠 水椿 伊坂 靜雄 椿 松本 英峰 さつと 元寇注進狀 上垣 候鳥 岡田 重雄 ○新井 勝利

靜澤 鈴木 三朝	馬を洗ふ	○小林 柯白	大原晚秋	南摩 朱鳥	雪晨 番場 春雄	師影 原田美智恵	黒牡丹小松 均	好日 北澤 映月	山の初霜	○郷倉 千靱	文覺 橋本 靜水	忠度 羽石 光志	樹 我妻 碧宇	落穂拾ひ	高橋 萬年	練武 池澤 青峰	鷗流 鈴木 鳥心	函嶺三題(曉嶺、山湖、暮靄)	○橋本 永邦	薰風梨園	中島 榮刀	櫻尾早春	染谷 祐通	春昏る内田 青蕭	柿 宮本 啓次郎	洛外二作(洛北の村、落柿舎)	好日 藤井 頼文	漁村の初夏	○富取 風堂	畫堂先生	○前田 青邨	眞鶴 奥村 土牛	春流 高坂 青邱	眞葛庵之蓮月	○北野 恒富	小松の丘	○大智 勝綱	二天 眞野 滿	茄子 大久保東州	加茂神話(其一、雷ノ神降臨、其二、石川ノ瀨見ノ小川、其三、雷ノ神寄胎、其四、別雷ノ神昇天、其五、別雷ノ神還幸)	○眞道 黎明	初夏 中村 逸一	珠數掛櫻	小谷津任牛	紫陽花鳥田 訥郎	陽炎ノ酒井 三良	雨舞 同	あづまはや	○太田 曉雨	花勝美中庭 媛華	春苑 中島 一悟	早苗頃佐藤 耕寛	晴秋 八島 光充	秋の熊野路(瀨峡、那智の瀧)	小島 一谿	水禽 鷹尾 兵衛	さくら中村 春泥	雨 丸 儀太郎	月 同	綠影 中村 岳陵	雨日 田中 青坪	秋 奥村 玲響	花を寫す	高浪 勢以	冬山吹佐藤金一郎	秋山(秋山二題) 三石 紅樹	啄木鳥(同)	同	機織 加藤 晨明	紅梅 瀬戸 水明	寒山拾得	○筆谷 等親	青柿 金井 敬陽	玻璃槽	○堅山 南風	牽牛花同	村田 瑞枝	正氣放光	○横山 大觀	野に咲く花二題(蒲公英、薔)	同	麗日 河内 舟人	冬木立石本 光朝	覺山尼木下 春	庭 倉光 和子	魚のむれ	四田 瀧水	麥秋 池田 憲二	大原女吉岡美枝子	鯉 本多 三洲	かゝる河本 松之	双華 高橋 周桑	簪懸夕照	佐野 光穂	素秋 吉川 朝衣	風雪 花岡 朝生	花桐 綿谷行四郎	春衣 岡本綱壽子	公孫樹中島 啓朝	行秋 山田 廣吉	穢滅 守屋 正	南方ノ花二題(鳳凰樹、扶桑華)	○小山 大月	秋色千草	○同	鷗 熊坂 東夷	祝詞(祈願ノ一) 片岡 球子	合掌(同二)	同	夏季 座間 素賢	おん祭(一、春日若宮、二、獻鳥、三、御問道御神幸、四、馬長稚兒、五、射手稚兒、六、細男舞、七、太太鼓)	中島 清	譚家ト郎等光任	高橋 玄輝	農村初夏	岩田 光壺	連翹 齋藤俊文格	刺繡 笹川喜久子	後七日の御修法	安谷 茂彦	鶴ヶ島鏡	冬木 大丙	鳥のいろどり	磯山 六郎	山のいろどり	同	小川 雨虹	アノモネ	相原萬里子	朝 池田 榮廣	池のほとり	中澤 一僑	雨 島田 秀	海口裏街	里見栄山人	奉劍 村田 閑	綠映 永田紳自露	春芳 岡田 雄號	筑紫 菊池 公明	年齒十一(時宗)	岩橋 英遠	薔薇 高山 公子	雪割 樹下孝太郎	玉蜀黍石井美代子	乙橋殿久保 清子	夏の客	○小倉 遊龜	彫刻 澤田氏像 小倉 清吉	トルソー 河野 正造	白猫 柏木 康兵	當麻 入江 美法	牡牛 松原 松造	腰かけた女 同	平櫛先生像 宮本理三郎	箒を持つ青年 同	宮本武藏像 菅原 安男	鍛冶氏像 同	産藥職士 高橋 友武	楠正成	○中村 直人	嫗 同	裸婦立像 土井 要輔	親子 小林 眞吾	首 同	禪僧(十六世良知像) 小林 章	少年坐像 藤本 美弘	黒井千代吉先生像	○關谷 充	老人 黒崎 弘	つきん棒	長谷川豐雄	巖區堂氏像 關 長造	青木氏像 同	朝比奈先生壽像 故 吉田 白嶺	喜多氏頭像	○山本 豐市	女の顔同	聖觀自在尊(白
----------	------	--------	------	-------	----------	----------	---------	----------	------	--------	----------	----------	---------	------	-------	----------	----------	----------------	--------	------	-------	------	-------	----------	----------	----------------	----------	-------	--------	------	--------	----------	----------	--------	--------	------	--------	---------	----------	---	--------	----------	------	-------	----------	----------	------	-------	--------	----------	----------	----------	----------	----------------	-------	----------	----------	---------	-----	----------	----------	---------	------	-------	----------	----------------	--------	---	----------	----------	------	--------	----------	-----	--------	------	-------	------	--------	----------------	---	----------	----------	---------	---------	------	-------	----------	----------	---------	----------	----------	------	-------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	-----------------	--------	------	----	---------	----------------	--------	---	----------	---	------	---------	-------	------	-------	----------	----------	---------	-------	------	-------	--------	-------	--------	---	-------	------	-------	---------	-------	-------	--------	------	-------	---------	----------	----------	----------	----------	-------	----------	----------	----------	----------	-----	--------	---------------	------------	----------	----------	----------	---------	-------------	----------	-------------	--------	------------	-----	--------	-----	------------	----------	-----	-----------------	------------	----------	-------	---------	------	-------	------------	--------	-----------------	-------	--------	------	---------

桐石)

○大内 青圃

親善菩薩(陶)

同

不生居士像(陶)

同

野良の父と子

辻 晉堂

詩人(大作家持試作)

同

村ノ女同

同

閑塾地ノ男

同

老婆

同

休息する少年

同

海

市川 二男

裸婦

矢崎 虎夫

簪

古藤 正雄

齊藤將軍ノ像

村上 丙

犬

河内 滋子

少年

大橋 敏男

自像

同

裸婦立像

同

第二十九回二科展(洋、彫) 一日—二

十日 東京府美術館

小柳津三郎

少女倚像

同

歸還のA君

同

○喜多武四郎

鶴鑒○平櫛 田中

ミチの首

千野 茂

T將軍ノ像

加藤 泰三

温泉小景

○宮本 重良

細女命と獲田毗

古神

同

慰問 花田 一男

歸還伍長

長野 英夫

梳る 櫻井 祐一

靜坐像

○石井 鶴三

大雅像(試作)

同

立童 岡村 進

湯上り鷹野 忠一

綠君 片野不空藏

同

同

同

同

同

同

同

同

同

か確固たる独自の表現を貫徹するほどの決意もなければ、何か骨身にこたへる生活體驗を盛上げようとする意地もなく、

安易な技術を引き伸ばしてゐるのでは、稀薄な效果に終るのは當然である。

一般的にいふのは多少無理であるが、構圖にしても多くが入念な工夫に沈潜したわけでもなく、粒々辛苦の跡など窺ふ餘地がない。かういふ重大な作畫上の要諦が散漫に放置されてゐるのは現代繪畫の不幸である。古來の名家が一作毎に構圖にたいして拂つた必死の努力を絶えず想起したいものである。

色調についても、安價な満足に終始して、徹底して追究を完うするものは少い。繪具の不足もあるであらうが、いづれも決定的な要素を缺いて生彩ない低調に沈んでゐる。

これらは第一に繪畫にたいする誠實の缺乏が原因である。制作力はあつても重厚な制作態度と几帳面な作畫過程をとらぬためである。描寫力の弱さは制作精神の弱さを背景としてゐる。手篤い寫實に腐心する誠實を失つて、畫面の效果にのみ筆がすゝむのである。制作の對象がどこにあるのか疑はしくなる場合が多い。

かういふ一般的低調のうちにあつて、しかし幸なことに今年は思ひ設けぬ貴重な收穫を少數の畫家が南方から齎らした。

第二室に陳列された現地素描がそれであ

る。

第二室は宮本三郎、栗原信、向井潤吉、田村孝之介の四君が南方の戦跡を巡る間に筆端に収めた七十數點に及ぶスケッチの部屋である。いづれも多忙な旅程の間に寫しとつた小品であるが、充實した筆勢は一般の低調を償ひ、他の大作を遙かに凌駕して會場の柱石となつてゐる。

殊に宮本、田村のスケッチは満々たる描寫力を潜めて生氣潑刺たるものである。宮本の素描は對象に喰入る鋭い迫力を淡々たる筆線、淡彩の間にとめて描きながら的確な把握を完うしてゐる。先年しばしば挿繪などに見えた走りすぎた手輕な俗影はここには全く姿を消し、熱意のこもつた描寫が端的に重點にふれて行つて、生粋の描寫を遂げてゐる。

田村の素描も質の上では同じ素地の上に立つものだが、もつとのびやかで廣い表現がある。出るべきものが出盡つてゐた同君の近年の油繪にたいして、これらの素描は遺憾なく健康な筆力を誇示したものである。

第二室について衆目をひくのは第十室であらう。坂本繁二郎作品特別陳列である。かういふ獨自な色彩效果は早急な試みでは憐れな作り畫となるが、氏の永年に互る丹念な追求は遂に何か根深いものに達してゐるに相違ないが、それでゐてすら、こゝに陳列された作品を通じて畫家の繪心が自然に充満し切つたものは決して多くないところから見ても、かうい

ふ描法の困難なことは並大抵でないことがわかる。

ちつくりと畫面がこもつて、こくのあの厚味の奥から自ら浮び出て来る形象、色量のニュアンスを仕上げおぼせた作品となると數點を數へるに過ぎない。少しでも筆が緩めば混沌とした陰影がくすぶるといふ傾向がある。確固とした形の構へが内面で立派に整へられたものだけが充ちた效果を上げてゐる。氏の愛好する馬よりも、かへつて老婆とか家政婦とか人物の方に、しつかりした表現が見られる。

熊谷守一の作品も時に濛い色調の快さを見せたものだが、今年のやうに觀念的な解釋になるにつけ表現が平坦になり吸収力がなくなつて行く。

野間仁根三點は小成に安んじて往年の生氣を見ない。岡田謙三も今年は少しの積極的な意氣込がなく重い沈滞の影がある。高岡徳太郎、田口省吾共に色彩に、もつとこまやかな反省が欲しい。北川民次の風景にも先年の逞しい描寫がすつかり姿をひそめてゐる。

吉井淳二「母子」においてや、片鱗を窺はせたが、背景が粗末であつた。鍋井克之の「蓼」米良道博の「牡丹」に喜ぶべきものがあるが、その他後援續かず。

(富永惣一)

(彫刻) 東朝二科の彫塑は、一般出品などに、未熟でも暢々したものもあつて面白いところもあるが、今年あたりは一

美術展覽會 (九月)

四三

般に低調で物足りない。

渡邊義知の「雲」といふ飛行士の小像  
は、本彫の手法に何か新しいものを求め  
て試みてゐるが、造形感に密度のない感  
がある。笠置季男の「猛爆」は、作因に  
爆撃の煙の塊を扱つたもので、困難な試  
みを、ある程度にこなしてゐる。八柳恭  
二の石影「旗手」は、旗の部分など面白  
いが、全體の姿態の構成は陳腐だ。「首」  
は澤山絞んでゐるがその中で、乗松巖、  
野水吉吉など比較的佳かつた。

この一兩年、彫刻にたいする一般の興  
味が少しづつ次第に擴まつても深まつて  
も來るやうな傾向が見える。現在の緊迫  
した國民生活の中で、眞率直截な國民感  
情の動きが、一切の心理的粉飾よりも最  
も原始的な素朴な造形の喜びを基調とす  
る彫刻を愛好するのだと考へることは、  
いさゝか牽強附會に過ぎるであらうか。

一方においては國民感情の昂揚は、自  
らこの稀有なる時代の體驗の記念碑を求  
めてゐるのである。今こそ彫刻家の眞に  
奮發しなければならぬ時だと思ふ。(今泉  
篤男)

(繪入) 繪畫二四二八點、彫塑一六八點  
(入選) 繪畫三二〇點、彫塑三二點 (二  
科賞) (繪畫) 大澤昌助、早川國彦、田邊  
三望松、飯田清毅、井上覺造 (彫塑) 八  
柳恭二 (岡田賞) (繪畫) 葛西康 (會員推  
薦) (繪畫) 小林喜一郎、田中忠雄、榎倉  
省吾、小出卓二、柏原覺太郎

出品目録 (會員、會友)

繪畫

滿船飾同

造船△柏原覺太郎

五月△松井 正

出漁 同

閑日 山口 操助

同教徒

みのり川北 信三

△高井 貞二

市野長之介

默想する少年達

南方素描 (十六點)

桑原 實

宮本 三郎

バザールより見

マレイの少女

坂本 益夫

マレイの少女

好日子

インドの青年

△橋本 徹郎

ユラシヤン

森 川原 章二

同

漁村 寺田 榮枝

同

雪國の人々

マレイ風物 (水彩)

△藤井 二郎

信

海の人々

同

△荻野 正雄

同

金剛力士

同

越後毛渡澤

同

△服部正一郎

同

春秋 同

同

和風 小林 良曹

同

蒙疆の草原

同

青山 龍水

同

更紗を描く

同

山田 等

同

波 △大澤 昌助

同

運河 同

同

征途 奈良岡正夫

同

マレイ娘

同

椰子樹と中島

同

米比投降兵等

同

●向井 潤吉

同

ビルマの女

同

●田村孝之介

同

印度の女

同

雨來 同

同

雨の蘭貢

同

捕虜 (印度兵)

同

南方素描 (十三點)

同

白蛾 名嘉真武男

同

初夏の山中湖

同

●鈴木信太郎

同

奈良の春

同

静物 同

同

村童ら寺門 弘

同

牧草 ●島崎 鶏二

同

同 同

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

河鹿 ●横井 禮市

同

△小林喜一郎

同

冬の林同

同

朝の森

同

●濱田 稔光

同

眞畫の森

同

夕暮の森

同

花賣り山中 菊代

同

花 中西 欽三

同

麥の子竹内 一

同

在りし日の修治

同

兒玉 勝次

同

車人形「飛脚」

同

長谷川勝人

同

おて、

同

●篠原 來介

同

田植 同

同

神戸風景

同

薄煙 ミツ

同

石楠花高木 壽子

同

風景長谷川三千春

同

夏の子供

同

黒田 祐治

同

採果 葛西 康

同

湖國のみのり

同

●鍋井 克之

同

風塵き日の湖畔

同

●同 同

同

●同 同

同

●同 同

同

●同 同

同

夜 同

同

夏 同

同

多福多壽多男子

同

●黒田重太郎

同

牡丹 (紺の背景)

同

八仙花

同

●國枝 金三

同

白樺 同

同

さくら (吉野山)

同

越後毛渡澤溪流

同

●野間 仁根

同

葛飾の子供

同

子供労働

同

少女像

同

△原 勝四郎

同

窓際 同

同

空と水 (山湖)

同

●宮本 三郎

同

同 (海)

同

同 (水郷)

同

黄色の日傘

同

●山口 省吾

同

黒い帯同

同

温室の花

同

加藤タキノ

同

皇守門柳澤 松一

同

架像 大矢 悦好

同

酒田人形

同

大道あや子

同

同

同

北京の旅より

棟方 寅雄

トマト畑 築山 節生

演へ行く道 北川 民次

兄と弟伊藤 信夫

寧樂遺構 多木 透哉

生垣 上野山 充

河北省の少年達 大場十四路

テューリップ 庄司 道子

網と漁夫 ○酒井 亮吉

娘と獲物 同

虫ばし中出とみ子 閑庭 千葉 精三

噴水のある風景 定方 希一

野菜車小島 詰治

小休止澤田 哲郎

丘に立ちて 三芳 伸吉

壺屋 大嶺 政敏

櫻雨時ノ奈良 清水 富久

秋の山畑 ○福島金一郎

憩ひ 同

早春△榎倉 省吾

白鷺城同 宮島 庸二

案山子君家 三郎

夕月 小島 大輔

丘の街(承德) 高山 道雄

十七の鶏 小林 武夫

北漢山新木正之介 農場 伊藤 泰造

網 竹内 喜助

小國民越智 義男

友達△安部治郎吉 冬空 吉田 一雄

殘照 丸樹長三郎

ハケ岳谷 貞

年々新村尾 克己

越前笏谷石塚堀 荒木 道夫

孔子廟附近(南道) ○松本 弘二

バンド(上海) 同

閑境 朴 商 玉

静物 高橋隆比古

五月 田邊榮次郎

春雨 平川 要

秋 西田 静子

橋 木村 俊雅

あざみのある風 山口 南章

二少年原田 直康

夏日 瀧本 正男

夏の作冊路 宮島 庸二

百合 奥村 隼人

雪景 瀧川 武雄

友の像安藤 幹衛

カーネーション 辻 清子

牛牧風景 筒井辰之助

もてつ小西 光雄

子供 矢川大治郎

天平遺構 和田 三郎

志賀高原 酒井ひさ子

蚊帳 戸田 忠良

雉子 芝野 武男

乙姫の溪流 水野 勝美

感謝 伊東 勝美

鶏 △坂 宗一

井戸端久野 修男

夏の高原 木村 光江

日の丸サイン 服部 義夫

木蔭にて 御供 長夫

支那寺ノ草臥天 今村 春吉

赤毛氈の上 松本 正子

防空 小野岩太郎

籠を編む人 吉田 稻彦

ひとやすみ(女僧) 金仙 洞人

忠霊塔吉武 友樹

熊捕り 新井ふみ子

△旭 亮弘

立葵 増水 壽美

車井戸宮野 進

花咲く里 岡本 耕介

欄間 山川 孝吉

高原風景 野村百合子

武庫川の上流 森 貞

反射鏡のある静物 木庭 密樹

陶器を描く 西村 五郎

花 木下百合子

夏の山梅原 英子

民族の遺跡 平山恵多路

日曜會館木 猛人

赤い洋服 三宅 輝夫

造船 森 英

湖邊涼風 伊勢田良作

鏡 △佐藤吉五郎

厨房静物 秋山良太郎

子供たち 田川 寛一

仕合に見入る子 宮内 秀雄

供 長良川安藤 隆男

月・花・透明燈 新井ふみ子

沙漠の中の町 ○峰岸 義

ダラダ・マリガ 同

對空器鈴木 進平

孔雀明王 宮城 三喜

夜 栃木宗三郎

花 阿部 金剛

紋様(一) △浪江勘次郎

葛蒲△伊藤久三郎

畫室△佐野繁次郎

野薔薇 △村田善史雄

湖水(北京) △野村 守夫

立華△井上 覺造

遠雷 青木 壽

寒島 井上 賢三

地藏尊岡田八三郎

南の空から 菅能由爲子

菊(イ) ○吉原 治良

菊(ロ) 同

野分 藤田金之助

湖 齋田 需

伸び行く日本 赤松 俊子

塔 △伊藤 研之

花と樂器 村田 耕

島民 能間 弘

花 田中 君子

伐採△桂 ユキ子

大ブリタン王國の末路難波空像 立てる像

△松本 俊介

小兒像同

静物 △ハーバート

山羊 岩本 恒三

夏の朝榮原 葛造

夏庭△錦 義一郎

月 同

牛小屋仁岸 創路

水邊綠風 北川 實

夕ぐれ中村徳二郎

嶺山 白銀 功

少女 佐藤眞妙子

漁村 永井 武夫

梅咲く頃 清水源太郎

梅林 川内 親

圓月島三渠 參平

リース小田 正春

野外肖像 同

讀の港(張家口) ○伊谷 賢藏

城址殘雪 ○古家 新

牡丹 同

冬の長壽山 朴 成 煥

讀書 安波 新吉

南京 長谷川初女

室内 佐藤 八郎

室内 玉崎三枝子

庭にて田村誓志那

早春山容 岡本 誠

いもん宮永 岳彦

トマト小林 森次

室内 早川 貞誠

朝 森 由太郎

收穫 池田 兼徳

夢の話 △田中 忠雄

良民たち 同

朝 △清水 刀根

夕風△近藤長三郎

人形△椎塚猪知雄

秋△故尾澤 辰夫

炭を焼く 川合喜二郎

溪流 長谷眞次郎

カナリヤ 河野 道紀

草上果物 山本 秀臣

飛彈大家族の家 中野 亨

畜業と虫 成瀬佐紀子

黒の服伊川 寛

山麓 周 襄吉

室内 花谷 時子

勤く婦人達 △藤川 榮子

休息 有隅 善郎

裏町ノ家 杉山 榮美

英霊の丘 伴 敏子

漁村 中村 董一

首夏 柴田又太郎

齒科醫像 萩原 英一

山で働く人 中野安治郎

庭 桑野 孝一

玖摩川井口 淡

シヤボン玉 渡邊 澄子

文樂(伊賀越岡崎の段) 伊東市太郎

高原佐々木宗一郎

椿咲く頃 西出 外吉

F留守宅 平野 弘

草上△鶴田 宏

岬の午後 △田邊三重松

晩春の耕地風景 同

竹林 池上 丁一

七夕送り 内田 糸一

娘二人高井壽三郎

小供 田中 一郎

門 井上 孝治

共榮之丘 松下 氏紀

僧 遠藤 了敬



山村の一隅	支那服近藤 歌子	庭	田中鶴子	我愛國の私	石野 隆	谷出 孝子	小川庄之助	(仔牛)同	コタンの酋長
川田 茂	庭の一隅	ひよこ松見 秀子	馬 中野 雅晴	ひぐらしを聴く	飯島 八郎	下川都一郎	かばちや	胸像 今 ヤヨ子	旗手 八柳 恭二
石置場ノ子供	浅井 康男	少女 玉井 安武	暮近き森	庭 藤江 志津	三人圖山谷 英一	門 三田村武雄	無花果と女	△柳田 昌	胸像 村田 虎次
鈴木 幸雄	收穫 酒見 敏雄	寫生 原 覺	間瀬 謙平	庭 堀江萬壽男	井戸端(滿洲風景)	松島 順	志摩 土岐 國彦	△中堀 正孝	男胸像 菊雄
野外保育班	爽夏 太田 四郎	石切る山	船 園谷 敏樹	元氣なエンゼさん	△山本不二夫	水邊 日高 健泰	子供 天野家榮子	青年 大橋 浩吉	立像 妹尾健太郎
仔山羊岩月 光金	江連 正	海邊の花	森の中の家	深林の放牧	△早川 國彦	河畔△飯田 清毅	影繪 同	緋 齋藤 愛子	女ノ首長谷川雅司
うちわ井寄 武夫	小谷 良徳	港の人々	農村と兵隊	夏 前林 章司	夜の雨進藤 清	風景 佐藤 正也	散策 石川 新一	屋根 島口 信一	湖畔 井上 安男
秋の風景	飯島 貞子	お掃除末永 一夫	土・三人	診察室草川 綾子	公園にて	小川 勝藏	滿洲風景	春宵△加藤 敏子	梅雨霽戸島 孚雄
甯の燈ちかく	平井 康正	お掃除末永 一夫	二少年	△山本 直治	桃 高須 操	石灰小屋風景	初夏の田圃	松島 勇	綠の流瑠澤 好一
花	渡邊 一男	征途 熊野 俊一	△山本 直治	鮮 東本 春水	人形(連獅子)	中山 安	雛節句西山 閑二	鍛造 十銀廣太郎	像 杉本 孝一
仁王像大賀 正	豊國	吐獸特右旗の子	早春の海邊	平川 雅夫	命名の日	安達 實夫	お仕事中野うめよ	山村風景	橘野 松惠
山村風景	山下 松惠	安達 實夫	地下鐵細田 浩	室内 西阪 修	黄衣 大塚 與志	牧舎 花井 信雄	飛驒の家	我部 政達	青い服原 正治郎
満洲風景	濱野 長正	救護班大鹿 秋夫	室内 加藤 丈策	客待ち玉澤 潤一	飾りをつけた馬	取島 敏	覺園峰の朝	指田 由米	鶯 △津田 周平
濱 高橋 二郎	渡邊清酒三	梅咲く庭	鶯 △津田 周平	工兵 三橋兄弟治	閑畫 藤田 薰	牡丹 渡邊 信正	建物と女	小谷野半二	テラコッタ小品
鶯 △津田 周平	工兵 三橋兄弟治	閑畫 藤田 薰	牡丹 渡邊 信正	建物と女	小谷野半二	テラコッタ小品	荒木川	昭利六	鴨井 正



放牧三馬 昭和七 石橋正二郎  
風景 昭和七 赤塚 秀雄  
馬 昭和九 千葉龜之助  
放牧牛馬 昭和十  
林檎と馬鈴薯 昭和十五 古野 喬一  
柿と林檎 昭和十六 谷村 敬介  
柿と栗 昭和十六 太田 市藏  
放牧 新本 秀雄  
水よりあがれる馬 野村 恵二  
山元春舉寫生畫卷展並宇野三吾作品展  
一日一二十九日 大禮記念京都美術館  
同館の主催で山元春舉の寫生草稿のうちから約四十卷を撰んで陳列、その他寫生帖十冊、寫生用具も出陳された。同時に工藝部に於ては宇野三吾の作品をその先代仁松氏の作と併せ陳列した。

春舉畫卷展目錄

能登地方 同二  
比叡山 同三  
風峽 大正 二年 小島  
伊吹山 大正 四年 馬  
越中山 大正 三年 瀧  
比良 大正 三年 瀧  
箱根 瀧  
戰場ヶ原 瀧  
富士裾野附近 上高地ヨリ穂高  
人物 連峯 昭和 四年  
松茸 昭和 二年  
ダリア 黒部 昭和 二年  
檜・落葉松 月ヶ瀬大正一四年  
櫻・梅・落葉松 妙義  
松一 鏡御岬(着色)  
昭和 三年

筑後川惠蘇ノ宿 昭和 三年  
(着色)昭和 三年 英彦山(日向神  
箱崎神社演)へノ途中(着色)  
英彦山(着色) 昭和 三年  
昭和 三年 高千穂峽  
英彦山昭和 三年 阿蘇 昭和 七年  
上佛炎ノ見ユル 鶴戸油津梅ノ濱  
風景(着色) 昭和 三年 昭利 七年  
日向神ノ岩山 霧島山昭和 七年  
(着色)

參考品

寫生帳 明治十八年ヨリ明治四十年頃ニ  
至ル寫生帳十冊  
寫生用具  
大倉集古館現代畫展 一日一十一月二  
十日 赤坂・同館

同館藏品を十二・三點づつ十回に渡つて陳列した。主要な作家を挙げれば、大觀、觀山、栖鳳、玉堂、百穂、叔彦、古徑、清方、素明、契月、曼丹、溪仙、芋錢、印象等。  
滿洲建國十周年記念劉榮楓滿洲風物畫展 二日一六日 日本橋・高島屋  
讀賣一建國十周年を記念する滿洲國洋畫境の重鎮劉榮楓氏の風物畫五十點の展覧で、夏の滿洲と題する「鏡泊湖」瀑布は、落下する水勢が、壓倒せんばかりに迫真性を以て描破された場中力作の一つ、他に開拓村千振を描いた「夕月の開拓村」や白樺を描く「東滿の密村」等の作はこの作家の身についたもので、松花江の「夕映の流れ」蒙古風吹く曠野の小品は大家らしい風格を傳へる洗煉さ

れたもの、慾をいふならば、總じて中間色の夢幻美に浸り過ぎ、色彩の單調化を牽してゐる趣がないでもない。

土田夢僊スケツチ展 二日一八日 銀座・松坂屋  
陸海軍献納東丘社協同制作大東亞戰爭畫展 三日一九日 日本橋・高島屋  
第二回創元會展(洋) 五日一十六日 日本美術協會

東朝一小柴錦侍の犬に取材した「育む」をはじめとしておだやかな手法は嫌味こそ認められぬが、遅ましい意欲に乏しい。阿以田治修「防春」、鈴木千久馬「秋酣」には單なる寫實から離れて更に深いものを追求せんとする氣構へは認められるが、中途半端であり、むしろ牛島憲之の「牛」外二點に示されたねらひに作家としての勇敢さがあり効も収めてゐる。

〔陳列數〕 一六一點(創元賞)(第二賞) 小林邦二(第三賞) 川口四郎、坂本幹男〔岡田賞〕 淺井政勝(會友推舉) 小林邦二、季石樵、柏木治子、手島眞渡邊大處第七回個展(日) 六日一八日 銀座・養生堂

明期美術第九回展(日) 八日一十七日 東京府美術館  
讀賣一同人狩野晃行六曲一双の「春秋日月」櫻と紅葉を描き更に二曲一双に「牡丹獅子」と氣を吐いてゐるが「春秋日月」いさゝか考へ過ぎてか、金色の日は月にまがひやすく櫻の樹幹も平凡に落ちたの

ではないか。むしろ「牡丹獅子」の風趣が佳作、木村村劍爾郎「富岳圖」六曲半双は情熱あふるゝ大作だが色調構成共に綺麗ごと過ぎ「富岳」の靈氣が望ましい。東條光高は自家藥籠の佛畫に異色を見せ禪花六題の中、獨坐大雄峰は出色、山下昌風は「對敵放送」「南の幸」と從軍畫材に「明朗賞」を獲得同人推舉となつたが「對敵放送」は壘壕説明が不足し從軍記者、放送者、兵各個の顔の表情がとぼしい、研究賞内田光胤の「興福寺金堂」は明朗調の努力作ながら、内容空虚で今後待つ、一般作では宮部昌幸の「花菖蒲」のすなほさを買ふ。

〔搬入〕 九六點(入選) 二七點(明朗賞) 山下昌風〔研究賞〕 廣瀬大晃、内田光胤 中野正草、稻田玉穂〔新同人〕 山下昌風 吉田錦穂〔新盟員〕 伊原石州、金井品光 近畿聯合工藝展 九日一十二日 大津公會堂  
佐々木邦日本畫展 九日一十五日 日本橋・三越

第三回山南會展併土田夢僊遺作陳列 十日一十三日 大禮記念京都美術館  
土田夢僊遺作陳列目錄

題名	所藏者
芍藥	倉敷 大原孫三郎
蓮	同 同
廣蓋下圖二幅	同 同
落花香魚	倉敷 大原孫三郎
大原女	文 九 京都 吉田 忠
散華	文 八 同 同
熊野山	同 同

[illegible]

雀寫生	樓寫生	模寫 女子騎馬人形	錢舉鵝圖模	寫 俱舍曼荼羅模	寫生	寫生帳
同	同	京都土田千代	同	同	同	同

大東亞美術工藝展 十一日—二十日  
大阪市立美術館

津田正周個展(洋) 十二日—十五日  
數寄屋橋・日動畫廊

棟方志功油繪展 十二日—十六日 日  
本橋・高島屋

東日一版畫家として國展に重きをなすこの作家の日本畫展に次ぐ油繪展で、その多才にいさゝか驚かされる、全體に一

種のげて趣味が出てゐる點は日本畫の場合に同じだが、「眞唯中・日出」などふてふてしい重厚さがあり、「ちよゑ晝寝」なども筆觸は粗いが要領は心得てゐる、觀て楽しいのは那智の神瀧と富士山の圖。

石川縣覽賛美術展 十二日—十九日  
金澤・公會堂 翼賛會石川縣支部、石川  
美術文化協會主催  
〔審査員〕石井柏亭、吉田秋光、吉田三  
郎

第二回航空美術展（日、洋、彫、ホ  
ター）十二月二十日 日本橋・高島屋  
大日本航空美術協會、大日本飛行協會、  
朝日新聞社主催 陸軍省、海軍省、逓信  
省、情報局、大日本防空協會後援

東朝——對象を特定したかゝる美術中

「航空」のそれは、對象自體が發展性あるがゆゑに、將來大いに期待をもつと同時に、作家自身も頭腦的に多大の苦心を要する。手馴れてゐる藤田嗣治、宮本三郎等記録畫の色彩を持つものでは田村孝之

介の「軍神最後の戦闘圖」は壯絶さを傳へるためへの色彩の苦心を窺ふ。田中正夫の「水上機の出勤」等克明に描寫して行くことも相應に進歩し、これは森山麥笑が不便な材料をよくこなしての「艦上休翼」を示したとともに喜ばしい。これ

ら航空機に正面から向つたのに對しては、情感に重きを置いた居串佳一「風雨の出發」山本日子士良「爆音」高山道雄「北の護り」など年毎によき方向に進むはよい。

〔選信大臣賞〕（日本畫）岩崎鐸（陸軍大臣賞）（油繪）高山道雄（海軍航空本部長賞）（油繪）田中正夫（朝日新聞賞）（日本畫）森山麥笑（油繪）山本日子士良（日本航空美術協會賞）（油繪）關口文雄、

島田四郎（彫塑）有松保（ポスター）駒  
井達四郎〔大日本飛行協會賞〕（日本畫）  
酒井亞夫（油繪）宋永胤生（彫塑）齋藤  
鎮夫（ポスター）十時惟臣〔大日本防空  
協會賞〕（日本畫）齋藤夢彦（油繪）山谷

英一（ボスター）菅井汲  
荒井龍男近作展（洋）十三日―十五日  
銀座・資生堂  
田中寅三「海と船」油繪展 十五日―  
十九日 勸寄屋橋・日動畫廊

煙雲會第四回日本畫展 十五日—二十

日上野・松坂屋  
小磯良平藝術院賞受領記念同顯展(洋)  
十六日―十九日 神戸・神戸畫廊  
在學中より昭和十七年までの作品十四  
點を陳列した。

第八回 現代會展 (日) 十七日—二十二日  
日 日本橋・高島屋  
第十三回 東京みづゑ會展 (洋) 十七日—二十二日  
新宿・三越  
白日莊主催現代大家新作日本畫展 十七日—二十三日 日本橋・三越  
三美衛園第一回展 (日・洋) 十九日—二十三日 日本橋・三越

―二十五日 日本美術協會  
讀賣―公募第一回展洋畫では宮川仁の  
アイヌの熊祭りの一部を描いた「祭典の  
追憶」が見えたへのある大作、藤田助吉

の「五月」も小さいが堅實、日本畫は  
だ足竝揃はず伊藤仁三郎の「萬籟圖」の  
大作も買へず齋藤氏賞西正世志の「うづら」  
は主題の「うづら」が顔を出さない  
高級童畫繪物語り。

第十四回 朝倉彫塑展 十九日—二十日  
日 東京府美術館  
第三回 春臺秋季小品展 (洋) 二十日—二十一日  
二十六日 銀座・三越  
難波田龍起個展 (洋) 二十一日—二十二日

五日 銀座・青槐社  
大輪畫院展(日) 二十一日—二十九日  
東京府美術館  
讀報—五同展で美術館出陳の處女展、  
主宰小林彦三郎「錦秋」は六曲一双に得

意の楓の紅葉にかけす鳥を配した貫禄

分の快作であるが、更に葉一枚一枚の型の變化と幹の重厚味に配慮されたならば效果一段と擧つたらう。楠泰白光「山羊」は褐色の地に荒々しい筆緻で山羊の群が一杯に描きつめられて呼吸苦しくなるので、清浄な空氣の餘白が呼びたくなる

立脇泰山「天心」線描朝顔に童女を配して快調、佐々木順石戸開きの「神舞」六曲一又は本領を發揮したもの、就中「天受賣命」舞ふ右半双は佳作、これに神々の群像描寫不足の左半双の爲に減點となつて惜しい。諸永青晁は「三十三間堂裏通」が佳作、一般出品では松山廣幸の「焙岩」の洋風筆緻が目立ち小倉皇花の「きさらぎ」は甘い。永塚栖園「勝利の國」が擧げられ、安田善五郎の「木蓮」は變り種出品の一つ。

「搬入」二〇八點「陳列數」五三點「入選」四九點「佳作賞」花輪玉甫、篠田忠康、新田大耕、諸永青晁、多引想起「松影賞」西之坊水勢、西澤正臣、伊賀上雄風、松山廣幸、伊藤文乙「功譽賞」楠泰白光、佐々木順、廣井陵雲、井口岬陽、

「準院友」花輪玉甫  
田村孝之介ピルマ・泰風光人物淡彩素描展 二十二日—二十七日 京都・大丸  
新美術人協會秋季小品展(日) 二十三日—二十五日 銀座・資生堂  
東京美術學校卒業制作展 二十三日—二十五日 校内陳列館及東京府美術館  
渡邊進油繪個展 二十三日—二十五日 數寄屋橋・日動畫廊

美術展覽會(九月)

劉生案描畫稿展 二十三日—二十六日 神戸・神戸畫廊  
第二回有秋會展(日) 二十三日—二十九日 大阪市立美術館  
第七回新制作派協會展(洋、彫) 二十三日—十月四日 東京府美術館  
東朝一第一室の「大東亞建設に捧ぐ」はそろひの八十號と記念碑試作で取材に無理多く、たゞかゝる課題下に制作する態度を買ふ。伊勢正義の肖像は一水會の木下孝則のそれと同様、對象を掘下げて行く態度は見受けられるが、これでは内容は空虚。西田勝「ブランコ」、竹谷富士雄「家族」は色調等技法が借り物的で、觀者をひきつけぬ。そこに行くと脇田和の「一人」「書室の子」は借り物でない適當な歪形とよき色調によつて觀者へ種種の想像を起させ近來の佳作。三田康の作品もそれにつゞくものであるが、畫面の不整と説明的に流れ、幅を狭めてゐる。そこで取上げるのが猪熊弦一郎の「戦の後」である。これは觀者を畫面外のこと

にまで及ばせ、胸をせまらす。それは技法からかもし出されるものとはいへ、精神的なねらひと技術との合致へと進んでゐるからである。それにたいして「マニラの港」は一步手前にあるもので、佐藤敬「マニラの街」小磯良平「ソロの墓町」と同様これから進んで藝術家は立派な藝術品を造り出さねばならぬ。リズムまでも感受出来る「ジャワの踊り」その他多くのスケッチを成果とした小磯や佐藤

敬の勉強振りが結實するのを待つ。荻須高德の「ジョホール・バル」「野」「熱河」は精神的內容においては猪熊の「戦の後」ほどには行かぬが、技は「ハノイ」の油彩と共に場中を壓してゐる。その點荻須の今後は精神的修練にある。この事は潤ひのある美しい中西利雄の「樹間」にもいへることで、一段と自然の深さと大きなを知るならばあの程度にはとゞめぬはず。彫刻では本郷新「古老」が目につくからである。

【新作家賞】(繪畫)竹谷富士雄、西田勝、富田一夫、小山良修(彫刻)井上信道、里内直次(岡田賞)(繪畫)瀨島好正

出品目録(〇會員)  
大東亞建設に捧ぐ(會員に依る)  
工兵 小磯 良平 若鷲 坂井 範一  
南方飛行 佐藤 敬 敵影すてになし  
待機 鈴木 誠 戦果の蔭に  
小供と兵隊 脇田 和 ニュース  
硝煙 猪熊弦一郎 小松 益喜  
ジョホールバル 荻須 高德 祝祭(東亞建設を壽きて)  
日本の秋(大詔奉戴日) 内田 巖 黎明 手島守之輔  
北支の思ひ出 今村 俊夫 悠遠(室生寺金堂東面)  
朝 伊勢 正義 畫廊の横町  
東亞の子供 伊藤 繼郎 寂光(室生寺金堂西面)

同 修理場鈴木 新夫  
車大工の家 〇内田 巖  
人物〇中西 利雄  
少女像同  
樹間 同  
休息 同  
炭焼 太田 忠  
水車小屋 同  
燈下 曾我 英彦  
南方の庭園 田中 修  
南方風物 同  
岩 濱田 龍夫  
部屋 増田 雅子  
静物 川合喜榮子  
光箭〇鈴木 誠  
朝 同  
道 谷岡 文雄  
霜の朝田淵 巖  
夏の牧場 小關 利雄  
初秋 長澤 昇  
工場へ(東立ちの唄) 藤澤 典明  
農家 柴田 善登  
ブランコ 西田 勝  
お勝手同  
少年 太齋 春夫  
東尋坊同  
娘 同

桐澤部隊長  
〇内田 巖  
レース服の路子 同  
横顔 同  
少女と提灯 同  
母の像同  
休息 岡田 正二  
つくるひ 齊藤 正夫  
小飯店小川 義二  
練瓦のある風景 桑田 道夫  
母の像日高 大三  
カリデヤチの戦蹟 〇小磯 良平  
ジャバの踊りA 同  
ジヨクジヤの路切り 同  
パリの婦人 同  
マラン市街遠望 同  
インドネシアの娘達 同  
パリの風景 同  
パリの少年 同  
バリの門(マンデー風景) 同  
シンガラジャの娘 同

支那街

小磯 良平

ニラ

同

驚がれてゐる船

熱河 同

朝 〇伊藤 繼郎

春の雪景 (志賀 高原)

報道戦士慰靈碑

(會員共同制作)

カリヂヤチの雲

幼兒 〇脇田 和

國友俊太郎

安南人街

朝 同

植物園風景

巴レンバン落下傘降下記念碑

(會員共同制作)

ジャバの踊り

二人 同

緑衣 〇伊勢 正義

森の中大住 閑子

防空準備

初夏 佐藤 辰男

空の防人 (落下傘降下記念碑) の一部

(會員共同制作)

パリの踊り

露臺にて

赤いチョッキ

室内 〇三岸 節子

古器と女

家族 同

建設戦散華の女性の爲めに

(會員共同制作)

カリヂヤチの眞

夏 〇岡田 淑

挑 同

静物 同

貝のある静物

葛家 若松光一郎

習作 〇西 常雄

(會員共同制作)

ボルブドウール

群像 〇山本 仁朗

薇薔咲く

室内 同

早川 正

葡萄棚 同

青年頭像

習作 〇谷村 静江

ソロの裏街

工場街 〇上野 省策

マニラ港

裏街の一隅

母の像 瀨島 好正

海 大森 朔衛

淀井 敏夫

立像 〇田畑 一作

ジャバの踊りC

〇今村 俊夫

〇猪熊弦一郎

山 井上 幸

馬 井上 勝衛

八達嶺工藤 正義

〇吉田 芳夫

裸女 〇小森田 春雄

モロの女

倉庫裏津田 出之

戦ひの後 (コレ ヒドール)

森で遊ぶ子供達

豊かな土地の子

長城 同

青年像 同

〇早川 謙一郎

コレヒドール戦

待つ間 樹井 一夫

自動車残骸

街 丸山 正三

傘 川上 榮子

コップと壺

矢津 朝紀

立像 〇伊勢 典賢

同A

風景故高島 千代

飛行機の残骸

裏通 同

火 〇内田 武夫

源平盛衰記二十

奈イフとトラン

同 (開途)

イゴロットの女

〇三田 康

千代紙大嶺 利子

白い翼 同

倉庫 富田 一夫

秋夜 同

空地の花園

同 (山) 同

街 同

動物園ノ泉

朝顔 加藤 孝一

舞臺下演奏

伊川 藤義

同

同 (山) 同

同

戦果B (アメリカ潜水艦)

庭の一隅

窓邊 村尾 純子

自畫像 横山 泰三

同

同

同

同

戦果A (空の要塞)

庭の一隅

窓邊 村尾 純子

自畫像 横山 泰三

同

同

同

同

二人の女

庭の一隅

窓邊 村尾 純子

自畫像 横山 泰三

同

同

同

同

同

庭の一隅

窓邊 村尾 純子

自畫像 横山 泰三

同

同

同

同

同

庭の一隅

窓邊 村尾 純子

自畫像 横山 泰三

同

同

同

同

同

庭の一隅

窓邊 村尾 純子

自畫像 横山 泰三

同

同

同

同

した技法ではないが、「雪景」には自然照のきびしさを認める。中村善策は大らかさが乏しくなつたが「山國風景」には一應詩情がある。木下義謙の「晴嵐」、山下新太郎の「藤」佐藤功茂の「初秋の池」などまづいゝ方とすべきだらう。この會にめづらしい生活的な取材では、富樫正雄「詰襟の人」、近岡善次郎「土間」荒井一郎「仕度」などを採る。女流では深澤紅子の「少女」をその素直さで注目する。安井曾太郎の「高地風景」は連袖會出品畫と大差ない凡作。還曆記念の回顧陳列ふたつでは柏亭が流石見應へする。近作「或る尼僧」は手堅い佳品といへよう。生馬の滯歐作は新制作で藤島の滯歐作を見たあとでは、いかにも骨がないといふ氣がする。(尾川多計)

〔搬入〕一三〇九點(入選)二一三點  
〔一水會賞〕奥田郁太郎、眞下慶治〔岡田賞〕仲田菊代〔具方賞〕小野藤一郎  
〔會員推薦〕近藤光紀、中村琢二  
出品目錄(〇會員)

明神嶽 丘上の烟  
○安宅 虎雄 青木 純子  
電信草と少女 蕙ふ女達(水彩)  
同 荒谷直之介  
八ヶ岳同 釣魚〇池部 釣  
仕度 荒井 一郎 湯町 同  
斜陽 同 麓の春伊藤 立己  
大同石佛寺 井上 正子  
支那の裏街(水彩) 風呂敷の上のか  
彩)岡部 祇容 ぼちや同  
水郷 阿部 七郎 杉 一太萬壽三

美術展覽會(九月)

少女 同	高原初秋	シルバ岬眺望	鬼舎 小竹 義夫	關戸伊三郎	琳子 同
暮れ 石山 富彦	尾澤 勝朗	金丸 直衛	窓 同	漁村 三角嘉壽男	臺ヶ嶽千頭 清策
修造院の畫	山村の初秋	ランプのある裏手	樂器のある静物	冬の海 同	鹿澤 同
池谷 寅一	同	同	近藤 光紀	秋果〇田崎 廣助	静觀刀自像
岳麓の晩秋	奈良の公園	逆光の縁(水彩)	練習の後	初秋松林	叔父の像
同	小野藤一郎	金子 富藏	同	同	同
魚村風景	山雨 同	鹿ノ子百合	買出しに	阿蘇山 同	同
猪俣 克史	水邊 同	片田 三吉	同	農家の片隅	同
ひととき	朝 大館 健三	少女 同	方小姐近藤 吾朗	同	土間 同
七ヶ濱の夕月	團扇 同	夏 菊地 秀一	うらわを持つ	同	讀書 同
七ヶ濱の松	ブル(A)	婦人像	坂本 正春	同	日傘さす女
同	金子 博信	〇木下 孝則	北京萬壽山	同	弦氏英太郎
春の標同	ブル(B)	鞍馬橋	佐藤 久雄	同	つれ
暮れ行く河原	同	〇木下 義謙	初秋の池	同	筒井 廣道
板倉 國臣	日曜日の上野公園	晴嵐 同	初秋の庭	同	多摩の村
最上川を望む(水彩)	刺繍 加藤 一豊	蘭川の水草	同	安房の漁村	多和 同
小原 博司	實驗室にて	同	山雨 齋藤 大	同	與三
奈良の森	同	木曾川 同	静 同	同	湯川の秋(水彩)
岡野 計子	近郊朝景	奥利根木下壽々子	晩秋 酒井 精一	同	静物 高田 誠
お稽古岡見 第三	甲斐 仁代	夏の午後	樹水 笹野順太郎	同	燒岳と大正池
スベインのシヨール	朝顔と飛石	同	窓邊 菅沼 金六	同	同
岡田 行一	谷間に鼓ふ	百合 木村 辰彦	山陽 柴田左千雄	同	春曉 同
笠間(2)	河上 一也	肖像 同	山の道須山 計一	同	山村 同
湖畔の庭	森の樹根	花 同	晩春 鈴木 良三	同	秋元湖畔
小栗 精	同	緑陰 黒田外喜男	涼風 同	同	高橋 卯八
畫集を綴る	苔むす菫溪	山 畔柳 興二	秋冷 同	同	斜陽 田中 悌六
大月 源二	庭園(一)	湖畔〇小山 敬三	沼向ふの嫁さん	同	老婆 谷内 俊夫
緑窓 同	狩野 壽一	少女〇高野三三男	末松 勇	同	深志城瀧川 太朗
夏菊 奥田郁太郎	庭ノ松 同	婦人像 同	室内 島 あふひ	同	奥入瀬の溪谷
ちいけ岳と中綱湖	殘雪の明神岳	うたゝね	閑庭双猫	同	(水彩) 瀧澤 清
中綱湖 同	加藤 水城	晩春の安曇野	子供の常會	同	マントンディ。 乾
室内 勝間田武夫	夏山 同	小平 郷	菅野 矢一	同	井上氏像
			夜の部屋	同	素譚 田代 光

山と川内藤	秀因	雪景	納富 進	山容	松田 晃八	○安井曾太郎
造船場中安	五郎	故郷の川	同	六月	同	山櫻 矢野 雄藏
魚市場の朝	同	山里の春(水彩)	野澤潤次郎	アイヌの遺風	松田 忠一	晩秋峠道
夏(1)	仲田 菊代	樹園小徑	能勢 眞美	アイヌの子守	同	梓川の秋
建築家T氏	同	黄色い家	同	初冬の富士(水彩)	牧野 正吉	紅葉の奥利根
薔薇(3)	同	樹木と池	同	Y嬢	松村 三冬	夏休みの子供達
鏡の中の肖像	同	窓ぎわ野崎利喜男	同	かたん林	松本 透	諏訪の秋
遮光幕の前	同	六月の庭	同	最上川暮雪	眞下 慶治	敏子さん像
鍋谷傳一郎	同	○磯 伊之助	同	雪國春近	同	八丁の入江(水彩)
外出	中川郷一郎	農家の裏	林 鶴雄	つゝじの池	松村 三冬	山中仁太郎
少年	中村三樹男	童女像	同	菜園	丸野 豊司	初夏の奈良
黒衣婦人像	中澤竹太郎	和風	同	初秋水邊	村上鐵太郎	青葉若葉(水彩)
茂子像	同	川ほとりの農家	久野 昌康	少女	源川 雪	渡邊 春宵
庭の藤中谷	健次	裏庭	藤澤 俊一	編物	同	船小や渡邊 徳義
秩父の絲染め	中畑 幸夫	國語教授	同	ピチカットのK嬢	森 寅雄	甲斐胸岳
落瓜	中西倪太郎	追はるゝカザツ	同	上高地晩秋圖	同	渡邊 正一
頂き目指す	名取 明德	少女	福田 新生	森 寅雄	同	日野春風景
セロを弾く男	中村 琢二	描く君	○不破 章	舊カイロ(水彩)	明治四四年	「頭像」が佳品。
朝の庭	同	赤いブラウス	藤 本郷 惇	巴里の宿にて(同)	同 年	〔陳列數〕 膠彩三一點、工藝四〇點、圖案六點、舞臺美術一三點、油彩五六點、
黄色い羽織	同	堀 忠義	○山下新太郎	アルカサーバの下(スベイ)	同 年	彫塑一八點(新協賞)(油彩)石井玲一、
M嬢像日塔	笑子	藤 〇山下新太郎	同	草の上(同)	大正 三年	(形塑)池上璣(奨勵賞)(膠彩)菅野剛吉(油彩)杉本延彦(彫塑)小林鳳堂、
編物	頼田 朋子	石佛	松岡 康一	紅蓮	同 四年	(工藝)吉田實(福島賞)(油彩)中村道
				老太々	同 七年	(Y氏賞)(膠彩)淺川秀夫(東洋賞)(彫

團扇を持てる	同 九年	團扇(素描淡彩)	同 年	屋後(素描淡彩)	同 年	ソレントの家(水彩)	同 十二年	燈下二少女(同)	同 十五年	洞	同 昭和 四年	梅雨季	同 五年	野尻湖	同 十三年	琵琶島	或尼僧	美術新協第八回展(綜合) 二十三日—十月十日 東京府美術館	東日—日本畫はまだ振はないが、新會友の土味川獨甫はちよつと面白い。大作「名曲茶房」は駄作だが、開拓地は注目すべきもの。玉村方久斗は例によつて達筆過ぎるが、「職長とその兒」は悪くない。洋畫では同人大久保實雄「少女」野澤武美「牧場」がよく、石川清「人物」柏谷正太郎「二歳胸品評會にて」が出品作では取上げられる。新會友石井玲一のものでは「拭床婦」を採る。彫塑の佳作は宮島資雄「下着」小林鳳堂「南國の女」が出色であり、同人白井保春のものでは「頭像」が佳品。	〔陳列數〕 膠彩三一點、工藝四〇點、圖案六點、舞臺美術一三點、油彩五六點、彫塑一八點(新協賞)(油彩)石井玲一、(形塑)池上璣(奨勵賞)(膠彩)菅野剛吉(油彩)杉本延彦(彫塑)小林鳳堂、(工藝)吉田實(福島賞)(油彩)中村道	第一回東北六縣日本畫家聯展 二十	六日—二十八日 若松市公會堂
--------	------	----------	-----	----------	-----	------------	-------	----------	-------	---	---------	-----	------	-----	-------	-----	-----	-------------------------------	--	--	------------------	----------------



小野竹喬個展(日) 二十六日—二十九日

大阪・高島屋

第四回縁巻會秋期小品展 二十六日—三十日

銀座・青樹社

第二回寫寢會觀賞會(洋) 二十七日—二十九日

銀座・資生堂

石原求龍堂の主催で、歐洲現代油彩畫十點を陳列した。

乾坤社大阪展(日) 二十七日—十月六日

大阪・松坂屋

院展京都都展 二十七日—十月三日

大禮記念京都美術館

吉田白流日本畫展 二十九日—十月四日

上野・松坂屋

青龍社第十四回展(日) 三十日—十月十一日

大阪・阪急

## 十月

松本美術第二十二回展 一日—三日

松本市開智學校

松本文化協會、松本美術會共同主催。

本會には同時に長井雲坪の遺作特別展觀を行つた。

長谷川利行遺作展(洋) 一日—四日

銀座・資生堂 明治美術研究所主催

第九回新自然派協會展(洋) 一日—四日

銀座・菊屋

藤井浩祐個展(彫) 一日—五日

大阪・三角堂

滿洲國建國十周年慶祝繪畫展(日、洋)

一日—七日

東京帝室博物館

東朝—滿洲國建國十周年慶祝のため同

國政府に寄贈する帝國藝術院會員の作品

展示は誠に壯觀を極めてゐる。墨色鮮かに

に氣品をそなへた横山大觀「松籟」、清楚

な小室翠雲「春風圖」、「燕子花」の水々

しさを傳へた荒木十畝をはじめとして、

結髪の間をとりへて對象の心理を探つ

た橋本關雪「髮」、線描と澁い色調に物を

いはせて「鑑眞和上」を再現せしめた安

田敦彦、前田青邨の「祝日」などいづれ

も近來稀に見る豪華さを呈し、中でも川

合玉堂、小林古徑は出色である。

玉堂「急緩萬里」における飛沫は觀者

にふりかゝるかと思へば靜かに淀む淵に

吸ひ入れられるごとく、技法の妙に深遠

な哲理ををさめ、古徑の「鶴」はまた古

今に類少き神品となつてゐる、今更肩か

ら首へとのびた線描、簡略された羽な

ど、部分的な描法を云々するの要なき傑

作である。

これら日本畫にたいして油繪は多少の

見劣りするが「鏡の前」の大膽な構圖に

取組んだ安井曾太郎は油彩材料による表

現法の奥傳を示すが如く量感をたゞへ、

石井柏亭は「渡頭晚夏」に自然の情趣を

汲み梅原龍三郎は手馴れた「長安街曉露」

に絢爛たる美しさを傳へてゐる。

その他佛印順化に取材した藤田嗣治の

風景、結婚前の若き女性の心根をとらへ

た立直りの有馬生馬「仕度」など、すべ

てが一見の價値ある日本よりのよき贈り

ものである。

## 陳列目錄

日本畫

松籟 横山 大觀

燕子花 荒木 十畝

急緩萬里

川合 玉堂

春風圖 小室 翠雲

愛兒之圖

上村 松園

清夏潺湲

結城 素明

王者香松林 桂月

布晒し 錦木 清方

躍進 西山 翠嶂

孔雀鳴 菊池 契月

伊都岐嶋

川村 曼舟

鶴 小林 古徑

髮 橋本 關雪

鑑眞和上

安田 敦彦

祝日 前田 青邨

油畫

新關西美術協會展(洋) 一日—七日

大阪市立美術館

森白甫個展(日) 五日—十日

朝日ビル

宗美會洋畫展 六日—八日

生堂 銀座・資

飯盛二郎主催。伊藤藤、曾宮一念、牧

野虎雄、小林和作、里見勝藏、須田國太

郎等の作品を集めた。

清水正太郎新作陶磁展 六日—十日

日本橋・高島屋

永尾喜多留ニューギニア風物油繪展

六日—十一日 日本橋・高島屋

山本鼎新作洋畫展 六日—十一日

京都・大丸

春陽會第二回秋季展(洋) 七日—十一

日 銀座・三越

小早川清個展(日) 七日—十一日

銀座・松坂屋

航空美術展(日、洋、スケッチ、水彩、

ボスター) 七日—十一日 神戸・三越

佐野光穂個展(日) 八日—十一日

富山・大丸

小鹽美州從軍畫展(日) 九日—十一日

岐阜・丸物

獨立美術秋季展(洋) 九日—十三日

銀座・青樹社

東日一花卉を描いたものが多い、中で

は林武の「花」松島一郎の牡丹が一應注

目される。風景では兒島善三郎が出色。

海老原喜之助の「牧場」は水彩の如く淡

淡、須田國太郎の「きつつき」は暗晦。

中山巍の「パリ島原住民」も油彩による

スケッチの域を出てゐない。小品展とは

いへん凡作多い展観。

六雲會作品展(洋) 九日—十三日

大阪市立美術館

大阪新美術家同盟展(洋) 九日—十五

日 大阪市立美術館

陳列數繪畫彫刻併せて一三八點、ほか

に滿洲國建國十周年慶祝拓土慰問作品と

して三十九點陳列。

二見利節個展（洋）十日—十四日 銀座・資生堂

東日—春陽會の異色ある中堅であるこの作家が三四年ぶりの個展。重厚さは加はつたが、「山」「沼」にみられる鳥海青兒風の暗晦は探らない。佳作は「花壺」「花」の二點、大作「菖蒲」は障壁畫のやうな構成だが、全體に單調な憾みがある。

芋錢靈山讚仰展（日）十一日—十四日 銀座・菊屋 青江會主催展

第一百十八回日本美術協會展（日）十一日—二十五日 同協會

〔陳列數〕八三點（入選）六〇點（無鑑査）二三點（銅賞）西丸小園、稻川光風、森田菁華、樋田五峰、松村豐陽、大柴丹溪（衰狀）南部泰邦、五十嵐久和、上田春芳、宮本白然、藤井靖峯、岸崎湖堂、山口玉絲、川村松溪、吉住節朝、青木雪邦、井内正應

第一回信濃美術協會展（綜合）十三日

—十七日 銀座・松坂屋 須田國太郎滿蒙素描展 十三日—十八日 大阪・阪急

第六回日本山岳協會大阪展（洋）十三日—十八日 大阪・大丸

鐵齋作品鑑賞會（日）十三日—十八日 上野・松坂屋

齊藤正雄蒐集品約三十點を陳列した。秋保版榊原紫峰木版花鳥十二ヶ月展

（日）十三日—十八日 大阪・三越 鐵道七十年記念鐵道美術回顧展

（洋）十三日—十八日 銀座・三越

東日—鐵道開通七十年を記念して鐵道省奉公會美術部が主催する回顧展。南蕨造の「開通式行幸圖」に始まつて現代に至る鐵道に取材した作品（主として油彩）約五〇が展示されてゐる。興味があるのは明治から大正初年で、小林清親の版畫「新橋ステーション夜景」と石井鶴三の「東京驛」の對比も面白く、長原孝太郎と高村真夫の同じ「停車場の夜」ドミエばりの赤松麟作「夜汽車」もまた興味深い。

武者小路實篤個展（日）十四日—十七日 銀座・鳩居堂

洞越方洛新作畫展 十四日—十八日 日本橋・高島屋

中華民國安徽省桐城縣出身の畫家方洛の作品約五十點を陳列した。

東西大家油繪展 十五日—十九日 福岡公會堂 青樹社主催

米倉壽仁、濱松小源太二人展（洋）十五日—十九日 銀座・菊屋

第九回新日本洋畫協會展 十六日—十八日—大禮記念京都美術館

第五回文部省美術展（綜合）十六日—十一月二十日 東京府美術館

（第一部）東京—日本畫を見終つて會場を出ると、人造石などのあるあの凡庸な公園が文展の畫よりはるかに強く懇へて來た。この凡庸な現實にさへ打克ち得ないで何が藝術であらう、何が日本畫であらう、と反芻した。

日本畫家が殊のほか苦心する着想の妙といふことに對して、私はあまり重點を置かないけれども、文展日本畫の大多數が示すやうな藝術的の勘に乏しい着想は問題外である。なほ作因の追求とか表現の結實とかに對して、加減のところで妥協して居る作家が多いこともあきたらぬ所だ。老朽無鑑査級にこれが多いことは以前からのきまりとしても、一般出品の中にも尠くない。

私達の望むものは必ずしも目新しい作因や手法ではなく、作家にとつて必然な創作意欲とか内面的な深さや逞しさとかである、それと併行して時代を指導する底の意識の具現である。

かう思つて觀るとき場内人なきに似たりである。今年の不振は、大家の作品と雖も概して例年以下の出来であるのに、更に實力者の多數が出品しなかつたことに因るが、不振の一般的根據として、天稟に恵まれ熱にみちた作家の寥寥たることを見逃すことが出来ない。淋しい。淋しい。妥協的と云つたが、自己の境地が小成的であることを氣付かぬのもあり、打開に悩みながら方途に迷ふのもある。

後者には同情すべきものがあるが、以前に較べて惱みある作品は少いやうだ。何れにせよ畫の一筋の道をつかんで欲しいと思ふ。

藝術院會員では、翠雲の「鳶飛魚躍」はかなりの良作ながら滿洲國獻納畫に及

ばず、同じく南畫煙の桂月、尤も桂月は近頃南畫ではなくなつたが、その「月苦沙寒」また獻納畫ほどのコクがない。清方の「柳園蟲聲」はあまり趣味的で畫格低く、いつもの清爽な一面が窺へず十畝「煙雨」つけたての描法はもつと齒切れよい感を與へてよい筈。

素明が填輪武人に戰舟海魚を配したアツシリアのタクイブスタン浮彫のやうな「大東亞記念」摩崖像を創作して三人の子供に快哉を叫ばしめ「建設へ」と題したなどは稚氣多すぎる。

それらに伍して關雪の、南方從軍中に壕から顔を出した一匹の猫に暗示を得たといふ「防空壕」はその石造の壕からにぎり出た南方美人は、慄慄で官能的な魅力を持ち、單純な構圖にきび／＼した動きを潜めて居る。あまりに文展的な臭さはあるとしても、やはり關雪にしてよくなし得るもので、問題作の一つであらう。それにしても滿洲國獻納畫で健筆をふるひ老來愈々旺々玉堂の姿が見えないのは惜しい。

關雪と並んでとにかく本年の問題作としては森田沙夷の「夜梅」と森白甫の「磯」とを挙げたい。これらには藝術的感興がはたらき、作家の創作的熱意がか／＼ある。

帝展以來この展覽會には風俗畫人物畫が多い。これも帝展文展のもつ平俗な一面をあらはすものと云ひ得る。元來風俗畫そのものが山水花鳥より價值の低いわ

けはなく、卓近な題材も懇厚な藝術的觀照によつて高い香氣を放つ。しかしその意味に於ても文展の風俗畫は大體に於て低調である。清方は暫くおき、伊東深水の「海風」は構圖にせよ自然描寫にせよ不由鈍重で、一個の作品を十分に構成して居ない。其類型的美人には當然現代美人に對する深水の規範がひそむわけであるが、贅肉のついた睿智のないこの美人に現代を規定しようとすることは問題だ。

深水ひとりゐるをわろくいふ意はない、文展の風俗畫人物畫にはそれら本來のよさが殆ど生きて居ないのを惜しむのである。形を説明するだけで、精神の機微や生活のうごきを描き得ない風俗畫人物畫は高く買へない。同時に風俗畫も毅然たる觀照に立たなくてはならぬこと勿論である。

ことしの風俗畫では、森田沙夷の「夜梅」を最も注目したい。畫面的には少し破綻があらうも、「素朴な頽廢」を應命に藝術にしようとする態度は却々健康でもあり、また底力を示して居る。特選の寺島紫明「秋單衣」は表情が美人畫風に類型的で、従つて人物畫といふより風俗畫乃至美人畫であるが、單純な構成のうちに初秋の風俗的なものを感じさせるよさがある。岩淵芳華「蒙古の女」は色と形が渾然として厚味あり、鈴木由太郎「少憩」は風俗的把握も構成も清新で、文展にはめづらしくユーモアを含む。

久保多彌「淺香」には畫室の緊張した

雰囲気、誠實な描寫のうちに自らにじみ出し、又鄭朝末「豊收」は調子のある畫面を以て穩雅な情景を描く。

歴史畫は相當多くまた最も不振。しかも無鑑査の不振はこの部類に著るしく、低俗な挿繪程度が多い。少し迫力に乏しいが川船水棹の「日蓮」佛師がよく描けて居ないが今野可啓「尊像修理」など目につく。小堀安雄の特選畫も平凡。希望、墨仙、九浦等の歴史人物畫は説明的で人物の生活がにじみ出ないからコクがない。構圖には特に一工夫ありたい。

西村卓三の「放列へ」は、濱田豪兒の特選「黃流」梶喜一「水を干す」江崎孝坪「基地」西山英雄「征馬」等を抑へて、戰爭畫中出色である。自分の繪畫的モチーフをよく生かしてゐる。

南方土産では山口蓬春「廢墟」東山魁夷「南方樂土」は兎に角見處があるが、矢澤弦月「南方建設譜」は頗る氣力に缺ける。洋畫家が旺盛な描寫力で新畫材を描こなし得るとき、日本畫家は出直して素描力を涵養すべきだ。

山水花鳥では、池田遼郎、松本泰水、横尾深林子、田中咄哉州の諸作は夫々持味を生かして却々佳作であるが、問題を待つ點では森白甫「磯」を指摘する。之は海濱の松によるコムボジヨンである。砂中に伸びるべき松の根先が截れたやうに見えたり、全體と部分の不十分な關係など缺陷あるにせよ、構想は根深く、作因追及の嚴しさも特筆されてよい。腰

の強い繪である。

本年の文展日本畫は帝展のむかしへ著るしく逆轉、しかも帝展ほどの成果なし。文部當局も何かこの邊で本腰を入れて工夫あつて、よさうに思ふ。(大口理夫)

東日一會場を一巡して記憶に遺つた中堅や新進の作品をあげて見よう。濱田台兒氏の「黃流」は一應は繪になつてをり主題の如き色合で全體の調和を保つてゐるが、さて肝心の色澤に乏しく、また人物の姿態と配置に無理がある。人物の一人が牛の筆墨を強むれば迫力が附いて一段とよくなつたであらう。小堀安雄氏の「神火」は表はきれいに仕上つてゐるが、人物の足が胸から附いてゐるやうで氣になる。寺島紫明氏の「秋單衣」は一種の實感があつて嫌味のない無疵な出來であり、特に顔貌描寫がよい。以上三點は何れも特選であるが、今年他は花鳥や山水によい作品がなかつたのであらうか。

この寺島氏と照し合せてみるべきものは伊東深水氏の「海風」である。技巧の冴えを十分に見せ、意圖も明白で、堂々たる畫面をなしてゐるのであるが、その調子で表情も押し切つてしまつたので、つい單調で深味を失つてしまつた。最も初歩的な對照の意義といふ原則をつい忘れたのであらうか。個々が對照してゐないといふことは、人物相互に精神的に連絡を失ひがちになるものであつて、

これは別に深木氏に言つてゐるわけではなくして、人物畫全體に通することである。

廣田多津氏の「大原女」は特選であるが平凡。兒玉希望氏の「景清」は纖弱であるが「景清」の方が出來がよい。これも娘との對照の妙機を擱んでゐない。島田墨仙氏の「山鹿素行」や野田九浦氏の「快川像」等は歴史的人物としての氣韻を宿して欲しい。石崎光瑤氏の「髮」は間髪を容れない危機を描くべき筈であるが鬼ごつこのやうになつてしまつた。

東山魁夷氏の「南方樂土」は腰布の色合等巧みであるが、顔料に著しいひびが出來てゐる。保存の利かない繪は畫ではない。字も書けないのに文章を綴らうとするのと同じである。特に東山氏に限つた譯ではないが、各室に一つ位づつ剥落しかけたり浮いてゐるのがあるが、まづこの方の技術から固めてゆくのが昔のしきたりであつた。山川秀峰氏の「月輪」は淺學にして味識し得ないし、森田沙夷氏や三谷十絲子氏は例年より不出來。

かういふ印象を述べてゐても仕様がなないが、年一年と文展の弊害が目立つてくるやうである。文展が過去に果した歴史的使命は十分に認めるものであるが、この昭和十七年といふ現實と照し合せて、現存の文展が斯道奨励の最善の機關であり得るやといふことを再考三思すべき秋である。暫時中止するもよし。機構の大改革をするもよし。過去千二百年に於け

る日本の美術は時代の激流に磨かれるに従つて光を發してきたやうである。目前の小摩搦を恐れてはいけない。(谷信一)

〔第二部〕東朝一同展覧會でも文展となると自ら特殊な性格を辨へてゐるはずである。政府が陣頭に立つて一國の美術を奨励しようといふのである。立派な趣旨である。従つて展覧會にも何かそれと感じられる高潔な意圖が満々と漲つてゐてよいわけである。

この展覧會においてこそ、あらゆる邪道を封じて美術本然の大道を建てるといふ大きな眼目もあるべきはずだし、最高の技術を完成しようといふ見識もあつてよいはずだし、個人的趣味を弄せず悠遠な造形の秘義を盡すといふ意志もあるべきであらう。要は一國の美術に關與する熱意が主催者側にも、これに參する作家側にも燃えたぎつてゐる情趣を期待するのである。

今日の文展は多種の在野團體の主流を合體したものが根幹をなしてゐる。競うて美をなすところに、その趣旨もあらうが、合流して蓄積する氣力ならば、もつと逞しい動勢を喫し得るに違ひない。一定量の技術の中に安らかに身を封じ、控へ目な觀照に甘んじて、あへて虎穴に投ずる勇斷を惜しんでゐるせるか、潑刺と盛り上がる精氣が薄い。

技巧は整つても求めて已まぬ氣概を去つては制作は伸び行く發展の路を見失ふ。總じて形を辨へ色量も整へたのだ

が、それでゐるで懽物と迫つて來る描寫の妙諦を缺いてゐる。

しかし少數でも、一般の安易な筆意を他にして健氣な制作に見事頭角をあらはした作品を數へることが出来る。

第一室は出色の出來である。飯島一次「家族」と白川一郎「不空絹索觀音」とが並んでゐる。二つの作品が全く異つた描風をもつて各々最善の表現を逞しく目にかけてゐるその熱意に於ては兄たり難く弟たり難く競うて新銳の氣を吐いた。

「家族」は印象派風といふよりグイヤー風の色彩調の綾の中に確然とした空間の門構へを築いて微動しない構圖を納めてゐる。大きな畫面に濃くこもる暖流の氣が鮮かに動いて美しい周到な筆勢が隅々に行届いて手厚い色疊みに氣力が漲つてゐる。

これにたいして「不空絹索觀音」は、いはゆるアカデミックな技法に徹したもので、あくまで對象の祖述を試みるものであるが、丹念な畫意と練達な筆力とは、無味な描寫に陥りやすい、かういふ表現を見事押し貫いて透徹した効果に達してゐる。

白川君は數年來佛像の神秘を描いて來た。従來は像の形相を捉へるに忙しく、あたらず如意に終つたものだがこゝに多年の意氣を集めて豊かな表現を克く得た。

里見明正「鶏」は根強い表現力に不足してゐるものの創意を多しとしたい。名渡山愛順「琉球情趣」も、あくまで快活に

初志を貫徹した、まじめな作品であり、須田壽「秋童」にも、すなほな情意が汲み取られる。

第三室は長老、知名の畫家を集めてゐる。こゝでは懷古の情を温めるには相應しいが今日の美的體驗の處理には何の示唆をも與へない。古老中澤弘光翁が「歡喜」と銘を打つても古色の中に踊る裸女は我々にはむしろ遠い彼方の寂滅を想はせる。

たゞかうした數々の作品の中で辻永「清秋」が今年は氏の淡彩風な描風がこまやかな色感の情趣を織りなして快く浮び出た。林俊衛「池畔早春」も輕爽な描寫があどけない觀照を楽しんでゐるし、碓伊之助「黒服のI令嬢」は手堅い技巧で溫良な色感を説明する。さういへば中野利高の「少女像」も適切ないゝ筆意を見せるが内からこみ上げてゐる熱い感覺がなくて冷やかな寫生が物淋しい。

中村研一「安南を憶ふ」の圖、例年の逆光に座臥する婦人像の繼續で新鮮な氣合があるわけでない。かういふ精氣旺盛なるべき知名の畫家が狹隘な畫境の周圍を巡つてゐるのでは心もとない。氏の如きは今日の美術發展の柱石となる自負を誇示してくれぬものであらうか。

技術の巧拙は暫く措き、まじめな追求と新しい萌芽とは、むしろ一般出品の中に期待するより仕方ないのだらうか。何ものかを純粹に感覺して、たとひ朦朧ながらも忠實に表現する貴重な意圖は、こ

とによると新進の掌の中にしかないのかも知れない。

一般出品の中では樋口一郎「彩廊」が清楚な配色の間に堅實な構圖を伏せた精進を取上げたいし、宮坂勝「北京北池子」の、のび／＼した彩筆の氣合を喜んでよいであらう。

香月泰男「水鏡」にも多少作意が表面に洩れすぎてゐるものの銳利な感覺が欣喜雀躍としてゐる。中尾進「日和」中出三也「ひき沙どき」にもまた、けげな努力が密集してゐる。

しかしながら、これほど數多い作品の合同陳列の中で異色ある力作が、あまりに乏しいことは旭日の思ひをもつて昇りゆくべき我國の美術發展にとつて何としたことであらうか。畫壇の總力が明日に向つて營々として辛慘を嘗める決意を整へて、繪畫にたいする誠實を滿腔に湛へてゐるなら、これくらゐの收穫を以つて快しとするはずがない。(富永惣一)

大朝一伊藤四郎氏「七面鳥と仙人掌」は光を取入れて伸々した筆致と明快な色調とが氣分を明るくし、後景の仙人掌の省略法も要領がいゝ。岩下三郎氏「搾乳場」は中央を大きく占めてゐる牛の白い胴から、前景の人物へかけて、半圓形に見える構圖がよく柔かく溫味ある筆法に和やかな親しみを感じさせる。小絲源太郎氏「二百十日頃」は從來の手法や觀點から一風變つた方面を見せ前景の茄子は畫調が高く全體の基本になつてゐる。

上の姿はそれほどまでにはゆかず少々混亂してゐるけれど、葉に風のそよぎがあり、遠見の家並や空の納め方がつちり四つに組み、一と荒れ来さうなこの頃の氣分を出して見ごたへがある。

白川一郎氏「不空網索觀音」は三月堂内陣を忠實に描かうとして本尊から天井のあたりは相當にその場の實感を捉へ得たが、月光に至つて少し怪しくなつてゐる。寫生一方で繪心のないのも物足りない。宮田重雄氏「本尊」は室生寺の藥師十二神將をもつて相手にお構ひなく自分流の繪を拵へ上げようとしてゐる。構成のしつかりしたところもあるが、感心せぬ色が変わりこんでゐる。この二作は丁度反對の立場にあるが、双方から歩み寄ればいゝのだらう。

中間をゆくものは須田剋太氏「神將」で手法は手堅く躍動の趣がある。但しバツクの納め方に窮してやつつけない仕事をししてゐる。杉本健吉氏「博物館中央」は即寫程度で本格の繪にはならず、さつぱりした氣分だけのもの、類似のものに黒田頼綱氏「朝」があり清々しさはよく出てゐる。

佐竹徳次郎氏「石澗」は得意の藝で上半若葉のあたりはうまいものである。下の巖と水とは忠實ならうとして却つて力を弱くし、硬くぎこちなくなつてゐる。

戸津文雄氏「苔むす巖」は深山溪谷の暗く濕つばい氣持を寫生一つで押通し、筆にたるみもなく植物の本の挿繪臭くなく

るのを食止めてゐる。かういふ圖柄は珍しく眼先が變つてゐるので面白く思つた。池田永一治氏「國土豐」の湖面には水と波とのいろ／＼な變化を現し、廣々とした氣分の出でゐるものである。大谷房吉氏「餘暉」は紅に反映する綠の美しさを十分發揮してゐる。寫生もこゝまで來れば後は繪心、腕の問題になり、さしづめ青山義雄氏「磯邊の夏」などがお手本になるだらう。

青山氏のは廣く塗つて線で締め、氣轉とうま味とを現すところはどこか極端に似てをり、舌觸りはいゝがもう少しどうにかなつてもいゝものである。

石井柏亭氏「湖邊の秋」山下新太郎氏「藤」は悠揚迫らず、淡々たる中に情趣を滿たすのは流石である。殊に山下氏の今年の苦返りは目立つてゐる。

三輪孝氏「皿廻し」は女藝人の活動ぶりもよくかいてあり、周圍に集る多くの人々も丁寧に寫生して胡麻化してゐない態度はいゝが、官學風な寫實であるためどこといふ主眼も強調されず全體に鈍い印象しか與へられない。飯島一次氏「家族」は點描の警戒を要する技法によつてゐるが、模範たる中からデツと見てをれば段々に現れてくる個々の人物のそれぞれの姿勢や全體の配置、それから色の取合せ、殊に光の明暗の工合などに幾らかの魅力を感ずるやうになる。

榎戸庄衛氏「秋果豐收」はよくある葡萄畑の圖であるが、色が朗かで調子が整つてゐるから先づ愉快な感じをうける。次に棚から降りそゞろ陽の光の明るさの種々相と、ある部分では忠實に、ある部分では省略した筆致でうまく調子を合せてゐる。葡萄の房も美しく人物も活き活きとしてゐる感じがしない。筆達者で兩々までいろ／＼な筆づきを使ひこなす要領がいゝ。

中谷泰氏「水浴」は澄い色で榎戸氏と同じやうなゆき方をしてゐるが、一層深味があり表現が強い。

その上表面的な寫實でなく空想を交へて特殊な氣分をつくり出してゐる。横一列に影繪のやうな裸の子供を列べ、前にたゞ一つ紅いモミデアフヒの花をおいたところなど、古典の婦人像がもつ一輪の花のやうに神秘な感じさへする。これもなか／＼の技法屋で細部にわたつて慎重な計畫を立てゝゐる。

戰爭に關するものが少し出てゐる。笹岡了氏「雪の朝」の舞臺は蒙朧らしいが、雪の氣分が少し出てゐるだけで全體の技巧がうまくない。佐々木義雄氏「空陸一體」は子供の雜誌の挿繪を引伸ばしたやうに見える。戰爭畫はとかく挿繪風といふ一種の型に嵌り勝ちである。石川滋彦氏「ジャワの停車場」は從軍の產物で、それらしい趣の少しは出てゐるものであるが、腕が鈍いので今一息といふはがゆさがある。川端實氏「三人の寶石商」は印度人を描いたもので南方土產のうちに一番いゝ。すら／＼描上げて構圖も面白

く色もうまく取合せ、所々に才氣を見せてゐるが、全體が薄手だ。中村研一氏「安南を憶ふ」はこれまでと少し變つた調子で、粗略にした筆づきの數物が却つて面白味をつけ、他の部分がよくそれに調和してゐる。(春山武松)

【第三部】東日一文展の彫塑を覆つてゐる宿弊は低俗な匠氣である。官展の彫塑が所謂習氣に禍ひされてゐるといふなら止むを得ない點もあるが、今年は甚だしい寛選ぶりであるために徒らに技術的水準さへ低下してゐる觀があるのだから、本當は匠氣どころではないのである。ところがさういふ彫塑本來の技術的な不備を以て低俗な匠氣を匂はせてゐる作品が甚だ多い。

彫塑本來の根本的な表現に向ふよりも姿態の皮相な力感の誇張や、何か抒情的めいた姿態の表情過多を追つて仕事をししてゐる彫刻家が多いのは、その一つの結果であり、文展彫塑の最大缺陷である。

最近、一般公衆の彫刻鑑賞に對する興味が漸く昂つて來てゐる時だから、官展の彫塑は公衆の鑑賞の一つの規準を示すものとして、技術的の點だけでも本質的に嚴格なものを築いて貰ひたいと切に思ふ。

朝倉文夫の「餌食ひ猫」とか山崎朝雲の「狛犬」とかには、一應の技術的完成はあるが、かういふものによつて彫刻の眞の感興は充たされない。藤井清祐の「泳後」は典麗な作品。然し腰部の脊面など



感服出来ず、内からの力に乏しい感がある。安藤照の「心」も、も一步塊の中に心をおこせてもらひたいものだ。

雨田光平の「湖の女」の構成に面白いところがあるが、細部の決定不十分である。中野四郎の「曉風」肉附けの密度はあるが、力弱く瘦せてゐる。大須賀力の「女」は厚みのある作だが、肉附けの表現がだるい。

瀬戸團治の「立つ」は佳作。及び腰の脚部の力の關係が面白いよりも缺點として目立つのが難である。水船六洲の「神農像」はブルードル風な手法のものだが、構成散漫で去年の作品の方がよい。

特選になつてゐる根山三穀、三好直、長沼孝三、林勘五郎の四作は夫々或る程度に力作で纏まつてゐるといふだけで、餘り感服出来なかつた。(今泉篤男)

〔第四部〕東日一廣本長子の「型染草花屏風」。琉球紅型から出發した典雅なものだが文様には更に研究を要し、廣川松五郎作、友禪染法による「青海波」と題するものは上りが粗末だ。顔料でも染料でも染である限りは工程に細心の注意を拂ふ必要がある。山鹿清華の「手織錦襪布壁掛」の地には動物帯をバリー織をつくりの染糸と手法によつて表はし、虎だけが清華好みとなつてゐる。矢部運兆の「月見草屏風」は蠟染中ではよいものであり鹿島英二の「天鷲蘭縷」がこの程度だと問題だと思ふ。

峻阜の水野脩吉作「風志野牡丹文大瓢」

には可成りの好感がもて、河合榮之助の「磁器柿花瓶」は釉薬と窯の調子を十分呑み込んでゐる作品。加藤土師扇の「燕に合歡文赤繪全欄手花瓶」はよい出来だ。しかし華文の燕はやゝ硬きに過ぎた。鳥野三秋作「潮の香蔭繪屏風」縁の螺鈿線が全面の好調子を破つてはゐるが氣取らぬ作柄だけにうれしい。音丸耕堂の「月之花手筈」は文様の構圖もよく、仕上げもまことに綺麗だ。漆藝の佳品といふを憚らない作である。漆といへば衛立、手筈、飾欄と狭い範圍の意匠から出られないことは作者の頭だ。

香取秀眞作の「唐銅鑄鈕香爐」は蠟型鑄造のものなかでは傑出したものであり、佐藤尙現の「輕金屬象狀紙箱」の用途に相應しき構成はよろしい。文様意匠もよき選擇を経たものだ。人形には野口光彦、堀柳女等の常連出品がある。柳女の「離愁」はオーチャドスンの繪のやうにあまり感覺に訴へ過ぎてゐる傾きはないか。木工は餘りに貧弱であり、拾へば林二郎の「亞字式手匣」があり、その清楚な構成に同情がもてる。(大隅爲三)

入選 無鑑査 陳列數  
一部一〇九六 一三七 五五 二〇四  
二部一七九八 二一八 八八 三二五  
三部 二六九 一三三 六七 二一一  
四部一〇九七 一七六 五四 二四五  
〔特選〕(第一部)濱田台兒、小堀安雄、寺島紫明、廣田多津(第二部)伊藤四郎、戸津文雄、高田誠、中谷泰、胡桃澤澤人、

榎戸庄衛、里見明正、白川一郎、須田勉太、杉本健吉(第三部)林勘五郎、長沼孝三、三好直、根山三穀(第四部)張間禧一、小川英風、音丸耕堂、河合榮之助、加藤忠三郎、立川政吉、高久空木、保谷美成(岡田賞)(第二部)飯島一、納富進

〔政府買上〕(第一部)「三尾四季之圖」池田遙郎「惠林寺の快川」野田九浦(第二部)「不空羅索觀音」白川一郎「秋草」安宅安五郎「北京北池子街」宮坂勝(第三部)「華」佐々木大樹「裸婦」石原昂(第四部)「象嵌文壺」大須賀喬「磁器柿花瓶」河合榮之助「漆南國の瑞鳥飾篋」二木成抱「黒田子爵記念美術獎勵資金委員會買上」「鶴令」里見明正

出品目録 ○帝國藝術院會員  
査査員△無鑑査  
第一部  
水を干す 喜一 秋の山日下 八光  
梶 雄視 有元 一雄  
潤雨 河原 悅人 實る秋遠藤 金坪  
椿 川邊 華堂 穂高新樹  
蒙古の女 岩淵 芳華 五十嵐揆一

林道 奥村 厚一 木村 廣吉  
爽晨 片岡 中郷 南方樂土  
黃流 濱田 台兒 東山 魁夷  
考古學教室 奥入瀬田岡 春徑  
澤 宏毅 春野々内保太郎  
木の間森 綠翠 月輪△山川 秀峰  
利春 小坂 勝人 三尾四季之圖  
神火 小堀 安雄 池田 遙郎  
春麓 小野塚響子 新秋△秋野 不矩

△西澤 笛畝  
墨栗 會津 勝巳  
幼兒審查 大矢 道夫  
冬暖△松本 委水  
剛の座玉村 吉典  
塔 山崎 忠明  
六月の頃 許 林  
大原女 廣田 多津  
上州の山 △山本 丘人  
辻 川崎 雅  
景清△兒玉 希望  
國分の山 奥村 采非  
慶壇△山口 蓬春  
鳶飛鳥躍 △小室 翠雲  
○△宇田 萩都  
水 △宇田 萩都  
清秋聽琴 村岡 應東  
柳園蟲聲 ○△鈴木 清方  
山鹿素行先生 △島田 墨仙  
爽晨△松元 道夫  
秋單衣寺島 紫明  
煎ひ△田之口青晃 潮風 桑野 博利  
農園の朝 勝谷 木樨  
東大寺 南大門 加藤 重壽  
花菖蒲

△永田 春水  
軍鶏 鷹尾 兵衛  
黎明△白倉 嘉人  
海風△伊東 深水  
月苦沙寒 ○松林 桂月  
惠林寺の快川 野田 九浦  
月林清影 △横尾深林子  
薄暮 後藤貞之介  
月に踊る △岩田 正巳  
信濃追分 安島 雨晶  
春の夕 舟山 三朗  
朝顔△阿部 春峰  
秋溪 森 陽水  
彩鸞弄雪 △今中 素友  
さき草石田 重子  
首夏 加藤 松溪  
南方建設譜 △矢澤 弦月  
製 △石崎 光瑤  
風車吹く朝 △三谷十子 椿  
椿 稻葉 春生  
鹿 天晶 芳登  
豆の稔り 今尾津屋子  
しじま松久 休光  
淨光△田中咄哉州 竹の道松平 春樹



大威徳明王	飯島 眞風	山麓 福井 澤太	芥子 濱田 觀	風薫る庭	高倉院廣川 操一	鶴舍 里見 明正	朝日さす校庭
△金嶋 桂華	田植時水野 深艸	子夜吳歌	寒岫雪舞	△大村 廣陽	白骨樹林	踏切り山口 猛彦	金子 博信
煙雨○荒木 十畝	白暮 高山 辰雄	平野 長彦	△水田 竹園	田岡多興	河野 秋郎	春 高橋 庸男	キリコと夏果
瀬戸煙雨	誘蛾燈西野 新川	征馬 西山 英雄	防空壕	石原 紫雲	章像修理	初秋(水彩)	朝比奈文雄
△幸松 春浦	晴晨 朝倉 攝	蓬萊蕉大宮 俊興	○橋本 關雪	馬 山下 薰	今野 可啓	上田 素由	手賀沼初秋
雪風△池上 秀畝	新樹の山	和十六年(昭)	建設へ	斜陽を征く	錦織父子奮戰	南天と子供	末松 勇
香蘭 陳 進	遠藤 敦三	△谷角日沙春	○結城 素明	行秋△森 月城	林 雲鳳	河原 修平	釣針工場(水彩)
南方の星座	放列へ西村 卓三	海はるか	朝顔△山口 玲熙	奈良 東明	ひな芥子	臺所 倉石 隆	相良 文雄
鈴木 朱雀	集ひ 清水 正一	堀江 春露 勇	乳人△伊藤 小坡	春蘭 竹内 一起	島田 柏樹	裏庭 宮島 武男	松に白鳥
晴嵐 下川 苔地	△村嶋 西一	糸抽き高木 武雄	朝和 山田 申吾	那須のつの時	濱 室田秀太郎	少女坐像	齊藤英太郎
旗魚を追ふ(つ)	△矢野 鐵山	晴行く驟雨	中門 秋葉 長生	大貫 鏡心	梅咲くころ	小田 忠	秋の静物
笠松 紫浪	後苑△五島 耕畝	歸途 國長 有光	寓と鳥と	尊公院	川上 靖山	鏡 小野彦三郎	三浦 直政
淺春 久保 多彌	錦秋 戸田 浩堂	深山のいで湯	元祿快舉	△菊澤 武江	高原八月	風賣 櫻井 悦	森 原田 武男
夜襲△磯田 長秋	敵國調伏	向井 久万	初雪△宮田 司山	六月の頃	本庄 陶苑	花燈舗店頭	荒井 邦朝
光秋號	△飛田 周山	紫陽花	席人里	木曾路の萬壽姫	琉球情趣	福田紹太郎	静物△安藤 信哉
△根上 富治	墨栗 磯田又一郎	△登内 微笑	△保間 素堂	△太田 秋民	名渡山愛順	初秋 魚津 良吉	磯 小川 博史
松嶺 高木 富三	新田十六騎	夜梅△森田 沙夷	牧草 淺香金四郎	松嶺 白井 蜀崑	秋童 須田 壽	初夏 廣田 重男	夏天皇鶏
繼信の最後	北村 明道	山村(水ノ尾村)	高原雨後	田植頃小澤 春子	皿廻し三輪 孝	風景 山田 正	△山下 繁雄
森戸 果香	月待山中 蒼生	武藤 章	△古谷 一晁	晴日 遠藤 燦可	新雪の金剛山	孔子廟の榕樹	街の家嚴津 哲郎
雨余 小川 立夫	五月初土肥 蒼樹	山のさち	牽牛花園	淡水鳴環	矢野 雄藏	爽秋 畠 義雄	農家 小柳秀太郎
將軍探の晴嵐	登校 渡邊阿以湖	安井 桂洲	△平田 松堂	鈴木 石鷗	造船場中安 五郎	土間の静物	秋草△安宅安五郎
日蓮△川船 水棹	皇軍 池澤 青峰	湖畔の冬	立山の残雪	涼 降旗 篁岳	七面鳥と仙人掌	ソロの女	日高春別
承久之亂	△小山 榮達	中土大至良	加藤美代三	うら盆田代 敬一	伊藤 四郎	田邊 穰	△三上 知治
荒魂△東原 方僊	隣組と玉子	白日(備後橋之津)	涼處△庄田 鶴友	春近し多田 敬一	不空絹索觀音	綠蔭静物	少女坐像
和具の海女	森田 秀一	中堂 長陽	殘雪△八田 高容	圖南(大鷲)	白川 一郎	仲田 菊代	▲耳野卯三郎
門井 掬水	勝浦の義經	基地 江崎 孝坪	早春の杉坂越	△吉田 登穀	家族 飯島 一次	彩廊 樋口 一郎	▲林 俊衛
大谷秋晴	春宵△山本 倉丘	豊收 郷 未朝	早春の杉坂越	蕪苑 井上 通世	石淵 佐竹徳次郎	花と人物	安南を憶ふ
五十嵐勝雲	新誓△植中 直齋	晴日 高崎 祐輔	加畑 桃僊	寢覺澄潭	鳥禽舍胡桃澤源人	山田陸三郎	△中村 研一
早春の大鳥	基地 戸島 光雄	磯△森 白甫	里の春島村 亮	峰村 北山	往還 納富 進	緑の静物	高原△白瀧幾之助
川島 浩	奔瀨 紳刈 樵谷	ひととき	好日 立石 春美	早苗雨森戸 國次	十一月の雨	中村徳三郎	藤○山下新太郎
雪後瑤林	育兒日記	△堀井 香坡	黒部細雨	もみち横尾 芳月	△山下大五郎	風景 福岡 繁樹	湖邊の秋
小柴 肇映	津村新太郎	仙峽綠意	△野口謙次郎	堰 大藪 春篁	川村精一郎	初夏 鈴木三五郎	○石井 柏亭
河野通有	樂土 須田 中	橋田 永芳	雪原 藤田 隆治	樋口富頼呂	搾乳場岩下 三四	▲磯 伊之助	

春雪▲熊岡 美彦 赤松▲田邊 至 歡喜○中澤 弘光 山懐精舍(水彩) ○南 蕉造 淺草▲木村 莊八 磯(水彩) ▲相田 直彦 清秋▲辻 永 對峙▲池部 鈞 少女像 ▲中野 和高 熱河、普陀宗乘 廟の陶門 ▲横堀角次郎 門 木下 克己 西湖雪 ▲新道 繁 神將 須田 剋太 秋果豐收 榎戸 庄衛 苔むす巖 戸津 文雄 秋草秋果 向井かつゑ 窓 川口 四郎 想虹 大塚平八郎 水浴 中谷 泰 秋草 青木 達彌 切秋水郷(水彩) 小堀 進 春堤 牛島 憲之 老人 伊藤 悌三 放牧▲吉村 芳松 松原湖邊 高田 誠	畫 坂本 幹男 朝 黒田 頼綱 巡禮 松永 和夫 森の巖河上 一也 野邊早春 ▲田崎 廣助 餘暉 大谷 房吉 北京北池子街 ▲宮坂 勝 本尊▲宮田 重雄 睡蓮 ▲大久保作次郎 雨後▲林 重義 南窓▲阿以田治修 二百十日頃 ▲小絲源太郎 おひるやすみ ▲齋藤 與里 崔承喜の織姫 ○有島 生馬 磯邊の夏 ▲青山 義雄 子供達と母 ▲鈴木千久馬 秋陽▲太田喜二郎 港 ▲石川 寅治 ガンジス水浴 ▲水谷 清 博物館中央 杉本 健吉 甲冑 熊見 三次 豐穰 大崎 善生 ひるね 伊藤源右エ門 崖 岡村 三夫 婦人像土佐林豊夫	春 土本 ふみ 岩山 上田 清一 西芳寺枯山水石 組 田川 勤次 國土豊 ▲池田永一治 朝鮮の家 合田 好道 秋の山間 平川 要 飛驒山村の子供 德永富士子 龍頭▲庫田 毅 溪流 三田村 築 蓮花 坂田 虎一 漁舍の隅 小林 易夫 秋晴▲加藤 靜兒 育代ちやん 西村 計雄 白樺の道 桂一 トラノクに腰掛 ける女 谷澤 一郎 梅の寺山崎 隆夫 をり紙林 鶴雄 子供達と母 宮脇 晴 初子像森田 茂 晴日 宇野 龜一 綠苑肖像 ▲栢 森 義 ひと刻(水彩) 高原 白石 隆一	一月風景 花巖 巖 婦人像瀬戸千代三 藏王の春 松平 齊光 母と子内堀 勉 林間風景 曾根 徹 朝 齋藤 久子 堤人形と柿 杉村 惇 若き日伊藤 應九 靜物 養田つや子 母子 江藤 哲 ジャワの停車場 ▲石川 滋彦 夏日 龍沼 青 眞夏の畑 ▲堀田 清治 庭 ▲緒方 亮平 到着▲橋本はな子 九月の日 黒田久美子 山のスケッチ 石塚二味子 城 澁川 駿二 農家 小竹 義夫 がくの花 高橋 雅子 樹蔭▲山田 新一 夏 ▲橋本八百二 カンナはたけ 山下 忠平 池 淺井 政勝 白梅▲柏木 俊一	日まわりと朝顔 八藤 勲人 水鏡 香月 泰男 畫室 笠井 忠郎 高原を往く ▲窪田 照三 海に働く女 ▲星野 正三 農家 坂本 正機 少女 石橋 武助 空陸一體 ▲佐々貴義雄 増長天像 藤田 太郎 入江 戸田 郁郎 靜物 林 淳夫 竹林 溝江 勘二 彫刻のある母子 藤江理三郎 五月晴鈴木 良三 苑池陽春 伊藤 立己 畫室 中村 萬平 日和 中尾 進 谿 ▲藤 彦衛門 六月 角南 松生 街頭所見 藤澤 俊一 草の上 ▲島野 重之 冬の高原 田村 一男 撮影開始 川口 雄男 雨後のマニラ城 内	鈴木榮二郎 貝燒場田代 順七 石の村風景 ▲清水多嘉示 城内の街 湊 實雄 秋晴の相須峽 ▲大橋 孝吉 池の鯉 ▲榎藤 種男 農園の池 ▲井上 よし 婦女坐像 ▲清水 良雄 琵琶湖の雨(水彩) ▲三宅 克己 高原▲鈴木 淳 眺望○中村 不折 寛の水 ▲赤松 麟作 春溪▲富田温一郎 景風清 ▲楠木 久太 梅林▲淺井 眞 黄土▲小林 眞二 神津牧場の春 ▲香田 勝太 白頭山天池 ▲足立源一郎 たばこ一ぶく ▲山本 鼎 黄鳥と柑橘 ▲高間 惣七 孔子文廟 ▲山崎 省三	濤の音 ▲矢嶋 堅土 ウダイブールに て▲吉田 博 竹林▲金澤 重治 Y氏像 ▲鶴田 吾郎 室内 佐野 猛 錦椿 安宅 善郎 刈る人廣本 森雄 舞衣を装ふ 朴 泳 善 午下り田所 滿雄 南鮮の農家 金 龍 祚 草上少年 小林 邦報 北京中南海公園 等々力巳吉 雪の渡場(最上 川)眞下 慶治 池畔初秋 能勢 眞美 人物 西澤 富義 蕙 松尾 正己 ホロ／＼鳥 戸塚孝三郎 秋晴れ ▲大久保百合子 甲冑 後藤 秋生 高原秋色 ▲廣本 了 丘の人達 島田 四郎 水のほとり 寺門 幸藏 庭園 西 博民	花 村山 密 戦友 中村新次郎 水邊 西寺 鐵舟 畫室にて 和田 清 北邊 不破 與吉 梯子のある納屋 門松 茂夫 タンクある風景 田邊 謙輔 農産の人々 福井 芳郎 老婆像永田 精二 秋晴の朝 ▲望月 省三 神苑黃昏 金子眞次郎 南洋チャモロの家 布施信太郎 臺所 齋藤 俊雄 宿題▲濱地 清松 秩父の絲染め 中畑 幸夫 夏の庭市川加久一 初秋の石濱 澁谷榮太郎 青年士官 鈴木 滿 白樺林 ▲長屋 勇 村の道 ▲都鳥 英喜 初秋 白田輝四郎 小供達大寄 兼久 讀書 小川 智
--	---	--	--	--	---	--	---

山門 川端 伊織	岩藤 高野 眞美	工場の歌(桐生 北川工場)	くずとかぼちや (版畫)	猫と童子 村井 辰夫	不動明王像 清田 清也	卯 △林 謙三	望洋 三好 直
初秋好日 熊岡 正夫	ちいさん 關 眞	芽だしの庭 △田中善之助	荒磯(カッパ版) 山口 源	慈愛△山畑阿利一	聖への精進(研究二) △服部 仁郎	若き工員 渡部 星村	腰掛けたる女 △山根 八春
空地利用 筒井 茂雄	少女 塚本 張夫	閑拓先遣隊 和田 茂一	静物(水彩) △宮部 進	農村の至寶 △樽谷清太郎	青年 服部不二之	清芬△河村 清司	空 佐藤 義重
緑蔭散髪 △菅 一郎	寂山大講堂 三原 繁	古園秋齊 緒方 掃菴	アジャの子 (版畫)	征途 寺村精十郎	大空への讃光 (その一)	或る日の板垣將軍 △赤堀 信平	若人は征く 長沼 孝三
休憩 永室 幸吉	花籠圖 △草光 信成	新裳 藤川 光次	鐵工(版畫) △旭 泰宏	農穰△照田 稔	慈和△綿引 司郎	女立像福田 弘之	夏 長谷川正雄
蕪る若葉 △小野田元興	母子 手島 貢	早春池畔 秋元 松子	紙漉場(版畫) △前川 千帆	氏家謙曹氏像 △中谷 宏運	馬 △諏訪も里於	漁酣 横山 喜一	誠の發動 △雨宮 治郎
琉球の屋根 大嶺 政寛	獨逸婦人 △中尾 達	支那寺の佛像 小川 緑	華嚴頌、再再心 經板畫曼荼羅鏡 (版畫)	曉風△中野 四郎	立つ 星野 直弘	夢 △北村 正信	天翔る神 ○△内藤 伸
阿部氏像 知足	紀元二千六百二 年元旦 △塚本 茂	文学青年S氏像 野々垣甚一郎	斑鳩寺初秋(版 畫)	湖の女(湖沼傳 説より) △雨田 光平	想ひ 白井謙二郎	輝く空 △笹野 恵三	裸婦 金子 忠雄
鬼劍舞山口 和樹	百合△武藤 辰平	山西の少女 井上 自助	朝鮮草笥のある 静物(版畫) 川西祐三郎	第三部 何食む猫 ○△朝倉 文夫	御食む猫 ○△朝倉 文夫	宮嶋博士 △吉田 三郎	牧春 柳沼 曹雲
集ひ 松藤 市郎	孔雀 櫻田 精一	秋の溪流 △大野 隆徳	燈下作業 熊野 禮夫	金魚△木村 義男	初夏△相馬 其	白い扇を持つ娘 山中清一郎	黄昏 深山 力
牛の瀧廣本李興丸 黄色い服 山崎 坤象	力闘圖 △佐藤哲三郎	紅上衣 △遠田 運雄	畫室にて △和田 香苗	母と子と △有馬さとえ	椿庭△鬼頭颯二郎	ジャワ更紗 △高村 眞夫	ひき沙どき 中出 三也
Fさん洗 春海	三人の寶石商 川端 實	慈 西山 眞一	登攀(版畫) 山口 進	吉祥△野 桂樹	青年立像 今城 國忠	女 佐藤 邦輔	△富樫 容堂

先驅△三國 慶一	戰友 黒谷 連治	治亂泰平を舞ふ	勤勞の收穫	染織ぶどう二曲	水邊長方形木象	鉢○▲清水 南山	坂本 曲齋
狛犬	切浪荒御魂	△羽下 修三	杉村 尙	屏風 高松 敬子	嵌彫刻小屏風	松鱗文笠	城端時繪鶏硯宮
○▲山崎 朝雲	△小笠原貞弘	座標婦	櫻婦半身	あぢい衞立	葉文宮永廣 四郎	柳原長兵衛	村田 外雄
弘安神風	婦人裸像	△倉持 芳	大津留依子	清水 小菊	象嵌文盤	蔭繪三寶柑手宮	鐵象嵌飛燕文手
○▲北村 西望	松野 伍秀	習作△木下 繁	女 石場清四郎	瑞喜透文ラジオ	丸形黒劃長久花	八木秀之助	上田 鐵三
雪 古川 武治	茶道(其ノ二)	女 △廣井吉之助	女性 坂東 文夫	飾宮 堀 香斧	型染草花二曲屏	壹 山田 耕	染更紗二曲屏風
讚持國	△長田 平次	靜なる座像	焙光 小金丸幾久	風 廣本 長子	廣本 長子	漆閑庭春容	河合 紫光
○關野 聖雲	想 木村 靈	天笑女和田 金剛	△木内 克	月に萩時繪手宮	漆閑庭春容	漆鴛鴦の圖手宮	後藤清吉郎
思考 安藤 達亥	女人像明石 順吉	犬 池田 秀雄	立像 大屋 義昌	田中 壽雄	三彩花菱文夾紵	手篋 木村 天紅	漆紅梅の棚
昨道 矢野 秀德	婦長△都賀田勇馬	戰の丘山宮 只司	秋の作今村輝久見	青磁花瓶	松藤地紋線口笠	文花瓶 權田 武彦	▲吉田源十郎
立女 立花 富也	戰捷の鞠	大東亞の指導者	女立像谷口 百馬	○▲清水六兵衛	觀月置物	急須七種	七寶柑青磁梅花
かどで	小松 彌六	竹林 薰	悠久 岸崎猪之助	▲山本 安曇	▲山本 安曇	立松 山城	手織錦襪布壁掛
立像 伊藤五百龜	女立像新谷 秀雄	若き兵野呂 天潤	小休止有地 滋迪	青銅萬法始終	銀月置物	○▲富本 憲吉	▲山鹿 清華
猛者 北地 莞爾	ハンマー	橫山 五郎	裸婦立像	裸婦立像	銀流し花瓶	碗豆研錫尾 卓司	漆子網衝立
明行く霜田大次郎	出發 山口伊之助	△矩 幸成	兄弟△三澤 寛	寂明 宮本 隆	關谷 志郎	鐵魚之文色紙宮	保谷 美成
望 朝倉 矜子	女 平野 敬吉	女性 岸本 廣義	裸婦 吉野 康彦	戰の前に	黃銅筋花瓶	光華文軸盆	織部印花文水盤
大楠公	津田 禎二	海 緒方 敏雄	默禱 福井 庸賢	山田 政義	平田 重光	相澤 美廣	加藤 菁山
△小倉右一郎	荒磯 佐々木 彪	風 △後藤 清一	晨朝 岡 正敏	銀線文象嵌宮	秋山 逸生	亞字式手匣 林 二郎	鐵牛置物
新生 矢崎 虎夫	水のほとり	試作△堀江 越	闘ふ軍鶏	相會秀之助	草すまふ	草すまふ	平松 宏春
興亞聖觀自在	來家 虛眸	草すまふ	草すまふ	草すまふ	草すまふ	草すまふ	草すまふ
女立像第三	義夫	立像 黒川 泰	立像 黒川 泰	立像 黒川 泰	立像 黒川 泰	立像 黒川 泰	立像 黒川 泰
高藤 鎮夫	南海 鈴木 仁亮	大空 兒島 正典	大空 兒島 正典	大空 兒島 正典	大空 兒島 正典	大空 兒島 正典	大空 兒島 正典
男の立像	眞海徳太郎	裸婦 富永 棟太	裸婦 富永 棟太	裸婦 富永 棟太	裸婦 富永 棟太	裸婦 富永 棟太	裸婦 富永 棟太
清雅 富田 匠美	架橋成る	架橋成る	架橋成る	架橋成る	架橋成る	架橋成る	架橋成る
若き男原田新八郎	梅田 修	梅田 修	梅田 修	梅田 修	梅田 修	梅田 修	梅田 修
若き女小倉 一利	若人 渡邊 徹	若人 渡邊 徹	若人 渡邊 徹	若人 渡邊 徹	若人 渡邊 徹	若人 渡邊 徹	若人 渡邊 徹
軍神加藤少將	白明 堤 達男	白明 堤 達男	白明 堤 達男	白明 堤 達男	白明 堤 達男	白明 堤 達男	白明 堤 達男
△夏目 貞良	爽△△安田周三郎	爽△△安田周三郎	爽△△安田周三郎	爽△△安田周三郎	爽△△安田周三郎	爽△△安田周三郎	爽△△安田周三郎
少女立像	女立像小口 節三	女立像小口 節三	女立像小口 節三	女立像小口 節三	女立像小口 節三	女立像小口 節三	女立像小口 節三
神威 田近 政二	救ひを待つ男	救ひを待つ男	救ひを待つ男	救ひを待つ男	救ひを待つ男	救ひを待つ男	救ひを待つ男
男 太田 良平	鈴木 達	鈴木 達	鈴木 達	鈴木 達	鈴木 達	鈴木 達	鈴木 達
男 森本 清水	光映	光映	光映	光映	光映	光映	光映

象嵌黒柿卓 吉本 壽	鹽釉鶯鶯陶額 森野 嘉光	高久 空木	紋友禪染朝顔文 四曲屏風	中村 義一	染色月見草屏風 二曲半双	鈴木 貞路	宮代 健三
華紋象嵌壺 政雄	川魚模樣沈金小 屏風	黃銅雙獸文色紙 野口 景園	談議所榮二 麥ノ圖染屏風	陶器大吉文花瓶 井上 良齋	矢部 連兆	高原の春木象嵌 四曲屏風	乾漆角丸形葡萄 文庫
漆百合に溪流小 屏風	紅鶴群手織錦壁 掛	漆器朝嗽壽山之 圖硯箱	綴織彩刻の圖壁 掛	漆月之花手宮 普丸 耕堂	船津 英治	銀鐵玉蜀黍紋箱 増田 三男	彫文罽入水盤 △大森 光彦
木下 佳俣	中村 鵬生	漆器硯箱	高木 敏子	十牛圖四枚折屏 風	張問 禪一	鐵珠鷄置物 芳武 茂介	△漆涼味飾箱 △富樫 光成
七寶螺文様皿 安藤重兵衛	漆柿圖屏風	瑞穂硯雨宮 靜軒	草庭新秋染屏風 掛	菜果文四曲屏風 福村 健	鐵漆重硯宮 森 茂介	漆菱文硯箱 守屋 松亭	銅獅子の花瓶 △中野 三郎
秋之夜鐵皿 小林 親光	豐産の圖蠟染屏 風	布目華文鉢 鈴木 青々	木瓜形菱花紋透 盛盤	透文六角盛器 吉原 良雄	萩文黃銅壺 後藤 年彦	八重葎蒔繪手箱 古山 英司	彫金白四分一白 鷺之置物
三色切子鉢 河上傳次郎	鈴木 福富	象眼黃銅文宮 鈴木 昇一	生野祥雲齋 鑄銅鳥耳花瓶	西瓜紋宮 有田 利章	抱翼譜乾漆文庫 山田 豊	青鐵砂釉山草文 花瓶	鐵刀木机 △稻木春千里
鐵布目象嵌魚紋 小宮	離愁人形 堀 柳女	磁器柿花瓶 鈴木 昇一	草花文様黃銅水 盤	彫漆明鴉香盆 池内 荷芳	紅蜀葵染二曲屏 風	加藤 華仙	青華三友文花瓶 △伊東 翠壺
金魚金具 大木 秀春	蟬紙朝人形 鶴卷 三郎	紫漆卓増村 益城	彫金鼻之置物 後藤 學一	彫金經匣 鹿島 一谷	南洋の蘭衛立 中田 清雄	漆器小棚 多畑 宗哉	大東亞戰爭之記 録鑄銅花瓶
蟹飾金具 大關 勝盛	葱ひ人形 五味 文郎	赤江橋兼雄 拾二稜青銅水盤	黃銅渡鳥文鉢 寺本 美茂	竹華文手宮 伊藤乃武方	輕金屬象嵌料紙 硯箱	漆器平脱熱河手 箱	庚申△石田 素暎
香合 大谷 玲石	まんだらの絲紙 塑像	漆彌榮二曲屏風 立川 政吉	豆文漆手箱 山野井藤四郎	輕金屬象嵌料紙 硯箱	佐藤 尙珉	魚文鑄銅花器 能町辰次郎	△信田 洋
山葵金具 小林 盛良	葉の模樣彫漆手 箱	白光染屏風 佐治 正	陶器四方型煉上 大皿	鑄銅花瓶 眞藤 王眞	漆稔の棚 熊谷 恒雄	鑄銅花瓶 津田 如洋	△岩田 藤七
漆楓平文手箱 伊藤 隆光	眞鍋 光男	白光染屏風 佐野多景夫	漆署扁花手宮 安達 其峰	乾漆高杯 中川 哲哉	蘭屏風二口志保子 磁器山海文小屏 風	銀鷄鳥蒔繪箱 田島耕太郎	△九谷 端堂
均窯大平之象飾 宮下 善壽	彩繪柿之圖壺 德力孫三郎	讚春遊鯉梨花漆 器衛立	漆夏ノ夕書棚 小野 爲郎	花器 大谷 春彦	漆朱の壺 増田 敬象	漆熊笹手宮 平野 直行	桃葉紋宮 △梶田 惠
漆邦薰二折小屏 風	透文兩耳青銅花 瓶	漆雲平壺 片岡 茂保	漆夏ノ夕書棚 小野 爲郎	漆朱の壺 増田 敬象	乾漆四方盛器 山永 光甫	漆玉蜀黍模樣小 屏風	銅子花瓶 △各務 鐵三
花瓶 鴨 幸太郎	銀焙附葉紋花瓶 小川 正波	彩雲平壺 龜倉 宇吉	漆夏ノ夕書棚 小野 爲郎	漆熊笹手宮 平野 直行	漆玉蜀黍模樣小 屏風	漆玉蜀黍模樣小 屏風	銅子花瓶 △各務 鐵三
黑釉蝸牛丸紋飾 皿	朝夕漆衛立 高橋 節郎	彫漆里芋圖色紙 笥	漆夏ノ夕書棚 小野 爲郎	漆熊笹手宮 平野 直行	漆玉蜀黍模樣小 屏風	漆玉蜀黍模樣小 屏風	銅子花瓶 △各務 鐵三
漆衣笠草の棚 船本 汀	水邊漆屏風 谷澤不二松	植田 如僊	漆夏ノ夕書棚 小野 爲郎	漆熊笹手宮 平野 直行	漆玉蜀黍模樣小 屏風	漆玉蜀黍模樣小 屏風	銅子花瓶 △各務 鐵三
陶器花鳥文大皿 大江 文象	南瓜紋染二曲屏 風	鈴木 清	漆夏ノ夕書棚 小野 爲郎	漆熊笹手宮 平野 直行	漆玉蜀黍模樣小 屏風	漆玉蜀黍模樣小 屏風	銅子花瓶 △各務 鐵三



萬福牛二曲屏風  
 △小合友之助  
 泰山建染天鷲  
 瀨屏風  
 △鹿島 英二  
 潮の香蒔繪屏風  
 △島野 三秋  
 吉祥の圖染屏風  
 △山形駒太郎  
 鹿鑄錫置物  
 △根箭 忠綠  
 銅押出し鳩置物  
 △北原 千鹿  
 菊形黃銅花挿  
 △小野島知文  
 青銅遊鑲花入  
 △高村 豐周  
 彫漆山吹硯箱  
 △堆朱 楊成  
 漆寫文庫  
 △結城 哲雄  
 花籃△飯塚瑠璃齋  
 漆蒔芽小屏風  
 △高井 白陽  
 鑄銅壺形花瓶  
 △中島 豐次  
 彩磁草花花花瓶  
 △宮之原 謙  
 秋苑蒔繪硯箱  
 △梅澤 隆眞  
 彩挺薰花花瓶  
 △桶部 綱式  
 鑄銅獅子耳花瓶  
 △香取 正彦  
 染付七葉青波之  
 圖水指  
 △河村喜太郎

青銅靜かなる緊  
 張象龜置物  
 △内藤 春治  
 流紋彩蝶壺  
 △宮坂 房衛  
 壺  
 △山本 自爐  
 鑄銅小禽文花瓶  
 △北原 三佳  
 窯變線彫牡丹文  
 局壺  
 △安原 喜明  
 漆器翠鳥飾篋  
 △前 大峰  
 燕に合歡文赤繪  
 銀欄手花瓶  
 △加藤土師朋  
 海の荒鷲鑄銅置  
 物  
 △森村 西三  
 溜り舟机  
 △小松 芳光  
 ワイヤン青瓷紋  
 花苑  
 △澤田 宗山  
 漆南國の瑞鳥飾  
 篋  
 △二木 成抱  
 銅香爐  
 △田村 泰二  
 茶葉末壺香爐  
 △河村 靖山  
 獸駟鑄銅色繪置  
 物  
 △佐々木象堂  
 紅白梅飾皿  
 △清水正太郎  
 薩 錦聖觀世音菩  
 薩  
 △遠藤 虛竊  
 新緑和染屏風

△木村 和一 漆南瓜之圖二曲  
 屏風  
 △喜多村榮太郎 熱帶花苑描染屏  
 風  
 △皆川 月華 金丸 青郊  
 東京鑄金會工藝展 十七日—二十二日  
 日本橋・三越  
 現代木彫名作展 十七日—二十二日  
 日本橋・三越  
 岩城硝子工藝部作品展 十七日—二十  
 二日 日本橋・三越  
 新制作派協會展(洋) 十七日—二十八  
 日 大阪市立美術館  
 福澤一郎新作展(洋) 十九日—二十二  
 日 敦寄屋橋・日動畫廊  
 東日一再起第一回であるだけに努力の  
 認められる個展。大部分海に取材したも  
 のだが、中では百號の大作「海(一)」が  
 大きなあり、色調に深味もあつて、  
 その他五十號の「海(二)」、人物を配し  
 たものでは「渚」が佳品。ただ、海に飛  
 行機や軍艦を添へ、探照燈を背景に描く  
 のは、蛇足の感がある。  
 黒田重太郎個展(洋) 二十日—二十五  
 日 大阪・阪急  
 宮川香山作陶展 二十日—二十五日  
 大阪・松坂屋  
 第五回福岡美術會展 二十日—二十九  
 日 福岡・玉屋  
 第五回臺灣總督府展 二十日—二十九  
 日 臺北市公會堂  
 加藤唐九郎新作陶磁展 二十一日—二

十四日 日本橋・高島屋  
 芋錢遺芳展(日) 二十一日—二十四日  
 日本橋・高島屋  
 珍品油繪展 二十一日—二十五日 銀  
 座・青樹社  
 第一回美交會展(洋) 二十二日—二十  
 五日 銀座・菊屋  
 東日一昭和五年美校卒業の作家十餘人  
 が集まつて出来た會の第一回展。須山計  
 一「山の男」は場中の力作だが、印象派  
 風の描寫が生ぬるく、山崎坤象は低調。  
 創作美術の矢橋、山口のふたりでは後者  
 未完成で、前者の「假面」がちよと面  
 白い。その他中尾達之の小品「靜物」、三井  
 滋雄「バンデー」、小見辰男「新緑」など  
 無難。  
 第一回桃源會油繪展 二十三日—二十  
 五日 岡山・金剛莊  
 大久保作次郎、吉村芳松、柚木久太の  
 作品展  
 國民精神文化研究所十周年記念展 二  
 十三日—二十五日 大崎・同所  
 第一回日本輸出工藝聯合會工藝品展  
 二十三日—三十一日 日本橋・高島屋  
 商工省貿易統制會後援  
 東日一日本輸出工藝聯合會の主催した  
 第一回展である。入選一割以下とすれば  
 相當嚴選の筈であつたが、まだくなく  
 てもよいやうな作品が澤山あつた。石黒  
 宗磨の柿柚丸形無文鉢は商工大臣賞に値  
 ひした佳作。北大路魯郷の織部四方鉢は  
 そのどつしりした感じがよく、横川陶泉

の色釉、コーヒー碗は多くの類品を抜く。  
 福岡の特殊硝子會社の色重硝子盛鉢は技  
 術的にとりた。漆器類では静岡理研の  
 花模様組箱のやうなつまらぬものがあつ  
 ても、幾何文の箱は嫌味なく、沖繩の朱  
 塗丸盆などはよすべきであつた。商工省  
 陶磁器試験所の鰐文、風俗文の大花瓶は  
 共に出来の悪い代表作である。  
 「審査長」國井喜太郎(審査官)谷内治  
 橋、水町和三郎、高村豐周、山崎覺太郎  
 山脇巖、長島喜三、川勝堅一(出品申込)  
 四七六四點(搬入)二六七二點(入選)  
 三九三點(商工大臣賞、日本工藝賞)柿  
 柚丸形無文鉢、石黒宗磨(日本工藝賞)  
 「水裂紋盛皿」八木一舛、「陶製ブローチ  
 十個」宗野宗太郎、「色重硝子盛鉢」福  
 岡特殊硝子株式會社、「アルマイト幾何文  
 組箱」理研電化工業株式會社、「丸形松紋  
 盆」佐治正、「果物盛器」戸谷純之助、龜  
 甲霞文鐵瓶、淺田薰山、「染結屏風」野口  
 眞造、「敷物」外村吉之介  
 青龍社第十四回展(日) 二十三日—十  
 一月三日 名古屋・十一屋  
 岸田劉生畫稿展(洋) 二十四日—二十  
 六日 大阪・天竺堂  
 月明會日本畫小品展 二十五日—二十  
 七日 銀座・資生堂  
 第十二回京都工藝美術展 二十五日—  
 二十九日 大禮記念京都美術會 京都工  
 藝美術協會主催、商工省後援  
 森守明個展(日) 二十七日—二十八日  
 第二回廣島美術協會展 二十七日—二

十九日 廣島・福屋

宏心會新作日本畫表裝研究展 二十七日

日一三十一日 上野・松坂屋

第三回池上秀敏塾以心社展(日)二十七日一三十一日 日本橋・高島屋

大石俊彦個展(洋)二十七日一三十一日 銀座・青樹社

東日一裸婦「アルジェリー風」は力作ではあるが難をいへば木彫のやうに固く、衣裳人形をモチフとした一聯の作品にも格別の面白さはない。佳作は風景に多く、滯歐作ではアツシジ及びバレルモなどの伊太利風景、歸朝後のものでは菅平、志賀高原を描いたもの、特に後者の「木戸池」、「高原の池(水彩)」は悪くない。

柏舟社繪畫展(日)二十七日一十一月一日 大阪・三越

石井鶴三素描展 二十七日一十一月一日 大阪・阪急

山喜多二郎個展(洋)二十八日一三十一日 銀座・資生堂

こうげい・日本工藝協同新作展 二十八日一三十一日 銀座・鳩居堂

第四回紅騎會染色工藝展 三十日一三十一日 日本橋・三越

會員は河合研二、武樋貞波留、上野斌、熊谷吉郎、熊谷重太郎

東郷青兒第四回個展(洋)三十日一三十一日 日本橋・三越

大森光彦作陶展 三十日一十一月一日 日本橋・三越

高須芝山個展(日)三十日一十一月七日 新宿・伊勢丹

### 十一月

第三回佐藤一章新作展(洋)一日一三日 寄居橋・日動畫廊

正宗得三郎日本畫と油彩展 一日一三日 岡山・金剛社

多摩帝國美術學校創立記念展 一日一三日 世田ヶ谷・同校

第二回雜賀文子個展(洋)一日一四日 銀座・資生堂

泉屋畫廊開設第一回油繪展 一日一七日 銀座・同畫廊

無敵皇軍を讀み美術展 一日一八日 上野・松坂屋 文化奉公會主催 陸海軍省後援

第二十九回二科展(洋、彫)一日一十五日 大阪市立美術館

文化學院繪畫工藝展 二日一三日 駿河臺・同校

青山義雄個展(洋)二日一六日 大阪・美友社

佳都美術工藝展 三日一四日 京都・栗田青蓮院

濱田庄司作陶展 三日一六日 日本橋・三越

藤島武二作品鑑賞會 三日一七日 日本橋・三越

明年の喜壽を迎へて其の健在を祝すると共に數十年に亘る畫業を偲ぶため三越主催で展覧。陳列品は左の通りであつた。

た。

### 陳列目錄

蝶 明治卅六年

チヨチヤラ 明治四〇年

セース河畔 同

フランス婦人像 同

グエルサイユの秋 同

ヨット 同

ルクサンブル公園 同

ボンベイ遺跡 同

ボンベイ遺跡 同

神聖の森 明治四十一年

ローマの寺院 同

ローマの遺跡 同

雲(ローマ) 同

空(ローマ) 同

風吹く日 同

婦人座像 同

明治四十一年 室内婦人像 同

イタリー婦人像 同

黒扇 明治四十二年

黒衣の婦人 同

グイラデスラの池 同

浴室の女 同

老人の像 同

海 明治四十三年

天平時代 同

朝鮮風景 大正二年

椅子に凭る女 大正四年

大川端殘雪 大正十一年

裸婦アマゾニス 大正十三年

婦人半裸像 大正十五年

鉸剪眉下繪 昭和二年

靜物 同

牡丹 昭和三年 日の出昭和九年

藏王山雪の日の出 昭和四年 瀬戸内海の日の出 同

觀音 昭和五年 臺灣の聖廟 同

大王御に打寄せる怒濤 昭和六年 聖廟の裏木戸 同

朝霧 同 荒れる日 同

潮岬 同 日の出 同

大洗の浪 同 臺灣の女 同

御所花蔭亭壁畫下圖 同 港の正月 同

東海旭光 昭和七年 支那芝居の女 同

五劍山の日の出 昭和十二年 上海黃浦江 同

五劍山の日の出 昭和十四年 大吠の燈臺 昭和十五年

杏花の路 同

平塚運一第二回新作版畫展 三日一七日 銀座・青樹社

日 銀座・青樹社 三日一八日 大阪・橋本邦助油繪展

大丸 橋本靜水新作日本畫展 三日一八日 上野・松坂屋

大畑桑丘人醒醐壁畫仁王護國曼荼羅展 三日一八日 大阪・高島屋

第三回燦爛會展(日)三日一八日 神戶・三越 東丘社主催

半島流後美術展 三日一八日 京城・丁字屋 朝鮮總督府情報課國民總力朝鮮

聯盟主催

東北美術家協會第一同展 三日—八日  
仙臺・藤崎

坂本繁二郎還曆記念出陳作寫真展 三  
日—十五日 大阪・關西畫廊 草人社主  
催

村川彌五郎個展(日) 四日—七日 銀  
座・村松畫廊

讀賣「晩秋の頃」や「松」等を始め  
紙本ものは個展としては大作に屬する  
が、色調にも少し明快味がほしく、飾  
縁の色も調和を缺いてゐる。「流れ」「海  
濱」等絹本もの、方が賦彩も鮮やかで佳  
作。

鐵齋翁と蓮月尼遺墨展 五日—八日

日本橋・高島屋

足立源一郎第二回山嶽展(洋) 七日—  
十一日 教寄屋橋・日動畫廊

第七回三井コレクシオン陳列 七日—  
十八年一月三十日(毎土曜) 麹町・同邸

陳列目錄

靜物 石井 柏亭 女 ドラン

室內 三岸 節子 老人 ラファエリ

細道 和田 三造 室内 シヤルダン

黃衣の少女 和田 英作 秋の景久米桂 一郎

舞子 岡田三郎助 風景 淺井 忠

女 前田 寛治 太陽 藤島 武二

靜物 青山 熊治 羊群 ボンヌール

修道 布施信太郎 婦人 マネー

冬の朝片多 徳郎 樹蔭の道 コロ

市場へ行く(水 肖像 ヴァンダイク

彩) モーヴ

牛 トロワキヨン 岸田 劉生  
菊と婦人 女(素描)

寺院(水彩) 黒田 清輝 シヤヴァンヌ  
少女の顔(素描) ジョー

村の娘(淡彩) メンチエル

十宜會第一同展(日) 八日—十二日  
日本橋・三越

會員は石崎光瑤、中村大三郎、堂本印  
象、宇田萩郎、徳岡神泉、山口華楊、小  
野竹喬、案本一洋、金島桂華、福田平八  
郎の京都十作家よりなるが、神泉、竹喬  
は不出。

光野氏蒐集岸田劉生日本畫鑑賞會 九  
日—十三日 銀座・青樹社

眞野紀太郎個展(洋) 九日—十三日

大阪・美交社

東西大家新作日本畫展 十日—十四日

日本橋・白木屋 東風會主催

菅橋彦小品畫展(日) 十日—十五日

大阪・大丸

大矢峻嶺新作展(日) 十日—十五日

京都・大丸

春泥會小品展(日) 十日—十五日 大  
阪・松坂屋

多摩帝國美術學校圖案科展 十日—十  
五日 澁谷・東横百貨店

花岡万舟大東亞聖戰報國畫展(日・洋)

十日—十九日 大禮記念京都美術館

新版畫會第三同展 十一日—十三日

銀座・資生堂

京都工藝美術展 十一日—十五日 日

本橋・高島屋 京都工藝美術協會主催  
商工省後援

東日—山鹿清華の手織錦踏銀圖と山岸  
景春の刺繍は共に平凡、蠟染と綴は全部  
が落選ものだ、陶磁の部では清水正太郎  
の紅彩花瓶がよく、形と釉の好調子を  
とりた。河井寛治郎の鐵釉の蓋物も面  
白い。しかし京都の陶磁には形の研究が  
不足してゐる、この事實は類形の壺十幾  
つか正確かにこれを證してをり、漆器や  
金工はとても問題にならぬほどの不成績  
であつた。

第十三回阪急工藝美術展 十一日—十  
五日 大阪・阪急

兵庫縣新美術聯盟第二同展(綜合) 十  
一日—十五日 神戸・三越

今回は會員の出品作も鑑査を行つた。

〔陳列數〕第一部五二點、第二部七九點、  
第三部一六點

臼井剛夫第二同個展(日) 十一日—十  
五日 日本橋・高島屋

第二回日本人形美術院展 十二日—十  
八日 日本美術協會

陳列數四〇點、特別陳列として松本喜  
三郎作「鐘鬼と美人」(小栗兆兵衛藏)が  
あつた。

第二回青々會展(日) 十三日—十七日  
日本橋・三越

讀賣—川端龍子「菊花節」「風神雷神」  
「稻妻」三點の中「菊花節」が構圖の妙  
味を發揮して第一の佳作。坂口「草」「秋」  
の二曲半双の大作より「小春」の小品が

佳く水中描寫の苦心は報いられてゐる。  
加納三樂「錦鱗搖落」山崎豐「珠鷄圖」  
福岡青嵐「山陽先生」等それぞれ健在を  
示し、市野亭の「柿」「鴨」に比較して市  
野の味があり、安西啓明「愛」の子供が  
成功。功は松の表現に喰ひ足りないもの  
がある。

第一回名古屋綜合藝術展(綜合) 十三  
日—十九日 名古屋市 名古屋市及市翼  
賛文化聯盟主催  
同展の會場並びに審査員は左の通りで  
あつた。

〔日本畫〕松坂屋、川崎小虎、福田平八  
郎〔工藝〕松坂屋、板谷波山、香取秀眞  
〔表裝〕松坂屋、三宅風白、岡岩太郎、  
〔洋畫〕十一屋、石井柏亭、太田三郎、  
横井禮市、中澤弘光(彫刻) 十一屋、石  
井鶴三、渡邊義知、加藤顯清(産業美術)

三星、長長城、中川貞三(以上全般)刈  
田貞一郎、長澤基、宇都宮仙太郎、増田  
金藏(以上、印刷圖案、漫畫)道野鶴松、  
富田繁七、河邊勝、築源治郎、木村徳壽  
三輪眞男(以上染織圖案)(寫眞)丸善、  
なし(書道)徳川綱、石田泉城、原田鳴  
石、恒川樵谷、黒田秀谷、淺野松軒

〔陳列數〕日本畫七六點、工藝一〇一點  
表裝五〇點、洋畫一二五點、彫刻四九點  
産業美術六二點、寫眞二六點、書道一四  
七點

興亞美術工藝品展 十三日—二十一日  
日本橋・三越

板倉賛治回顧展(洋) 十四日—十六日

銀座・村松畫廊

遠藤順治綴錦及繪畫展 十四日—十七日  
銀座・資生堂

東京會日本畫新作展 十六日—十八日  
芝・東京美術會館

赤松麟作近作展(洋) 十七日—二十日  
大阪・天賞堂

歐洲油繪水彩畫鑑賞會 十七日—二十一日  
上野・松坂屋

第三十二回新作日本畫展 十七日—二十二日  
大阪・大丸

橋本關雪聖戰四十年展(日) 十七日—二十二日  
京都・大丸

河合卯之助陶器展 十七日—二十二日  
大阪・三越

關向美堂日本畫展 十八日—二十日  
銀座・資生堂

第十三回七絃會展(日) 十八日—二十一日  
日本橋・三越

今日は古徑、青邨の出品はなく、清方「菊佳節」、靱彦「憶良の家」、契月「樵翁」のみ。

第二回小川千璽新作展(日) 十八日—二十二日  
日本橋・高島屋

朝陽社第四回展 十八日—二十二日  
新宿・三越

第六回一水會展(洋) 十八日—二十六日  
大阪市立美術館

現代名家日本畫新作展 十九日—二十一日  
銀座・鳩居堂

伊藤慶之助油繪近作展 十九日—二十三日  
大阪・美術新論社畫廊

井泉水墨戲畫展觀 十九日—二十四日  
大阪・三越

昭和聖代工藝名匠展 十九日—二十五日  
大阪・松坂屋

汎工藝創刊二十周年を記念して同社主催で行はれた展覽會、帝國美術院會員六名を初め、文展審査員並に無鑑査級三十一名の出品を陳列した。

高橋虎之助近作油繪展 二十日—二十四日  
名古屋・松坂屋

銀 社第二回水彩畫展 二十日—二十五日  
銀座・銀座畫廊

第二回涼晨會油繪展觀 二十日—二十五日  
日本橋・高島屋

金山平三「果」「秋」「菊」、曾官一念「山烟」「鉢の花」、安井會太郎「林橋」、牧野虎雄「朝顔」「小庭」「芍藥」

石山太柏個展(日) 二十二日—二十三日  
杉並・同邸

第十二回岡常次個展(洋) 二十二日—二十四日  
銀座・銀座書店

新作日本畫展 二十二日—二十七日  
日本橋・三越

第一回扶桑會展(綜合) 二十二日—三十日  
金原省吾を客員とする會員十七名の新綜合團體で、その第一回展である。

〔陳列數〕産業美術一〇點、デッサン水彩版畫二七點、油彩一三〇點、彫刻四點

工藝一六點、水墨淡彩茶掛二五點、書道三八點

開設三周年記念洋畫彫刻大家展 二十

三日—二十六日 大阪・天賞堂

第四回乾坤社展(日) 二十三日—二十九日  
東京府美術館

東日—大阪を本據とするこの會もいよいよデパートから美術館に進出した。主宰知道人矢野橋村は六曲一双に蓮池を描いて跳る鯉一尾を添へたが、蓮花を落彩としたため葉がドロテスクになつて失敗、新味は無くとも游戯四題がこの作家の本領であらう。矢野鐵山は「蘇秦張儀」と題して二人の行事論策三萬余言をこまごまと抄録したのは御苦勞な話だが、蘇秦と目せられる右半双の人物は稚拙を通り越してゐる。出品畫中の異色は學人外狩素心庵の貼り交ぜ二曲一双で、「夏花六題」はともかく八幡大菩薩はじめ六神を描いたものは特異の風格があつて悪くない。

〔陳列數〕四三點(内同人六點、社人三點)(新社人)中谷紅山、融紅鸞

第十六回新構造社展(洋、彫、工) 二十三日—二十七日  
東京府美術館

〔陳列數〕二〇三點(内會員出品五四點)

第七回大潮會繪畫展(日、洋) 二十三日—二十七日  
東京府美術館

東日—全國教職員の繪畫展といふこの會の性質上水彩畫に今年も秀作が多く、豊千里(鹿兒島)の「河岸風景」小林新吉(栃木)の「夏の墓地」など、歸成團體の作品に比して遜色ない。日本畫は相變らず不振であり、油彩では大内田茂士「靜物」を除いて特に佳品は見られなかつた。

久米嘉祿個展(洋) 二十四日—二十六日  
銀座・資生堂

東日—和田英作に師事する若い新人の第一回展。「休憩」と題する裸婦は場中の力作だが固く、もう一點の裸婦には柔かな雰囲気はあるがいかにも弱い。靜物は誠實には描いてゐるが色感鈍く、小品「菖」「庭園小品」の二點が辛うじて取上げられる。

橋本關雪南方畫信展 二十四日—二十九日  
大阪・三越

泥谷文景花鳥十二題鑑賞會(日) 二十五日—二十九日  
日本橋・高島屋

三宅克己水彩風景畫展 二十六日—二十九日  
數寄屋橋・日動畫廊

藤岡俊一郎個展(洋) 二十六日—三十日  
銀座・青樹社

藤岡紫峰個展(日) 二十六日—十二月二日  
大阪・松坂屋

奈良美術院卓の會 二十七日—二十九日  
銀座・資生堂

佐伯米子個展(洋) 二十七日—三十日  
銀座・銀座畫廊

第二回日東美術院展(日) 二十七日—十二月七日  
東京府美術館

入選三十七點の外、統裁岡部香峰の「高岳親王御圖」「早春」の二點及び會員西村甫北、武田一路の各一點があつた。

〔淺田氏助成賞〕中根宏(獎勵賞) 江川薰、五十嵐直穂、山本傳治郎、岩井鏡子

棟方志功新作日本畫展 二十八日—三十日

二月二日 日本橋・高島屋

河井寛次郎新作陶器展 二十八日—十二  
月二日 日本橋・高島屋

第十一回新興美術協會展(洋、版、圖)  
二十八日—十二月六日 大阪市立美術館  
〔出陳數〕第一部(洋)一四四點、第二  
部(版、水)一八點、第三部(圖)四五  
點

第五回京都文展 二十九日—十二月十  
三日 大禮記念京都美術館

山下皓齋新作展(日)三十日—十二  
月四日 大阪・朝日ビル

## 十二月

明治初期洋畫發達資料展 一日—四  
日 銀座・資生堂

石川寅治近作展(洋)一日—五日 大  
阪・美交社

三輪晃勢南方スケッチ展 一日—六日  
京都・大丸

鈴木金平版畫展 一日—七日 銀座・  
泉屋畫廊

第十一回新興社展(洋)一日—十九日  
大阪市立美術館

橋本多聞洞主催新作日本畫展 二日—  
四日 芝・東京美術館

第三十一回京都表裝展 三日—七日  
京都・岡崎公會堂

大東亞戰爭美術展(日、洋、彫、ボス  
ター)三日—二十七日 東京府美術館、  
朝日新聞社主催、陸軍省、海軍省後援、  
陸軍美術協會、大日本海洋美術協會、大

日本航空美術協會協賛

東朝—この展覧會の主體は、いふまで  
もなく第二、第三、第四の各室を占める  
陸海軍作戦記録畫である。それは大東亞  
戰爭勃發と同時に、陸海兩軍部の委嘱を  
うけて現地へ派遣された作家のもたらし  
た收穫であるが、いづれも單に課せられ  
た責任を果すといふ意味ばかりでなく、  
これな好機會に、進んで戰爭畫を創らう  
とする積極的な意志と氣魄が窺はれるの  
はよい。

戰爭畫もいよ／＼本格的になつて來  
た、といふ感じである。もう良い加減な  
空想や、時局便乗の心理ぐらゐでは、確  
な作品が出来ないといふところまで發展  
してゐる。この記録畫の特別陳列が、從  
來になき見應へのある印象を與へるの  
は、作家の心構、體驗、技術の三要素が、  
しつくりと調子を合はしてゐるからであ  
る。さういふ意味で、作家にたいする軍  
の銓衡方針は間違つてゐなかつたし、選  
ばれた作家の方もまたその要望にこたへ  
るだけの誠意と實力をみせてゐる。だい  
たいこれで、現段階における戰爭畫の水  
準と傾向は判るわけであらう。

この展覧會をみて誰も先づ一應氣のつく  
ことは、洋畫の場合とちがつて、日本畫  
の場合は戰爭といふ激烈な行動を描寫す  
るのに、かなりの困難を伴ふといふこと  
である。川端龍子、山口蓬春、吉岡堅二、  
三輪晃勢、福田豊四郎等の如き腕のある  
人々にして、なほ且つ平面描寫や靜的な

裝飾性に陥る危険がないとはいへない。

しかし、このことは日本畫が戰爭畫の  
制作にたいして絶望だといふ意味では決  
してない。あへて洋畫の形式を眞似たと  
いふわけではあるまいが、たとへば、日  
本空軍の爆撃下に破壊散亂した敵の車  
輛、兵器を寫した吉岡や、敵前上陸をす  
べく舟艇に乗り移る部隊を描いた福田の  
技法の如きは、日本畫の缺陷を何とかし  
て打開しようとする苦心の跡が見受けら  
れるのであつて、その點は、香港の夜戰  
を九龍の停車場から眺めるところを描い  
た山口なども亦、とにかく一つの新生面  
を開拓したものといへるであらう。

洋畫の記録は空中戰、敵前上陸、突撃  
戰、海戰、敵將降伏など種々變化のある  
題目を扱ひ、なかなか迫力のある活動的  
な佳作が多い。ことに藤田嗣治は三點の  
力作を出品し、若干の追従者を出すやう  
な、獨自の戰爭畫スタイルをつくりあげ  
てゐる。

畫境の一部には、今なほ課題藝術を第  
二義的なものだといふ風に考へるものが  
あるけれども、實をいへば、戰爭畫ぐら  
ゐる作家の實力を明瞭に示すものはない。

藤田が颯爽として戰爭畫の先登を切つ  
てゐるといふのも、それは十分たゞき込  
んだ技術の裏づけと、鋭い感覺の修練が  
あるからである。少し皮肉ないひ方をす  
ると、今日藝術院會員のうちで、藤田以  
外に何れだけの人が、正面から戰爭畫の  
制作に立ち向ふ自信と技術を有つてゐる

だらうか。

これは、ひとり藤田の場合にばかりい  
へることではない。たとへば鐵條網を切  
斷しながら敵前上陸を敢行する皇軍を描  
いた中村研一(これはこの人としての傑  
作である)香港の激戰や、山下、バーシ  
バル兩司令官會見の圖を描いた宮本三郎  
カリジヤテイにおける敵將降伏を描いた  
小磯良平などは、普通の畫を描かしても  
立派に描ける作家であり、この他猪熊弦  
一郎、向井潤吉、清水登之、田村孝之介  
田中佐一郎、佐藤敬、寺内萬治郎、中山  
巍、川端實などといふ諸君も、こゝでは  
その名を取かしめないだけの仕事を事實  
みせてゐるのである。

大體の傾向からいふと、藤田や宮本を  
始めとして、暗い畫面に細密な描法を試  
みたものが多く、これについては海の夜  
襲を扱つた蒼黒い畫や、暖色系の明るい  
畫がある。このうちで一番損をしてゐる  
のは夜の海上襲撃を描いた場合で、かう  
いふ行き方は、誰が描いても、たゞ青つ  
ばい單調な畫になり勝ちである。南政善  
のバングラム灣敵前上陸などは先づ出来  
の方であらう。

明るい傾向の作品中では、伊原宇三郎  
の作品が題材も面白し、オリエンタリ  
ストがやりさうな近東趣味をねらつてゐ  
る。悲壯な場面ばかりが戰爭畫の行くべ  
き道でなく、かういふ道もまた一面にお  
いて考へられてよいであらう。

記録畫以外の作品では、橋本八百二の



二點などは、もう少し大きな圖であつたらば記録畫に劣らないものになつてゐたであらうし、萩太郎、石本秀雄、山本日子士の諸作も、それぞれ眞面目な作品であつた。

たゞ階下の出品が日本畫、洋畫とも、いづれもみな低調なのは、技術の差もあるだらうが、記録畫の場合のやうに、はつきりした一定の目的と使命のもとに描かれたのでないから、これは已むを得ないことであらう。

彫刻の方は、ほとんど中村直人の獨り舞臺である。他に見るべき作品がないといふわけではないが、ハワイ特別攻撃隊の九軍神像と海にちなんだ記念碑の構想は立派なものである。(荒城季夫)

日本畫 二六六點 入選 無鑑査  
洋畫 五四五點 一四二點 五點  
彫刻 二四二點 三〇點 一七點  
ボスター 一二一點 七點  
〔特別陳列〕大東亞戰爭陸海軍作戰記録  
繪畫三八點及海軍九軍神彫塑  
〔朝日新聞社賞〕日本畫「曉」山本五常、  
洋畫「ブキテマ決死の突入」太田健一、  
彫塑「神兵降る」古賀忠雄

#### 特別陳列目錄

日本畫  
カリジヤテイ西方の爆撃 吉岡 堅二  
荊棘に挑む 川端 龍子  
香港島最後の總攻撃圖 山口 蓬春  
攻略直後の「シンガポール」 矢澤 弦月  
軍港

グアム島占領 江崎 孝坪  
英領ボルネオを衝く 福田豊四郎  
キヤビ軍港攻撃 三輪 晃勢

油 繪  
クラークフィールド攻撃 イナンジョンの戦  
コタ・バル  
マレー沖海戦 高光 一也  
ボルネオ作戦 中村 研一

神兵バレンバンに降下す ウエーキ島(其の二)  
タラカン島強襲  
トラカラ、スリムの戦  
ビルマ蘭貢爆撃 栗原 信  
マニラを望む 田村孝之介  
ウエーキ島攻略戦(其の一) 寺内萬治郎  
ミリ油田地帯確保部隊の活躍 松坂 康  
山下、バーシバル兩司令官 松坂 康

會見圖 清水 登之  
香港ニコルソン附近の激戦 宮本 三郎  
十二月八日の眞珠灣 藤田 嗣治  
シンガポール最後の日(ブキ・テマ高地) 同  
二月十一日(ブキ・テマ高地) 同

神兵奮戦之圖(落下傘部隊バレンバン精油所攻撃) 中山 鏡  
ジャワ沖海戦 有岡 一郎  
バリ島沖海戦 三國 久  
硝煙の道(コレヒドール) 猪熊弦一郎  
スラバヤ沖海戦 奥瀬 英三  
四月九日の記録(バタアン半島總攻撃) 向井 潤吉  
カリジヤテイ會見圖 小磯 良平  
バンナム灣敵前上陸 南 政善  
バタアン半島中央突撃部隊 鈴木榮二郎

コレヒドール「きく」高地 田中佐一郎  
バタビヤ沖海戦 石川 滋彦  
マンダレー入城とビルマ人の協力 伊原宇三郎  
潜水艦の米空母雷撃 藤本東一良  
ニューギニア沖東方敵機動部隊強襲 御厨 純一

ハワイ特別攻撃隊の九軍神 中村 直人  
第九回南畫鑑賞會展 四日―八日 日  
本美術協會 南畫鑑賞會主催  
長谷川昇油彩邦畫展 四日―九日 日  
本橋・高島屋  
東日―日本畫の様式を油彩で試みた例は多いが、こゝに展示された作品は實際に成功を収めてゐる。空間の生かし方を從來の日本畫に探つてそれに日本畫ではどうしても出難い量感が加へられ「子猫」「瓶花圖」など立派な畫格をそなへた秀作となつてゐる。洋畫家も日本畫家も參考に一見する價値は十分にある好展觀。

〔陳列數〕十一點  
岡倉天心遺作展 五日―八日 上野・美術學校  
天心の遺品遺墨等のほか芳崖、雅邦及び天心門下の諸作を陳列した。なほ五日には同校天心銅像前に於て「天心祭」が舉行された。

七絃會大阪展(日) 五日―九日 大阪・三越  
森村宜稻遺作展 六日 名古屋・美術會館宜稻會主催  
平井武雄水彩展 六日―八日 銀座・

養生堂 和工會工藝展 六日―十二日 銀座・服部時計店  
大矢万年堂主選曆記念新作畫展 七日―八日 名古屋・美術會館  
昭華會新作日本畫展 七日―九日 芝

東京美術會館  
澤田宗山ひつじに因む陶藝展 八日―十三日 大阪・大丸  
洛洋會入形展 八日―十三日 大阪・阪急

京都十匠作陶展 八日―十三日 大阪・三越  
クルーゼ油繪展 八日―十三日 大阪・三越

第二十回新燈社美術展(日、洋) 八日―十四日 大阪市立美術館  
本年は同社創立二十周年に當り、これを記念して名譽同人青木大乗の油繪日本畫四十餘點を蒐め、その回顧展を併催した。

〔同人推薦〕西田數雄〔準同人推薦〕圓尾華甫、村上武三郎、北村泰山、坂本正機  
高畑正明第七回洋畫個展 九日―十二日 銀座・養生堂  
第一回竹頭會展(日) 十日―十二日 銀座・双鳩ビル

洋畫家の日本畫材料による試作品展 瀬戸作陶會展 十日―十二日 名古屋・丸善  
現代名家新作日本畫展 十日―十五日

- 日本橋・高島屋  
角谷二葉堂主催日本畫展 十一日—十八日  
芝・東京美術會館  
田中繁吉近作展(洋) 十一日—十四日  
神戸・神戸畫廊  
熊谷守一近作油繪展 十二日—十五日  
大阪・天賞堂  
長坂春雄風景畫個展(洋) 十二日—十五日  
五日 銀座・菊屋  
日本刺繡院第一回作品發表展 十二日—十七日 日本橋・高島屋  
加藤版畫研究所近作版畫展 十三日—十五日 銀座・養生堂  
傳川白道子第二回南畫個展 十四日—十六日 銀座・銀座畫廊  
能彫刻作品展 十四日—十九日 銀座服部時計店  
共榮園日本畫內示展 十五日—十六日 芝・東京美術會館 大洋文化協會主催  
栗田九品庵主催新作展 十五日—十七日 芝・東京美術會館  
東西大家新作畫幅展 十五日—十九日 大阪・三越  
濱田庄司近作陶器展 十五日—二十日 大阪・三越  
新興乾漆彫刻展 十五日—二十日 銀座・松屋  
赤堀信平第三回彫刻展 十六日—十九日 日本橋・三越  
井上夏齋作陶展 十六日—十九日 日本橋・三越  
第四回日本彫金會展 十六日—十九日 芝・東京美術會館
- 日本橋・三越  
中村鐵造近作油繪展 十六日—二十日 大阪・天賞堂  
讚岐たくみ會新作工藝展 十七日—二十日 岡山・金剛莊  
清溪會日本畫鑑賞會 十八日—十九日 銀座・交詢社  
黑田新洋畫展 十八日—二十三日 大阪・阪急  
第二回尚綱會展(日) 二十一日—二十三日 芝・東京美術會館 關尚美堂主催  
小松益喜素描展 二十一日—二十三日 神戸・神戸畫廊  
宮本三郎油繪素描展 二十一日—二十五日 銀座・青樹社  
東日一南方從軍中の素描を二科會に出陳、好評を得たこの作家が、日常勉強として描いた素描近作廿數點に油繪小品を加へて展示したもの。佳作はドガ風の「浴後」及び「黒いマント」など。京舞妓を描いた一聯の作品も悪くない。油彩小品では「敗將パシバル」を採る。  
第五回柳女人形塾展 二十二日—二十五日 日本橋・高島屋  
新制作派會員彫刻作品展 二十二日—二十六日 大阪・天賞堂  
高山道雄、熊野俊市新作發表展(洋) 二十三日—二十五日 銀座・養生堂  
松島畫舫日本畫展觀 二十四日—二十六日 芝・東京美術會館  
双絃會日本畫展 二十四日—二十六日 芝・東京美術會館

## 展覽會以外の作品

## 日本畫

第二回橙黃會展 二十六日—二十八日 銀座・養生堂  
露尾兵衛個展(日) 二十六日—二十九日 京城・三越

小川芋錢遺芳展 二十八日—二十九日 名古屋・美術會館  
新古典美術協會展 二十九日—三十一日 銀座・養生堂

竹田玉齋筆「聖德太子御畫像」 竹田玉齋は「聖德太子御畫像」を謹作、この一月泰國大使館を通じてビブン總理大臣に獻贈した。金泥彩色畫、豎三尺二寸横一尺三寸、桐板製堅額である。(一月十四日報知による)

小早川秋聲筆「國防館壁畫」 小早川秋聲は前年來九段國防館壁畫を執筆中のところ、前年度製作の五點に引つゞき、殘る四點を本年二月に完成、三月愛國婦人會京都府支部より陸軍省に獻納された。畫題は「眞心」「和光」「偲べ戦線」「譽の家」、麻紙壁畫で、豎五尺五寸、横七尺のものである。なほ滿洲國建國十周年を迎へるに當り、全滿の開拓團へ報恩感謝の意味を含めた東本願寺の記念慶祝畫「豐土禮讚」も秋聲が執筆、本年秋に完成した。幅九尺豎六尺の麻紙大畫で、原色複製千枚を作り滿洲全開拓村に贈られた。

「王者香」の一幅を謹作、滿洲國皇帝陛下に獻上し奉つた。絹本着色、幅二尺五寸、豎五尺、本年二月に完成したものである。

堂本印象筆「十六大菩薩尊像」 高野山根本大塔の内陣十六大柱に十六大菩薩の柱繪を執筆中の堂本印象は、弘法大師御遠忌奉讃會長清浦奎吾伯の委嘱を受けてより十一月目の本年三月にこれを完成した。各十二尺四方の麻布に畫いたもので、受納した金剛峯寺當局は四月上旬大阪高島屋で公開の上、根本大塔内の柱に取付け莊嚴を行つた。

内山永暉筆「神武天皇御聖像圖」 神武天皇御聖像圖を橿原神宮に奉獻し、大東亞戰爭完遂と皇軍の武運長久を祈願する神武天皇御聖像畫奉獻奉讃會の御原本並びにその御寫本四體がこの三月末に完成した。御原本謹作者は札幌の内山永暉、御聖像畫の大きさは豎二尺六寸一厘横一尺二寸八分(二千六百一年と十二月八日に因んだもの)。原色寫眞による御寫本四體は改めて大本營に奉還獻納される。(三月三十一日讀賣四月二日中商によ

小室翠雲筆「王者香」 盟邦滿洲國建國十周年記念の鴻儀に際し、小室翠雲は

る)

竹内栖鳳筆妙法院獻納畫 竹内栖鳳は今回の妙法院大法要を慶讃して、方尺五に蛙二匹を畫いた一幅を製作、本年五月十六日同院へ獻納した。なほ栖鳳のほか十二名の京都畫人も夫々一幅を納めることになつてゐる。(五月十九日大毎による)

小野竹齋筆「四季山水展風」 岡山縣護國神社本殿用四季山水展風が、縣の依頼で小野竹齋により製作された。本年四月上旬より着手、春夏の右片隻は約四十日間で完成、左片隻も五月二十日に完成奉納された。用紙は鳥の子、寸法一面の幅一尺二寸、豎三尺八寸、六曲一双極彩色の展風である。

福田眉仙筆赤穂光專寺本坊襖繪 福田眉仙は播州赤穂光專寺本坊襖全部に聖戰戰跡「揚子江」「萬里長城」「萬壽山及玉泉山」「蘆溝橋」「大同石佛」六題を揮毫、本年六月に完成した。なほ本年秋には同じく赤穂淺野公菩提寺たる花岳寺の襖に富士、金剛、新高の三名山を描いた。

竹内栖鳳筆「宮城を拜して」 支那事變行賞陸軍關係者に下賜せられる賜品の下繪を本年六月陸軍省から依頼された竹内栖鳳は、病軀をおして上京、二重橋より宮城を拜する圖六點を六月に完成し、うち二點を選んで八月上旬陸軍省に納入した。二尺横物及び尺五横物、高島屋に於て、一は織物、他は染物で額面用のものに作られる。この作が遂に栖鳳の絶筆となつた。

なつた。

荒木十畝筆「富岳」 内原の滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所の訓練ぶりに感激した荒木十畝は、横六尺豎三尺の紙本「富岳」を製作、八月に完成して同訓練所長加藤完治へ贈つた。

豎山南風筆「國光」 美術院同人豎山南風は「國光」と題する朝日に山櫻の圖を描き、本年八月末に完成、佐世保海軍鎮守府へ獻納した。横山大觀、齋藤隆三の推薦によるもので、紙本着色、横二尺七寸、豎一尺七寸、某體に掲げられる。なほ同時に美術院々友河内舟人、岡田雄煌、三石紅樹、川手青郷、奥村玲瓏等も製作獻納した。

磯田長秋筆「海外の日本町」 磯田長秋は原宿の海軍館からの依頼により紙本に海外の日本人町を描いた。幅五尺三寸、豎四尺五寸、本年十月末に完成、畫材を慶長頃の泰國の港に取つてゐる。

本間秀岳筆「九軍人畫像」 豐中市の本間秀岳は眞珠灣強襲の九軍神の畫像を製作、この十二月の一周年を前に海軍省に獻納した。横七尺五寸、豎六尺の大幅日本畫である。

中村大三郎筆「醜の御櫓」 京都靈山護國神社繪馬殿奉納畫は京都著名の畫家により製作されたが、本年十二月最後に残つた中村大三郎の「醜の御櫓」が完成した。横三尺一寸、豎二尺九寸、上代の防人を白描淡彩で描いたもの。これによつて竹内栖鳳の未完成分をのぞく二十一

枚が揃つたわけである。(十二月二十五日大毎による)

川合玉堂筆獻上屏風「搖ぎなき大和島根」 數年前日本赤十字社から皇太子殿下御降誕奉祝獻上屏風揮毫の依頼を受けてゐた川合玉堂は、やうやく苦心の構想なつて「搖ぎなき大和島根」と題する六曲一双屏を謹作した。本年十一月八日着手、大詔奉戴一周年の十二月八日に落款を施した。左片双に巨巖と松を描き、右片双より飛沫をあげて打寄せる波濤と對せしめたもので、二十二日日本赤十字社より謹んで獻上された。

## 洋 畫

藤田嗣治筆「テンカー飛行場夜間爆撃」 藤田嗣治はシンガポール敵前上陸の成功を聞き、陸軍航空本部からの資料を基として、テンガー飛行場夜間爆撃の圖を描いた。二月九日完成、十二號大の油繪で、東京日々新聞に掲載の上、陸軍航空本部に獻納された。なほ九軍神の功績發表に應じて描いた「アリゾナ型撃沈の圖」も本月完成、同じく十二號大の油繪で海軍省に獻納された。

向井潤吉筆「ヘルモサよりナチブ、サマツト、マリベレスを遠望す」 バタアン半島に従軍した比島派遣軍報道班員向井潤吉は、ナチブ突破作戦の記念に激戦地の山々を遠望した十二號大の油繪を製作、本年二月十日に完成した。同圖は比島派遣軍最高指揮官より、秩父宮殿下に

獻上された。

小寺健吉筆「彰徳城の閑院若宮」 閑院宮泰仁王殿下がかつて支那事變の初期、河北裁定作戦に御活躍遊ばれた當時の御模様をこのほど小寺健吉が謹作申し上げた。殿下の舊部下兵士たちからなる「春日會」會員の委嘱によるもので、五十號大の油繪、同會から獻上される。(七月二十五日東朝による)

田村孝之介筆「軍神最後戰鬪圖」 十二月十日開館式を行つた大東亞經濟館に、田村孝之介筆軍神加藤建夫少將最後の戰鬪圖が掲額された。從軍中、軍神の部下大谷大尉以下その最後を見届けた人の説明を聞き製作したもので、八月二十日に完成、航空美術展に出品後、同館に寄贈された。大きき三十號。なほ軍神の出身校明野飛行學校にも新に同圖を執筆して納入した。

川島理一郎筆「榮へ行く泰」 川島理一郎は大日本航空會社の委嘱により、日泰航空條約締結の記念として「榮へ行く泰」と題する百二十號の油繪を執筆、二月から六月にわたつて製作完成した。圖は十二種の蘭を描き、東亞民族の共存共榮の意味をこめたもので、九月十八日ビブン泰國首相に贈呈された。

和田英作筆「法隆寺全景」 法隆寺金堂壁畫を模寫中の和田英作は、今秋より五重塔の解體修理工事が始まるので、その前に伽藍全景を寫さうと製作に着手、解體を目前に完成した。(十一月十日東朝に

よる)

宮本三郎筆「軍神加藤少將像」 宮本三郎は本年八月明野飛行學校長よりの依頼で、軍神加藤少將像を執筆、十一月二十七日に完成納入した。大きき百二十號、製作に際しては故少將の義父、實姉、未亡人並に親友木下少佐の下見を受けた。なほ本圖は中村善作筆「生家圖」及び田村孝之介筆「最後戦闘圖」とともに三部作をなすものである。

中村善作筆「加藤少將生家の圖」 明野飛行學校内の軍神室に納める加藤少將生家の圖が中村善作により執筆された。北海道上川郡旭川村なる生家を寫したもので、大ききは三十號、本年十一月廿九日に完成した。

## 彫刻

堀江越作「鷺鷥草葺不合尊海外御巡幸御船出の圖」 霞ヶ關陸海軍集會所正面玄關の壁間を飾る彫刻を、堀江越が製作、約三ヶ月を要して本年一月四日に完成した。高さ十五尺、横十八尺、石膏薄肉彫刻で、汀に立ち海の彼方を指さし給ふ尊の御姿を想像して謹寫したものである。

朝倉文夫作「福地櫻痴」「河竹默阿爾」 福地櫻痴三十七回忌、河竹默阿彌五十回忌にあたり、その劇界における功績を記念するため、朝倉文夫がその浮彫像を完成した。横一尺七寸、堅二尺二寸の乾漆薄肉彫刻で、金屬粉による着色がある。本年三月に完成、九月歌舞伎座で除幕さ

れた。

岡田三郎助記念像 昭和十五年故岡田三郎助一周年祭の折に發起された記念像建設の事は、本年四月に實現、二十九日東京美術學校々庭に於てその除幕式が行はれた。浮彫半身像代用金屬である。原型は田邊至の製作になり、十六年十一月に完成してゐたもの。なほ朝倉文夫が専門的鑒修に當つた。

山崎朝雲作「大日如來像」 茨城縣稻敷郡朝日村鶴町運衛の發願により東條首相に贈られる大日如來像は、山崎朝雲が製作、一月より着手して五月に完成した。本尊は黃楊材、高さ壹尺六寸、厨子は桑材、高さ二尺二寸、五月十三日首相に贈呈された。

三木宗策作「鹿島神宮隨身」 本年三月鹿島神宮隨身奉獻會の依頼をうけて隨身二體を製作中であつた三木宗策は、今井和衛の考證を経て、八月三十一日に完成、納入した。尾州檜による彩色の倚像で、高さ五尺五寸、幅は六尺である。

軍神加藤建夫少將像 明野陸軍飛行學校から依頼を受けた大日本航空美術協會では、繪畫三部作とともに軍神等身の木彫像を製作、十一月二十六日に完成して同校に獻納した。製作は九月より着手、澤田晴廣を中心に各派の彫刻家三十一名が奉仕、故少將親戚知友も協力して成つたものである。十二月九日同校軍神室において除幕式が行はれた。(十一月十八日東日、同二十七日西日本による)

川村吾藏作「群像大東亞」 川村吾藏は完勝祈願のため神國日本を象徴した群像「大東亞」を製作、十二月三日に完成、五日修拔式を行つて、靖國神社に奉納した。ブロンズ、縱横二尺。

横江嘉純作「大東亞戰感謝之碑」 大東亞戰爭における皇軍の戦果に感激した横江嘉純は、出征將兵の勞苦を感謝して「大東亞戰感謝之碑」を製作、本年十二月八日に完成した。陸軍の分は高さ二十尺、砲彈型の前に將兵二人の立像を記したもので、海軍の分は高さ十三尺五寸、魚雷を上部に現はし、陸戰隊の兵を中央に艦内勤務の小兵を左右に配したものである。いづれも石造で、白、黒の花崗岩及び瑞穂石の三種よりなり、銅鐵は使用してゐない。夫々陸軍省將校集會所左側及び海軍館表庭に建てられた。

## 工藝

京都刺繡同業組合作「刺繡屏風」 滿洲國皇帝陛下へ獻上する刺繡屏風が、京都の刺繡同業組合長田中利七以下の努力によつて四月に完成した。西村紫雲作の原畫により、延人員約二百名の手を要した。高さ六尺三寸、横九尺、四枚折の屏風で、岩上の雌雄の孔雀に配するに紅白の露蜀を以てしたものである。(四月十五日京都)

清水六兵衛作「着彩花見壽花瓶」 清水正太郎作「着彩葡萄文花瓶」 清水六兵衛並びに正太郎は、滿洲建國十

周年慶祝會を通じ、謹作せる右の二品を滿洲國皇帝陛下に獻上し奉つた。いづれも磁器、本年八月完成。六兵衛作は高さ一尺七寸五分、胴張一尺一寸餘、正太郎作は高さ一尺二寸、胴張り一尺五分。共に前年來の苦心になるものである。

澤田宗山作「順風」 海軍省大臣室を飾る陶額が澤田宗山によつて制作された。縦一尺五寸、横二尺、富岳に寶船を配したもので、本年春完成、八月末に獻納された。

## 挿畫

池田泰山作「トンネル戰士群像陶額」 池田泰山は關門隧道開鑿竣工紀念のトンネル戰士群像陶額を製作、十一月十五日完成した。大きき三十五平方尺、薄肉彫刻、黒色窯變釉本焼で二十三片よりなる。下關驛構内大理石壁面に嵌入された。

挿繪專門畫家はもとより、一般畫家で新聞その他に挿繪を執筆する者も少くないが、それらの活動の概要を記録するため本年度主要新聞所載小説挿繪の一覽を左に掲げる。(新聞名五十音順)

大阪朝日新聞 東京朝日新聞  
新雪(藤澤 恒夫) 朝刊一七・四・二八  
熱風(里村 欣三) 同 一七・四・二  
海軍(岩田 豐雄) 同 一七・七・一  
官軍入城(邦枝 完二) 夕刊一七・三・五  
鴨下 晁湖

呂宋助左(村松 梢風) 同 一七八・一  
衛門 福岡 青嵐 七一九・二六  
有馬晴信(佐藤 春夫) 同 一七九・二  
最上徳内(貴司 山治) 一七一・一  
中村 貞以 七二二・二六

大阪毎日新聞 東京毎日新聞

男 (舟橋 聖一) 朝刊一七・四・  
志村 立美 一七  
新しき日(吉屋 信子) 一七・四・一  
花の街(井伏 鱒二) 同 一七・八・一  
野間 仁根 七二一・〇七  
基地(北村 小松) 同 一七・一・〇  
小林 清榮 八二二・一七  
我が家の(堤 千代) 同 一七・二・二  
風 嶺田 弘 一八一  
阿片戦争(大佛 次郎) 夕刊一七・一・四  
木村 莊八 一六・九  
海援隊(濱本 浩) 同 一七・六・一  
鷹 (土師 清二) 同 一七・一・〇  
矢野 橋村 一三一・二・二九

歌はぬ勝(山中峰太郎) 朝刊一七・二・  
利 高木 清 一〇  
愛の赤道(竹田 敏彦) 同 一七二・一  
永遠の女(牧 伸一) 一〇二・二七  
岩本 正二 二八二・二七  
大いなる(中野 實) 同 一七・二・二  
祭 三芳 梯吉 八一  
三國志(吉川 英治) 夕刊一七・一  
矢野 橋村 一八  
後三國志(吉川 英治) 同 一七・二・一  
矢野 橋村 一〇一

中部日本新聞

征婦の詩(中山 義秀) 朝刊一七・九・  
中川 一政 一一一・一  
濤 (國枝 完二) 同 一七・二・二  
荒井 陸夫 一  
戰國志(吉川 英治) 夕刊一七・九・一  
荒井 寛方 一一一・一  
居留地(長谷川 伸) 同 一七・二・二  
岩田孝太郎 一

中外商業新報

勝安房守(子母澤 寛) 朝刊一七・一・  
島田 訥郎 一一〇・三一  
三國志(吉川 英治) 夕刊一七・一・  
矢野 橋村 一一〇・三一  
東京新聞(都新聞改題)

虎彦龍彦(坪田 讓治) 朝刊一七・二・  
小穴 隆一 三  
密 林(中川 義秀) 同 一七・二・四  
赤道南下(海野 十三) 同 一七・六・九  
太陽の子(藤森 成吉) 同 一七・八・二  
中川 紀元 三一

健康な春(廣津 和郎) 朝刊一七・五・  
岩田孝太郎 二〇  
田園日記(林 芙美子) 同 一七・五・二  
脇田 和 一一〇・二八  
バゴタの(神山 潤) 同 一七・一・〇  
瑞穂太平(白井 喬二) 夕刊一七・一・  
記 矢野 橋村 二・二  
愛 火(大佛 次郎) 同 一七・二・二  
岩田孝太郎 三一

京城日報  
展覽會以外の作品

國姓爺(長谷川 伸) 夕刊一七・一・  
矢野 橋村 六一九・三〇  
西郷隆盛(林 房雄) 同 一七・一・〇  
山下鐵之輔 一  
日本産業經濟新聞

勝海舟(子母澤 寛) 朝刊一七・二・  
島田 訥郎 一一二・二九  
新編三國(吉川 英治) 夕刊一七・一・  
矢野 橋村 一一二・二九

報知新聞  
この響き(丹羽 文雄) 朝刊一七・三・  
高木 清 二二  
青人草(貴司 山治) 一七・三・二  
田代 光 三一八・四  
江戸から(矢田 挿雲) 夕刊一七・八・  
東京へ 本田 穆堂 五  
白鬼行(野村 胡堂) 一七・一・一  
富永謙太郎 一四・五

讀賣報知(讀賣新聞、報知新聞合刊)  
明日の愛(中野 實) 朝刊一七・三・  
岩田孝太郎 一六  
南海夫人(竹田 敏彦) 同 一七・三・一  
志村 立美 七二二・三一  
太閤記(吉川 英治) 夕刊一七・七・  
北村 明道 一九  
河上彦齋(白井 喬二) 同 一七・七・二  
小林 三季 一一二・二九

建築  
昨年度に於ては、純然たる戦時體制を  
整へたと云へ、未だに幾分戸惑ひの感  
ありしに對し、本年度の我建築界は、新  
しき戦時體制に徹底して、其處に自己を  
生かし切るに成功し、資材の制限に對し  
ても積極的に對處して、無筋コンクリー

ト、煉瓦の活用、木材トラスの應用等、  
構造上にもプランの上にも頼もしい創造  
力を示し、優れたる日本の感覺を働かし  
て、多くの優秀作を生んだのは喜ばしき  
限りである。

單に諸建築雑誌に發表せられたるもの  
の裡でも、美術的に見て興味あり、特記  
に價するものだけでも、左記の如く(順  
序不同)多數に達する。而も、之等は本  
年度の我國建築活動の極く一小部分を示  
すに過ぎず、建築活動の大部分は、公表  
を許されざる軍事關係の工場その他の大  
建築に捧げられたのであり、それ等の多  
くは早急の用に間に合はせる爲實用本位  
のものではあるが、美術的に成功してゐ  
るものも少くない事と察せられる。

今年度に於て特に目立つ事は、軍事保  
護關係の社會的施設の諸建築の進展と、  
國民練成用の諸建築に日本的の新しく  
生かされた事である。又、朝鮮に於て、  
その地方性と調和しつつ、日本精神を具  
現した美しい建築が二、三現はれた事は  
注意に價する。

- 日本鋼管株式會社社屋 無筋コンクリー
- ト 渡邊仁建築事務所設計
- 商工省工藝指導所東京本所廳舎 木造
- 大藏省營繕管財局設計
- 東京市世田ヶ谷乳兒院 木造
- 東京市建築部設計
- 關西國民航空練成場 竹中工務店設計
- 航空講堂、航空科學館、航空圖書館等



展覽會以外の作品

巧みなプランと構造を示し、美術的意匠にも優れた建築が、二萬八千坪の廣大なる區域に配置されてゐる。

岐阜市民病院

木造

岐阜市營繕課設計

大阪市立生活科學研究所増築工事

大阪市建築部設計

文部省國民鍊成所

木造

大藏省營繕管財局設計

紀元二千六百年式典場に用ひられたる建築を拜戴して中心とす。

東部國民勤勞訓練所

木造

軍事保護院工營課設計

西部國民勤勞訓練所

木造

軍事保護院工營課設計

講堂は、木材トラスの近代的技術による、天地根元造りの形式を採つた。簡素乍らに美しく、而も實用的な建築である。

修養園 皇民道場

木造

修養園建設部設計

修養園が各地に建設せる道場の裡、最大のものたる皇民道場は、未だ完成せぬが、その一部たる御下賜の建物たる共承閣及び中講堂（揚清館）は既に建設を終つた。

川崎市商工會議所

木造

渡邊仁建築事務所設計

日本合成染料販賣株式會社 木造

清水組設計

清水市商工會議所

木造

田中忠雄設計

駿河銀行靜岡支店

木造

田中忠雄設計

京城府民弓道場

木造

京城府廳營繕課第一技術係設計

そのプランは細密な注意を以てなされ、その意匠は、日本建築の特性たる構造美を、豪壯性を強調しつつ生かし切り、而も朝鮮建築の意匠も一部採用して地方性をも考慮した傑作である。

某學校道場

周圍煉瓦造木造

朝鮮總督府會計課設計

日本建築の精神を近代的に生かした。本年度の最も美しい建築の一である。

原町田日活館

木造

前田 勸 設計

在豐島區巢鴨町某商業組合會館

大江 透 設計

石川書庫

木造

書庫のみ大谷石造

川口市軍事援護館

木造

川口市役所營繕課設計

母子寮、託兒所、授産場等より成り、何れも優れたプランである。美術的な意匠を持たぬ設計ではあるが、殉國英靈の遺家族に對する尊敬と感謝の念に終始した」と云ふ設計者の美しい心情の表はれた建築で、我國に相應しい、喜ばしき作品である。

昨年度の住宅建築には、坪數制限内の小住宅に優れたものが少く、喜ばしから

ざる現象を示したが、本年度は、制限せられたる小面積を有効に生かし、而も美しく構成した小住宅建築が數多く現はれて、此處にも戦時下日本の逞しさと心強さを示した。中にも、左の二建築は特に優秀である。

K・O・邸

吉田五十八設計

西郷邸

堀口捨己設計

住宅ではなく、別荘であるが、吉田五十八の惜慼莊は、小建築としてはプランの妙と日本建築の美を盡くし、近代的配慮を充分になせる近來の傑作である。

その他、特記すべき制限坪數内の住宅としては、山脇巖設計の岩瀬邸、加倉井昭夫設計の東京世田ヶ谷の二つの小住宅、大倉土木株式會社建築部設計の世田ヶ谷の一住宅、大江建築事務所設計の本郷の一住宅等がある。

「物故作家及美術関係者」 ページ (75～83 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.75-83)

Cut for protection of the personal information

# 美術行政・教育

## 行政

### 重要美術品等調査委員会規程改正

文部省は三月十九日訓令第六號を以て重要美術品等調査委員会の規程に改正を加へた。即ち同規程第一條中「監督ニ屬シ」の次に「其ノ諮問ニ應ジテ」を加へた。依て同條全文は「重要美術品等調査委員會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ、其ノ諮問ニ應ジテ重要美術品等ノ保存ニ關スル法律第一條ノ規定ニ依ル輸出及移出ノ許否並ニ法第二條ノ規定ニ依ル認定及其ノ取消ニ關スル事項ヲ調査審議ス」となり、同委員會は國寶委員會同様の諮問機關となつた。

### 第一回帝國藝術院賞決定

(昭和十六年度) 帝國藝術院賞は第一部(美術) 油繪「娘子關を征く」小磯良平、第二部(文學) 詩「道程」高村光太郎、歌「歌集薈及び國初聖蹟歌」川田順に決定、四月十三日文部省より發表された。而して同賞授賞式は五月二十一日文部大臣官邸に於て舉行された。

### 重要美術調査委員移動

藝に議事規程に改正を加へた同會は、五月十四日附文部次官菊池三郎の會長辭任と共に、新會長として侯爵淺野長武を任命、又同日附委員丸尾彰三郎、本間順治、臨時委員田中一松辭任、大熊喜邦、田中豐藏が委員に加へられた。

東亞民族研究所創設 東亞諸民族に關する基本的綜合的研究機關として、文部省は東亞民族研究所を創設することと

なり、その設立準備委員二十九名を五月十九日附發令した。

### 第五回文部省美術展覽會審査員發表

昭和十七年度文部省美術展覽會審査員は五月二十一日文部省大臣官邸に於ける帝國藝術院會議に於て内定、同二十七日文部省より發表された。即ち第一部(日本畫) 簞木清方、小室翠雲、竹内栖鳳、西山翠嶺、安田叔彦、伊東深水、池田遼郎、宇田萩郎、奥村土牛、川崎小虎、鳥田墨仙、中村岳陵、野田九浦、福田平八郎、山口蓬春、第二部(洋畫) 相田直彦、池部均、猪熊弦一郎、木村莊八、熊岡美彦、小絲源太郎、曾宮一念、田邊至、中野和高、碓伊之助、林俊衛、三上知治、耳野卯三郎、宮田重雄、第三部(彫塑) 朝倉文夫、北村西望、齋藤素巖、佐藤清藏、内藤伸、平橋田中、藤井浩祐、山崎朝雲、安藤照、石井鶴三、關野聖雲、中村直人、長谷川榮作、堀進二、横江嘉純、第四部(美術工藝) 板谷波山、香取秀眞、清水六兵衛、清水龜藏、津田信夫、富本憲吉、六角紫水、海野清、大須賀喬、岸本景春、山鹿清華、山本安曇、吉田源十郎、吉田淳一郎、廣川松五郎、商工省工藝指導所所屬變更 商工省の機構改革に伴ひ、従來同省化學局無機課に屬した工藝指導所は、六月十七日新設された企業局工政課に移管された。尙同所は十五年十二月東京に移轉し、當時第一、第二工場を廳舎に當てたが、今同本廳舎の竣工を見、六月二十日各部課の移轉整備を終つた。

### 美術研究所長更迭

東京美術學校教授矢代幸雄は六月二十九日附東京高等學校教授に任ぜられ、同日附を以て前京畿帝國大學教授、美術研究所囑託田中豐藏が美術研究所長事務取扱を命ぜられた。

### 文部省專門學務局學藝課長更迭

文部省專門學務局學藝課長帝國藝術院主事本田弘人は七月二十九日附を以て同局科學課長に轉じ、教學局教學官劍木享弘が後任を命ぜられた。

### 文部省美術展覽會規則改正

文部省は八月八日告示第五百五十七號を以て文部省美術展覽會規則中左の如き改正を告示した。

### 第三條第二項中左ノ一號ヲ加ヘ第三號ヲ第四號ニ改ム

三 帝國美術院展覽會、紀元二千六百年奉祝美術展覽會及文部省美術展覽會ニ於テ審査員ヲシモノ

藝術學特別學會開催 文部省教學局日本語學振興委員會では、十月二十一、二兩日同會初めての藝術特別學會を文部省に開催、十三名の研究發表を求め、續いて二十二日夜は公開講演があり、二十三日午前井上侯爵家什寶並に根津美術館を參觀、午後宮内省に舞臺を參觀して會を終了した。研究主題に於て大東亞の新秩序を考慮せるものありし事、學會參加者七十七名を指名した點に前二回の普通學會との相違が認められた。

### 文部省美術關係諸施設所屬變更

文部省の行政機構改革により、従來宗教局に屬した國寶及重要美術品等並に史蹟名勝天然記念物の保存に關する事項、專門學務局に屬した藝術の獎勵及調査並に帝

國藝術院及美術研究所に關する事項は、新設の教化局總務課に於て事務を掌ることとなつた。

文部省教化局總務課長任命 文部書記官松下寛一は十一月一日附教化局總務課長に任ぜられ、同二十五日附劍木享弘の後任として帝國藝術院主事を仰付けられた。

國寶保存會及重要美術品等調査委員及幹事令免 文部省教化局長阿原謙藏は十一月二十五日附國寶保存會委員、十二月二十日附重要美術品等調査委員會委員を仰付けられ、同日附文部書記官青戸精一に代り同松下寛一が重要美術品等調査委員會幹事を命ぜられた。

## 教育

### 東京美術學校規程改正

文部省令第四十二號により東京美術學校規定中第一、第十一、第十二、第十三條の中、圖畫師範科を師範科に、修業年限三年を四年に改め、又學科目及教育時數の改正を行ひ、五月十九日付官報をもつて公布した。

### 京都市立繪畫專門學校長任命

川村曼舟の逝去により缺員中の京都市立繪畫專門學校長並に京都市立美術工藝學校校長は、十二月二十八日同繪畫專門學校教授中井宗太郎が任命された。

### 美術關係諸學校入學及卒業

本年度における美術關係諸學校の卒業式は繰上げのためいづれも九月に行はれた。なほ入學及卒業者の人員其他は左の通りである。(學校別五十番順)

京都市立繪畫專門學校 九月二十三日第三十三回卒業式舉行。

日本畫科 志願者 入學者 卒業者  
 圖 案 科 二九 一六 二八  
 計 六七 三一 三五

京都高等工藝學校  
 九月十七日第三十九回卒業式舉行。

色 染 科 志願者 入學者 卒業者  
 機 織 科 五五 二七 一七  
 圖 案 科 七三 三〇 二八  
 窯 業 科 六四 三六 三二  
 精密機械科 七五 二九 二四  
 人造纖維科 一九四 七四 五九  
 機械科 一一一 四〇 二五  
 精密機械科 二五六 四六 一

女子美術學校  
 九月二十八日第四十七回卒業式舉行。

高等科 志願者 入學者 卒業者  
 師 範 科 三九 二二 二二  
 計 三三二 一六七 一〇八

多摩帝國美術學校  
 九月十九日第八回卒業式舉行。卒業者  
 二十二名、本年度の入學者は志願者八八  
 名中の八十名であつた。

帝國美術學校  
 九月二十日第十回卒業生を出した。

日本畫科 志願者 入學者 卒業者  
 西洋畫科 一〇 六 二  
 圖 案 科 六五 五〇 一三  
 彫 刻 科 七 七 一  
 師 範 科 六 四 二  
 計 九七 七二 二三

美術講演・講義

東京高等工藝學校  
 九月二十日第十九回卒業式舉行。

工藝圖案科 志願者 入學者 卒業者  
 造 型 工 藝 部 三六 一八 二〇  
 金 屬 工 藝 部 一〇 七 八  
 精密機械科 一〇五 三〇 三一  
 木材工藝科 二六二 七五 七〇  
 印刷工藝科 五八 二六 二八  
 寫 真 部 三六 二二 二一  
 計 二九 一五 一〇

東京美術學校  
 九月二十三日第五十二回卒業式舉行、  
 なほ同二十三、四、五日卒業制作展を開  
 催した。

日本畫科 志願者 入學者 卒業者  
 油 畫 科 三五 二〇 一九  
 彫 刻 科 一六八 三二 三一  
 塑 造 部 二五 一五 一五  
 木 彫 部 一二 七 七  
 工 藝 科 一四七 一三 一六  
 圖 案 部 四七 一三 一六  
 彫 金 部 一 三 四  
 鍍 金 部 三 三 五  
 鑄 金 部 一一 六 八  
 漆 工 部 一五 八 六  
 建築科 九〇 一二 五  
 師 範 科 九三 二〇 一七  
 計 五〇 一三九 一三三

日本美術學校  
 九月二十六日第二十四回卒業式舉行。

本 科 志願者 入學者 卒業者  
 日本畫科 三〇 一五 一  
 西洋畫科 六〇 二六 六

研究科  
 圖 案 科 一〇 五 二  
 西洋畫科 二五 一五 二  
 彫 刻 科 一 一 一  
 速 修 科 一 一 一

# 美術講演・講義

## 講 演

### 一 月

考古學會例會講演 一月十七日 於帝  
 室博物館  
 「遼陽南林子の壁畫石墓」原田 淑人  
 歷史地理學會例會講演 一月十九日  
 東大山上會議所  
 「千利休について」桑田 忠親  
 美術懇話會例會講演 一月二十日 於  
 日本工業俱樂部  
 「美術と防空」小塚新一郎  
 日佛會館講演 一月二十七日 於同館  
 「オギユスト・ロダン」(一) 於同館  
 コンラッド・メイリ

二月  
 日佛會館講演 二月三日 於同館  
 「オギユスト・ロダン」(二) 於同館  
 コンラッド・メイリ  
 浮世繪同好會講演 二月七日 於經濟  
 俱樂部  
 「日本繪畫の發達について」藤懸 靜也  
 成層美術集團主催講演會 二月七日  
 於同集團研究所アトリエ  
 「桃山美術―殊に金碧障屏畫―を検討し

三月  
 奈良帝國博物館列品講座 三月七日  
 於同館  
 「聖德太子御像について」望月 信成  
 考古學會例會講演 三月十四日 於帝

其の日本の性格に及ぶ」小糸源太郎  
 考古學會例會講演 二月十四日 於帝  
 室博物館  
 「磐座磐境等の考古學的一考察」  
 美術懇話會例會講演 二月十七日 於  
 日本工業俱樂部  
 「哥磨について」高橋誠一郎  
 奈良帝國博物館列品講座 二月二十一  
 日 於同館  
 「建築の構造の發達と意匠との關係」  
 人類學會例會講演 一月二十一日 於  
 東大理學部人類學教室  
 「余山及び黒谷貝塚人骨に就いて」  
 「東部ミクロネシアの椰子葉製籠類に就  
 いて」中島 秀雄  
 京都市民科學教室考古學講座 二月二  
 十八日 於京大文學部第八教室  
 「平安奠都以前の京都」梅原 末治

計 一一五 六一 二六  
 文化學院美術部  
 九月三十日第十六回卒業式舉行、卒業  
 者十一名、本年度の志願者四〇名、入學  
 者は二十二名であつた。

室博物館

「崇福寺址に就いて」 石田 茂作

美術懇話會例會講演 三月十七日 於日本工業俱樂部

「茶室の話」 堀口 捨巳

建築學會講演會 三月二十日 於生命保險會社協會講堂

「パンコックの建築と其生活について」 山脇 巖

龍池會例會講演 三月二十八日 於根津美術館

「藝阿彌について」 谷 信一

大阪市立美術館定例講演會 三月二十八日 於同館

「日本風俗の源流とその變遷」 江馬 務

四月

春陽會二十周年記念講演會 四月十日 於産業組合中央會館

「日本の美術の性格」 島海 青兒

「印度を思ふ」 水谷 清

「美術常識」 石井 鶴三

「美術雄感」 中川 一政

「ボンナール」 岡 鹿之助

「女の體格」 木村 莊八

美術懇話會例會講演 四月十八日 於根津美術館

「青磁の變遷發達について」 小山富士夫

奈良帝國博物館列品講座 四月十八日 於同館

「佛像の姿態の彫刻史的研究」 源 豐宗

考古學會總會講演 四月二十五日 於帝室博物館

「南洋諸島に於ける石器使用の民族に就いて」 八幡 一郎

五月

奈良帝國博物館列品講座 五月二日 於同館

「正倉院御物に拜する唐代花鳥畫の體制について」 堂谷 憲男

南方文化展覽會記念講演 五月九日 於帝室博物館

「泰及び佛印の陶瓷について」 奥田 誠一

史學會大會東洋史部會講演 五月十日 於東大法文經二號館

「女眞大字とは何ぞや。附李玉王家博物館藏一圓鏡鏡背の文字に就いて」 石田幹之助

美術懇話會例會講演 五月十九日 於日本工業俱樂部

「故岡崎正也翁の鑑賞について」 溝口順二郎

浮世繪研究會松木喜八郎五七忌追悼記念講演會 五月二十六日 於經濟俱樂部

「松木喜八郎の業績に就いて」 藤懸 靜也外

東方文化學院談話會 五月二十九日 於同學院

「天井と所謂三月堂の天蓋とに就いて」 飯田須賀斯

六月

乾山遠忌記念講演 六月二日 於善養寺

「乾山の人と藝術」 福井利吉郎

奈良帝國博物館列品講座 六月六日 於同館

「垣と屏」 岸 熊吉

三田史學會例會講演 六月九日 於萬來舍

「古代社會に於ける刀劍について」 本阿彌光博

商工省工藝指導所講演 六月十二日 於同所

「南方と民族文化」 宮武 辰夫

東方文化研究所例會講演 六月十三日 於同所

「帶鉤の研究」 長廣 敏雄

「雲崗石窟と印度」 水野 清一

美術懇話會例會講演 六月十六日 於日本工業俱樂部

「華山の四州眞景と椿山の山海奇賞について」 菅沼 貞三

日伊學會講演 六月十六日 於華族會館

「イタリア文藝復興期の美術」 兒島喜久雄

早稻田大學史學會國史部會講演 六月十八日 於同大學

「古代出雲の建築様式」 水野 裕

「イタリア文化協會講演 六月十八日 於イタリア文化會館

「イタリアのルネッサンスに就いて」 ゴンラッド・メイリ

大阪市立美術館定例講演會 六月二十日 於同館

「蕪村の藝術」 顯原 退藏

奈良帝國博物館列品講座 六月二十日 於同館

「融通念佛緣起繪卷」 井川 完慶

龍池會例會講演 六月二十七日 於根津美術館

「乾山に關する最近の研究」 三田史學會例會講演 九月五日 於萬

「レオナルド・ダ・ヴィンチ講演會 六月二十九日 於イタリア文化會館

「挨拶にかへて、レオナルド・ダ・ヴィンチに對する余の興味」 矢代 幸雄

「レオナルド・ダ・ヴィンチの藝術」 兒島喜久雄

七月

イタリア文化協會講演 七月三日 於イタリア文化會館

「レオナルド・ダ・ヴィンチについて」 デイトリツヒ・ゼツケル

佛教文化研究所講演 七月五日 於知恩寺

「佛教美術」 望月 信成

東洋史談話會 七月十五日 於東大山會議所

「遼陽に於ける漢代墳墓の發掘調査」 原田 淑人

國華社清話會 七月十八日 於同社

「南畫と文人畫」 吉澤 忠

「刀劍の錆とその防止」 大槻 虎男

「佛像蟲喰防止について」 森 八郎

大阪市立美術館夏季美術講習會 七月二十四日・二十九日 於同館

「和紙文化大觀」 壽岳 文章

「書道史の一課題・古筆切の筆者の問題」 伊藤 壽一

「古代人の精神生活」 金丸 二郎

「日本の繪畫に於ける空間表現の史的考察」 源 豐宗

九月

「佛教と祖師像」 禿氏 裕祥



來會

「支那古代に於ける美術思想とその史的展開」 北野 政義

考古學會例會講演 九月十二日 於帝室博物館

「廣隆寺創建移建と遺構遺物」

史學會例會講演 九月十九日 於東大山上會議所

「新に發見せられたる後醍醐天皇宸筆の御感狀について」 平泉 澄

奈良帝國博物館列品講座 九月十九日 於同館

「源氏物語末摘花の圖」 小林太市郎

滿洲國國寶展記念講演會 九月十九日 於帝室博物館

「四庫全書に就いて」 市村瓚次郎

「滿洲の古陶器について」 小山富士夫

美術懇話會例會講演 九月二十二日 於日本工業俱樂部

「佛像圖像類に就いて」 田中 一松

大阪市立美術館定例講演會 九月二十六日 於同館

「希臘美術管見」 原 陸園

十月

岡倉天心三十周年記念講演會 十月五日 於共立講堂 日本美術院、天心偉績顯彰會、東日共同主催

「天心岡倉覺三先生」 横山 大觀

「天心先生の風景觀」 田村 剛

「天心先生と一英文學徒」 織田 正信

「天心先生を憶ふ」 脇本樂之軒

考古學會例會講演 十月十日 於帝室博物館

「袈裟について」 石田 茂作

美術講演・講義

「原始時代の刀劍外装について」 神林 淳雄

白鳥博士追悼東洋學講座 十月十五日 於東洋文庫

「周代の縹緗について」 和田 清

美術懇話會例會講演 十月二十日 於日本工業俱樂部

「保存行政について」 青戸 精一

文部省諸學振興藝術學會研究發表 十月二十一日、二十二日 於同省

「日本と歐洲藝術」 小林太市郎

「プラトンと造型美術」 村田 潔

「九州古美術の地方色について」 矢崎 美盛

「手鑑」 藤田 經世

「燦煌畫の銘記」 松本 榮一

十一月

乾山會講演 十一月四日 於善養寺

「名畫の感激を語る」 春山 武松

國華社秋季茶話會講演 十一月十四日 於同社

「石濤道濟」 田中 豐藏

日本博物館協會講演 十一月十八日 於帝室博物館

「發掘調査の完了まで」 原田 淑人

白鳥博士追悼東洋學講座 十一月十九日 於東洋文庫

「山東省曲阜の發掘」 原田 淑人

龍池會例會講演 十一月二十一日 於根津美術館

「歌仙繪に就いて」 森 暢

奈良帝國博物館列品講座 十一月二十一日 於同館

「信貴山緣起繪卷に於ける風景描寫について」 源 豐宗

大和會講演會 十一月二十一日 於學居堂

「支那書道史」 藤原 楚水

歷史地理學會例會 十一月二十六日 於東大山上會議所

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

「西陣機業の源流」 豐田 武

ジュマン・ド・ロングレ

美術懇話會例會講演 十二月十二日 於日本工業俱樂部

「日本南宗畫の發祥」 田中 喜作

日本科學史學會例會 十二月十九日 於東洋軒

「弘法大師御請來の健陀羅子袈裟について」 大賀 一郎

世阿彌五百年祭典講演會 十二月二十五日 於產業組合中央會館

日本文學報國會主催

各大學美術史講座

〔官立〕

東京帝國大學文學部

美學

美學概論

藝術精神ノ比較研究

美學演習

近代音樂ノ主潮

文藝學ノ基本問題

美術史

美術史研究法（諸家ノ基本問題）

伊太利文藝復興期特殊問題

美術史演習

日本美術史概説

東洋美術史特殊研究

日本工藝史

考古學

隋唐ノ文化

考古學演習

用書「東大寺獻物帳」

考古學實習

同

同

同

同

東亞古代ノ墳墓ト其裝飾	講	師駒井 和愛	美學演習	教授矢崎 美盛	考古學	講	師今井登志喜	日本文様史	講	師小場 恒吉
京都帝國大學文學部			西洋美術史演習	同	早稻田大學文學部			西洋美術史	同	正木 篤三
美學美術史			日本美術史	同	日本美術史		會津 八一	西洋彫刻史	同	富永 惣一
美學序論	教	教授植田 壽藏	基督教美術史	同	東洋美術史		同	西洋工藝史	同	石澤 正男
日本諸藝術ニ於ケル美ノ構造	同	同	東洋美術史	講	師田中 豐藏	考古學	西村 眞次	西洋工藝史	同	新 規矩男
美學ノ諸問題	同	同	日本藝術ノ特質	講	師野上豊一郎	工藝學	同	西洋工藝史	同	大澤三之助
室町時代ノ美術	同	同	エデプトノ藝術	同	同	西洋美術史	坂崎 坦	家具史	同	同
言語藝術ト視覺藝術	同	師源 豐宗	考古學	同	同	美學	大西 昇	西洋建築史	同	同
東亞考古學概説	教	教授植原 末治	奈良時代ニ於ケル佛教遺物ノ研究	講	師石田 茂作	慶應義塾大學		西洋建築史	同	同
日本歴史考古學ノ諸問題	同	同	京城帝國大學法文學部			自昭和十七年四月至同十八年九月		西洋建築史	同	同
東亞考古學ノ諸問題	同	同	美學美術史第一、第二	教	教授矢崎 美盛	日本彫刻史論	講	師丸尾彰三郎	同	同
東亞考古學ノ諸問題	同	同	美學概論	同	同	西洋美術史概説	同	兒島喜久雄	同	同
エーゲ文明	講	師村田數之亮	西洋美術史	講	師兒島喜久雄	藝術學概論	同	大西 克禮	同	同
支那考古學關係講讀	同	同	考古學	講	師有光 教一	藝術の類型(特殊講義)	同	同	同	同
東北帝國大學法文學部	同	水野 清一	東京文理科大学	講	師矢代 幸雄	音樂論 本邦音樂文	同	遠藤 宏	同	同
美學			東洋美術論	講	同	映畫藝術學	同	板垣 鷹穂	同	同
美學概論	教	教授阿部 次郎	〔私立〕			演劇論 西洋劇曲ヲ主トスル	同	師七尾嘉太郎	同	同
美學特殊講義	同	同	大谷大學			演劇技巧研究	講	同	同	同
美學演習	同	同	日本考古學		末永 雅雄	日本考古學(特ニ有史時代)	同	柴田 常重	同	同
音樂美學概論	講	師加藤 成之	奈良時代之美術		土居 次義	東京美術學校	教	授香取秀治郎	同	同
日本音樂史	同	同	國學院大學	講	師後藤 守一	東洋工藝史	同	同	同	同
西洋藝術史特殊講義	同	同	考古學	同	大場 磐雄	美術史	同	矢代 幸雄	同	同
西洋藝術史演習	同	同	同	同	樋口 清之	漆工史	同	六角注多良	同	同
文化史學第二	同	同	同	同	同	西洋美術史	同	森田龜之助	同	同
日本美術史特殊講義	教	教授井利吉郎	大正大學	同	大西 克禮	西洋美術史	同	同	同	同
日本繪畫史演習	同	同	美學	同	脇本十九郎	西洋繪畫史	同	同	同	同
東洋藝術史普通講義	同	同	美術史	同	同	西洋彫刻史	同	同	同	同
史學第五(考古學)	同	同	同志社大學	同	同	東洋彫刻史	同	同	同	同
北方ノ先史	講	師伊東 信雄	美學概論	教	授園 頼三	同	同	同	同	同
九州帝國大學法文學部	同	同	立正大學	講	師石田 茂作	東洋繪畫史	同	同	同	同
美學美術史	同	同	佛教美術史	同	師石田 茂作	日本美術史	同	同	同	同
			日本美術史	同	同	美學	講	師村田 良策		

# 古美術關係彙報

## 一月

重要美術品等調査委員會開催 一月二十三日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、繪畫十八件、彫刻四件、建造物十件、文書典籍書蹟百五十二件、刀劍六十九件、工藝品及考古學資料六十六件、合計三百十九件の重要美術品等認定の件を議決した。

## 二月

國寶保存會開催 二月二十三日文部省に國寶保存會を開催、奈良縣春日神社所有「春日神社一ノ鳥居」外四件の建造物、愛知縣名古屋市所有「名古屋城本丸御殿障壁畫」外八十七件の寶物類の國寶指定の件及國寶建造物「丸岡城天守」(福井縣)外一件の維持修理費補助の件、國寶建造物「小田神社樓門」外七件の維持修理費を昭和十七年度に於て補助の件並に國寶建造物「大寶神社境内社追來神社本殿」外一件の現狀變更の件等を夫々議決した。

## 三月

重要美術品等調査委員會規程改正 文部省は三月十九日訓令第六號を以て重要美術品等調査委員會の規程に改正を加へ同委員會を國寶委員會同様文部大臣の諮問機關とした。

廣隆寺新寶物 洛西廣隆寺の寺寶調査は昨年十一月から聖德太子奉讃會研究員により續けられてゐたが、此の程完了し

たので新發見の彫刻繪畫につき調査結果を發表した。貞觀藤原鎌倉室町の各時代に至る貴重な發見があつたがその主要なものは三千佛曼荼羅一鋪(絹本着色、藤原)藥師如來立像(木彫檀像、貞觀)をはじめ不動明王坐像(木彫彩色、藤原)阿彌陀三尊像(木彫漆箔厨子入、鎌倉)如意輪觀音半跏像(木彫漆箔、藤原)聖德太子立像(木彫漆箔、室町)等である。

## 四月

學位授與 文部技師大岡實は過般提出の論文「興福寺の本邦伽藍制度史上に於ける地位を論ず」に對し今回工學博士の學位を授けられた。

東山御文庫調査 紀元二千六百年奉祝會の委嘱を受けて辰橋英華編纂委員會を組織した學士院では、四月十六日より二十五日まで委員長瀧精一以下各委員が東山御文庫の調査を行ひ、京都御所で特に開封された御文庫の宸翰類の撮影、解説作製をなした。

山西學術調査團出發 靈蹟五臺山に科學の手を加へるべく資源科學研究所より派遣された第一次山西學術調査研究團は先遣隊に引續き四月三十日本隊が出發した。

## 五月

遼陽古蹟調査 五月ははじめから約三週間、昨年度に引續き第二回目の遼陽古蹟調査が行はれ、東大教授原田淑人以下關野雄、島田正郎、和島誠一、駒井和愛及

滿洲國側よりの三宅俊成、三枝朝四郎がこれにあたつた。今回の對象は南林子南方及玉皇廟東方のそれ、壁畫のある石槨墓であつた。

## 六月

史蹟名勝天然紀念物調査會開催 六月十二日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、史蹟十一件、名勝五件、天然紀念物十八件の指定を審議可決した。

南京國立博物館開館 一度は焦土となつた南京にも復興の氣運漸く旺んとなり、六月南京鷄鳴寺路に國立博物館が新設された。

## 七月

一宮殿發掘調査 滿洲國民政部では間島省公署、琿春縣公署と協力して、七月十一日より同月末日まで琿春縣半拉城に存する物海時代の一宮殿の發掘調査をとげたが、民政部からは三宅俊成、小竹一郎の兩名が之に従ひ、内地から駒井和愛、島田正郎が参加した。

國寶保存會開催 七月十五日文部省に國寶保存會を開催、東京府増上寺所有「増上寺開山堂」外十件の建造物、京都府南禪寺所有「南禪寺障壁畫」外二十五件の寶物類の國寶指定の件及國寶建造物「立石寺中堂」(山形縣)外七件、國寶寶物類「紙本墨書法花玄奘釋義」(栃木縣)外十四件の維持修理費補助の件、國寶建造物「妙心寺御室」外四件の現狀變更の件を夫々議決した。

重要美術品等調査委員會 七月二十七日文部省に於て重要美術品等調査委員會

を開催、繪畫三十件、彫刻二十件、建造物八件、文書典籍書蹟百三十一件、刀劍八十四件、工藝品及考古學資料四十五件、合計三百十八件を議決した。

天平時代の塑像佛山梨縣で發見 山梨縣東八代郡御所村(舊永井村)瑜伽寺の藥師堂から發見された塑像佛の斷片は、帝室博物館鑑査官野間清六、同補金森達之の調査により天平期の塑像なりと確認された。奈良朝文化圈に新しい示唆を投ずるものとして注目される。

横川中堂焼失 比叡山横川中堂は慶長九年の建立になる桃山時代の國寶建築で桁行七間、梁間九間、單層入母屋造柿葺且縣崖造になり、屋根の形が日吉造と同様といふ面白いものであつたが、七月三十日夕刻落雷により焼失した。本尊觀音、脇侍毘沙門天、不動明王の國寶諸像は幸くも焼失を免れた。

## 八月

丙光寺全燒 德島縣那賀郡平島村宇赤池丙光寺は八月五日朝出火全燒したが、同寺は有名な古刹で足利家の墓所もあり、烏有に歸した國寶「木造阿彌陀如來坐像一軀」(明治四十四年八月指定)は行基菩薩の作と傳へられてゐた。

祝部式土器出土 奈良縣磯城郡多武峯村の村道工事中、十三日入夫が大型の祝部式壺と同壺の二個を發掘した。壺は口徑九寸高さ一尺七寸五分、壺は口徑四寸高さ八寸で口と口が重なりあつて出土、合口窠格ではないかと見られて居り、白鳳時代聖靈院を中心として築えた同地の上代文化の遺物の一として注目されてゐる。

## 九月

史蹟名勝天然紀念物調査會 九月二十三日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、史蹟十件、名勝三件、天然紀念物七件の指定を審議可決した。

扶餘發掘 扶餘山の城址發掘作業は八月三十日以來朝鮮總督府博物館の藤澤、米田、天野三技師監督の下に進められて來たが、佛像壁畫をはじめ蓮瓣瓦類に至る無數の出土を綜合すると、發掘箇所は百濟文化の中核をなしてゐる事が確定された。發掘された大伽藍は本堂の奥行四十四尺五寸横幅五十五尺一寸で天然岩石地窖に北西南三方に門の階段が刻み込まれ、西南馬川池に面する。出土の佛像は石製で、石象も發掘された點から普賢菩薩ではないかと推定されてゐる。

曲阜發掘調査 東亞文化協議會の依頼により東京帝大原田教授、駒井講師、關野助手、和島囑託、東方文化學院飯田研究員及滿洲側三宅俊成の一行は九月七日より同末日まで山東省曲阜縣魯城に於ける漢代靈光殿址の發掘に従つてゐたが、多大の收穫を得て十月中旬歸任した。

三叉鉾發見 宮崎縣東諸郡八代村六野原の古墳群は九月二十三日より發掘中であつたが、その主座を占める前方後圓墳の粘土棺には多數の副葬品を發見、殊に完全な形應を有する鐵製三叉鉾の發見は珍しく、四五世紀ころのものと思はれてゐる。

## 十月

吉野神宮一部焼失 二十二日奈良縣官弊大社吉野神宮社務所から出火、社務所

及齋館、直會所、土藏を全焼し、寶刀一振その他寶物類が焼失破損した。

法隆寺五重塔の修理 國寶保存法による奈良法隆寺諸伽藍の修理工事は數年來著々進捗、既に夢殿以下數棟は解體修理を終つたが、今回約三十箇月の豫定で五重塔の修理に及ぶことゝなつた。

## 十一月

古代綴れに新學說 蓮絲及當麻曼茶羅の研究家である大賀一郎は今回東寺の寺寶「毘陀綴絲の袈裟」が正真正銘の古代綴れである事を報告した。從來古代綴れは正倉院御物中に五寸角のものを拜する他、一丈三尺四方の當麻曼茶羅のみとされてゐたが、この度の調査により三點と訂正されるに至つたものである。

陽高縣古蹟調査 蒙古省北政府委嘱による陽高縣古蹟調査は華北交通小野囑託東方文化研究所日比野副研究員以下の手で行はれた。現存約八十基の漢代古墳群中その三基を發掘したもの、いづれも木槨墓で、遺骸遺物等はよく埋葬當時の形を残してゐた。

## 十一月

支那名畫寄附 阿部孝次郎は此度嚴君故阿部房次郎生涯の蒐集にかゝる支那畫全部をあげて大阪市立美術館に寄附する事となり、二十四日その手續を終つた。總點數は王維伏生授經圖、張僧繇五星二十八宿圖卷等の重要美術品をも含めて百六十點に達する。

# 古美術展覽會・展觀

一月

## 東京帝室博物館繪畫陳列 一月中

都一（前略）繪畫の最初の室には大和繪の至寶といふべき東寺の山水屏風が戰爭も知らぬ顔に溫雅な色彩美を發散させてゐる。藤原時代の屏風としてはこれ一つより残つてゐないのだから貴い。又この室には法隆寺の壁畫の模寫をはじめ、松尾寺の孔雀明王、唐招提寺の法華曼荼羅、來迎寺の十二天等各時代の佛畫が多い。

次の室町時代の室には狩野元信の祖師圖の聯幅が剛健な筆力を味はしめ、又内藤子爵の星光寺縁起が輕妙な筆致に大和繪の特色を發揮してゐる。又大陳列室の二つには桃山から江戸にかけての狩野派、琳派、文人畫派、圓山四條派等各派のものを集めてゐるので、近世繪畫史の發展を知るには何より重寶である。又その中には二直庵や山卜良次の花鳥圖屏風や長谷川等伯の七十一歳の作である羅漢圖屏風等注目し値するものが尠くない。

又版畫の室には亞歐堂田善の銅版畫が一まとめになつてゐる。田善は江戸時代に不自由と戦ひながらこの様な泰西の銅版畫に遜色のないものを作つたので、その努力もとより壯となすべきであるが自ら亞歐堂と號したあたり今の世にも學ばるべき抱負である。（後略）

二月

## 東京帝室博物館繪畫陳列 二月中

都一（前略）繪畫の古いところでは聖德太子の御像が三點ある。御物のものと一乗寺と西來寺のものとして、平安及び鎌倉時代の作で色にも描線にもゆつたりした趣がある。夙に進取的な文化政策をお執り遊ばした太子を今日に鑑びまらざるものも亦感慨新たるものがある。鎌倉時代の作品では神護寺の文覺上人と藤原光能の肖像が注目すべきである。室町時代の作品になると、當時の繪畫は優麗さと枯淡さとの混合に日本的なものを示したもので、その作例として打球圖や竹生鶴祭禮圖や土佐光信筆と傳へる堅田圖等がある。なほ京都淨福寺の十王圖は佛畫であるが、光信の描いたものとして珍しく、世に紹介されたのも新しい。

桃山時代から江戸時代にかけては、探幽、荷信、宗達、光琳、大雅、蕪村、竹田、畢山、應舉等代表的作家のものと共に、珍らしい作家のものが尠くない。就中江戸末期に洋畫的畫風の折衷を試みた所謂長崎派と稱された諸家や、その他の作家のものが多く出てゐるのも珍しい。殊に調氏出品の司馬江漢の和蘭陀風景圖は重宝にもなつてゐる代表的な作品である。

又渡邊始興筆の八幡太郎繪卷や住吉如慶筆の堀河夜討繪卷や源平合戰圖屏風或は松本山雪や長谷川信春筆等の牧馬圖等戰繪や牧馬圖が多いのも戦時下だけに一段と興味をそゝる。爛熟した泰平の世にかうした題材を室内裝飾に求めてゐるた心

事は、一應反省される價値はあらう。

版畫の陳列には鳥居派をはじめ春信、春章、北斎、寫樂、豐國等の諸作が絢爛な色彩を發揮してゐる。これも伸びゆく日本のある一時の姿を示すものとして矢張り見逃せないものである。

永樂善喜郎陶磁展 十日―十四日 日本橋・高島屋

福中又次寛集共樂園古美術展 十四日―二十一日 名古屋・松坂屋

## 三月

日本古陶磁陳列 十二日―十五日 日本橋・高島屋

南方共樂園時代染織品展 十七日―二十二日 上野・松坂屋

鎌倉時繪まつり 二十一日―二十二日 鎌倉・東慶寺

文晁遺墨展 二十八日―二十九日 芝・東京美術會館 秋月庵主催

## 四月

東京帝室博物館繪畫陳列 四、五、六月中

都一（前略）最初の室は御物の繪殿障子繪を始め、西大寺の十二天、神護寺の釋迦像、松尾寺の孔雀明王、寶山寺の彌勒、談山神社の大威德、一乗寺の高僧像、來迎寺の羅漢圖、藥師寺の慈恩大師等國寶中の國寶とも云ふべき名品ばかりで、藤原時代のものがこんなに揃つたことは近頃めづらしい。又繪卷では蜂須賀侯の紫式部日記繪卷、高山寺の鳥獸戲畫、同華嚴緣起、増上寺の法然上人繪傳があつて、古美術愛好者を満腹せしめる。千年近くも古へにかうした優れた作

品を残してゐるのを見ると、現在の日本の活躍また偶然でないことがわかる。

第二室は支那宋元の名幅を蒐め、周然が永延二年に宋から持つて歸つたといふ清涼寺の十六羅漢圖をはじめ、大徳寺の牧溪の龍虎、福阿子爵の紅白芙蓉圖があり、東洋の名畫に値するものばかりである。而もかうした支那の名畫も、日本に早く傳へられたからこそ今日に残つたのであつてこの事實は又日支關係の何よりのよい見本である。

第三室以下は各時代屏風の豪華陳列である。元來屏風畫は日本に於いて國民精神の發達としてゐた桃山時代を中心に特に發達したもので、世界無比の畫境を展開してゐる。松平伯より寄贈になつた雪舟の山水圖屏風を始め博物館名物の永徳繪圖、蜂須賀侯の宇治橋圖、福阿子の等伯筆松林圖、季頼筆高峯觀楓圖、妙心寺の友松筆呂蒙商山四皓圖、山樂の車爭圖、觀智院の應舉筆雲龍圖等色とりどりの賑はひは、現在畫人も採つて以つて學ぶべき點が尠くない。（野間清六）

兜特別展 十日―五月九日 麹町・遊就館

日吉山王資料特別展 十一日―二十日 日吉山王神社博物館

官弊大社日吉神社では西本殿の御簀緒も成り四月一日正遷座祭、同十三、四日には例大祭を執り行はれる事となつたので當館はこれを記念して弘く山王信仰を偲ぶべき資料を蒐集展覧した。主なる出陳物は左の通りである。國寶山王靈驗記（日枝神社、生源寺、蓮華寺藏）同山王本地佛像（觀音寺藏）同山王諸神像（西教寺藏）同山王權現像



(淨藏院藏) 重要美術品山王曼荼羅圖(男爵岡田伊能藏)その他山王關係繪圖、古文書、典籍類等百點を陳列した。  
古鏡特別陳列 十一日、二十六日 恩賜京都博物館

大阪市池田庄太郎所藏の多數古鏡の内より、國寶、重要美術品の指定を受けたものをはじめ、約七十點の和鏡、日本出土の漢式鏡及び多少の支那鏡が出陳された。

支那青磁展 十八日 青山・根津美術館

漢六朝の初生期青磁より始めて最盛期の名品、同館所藏龍泉窯、宇佐美寛爾藏南宋官窯章式壺の二點を中心に陳列、青磁變遷發達史を系統的に示して、小山富士夫の解説が行はれた。

西山芳園及完美展 十八日―五月三日 大阪市立美術館

大朝―龜土畫家西山芳園、完瑛父子の名品を一堂に見ることは大阪人にとつて興味あることに相違ない。四條派の亞流で表現が淺く立派な藝術といふわけにのかないが、懸命に努力し、技術をおろそかにしてゐない點を感じさせられた。芳園では「雪月花嵐山圖」(山口吉郎兵衛氏藏)、「月下彈琴圖」(同)、「四季花卉圖」(泉吉次郎氏藏)、「箕面瀧圖」(清海復三郎氏藏)、「六歌仙圖」(同)完瑛では「海棠柳小禽圖」(山口竹次郎氏藏)、「蔬菜魚貝圖卷」(同)、「奔浪泳鯉圖」(山口吉郎兵衛氏藏)などを見るべきものである。(春山生)

古代染織工藝品展 二十三日―二十八日 日本橋・高島屋  
日本文化展 二十五日―五月二十四日 上野・表慶館

東京帝大人類考古學教室その他の提供に係る石貨、貝貨、住宅及船模、古海圖、漢獵具、武器樂器、假面、木偶、佛像、織物等南方諸民族の文化に關する資料の出陳があつた。

豐太閣大展覽會 二十八日―五月十七日 大阪城天主閣 大阪市並大阪毎日新聞社主催

## 五月

白鶴美術館第十七回展觀 一日―二十日 兵庫・同館

唐物抹茶筥と國焼水指類陳列 和鏡展 二日―六月三十日 大阪市立美術館

豐太閣大展覽會 五日―十七日 大阪・阪急百貨店 大阪市並大阪毎日新聞社主催

古丹波名品鑑賞會 五日―十日 上野・松坂屋

池田侯爵家什寶展觀 九日 芝・岡邸 浮世繪展 十一日―十三日 上野・櫻亭 名所堂主催

南紀美術館第一回展觀 十五日―十七日 和歌山・同館

陽明文庫春期展觀 十六日、十七日 虎之門・霞山會館

初夏の曝書に際しての展觀で、後西天皇、後永良天皇の宸翰、三藐院、豫樂院其の他の筆蹟及少數の繪畫、文書等二十九點の出陳があつた。

乾山二百年忌記念展 二十七日 三十日 日本橋・高島屋 乾山會主催

長谷川玉峰展 二十八日―六月十日 恩賜京都博物館

玉峰の知己が多かつた大津市に遺る作

品の主なるもの四十餘點を撰擇陳列した。  
根津美術館第二回展觀 二十九日―六月一日 青山・同館

出陳されたのは奈良時代寫經根本說一切有部百一羯磨、十二因緣繪卷、無學祖元墨蹟、賢江祥啓山水圖、愛染明王像等の國寶をはじめ、來國後在銘太刀、廣光在銘短刀、安親作波鯉圖、嵯峨山時繪硯箱、石山寺時繪源氏物語繪卷、瀬戸獅子香爐、此世香爐、山水時繪印籠、瀧山水時繪印籠、鑿雲文筆、鑿雲龍文筆、鑿雲龍文章、蟠螭文獸環大洗、四方佛龕像、正木茶入、安南茶盤、紹仙筆山水圖、傳牧溪筆瀟湘雀圖、光起筆源氏朝顏圖、傳後宋筆色紙、傳行成筆伊豫切(和漢朗詠集斷簡)、手鏡文彩帖、大般若波羅蜜多經等計八十二點である。

東朝(前略) 出陳された名品中鏝では秋江獨釣の圖を高彫色繪を以てした金家のもの、陶磁器では水の子として知られてゐる信樂ものの中代表品がたくまざる味はひを呈し「正木茶入」と蜻蛉と雲文様の安南茶盤と共にたのしく接せられた。

繪畫では傳牧溪の「瀟湘」をはじめ「賢江」「祥啓」の二印あるものとして唯一のものとしてゐる新國寶山水圖と紹仙の「山水圖」がよく對照をなし、それに鎌倉期佛畫中の優品とせられてゐる國寶「愛染明王像」が光彩をはなつ。

その他「十二因緣繪卷」「無學祖元墨蹟」「根本說一切有部百一羯磨」の國寶も陳べられてゐる、一日も早く廣い範圍への公開を待つ。

## 六月

南方工藝文化特別展 二日―七日 日本橋・高島屋

モテイ蒐集日本古美術展 二日―七日 神戸・三越

大朝(前略) 珍藏品の數々は同氏が來朝二十年來の苦心の蒐集にかゝるもの、ことに南蠻渡來後のキリスト教的またはオランダ風俗にちなんだ異國の香りの高いものが多く、屏風、鈐、蒔繪物、印籠、櫛、笄、小櫃などのほか長崎版畫、浮世繪、地圖、華麗な能衣裳、刺繍裂地、佛像、佛畫、時計など珍しいものばかりである。

スマートラ染織美術展 九日―十三日 日本橋・三越 好美堂主催

大橋圖書館創立二十周年記念展 十五日 九段・同館

## 七月

東京帝室博物館繪畫陳列 七、八月中 讀書(前略) 陳列替の内容の内特に注目すべきものを列挙すると下の如し。

第十一室 十六羅漢圖は我が國で最も古く且つ色彩が美しい。十二天像は鎌倉時代の鐵細な技法を示す、知恩院藏蓮花圖は徐氏體で古來著名である、増上寺藏法然上人繪傳二卷は多くの法然上人繪傳の内でも古く且つ製作も優れてゐる。第十二室 月下蘭竹圖は禪僧で燦爛の名手である梵芳筆、元信筆祖師圖はもと雲雲院の模であつた、蓮花猫圖と果樹及猫圖は共に朝鮮畫で室町時代の藝愛筆になる牡丹猫圖と比較すると朝鮮畫の傳播の様を知らしめて興味がある。第十三室 秋

郊鳴鶴圖は土佐光起、光成父子の合作、蟬丸圖は大利繪を復古した爲恭の筆、東山雨後圖は竹田の作として特に珍しい、破墨山水圖卷は醍醐寺の花見屏風で著名な生駒等壽筆、使面畫卷は池大雅妻玉瀾女史筆、第十八室 應舉筆波濤圖は毎年夏になると陳列されるもので金剛寺藏、同じく應舉筆四季山水圖襖繪は川崎男爵寄贈になるもので初の陳列、圓山四條派畫帖の中には景文、狙仙、應瑞等のがあり、扇面には吳春、蘆雪筆のがあり、圓山四條派の寫生派を知るには興味がある。(後略)

乾山遺墨展 十四日 丸之内・帝國ホテル 福井利吉郎主催

## 九月

東京帝室博物館繪畫陳列 九、十月

讀書(一)前略 特に注目すべきものを上げると第十一室 不動尊像(甚目寺—愛知縣)—藤原期の代表的佛畫、聖觀音像(普光寺—鳥根縣)—色彩の鮮麗な藤原期の代表的なもので東京では始めての展示である、文覺上人像(神護寺—京都)—鎌倉初期の代表的な肖像畫、如意輪觀音像(金剛寺—近江)—鎌倉末期の標準を示すべきもの、紫式部日記繪卷(須賀賀侯藏)—色彩豊かな鎌倉期の代表的繪卷、禽獸藏畫卷(高山寺)—墨筆の面白味を十分に見せた古今獨歩の藏畫、第十二室

由才圖・原文筆(當館藏)—周文の代表作と同時に室町期の標準作とも稱すべきもの、鴛鴦圖・性曉筆(當館藏)紅白芙蓉圖(福岡藏)—宋の院畫の代表作で色調豊かなもの、第十三室 繪圖、永徳筆、呂望南山四皓圖屏風(妙心寺藏) 黃石黃

古美術展覽會・展觀

張良虎溪圖屏風・山樂筆、以上は何れも桃山期の畫風をうかこうに足る同期の代表作、貞畫像—勝以筆(武岡氏藏)高尾親楓圖屏風・秀頼筆(福岡正藏)第十八室 富士山圖・光琳筆(梅林寺藏)藤牡丹楓圖・光甫筆(當館藏)扇面散圖屏風・宗達筆(醍醐寺藏)豪華華麗な宗達の畫風を十分にうかがえるもの、山水畫帳・玉堂筆(林氏藏)大雅堂や竹田とはまた別な獨得の南畫の風格を示す。(後略)

大東亞共榮國美術展 一日—十五日 東京府美術館

大東亞美術協會並讀賣新聞社主催

讀賣—古い時代の民藝品から観て行く

と朝倉文夫氏出品のボルネオブルナイの銅器類と帝室博物館出品の銅鼓である。

銅鼓は南支から印度支那、東印度群島に分布する歴史的遺物で學界では諸説が出てゐるが祭器の一種であることは誤りのない所である。銅鼓の多くは表面に蛙の彫刻が付いてゐるが、博物館出品のものには付いてゐないで中央に星形の撞座がある。二千年の昔から支那と交通關係を證する大切な遺品である。ブルネイ銅器の内キレと稱する手つき結婚式用祭器は馬來人物や珍らしい形の小動物が付いてゐる。此等は素焼から發達したもののかその形狀から受ける感じが塑造的である。その他縣銅鑼の三爪の龍の浮彫、蓋付食器の幾何學文様の精巧な鑄造技術と唐草文様を彫刻してある鑿の運用は見事なものである。此等を見る時未開の土俗品でなく高度の發達を遂げた漢代銅器の流れである。

「織物製布」の多數出品があるが岡野、朝倉兩氏のものは東印度地方での蒐集品であり丹羽氏のは印度における蒐集で津田氏のものにはビルマ更紗を見受ける。此等の時代製は產地別にすれば印度、泰、ジャワ、スマトラ、小スンダ列島各地方の産が混つてゐる。約三百年以後のものが多いが、文化交流研究の好材料である。此等の製布の多くは初めは印度民族クリン族に依つて印度文化東漸と共に印度から南方圈に傳來された事は疑ひないのである。特に注目したのはチンデ絹織物同致文化が侵入して印度教模様が驅逐されてゐることである。此のチンデ織物は法隆寺製太子間道文様と血脈の通ずるものがある。衣服類にはベルシャではないかと思はれる程模様が共通である。「木彫類」にはビルマ、バリ島のものがある。バリ島木彫はジャワに同致が侵入後マジョバイト王朝亡命の彫刻家によつて製作されたもので、我が國に將來されたものでは優秀品である。此等の様式は曾て一度はマジョバイトにおいて榮えたものである。現代木彫の出品もあるが獨逸人彫刻家の指導によるものでインドネシアの魂をなくした混血兒である。「ジャワ古面」假面には古來から祭器用又は芝居用として使用されてゐるが我が國仕舞面と共通點がある。種類も多いが技巧彩色に見るべき點が多い。中にはエナメルを上から塗つてゐるものもあるが品格を缺き古面の味を鑑賞することの出来ないのは残念である。西澤氏出品の泰の假面は特筆すべき民藝の香を持つてゐる。

「編細工」は草木竹等の纖維質の材料を用ひてゐる。編細工は熱帯に於ける最も原始的な手工藝で、模様編方に民族の血

のつながりを見出すものである。

「塗器」には泰、ビルマ、スマトラ産のものがある。東京美術學校出品の金問塗に注意すべきである。我が國輪島塗や越後の村上の金問塗に影響を與へた點興味深い。此等民藝は孰れも原住民の日常生活又は經濟生活に密接なる關係を有してゐるが漸次輸入舶載品に壓迫されて年と共に衰微する状態にある。(注目すべき民藝品) 山尾憲明)

滿洲國國寶展 十日—二十二日 上野・表慶館

滿洲建國十周年慶祝會並東京帝室博物館共催

讀賣(一)前略 滿洲國の古代美術品がわが國で展覽されることは初めてであり、わが帝室博物館が外國展を開催することもこれが初めてである、出品國寶の主なるものは

典籍(第一、二室)文淵閣本四庫全書、清の高宗が乾隆卅七年から同四十七年にわたる十年間に古今の重要書籍を蒐集してこれを肉筆で模寫し全國四ヶ所に保存してゐるものは奉天城内の文淵閣にあつたこの全書だけである、經部、史部、子部、集部の四部に分れ合計一萬二千二百六十五冊、世界有数の文庫として知られる、その一部分が展覽されるが、經部の中にはわが江戸時代の學者山井鼎の「七經孟子考文補遺」なども收められてあり、史部には東洋建築美術の根本を現した「營造法式」子部には硯の書ともいふべき「欽定西清硯譜」や茶の祖先である唐の陸羽の「茶經」などわが祖に親しみ深いものがある、また熱河珠像寺滿文藏經は同じく高宗の時代に大藏經を滿譯に

したもので全文紅字をもつて印刷され、現存するものはこのほかに佛蘭西國立圖書館に一部あるだけといふ世界に二部しかない珍本である。

染織(第三、四、五室) 刻絲滿洲國に殘る獨特の藝術品で滿洲國皇帝初の御來訪のみぎりわが皇室に刻絲の畫帳を御土產品として奉つてゐるが今同この原品が公開されることになつた。刻絲はわが國のつづれ織と同一手法であるがわが國のものより遙かに緻密で細かいものになる一寸間に經糸百十本、緯糸三百六十本以上も使用してゐる、主として宮廷用に用ひられたもので特に名手と誦はれた朱克柔の「牡丹圖」「山茶圖」などは逸品で宋、明、清各時代のものが多く刻絲の變化が窺はれる、刺繡の部には明朝時代上海の顧氏として名を馳せた顧氏一門の作になる「顧氏七裏綾髮繡人物」は絹糸の代りに毛髮を三本集めてこれで刺繡してゐるといふ獨特のものである。

陶器(第六、七、八室) 鷄冠壺、數年前わが國の學者によつて名付けられたもので、現在も熱河省付近から發掘されてゐる約八百五十年前契丹民族の遺した陶器で、遊牧民であつた彼等が革褰の代りにその形を陶器にしたものであるが、革褰の縫目をそのまゝ模様に殘してある詩的牧歌的な民藝品である。契丹族の遺品と證明されたのは數年前でわが學界の注目の焦點となつてゐる。

春岱翁古陶展 二十二日―二十七日  
上野・松坂屋  
北齋廣重展 二十二日―二十七日 神戶・三越

十月

乾山光琳宗達展 一日―五日 日本美術協會 乾山同好會主催

尾張勳皇顯彰展 一日―十五日 名古屋・徳川美術館 名古屋市文化課並徳川美術館主催

天海僧正三百年忌遺物展 二日―三日 上野・寛永寺

芭蕉生誕三百年記念展 六日―八日 大阪美術會館

京都大藏會第二十八回展 八日 京都市立美術館

第七回名寶展 十日―二十五日 大阪重要美術品探幽會古畫縮寫圖卷、同爲恭筆知恩院施米圖の他、毘沙門天靈驗記繪卷斷簡、花鳥圖等鎌倉室町時代のものから、狩野派、四條派、土佐派の諸畫及び大和繪、浮世繪等に亘る六十三點の繪畫の陳列があつた。

豐太閣關係資料並桃山美術特別陳列 十日―三十一日 恩賜京都博物館

同館の主催で、御陽成天皇の宸筆「豐國大明神御神號」をはじめ奉り、消息、衣服、刀劍、調度、畫像等の關係資料を陳列、併せて豐太閣の氣宇を反映する桃山美術の展覧を行つた。主要品目をあげれば(○印國寶 △印重要美術品 (一) 內所藏者) ○四月十三日五三宛豐太閣消息(高臺寺) △九月四日三條殿宛同(守屋考藏) △高臺院宛同(同上) ○醍醐花見短冊(三寶院) ○豐臣九所玩具船(玉鳳院) ○同武具(妙心寺) ○同俱利迦羅龍守刀(同上) ○刀名物義元左文字(建勳神社) ○雄刀直シ

刀名物骨喰(豐國神社) ○金殿斗付太刀(御香宮神社) ○光忠在路太刀(岡野多郎松) △刀繪圖(岸本正之助) ○蒔繪調度類(高臺寺) △蒔繪螺鈿花鳥文様(小村一三) ○筒井筒在路井戸茶盤(毘沙門堂)

△豐太閣畫像(小村一三) ○狩野內膳筆豐國祭圖屏風(豐國神社) 狩野松榮筆花鳥圖屏風(長崎太郎) 傳狩野永徳筆松鶴蘆雁圖屏風(和中金助) 傳狩野永徳筆仙人花鳥圖屏風(大徳寺) 傳狩野山樂筆唐獅子圖屏風(本法寺) 狩野修理筆繫馬圖屏風(妙法院) 祇園祭圖屏風(伊藤貞一)

○武人調馬圖屏風(醍醐寺) △祇園馬圖屏風(多賀神社) ○海北友松筆牡丹梅花圖屏風(妙心寺) ○海北友松筆龍虎圖屏風(同上) ○長谷川等伯筆竹林猿猴圖屏風(相國寺) 同筆四愛圖屏風(聚光先院) 柳橋水車圖屏風(恩賜京都博物館) 曾我直庵筆松鷹竹鷺圖屏風(福原貞藏) 土佐光吉筆源氏物語圖(恩賜京都博物館) 支那古研展 十四日―十八日 上野・松坂屋

岡崎正也寄贈品展 十五日―十一月十四日 表慶館

いづれも岡崎正也今春歿前の寄贈になるもので、同館ではその篤志に答へ、記念展を催したものである。(出陳品目は博物館新收品の項參照)

陽明文庫秋季展 十六日―十八日 京都・陽明文庫

大朝(前略) 今回は國寶中「春日鹿曼陀羅圖」「後深草天皇宸翰御消息」「藤原忠通公消息」「慈鎮和尚消息」「平記(平行親記)」「古語集」「論春秋歌合」「法曹至要抄」「短刀(銘吉光)」「太刀(銘秀近)」および重要美術品その他の貴珍なものの計

三十五點を選んで陳列、なかでも「慈鎮和尚消息」は忠通の七男天臺座主慈圓(慈鎮)六十八、九歳(貞應一、二年)ごろの秀勁な筆跡、繪卷「春日權現靈驗記」は模本中現存最古のものが近衛家源公の詞書および繪の周密な筆致と色彩の鮮麗さが注目され、その他いづれを問はず低徊去るに忍びざる餘蘊ぞろひであつた。

日本諸學振興委員會藝術學會展 二十三日 青山・根津美術館

陳列品目左の如し。(○印國寶 △印重要美術品) △大日如來像 ○那智靈圖、△愛染明王像、○繪過去現在因果經、○十二因緣繪卷、傳周文筆山水圖、○祥啓筆山水圖、○光琳筆杜若圖屏風、○漁村夕照圖、△瀟湘圖、○印陀羅筆布袋圖、○內大臣殿歌合、○伊豫切、日野切、岡寺切、△目無經、△手鑑文彩帖、△松屋扇、△柴田井戸、染付吹々鳥香爐、瀬戸獅子香爐、○碯青磁竹ノ子花入、○仁清色繪山寺文様茶壺、○青磁蓮華唐草文花瓶、祥瑞密柑水指、△芦屋松梅文眞形釜、△銀平文寶相華製茶箱、秋野蒔繪手箱、上代染織殘片、△銅製饗養怪獸文方形盃、△銅製饗養文盤、△銅製饗養龜龍文盤、△銅製饗養龜龍文盤

列聖宸影展 二十七日―十一月十五日 大阪天守閣

時繪名品展 二十八日 青山・根津美術館

十一月

東京帝室博物館繪畫陳列 十一月中 讀書(前略) 初の展覧のものをひろつてみると、第十一室 仁王經曼荼羅(醍

開寺)、普賢十羅刹(常忍寺)、般若菩薩像(護國寺)、如意輪觀音像(中藏院)、御物繪殿障子繪舍利殿障子繪、金剛界胎藏界曼荼羅(子島寺)一兩界曼荼羅と並び稱されるもので、東京では初の展覧である、華嚴緣起(高山寺)一傳信實と稱せられ宅磨派の系統に屬する代表作。第十二室 靈胎女圖(當館藏)圭叱齋筆で室町時代として最も珍しいもの、祖師圖、元信筆(當館藏)第十三室 山水圖屏風、雪丹筆(松平氏寄贈)四季竹園屏風(寂光寺)立花圖一寛永頃の生花を描いたものとして有名、名和長年像、信春筆(福岡氏藏)長圖源公像(成瀬氏藏)藤原信盛像、光琳筆(青柳瑞穂氏藏)光琳の像畫として唯一のもの、青柳氏が夜店より掘出したことは有名である、椿圖、春信筆一鈴木春信として有名な圖柄で版が新しい、初の展覧である。第十八室 孔明像、南海筆(外山氏藏)一南畫として初期の人である南海は作品が非常に少いがこれを觀ると彼が色々な題材をとらへたことがわかる、松泉山水圖、竹田筆(近藤氏藏)佐藤一齋像、華山筆(河田氏藏)紅梅椿圖、義躬筆、櫻山吹圖屏風、傳宗筆、縮圖卷、探幽筆

趙子謙遺作展觀 一日一三日 芝・東京美術會館

園藝寺曝涼 一日一四日 鎌倉・同寺  
白鶴美術館第十八回秋季展 一日一二日 兵庫・同館  
南蠻古美術品陳列  
西亞と南方古美術鑑賞會 三日一八日 上野・松坂屋  
根津美術館第三回展觀 六日一九日 青山・同館

古美術展覽會・展觀

陶磁器、蒔繪、錦繡綾類、古銅器、繪畫、墨蹟、寫眞等の出陳があつた。主要なものは、國寶五百羅漢圖、同最勝王經註釋卷第二(飯室切)をはじめ、大内簡在銘硯青磁筒花入、象嵌青磁香爐、乾山繪替皿、秋草蒔繪鏡、格子連壁花文蜀紅錦、草花文刺繡帳頭、鑒藏龜文羊尊、一字在銘鑒藏龜龍文、鑒藏龜鳳文方彝、クリス形廣銘銅刀、白玉文琳、井戸茶盤、大日如來像、周茂叔圖、仲安眞康筆布袋圖、風俗圖、北野天神緣起繪圖、大乘同性經卷上(光明皇后御願經)、説一切有部順正理論第七(得德天皇勅願經)等である。

帝國圖書館創立七十周年記念展 六日 上野・同館

時代衣裳展觀 十三日一十五日 芝・東京美術會館 東洋美術國際研究會主催  
東日一今回展觀された長尾欽彌氏の蒐集品は、足利より桃山、慶長、享保、元祿等の代表的衣裳二百餘點である。足利時代の扇面散し能衣裳は豪華、桃山、辻が花系の衣裳と加賀の茶屋辻は清楚で、慶長の縫造は絢爛そのものといふべく、加賀友禪の典雅さに時代を偲ぶべく、小袖窓の梅と茶麻地疋田絞りの盥い圖柄は元祿で徳川中期の好みを知らることが出来る。東亞共榮園内の染織では泰やスマトラなどの太子間道、吉野間道に優品があり、印度の印花布、金更紗と稱するものに珍しい小品を見た。唯命名と時代に多少の誤りを發見する位で、近來稀に見る意義深い展觀であつた。

意陽及曲阜出土漢代遺品展 十六日一十七日 東京帝國大學 同大學文學部考古學研究室主催

東日一東京帝大考古學研究室は、最近日本學術振興會の委嘱により、滿洲國遼陽において漢代の古墓十數基を調査し、機關、井戸、竈、飲食具、調理品等に構した瓦製明器(副葬品)約二百餘點を獲て二千年前の支那人生活を如實に具顯せしめることが出来、なほその二墓から人物、牛車、唐草等を描き出した壁畫を發見して東洋繪畫史に一新資材を提供した。又この九月には東亞文化協議會主催の下に支那山東省阜城前に前漢時代魯恭王の建立した壯大な靈光殿の遺蹟を發掘して、五十間に餘る大廻廊址を露出せしめ、幾多の圖紋ある瓦甃や古錢、金具、裝飾品等を收集し、殊に恭王當時の「魯六年九月所造北陸」の銘記ある刻石を發見して東洋金石學界に一衝動を與へた。

芝・東京美術會館

復古代和繪派訪言・一蕙・爲恭展 二十五日一十二月十日 恩賜京都博物館  
四日市市吉田家藏の未公開品を中心として訪言・一蕙・爲恭の他、清、可成、花乃舍、恭義等の幕末復古大和繪派の作品百餘點を陳列した。出陳品目左の如し。(一)内所藏者  
「納言」大伴旅人圖(小林一三) 勿來圖(采野爲吉) 源三位頼政圖(吉田千九郎)  
「采野爲吉」源三位頼政圖(吉田千九郎)  
「某維摩居士像(吉田千九郎) 寒山拾得圖(同上) 田家早春圖(同上) 戸無瀬瀧

芝・東京美術會館

圖(同上) 杜鵑卯之花圖(同上) 鯉圖(同上) 麥蕪圖(同上) 人物戲畫一羽織裏絹地墨畫(佐々木愷四郎) 色の千くさ(同上) 色の千くさ一版本(同上) 訪言叙法橋口宜案(松木聰二郎)  
「一蕙」宇治川先陣圖(紀藤兵衛) 平家物語圖(吉田千九郎) 御即位圖(紀藤兵衛) 白衣觀音像(吉田千九郎) 賀茂鏡馬圖屏風(瀨川次郎) 祇園祭圖(吉田千九郎) 日本武尊御像(紀藤兵衛) 五月二日朝觀御幸圖(吉田千九郎) 白馬節會、牛祭圖(同上) 俊成卿參賀圖(大林義雄) 八幡太郎義家圖(吉田千九郎) 勿來關圖(西村重郎兵衛) 京極宗輔圖(吉田千九郎) 業平太郎鳥圖(同上) 仲國訪小督局圖(同上) 楠木正成像(瀨川次郎) 楠公父子圖(末次喬) 楠公訪藤房卿圖(吉田千九郎) 楠公恩地左近圖(紀藤兵衛) 鶴飼鷹狩圖(吉田千九郎) 官女觀月圖(同上) 五節句圖(同上) 子之日、御殿、花使、茶筌賣圖(同上) 飾具足圖(同上) 米經浦賀渡來圖(恩賜京都博物館) 祇園祭圖(吉田千九郎) 鶴庵丁圖(三浦百重) 田樂法師圖(吉田千九郎) 相撲圖(紀藤兵衛) 追儼圖(同上) 合戰圖(久昌院) 四條橋圖(紀藤兵衛) 關羽像(同上) 涅槃圖(吉田千九郎) 一蕙書畫貼交屏風(富岡益太郎) 一蕙書狀(菊池契月)  
「爲恭」猿曳圖(古家太郎兵衛) 釋迦三尊像(大雲院) さゝれ石(古家太郎兵衛) 相應和尚染殿皇后御加持圖(明王院) 御衣尊勝曼陀羅圖(吉田千九郎) 普賢延命像(明王院) 重要美術品天保施米圖(橋本喜造) 三條爲房卿葺狩圖(大林義雄) 放鶴、奉龜圖(吉田千九郎) 官女古歌意圖(同上) 熊梅圖(同上) 大和舞圖(古

芝・東京美術會館



家太郎兵衛) 土筆摘圖(同上) 文殊像(菊地契月) 爲恭住居圖(古家太郎兵衛) 公任卿雪中梅花園(吉田千九郎) 足柄山圖(榮吉左衛門) 八幡宮明驗圖(菊池契月) 宇治川園屏風(高山寺) 眞言祖師行狀圖(模本屏風) 富岡益太郎) 足柄山、勿來關圖(吉田千九郎) 萬歲樂圖(同上) 立雛圖(西村重郎兵衛) 常盤御前圖(吉田千九郎) 老杉時鳥、子ノ日、菊翁圖(西村重郎兵衛) 菩薩戒經(寂山文庫) 王陽明像(梨木神社) 中將姬圖(小林一三) 稚兒文殊像(吉田千九郎) 子ノ日御遊大堰川御遊圖(同上) 神樂舞圖(同上) 重要美術品類海阿闍梨影(藤堂祐範) 普賢十羅刹女像(明王院) 東遊舞圖(小山源治) 重要美術品石雲清事(藤堂祐範) 藥師九拜狗子圖(橋本泰輔) 琴棋書畫圖(吉田千九郎) 富士越龍圖(同上) 重要美術品忘形見繪卷(藤堂祐範) 同忘形見下繪(同上) 攝取引接圖(同上) 大黑圖(同上) 神功皇后圖(西村重郎兵衛) 爲恭自作繡絆雛形(古家太郎兵衛) 爲恭粉本(富岡益太郎) 七夕、月見圖(古家太郎兵衛) 爲恭模假名帖(同上) 延曆寺寶物影寫卷(藤堂祐範) 家隆卿願文寫(古家太郎兵衛) 權跡寫(同上) 六歌仙圖(版畫(同上) 稚兒文殊圖(版畫(同上) 稽古圖(版畫(同上) 子の日遊圖(扇面(柏原孫左衛門)

十二月

布圖(宮田兵三) 普公像(同上)

東京帝國博物館繪畫陳列 十二月中心

東京(前略) 先づ今回の陳列で注意すべきものは第十二室の室町時代の繪畫である。そこには博物館名物の單庵の鷺をはじめとして岳翁、秋月、柴庵、周村、周耕、醉墨齋、啓孫、興牧、興悅等の諸作があつてゐる。一般の人には耳慣れぬ畫人たちがあつてゐるが、いづれも禪機や茶味の横溢したもので、室町時代の文化に對する正しい理解を深める陳列である。次は第十三室及び第十八室で、そこには江戸時代の各派のものが見られるが中でも等伯、直菴、山卜良次、狩野興以、探幽、荷信、相説、燕村、佚山等の屏風は力作揃ひで見ごたへがある。なほ版畫室に三代豐國の俳優大首繪を蒐めたのは、顔見世といふわけではないが師走氣分を催さしめる。(野間)

陳列品目左の如し。( ) 内所藏者。  
獨立筆蕉石圖(山本悅心) 化林筆墨竹圖(同上) 同山水圖(同上) 同菊石圖(山根七郎治) 同山水圖(同上) 高泉筆墨竹圖(山本悅心) 大鷲筆雪竹圖(山根七郎治) 同墨竹圖(同上) 大成筆墨竹圖(同上) 百拙筆山水圖(山本悅心) 同(山根七郎治) 南海筆山水圖(和中金助) 同墨

梅圖(同上) 同人物圖(外山知三) 筠圖筆墨竹圖(和中金助) 百川筆山水圖(佐佐木昌興) 同墨梅圖(同上) 石圃筆山水圖(村山駒之助) 同山水圖(相見香雨) 筠圖筆墨竹圖(佐々木昌興) 鶴亭筆山水圖(山根七郎治) 同蘭竹圖(山本悅心) 玉蟾筆武陵出洞圖(村山慎二)

博物館新收品

帝室博物館並に朝鮮總督府博物館の昭和十七年度に於ける主要新收美術品の目錄を左に掲げる。

東京帝國博物館

繪畫

水天、火天像	鎌倉時代	岡崎正也寄贈	
眞如法親王像	同	同	
山水圖	藏丘	同	
一休和尚像	墨齋	同	
山水圖	傳周文	同	
山水圖	室町時代	同	
繫馬圖屏風	同	同	
富嶽圖	同	同	
鷹圖屏風	同	同	
破墨山水圖	雪舟	同	
花鳥圖	如寄	同	
山水圖	僊可	同	
扇面流圖屏風	江戸時代	同	
雜畫扇子十二本	渡邊華山	同	
春湖圖	橋本關雪	北田内藏司寄贈	
斑鳩圖	西山翠嶂	同	
香注圖	川端龍子	同	
黎明富嶽圖	川村曼舟	同	
祝捷日圖	川合玉堂	同	
初東風圖	鏡木清方	同	
春風萬里の濤圖	橫山大觀	同	
海幸圖	竹内栖鳳	同	
雪圖	上村松園	同	
益良男圖	安田叔彦	同	
清正圖	前田青邨	同	
秋郊圖	松林桂月	同	
橋圖	小林古徑	同	
競芳圖	小室翠雲	同	
牡丹圖	荒木十畝	同	
菊圖	菊池契月	同	
淺春圖	結城素明	同	
許由巢父圖	醉墨齋	同	
舞樂圖屏風	狩野永岳	同	
唐人人物圖屏風	雲谷等宿	同	
白壁の家圖	中村 葵	同	
山鹿素行像	島田墨仙	同	
書蹟	岡崎正也寄贈	同	
後奈良天皇宸翰	堀河通具筆	同	
新古今和歌集寛宴利歌懷紙	作者寄贈	同	
金工	獅鈕獅耳薰爐	香取秀眞	作者寄贈
陶 瓷	色繪鸚鵡圖皿	江戶時代	岡崎正也寄贈
刷毛目片口	同	同	同
依形壺	李朝時代	同	同



三彩人物文壺 明時代

漆工

龍仙人彫根付他

吉村國山他 二七四個  
故男爵郷誠之助寄贈

伎樂面模造

秋草蒔繪机

桃山時代

染織

白倫子地竹折鶴模樣

描繪染繡紋小袖

花獸模樣綴織

考古

昆虫形土製品

兜鉢

銅印

朝鮮總督府博物館

青銅鐙斗(殘缺)樂浪時代

青銅拂盒

青銅鐙

金銅鍍

鍍金飾金具

漆耳杯(耳部)

居攝、始建國年銘

金銅釦漆盤殘片

陶壺

劍附屬金具

金弘道

李寅文

金明國

金如來坐像

金如來立像

金銅在銘蓋付函

同

同

同

同

同

同

同

同

銀方形盒 新羅時代

金方形盒

銀高杯

瑠璃板

瑠璃玉

腕玉

飾玉

石製蓋

銅鐘

青瓷象嵌雲鶴文瓶

青瓷象嵌葡萄文瓶

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

慶州九黃里皇福寺  
址三層石塔內發見

某家賣立

十二月二十三日

美術市場

東京美術會館

名古屋近藤家賣立

杏葉舍某家賣立

岡野繁藏某家賣立

黑田侯爵家賣立

名古屋美術會館

某家賣立

清風庵賣立

長松軒賣立

京都美術會館

井上大丸家賣立

對豐庵某家賣立

大阪美術會館

某家賣立

森ト贈

李朝時代

李朝時代

同

同

同

同

同

同

同

同

二月 十六日

二月 二十四日

十二月 二十三日

十二月 二十五日

一月 二十六日

三月 十日

三月 二十四日

五月 十日

六月 二十九日

十月 十二日

三月 五日

三月 十九日

三月 二十八日

五月 十日

五月 二十一日

六月 四日

十一月 七日



絹本着色豊臣秀吉像(慶長五年靈三及永哲ノ贊アリ)

滋賀縣

西 教 寺

文書典籍書蹟之部

紙本墨書萬葉集卷第十六(尼崎本)

國(京都帝國大學保管)

紙本墨書古今集注(藤原教長撰、仁治二年書寫ノ奥書アリ)二帖

同 上

紙本墨書平記 十卷

東京市

陽明文庫

親信記(天祿元年春夏、天延二年春夏、天延二年秋冬) 四卷

行親記(長曆元年)

定家記(自天喜元年至同五年)

知信記(自大治二年至同五年、天承二年夏) 二卷

時信記(大治五年同六年正月、天承元年) 二卷

附 範圍記新寫本(長元九年夏秋冬)

附 知信記新寫本(天承二年春、長承元年秋冬) 二卷

紙本墨書寛和二年六月九日内裏歌合

同

男爵 小林 一三

彩箋墨書和漢朗詠抄卷下殘卷 二卷

同

男爵 岩崎小彌太

紙本墨書寂蓮筆熊野懷紙(山川水鳥、旅宿埋火)

同

三井守之助 根津美術館

紙本墨書一山ニ寧墨蹟(弘安三年中夏)

同

同 館

紙本墨書明極楚俊墨蹟(元德二年仲春上滑五日)

同

同 館

紙本墨書宗峰妙超墨蹟(元亨壬戌)

同

同 館

紙本墨書中唐(朱熹章句、弘和二年榮山寺行宮ニ於テ隱士禪惠書寫ノ奥書アリ)

同

子爵 舟橋清賢

紙本墨書孝經述議(卷第一、第四、卷第一ノ見返ニ明應六年ノ記アリ) 二册

同

同 人

紙本墨書古林清茂墨蹟(泰定二年九月二日)

同

子爵 丹羽 長徳

紙本墨書擬絶道冲墨蹟(淳祐甲辰七月四日)

同

長尾 欽彌

紙本墨書古林清茂墨蹟(泰定三年秋孟)

同

松永安左衛門

紙本墨書大休正念墨蹟(九月十五日)

同

同 人

紫紙金字華嚴經卷第六十五(東大寺印ノ朱印アリ)

同

新湯縣 岡村 隆造

紺紙銀字華嚴經卷第一

同

同 人

絹本墨書竺仙梵偈墨蹟(明史齊哲開堂諸山疏) 二幅

同

京都市 龍光院

紙本墨書楚石梵琦墨蹟(至正廿三年三月二十二日)

同

大通院

紙本墨書明恵上人筆消息(上覺御房宛)

同

守屋孝藏

絹本墨書無準師範墨蹟(圖爾印可狀丁酉歲十月)

同

建仁寺

紙本墨書虎關師範墨蹟(進學解殘本) 四幅

同

東福寺

紙本墨書後醍醐天皇宸翰御消息(有頼郷事)

同

坂内義雄

紙本墨書慈圓僧正筆消息(十月五日權少將宛)

同

曼珠院

紙本墨書後宇多天皇宸翰御消息(五月十一日御法號)

同

仁和寺

紙本墨書後醍醐天皇宸翰御消息(去夜心閑云々)

同

同 寺

紙本墨書伏見天皇宸翰後醍醐御消息(卷第廿)

同

大坂府 譽田神社

紙本墨書楠木氏文書(十二月九日楠木正成自筆書狀以下十四通)

同

金剛寺

紙本墨書類聚歌合卷第七殘卷

同

八馬 兼介

紙子内親王家和歌合

同内親王家歌合(庚申夜)

同院歌合(五月五日)

同院歌合(治曆三年九月九日庚申)

紙本金字法華經(卷第二、第四、各卷首ニ紙伏見天皇宸翰、紙背ニ伏見天皇宸翰御消息アリ) 二卷

金銀箔散料紙墨書法華經法師功德品

刀 劍 之 部

太刀(銘秀近)

鳥取市

大雲院

太刀(銘秀近)

同

同 院

太刀(銘秀近)

同

同 院

太刀(銘恒光)

同

同 院

短刀(銘備州長船住長重、甲戌)

同

同 院

短刀(銘久國)

同

同 院

太刀(銘行光)

同

同 院

鋼(銘國吉)

同

同 院

太刀(銘包永)

同

同 院

太刀(銘一)

同

同 院

太刀(銘備前國長船住近景、建武二年五月 日)

同

同 院

刀(無銘傳志津)附打刀拵二口柄一點

同

同 院

刀(無銘傳長光)

同

同 院

太刀(銘國清)

同

同 院

太刀(銘備前國長船住左近將監長光造)

同

同 院

太刀(銘國安)

同

同 院

太刀(銘備州長船住景光)

同

同 院

太刀(銘包永)

同

同 院

薙刀直シ刀(銘來國次)

同

同 院

薙刀(無銘、傳貞宗)

同

同 院

太刀(銘助包)

同

同 院



# 昭和十七年度國寶御料歸屬及所有者變更等

文部省告示第九號 一月十九日  
國寶中左記甲號ハ昭和十六年九月二十二日乙號ハ同年十一月二十八日孰モ御料ニ歸屬セリ

品 目 所 有 者

甲 號  
紙本墨書藤原定家自筆申文(轉任所望事)  
紙本墨書九條良經消息(道家裝束之事)(九條兼實ノ加筆アリ)  
東京市 公爵 九條 道秀 同 人

乙 號  
紙本墨書延喜式 二十八卷  
紙本著色車爭圖(四曲屏、傳狩野山樂筆太刀(鋒長光))  
東京市 伯爵 伊東 治正 同 人

文部省告示第三十五號 二月四日  
昭和十六年十二月十五日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ  
品 目 所 有 者  
紙本墨畫寒山拾得圖 二幅 東京市 前山 宏平 新 所有者  
彩箋墨畫觀音賢經冊子 同 人 同 長尾 欽彌 同 人

文部省告示第三十六號 二月四日  
昭和十六年十二月十三日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ  
品 目 所 有 者  
木造傳藥師如來立像 滋賀縣 藥師地藏堂 滋賀縣 充滿 寺

文部省告示第三十七號 二月五日  
昭和十六年十二月十八日左記國寶ノ所有者猪熊信男ノ住所下記ノ通變更アリタリ  
品 目 所 有 者  
紙本墨書周書(卷第十一斷簡) 京都府京都市左京區一乘寺町 新 住 所  
紙本墨書肥前國風土記 同 同 香川縣大川郡白鳥本町  
紙本墨書令義解(神祇令第六、僧尼令第七、) (正平十七年五月十五日傳授ノ奥書アリ) 同 同  
紙本墨書朝野群載(卷第一) 同 同  
紙本墨書香字鈔(上卷) 同 同

木造千手觀音立像	京都市	西明寺
木造文殊菩薩騎獅像	同	清涼寺
木造帝釋天(傳普賢菩薩)騎象像	同	同
木造四天王立像 四軀	同	同
木造金剛力士立像 二軀	京都府	寶積寺
木造阿彌陀如來立像	同	大念寺
附木製 阿彌陀如來種子月輪牌(道覺及證空ノ署名アリ) 未敷蓮華(包紙添、仁治四年正月卅日蓮教トアリ)		
無量壽經(卷下奥ニ仁治四年二月一日圓空トアリ) 二卷		
親無量壽經		
阿彌陀經		
法華經壽量品		
觀經玄義分		
梵網經(奥ニ仁治四年二月一日參會善峯往生院書寫圓空トアリ)		
戒文(證空喜忍トアリ)		
受戒交名 二枚		
結緣署名等 百六枚		
佛像修理記 慶長二年五月十二日トアリ		
石造狛犬 一對	同	龍神社
木造(千手觀音立像) (所在近江堂)	鳥取縣	大日寺
木造不動明王立像	同	長樂寺
木造聖觀音立像(本堂安置)	鳥根縣	禪定寺
木造藥師如來坐像(所在古保利藥師堂)	廣島縣	八重町
木造阿彌陀如來及兩脇侍立像(釋迦堂安置)	同	安國寺
木造法燈國師坐像	同	同
附水晶五輪塔(小箱添)		
紙本墨書 梵字眞言並佛眼禪師偈文(建治元年十二月十八日覺心トアリ) 佛像修理記(寛文四年三月十五トアリ)	同	吉備津神社
木造狛犬 三軀	同	池田庄太郎
工 藝 之 部		
唐花鸞鷟八棱鏡	大阪市	兵庫縣
常福寺裏山經塚出土品(一、瓦製阿彌陀如來坐像、一、瓦製地藏菩薩坐像、一、瓦製五輪塔、一、瓦製六器六枚、一、經瓦殘片六枚)		





左記國寶ノ所有者及其ノ住所ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目	舊所有者	新所有者	變更年月日	住所變更
太刀(銘久國)	東京市 子爵 松平頼和	東京市 子爵 松平頼庸	昭和十五年七月十八日	子爵松平頼庸ハ二月五日東京市淀橋區西落合ニ其住所ヲ變セリ
太刀(銘良長、附打刀拵)	同 人	同 人	同 日	同
短刀(無銘傳正宗、附金無垢二重鑑)(理忠壽齋ノ銘アリ)	同 人	同 人	同 日	同

文部省告示第四百三十二號 四月二十四日

左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目	舊所有者	新所有者	變更年月日
太刀(銘吉房)	西條市 山崎 福馬	西條市 山崎 孝子	昭和十六年十一月六日
木造聖觀音坐像	滋賀縣 觀音堂	滋賀縣 眞光寺	昭和十七年二月二十七日
木造十一面觀音立像	滋賀縣 觀音堂	滋賀縣 蓮長寺	同
木造千手觀音立像	三重縣 觀音堂	三重縣 妙相寺	昭和十七年三月八日

文部省告示第四百五十四號 五月五日

左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品名	稱	構造形式	所在地	舊所有者	新所有者	變更年月日
藥師堂 (會津中央藥師堂)	榎行五間、梁間五間、單層、茅葺	福島縣河沼郡勝常寺境内	福島縣勝常寺	昭和十六年八月十九日		
藥師堂	榎行三間、梁間三間、單層、茅葺	群馬縣吾妻郡澤田村内	群馬縣藥師堂	昭和十七年二月十七日		

古美術保存

木造佛頭 滋賀縣 和藏堂 滋賀縣 善隆寺 昭和十六年十二月十三日

木造十一面觀音立像	同 同	同 同	同 同
木造十一面觀音立像(觀音堂安置)	新潟縣 觀音堂	新潟縣 寶傳寺	昭和十七年一月二十六日
文部省告示第四百五十七號 五月六日			
昭和十七年三月二十五日左記國寶所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ			
品目	舊所有者	新所有者	變更年月日
紙本墨書法華經 十九卷	清水市 觀音堂	清水市 鐵舟寺	

文部省告示第四百八十六號 五月二十二日

左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品目	舊所有者	新所有者	變更年月日
木造十一面觀音立像	鳥根縣 觀音堂	鳥根縣 淨音寺	大正十一年九月七日
色繪法螺貝香爐(野村仁清作)	高岡市 舊池 貞夫	大阪市 清水榮次郎	昭和十六年十一月二十九日
銅造菩薩立像	東京市 大塚 稔	長野縣 長福寺	昭和十七年三月十八日
太刀(銘兼永)	新潟市 風間 要吉	東京市 中島喜代一	同
太刀(銘爲清)	同 同	同 同	同

文部省告示第四百八十九號 五月二十五日

左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

名	稱	構造形式	所在地	舊所有者	新所有者	變更年月日
阿彌陀堂	榎行三間、梁間三間、單層屋根入、母屋造、茅葺	福島縣河沼郡堂島村	福島縣阿彌陀堂	福島縣八葉寺	昭和十六年八月四日	
阿彌陀堂	榎行三間、梁間三間、單層屋根實形造、棚葺	福島縣石城郡内郷村	福島縣阿彌陀堂	福島縣順成寺	昭和十七年一月十六日	
品目	舊所有者	新所有者	變更年月日			
木造阿彌陀如來及兩脇侍像	三驅	福島縣阿彌陀堂	福島縣順成寺	昭和十七年一月十六日		
木造(持國天立像)(寺傳廣目天像)	多聞天立像 一驅	同	同	同		
木造藥師如來及兩脇侍像	三驅	藥師堂	三重縣光善寺	昭和十七年三月十七日		
木造藥師如來坐像	滋賀縣	藥師堂	滋賀縣大田寺	昭和十七年三月三十一日		
木造十一面觀音立像	山口市	長谷觀音堂	山口市神福寺	昭和十七年三月三十一日		

1011

文部省告示第四百九十三號 五月二十八日  
國寶中左記ハ昭和十七年一月三十日御料ニ歸屬セリ

品 目 所 有 者

紙本墨畫山水圖  
紙本淡彩一休和尚像

東京市 岡崎 正也  
同 人

文部省告示第五百三十七號 七月十四日

昭和十七年三月二十日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通改稱アリタリ

品 目

新寺院名

絹本着色聖觀音像

鳥根縣飯石郡三刀屋町

普光寺

文部省告示第五百四十四號 七月二十二日  
左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目

變更ノ年月日

木造藥師如來及兩脇侍像

三重縣 藥師堂

三重縣 光善寺

木造十一面觀音立像

滋賀縣 觀音堂

滋賀縣 石道寺

木造(持國天立像 二軀)

同 堂

同 寺

木造釋迦如來立像(正面  
内部ニ文永五年二月四  
日、大佛師薩摩法橋與  
慶ノ銘アリ)

愛媛縣 釋迦堂

愛媛縣 寶藏寺

木造藥師如來坐像

福島縣 藥師堂

福島縣 中善寺

文部省告示第五百四十五號 七月二十二日  
左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

品 目

變更ノ年月日

銅造十一面觀音及脇侍  
(不動、地藏)  
明王菩薩立像(中尊ノ光  
背ニ文永十一年八月八  
日ノ銘アリ) 三軀

福島縣 觀音堂

弘安寺

法具類(木造天蓋二面、  
銅造幡頭三枚)

岩手縣 金色堂

岩手縣 金色院

銅造華鬘 六枚

同 堂

同 院

木造(經案 二 三基  
磐架)

同 堂

同 院

木造藥師如來坐像

同 堂

同 院

木造藥師如來坐像

同 堂

同 院

木造千手觀音及兩脇侍像

同 堂

同 院

木造聖觀音立像 滋賀縣 觀音堂 滋賀縣 眞光寺 昭和十七年三月二十七日

木造藥師如來坐像 同 藥師堂 同 西遊寺 昭和十七年三月三十一日

木造毘沙門天立像 同 同 同 同 同

木造大日如來坐像 同 大日堂 同 光信寺 同

名 稱 構造形式 所在地 舊所有者 新所有者 變更ノ年月日

金色堂本堂 桁行三間、梁間三 岩手縣 金色院 同 院

金色堂覆堂 桁行五間、梁間三 同 院 同 院

經藏(中尊 桁行三間、梁間三 同 院 同 院

寺經藏) 形造、單層、瓦葺 同 院 同 院

文部省告示第五百六十號 八月十四日

昭和十七年三月三十一日左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通改稱アリタリ

品 目 所在地 舊寺院名 新寺院名

木造虛空藏菩薩坐像 愛知縣中島郡大里村 虛空藏堂 龜翁寺

文部省告示第五百六十八號 八月二十七日

左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

名 稱 構造形式 所在地 舊所有者 新所有者 變更ノ年月日

觀音堂 桁行三間、梁間四 千葉縣印旛 千葉縣 寶珠院

木造藥師如來坐像 滋賀縣 藥師堂 滋賀縣 西德院

木造藥師如來立像 滋賀縣 藥師堂 滋賀縣 鷗足寺

乾漆十二神將立像 同 同 同 同 同

乾漆十二神將立像 二軀 同 同 同 同 同

木造千手觀音立像 滋賀縣 觀音堂 滋賀縣 地福庵

木造藥師如來坐像 滋賀縣 藥師堂 滋賀縣 眞廣寺

木造藥師如來坐像 茨城縣 藥師堂 茨城縣 西光寺

木造彌陀如來立像(像 內ニ藤原行光ノ願文及 東京市 和助一 廣島縣 金本 耕三 昭和十七年三月三十一日)

文部省告示第五百七十一號 九月七日

左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ

名稱	構造形式	所在地	舊所有者	新所有者	變更年月日
藥師堂 (田子藥師堂)	桁行三間、梁間三間、單層、屋根寶形造、茅葺	福島縣 常福院境内	福島縣 藥師堂	福島縣 常福院	昭和十七年 六月二十五日

木造藥師如來坐像	滋賀縣 藥師堂	滋賀縣 珀清寺	昭和三十七年三月三十一日
----------	---------	---------	--------------

木造藥師如來坐像	滋賀縣 藥師堂	滋賀縣 大岡寺	同日
----------	---------	---------	----

木造彌勒菩薩立像(足柄ニ藤原時朝ノ銘アリ)	茨城縣 彌勒堂	眞言宗 彌勒教會	同日
-----------------------	---------	----------	----

絹本着色恒野王圖(錢選之印ノ印アリ)	兵庫縣 男爵倉敷市 大原總一郎	昭和三十七年七月十一日
--------------------	-----------------	-------------

文部省告示第五百八十五號 九月二十九日	左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ	
---------------------	----------------------	--

名稱	構造形式	所在地	舊所有者	新所有者	變更年月日
藥師堂	桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、柿葺	高知縣 長岡郡西豐永村境内	高知縣 豐永樂寺	昭和三十七年十二月十五日	

大浦天主堂	會堂、屋根棧瓦葺、ゴシック式五側教長崎市南山手町	長崎市 早坂久之助	日本天主公教區 教長崎教會	昭和三十七年八月四日
-------	--------------------------	-----------	---------------	------------

品目	舊所有者	新所有者	變更年月日
----	------	------	-------

木造藥師如來坐像	高知縣 藥師堂	高知縣 豐樂寺	昭和三十七年十二月十五日
----------	---------	---------	--------------

木造阿彌陀如來坐像	同 同	同 同	同日
-----------	-----	-----	----

木造釋迦如來坐像(胎内ニ仁平元年ノ銘アリ)	同 同	同 同	同日
-----------------------	-----	-----	----

木造不動明王坐像	高知縣 不動堂	高知縣 宗安寺	昭和三十七年三月六日
----------	---------	---------	------------

木造(持國天立像 增長天立像 二軀)	同 同	同 同	同日
--------------------	-----	-----	----

木造十一面觀音立像	高知縣 觀音堂	高知縣 惠日寺	昭和三十七年三月三十一日
-----------	---------	---------	--------------

木造大日如來坐像(金剛界)	同 同	同 同	同日
---------------	-----	-----	----

木造大日如來坐像(胎藏界)	同 同	同 同	同日
---------------	-----	-----	----

古美術保存			
-------	--	--	--

木造毘沙門天立像	高知縣 觀音堂	高知縣 惠日寺	同日
----------	---------	---------	----

木造藥師如來坐像	同 同	同 同	同日
----------	-----	-----	----

木造釋迦如來坐像	同 同	同 同	同日
----------	-----	-----	----

木造菩薩形立像 五軀	同 同	同 同	同日
------------	-----	-----	----

木造(持國天立像 增長天立像 二軀)	同 同	同 同	同日
--------------------	-----	-----	----

木造(不動明王立像(光背ニ建歷三年二月三日造立ノ銘アリ) 毘沙門天立像)	高知縣 藥師堂	高知縣 金林寺	同日
--------------------------------------	---------	---------	----

木造十一面觀音立像(觀音堂安置)	滋賀縣 毘沙門堂	滋賀縣 長福寺	同日
------------------	----------	---------	----

木造聖觀音立像	滋賀縣 觀音堂	滋賀縣 來現寺	同日
---------	---------	---------	----

木造毘沙門天立像	東舞鶴市 毘沙門堂	東舞鶴市 興禪寺	昭和三十七年六月二十二日
----------	-----------	----------	--------------

木造地藏菩薩立像	京都市 地藏堂	京都市 慰稱寺	昭和三十七年七月二十四日
----------	---------	---------	--------------

太刀(銘正恒)	京都市 子爵有馬純尙	大垣市 羽根田兩吉	昭和三十七年八月十一日
---------	------------	-----------	-------------

文部省告示第六百三十三號 十月十三日	左記國寶ハ昭和八年十二月十一日其ノ名稱ヲ變更セリ	
--------------------	--------------------------	--

舊名稱	新名稱	所	有者
-----	-----	---	----

極原神宮拜殿	極原神宮御饌殿	奈良縣 極原神宮	
--------	---------	----------	--

文部省告示第六百三十五號 昭和十七年十二月三日	左記國寶ノ所有者ニ他下記ノ通變更アリタリ	
-------------------------	----------------------	--

品目	舊所有者	新所有者	變更年月日
----	------	------	-------

絹本着色白雲紅樹圖(池大雅筆)	新潟縣 中野重孝	東京府 關角芳雄	昭和三十七年八月三十一日
-----------------	----------	----------	--------------

附紙本墨書池大雅書狀	同 同	同 同	同日
------------	-----	-----	----

紙本淡彩高士探梅圖(周昉等六僧ノ贊アリ)	東京市 前山安平	同 同人	同日
----------------------	----------	------	----

文部省告示第六百三十六號 十二月五日	左記國寶ノ所有者子爵相馬惠胤ノ住所下記ノ通變更アリタリ	
--------------------	-----------------------------	--

品目	舊住所	新住所
----	-----	-----

太刀(銘山城國西陣住人理忠明壽(花押)慶長三年八月日他江不可渡之)	東京府 東京市牛込區 喜久井町	東京府 東京市中野區 廣町
-----------------------------------	-----------------	---------------

文部省告示第六百四十號 十二月十二日	左記國寶ノ所有者ニ付下記ノ通變更アリタリ	
--------------------	----------------------	--

古美術保存		
-------	--	--

105		
-----	--	--

文昭院(德川家宣)靈同  
人同三號地

丁子門	榑行一間、梁間一間、平唐門、銅瓦葺	木造寶塔	奧院寶塔	八角堂、重層、寶形造、銅瓦葺（下層今鐵板假葺）	同覆屋	同中門	榑行一間、梁間一間、向唐門、銅瓦葺（今鐵板假葺）	同玉垣	石造金剛橋、一周延長二百九十三尺五寸	同拜殿	榑行五間、梁間三間、單層、入母屋造、銅瓦葺	同御成門	榑行二間、梁間一間、單層門、切妻造、妻入、銅瓦葺	附銅燈籠	七月二十四日ノ刻銘アルモノ七、合德院尊前承應二年正月二十四日ノ刻銘アルモノ一	本殿	榑行三間、梁間三間、單層、入母屋造、銅瓦葺、正面向拜一造	相之間	榑行四間、梁間一間、單層、兩下造	拜殿	榑行七間、梁間三間、單層、入母屋造、銅瓦葺、正面向拜三造	中門及前廊	榑行五間、梁間一間、單層、兩下造、銅瓦葺、正面向拜三造	左右廊	各榑行七間、梁間二間、單層、入母屋造、銅瓦葺、中門左右二接續造	渡廊	榑行九間、梁間一間、單層、切妻造	內透塀	榑行延長六十七間、銅瓦葺	仕切門	榑行一間、梁間一間、向唐門、銅瓦葺	鐘樓	榑行三間、梁間二間、入母屋造、桷腰附、銅瓦葺	附銅鐘銘アリ	文昭廟寶鐘正德三年九月五日ノ刻銘アリ	井戸屋形	榑行一間、梁間一間、單層、切妻造、銅瓦葺	水盤合	榑行一間、梁間一間、單層、入母屋造、前後軒、梁破風附、銅瓦葺	勒額門	四脚平唐門、前後軒、梁破風附、銅瓦葺	外透塀	延長二十三間、銅瓦葺	二天門	銅瓦葺、切妻造、前後軒、梁破風附、入脚門	奧院寶塔	銅寶塔、石櫓附	同中門	銅寶塔、石櫓附	同波殿塀	榑行一周延長四十二間、銅瓦葺	同拜殿	榑行五間、梁間二間、單層、入母屋造、銅瓦葺、正面向拜一間
-----	-------------------	------	------	-------------------------	-----	-----	--------------------------	-----	--------------------	-----	-----------------------	------	--------------------------	------	--	----	------------------------------	-----	------------------	----	------------------------------	-------	-----------------------------	-----	---------------------------------	----	------------------	-----	--------------	-----	-------------------	----	------------------------	--------	--------------------	------	----------------------	-----	--------------------------------	-----	--------------------	-----	------------	-----	----------------------	------	---------	-----	---------	------	----------------	-----	------------------------------



廟川有章院（德  
家繼）靈

古美術保存

外透扉	勒額門	水盤合	井戸屋形	鐘樓	仕切門	內透扉	渡廊	左右廊	中門及前	本殿	拜殿	相之間	透扉	唐門及前	波板門	靜寬院寶塔	昭徳院寶塔	透扉	唐門及前	拜殿	波板門	中寶門	寶塔	同唐門及前	同透扉	附銅燈籠
延長百七間、銅瓦葺(今鐵板假葺)	前後軒唐破風附、切妻造、前後唐破風附、銅瓦葺	桁行一間、梁間一間、單層、切妻造、	造、銅瓦葺	腰附、銅瓦葺	桁行三間、梁間二間、入母屋造、袴	延長七十九間、銅瓦葺(今鐵板及棧	銅瓦葺	各桁行七間、梁間二間、單層、入母	下造、銅瓦葺	造、銅瓦葺	相之間、銅瓦葺	桁行七間、梁間一間、單層、切妻造、	延長二十間、銅瓦葺	下造、銅瓦葺	造、銅瓦葺	桁行三間、梁間二間、單層、切妻造、	石寶塔、石櫓附	石寶塔、石櫓附	下造、銅瓦葺	造、銅瓦葺	波板門	中寶門	寶塔	延長四十六間、銅瓦葺	延長四十六間、銅瓦葺	

廟川常  
綱吉院  
(靈)(德)

 $\wedge$ 

同下谷區上  
野櫻木町九  
番地

	二天門	八脚門、切妻造、銅瓦葺
	奥院寶塔	一戶石寶塔、石構附銅瓦葺
	同波板塀	延長四十五間、銅瓦葺(今鐵板假葺)
	同拜殿	桁行五間、梁間二間、單層、入母屋造、銅瓦葺、正面向拜一間、單層、
	同唐門及前庭	下造、銅瓦葺、正面向唐門、單層、
	同透塀燈籠	延長四十間、銅瓦葺(今鐵板假葺)
	附銅燈籠	延長十四間、銅瓦葺(今鐵板假葺)
アルモノ六	院殿 四月晦日 美賀 曆六月十二日刻銘	年十二月二十七日刻銘アルモノ六、享徳元年六月十二日刻銘

寶塔	石寶塔	拜殿	波板殿	唐門及前廊	透窰	附銅燈籠
一戶	一戶	造行	造行	造行	延長	六月
平唐門	平唐門	瓦五間	瓦五間	瓦五間	六基	二日
石欄	石欄	梁間	梁間	梁間	(年)	二日
銅瓦葺	銅瓦葺	二間	二間	二間	惲信院	惲信院
單層	單層	入母屋	入母屋	入母屋	殿敷	殿敷
					鐵板假葺	鐵板假葺
					貞曆六年	貞曆六年

本殿	相之間	拜殿	中門及前	左右廊	渡廊	透塀	仕切門	鐘樓	附銅鐘	水盤舍	勅額門	奥院寶塔	同唐門
造行五間、梁間三間、單層、入母屋	造行四間、梁間一間、單層、南下造	造行七間、梁間三間、單層、入母屋	造行七間、梁間一間、單層、兩廡	門造行七間、梁間二間、單層、入母屋	造行長十四間、梁間一間、單層	東端唐破風二間、銅瓦葺、今鐵板假葺	延長八間、梁間二間、銅瓦葺、今鐵板假葺	行三平唐門、梁間二間、入母屋造、桧	腰附、銅瓦葺	造行一間、梁間一間、單層、切妻造	造行四間、梁間一間、切妻造、前後軒唐破風附、左右袖、各桁	銅製寶塔、石檣附	銅製一戶平唐門

石寶塔、石欄附

[illegible][illegible]

目  
所  
有  
者



名稱	所有者	所在地	名稱	構造	形式
...	...	...	...	...	...

東照宮社殿

銅燈籠	附棟札	拜殿	透塀	唐門	本殿
ノ刻銘アリ	(日)寛永十三年二月十五日 年國祚十八間 和上棟ノ記アリ	前役向母屋造間瓦葺	脣行延長六丈二間半	唐門一入向拜母屋三梁一間、向	桁行五間、梁間五間、銅瓦葺、單

國寶保存法第十四條ニ依リ國寶維持修理ニ對シ補助金ヲ交付セルモノ左ノ如シ

修理費豫算額	補助額
100	100
200	200
300	300
400	400
500	500
600	600
700	700
800	800
900	900
1000	1000
1100	1100
1200	1200
1300	1300
1400	1400
1500	1500
1600	1600
1700	1700
1800	1800
1900	1900
2000	2000
2100	2100
2200	2200
2300	2300
2400	2400
2500	2500
2600	2600
2700	2700
2800	2800
2900	2900
3000	3000
3100	3100
3200	3200
3300	3300
3400	3400
3500	3500
3600	3600
3700	3700
3800	3800
3900	3900
4000	4000
4100	4100
4200	4200
4300	4300
4400	4400
4500	4500
4600	4600
4700	4700
4800	4800
4900	4900
5000	5000
5100	5100
5200	5200
5300	5300
5400	5400
5500	5500
5600	5600
5700	5700
5800	5800
5900	5900
6000	6000
6100	6100
6200	6200
6300	6300
6400	6400
6500	6500
6600	6600
6700	6700
6800	6800
6900	6900
7000	7000
7100	7100
7200	7200
7300	7300
7400	7400
7500	7500
7600	7600
7700	7700
7800	7800
7900	7900
8000	8000
8100	8100
8200	8200
8300	8300
8400	8400
8500	8500
8600	8600
8700	8700
8800	8800
8900	8900
9000	9000
9100	9100
9200	9200
9300	9300
9400	9400
9500	9500
9600	9600
9700	9700
9800	9800
9900	9900
10000	10000

奈良  
昭和十七年度法隆寺國寶保存工  
事費(舍利殿、繪殿、傳法堂、宗  
事寺四脚門、五重塔、聖靈院、伽  
藍保存施設、金堂壁畫保存)

一四五、〇〇〇、〇〇〇 一三五、〇〇〇、〇〇〇

京都	岩船寺塔婆	四三、九九二、二七
同	宇治上神社々殿	二一、九五四、〇〇

三六、五〇〇、〇〇〇  
一〇、〇〇〇、〇〇〇

奈良 吉水神社書院

一七、三〇〇、〇〇〇

滋賀	小田神社樓門	二七、二二九、〇〇
同	圓福寺本堂	三三八六八〇〇

二、五〇〇〇

同	鏡神社本殿	一九、七五五〇〇
司	稻荷神社古宮神社本殿	三、三六六、〇〇〇

兵庫 一乗寺〔塔婆、妙見堂、  
隣天堂、覆法堂〕

五一、四八〇、〇〇〇

五、五〇〇、〇〇

香川 國分寺本堂 六七、六六五、〇〇

一一、五〇〇〇〇

和歌山 八幡神社 本殿 境内社若宮神社本殿 一五、七四四、〇〇

五、○○○○

山形	立石寺中堂	八二、八八一、〇〇
茨城	東照宮社殿	一七、二五三、〇〇

一八、七二、〇〇  
五、〇〇、〇〇

岐阜	日吉神社塔婆	三二、二三三、〇〇
六二五、五七三、六六		

五、〇〇、〇〇、〇〇

寶物類之部

府縣所有者 品目

修理費豫算額

補助額

認定ス

栃木 輪王寺

紙本墨書法花玄義釋經十卷

一、七三五、〇〇

八五〇、〇〇

紙本淡彩廬居士圖(岩佐勝以筆)

目

所

有者

福井 明通寺

木造降三世明王立像 一軀

六、七五六、七〇

四、〇〇〇、〇〇

紙本淡彩(鳥嶺晴嵐圖)(宋旭筆)

埼玉縣

永島 莊次

同 清雲寺

木造毘沙門天、吉祥天、善財童子立像 三軀

一、五四七、一〇

八〇〇、〇〇

紙本著色春秋遊樂圖(菱川師平筆、六曲屏風)

東京市

陽明 文庫

愛知 寶生院

紙本墨書古書籍 四種ノ内

一、四八九、〇〇

七〇〇、〇〇

紙本著色十六羅漢圖 十六幅

同

武内 金平

同 長興寺

紙本著色織田信長像 一幅

二九八、二五

二五〇、〇〇

紙本著色慈威和尚像(延文元年惠澄ノ贊アリ)

同

同 調 圓助

滋賀 延曆寺

木造持國天立像 一軀

二、九九三、五五

一、八〇〇、〇〇

紙本著色前田菊姫像(天正十二年眞智ノ贊アリ)

同

同 瑞 泉寺

同 滋賀院

木造吉祥天立像 一軀

一七二、八〇

一〇〇、〇〇

紙本著色西山遊猿圖(森祖仙筆) 二幅

東京市

守屋 孝藏

京都 妙法院

木造慈惠大師坐像 一軀

二四、一四七、六五

一四、〇〇〇、〇〇

紙本著色天保施米圖(冷泉爲恭筆)

同

池田庄太郎

同 曼珠院

木造觀音立像 一軀

七三六、七五

六〇〇、〇〇

彫刻之部

同

橋本 喜造

同 南禪寺

木造龜山天皇御坐像 一軀

三四九、七五

二〇〇、〇〇

銅造不動明王像(下半身缺)

同

善光寺

同 高山寺

木造善妙神立像 一軀

七八六、二三

六〇〇、〇〇

文書典籍書蹟之部

同

長谷川巳之吉

同 報恩院

紙本著色過去現在因果經一卷

九〇六、〇〇

七二〇、〇〇

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(山家)

同

小泉 重憲

岡山 寶光寺

絹本著色中不動三十六童子三幅

三、〇〇六、五〇

二、五〇〇、〇〇

紙本墨書古今集卷第九斷簡(昭和切)(あつまへ)

同

同 高坂 元辰

熊本 菊池神社

紙本墨書菊池社文書(四十一通) 四卷

一、〇五五、一〇

五〇〇、〇〇

紙本墨書阿寺文書(百二十二通) 二十卷

同

同 鑊 阿寺

計

四六、五〇六、一八 二八、〇二〇、〇〇

昭和十七年度重要美術品等認定

文部省告示第四百九十九號 五月三十日

昭和八年法律第四十三號(重要美術品等ノ保存ニ關スル件)第二條ニ依リ左ノ物件ヲ

古美術保存

紙本墨書出曜經卷第五(天平十二年五月一日光明皇后御願經)	東京市	服部 玄三	紙本墨書千載集卷第十六斷簡(日野切)(中院の右大臣)	東京市	鎮目 泰甫
彩箋墨書寸松庵色紙(とものり)	同	住友 寛一	紙本墨書史記源流	同	同
紙本墨書大貳三位集斷簡(端白切)(右兵衛督)	同	上	(紙本墨書史記事實)	同	子爵 舟橋 清賢
紙本墨書貫之集下斷簡(石山切)(わすられす)(料紙破繼アリ)	同	上	紙本墨書三略講義(内一部清原宣賢筆)	同	同
紙本墨書貫之集下斷簡(石山切)(和泉國に)(破繼料紙一枚ヲ添フ)	同	上	紙本墨書易學啓蒙通釋(上下、上卷清原宣賢筆) 二册	同	同
色紙墨書貫之集下斷簡(石山切)(おなし中將の)	同	上	紙本墨書易學啓蒙通釋口義(上ノ二、清原宣賢筆)	同	同
紙本墨書伊勢集斷簡(石山切)(いへなむ)	同	上	紙本墨書易學啓蒙抄(上下、清原宣賢筆) 二册	同	同
紙本墨書古今集卷第二斷簡(昭利切)(ふるさと)	同	上	紙本墨書命期秘傳(清原宣賢筆)	同	同
紙本墨書古今集卷第五斷簡(昭利切)(そせいほうし)	同	上	紙本墨書司馬法(清原宣賢筆)	同	同
紙本墨書古今集卷第三斷簡(昭利切)(首ニ古今和歌集卷第三トアリ)	同	上	紙本墨書年中行事(清原宣賢筆、加點ノ奥書アリ)	同	同
紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(戊辰切)(早春)	同	上	紙本墨書宣賢卿字書(清原宣賢筆)	同	同
紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(戊辰切)(鶯)	同	上	紙本墨書毛詩(清家證本)(宣賢本ノ寫本) 九册	同	同
紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(戊辰切)(八月十五夜)	同	上	紙本墨書論語(清家證本)清原技賢筆、第一册ニ天正四年清原枝賢、第二册ニ天文八年清原業賢ノ奥書アリ) 二册	同	同
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(戊辰切)(竹)	同	上	紙本墨書孝經抄(清原業賢筆、大永八年八月十日書寫ノ奥書アリ)	同	同
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(戊辰切)(山水)	同	上	紙本墨書孝子傳(上下、清原枝賢筆、天正八年書寫ノ奥書アリ)	同	同
色紙墨書綴色紙(あすか、は一首、あめにより上句)(墨付三枚、無地紙六枚)	同	三井守之助	紙本墨書三略抄(第一册 清原國賢筆、各册ニ書寫ノ奥書アリ) 六册	同	同
紺紙金字藤原道長金峯山埋經殘卷 四卷	同	正木 千冬	版本大般若經卷第二百十八(奥ニ弘安二年三月廿五日寂尊ノ奉納記アリ)	同	同
彌勒成佛經(寛弘四年ノ奥書アリ)	同	同	紙本墨書源氏物語(夕霧)(河内本、大型本) 二卷	同	同
法華經分別功德品	同	同	紙本墨書冷泉爲家古今集開書	同	同
無量義經十功德品	同	同	紙本墨書堀河院百首(奥ニ嘉吉三年修覆ノ記アリ)	同	同
紙本墨書秘密曼荼羅大阿闍梨耶附法傳(大治二年三月十八日書寫ノ奥書アリ、紙背ニ嘉保二年具注曆アリ)	同	同	紙本墨書伊勢物語(泉州本)	同	同
紺紙金銀交書四分律隨機羯磨卷上(中尊寺經)(首ニ明了論中ニ總別住界ノ圖アリ)	同	同	紙本墨書古今集卷上(清輔本)	同	同
紺紙金銀交書俱舍論(卷第二十三、第二十四、第三十)(中尊寺經)三卷	同	同	紙本墨書大寶積經卷第一百廿(天平十二年五月一日光明皇后御願經)(東大寺印)ノ朱印アリ)	同	同
紙本墨書伏見天皇宸翰五十首御和歌(むら雨の)	同	梅澤彦太郎	紙本墨書得無垢女經(天平十二年五月一日光明皇后御願經)(東大寺印)ノ朱印アリ)	同	同
紙本墨書中納言顯基事	同	上	紙本墨書四分律藏卷第四十(天平十二年五月一日光明皇后御願經)	同	同
紙本墨書新井白石日記(退公日録七册、委蛇日曆九册)(自元禄六年至享保六年) 十六册	同	清水 義忠	紙本墨書四分律藏初分卷第廿九	同	同
紙本墨書沙石集 五册	同	同	紺紙銀字華嚴經卷第五十殘卷(二月堂燒經)	同	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙(しられしな)	同	吉川 泰雄	紙本墨書玄證筆眞言並功能抄錄(元暦二年卯月下旬抄出ノ奥書アリ)	同	同
紙本墨書永延二年七月廿七日寶實朝臣家歌合(定家ノ加筆アリ)	同	杉田 芳郎	紙本墨書三條西實隆筆觀無量壽經(文龜二年暮秋後土御門天皇聖忌ノタメ書寫ノ奥書アリ)	同	同
	同	鎮目 泰甫		同	同

宋版金剛經(建治二年六月一日道英ノ奉納記アリ)

紙本墨書顯季集

彩箋墨書寸松庵色紙(秋のつき)

紙本墨書後撰集卷第七斷簡(白河切)(あかゝらは)

紙本墨書  
本院仲從集  
四條中納言集

紙本墨書雲峰妙高墨蹟

紙本墨書老母經(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集斷簡(廣澤切)(うとくこそ)

色紙墨書萬葉集卷第四斷簡(海尾切)(といふことは)

紙本墨書萬葉集卷第十斷簡(天治本)(此暮秋風吹奴)(手鑑ノ内)

紙本墨書大般若經卷第二百五十七(池上内親王御願經)

紙本墨書長阿含經卷第十一殘卷(善光ノ朱印アリ)

紙本墨書阿毗達磨順正理論卷第五十殘卷(中臣寺印)ヲ

紙本墨書大般若經卷第二百四十

紙本墨書伊勢物語(嘉祿二年七月廿九日ノ本奥書アリ)

繪料紙墨書後西天皇宸翰御懷紙(郭公)

彩箋墨書三寶繪斷簡(東大寺切)(うすくやうすへき)

紙本墨書古今集卷第二斷簡(高野切)(雲林院のみこの)

續箋墨書後陽成天皇宸翰(花鳥風月)

紙本墨書後陽成天皇宸翰古歌御懷紙(下繪富士山圖)

紙本墨書後花園天皇宸翰古歌御色紙(ふけにけり)

紙本墨書靈元天皇宸翰古歌御懷紙(霖雨の)

紙本墨書後陽成天皇宸翰心經(延寶辛酉林鐘廿六日後西天皇ノ御跋アリ)

紙本墨書靈元天皇宸翰御詩懷紙(夏日節事)

紙本墨書櫻町天皇宸翰靈元天皇御十三回忌心經御奥書

(延享元年八月六日)

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(詠池寒蘆和歌)

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(まもります)

紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御小色紙(人とはぬ)

紙本墨書大般若經卷第二百三十二(天平十三年七月十八日書寫ノ奥書アリ)

紙本墨書大般若經卷第四百八十四(貞觀十三年三月三日阿倍小水磨願經)

紙本墨書華嚴經卷第四十七(神護寺ノ朱印アリ)

東京市

五島 慶太

遠藤 武

淺野 長武

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

紙本墨書聖善住意天子所問經卷中(「神護寺」ノ朱印アリ)

紙本墨書上覺筆文覺上人消息案(二月十九日)

紙本墨書尊親王御筆傳法次第(曆應元年十二月廿九日ノ御奥書アリ)

紙本墨書別山祖智墨蹟(唐詩三首)

紙本墨書清拙正澄墨蹟(松原禪師遺像贊)

紙本墨書夢窓疎石墨蹟(七言、貞和五年歲餘前二日)

紙本墨書夢窓疎石墨蹟(林和靖梅詩、續ニ延文二年六月妙施ノ墨書アリ)

紙本墨書鐵舟德濟墨蹟(七言)(道箇佛)

紙本墨書鐵舟德濟墨蹟(七言)(行脚)

紙本墨書相山良永墨蹟(王維詩)

紙本墨書了庵悟墨蹟(申戊歸朝奏、室津明神詩)

紙本墨書橫川景三墨蹟(岳英和尚送別詩)

紙本墨書雪江宗深墨蹟(玉衡字說、文明十一白開菊月吉日)

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(詠蘇雪利哥)

紙本墨書後上御門天皇宸翰歌合切(右花園左大臣)(歌仙繪アリ)

紙本墨書後伏見天皇宸翰御消息(兩御所云々)

紙本墨書留平珍款狀案(延喜九年六月廿七日)

紙本墨書寬平御遺誠(寛元三年春宮權大進光國書寫校合ノ奥書アリ)

紙本墨書大治五年上醍醐藥師堂吉祥天像供養願文案(保延六年三善行康幸西勘文ヲ添フ)

紙本墨書造伊勢二所太神宮寶基本記(紙背ニ德治二年十二月十九日ノ消息アリ)

紙本墨書太神宮法樂寺所司等立申文書紛失記(康永三年八月日)(度會郡判及豐受官判アリ)

紙本墨書不動護摩次第(紙背文書ノ中ニ二月十六日中御門經任奉院宜アリ)

紙本墨書藤原成範家集斷簡(花以下十首)(首ニ畫像アリ)

紙本墨書萬葉集卷第十七斷簡(元曆校本)(つくへくおもほゆるかも)

彩箋墨書古今集卷第二十斷簡(かみかきの)(古筆手鑑ノ内)

紙本墨書萬葉集註釋(自卷第二至卷第十)(卷第二、第六ニ貞和三年校合ノ奥書アリ) 九册

紙本墨書後西天皇宸翰古歌御色紙(雪ふれば)

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詠草(野春雨、櫻柳交枝、御名アリ)

京都市

守屋 孝藏

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上



紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙(ことゝはむ)	京都市	阿部清太郎	刀(銘長曾禰興里入道唐敬)	東京市	山田復之助
紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙(命あらば)	同	竹田 儀一	刀(無銘傳義景、大久保四郎左衛門尉所持ノ銘アリ)	同	高木 陸郎
紙本墨書後西天皇宸翰御消息(霜月廿六日御花押、毗門宛)	同	上	刀(金象嵌銘元重、本阿彌(花押))	同	松平 頼庸
紙本墨書最勝王經陀羅尼(明恵上人筆、「方便智院」ノ朱印アリ)	同	上	刀(銘於南紀重國造之)	同	栗原彦三郎
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(閑庭松、御花押アリ)	同	龜村治郎兵衛	太刀(銘來國俊)	同	根津美術館
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(詠風光日々新和歌)	同	高尾 良一	短刀(銘廣光)	同	同
金泥繪料紙墨書後奈良天皇宸翰御歌卷	同	池田庄太郎	短刀(銘廣光)	同	同
紙本墨書大般若經卷第一百一十一殘卷(和銅經)	同	上	刀(銘越中守正俊)	同	同
紙本墨書大般若經卷第卅	同	上	刀(無銘傳兼長)	同	同
紺紙金字涅槃經本有今无傷論(神護寺經)	同	上	刀(折返銘)行平)	同	同
紺紙金銀交書廣弘明集卷第十六(中尊寺經)	同	上	刀(銘津田越前守助廣、延寶七年八月日)	男爵	松谷豐次郎
紙本墨書十七條憲法(嘉禎二年九月三日書寫ノ奥書アリ)	同	上	太刀(銘備前國景安)	同	鈴木昇次郎
紙本墨書古今集卷第二斷簡(昭和切)(やよひにうくひすの)	同	岩田宗次郎	刀(銘津田越前守助廣、延寶元年十一月日)	同	松金 由藏
紙本墨書古今集卷第四斷簡(昭和切)(いつはとは)	同	上	刀(銘津田越前守助廣、延寶五年八月日)	同	金子堅次郎
紙本墨書古今集卷第四斷簡(昭和切)(みなもととのむねゆき)	同	上	刀(無銘傳光忠)	同	吉川 元光
紙本墨書古今集卷第四斷簡(昭和切)(あきの野々)	同	上	刀(來國光磨上ト銘アリ)	同	齋藤茂一郎
紙本墨書古今集卷第四斷簡(昭和切)(あきの野々)	同	上	太刀(銘眞利)	同	同
紺紙金字大般若經(卷第廿一、第九十七、第二百廿九、第四百) 四卷	池田市	武田憲治郎	刀(無銘延壽)	同	同
彩箋墨書三寶繪斷簡(東大寺切)(天も諸のたみも)(古筆手鑑ノ内)	同	上	刀(無銘傳正宗)(名物石田切込正宗)	子爵	松平 康泰
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(戊辰切)(文詞、付遺文)	大阪府	田中 太介	刀(銘國廣)	同	根津藤太郎
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(戊辰切)(慶賀)	西宮市	松下幸之助	刀(銘出羽大掾藤原國路、大泉藩士□□允文所持ノ銘アリ)	同	同
紙本墨書藤原康季筆懷紙(詠花有歎色利哥)	同	阿部市太郎	刀(銘長曾禰興里入道唐敬)	同	子爵
彩箋墨書貫之集下斷簡(石山切)(いとまたき)	芦屋市	山田 嘉辰	太刀(銘光忠)	同	大久保寛一
紙本墨書後撰集卷第四斷簡(白河切)(五月なかあめのころ)	同	草川 求馬	刀(無銘傳弘行)	同	篠原三千郎
金泥繪料紙墨書後陽成天皇宸翰古歌御色紙(むかし思ふ)	兵庫縣	宮垣 義隆	刀(無銘傳元重)	同	増田 次郎
金銀泥繪料紙墨書後陽成天皇宸翰古歌御色紙(たれか又)	同	上	太刀(銘國行)	同	近藤 周平
紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御色紙(磯上布留の)	同	上	刀(無銘傳國時)	同	同
紙本墨書後西天皇宸翰古歌御色紙(こゝに來て)	同	上	太刀(銘康次)	同	山内 豊景
紙本墨書豐臣秀吉白筆消息(十二月廿七日はちひこゑ宛)	同	上	太刀(銘康光)	同	同
刀 劍 之 部			太刀(銘廣光)	同	同
太刀(銘波平家安)	山形縣	太田 俊賢	短刀(銘國光)	同	伯爵
太刀(銘成宗)	土浦市	石川 清晴	短刀(銘備州長船住景政、嘉曆四年二月日)	同	同
太刀(銘光忠)	東京市	山田復之助	短刀(銘久國)	同	侯爵
			太刀(銘國安)	同	同
			短刀(銘國吉)	同	同



品名	所在地	所有者	備考
漆塗日ノ丸盆(二月堂練行衆盤拾六枚ノ内永仁四年十月一日漆工連)ノ朱漆銘アリ	同	同	上
漆塗菜桶(德治二年七月日ノ朱漆銘アリ)	同	同	上
銅製雙瑞瑞花八稜鏡	同	同	上
銅製佛餉鉢(大山寺御佛器文永十一年正月廿八日ノ銘アリ)	同	同	上
銅製湯瓶	同	同	上
銅造男神立像	同	同	上
蒔繪野邊雀圖手宮	同	同	上
蒔繪野邊孔雀圖黑棚	同	同	上
磁製赤繪人物魚藻唐草文鉢(大明年製)ノ銘アリ	同	同	上
銅製擬寶珠形經筒、附經殘塊并ニ經軸殘片九本(兵庫縣美方郡濱坂町如意寺境内出土)	同	同	上
銅製竹虎雙雀方鏡	同	同	上
流銅馬木像	同	同	上
朱漆枋(金銅口金具付、「奉施人春日大明神大般若經枋也」ノ黑漆銘アリ) 三條	同	同	上
黑漆山金作太刀	同	同	上
黑漆山金作太刀	同	同	上
黑漆皮包太刀	同	同	上
梅花皮柄黑漆太刀	同	同	上
黑漆山金作太刀	同	同	上
梅花皮包腰刀(刀身ニ備州長船□□ノ銘アリ)	同	同	上
沈香柄木地漆鞘腰刀	同	同	上
金銅五銖銘(備前國新田安養寺了圓之建武五年三月日)ノ銘アリ	同	同	上
銅製朝鮮鐘	同	同	上
袈裟襪文銅鐸	同	同	上
石幢(「吉永享十二稔庚申」ノ刻銘アリ)	同	同	上
石造燈籠	同	同	上
石造燈籠	同	同	上
石造燈籠(火袋ニ四天王ヲ刻ス)	同	同	上

紙本四州眞景圖(著色三、墨畫一、渡邊華山筆)(墨畫卷ニ「文政八乙酉歲」トアリ) 四卷

紙本着色藤堂高虎像(元和七年七月中澁ノ贊アリ)

版畫著色不動明王像(至德二年周澤自贊)

紙本探幽縮圖 二卷

絹本着色聖德太子及二童子像

絹本着色十王像(陸信忠筆) 十幅

絹本着色十六羅漢像 十六幅

彫刻之部

木造地藏菩薩立像

木造獅子頭(貞和三年九月廿五日造立了ノ銘アリ)

木造能面小飛出(傳赤鶴作)

木造能面小龍見(傳赤鶴作)

木造能面大天神

木造能面平太

木造能面姥

木造能面山姥

銅造菩薩半跏像

木造十一面觀音立像 二

木造地藏菩薩立像

木造不動明王立像

木造四天王立像 三

木造觀音菩薩立像 二軀

木造能面翁(白色)(裏ニ「正中ニ乙丑作之」佐衛門尉「大和久氏」ノ刻銘アリ)

木造能面三番叟

木造能面瘦女

銅造觀音菩薩立像

石造地藏菩薩坐像(光背裏面ニ元德二年四月廿日造立ノ銘アリ)

木造獅子頭(内一面ニ正安三年九月中旬彫刻ノ銘アリ)

木造日光菩薩立像

木造十一面觀音立像 三

木造千手觀音立像

木造吉祥天立像 四

木造四天王立像

豊橋市 田中 平六

上野市 上行 寺

大阪市 田万 清臣

同 相馬伊右衛門

神戸市 橋本 喜造

尾道市 淨土 寺

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

文書典籍書蹟之部

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(春日詠松樹契久和歌、御名アリ)

紙本墨書根本説一切有部苾芻尼毗奈耶卷第二(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紺紙金字古來世時經(神護寺經)

紙本墨書長治元年五月廿一日因幡權守重隆家歌合殘卷

紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息(極月廿有五、右大臣宛)

紙本墨書後陽成天皇宸翰御自畫贊梅圖(たつねくる)

紙本墨書豐臣秀吉自筆番衆歷名(二月十一日)

紙本墨書觀无量壽經卷上(天平六年聖武天皇勅願經)

紙本墨書後拾遺集卷第十斷簡(中院切)(おくれしと)

紙本墨書後撰集卷第十斷簡(白河切)(人のもとに)

紙本墨書元永元年十月十一日内大臣家歌合斷簡

紙本墨書和漢朗詠抄(金澤文庫本) 二卷

紙本墨書延喜天曆御記抄

紙本墨書古今集卷第八斷簡(昭和切)(かきくらし)

彩綾墨書貫之集下斷簡(石山切)(あはれてふ)(料紙ニ切繼アリ)

紙本墨書瑜伽師地論卷第六十一(天平十六年三月十五日ノ奥書アリ)

紙本墨書孔雀經音義(久安四年十月十三日書寫ノ奥書アリ) 三帖

紙本墨書秘密曼荼羅大阿闍梨耶付法傳(康平三年七月廿一日書寫ノ奥書アリ)

紙本墨書大悉曇章(仁安三年三月廿二日書寫ノ奥書アリ)

紙本墨書古林清茂墨蹟(至治元年三月廿日)

紙本墨書後陽成天皇宸翰大字「龍虎」

紙本墨書大燈國師消息(三月廿二日)

紙本墨書即休契了墨蹟

紙本墨書中阿含經卷第卅五(天平五年六月四日ノ奥書アリ)

紙本墨書佛本行集經卷第卅三、第卅四、第卅九(天平十二年五月一日光明皇后御願經) 三卷

紙本墨書中陰經卷下(天正十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書探華達王上佛授決妙華經殘卷(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書十福律卷第五十六(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

弘前市

青森縣

秋田市

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

彌富破摩雄

工藤 文清

小泉 重憲

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上





紙本墨書久我通具筆懷紙(詠二首和哥)	同	上	岡田太郎
紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(詠池岸有松鶴和哥)(延寶五年十月廿四日御會始)	同	坂内義雄	岡田太郎
紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(風光日々新)	同	同	山田安邦
紙本墨書後水尾天皇宸翰大字「敬」、附後水尾天皇御用筆「二管(箱ニ木下順庵ノ識語アリ)」	同	同	同
紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集斷簡(八首)	同	岩井武俊	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御懷紙(何故に)	同	服部仙之助	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(隱戀)	同	同	同
紙本墨書明正天皇宸翰假名御消息(かうきよく宛)	同	同	同
紙本墨書光格天皇宸翰御消息(春曙)	同	同	同
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(戊辰切)(行旅)	同	山本源兵衛	同
紙本墨書古今集卷第四斷簡(昭和切)二葉(藤原基朝臣)	同	同	同
紙本墨書後土御門天皇宸翰著到御短冊 十一枚	同	田中忠三郎	同
附大炊御門信量筆 十九枚			
甘露寺親長筆 十九枚			
中院通秀筆 十五枚			
姉小路基綱筆 十七枚			
冷泉爲廣筆 十一枚			
海住山高清筆 十九枚			
四辻秀經筆 十八枚			
紙本墨書著到御懷紙(四日 山家鳥)(中ニ後土御門天皇宸翰三首アリ)	同	同	同
紙本墨書阿不機乃山陵記(方便智院本)	同	同	同
紙本墨書元秘抄(東坊城和長筆、文明十九年五月日書寫ノ奥書アリ、第一卷紙背ニ文明十七年假字曆、同十八年具注曆、第二卷紙背ニ文明十七年假字曆及周興詩稿アリ)二卷	同	同	同
紙本墨書康和四年七月廿一日尊勝寺供養記(葉室顯隆記)	同	同	同
紙本墨書天仁元年大嘗會記(江記)	同	同	同
紙本墨書久安四年宸筆御八講記(三條公敦記)	同	同	同
紙本墨書建仁四年具注曆(高山寺本)(紙背ニ反書抄アリ)	同	同	同
紙本墨書正安三年葉顯王西宮參詣記(紙背ニ文書アリ)	同	同	同
紙本墨書悉曇字母釋(高山寺本)	同	同	同
紙本墨書神護寺交來任日次第(方便智院本)	同	同	同
紙本墨書清閑寺文書(二十五通)(中ニ西華門院御讓狀アリ)三卷	同	同	同
紙本墨書固山一燈墨蹟七言	同	同	同
絹本墨書後西天皇宸翰古歌御色紙(紅葉、は)	同	同	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(里雪)	同	同	同



太刀(銘盛鑑)	長崎市	星野 義次	高麗青磁象嵌柳蒲禽鳥唐子圖水瓶	同	同
太刀(久國ノ銘アリ)	佐賀縣	古賀 一朗	陶製牡丹蓮花唐草文扁壺	同	同
刀(折返銘正恒)	八代市	松井 明之	銅製鐙口(奉掛山神御寶前大久保石見守長安慶長拾二年三月吉日ノ鐙銘アリ)	同	同
刀(無銘傳雲生)	同	男爵	銅製鐙口(奉掛山神御寶前大久保石見守長安慶長拾二年三月吉日ノ鐙銘アリ)	同	同
刀(無銘青江)	同	上	銅製鐙口(奉掛山神御寶前大久保石見守長安慶長拾二年三月吉日ノ鐙銘アリ)	同	同
刀(銘日州古屋之住國廣山伏之作之、天正十二年二月彼岸、太刀主日向住飯田新七郎藤原祐安)	宮崎市	伊東 祐夫	銅製鐙口(奉掛山神御寶前大久保石見守長安慶長拾二年三月吉日ノ鐙銘アリ)	同	同
工藝品及考古學資料之部			銅鑄(美州清水寺寶治元年九月二十二日東大寺大工數位山河助清ノ刻銘アリ)	愛知縣	八社神社
板石塔婆(正應元年七月二十三日源光氏ノ銘アリ)	青森縣	對馬 忠卿	銅製神樂釜(天照皇太神宮天正九年五月吉日ノ刻銘アリ)	宇治山田市	慶光院利彰
銅鐘(寺號鶴足弘長三年二月十七日ノ刻銘アリ)	栃木縣	五塚 教會	銅製香爐(永正十八年四月下旬ノ銘アリ)	滋賀縣	寶嚴寺
板石塔婆(地藏菩薩像及文永十年二月ノ銘アリ)	群馬縣	愛宕神社	銅製振形文鏡(奈良縣山邊郡那野村大字白石古墳出土)	大阪市	池田庄太郎
銅鐘(上州圓光寺鐘正慶二年三月日及武州釜形郷八幡宮鐘文明十一年八月九日并文明十三年四月日淨蓮寺ノ追銘アリ)	埼玉縣	淨蓮寺	銅製扇散鏡	同	同
銅製水瓶(埼玉縣大里郡岡部村字東郷出土)	同	橋本 錄郎	銅製牡丹雙風鏡	同	同
銅製鏡	銚子市	圓福寺	銅製蓬萊鏡(鏡面ニ阿彌陀如來坐像ノ線彫アリ)	同	同
螺鈿時繪藤文(小宮 三合(内一合身ヲ缺ク)	千葉縣	香取神宮	銅製麒麟八枝鏡	同	同
青磁彫花盃	東京市	總持 重威	銅製狻猊雙鬘唐草八枝鏡	同	同
青磁嵯峨山圖硯宮	同	根津美術館	金銅鐙口(防州山口圓政寺天神宮建長六年五月日ノ銘アリ)	同	同
青繪石山寺圖源氏物語册子簾笥	同	上	錫杖頭(木瓜鐵付、永正七十六月七日金剛山行者堂粉河寺十穀祐海ノ銘アリ)	同	同
金銅鉢(重大四斤九兩ノ銘アリ)	同	上	銅製阿彌陀三尊應佛(表面額形ニ船越八幡宮永享十二年八月ノ刻銘、裏板ニ大願主阿闍梨定仙ノ墨書アリ)	同	同
青磁袴腰香爐	同	上	銅製銀象嵌唐草文三足香爐	同	同
青磁筒形花生(銘「大内筒」)	同	上	金銅五銖鈴	同	同
陶製瓊形香爐(銘「此世」、共蓋)	同	上	銅鐘(攝州西宮御政之鐘洛陽三條鏡物師藤原國寶慶長十五年三月八日ノ刻銘アリ)	同	同
陶製文琳茶入(銘「白玉」)(附屬物共)(大名物)	同	上	銅鐘(因州最勝寺文永四年三月二十一日ノ陽銘及東河庄地藏堂永祿七年十一月十五日但州桑市村觀音寺鐘天正二年八月十八日并生野銀山金藏寺常住物ノ追銘アリ)	同	同
陶製瀬戸丸壺茶入(銘「相坂」)(附屬物共)(中興名物)	同	上	銅製舌(兵庫縣三原郡松帆村荷飯野出土)	同	同
陶製井戸茶碗(銘「三芳野」)	同	上	銅製水瓶(東大寺戒壇院常住嘉元三ノ刻銘アリ)	同	同
陶製井戸茶碗(銘「さかい」)	同	上	塔婆文響	同	同
銅予(鐵及柄殘片附)	同	上	壇輪牛(奈良縣磯城郡田原本町出土)	同	同
壇製高坏(奈良縣磯城郡柳本町澁谷出土)	同	上	鐵造(十一面觀音立像(各ノ光背ニ元應二年四月廿七日大工道覺ノ銘アリ)二聖 附鐵製光背(元應二年四月廿七日大工道覺ノ銘アリ))	同	同
銅製朝鮮鐘(至治四年正月十九日阿陰縣土文龜菴小鐘ノ銘アリ)	鎌倉市	須賀新一郎	黑漆御供臺(臺裏ニ應安二年十二月日大工清原宗正ノ銘アリ)三基	同	同
金銅佛具類 十三口(一火舎、一花瓶、一、一瀝水器、一塗香器、一飲食器二、一六器、一六)	同	東慶寺		同	同
蒔繪初音歌繪火取母(金銅三足火取添)	同	片倉兼太郎		同	同
陶製黑釉金彩草花文盤	同	長野縣		同	同

銅製鰐口(出雲大社豐臣秀頼再興奉行堀尾吉晴慶長十四年七月吉日ノ刻銘アリ)

金銅觀佛(聖觀音像 一面 藏王權現像 二面)

銅鑪(奉納備中國吉備津宮藏、永正十七年卯月九日大工林但馬守家朝ノ銘アリ)

金銅五銖鈔

銅製六角組合經筒(筑前國四王寺山經塚出土)

銅製瓊瑤付經筒(筑前國四王寺山經塚出土)

銅製經筒(元永元年十二月日ノ刻銘アリ、筑前國高取山經塚出土)

鐵製蘆屋竹梅圖眞形釜(鎮付鬼面)

石庖刀型鐵器殘闕(福岡縣嘉穂郡上穂波村大字北古賀字下原遺跡出土)

建造物之部

石造五輪塔

石造十三重塔(内三重ヲ缺ク)

木造門遺材(猿股一、大斗五、卷斗一、肘木一、金剛欄子二十八)

石造燈籠

石造七重塔(相輪ヲ缺ク)(初層塔身ニ文保二年戊午歲□月日ノ刻銘アリ)

石造寶篋印塔

石造燈籠(火災ニ應安二已酉十月願主□ノ刻銘アリ)

石造寶篋印塔

石造寶篋印塔

石造寶篋印塔

石造寶篋印塔

石造寶塔(文中四年乙卯十一月十八日ノ刻銘アリ)

石造寶塔

石造寶塔

石造寶塔

同 出雲大社

同 法王寺

岡山縣 吉備津神社

尾道市 西國寺

福岡市 内本浩亮

同 上

久留米市 石橋徳次郎

同 上

飯塚市 森貞次郎

石川縣 江沼郡山代町藥王院

滋賀縣 栗太郡治田村安養寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

同 蓮臺寺

石造九重塔(起立文永四年大歲辛卯卯月八日云々ノ刻銘アリ)

石造五輪塔(弘安八年云々ノ刻銘アリ)

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同 龜井伊助 同田野村大字王子字中馬場

外二十六名 同大字八里合字前畑一、三

高橋傳 六八番地

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

昭和十七年度重要美術品等御料歸屬

及資格消滅

文部省告示第四百六十七號 五月十二日

重要美術品等認定物件中左記ハ昭和十七年四月九日御料ニ歸屬セリ

品目 土製異形動物(東京市大森區田園調布一丁目出土)

文部省告示第四百九十八號 五月二十九日

重要美術品等認定物件中左記ハ昭和十七年一月三十日御料ニ歸屬セリ

品目 紙本著色山水圖

紙本著色繫馬圖(六曲屏)

紙本墨畫富岳圖(延徳二年得玄ノ題語アリ)

紙本著色扇面流圖(六曲屏)

文部省告示第五百二十號 六月二十六日

重要美術品等認定物件中左記ハ國寶保存法第一條ニ依リ本日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

品目 絹本著色妙音天圖

紙本著色藤松軒圖(得嚴等五僧ノ贊アリ、癸丑ノ記アリ)

紙本淡彩洞山价禪師圖(岳翁筆、贊アリ)

絹本著色夏景山水圖(傳馬遠筆)

絹本著色樓臺遠望、溪泉清興圖(孫君澤筆) 二幅

太刀(銘秀近)

太刀(銘備前國長船住左近將監長光造)

太刀(銘國清)

短刀(銘久國)

太刀(銘信房作)

袈裟褌文(畫像附)銅鐔(傳香川縣出土)

同 岩崎小彌太

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

紙本墨畫枕草紙繪詞(詞傳後光嚴院宸翰) 同 上  
 紙本墨畫山水圖(雪舟筆、文明六年甲午正月下流ノ年記アリ、卷ノ後半ニ長谷川等伯模、補圖アリ) 同 上  
 紙本著色水仙鶴圖(傳徹宗筆) 同 上  
 紙本著色竹蟲圖(傳趙昌筆) 同 上  
 紙本墨畫山水圖(傳夏珪筆) 同 上  
 紙本著色竹鷄圖(羅憲筆) 同 上  
 太刀(銘備前國長船住近景、建武二年五月日) 同 上  
 太刀(銘一) 同 上  
 太刀(銘正恒) 同 上  
 太刀(銘吉家作) 同 上  
 劍(銘國吉) 同 上  
 短刀(銘備前長船住長重、甲戌) 同 上  
 絹本著色雲門禪師圖(傳次輝筆、雲庵ノ贊アリ) 同 上  
 絹本著色鐵道圖 同 上  
 刀(無銘傳長光) 同 上  
 太刀(銘恒光) 新潟市 同 上  
 太刀(銘長光) 東京市 同 上  
 太刀(銘備前長船住景光) 同 上  
 太刀(銘秀近) 高崎市 同 上  
 太刀(銘包永) 東京市 同 上  
 絹本著色愛染明王像(傳後醍醐天皇宸翰御贊アリ) 同 上  
 紙本著色五百羅漢圖(傳明兆筆) 二幅 同 上  
 紙本墨畫漁村夕照圖(傳牧溪筆、「道有」ノ印アリ) 同 上  
 紙本墨畫布袋圖(因陀羅筆、楚石ノ贊アリ) 同 上  
 紙本著色天狗草紙 同 上  
 紙本著色十二因緣繪卷 同 上  
 太刀(銘行光)(古備前) 同 上  
 太刀(銘包永) 同 上  
 紙子内親王蒙歌合(庚申夜) 同 上  
 紙本墨畫 同院歌合(治曆三年九月九日庚申) 同 上  
 同院歌合(治曆四年十二月廿三日庚申) 同 上  
 紙本墨畫中庸(朱熹章句、弘和二年榮山寺行宮ニ於テ隱上親書寫ノ奥書アリ) 同 上  
 紙本墨畫古林清茂墨蹟(泰定二年九月二日) 同 上  
 文部省告示第六百五十一號(十二月二十二日)

古美術保存

重要美術品等認定物件中左記ハ國寶保存法第一條ニ依リ本日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

品目 所 有者

銅製鸞龜牡丹唐草八稜鏡 大阪府 山川七左衛門  
 石造狛犬 京都府 龍神社

# 昭和十七年度朝鮮寶物古蹟指定

朝鮮總督府告示第八百九十三號 六月十五日  
 朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存令第一條ニ依リ左ノ通り指定ス(天然記念物略)

指定番號	名	寶物	所在地	所有者
三七八	華嚴寺覺皇殿		全羅南道求禮郡馬山面華嚴寺境内	華嚴寺
三七九	開目寺圓通殿		慶尙北道安東郡西後面開目寺境内	開目寺
三八〇	貝葉寺寒山殿		黃海道信川郡用珍面貝葉寺境内	貝葉寺
三八一	海州文廟大成殿		黃海道海州府上町一七〇	海州府學校
三八二	桐華寺入口磨崖佛坐像		慶尙北道達城郡公山面道鶴羽山一四	桐華寺
三八三	桐華寺毘盧庵石造毘盧遮那佛坐像		慶尙北道達城郡公山面桐華寺境内	同右
三八四	金泉梧風洞石造釋迦如來坐像		慶尙北道金泉郡南面梧風洞六五	國
三八五	孤雲寺石造釋迦如來坐像		慶尙北道義城郡丹林面孤雲寺境内	孤雲寺
三八六	桐華寺毘盧庵三層石塔		慶尙北道達城郡公山面桐華寺境内	桐華寺
三八七	桐華寺金堂庵三層石塔 二基		同右	同右
三八八	浮石寺三層石塔		慶尙北道榮州郡浮石面浮石寺境内	浮石寺
三八九	梵魚寺三層石塔		慶尙南道東萊郡北面梵魚寺境内	梵魚寺
三九〇	傳風寺大覺國師碑		慶尙北道漆谷郡北三面崇鳥洞山一	國
三九一	寶鏡寺圓眞國師碑		慶尙北道迎日郡松羅面寶鏡寺境内	寶鏡寺
三九二	清涼寺石燈		慶尙南道陞川郡伽倻面清涼寺境内	清涼寺

三九三 桐華寺幢竿支柱

慶尙北道達城郡公山面桐華寺境內

桐華寺

一三七 江東金谷里古墳群

平安南道江東郡鳳津面金谷里

三九四 浮石寺幢竿支柱

慶尙北道榮州郡浮石面浮石寺境內

浮石寺

一三八 雲山龍湖洞古墳群

平安北道雲山郡東新面龍湖洞

三九五 甲寺鐵幢竿及支柱

忠清南道公州郡鶴龍面甲寺境內

甲寺

一三九 龍岡石泉山支石群

平安南道龍岡郡池雲面新村里柳保里

三九六 甲寺浮屠

同右

同右

一四〇 殷栗雲山里支石

黃海道殷栗郡北部面雲山里、一道面長通里

三九七 石造浮屠

慶尙北道大邱府東門町三八

小倉武之助寺

一四一 慶州邑城

慶尙北道慶州郡慶州邑北部里、東部里

三九八 水鐘寺浮屠內遺物

朝鮮總督府博物館

水鐘寺

一四二 梁山新基里山城

慶尙南道梁山郡梁山面新基里、北亭里、虎溪里

三九九 青磁蓋附壺、金銅製九層塔、銀製鍍金六角龜

建安四年銘夾紵漆盤

柴田鈴三

指定番號

奈勿王陵雞林及月城地帶

四〇〇 傳平壤貞柏里出土輿車具馬具

同右

同右

四 乃城西谷權冲齋關係遺蹟

慶尙北道慶州郡慶州邑仁旺里、皇南里、校里

(天然記念物略)

銅衡金具、金銅頭透柄金具二箇、銅車軸頭樣金具、銅笠形柄頭四箇、黑漆塗木製品二箇、銅蓋樣爪、銅乙字形香三箇

馬具  
金銅馬面二箇、金銅鈴、銅鐸六箇、金銅馬帶金具八箇

武器類  
銅戈附黑漆鞘

四〇一 肩嚴日記 十冊

全羅南道潭陽郡大德面章山里

柳義迪

四〇二 冲齋日記 六冊

慶尙北道奉化郡乃城面西谷里

權聰

四〇三 近思錄 四冊

同右

同右

指定番號 名稱

所在地

地

一二九 梁山北亭里古墳群

慶尙南道梁山郡梁山面北亭里

在

一三〇 梁山新基里古墳群

慶尙南道梁山郡梁山面新基里

在

一三一 梁山中洞古墳群

慶尙南道梁山郡梁山面中部洞

在

一三二 鳳山養洞里古墳群

黃海道鳳山郡楚臥面養洞里

在

一三三 鳳山柳亭里古墳群

黃海道鳳山郡楚臥面柳亭里

在

一三四 鳳山立峰里古墳群

黃海道鳳山郡楚臥面立峰里

在

一三五 中和眞坡里古墳群

平安南道中和郡東頭面眞坡里

在

一三六 中和雪梅里古墳群

平安南道中和郡東頭面雪梅里

在



# 昭和十七年指定國寶略説

## 繪畫之部

愛染明王像 一幅 東京 根津美術館

絹本着色 堅四尺五分 横三尺一寸

數ある愛染明王像中卓出の一作で、鎌倉末葉の製作と思はれる。圖上に賛語あり、書風より 後醍醐天皇或は 花園天皇の宸翰かと云はれてゐる。圖一

辯才天像 一幅 東京男爵 岩崎小彌太

絹本着色 堅五尺一寸五分

横一尺九寸七分

金碧極彩色の華麗な描寫。鎌倉末葉の製作で、保存も亦完好である。圖二

枕草紙繪詞 一卷 東京 侯爵 淺野 長武

紙本白描 堅八寸四分

長三二尺六寸三分

枕草紙中七段を描く。纖巧優雅な白描畫で鎌倉末葉の製作と思はれる。詞は後光嚴院宸筆、繪は女筆とのみ傳へられてゐるが、看聞御記永享十年十二月三日の條に墨繪枕双子に就いての記事があり、恐らく淺野家本に當るものであらう。右御記には詞伏見天皇宸翰、繪伏見天皇の皇女進子内親王御筆か何れも確かならざる由が記されてゐる。圖四

男衾三郎繪詞 一卷 東京 侯爵 淺野 長武

紙本着色 堅九寸五分 長四一尺一寸

詞・繪各六段、後尾逸亡。吉見二郎男衾三郎兄弟の物語を描いたものであるが本巻以外に傳本はない。畫法に伊勢新名所繪歌合に近似する著しき特癖があり、

等しく土佐隆相筆と傳ふ。新名所繪は永仁年間の作と推定され、本巻も同じ頃の製作と見られるが、別に本巻を摸本と見る一説がある。圖五

天狗草紙 一卷 東京 根津美術館

紙本着色 堅一尺一分 長三四尺

諸家分藏の巻や摹本を合して七卷ある天狗草紙中の終結をなす巻で、天狗が長き我執驕慢より醒め佛道修行し堂舍塔廟を建立し成佛得脱する一段である。此草紙の首卷興福寺卷(摹本)の詞中には永仁四年とあり本巻亦畫風書體等より見て當時の製作と思はれる。圖六

十二因緣繪卷 一卷 東京 根津美術館

紙本着色 堅八寸八分

長二三尺一寸八分

詞十一段繪十四段、その間多少缺あり、經典關係の繪卷として東大寺華嚴五十五所繪卷や新繪因果經等と同じく繪師一派の筆と思はれるが、製作年代は其等より稍、下り鎌倉末葉であらう。圖七

五百羅漢圖(傳明兆筆) 二幅 絹本着色 東京 根津美術館

各堅五尺七寸二分

横二尺九寸四分

明兆は永徳三年建長寺の傳類繪筆の圖本によつて東福寺の五百羅漢圖の筆毫に着手し至徳三年五十幅を完成したが、その中の二幅で、文化二年故あつて同寺より出たものである。作者の款印はないが筆致等より傳の如くその筆と思はれる。各圖中に「東福寺」の墨印あり、一幅には「沙彌宗忍」の金泥書と「宗昌」女奇

附一の墨書がある。圖三

龍溪軒圖 一幅 東京男爵 岩崎小彌太

紙本淡彩 堅三尺三寸 横一尺五分

圖上に五山の詩僧惟肖得殿(永享五年の年記あり)、勝剛長柔、龍岡眞圭、九淵龍溪、竺雲等連(長祿二年の年記あり)の五人の賛がある。畫者は不明であるが詩畫軸中他にあまり類例を見ぬ畫風である。圖四

洞山長仲禪師圖(岳翁筆) 一幅

紙本淡彩 東京 男爵 岩崎小彌太

堅三尺七寸 横一尺一寸五分

圖上に筠州洞山悟本禪師語錄に見る筆者不明の長文の題語あり、唐僧洞山良价禪師が密師伯と共に龍山に隱者を訪ふ圖である。圖中「岳翁」の方印あり、彼は經歷不詳であるが、岡崎家舊藏山水圖の款によれば名を藏丘と云ひ、遺作中に了菴桂悟の賛あるものあり、明應永正頃在世の畫人である。圖五

山水圖(雪舟筆) 一卷

紙本墨畫 東京 侯爵 淺野 長武

堅七寸七分 長一五尺六分

本巻々末に豐後日出藩主木下俊長及び狩野養川院文化二年の奥書があり、それによれば俊長の祖父延俊と細川三齋の二人が畫工長谷川某所持の雪舟山水圖卷を二分し、延俊は前半、三齋は後半(後に明曆大火に依り焼失)を得たが、延俊は更に長谷川某に後半を模寫せしめ前半に添へて置き、後淺野家に入り今日傳世するものが即ち本巻である。圖一三

前半の山水圖には「雪舟」の朱印あり、後半の模寫圖には原本の雪舟跋文も寫されてゐるが、これにより雪舟文明六年の作、元朝畫人高彦敬の畫風に則り、特に

門人等悅の爲に描き與へたことがわかる。模寫圖の畫家長谷川某は恐らく畫史類に雪舟小軸を所持したと記されてゐる長谷川等伯のことであらう。

山水圖(祥啓筆) 一幅 東京 根津美術館

紙本淡彩 堅一尺六寸九分横一尺一寸

圖の一隅に「賢江」祥啓の二印あり。賢江祥啓は建長寺の書記で文明頃在世の畫人。本圖は殊に彼の特色を發揮した秀作の一である。圖一五

鹽臣秀吉像 一幅 滋賀 西 教 寺

絹本着色 堅三尺六寸五分横一尺七寸

圖上に南禪寺の玄關靈三と東福寺の惟杏永哲二僧の賛があり、慶長五年秀吉の龍臣山中山城守長俊の畫かしたことがわかる。二僧は朝鮮役の際相國寺の西笑承兌と共に秀吉に従つて肥前名護屋に到り帷幕に參じた人であり、西教寺は長俊の菩提寺である。此等秀吉に關係深き點で、類品中歴史的にも珍重すべき作である。圖一六

南禪寺方丈障壁畫 京都 南 禪 寺

南禪寺方丈は慶長十六年禁中舊女院御所の一部を下賜されたもので、その障壁畫は狩野永徳の筆と傳ふ。(清涼殿拜領由緒書、本光園師日記) 現在方丈は大方丈(八室)、小方丈(五室)に別れるが大方丈が拜領移建と思はれ、柳之間、麝香之間、御畫之間、花鳥之間、鶴之間、鳴瀧之間の六室の障壁畫も當初からのものであらう。此等は今貼り亂れて原狀不詳の點も多いが、描寫様式上略四類に分け得る。所傳の永徳説は確認し難いが作風上永徳一派の關與した作たることは認め得られやう、慶長以前の禁中御造營は天正年間秀吉が拜命し完成したものであり、

此等障壁畫の製作も天正當時と思はれる。京洛に遺存する數多き桃山障壁畫中同時代初期に屬すべき代表的群で由緒明白な點でも貴重である。

名古屋城本丸御殿障壁畫 名古屋市

名古屋城は慶長十六年略々城廓の工事を終へたが、城内本丸御殿は同十七年着手、十九年大體竣功と思はれる。而して寛永十年より十一年に家井上洛の際逗留の爲上洛殿其他を増築したものである。

其等の中支關表書院對面所の障壁畫は慶長年中の製作と思はれる。筆者は狩野貞信(光信の男)と云はれてゐる(狩野五家譜・狩野系圖貞信の條)。慶長十九年は彼の十八歳の時に當り、恐らく一門の畫人と共に揮毫したと思はれるが、彼以外は畫人の名を詳かにしない。

支關虎之間二室、何れも金箔地の濃繪。表書院四室、各室共金箔地の濃繪。花鳥を描き、殊に華麗、其中一之間櫻花稚子圖は最も生彩に富んでゐる。

對面所四室、金泥引、其の上段之間次之間二室は京阪附近の年中行事等を描く風俗畫で、描寫優れ城内裝飾として珍しい。納戸二室は花鳥畫で筆致稍々前者と趣を異にするが、慶長當時狩野一派の製作と思はれる。

上洛殿、御湯殿書院、梅之間、鸞廊下、雁廊下等は寛永の構築で畫も亦當時の製作であらう。上洛殿(御成書院)は「事蹟錄」寛永十年八月の條の記事で狩野采女(探幽守信)の筆と知られる。七室より成り、上段、一、二、三之間四室は水墨を主とし間々着色金砂子を蒔き、床、帳臺、櫨の畫は探幽小壯時代の作として推量すべきものであらう。是等四室の他の畫も筆

致等より探幽作に近く或は同筆か。

黒木書院は清洲越と傳ふる建物で、畫は水墨淡彩、畫者は不詳。或は是等も清洲城より移したもののか。前記狩野派のものとは作風を異にし古致に富むものである。

水仙鶏圖 一幅 東京 侯爵 淺野 長武

紙本著色 竪八寸九分横一尺三寸九分 古くより宋の徽宗皇帝の筆と喧傳さるる名幅。圖中「御書」の瓢印、徽宗の年號「政和」の長方印、印文不明の一印あり。院體畫の一標範として徽宗の作風を窺ふに足るものであらう。圖八

竹蟲圖 一幅 東京 侯爵 淺野 長武

紙本著色 竪三尺二寸九分横一尺九寸 描寫細勁、布局にも特徴あり、北宋花鳥畫家趙昌の筆と傳ふるが、畫風より宋元間の製作と思はれる。畫中に室町時代の鑑藏印たる「華室印」の方印がある。

山水圖 一幅 東京 侯爵 淺野 長武

紙本墨畫 竪一尺五寸七分 横三尺八寸一分

本圖と殆ど同圖を含む山水畫卷が北京故宮博物院にあり、本圖も亦此種の畫卷の一殘缺と思はれる。南宋山水畫家夏珪筆との傳は不明なるも構圖筆致等斯派の特色を見るべき作である。圖一二

風雨山水圖 一幅

絹本淡彩 東京 男爵 岩崎小彌太

竪三尺六寸八分 横一尺八寸四分

馬遠筆と傳へ、筆致構圖等峻拔、馬氏の風を傳ふと思はれるが、製作年代は宋元間と見るべきであらう。

漁村夕照圖(傳牧谿筆) 一幅 紙本墨畫 東京 根津美術館 竪一尺九分 横三尺七寸二分

牧谿筆と傳ふる瀟湘八景圖中の一で、本圖以外では四圖が知られてゐる。水墨山水畫中の一優品である。もと足利義滿の鑑藏するところからその法號「道有」の印を捺してゐる。圖一〇

竹鷄圖(羅窓筆) 一幅

絹本淡彩 東京 侯爵 淺野 長武

竪二尺九寸二分 横一尺二寸八分

羅窓は宋末の禪僧で西湖の大通寺に住し畫は牧谿と併稱されたと云ふ。本圖は彼の稀有の遺作で水墨の畫風亦牧谿に近い。圖中に自賛がある。

塞山拾得圖(因陀羅筆) 一幅

紙本墨畫 東京 侯爵 淺野 長武

竪一尺一寸七分 横一尺六寸五分

布袋圖(因陀羅筆) 一幅 紙本墨畫 東京 根津美術館 竪一尺一寸八分 横一尺六寸

共に元代梵僧因陀羅の作で各圖側に禪僧楚石梵琦の贊詩がある。二幅共疊に指定した黒田、岩崎、川崎、原諸家の分と元一聯の作で、畫中の四印も諸家の分にも散見し何れも因陀羅の印と認めらるる。淺野家の分には因陀羅自署の款識あり、これにより彼は汴梁即ち開封府の大光教禪寺の住持となり佛慧淨辨圓通法寶大師と云ふ大師號を授けられた人であることが知られる。圖九

鐘爐圖 一幅 東京 侯爵 井上 三郎

絹本著色 竪三尺二寸横一尺七寸二分

古來吳道子筆と喧傳されるも、畫風より宋元間の作と思はれる。鐘爐の形相等も普通の作と趣を異にし鐘爐畫古作中第一に擧ぐべきものであらう。因に本幅は信長家康等の鑑藏と傳へ、後銀冶橋狩野家に傳世した。

雲門禪師圖 一幅 絹本著色 東京 侯爵 井上 三郎 竪四尺一寸 横一尺九寸一分

畫者の款印はないが元の顔輝の筆と傳ふ。畫風亦顔輝の作に類し、元代の製作と見るべであらう。畫上に雲卷(傳歷宋詳)の贊あり。因に本幅はもと銀冶橋狩野家の傳世品である。

樓閣山水圖(孫君澤筆) 二幅

絹本淡彩 東京 男爵 岩崎小彌太 各竪四尺六寸八分 横一尺九寸五分

孫君澤は元代山水畫家、室町畫壇に重ぜられた一人で、本双幅は代表的遺作。各圖中に「孫君澤」の落款あり、整然たる筆致布局等に彼の作風の特徴が見られる。圖一一

## 彫刻之部

退耕禪師坐像 一軀 神奈川 淨妙寺 像高二尺一寸八分 同 白雲庵

像高二尺二寸五分

退耕行勇は榮西の法弟、壽福、東勝、淨妙に住持し、永仁二年七月五日示寂。東明惠日(明州の人、延慶二年來聘、建長、萬壽、東勝、壽福諸寺に歴任、建武二年 後醍醐天皇の勅により京師に入り、曆應三年再び鎌倉に入り、同十月四日白雲庵に示寂。二像共寄木造、玉眼嵌入、示寂時の作であらう。

地藏菩薩坐像 一軀 神奈川 傳 宗庵 像高二尺二寸五分(本堂安置)

寄木造、玉眼嵌入、本庵の本尊。鎌倉末期の製作。此地方の作風顯著、又此地のものに獨特の土紋を用ひ、面觀秀麗、衣文に太だ働きがある。

雲門禪師圖 一幅 絹本著色 東京 侯爵 井上 三郎 竪四尺一寸 横一尺九寸一分

千手觀音立像 一軀 京都 雨 寶院

像高六尺九寸八分(觀音堂安置)

一木造、漆箔、元四十臂あつたと思はれるが今十臂を存する。頭上の佛面と共に像と同時に、製作は平安初期かも知れぬが奈良朝の作風を現はし、偉風を備へてゐる。圖一九

阿彌陀如來坐像 一軀 京都 淨土院

像高二尺八寸九分(本堂安置)

寄木造、漆箔、本院の本尊。藤原後期の作風を顯示、像内背部に墨書銘あり、永長元年十二月廿六日造始められたこと及び本院が嘉保二年二月十二日造始められたことがわかる。

阿彌陀如來立像 一軀 京都 報土寺

像高二尺六寸三分(本堂安置)

寄木造、漆箔、玉眼嵌入、鎌倉末期の作風顯著、衣文の作風に苦心の跡が見える。左足柄に「正嘉二年七月十二日造之」右足柄に「藤井影光佛也」の刻銘あり。光背臺座共像と同時に或は稍後の作である。

釋迦如來立像 一軀 京都 西明寺

像高一尺七寸(本堂安置)

一木造、檜木の如き堅緻な材を用ひ素地のままである。所謂清涼寺式釋迦像で白毫(水晶)を殊に大きく作り、耳窩中に水晶珠を嵌めし原像に倣ひ、衣文刻法原像に最も忠實。刀法は顔面衣文等に殊に細技を見せてゐる。鎌倉期の作。

千手觀音立像 一軀 京都 西明寺

像高五尺七寸九分

寄木造、衣文の彩色文様は當初のものとと思はれ、頂上佛首四十臂等の保存良好、藤原末期の作で優麗な面相衣文にその手法を顯示してゐる。圖二〇

文殊菩薩騎獅像 一軀

像高三尺六寸 京都 清涼寺

帝釋天(傳普賢菩薩)騎象像 一軀

像高三尺六寸三分 京都 清涼寺

各一木造、彩色、現在本尊釋迦如來の脇侍とされてゐるが、一は文殊菩薩像であり、他は衣裳手相から帝釋天像と認められる。帝釋天像は藤原初頭を下らぬと思はれるのに文殊像は稍下の頃の作と考へられ、獅子と象とは文殊像と同時にものと認められる故、帝釋天像はその象に乗る所から普賢菩薩に擬せられて來たものか。共に彫技優れ、騎獅文殊像中古像の一であり、帝釋天像として最古の遺品たる醍醐寺藥師堂のものより古い點注目すべきである。圖一七、一八

四天王立像 四軀 京都 清涼寺

像高五尺六分乃至五尺二寸四分

一木造(夜叉共)としては體に動勢を表はし變化あり。藤原中期の製作。圖二一金剛力士立像 二軀 京都 寶積寺

像高阿形九尺三寸八分

吽形九尺一寸六分

寄木造、玉眼を用ひず、二軀作を異にする點があるが同時のものと思はれる。製作年代は本寺關慶王等諸像と同じ頃でその一類に屬するものか。鎌倉期金剛力士像中の尤作である。圖二五

阿彌陀如來立像 一軀

附像内納入品一切 京都 大念寺

像高二尺六寸九分

寄木造、漆箔、玉眼嵌入、特異な印相をなし、製作は鎌倉期と認められるが、作風殊に衣文に太だ古調を存する。昭和十三年八月納入品を發見したが、これによれば本像は淨土宗西山派の祖證空及其

多くの徒弟信者等の結縁によつて造られたものである。納入品中に月輪牌(清淨金剛道覺即ち後鳥羽天皇皇子道覺法親王の御名及び種子、證空の署名あり)、寫經、戒文等がある。

狗犬 一對 京都 龜 神社

像高阿形三尺一寸八分

本社々殿前にある花崗岩造のもので、方座一重は同時のもの。足に破損があるが古い石狛犬中では保存良好、強く逞しい形態に鎌倉期の風を示す。圖三〇

千手觀音立像 二軀 鳥取 大日寺

像高千手六尺二寸五分

十一面五尺二寸三分(所在近江堂) 本寺の境外佛堂たる東伯郡榮村東高尾の一堂に保存されてゐる藤原期も古い頃の佛像中のもの。前者は脇手を總て失ひ後者は頂上の佛首を失ふ。破損磨滅甚しいが面貌には充分端麗な風趣を遺し、三佛寺諸佛と共に伯耆地方古佛中尤なるものである。圖二三

不動明王立像 一軀 鳥取 長樂寺

像高五尺三寸七分

一木造、藤原初期の製作と思はれる。魁偉な風貌に地方作の風が現れ、不動明王古像の様式も認められる。著しく賑かな衣文に作者の工夫を見る。圖二四

聖觀音立像 一軀 鳥根 禪定寺

像高七尺四寸六分(觀音堂安置)

本寺本尊。兩手諸共(左手腕の半より先を除き)一木造である如く固直な態を現すが、面貌端麗、條帛天衣袈衣の賑かな衣文に働きのある點は所謂地方作ながら賞せられる。製作は藤原初頭を下るま

い。圖二二

藥師如來坐像 一軀 廣島 八重町

像高四尺一寸(所在古保里藥師堂)

一木造、八重町古保里區の慶寺社一堂に保存される平安朝佛中の尤品で此堂の本尊。破損太しいが兩手先まで像と同時に。真觀期製作と認められる。一木造興起時代の剛健な手法を示し堂々たる風姿を現す廣島縣下最古の木彫佛の一。阿彌陀如來及兩脇侍立像 三軀

廣島 安國寺

像高中尊五尺六寸五分

脇侍四尺二寸八分 (釋迦堂安置)

寄木造、漆箔、所謂善光寺如來の像で世に流布する小形銅像と異り等身大木彫像の點太だ珍しい。光背、蓮座、方座すべて當初のもの。鎌倉期の作風顯著。圖二六

法燈國師坐像 一軀 廣島 安國寺

像高二尺八寸一分

附水晶五輪塔 一箇

建治元年十二月十八日覺心筆眞言等寬文四年修理文書 各一通

寄木造、玉眼嵌入。法燈國師は本寺の再興開山。大正九年十一月像内より水晶五輪塔(地輪近年補作)、國師(覺心)自筆の眞言等一通及び修理文書一通が發見された。紀州由良の興國寺の國師木像(國寶)に衣文迄酷似し彼像に倣つたと考へられ、又建長六年國師歸朝後其歿年永仁六年に到る間の作かとも想像される。圖二七

狗犬 三軀 廣島 吉備津神社

像高二尺五寸五分乃至二尺六寸三分

寄木造、三軀同作と認められる。内二軀は阿吽一對、一軀は吽形のみ阿形は遺

存せず。鎌倉期製作であらうが前期の作風も遺る。狛犬としては大形に属する。

## 工藝之部

任之江藤繪硯(尾形光琳作) 一合

東京 男爵 岩崎小彌太

高(通蓋)三寸三分

蓋八寸五分 横七寸六分

蓋の高く山形に盛上つた硯筥。全面に波に土坡文様の下繪あり、蓋表より裏、身の内面に互り、古今集卷十二藤原敏行の「すみの江の岸に……」の一首を筆手繪意匠に現す。波の模様は粉溜地黒抜線、土坡は鉛、文字は切透銀板。此の意匠や技巧は光悦作の帝室博物館の船橋硯筥と規を一にする。而して桐製外蓋裏及び表に光琳の墨書あり光悦作硯筥を標範とせることを明かにしてゐるが、正に光琳の作であらう。圖二九

色繪山寺文様壺(野村仁清作) 一口

高七寸二分 東京 根津美術館

京極家傳來仁清作茶壺の一。形態は國寶若松茶壺と略々同様。肩衝茶入を範とせるもので更に彫味あり、肩に三耳を附す。肩より裾近く迄全面山間櫻花の間に寺觀樓屋を五彩に金銀を混えて畫き、各所に寫繪手法を採入れ金銀細點切箔形を置く。仁清作品中文様の繪畫的な一例に属す。底裏に仁清の大印あり。圖二八

青磁花瓶 一口 東京 根津美術館

高九寸八分

通稱竹の子形花瓶。頸に二節あり。全面貼手の鮮やかな青磁釉が施され、一點の疵もなき名作。宋代焼成かと思はれる。

高麗青磁蓮花唐草文花瓶 一口

高九寸二分 東京 根津美術館

高麗青磁水瓶に屢々見る形で頂上に圓筒管を存し局部に小形注口を付す。頸から胴にかけて飛雲文、牡丹唐草文、底縁には雷文の帶文の陰刻あり。底に「孝」刻の銘があるが刻工の名であらう。形態文様の點に於て類品中優秀作。なほ注口には被せ蓋があつたのであらう。

唐花簞八稜鏡 一面 大阪 池田庄太郎

徑九寸八分

頗る大形の八稜鏡。周縁高く八稜の界圈を有し纏葉菊座紐。鑄成優れ、鎌倉後期の製作で、造品少少の大形鏡鏡中優秀作。因に伊勢神宮に納められてゐたと傳へる。

袈裟文銅鐸(傳讃岐國出土) 一口

高一尺四寸二分 東京 大橋 八郎

兩面袈裟文各區内に虫魚鳥獸圖人物家屋等の線描の繪が鑄出されてゐる。此銅鐸は江戸時代讃岐國出土と傳へ、銅鐸中繪畫を描いたものは未だ出土したことなく、簡單な線描きにも拘らず、特徴をよく把み、當時の生活環境を知り得る點で有名である。

常福寺裏山經塚出土品 兵庫常福寺

阿彌陀如來坐像(一軀) 高八寸五分五厘

臺座徑五寸九分高一寸一分

地藏菩薩坐像(一軀) 高六寸三分

臺座徑五寸一分高二寸一分

共に須惠風の焼成。背に種子の梵書あり。簡粗な蓮座を伴ふ。藤原時代の風格を表し瓦製佛像として頗る珍稀である。

五輪塔(一基) 高一尺四分方座三寸五分角

須惠風の焼物。屋根で上下二分して造られ各輪に種子一字宛の梵書あり。

大器(六枚) 徑二寸四分高六分五厘。

須惠風に近き焼成。

經瓦殘片(六枚) 小破片で中に光明經梵網經等の文字を側面に記したものであり。

以上は常福寺裏山經塚から寛政十一年發掘のもの。同時に出土した多數の經瓦(維新迄姫路城内に保存。維新の際塚に投入され遺存せず)の拓本中(酒井家藏)の順文によると此の經塚は東寺の僧禪慧が康治元年極樂寺(常福寺の前身)別當職となり同二年夏より經瓦の書寫を行ひ天養元年これを了り繼別宮の僧良鑒をして造顯せしめた瓦佛二軀等と共に比の經塚に納埋したものである。

神輿 一基 兵庫 八幡神社

方三尺

目次の後本文は「風」より「酒」の第一句迄、他の卷は「交友」第二句より下巻の末尾迄と題には「朗詠抄下」とある。

料紙は白淡青淡黄等の地に雲母摺或は縹摺の文様あり金銀泥を以て草花文を描き添へてゐる。書寫年代は平安末期と思はれるが本文は同時代本と異なる點が多い。

法華經法師功德品 一卷

鳥根 大雲院

縱八寸二分 長十尺八寸七分

料紙は平安末期より鎌倉時代にかけて盛行した莊嚴經に見られるものと同様で意匠頗る華麗。金界線を施し、内に銀小切箔を一面に散し、金銀粉を以て霞引し、地は蘇芳に染め金銀箔及野毛文様を散し、金銀粉にて三角の霞形を現す外、唐草文様を摺出。紙背も同様に莊飾。經文の筆致は第三紙と第四紙の欄目を堺に稍異なるが、通じて平安末期の寫成と鑑せられる。金字法華經(今同指定)と共に江戸末期當寺に寄進されたものである。

春日神社一之鳥居(奈良市)

よく平安時代の形式を傳へる本社社殿の一部として貴重なもので、柱太く笠木の反り少くして古式を傳へ、平城京三條大路京極路に面して建てられたその位置の由緒上よりも重視せられる。

法隆寺東室(奈良縣)

法隆寺西院伽藍の僧坊で古は現在の聖靈院と一連の建物であつた。數回の修理を経て現存建物の再建年代は明確にし難いが、舟肘木や連子の手法から見て室町初期を降らぬものの様である。遺存する例の少い奈良時代寺院の主要僧坊の

建造物之部

春日神社一之鳥居(奈良市)

よく平安時代の形式を傳へる本社社殿の一部として貴重なもので、柱太く笠木の反り少くして古式を傳へ、平城京三條大路京極路に面して建てられたその位置の由緒上よりも重視せられる。

法隆寺東室(奈良縣)

法隆寺西院伽藍の僧坊で古は現在の聖靈院と一連の建物であつた。數回の修理を経て現存建物の再建年代は明確にし難いが、舟肘木や連子の手法から見て室町初期を降らぬものの様である。遺存する例の少い奈良時代寺院の主要僧坊の

建造物之部

春日神社一之鳥居(奈良市)

よく平安時代の形式を傳へる本社社殿の一部として貴重なもので、柱太く笠木の反り少くして古式を傳へ、平城京三條大路京極路に面して建てられたその位置の由緒上よりも重視せられる。

法隆寺東室(奈良縣)

法隆寺西院伽藍の僧坊で古は現在の聖靈院と一連の建物であつた。數回の修理を経て現存建物の再建年代は明確にし難いが、舟肘木や連子の手法から見て室町初期を降らぬものの様である。遺存する例の少い奈良時代寺院の主要僧坊の

建造物之部

春日神社一之鳥居(奈良市)

よく平安時代の形式を傳へる本社社殿の一部として貴重なもので、柱太く笠木の反り少くして古式を傳へ、平城京三條大路京極路に面して建てられたその位置の由緒上よりも重視せられる。

法隆寺東室(奈良縣)

法隆寺西院伽藍の僧坊で古は現在の聖靈院と一連の建物であつた。數回の修理を経て現存建物の再建年代は明確にし難いが、舟肘木や連子の手法から見て室町初期を降らぬものの様である。遺存する例の少い奈良時代寺院の主要僧坊の

建造物之部

春日神社一之鳥居(奈良市)

よく平安時代の形式を傳へる本社社殿の一部として貴重なもので、柱太く笠木の反り少くして古式を傳へ、平城京三條大路京極路に面して建てられたその位置の由緒上よりも重視せられる。

法隆寺東室(奈良縣)

法隆寺西院伽藍の僧坊で古は現在の聖靈院と一連の建物であつた。數回の修理を経て現存建物の再建年代は明確にし難いが、舟肘木や連子の手法から見て室町初期を降らぬものの様である。遺存する例の少い奈良時代寺院の主要僧坊の

建造物之部

春日神社一之鳥居(奈良市)

よく平安時代の形式を傳へる本社社殿の一部として貴重なもので、柱太く笠木の反り少くして古式を傳へ、平城京三條大路京極路に面して建てられたその位置の由緒上よりも重視せられる。

法隆寺東室(奈良縣)

法隆寺西院伽藍の僧坊で古は現在の聖靈院と一連の建物であつた。數回の修理を経て現存建物の再建年代は明確にし難いが、舟肘木や連子の手法から見て室町初期を降らぬものの様である。遺存する例の少い奈良時代寺院の主要僧坊の

建造物之部

春日神社一之鳥居(奈良市)



形式を考へるに重要な遺構で、且つ小屋裏の虹梁、東側に残る丸樑等創建材かと思はるる古材を残し、法隆寺伽藍の一部として重視すべきである。

#### 法隆寺妻室(奈良縣)

この建物は記録によれば文和三年奈良より舊坊を買得して移し立てたものと云ふ。奈良時代伽藍の主要僧坊に於ける小子房の形式を傳へる唯一の遺構である。後世の修補の部分が多いが軸部軒廻りは大體建立當時のものを有し、東室と共に法隆寺伽藍の一部として重要である。

#### 福園院本堂(奈良縣)

この堂は記録には元弘二年供養のあつたことが見えるが、現在小屋裏東に永享九年八月の修理墨書銘があり、斗拱、斗東、頭貫鼻等の細部は室町時代の形式を有し、この時の修理に係るものと考へられる。小規模ながら均衡よく整ひ輕快な堂で、軒に化粧板を現はさず板軒としたのは類例が少い。

#### 本蓮寺本堂(岡山縣)

棟木墨書銘によれば明應元年九月の建立に係る。寄棟造、舟肘木の簡素な構造であるが全體の均衡や軒廻、斗拱、内陣佛壇等の細部手法に於て時代の特徴を示し、よく建立當初の材を遺すものとして貴重である。

#### 増上寺開山堂(舊安國殿)(東京市)

元和二年四月徳川家康薨じ、増上寺に於て家康の像を安置すべき影堂即ち安國殿を建立し、翌三年二月落成した。然るに寛永十年新に安國殿を造替した際、舊殿は移して増上寺の開山堂となつた。即ち現存の建物がこれで細部手法古制を存し、江戸時代の堂としては落着いた風格

を持つてゐる。その由緒と共に、江戸の地に建てられたもののうち最古の遺構である點も注意すべきである。圖三八 八幡社境内神社甲辰神社本殿(舊八幡神社本殿)(長野縣)

#### 本社の舊本殿で、棟札によれば延徳三年九月の建立である。信州北佐久地方には他にも室町時代の社殿が數棟遺存するが、多くは簡單な手法になり田舎作と言ふべきもの、當社殿の如く細部手法の整つたものはない。圖三三

板倉(舊春日神社經藏)(奈良市)もと春日神社西ノ屋(西談義屋)の經藏で、明治初年神佛分離の際神社の西邊(現萬葉植物園附近)に移して小遊園の亭となし、この時周囲の板嵌に大圓窓を穿ち圓窓亭の名稱を附した。更に明治二十八年七月現在の地に移し縣の所管に歸した。西ノ屋の創立は正應四年と云はれるが、遺構の形式手法も鎌倉末の特色を備へ、恐らく西ノ屋創立後久しからずして建立されたものであらう。春日神社の舊坊舎の唯一の遺構として、且つ類例少き鎌倉時代板倉の形式を見るべきものとして注目し價する。圖三三

#### 法隆寺講封藏(奈良縣)

桁行九間、梁間三間で南北端各方三間の部分を一區劃とするもので雙倉の形式になる。恐らく流記資財帳の雙倉二口の中の一の由緒を傳へるものであらう。藤原時代以後屢記録にあらはれる。大永三年には放火のことが記されてゐる。建物は新古材料錯雜してゐるが、軸部は大體室町末期の形式を示し、恐らく大水罹災後の造替に係るものが主體をなしてゐるであらう。雙倉の一遺構として、又法隆寺伽藍の一部として重要である。圖三四 法隆寺大湯屋(奈良縣)

#### 古今目録抄の記事に合ふので、少くも鎌倉時代以來今の位置に大湯屋のあつたことがわかる。その後元弘の屋根葺替、延文の造替廻りの修理、建武二年に湯船を作つたことを知り得るのみで大々的な造替については詳でない。内部及軸部の主要部分は室町時代を降らぬものの如く、小屋等の一部には更に古い材料を遣し、妻飾、小屋の大部分、北庇、本屋側廻りの肘木以上は桃山頃のものか。東大寺浴室と共に室町期の規模を傳へる南都寺院の浴室として珍重である。圖三五 法隆寺大湯屋表門(奈良縣)

細部手法を見るに室町中期を降らぬもので、恐らく大湯屋の改修と同時に造替せられたのであらう。

#### 西園院客殿(奈良縣)

西園院は法隆寺境内にあり、別當記によれば弘安十一年の造立と云ふ。現客殿は形式手法より見て桃山時代頃のものと考えられる。屋根を杉皮葺として竹の押縁を附してゐるのは珍らしく、塔頭寺院客殿の代表的な一遺構をなす。

西園院上土門(奈良縣)もと地蔵院(元應二年創立)の表門たりしもの、最近ここに移築された。屋蓋の部分は幾度か修理され、繪振板も近世のもので、檜皮を以て葺いてゐるが、軸部は材質形式等より見て江戸時代のものとは考へられぬ。往昔、寺院や邸宅の門として盛に用ひられたがその遺構の極めて稀な上土門の恐らく現存最古のものとして注意すべきである。圖三六 寶珠院本堂(奈良縣)

#### 同じく法隆寺境内にあり、もと政南院の本堂たりし建物を文化年中今の地に移したと稱せられる。本章には長祿三年の銘があり、鳥衾には文明十三年の範書がある。建物の形式手法は室町中期の特徴を示し、塔頭の小規模な本堂として輕快な趣を有する。圖三七 金峯山寺鳥居(奈良縣)

大峯入峯の發心門として建てたもの、正平三年に足利勢が金の鳥居を焼いたことが太平記に見える。同寺の藏王堂、仁王門等の再興せられた康正年間には少くとも再興せられてゐたと思はれ、木割太く笠木、烏木等の薄くして反りの少い形狀は明らかに古制を傳へてゐる。その構造は柱は中空の鋲圓筒を横上げ中に心木を建て、烏木・笠木・貫は木心に厚一寸程の鍔銅板を覆つたものであるため、寶永三年の類焼の際も木心を焼いたのみで、正徳元年直ちに再建し、明治二十八年大風に倒れ、一時解體收藏されてゐたが間もなく木心部を取替へて再建した。鳥居の大部分は少くも室町時代の形態を傳へる貴重な遺構である。圖三一

### 昭和十七年度國寶建造物維持修理實施狀況

昭和十七年度維持修理履成建造物  
昭和十七年中に於て維持修理の竣成せ

る國寶建造物は左の通りである。(竣成順)  
一 二七

層、入母屋造、檜皮葺  
養林庵は慶長六年加傳和尚の開基にして伏見城より移建せしものと云ふ、近年軸部の弛緩、屋根、小屋組材の腐朽著しく、今回復體修理が行はれるに至つたものである。

妙心寺浴室

京都府京都市右京區花園妙心寺町心寺 明治四十五年二月八日指定  
構造形式・桁行六間、梁間前五間、後三間、單層、切妻造、本瓦葺  
本浴室は桃山時代に建立されたものであるが、近年軸部の弛緩著しく今回復體

修理を施すことゝなつたもので、屋根棧

瓦葺を本瓦葺に改め舊態に復された。

靈山寺本堂

奈良縣生駒郡富尾村 靈山寺 明治三

十二年四月五日指定 構造形式・析

行五間、梁間六間、單層、入母屋造、

本頁贅

本堂は弘安六年に再建されたもので、

その後再度の修理を加へられたが、近年

建物各部の腐朽破損甚しく爲に全部解放

して根本修理を加へたのである、修理中、

後世改變された個所が明らかとなつたの

で次の現状變更を行ひ舊規に復された。

一、正面中央三間及兩側面前方各二間

の部戸下方假棧戸なるを半番に改

[illegible]

二、正面兩端各一間の冠木長押、

降村唐戸なるを曾輒降村唐戸に改

三、右側面第三間の眞壁を冠木長押附

板唐戸に改む。

四、左側面第三間及右側面第五間の真



壁を召合方立入引違板戸に改む。  
五、左側面第四間の幣軸附板戸なるを召合方立入引違戸に改む。

六、左側面第五間及右側面第四間の片引戸を召合方立入引違戸に改む。

七、後陣左内陣側柱一間の眞壁を召合方立入引違戸に改む。

八、後陣右内陣側柱一間の片引戸を召合方立入引違戸に改む。

九、左脇陣後面一間片引戸、右脇陣後面一間開放なるを眞壁に改む。

一〇、内陣外陣境三間及内陣兩脇陣境各前方二間の欄間、格子戸なるを鴨居を下げ欄間、召合方立入格子戸に改む。

一一、外陣兩脇陣境各一間の舞良戸を鴨居を下げ召合方立入舞良戸に改む。

一二、内陣左側後端一間の格子戸、同右側後端一間の片引戸を欄間、召合方立入格子戸に改む。

一三、軒の支柱を撤去し、縁勾欄を舊規に整へ、之に伴ひ縁構造及縁出を整備す。

一四、向拜虹梁及向拜柱の形式を整備す。

一五、妻飾の細部形式を整備す。

姫路城いノ門、ろノ門、にノ門、にノ門東方上下土塙、いノ門東方土塙

西端部

兵庫縣姫路市本町 國 昭和六年十二月十四日指定

構造形式。いの門脇戸附高麗門、屋根本瓦葺、ろノ門、脇戸附高麗門、屋根本瓦葺、にノ門兩櫓式櫓門、屋根本瓦葺、にノ門東方上下土塙銃眼十所本瓦葺、にノ門下土塙、銃

眼六所、本瓦葺、いノ門東方土塙控壁五所、銃眼三十三所、本瓦葺、ろノ門附屬、

姫路城の維持修理は昭和十年より毎年四萬三千圓の工費を以て續行中、昭和十六年四月より昭和十七年三月までの間に於て上記の建造物の修理が行はれた。

法隆寺北聖院本堂及表門

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺 明治三十七年二月十八日(本堂指定)、明治四十四年四月十七日(表門指定)

構造形式。本堂桁行三間、梁間三間、單層入母屋造本瓦葺、表門、一戸平唐門、檜皮葺。

本堂は明應三年の建立、その後大凡三回の大修理を受けてゐる、第一回は相當古い時代に行はれ、第二回は寛文十二年次は文化九年である、この寛文、文化の兩度に姑息的な改修を行つたことが今回の解體修理によつて明瞭となつたので痕跡に據り左記現狀變更を行ひ舊規に復された。

一、背面軒下の附加物を撤去し縁を設く。

二、背面中央間小脇板附開口なるを板扉に、兩脇間開放なるを壁に、兩側面後端間各引違戸なるを眞壁となし、兩側面前方各二間の引違戸の形式を改む。

三、屋根の棧瓦假葺なるを檜皮葺となし、妻立所を改め、妻飾を整備す。

四、内部天井の抑上部分を舊規に復し、同時に前方に移動す。

五、東側庇の平面を整へ、軒廻り及軸部を復舊し、且つ屋根の瓦葺なるを板葺に改む。

六、東側庇の間棟線天井を化粧屋根裏に改め、北半間に板天井を設く。

七、南側廣縁の南端に脇障子を設け、廣縁の東に落縁を設く。

昭和十七年度維持修理中建造物

十七年中に於て維持修理を繼續し或は維持修理に着手し未だ竣成せざる建造物は左表の如くである。

名 稱 所在 著 工

法隆寺舍利殿繪殿及傳法堂、五重塔、崇源寺四間門

圓福寺本堂 奈良 一七・三

吉水神社書院 奈良 一六・三

岩船寺三重塔 京都 一七・三

宇治上神社々殿 京都 一七・一

鎮神社本殿 滋賀 一七・八

稻荷神社古宮神社社殿 滋賀 一七・八

一乘寺三重塔 兵庫 一六・一

八幡神社本殿他二棟 和歌山 一七・一〇

東照宮社殿 茨城 一七・一一

國分寺本堂 香川 一六・二

諏訪神社々殿 静岡 一四・一

尚ほ晋州蘆石樓(寶物第二七六號)の屋蓋を補修する工事に着手、慶州九黃里三層石塔(寶物第一九五號) 高仙寺址三層石塔(寶物第一九七號)に夫々解體修理を加へたり。慶州九黃里三層石塔の解體に當りては、第二層屋蓋上端中央部に窪みを作り、その中に鍍金青銅製の函、蓋裏に神龍二年に限定させる長久の鐫銘あるものを入れ、更に函には金佛像二軀、舍利を納めたりと考へらるる金裝盒以下數點(朝鮮總督府博物館昭和十七年度新收品參照)を収めたるを發見せり。

昭和十七年度朝鮮總督府發掘調査事業概況

樂浪古墳

昭和十七年初夏、朝鮮總督府は小泉・小野・大島・米田・中村・榎本等をして平壤府石岩町所在石岩里第二一五號及同第二一九號墳の調査を行はしめたが、前者は已に盜掘を経たものであつて副葬品に殆どみるべきものなく、只封土及木槨の構造に特異なものがあつたに過ぎなかつた。然るに後者は封土及木槨の構造に於て特異なるのみならず、副葬品に於ても從來曾つてみぬ特殊な品々があつて近來の調査としては稀れにみる好成績を擧げることが出来た。

墳形はもと方壘形であつたと推定され、その内部は頂上から木槨の上に通じて、恰かも地平下の堅墳に照應する如くに墳を穿ち(この地平上の封土の堅墳は穿つといふよりむしろ封土をそのやうに築いたとすべきやうであるが、それには尙問題があるので、暫くこれをも「穿た

れた竪堀」と假稱しておく、木柩の上部では特に四邊に上壁を築いてゐた。而して埋葬にはこの竪堀の中空に土砂を充たしたといふまでもない。この下の木柩はその外側に珍しく粘板岩の板材を繞らせ、尙柩床下にも亦この材をしきつめてゐた。木柩は四壁及床とも角材を以て構成し、中間仕切を以て仕切つた左右東西に各二重の木柩を安置して、頭位の北と西及中央の空所には夫々副葬品を収めてゐた。二重柩の何れも内柩外柩には金銅四葉金具を貼装してゐたが、漆とともに殆ど原形を保たず、棺形自身が已に破壊して僅かに西棺(男)の外棺のみがや、形を存したに過ぎぬ。

副葬品は前述の各空所に夫々種類に應じて群をなして収められたもので、西側には主として輿車・馬具・武器具、北側及中央には漆器銅器等の器什調度類であつたが、尙東南隅にも輿車・馬具類がおかれてゐた。東棺(女)内には佩玉・指環・銅印の外に漆器があり、西棺内には釧・刀子・冠帽・指環・鈎具・櫛・枕・銀・木印等があつて、特に銀印は龜鈕、白文の印字は「王根信印」とあり、この古墳が王根の墳墓なることを明かにした。

従來から注目されてゐる漆器は、この古墳で殆ど完全なものを發見しなかつたが、しかしその殘缺・破損したもの、うちに明らかに金蒔繪を施したもの、存在を檢出したことは、それが樂浪古墳に於てである點、その源流の詳かでないかつた漆工藝史に重要な意義を齎すものである。また馬具の一類と推定されるのに玉嵌の銀打古文装具一括があるが、この打

出文は麒麟かと思はれる動物を打出してゐて、北方系の名残を留めた樂浪古墳では最初の發見例であり、武器では漆小札の漆甲も亦最初の例として注意を惹き、武器では弓・弩の外に、従來その關係が明確でなかつた銅鏃・銅鏃類と樂浪置物との結合が、この古墳に於ける銅鏃及銅鏃とも關係ある鏃鏃一類の發見によつて明確になつたことは、是等の今後に於ける攻究に寄與するところが大きい。

發掘終了後一應の整理を経て、是等は同年十一月廿五日から同廿九日に至る五日間、總督府博物館に於て特別に展覧し、一般の觀覽に供した。

### 扶餘寺址

扶餘神宮造營工事に伴ひ、扶蘇山城中併つて文様博の斷片を拾得せる山城の西南に突出せる臺地を、米田、藤澤、天野等に依りて發掘、中門址、塔址、金堂址竝に廻廊址と想定せらるべき建築址を檢出した。廻廊址の一部には瓦積基壇を遺存せるも、他は岩盤を削本し基壇を造れる痕跡と一部石材の遺存するものが認められた。

又扶餘都市計劃施行の進捗に伴ひ、將來公園となるべき大唐平百濟碑銘を有する五層石塔(所謂平濟塔)の周圍も前記の諸氏によりて發掘調査し、十七年中には、塔の前方に中門址、後方にして石佛との中間に金堂址、石佛を中心として講堂址と想定すべき礎石下に詰石の遺存せるを發掘したるも、寺址全體の規模を察する程度に至らず冬期に入つたため中止された。

# 昭和十七年度美術文獻目錄

## 凡 例

一、茲に採録する文獻は我が國に於いて昭和十七年中に發行された單行本、定期刊行物及び諸新聞掲載のものである。

一、東洋古美術文獻採録の範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理その他のものについても美術に關係あるものは適宜之を採録した。

一、現代美術文獻目錄は明治大正以後の美術に關するものを輯めた。

一、西洋美術に關する文獻は便宜上別に一括して採録した。

一、建築に關しては、本書本文の凡例に記した範圍に限定した。

一、物故作家及美術關係者の項は本年度中に歿した人々の記事に限つた。

一、現代美術文獻目錄に於て各項目内の配列は、單行本にあつては書名による五十音順、定期刊行物所載文獻にあつては所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。但し展覽會批評及昭和十七年度物故作家評傳は雜誌別によらずして題目別にまとめた。

一、古美術文獻に於ける各項目内の配列は、雜誌名五十音順によらず、類似の項目をなるべく同一箇所に收めた。

一、本目錄作製の爲採録せる定期刊行物及び新聞紙は左の通りである。

イ タ リ ヤ 大 阪 朝 日 大 阪 毎 日 改 造

畫 說 畫 論 季 刊 美 術 京 都 新 聞

昭和十七年度美術文獻目錄

建築雜誌	建築雜誌	建築史	建築世界	古美術
工 藝	工 藝 ニ ュ ー ス	考古學雜誌	國 華	
國 畫	國學院雜誌	國際文化	國 寶	
國民精神文化	國民美術	史 學 雜誌	師範大學講座	
史迹と美術	史蹟名勝天然紀念物	思 想	新 風 土 記	新 美
新 愛 知	新 建 築	清 閑	造 形 教育	
新 美 術	生 活 美術	中 外 商業	圖 畫 工作	
茶 わ ん	中央公論	東京朝日	東京帝國室博 物館講演集	東 美
帝國學士院紀事	東京朝日	東京新聞	南 畫 鑑 賞	
東京日日	東方學報(東京)	東方學報(京都)	日本諸學 委員會研究報告	汎 工 藝
陶 磁	東洋史研究	讀 書 新聞	福 岡 日日	
日伊文化研究	日本建築士	日 本 諸 學	文 部 時 報	
日本讀書	日本美術	日本美術協會報告	立正大學論叢	
美術研究	美術工藝	美術新報		
文 化	文 藝	文 藝 春秋		
三田評論	三田文學	都 新 聞		
大和繪研究	大和志	讀 賣 新聞		
歴史教育	歴史地理	歴史日本		

# 目次

## 定期刊行物所載文獻

### 現代美術關係文獻

#### 論文及隨筆

總說	雜誌別五十音順
日本畫	〃
洋畫	〃
彫刻	〃
工藝	〃
建築	〃
作家論	人名別五十音順
物故作家及美術關係者	〃
時評	雜誌別五十音順
身邊雜記	〃
雜	〃
明治大正以降美術	〃
滿支南方諸國	〃
展覽會記事及批評	〃
綜合展覽會	題目別五十音順
日本畫展覽會	〃
洋畫展覽會	〃
彫刻展覽會	〃
工藝展覽會	〃
遺作展覽會	〃

#### 其他展覽會

#### 行政及教育

行政	雜誌別五十音順
教育	〃

### 古美術關係文獻

總說	雜誌別五十音順
繪畫	〃
彫刻	〃
建築・庭園	〃
工藝	〃
書蹟・印章・文書	〃
考古學・歷史・地誌	〃
雜	〃

### 西洋美術關係文獻

總說	雜誌別五十音順
繪畫	〃
彫刻	〃
工藝	〃
建築	〃
其他	〃

### 單行圖書

#### 現代美術關係單行圖書

總說	書名五十音順
繪畫	〃

#### 畫集評傳等

#### 版畫・圖案

畫集評傳等	一四四	一六〇
版畫・圖案	一四四	一六〇
工藝	一四四	一六〇
彫刻	一四四	一六〇
建築	一四四	一六〇
教育	一四四	一六〇
雜	一四四	一六〇

### 古美術關係單行圖書

總說	一四四	一六
繪畫	一五〇	一六
彫刻	一五一	一六
工藝	一五三	一六
書蹟・印章	一五五	一六
建築・庭園	一五六	一六
歷史・考古學・地誌	一五七	一六
雜	一五七	一六

### 西洋美術關係單行圖書

總說	一五七	一六四
繪畫	一五八	一六四
彫刻	一五九	一六四
其他	一五九	一六四

現代美術關係文獻 (定期刊行物所載)

論文及隨筆

總說

繪畫における普通と歴史の再考	植村慶千代	論九	古今遠近 目的藝術としての繪畫	西堀 一三	同	同	日本の性格と造形文化	松本 敏	同	一六ノ一
傳統と體験	土方 定一	同	俳諧の輕みと繪畫の輕	森口多里	同	同	藝術の精神	谷内 尙文	同	一六ノ一
建設期に於ける日本美術様式の性格	北川 桃雄	同	生活と美術	井島 勉	同	二ノ一〇	美における東洋と西洋	植田壽藏	中央公論	五七ノ一
浪漫主義覺書	青柳 正廣	一二	動因と主題	兒島喜久雄	同	二ノ一一	和の空間	金原 省吾	南畫鑑賞	一一ノ四
古典に就いて	澤柳大五郎	一三	藝術と夢	中島 健藏	國民美術	二ノ一	時代と藝術	赤松 義廣	同	一一ノ四
古典の享受について	岡崎 義惠	同	東洋の非情	小林太市郎	思想	二四七	定の肯定	岡田 清	同	一一ノ七
古典美術と吾々	兒島喜久雄	同	繪畫の翻譯について	川路 柳虹	新美術	九ノ五	日本美術に於ける否	荒城 信龍	同	一一ノ一
寫實精神と傳統精神	内田 巖	一五	新文化建設と畫入	大森 啓助	同	六	寫眞の世界	岸田 國士	同	同
新日本美術の方向	河北 倫明	一六	美術と技術の交流	中井宗太郎	同	八	國民生活と美術文化	小室 翠雲	同	同
藝術の用途	中島 健藏	一ノ一	主題とモチーフ	加茂 儀一	同	九	日本精神に就いて	高村光太郎	同	同
わが畫論	武者小路實篤	一ノ二	勤勞者と繪畫	土方 定一	同	一一	内面的力量の問題	藤懸 靜也	同	一ノ二
繪畫と線畫	ブローグリスチヤンペン	一ノ三	固有色	鈴木 舜一	同	一二	美術の日本性格	野口米次郎	同	一ノ三
油繪畫家と日本畫畫武者小路實篤	大成龍雄譯	同	風景美論	須田國太郎	同	一五、一	寫實主義の理想	兒島喜久雄	同	同
家の素描について	柳 宗悦	一ノ九	日本美術の諸問題	柳 亮	同	六	日本の美に就て	長谷川如是閑	同	一ノ四
信と美との一致について	石井 眞華	一ノ三	古典の技巧	土方 定一	生活美術	二ノ三	日本人の美觀	齋藤 劉	同	一ノ六
用と美	龜井勝一郎	一ノ三	簡素の美	大口 理夫	同	二ノ七	日本美術の日本文化に於ける位置	長與 善郎	同	一ノ七
求道と唯美	藤澤 親雄	同	繪畫鑑賞に就いて	梅田 操	同	八ノ四	生活文化としての造形美	小池 新二	日本美術	一ノ八
世界史轉換期に於ける日本の理想	秋山 謙藏	二ノ二	日本美術文化論	松田 哲男	同	八ノ五	日本美とモメンタリテット	山際 靖	同	一ノ八
歴史の創造と藝術	野村 重臣	二ノ六	線の造形效果	清水 虎雄	同	八ノ六	近代繪畫の再檢討	矢部 友衛	美術新報	二三
大東亞新文化創建の秘論	川路柳虹	二ノ七	傳統と創造	上代 晃	同	八ノ六	古典的教養について	田近 憲三	同	二六
美術の島國性と海國性	三枝 博音	二ノ七	美の日本學の建設	木村 素衛	同	八ノ一〇	日本新日本風景美(特輯)	黒田 篤心	同	三一
繪から見た日本の技術の一つの特徴に就て	國畫	二ノ七	藝能科と技術	山際 靖	同	八ノ一〇		中西 悟堂	同	
藝術至上主義の否定	秋山 謙藏	二ノ八	空間感覺	木村 素衛	造形教育	八ノ一一		川島 理一郎	同	
			民族美術の創成	岡田 清	同	同		遠藤 教三	同	四四
								金原 省吾	文藝春秋	二〇ノ八

色彩學體系

和田 三造 圖畫工作 一六ノ一  
關 秀光 一〇、一



人生と藝術

コンラッド・三田評論  
メイリ

古今の「海戦畫」について  
田邊 至 東朝 五・二七

日本の美（座談會）  
志賀直哉 日本讀書 九・一四

繪畫の健全性  
坂本繁二郎 福岡日日 一・三・二

茶道の功德  
柳 宗悅 都 一・三〇

日本畫

日本の素描  
奥平 英雄 畫論 五

現代日本畫境論  
横川毅一郎 同 一〇

日本畫の寫生——特に應舉の寫生を中心として——  
鈴木 進 同 一五

日本素描論  
大工 理夫 季刊美術 一ノ三

現代日本畫家論  
藤森 順三 季刊美術 一ノ四

日本畫境に於ける古徑彥の位置  
大口 理夫 同 同

現代日本畫の動向  
田口 信行 同 同

有栖川公園國史繪畫館壁畫を觀る  
豊田 豐 國畫 二ノ三

日本畫と美術精神  
久松 潜一 同 同

大東亞共榮圈と日本畫  
佐波 市 同 同

佛印に於ての日本畫  
藤田 嗣治 同 同

日本婦女圖考  
木村 重夫 同 二ノ四

現代日本畫論  
金原 省吾 同 二ノ五

現代日本畫と國民性  
岡崎 義恵 同 同

大和繪の新領域  
金井 紫雲 同 二ノ六

日本の南畫と支那の南畫  
原田 尾山 同 二ノ七

南畫私觀  
鈴木 進 同 同

日本畫の戰爭表現に就ての考察  
大山 廣光 同 二ノ八

日本の風景畫  
鈴木 進 生活美術 二ノ三

鑑賞掛圖考  
西田 秀雄 造形教育 八ノ四

巻頭言  
小室 翠雲 南畫鑑賞 一・二

日本精神と日本的南畫  
坂崎 坦 同 一・二

南畫の論理  
旭 泰宏 同 一・二

自然の形と色  
竹内 栖鳳 日本美術 一・一

伊豆深木・兒玉希望對談  
金井 紫雲 同 一・二

初夏の自然と花鳥畫  
島田 墨仙 同 一・三

課題藝術としての日本畫  
田近 憲三 畫論 七・五

素描  
岡 廐之助 同 七・八

油繪を描く  
同 新美術 一・一

油繪マチエールの話  
同 同 一・二

繪具の化學  
コンラッド・メイリ 同 九

裸體のエテュードの重要性と藝術の基本  
赤城 泰舒 同 一〇

水彩用材隨筆  
瀨本作次郎 同 一一

油繪と油繪具  
コンラッド・メイリ 同 一二

現代西洋繪畫の危機  
同 同 一三

油彩畫に於ける新しい現實  
同 同 一四

形體の研究  
山本 隆亮 造形教育 八ノ一

日本人の油繪  
藤島 武二 日本美術 一ノ一

新人素描  
木村 莊八 同 一ノ二

半生の畫業を顧みて  
石井 柏亭 美術新報 二四

油繪と國民性座談會  
柳 廐之助 同 二八・二

二科の中堅新人  
岡田 力蔵 美術新報 三六

水彩畫の技法  
尾川 多計 同 三九

水彩畫はいづこに行  
渡邊 菊二 同 四四

油繪と傳統  
富田 溫一郎 同 同

洋畫の材料克服  
小堀 進 同 同

彫刻  
金原 省吾 文藝 一〇ノ五

新制作派彫塑部と記念碑試作  
四宮 潤一 畫論 一五

戰爭と記念形象  
今井 兼次 建築世界 三六ノ一

彫刻藝術の立場  
本郷 新 新建築 一八ノ三

記念碑の造型  
同 新美術 一二

彫刻に表れた戰爭美術  
西田 正秋 生活美術 二ノ二

日本彫塑の動向を繞つて  
本郷 新 日本美術 一ノ三

青年彫塑人層を往く  
大藏 雄夫 同 一ノ六

昭和十七年度彫塑界の諸問題  
同 同 一ノ八

彫刻界の新人  
同 美術新報 二一

工藝  
日本工藝の性格 長谷川如是閑 畫論 五

部落の生活文化  
小池 新二 同 同

人形師天狗久翁  
久米 惣七 同 同

決戦下の工藝道  
藤井 達吉 同 一二

創造物資とその意匠  
川本 釣一 建築雜誌 五六ノ六

樺太アイヌ・ギリヤーク・オロツコの工藝  
河野 廣道 工藝 一〇七

民藝と東北	柳 宗悦	同	同	工藝への認識	金子徳次郎	同	工藝品の題	石田幹之助	東京	一〇・二
宗教と工藝	村岡 景夫	同	一〇九	工藝時言	大島 隆一	同	一六ノ一	日本美術	同	一九
工藝としてのゴチック・ロゲンドルフ	同	同	同	戦時下工藝の緊急問題	高村豊周	同	一ノ二	純日本建築の南方性	藤島亥治郎	八
信仰・典禮・工藝	ヒルデブラ	同	同	人形の含有美と傳統	西澤 笛畝	同	一ノ四	建築家は如何にして	松井 清足	五ノ六
民藝館の仕事	柳 宗悦	同	一一〇	工藝談叢	廣川松五郎	同	一ノ八	職域奉公可きか	山脇 巖	八四
民藝館小史	村岡 景夫	同	同	工藝家としての一私考	楠部彌次	同	二〇ノ一	パンコックの建築と	秋元 惇明	五ノ六
玩具の色彩	同	同	一一ノ二	大東亞に迎ふる工藝	柴崎 風岬	同	同	其生活に就て	同	八六
新體制と工藝の美の	國井喜太郎	同	一一ノ三	美術保存のいきさつ	山本 純民	同	同	大東亞建築グラフ	同	五ノ六
檢定	同	同	同	漆器制作と漆の質に	柴崎 風岬	同	同	大東亞建築に就ての	岸田日出刀	五ノ六
泰國の玩具を見る	國井喜太郎	同	一一ノ五	就て	霜島 之彦	同	同	建築造型への自覺に	杉浦 光一	五ノ六
日本精神と工藝	同	同	同	藝家新年を迎へて工	同	同	同	大東亞建築に就ての	等	九〇
近代文化と工藝美術	岸田 國士	同	一一ノ八	藝家に寄す	大山 廣光	同	同	大東亞共榮園の建築	伊藤 述史	五ノ六
工藝風土記	同	同	同	新春工藝集感	沈 立	同	二〇ノ二	大東亞共榮園の建築	同	九〇
工人氣質の保存	國井喜太郎	同	一一ノ九	印象	同	同	同	建築新體制要綱	建築聯合協	五ノ六
美術工藝の立場	川路 柳虹	同	同	工藝報國に關する座	同	同	同	樣式	議委員會	九二
科學と建築工藝	伊藤 正文	同	一一ノ一	工藝攻勢辨	大山 廣光	同	同	大東亞建設記念營造	同	五ノ六
實用品の美化	國井喜太郎	同	二ノ一	大平洋の三日間と工	杉田 不堂	同	同	計畫(丹下建三案、	同	九三
稿と獨樂文様の蒔繪	吉野 富雄	同	二ノ一	藝家	同	同	二〇ノ二	田中誠案、道明榮次	同	九三
に就て	同	同	同	漆報國に關する座談會	越田 尾山	同	二〇ノ三	善寺登喜次案等)	同	九三
家庭生活と美術愛	伊藤部敬子	同	二ノ四	茶と心	谷内 治橋	同	二〇ノ四	競技設計審査評	前川 國男	同
土地々々の使用の美	菊岡 久利	同	二ノ六	最近佛印に於ける漆	同	同	二〇ノ六	建築と壁畫	安田 豐	同
生活用具の規格化樣	生活造型研	同	二ノ七	事情と今後の漆工藝	福岡 萍哉	同	二〇ノ七	建築の傳統と創造に	星野 昌一	同
式化について	究會	同	二ノ八	奈良井と蕎麥道具	杉田 不堂	同	二〇ノ七	計畫と防空	前川 國男	同
木曾の漆器—工藝の	金子徳次郎	同	二ノ一〇	工藝美術の社會的價值	柴崎 風岬	同	二〇ノ七	建築の傳統と創造に	土屋 純一	同
旅—	佐藤潤四郎	同	二ノ一〇	工藝美術の實際的價值	家 家	同	二〇ノ七	大東亞共榮園に於ける	杉浦 光一	同
鮮滿に硝子を尋ねて	山脇 洋二	同	二ノ一〇	今日の工藝美術運動	同	同	二〇ノ七	南方建築展を見る	西山 卯三	同
材料の問題	新田 廣光	同	二ノ一〇	に就て	柴崎 風岬	同	二〇ノ七	二階建住宅の研究	鈴木 和夫	同
作業・能率・家具	劍持 勇	同	二ノ一〇	工藝美術運動と日華	柴崎 風岬	同	二〇ノ七	住宅と防空	中野 馨一	同
工藝に於ける制作	長谷川如是閑	同	二ノ一〇	共榮園と日本工藝の	津田 信夫	同	二〇ノ七	茨城の民家	今井 兼次	同
精神	同	同	二ノ一〇	進出座談會	高村 豊周	同	二〇ノ七	航空碑設計覺書	同	同
裝飾藝術の話	須山 計一	同	二ノ一〇	工藝界の新人達	大島 隆一	同	二〇ノ七	同	同	同
工藝美	森田龜之助	同	二ノ一〇	工藝の分立を排す	山崎覺太郎	同	二〇ノ七	同	同	同

耐火建築の防火について	塚本孝一	同	三六ノ三	都市整備計画と「永遠の都」	板垣鷹穂	日伊文化	四	川合玉堂	國民美術	二ノ一
大和傳説地の民家	山口正	同	同	日本の防空建築はこんなものでよい	戸塚端	日本建築	三〇ノ二	小磯良平	新美術	一〇
防空建築を觀る	鈴木愿一郎	同	同	文化工作と建築	蔵田周忠	同	三〇ノ五	竹中郁	東朝	四・一四
英彦山麓の一民家	潮見美那	建築世界	三六ノ四	防空と建築	柳瀬駿	同	三〇ノ六	藤森順三	季刊美術	一ノ三
建築家の自己批判	後藤三郎	同	同	眞に日本的な建築	友田燕	同	三〇ノ一	坂本繁二郎	東朝	一・一
建築工事現場用語集	田中誠	同	三六ノ六	この頃の小住宅	佐藤四郎	同	三〇ノ二	今泉篤男	季刊美術	一ノ四
平泉の民家	櫻井良雄	同	同	人格―建築時言	藤井羊三	同	三〇ノ三	安田毅彦	造形教育	八ノ一二
建築と偶像	加藤良一	同	同	日本都市と建築	前田松韻	中商	三・二四	山下新太郎	日本美術	一ノ一
中南洋の建築事情	水谷武彦	同	三六ノ一	今後の建築	星野昌一	同	五・五	山本安曇氏を語る	新美術	五・九
北四國の民家	近藤泰次	同	三六ノ七	日本建築の眞諦	伊東忠太	都	一・二四	現代日本畫人觀序説	汎工藝	二〇ノ三
原始日本建築に於ける柱と平面との關係	西川驍	同	三六ノ八	現代建築と色彩	板垣鷹穂	同	五・一〇	現代日本畫人觀序説	神崎憲一	同
民家雜記	三田克彦	同	三六ノ九	忠靈塔の日本的性格	岡田哲郎	同	一・一三	現代日本畫人觀序説	石川幸三郎	日本美術
	菅谷泰昌	同	三六ノ一〇		同		七・三〇	大家五十年來の業績	同	一ノ八
	伊豆の一民家	田島俊彦	三六ノ一	作家論	大山廣光	國畫	二ノ三	人々を語る	川路柳虹	美術新報
	伏見の一民家	高橋實	同		森口多里	新美術	八		大藏雄夫	同
	吾國都市計畫の發展	宮脇泰一	同		孝橋謙二	日本美術	一ノ三		今北乙吉略歴及作品	神崎憲一
	過程に就て	時實丹一	同		川路柳虹	美術新報	二四		川村曼舟追悼	中井宗太郎
	備前の一民家	同	三六ノ一		國畫	二ノ四			制作略年譜	添田達嶺
	北鮮の一民家	浦部清良	同		松本亦太郎	同			木村武山追悼	同
	白川街道	中野馨一	同		金剛寺	吉副清方	同		木村平五郎略歴及作品	諸家
	建築史學	三宅敏郎	同		上村松園	上村松園	新美		葛西萬司追悼	同
	建築史觀	板垣鷹穂	同		豐田豐	同	九ノ一		略歴及作品	同
	建築と壁畫―建築家と畫家の座談會―	同	二二六		大木理夫	季刊美術	一ノ二		竹内栖鳳追悼	樂之軒生
	大東亞建築建設の前に	西山卯三	同		鈴木進	同	九ノ四		石崎光瑤	畫論
	住居建築家覺書	同	一八ノ一		同	同	同		同	同
	屋根	水谷武彦	同		同	同	同		同	同
	建築とイデヤ	同	二ノ四		同	同	同		同	同
	建築の×面性	同	二ノ六		同	同	同		同	同
	建築と裝飾	今井兼次	同		同	同	同		同	同



團結と犠牲の力	谷萩那華雄	同	戦争畫の示唆	柳 亮	同	海女—民族隨筆	太田 三郎	新美術	九
五審査員の横顔	辻本和兵衛	同	戦争と繪畫	藤田 嗣治	東日	奈良・京都・松江	曾宮 一念	同	一一
東京側十審査員のプロフィール	石川宰三郎	同	大東亞戰下の畫壇	今泉 篤男	福岡日々	隨筆「甲陽猿橋之圖」	鈴木信太郎	同	一二
現在工藝美術界の大勢	柴崎風卿	同	空襲と文化施設	青戸 精一	讀賣	僕の教室	關口 俊吾	造形教育	八ノ一、
新しい現實—大東亞戦争と藝術—	森口 多里	同	身 邊 雜 記			和歌山縣の寫生地	鍋井 克之	同	八ノ一、
畫壇に望む	藤島 武二	同	内のデッサン外のデッサン	石井 鶴三	畫論	座談	朝倉 文夫	同	八ノ八
造形藝術の動向と一考察	雨田 光平	同	素描の魅力	中川 一政	畫論	佛印より歸りて	藤田 嗣治	南畫鑑賞	一一ノ三
本年度日本畫壇の諸問題	木村 重夫	同	私の素描	兒島善三郎	同	雨花臺	河野 通勢	同	一一ノ一
日華親善は工藝美術より	大森 光彦	汎工藝	マチスとデッサン	猪熊弦一郎	同	南方に使用する	川端 龍子	日本美術	一一ノ一
藝術活動小論	高村 豊周	同	素描について	宮本 三郎	同	神社を巡る	伊原宇三郎	同	同
帝國藝術院工藝部會員に望む	柴崎 風卿	同	夜響亭昔話	錦木 清方	同	砲彈と泰然	池田 遙村	同	同
日本思想への還元	六角 紫水	同	南會津山村記(槍枝岐村を中心として)	吉井 忠	同	作家の悩み	小杉 放庵	同	同
決戦時下二千六百二十年の美術界に望む	川路省吾	美術新報	北支の旅—北京—	長與 善郎	季刊美術	時局隨想	中川 紀元	同	同
大東亞戰と藝術を語る	池上 武雄	同	看畫覺書	藤森 順三	同	秋しべ	加藤 顯清	同	同
	伊藤 仁博	同	杉山寧と雲崗石佛	小林 古徑	同	がめのはまんぢう	内田 巖	同	一一ノ二
	榎田 温根	同	佛印より歸りて	佐波 甫	國畫	新人點描	庫田 發	同	同
	櫻岡 了一	同	竹	木村 重夫	同	ある建設者	木村 莊八	同	同
	佐々木 了一	同	黒甜余録	秦 一郎	同	二十歳頃の思ひ出	水谷 清	同	同
東亞新文化と美術の問題(對談)	高村光太郎	同	大陸無言行	宮崎 井南	同	人さまさま	田中咄哉州	同	同
眼の教養といふこと	川路柳虹	同	美術家と眼	三輪 鄰	同	勝ちいくさ	川合 玉堂	同	同
最近の新人達	植村鷹千代	同	藤談機記	木村 重夫	同	佛像と大東亞建設日記	池田永一治	同	同
大東亞建設と桃山美術	神崎 憲一	同	隻語拾輯録	神崎 憲一	同	ある建設者	澤田 晴廣	同	同
戦争とビカソ藝術	飯塚米雨	同	隨想・その日その日	吉田 堯文	同	小旅二度	錦木 清方	同	同
今年的美術界を顧みる	成田 重郎	同	畫至斷想	島田 墨仙	同	花の命	會宮 一念	同	同
大東亞戰と美術	田澤田軒	同	鑑査所感	小室 翠雲	同	祖先を尋ねて	三谷十糸子	同	同
各展覽會を觀て	荒城 孝夫	同	ゐそらこと	麻生 磯次	同	作家の言葉	池部 釣	同	同
共同制作を思ふ	秦 一郎	同	京都	アウリツチ	同	あまのぢやく	三岸 節子	同	同
	同	同	岸田文化部長の講演を聴く	アウリツチ	同	作家の一面	福田平八郎	同	同
	同	同		新美	同	最近の制作	安井曾太郎	同	同

日本の山々	足立源一郎	日本美術	一ノ四
櫻島の美観	梅原龍三郎	同	同
琉球記	島海 青児	同	同
日本の海洋・湖沼及	黒田 鶴心	同	同
河川美	中村 善策	同	同
北海道の風物	上 司 小 劔	同	同
京阪地方の自然と生	堂 本 印象	同	同
活美	武者小路實篤	同	同
南海洗筆	深 田 久彌	同	同
無邪氣さ	山 岳 美	同	同
奈良公園	小 野 竹 荷	同	同
山水屏風讀作餘談	川 端 龍 子	同	一ノ六
南方篇四連作隨感	三 輪 龍 子	同	一ノ七
南方戰跡行	朝 倉 文 夫	同	一ノ八
藝術の眞實	有 島 生 馬	同	同
新京だより	高 村 豊 周	同	二〇ノ一
外游雜稿	木 村 天 紅	同	二〇ノ六
漆人の工作隨想	内 藤 泰 治	同	二〇ノ一
隨感	池 上 秀 敏	美術新報	一二
繪と隨筆	鐔 本 清 方	同	一五
	伊 東 深 水	同	一九
	宮 本 三 郎	同	一ノ一
	西 澤 三 郎	同	一ノ二
	飛 田 周 山	同	一ノ三
	野 田 九 浦	同	一ノ四
	岡 本 一 平	同	一ノ五
畫道の「道」といふ	廣 瀬 熹 六	同	一ノ六
古畫が教ふるもの	橋 本 關 雪	同	一ノ七
師走雜筆	三 輪 晃 勢	同	一ノ八
戰爭と畫人	中 川 一 政	同	一ノ九
三絶	有 島 生 馬	同	一ノ一〇
新京だより	橋 本 關 雪	同	一ノ一一
南方行に際して私の	橋 本 關 雪	同	一ノ一二
詩心	橋 本 關 雪	同	一ノ一三

南征拾遺	同	同	一ノ二八
わが畫壇の光榮	藤 田 嗣 治	同	一ノ二五
斷袖細袴	尾 川 多 計	同	一ノ二一
牛を造る	本 郷 新 都	同	一ノ二〇
偶感	岡 鹿 之 助	同	一ノ一九
菰に桃み絡りたり	川 端 龍 子	同	一ノ一八
戰爭畫に生きる	宮 本 三 郎	同	一ノ一七
往昔を偲ぶ人形座	林 鼓 浪	同	一ノ一六
南方の衣料	渡 邊 春 男	同	一ノ一五
畫家と文章	木 村 重 臣	同	一ノ一四
舞臺裝置の今日の話題	橋 本 欣 三	同	一ノ一三
漫畫論序説	須 山 計 一	同	一ノ一二
紙芝居雜記	川 尻 泰 司	同	一ノ一一
舞踊美の探求―特に	江 口 博	同	一ノ一〇
美術と關聯して―	ロベール・	同	一ノ九
白壁の生んだ戲畫	デスノオ	同	一ノ八
新京美術院日本留學	橫 川 毅 一 郎	同	一ノ七
研究生的一年	木 村 莊 八	同	一ノ六
聯盟公報	米 野 半 一 郎	同	一ノ五
造形人國記	造 形 教 育	同	一ノ四
立體紙芝居に就いて	中 居 定 雄	同	一ノ三
南畫と舞踊(座談)	河 野 桐 谷	同	一ノ二
外國人の日本美観―	吉 田 機 司	同	一ノ一
日本を訪れた人々―	竹 内 梅 松	同	一ノ〇
漫畫及び漫畫家の性格	荒 城 季 夫	同	一ノ九
宣傳美術としての紙	川 路 柳 虹	同	一ノ八
芝居	松 永 健 哉	同	一ノ七
白衣勇士の美術特輯	本 庄 繁	同	一ノ六

繪具時局色	中 島 今 朝 香	同	一ノ二・二
	花 岡 萬 青	同	一ノ二・二
	池 上 恒	同	一ノ二・二
	木 村 莊 八	同	一ノ二・二
明治大正以降美術	野 間 清 六	同	一ノ二・二
明治象牙彫刻の史的	森 銑 三	同	一ノ二・二
考察	野 間 清 六	同	一ノ二・二
乾也軍艦を造る	森 銑 三	同	一ノ二・二
天心遺跡赤倉山莊(座	脇 本 樂 之 軒	同	一ノ二・二
談)	清 見 陸 郎	同	一ノ二・二
岡倉天心の支那古美	藤 島 武 二	同	一ノ二・二
術調査	土 方 定 一 筆 記	同	一ノ二・二
思ひ出	寺 内 信 一	同	一ノ二・二
伊太利美術の移植と	新 納 忠 之 介	同	一ノ二・二
工部美術學校	吉 副 禎 三	同	一ノ二・二
岡倉・正木兩先生	西 澤 信 敏	同	一ノ二・二
勤王畫家森寛齋	杉 原 六 橋	同	一ノ二・二
勤王敬神の畫人鐵齋	藤 田 德 太 郎	同	一ノ二・二
先生	小 室 翠 雲	同	一ノ二・二
板倉槐堂と武市瑞山	添 田 達 愷	同	一ノ二・二
維新志士の遺墨	市 島 春 城	同	一ノ二・二
維新志士と南畫遣	黒 田 鳴 心	同	一ノ二・二
隠れたる勤皇畫人兒	鹽 田 力 藏	同	一ノ二・二
島基隆	獸 兵 衛 新 美	同	一ノ二・二
維新の變革期を顧み	中 村 莊 八	同	一ノ二・二
て國畫の消息を語る	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
天心先生三十周年	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
金子伯と岡倉天心	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
相樂園と故廣業畫伯	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
會の八人の故人	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
中村葬のこと	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
岸田劉生の人と藝術	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
長谷川利行の藝術	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
岡倉天心の現代的意義	中 村 秋 一	同	一ノ二・二
畫聖鐵齋	中 村 秋 一	同	一ノ二・二



柴田是真傳記	荒川 散步	東美	八	「三田派の美術史家」	武藤 金太	三田文學	一七ノ一	バラオのカノ小屋	友田 蕉	同
岡倉天心とインド行	清見 陸郎	南畫鑑賞	一一ノ六	覺書		三田文學	一七ノ一	カナカ族アバイの裝飾	山本祐弘	同
岡倉天心に就いて	金原 省吾	同	一一ノ九	故澤木四方吉先生十三回忌に際して(遺稿、肖像畫、著作年表)	赤井 謹一	大和繪研	一ノ五	フランス植民地に於ける民家	松村正恒譯	同
天心の「藝術鑑賞」を讀む	赤松 義磨	同	同	伊豆長八の遺跡	赤井 謹一	同	一ノ五	南洋バラオの思ひ出	山本 祐弘	同
岡倉天心先生を語る	河野 桐谷	同	同	富岡鐵齋翁を語る	正宗得三郎	新愛知	三・一四	東印度民族の建築	中西龍雄譯	同
赤倉山莊と天心先生	竹見 梅松	同	同	岡倉天心顯彰會の二事業	黒田 鷗心	東朝	六・二一	南方國の建築材料	藤島亥治郎	同
赤裸の天心	黒田 鷗心	同	同	春陽二十年	木村 莊八	東日	四・一〇	南方の三大遺跡	同	同
岡倉天心	鹽田 力藏	南畫鑑賞	一一ノ九	印度と岡倉先生	横山 大觀	同	九・二	熱帯地方住居建築に就て	エ・ウエイタス	同
天心先生の回顧	小高根太郎	同	同	滿・支・南方諸國				南方建築概説	大倉 三郎	同
フオンクネーと伊太利亞との想ひ出	鹽田 力藏	同	一一ノ一	安南人の藝術性と新興藝術	村松 嘉津	畫論	八	南方未見記	藏田 周忠	同
先覺者としての岡倉天心	清見 陸郎	日本美術	一ノ一	印度美術と回教美術の交流	タラ・チャンド	同	同	吉林の花瓦の圖案に就いて	大塚 正雄	同
文人としての森田恒友	荒城季夫	同	一ノ二	雲崗の石佛	西田 正秋	同	同	南洋諸島の人形	南洋軒舟人	同
三人の現在(溪仙、芋錢、雲坪に就て)	金原 省吾	同	一ノ三	南方美術座談會	柳 亮	同	同	南方陶甕の裝飾文様に對する考察	鷹巢 豊治	同
土田麥僊の人と作品	黒田 鷗心	同	同	佛印・泰の建築藝術	山尾 蕭明	同	同	瓜哇の工藝	井岡 咀芳	同
溪仙展をみて	辻本和兵衛	同	一ノ四	マニラ便り	藤岡 通夫	同	同	泰國の美術工藝	宮原 武雄	同
初期文展以後	田澤 田軒	同	一ノ六	ジャガタラと陶器	向井 潤吉	同	一・一	谷内技師に現下の佛印工藝事情を訊く	井岡大輔	同
常陸五浦の天心先生記念碑	齋藤 隆三	同	一ノ八	印度ミニアチュール	丹羽 吾朗	同	一・二	南方諸國の生活と工藝	官武 辰夫	同
明治大正水の名作の思ひ出	春山 武松	美術工藝	四	比島美術家及び比律賓美術協會のことなど	向井 潤吉	同	一・六	インドネシアの金屬工藝	勝見 勝	同
富岡鐵齋の人と作品特輯	水澤 澄夫	美術新報	一三	大同一支那文化に於ける胡の味について	長與 善郎	季刊美術	一ノ二	支那工藝文化の現状	小池 新二	同
明治の水彩畫家一淺井忠氏その他のこと	西澤 篤三郎	同	一七	佛印事情とアンコール	藤岡 通夫	建築雜誌	五六の六	南方の文化と生活	三吉 明十	同
岡倉天心先生を偲ぶ	石井 柏亭	同	同	泰國概観	鈴木 博高	同	同	南方國に於ける工藝資料としての植物資源	本田 正次	同
二科むかし話	横山 大觀	同	三〇	南方建築展記事	同	同	五六ノ六	ジャワのバチック更紗	勝見 勝	同
文展洋畫部の當初	中川 紀元	同	三六	ニューギニアの聚落	同	建築世界	三六ノ四	親日畫人王一亭翁を憶ふ	土屋計左右	同
文展今昔	石井 柏亭	同	四一	瓜哇の民家その他	佐藤 安男	建築世界	三六ノ五	瓜哇の藝術	川端 龍子	同
狩野芳崖について	金井 紫雲	同	四二	スマトラ・ボルネオ・セレベスの民家	同	同	三六ノ六	南方の建築藝術	藤岡 遼夫	同
明治初期繪畫の方向	河北 倫明	寶雲	二九	泰國事情と北部泰	加藤 秀明	同	三六ノ七	佛印と日本美術	藤岡 嗣治	同





山南會展  
豐田 新美 九ノ八  
珊々會第八回展 豐田 美術新報 二ノ一二

七絃會展  
木村 重夫 二ノ一  
七絃會展 木村 重夫 二ノ一

新美術院第五回展  
木村 重夫 二ノ一  
新美術院第五回展 木村 重夫 二ノ一

新美術人協會展  
村川彌五郎 同 一ノ三  
新美術人協會展 村川彌五郎 同 一ノ三

晨島社第二回展  
神崎憲一 國畫 二ノ一〇  
晨島社第二回展 神崎憲一 國畫 二ノ一〇

世紀美術創作協會第  
日足重亮 國畫 二ノ二  
世紀美術創作協會第 日足重亮 國畫 二ノ二

發草會展  
藤田健次 畫論 七  
發草會展 藤田健次 畫論 七

青丘會展  
豐田 同 二ノ三  
青丘會展 豐田 同 二ノ三

青々會第一回展  
佐波 國畫 二ノ六  
青々會第一回展 佐波 國畫 二ノ六

青龍社第十三回展  
神崎憲一 國畫 二ノ一  
青龍社第十三回展 神崎憲一 國畫 二ノ一

同 第十回展(春季)  
神崎憲一 國畫 二ノ一  
同 第十回展(春季) 神崎憲一 國畫 二ノ一

同 第十四回展(秋季)  
今泉 國畫 二ノ一〇  
同 第十四回展(秋季) 今泉 國畫 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

豐田 廣光 二ノ一〇  
豐田 廣光 二ノ一〇

北内 江村 同 一ノ六  
北内 江村 同 一ノ六

石川幸三郎 同 一ノ一  
石川幸三郎 同 一ノ一

岩切重雄 同 一ノ一  
岩切重雄 同 一ノ一

神崎憲一 國畫 二ノ九  
神崎憲一 國畫 二ノ九

大日美術第五回展  
山崎實夫 國畫 二ノ八  
大日美術第五回展 山崎實夫 國畫 二ノ八

大輪畫院第五回展  
木村 廣光 二ノ一  
大輪畫院第五回展 木村 廣光 二ノ一

津田青楓茶掛小品展  
木村 廣光 二ノ一  
津田青楓茶掛小品展 木村 廣光 二ノ一

東丘社第五回展  
木村 廣光 二ノ一  
東丘社第五回展 木村 廣光 二ノ一

讀畫會第三十五回展  
木村 廣光 二ノ一  
讀畫會第三十五回展 木村 廣光 二ノ一

日東美術院第一回展  
豐田 廣光 二ノ一  
日東美術院第一回展 豐田 廣光 二ノ一

日本畫院第四回展  
金井 廣光 二ノ一  
日本畫院第四回展 金井 廣光 二ノ一

日本畫家報國會軍用  
藤田健次 國畫 二ノ五  
日本畫家報國會軍用 藤田健次 國畫 二ノ五

機獻納作品展  
山崎實夫 國畫 二ノ五  
機獻納作品展 山崎實夫 國畫 二ノ五

日本劇畫院第一回展  
石川幸三郎 國畫 二ノ五  
日本劇畫院第一回展 石川幸三郎 國畫 二ノ五

日本女子美術院第二  
多田 廣光 二ノ五  
日本女子美術院第二 多田 廣光 二ノ五

同 日本美術院同人軍用  
齊田 廣光 二ノ五  
同 日本美術院同人軍用 齊田 廣光 二ノ五

機獻納作品展  
豐田 廣光 二ノ五  
機獻納作品展 豐田 廣光 二ノ五

日本美術協會第百十  
豐田 廣光 二ノ五  
日本美術協會第百十 豐田 廣光 二ノ五

美術新協第八回展  
木村 廣光 二ノ五  
美術新協第八回展 木村 廣光 二ノ五

歷程第八回展  
山中 廣光 二ノ五  
歷程第八回展 山中 廣光 二ノ五

北京展  
添田 廣光 二ノ五  
北京展 添田 廣光 二ノ五

一水會第五回展  
大口 理夫 一ノ一  
一水會第五回展 大口 理夫 一ノ一

同 第六回展  
久保 理夫 一ノ一  
同 第六回展 久保 理夫 一ノ一

植村千代守 新美 一ノ一  
植村千代守 新美 一ノ一

江川波村 新美 一ノ一  
江川波村 新美 一ノ一

石井和子 新美 一ノ一  
石井和子 新美 一ノ一

旺玄社第十回展  
柳 文夫 一ノ一  
旺玄社第十回展 柳 文夫 一ノ一

川端實澤歐作品展  
柳 文夫 一ノ一  
川端實澤歐作品展 柳 文夫 一ノ一

光風會第二十九回展  
柳 文夫 一ノ一  
光風會第二十九回展 柳 文夫 一ノ一

香坂茂吉第一回展  
山口 理夫 一ノ一  
香坂茂吉第一回展 山口 理夫 一ノ一

朝白會展  
大口 理夫 一ノ一  
朝白會展 大口 理夫 一ノ一

三巴會第一回展  
大口 理夫 一ノ一  
三巴會第一回展 大口 理夫 一ノ一

春陽會第二十回展  
江川波村 新美 一ノ一  
春陽會第二十回展 江川波村 新美 一ノ一

今泉 廣光 二ノ五  
今泉 廣光 二ノ五

江川波村 新美 一ノ一  
江川波村 新美 一ノ一

柳 文夫 一ノ一  
柳 文夫 一ノ一

矢野 文夫 一ノ一  
矢野 文夫 一ノ一

內田 武夫 一ノ一  
內田 武夫 一ノ一

柳 文夫 一ノ一  
柳 文夫 一ノ一

植村千代守 新美 一ノ一  
植村千代守 新美 一ノ一

矢野 文夫 一ノ一  
矢野 文夫 一ノ一

獨立美術協會第十二  
豐田 廣光 二ノ五  
獨立美術協會第十二 豐田 廣光 二ノ五

大平洋畫會第三十八  
豐田 廣光 二ノ五  
大平洋畫會第三十八 豐田 廣光 二ノ五

同 展  
豐田 廣光 二ノ五  
同 展 豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

豐田 廣光 二ノ五  
豐田 廣光 二ノ五

洋畫展覽會

彫刻展覽會



古典の享受について	岡崎 義惠	畫論	一三	美術史學界の動向	大口 理夫	歴史地理	五一四	支那藝術の抽象性	松本 雅明	南畫鑑賞	一一ノ二
古典美術と吾々	兒島喜久雄	同	一三	日本美術史	田中 一松	師範大學講 座歴史教育	一四	印度美術と回教美術 の交	タラ・チャ ントフ	畫論	八
時代と藝術 一、二	赤松 義磨	南畫鑑賞	一一ノ五	神道藝術に就いて	藤懸 靜也	古美術	一三五	印度文化南漸のあと	H・G・クオ ウエールズ	新美術	一二
美術の島國性と海國性	川路柳虹	國畫	二ノ七	聖德太子を中心とし たる美術史繪詞	同	美術工藝	一	ビルマに於ける文化 遺跡	瀧口修造譯 デウロアゼ	史學	二一ノ一
國民生活と美術	正木 篤三	國民精神 文化	八ノ七	藥師寺と白鳳美術	伊丹孝三郎	古美術	一四二	繪畫史發展の條件	植村應千代	畫論	一一
レアリズムの限界	柳 亮	新美術	一五、一	天平美術斷想	野間 清六	國華	六一九、 六二〇	「逆遠近法」に就いて	能代 莊蓬	畫說	六一
東洋藝術の味	近藤 春雄	南畫鑑賞	一一ノ一	奈良朝に於ける顏料 の種類上、下	望月 信成	美術工藝	六	再出發を要する逆遠 近法研究(素描篇)	能代 莊蓬	同	六九
日本美術と支那美術 上、下	瀧 精一	國華	六一四、 六一五	室生寺と弘仁美術	同	美術研究	一一一	「逆遠近法」に就いて	脇本十九郎	同	六七
日本美術と支那美術 下	正木 篤三	國民精神 文化	八ノ二	能阿彌本珠光宛 君臺觀左右帳記(公刊)	同	同	一二二	假山法(素描篇)	今村 龍一	同	六九
畫禪一味と詩禪一味	近藤 春雄	南畫鑑賞	一一ノ三	「塵芥」中の美術資料 (素描篇)	藤田 經世	畫說	六八	逆遠近法餘說(素描篇)	田中 喜作	同	七〇
日本藝術の特質	藤懸 靜也	日本諸學振興 委員會研究報告	一三	美術資料(素描篇)	同	同	六五	角度が示唆するもの (素描篇)	能代 莊蓬	同	六三
日本美術の日本文化 に於ける地位	長與 善郎	日本美術	一ノ六	光悦の人と藝術	渡邊 素舟	國畫	二ノ一〇	俯瞰法の研究	下店 靜市	同	六八
日本の美に就て	長谷川如是閑同	一ノ四		本阿彌光悦の藝術に 見る草花の世界上、下	山本 辰一	古美術	一三七	印度山嶽表現法の東漸	松本榮一	國華	六一八
美の日本的完成	山口 諭吉	茶わん	一三二	光悦のたらしこみ (素描篇)	秋山 大	畫說	六六	餘白に就て	高垣辨次郎	南畫鑑賞	一一ノ三
日本美とモヌメンタ リテート	山際 靖	日本美術	一ノ八	尾形乾山のひとと藝術	福井利吉郎	美術新報	二七	水墨の味	金原 省吾	美術新報	三三
美術の日本性格	藤懸 靜也	同	一ノ二	鴻の巢抄 一一三	樂之軒	畫說	六一一三	破墨と潑墨	鶴飼壬子郎	南畫鑑賞	一一ノ四
日本美術に於ける否 定の肯定	岡田 清	南畫鑑賞	一一ノ八	「續賞古游心録」上	九尾彰三郎	同	七一	日本の南畫と支那の 南畫	原田 尾山	國畫	二ノ七
古代美術の思辨學的 研究	小笠原秀實	日本美術	一ノ七	朝鮮・支那・印度・南方	同	同		南畫と林泉 一、二	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一、一ノ
日本美術論叢	野口米次郎	同	一ノ三	朝鮮の佛教藝術を語る	佐瀬直衛	古美術	一三五	古名畫に見たマレー の手長猿	下店 靜市	美術新報	一五
日本藝術に於ける秘 傳の意義	小宮 豊隆	日本諸學振興 委員會研究報告	一三	可無流知 一三、一	東伏見邦英	寶雲	二八	經軌に説かれたる十 二天	吉祥 眞雄	史迹と美 術	一四三
「なまめかし」の語義 とその文化史的意義	吉澤 義則	清閑	一四	四ノ慶州とところどころ	四、五	良	二九	東西版畫交渉の一面	小野 忠重	大和繪研 究	一ノ四
建設期に於ける日本 美術様式の性格	北川 桃雄	畫論	九	東亞の宗教藝術	佐藤 良	古美術	一三九	わが畫論	武者小路實篤	季刊美術	春季
日本美術史學の方向 に關する一考察	檜崎 宗重	大正大學 論叢	二	海東金石苑を中心と せる清・鮮文化交流 の研究 上、中	藤塚 鄰	東方學報 (東京)	一三ノ				
美術史學の發達	藤懸 靜也	日本諸學	一								



日本畫と美的精神	久松 潜一	國畫	二ノ三	聖衆來迎圖に見たる日本的性格	下店 靜市	美術新報	二一	春日明神の垂迹形上、下	龜田 孜	國寶	五一、五
繪畫に於ける描線と色彩	藤懸 靜也	大和繪研	一ノ五	來迎藝術的特質と鑑賞	大串純夫	同	同	地藏信仰と春日神社	松下 隆章	三田文學	一七ノ一
日本の風景畫	鈴木 進	生活美術	二ノ三	十二天畫像のpictorial notesと十二支獸	田中 重久	史迹と美術	一三八	二つの地藏菩薩畫像に就いて	三本問光正氏藏	國華	六一六
日本の風景畫	木村 重夫	美術新報	三一、三	法隆寺の壁畫と西洋畫	瀧 精一	國華	六二二	「宇佐八幡宮放生會繪圖」に就いて	景山畔四郎	國學院雜誌	四八ノ七
中世に於ける新しき風景の成立	風卷學次郎	國畫	二ノ三	法隆寺金堂壁畫の硏究	田中 重久	考古學雜誌	三二ノ一	日光三社權現像及役行者像	解說	國華	六一九
日本素描論	大口 理夫	季刊美術	夏季	興福寺北圓堂並びに南圓堂の壁畫	同	大和志	九ノ九	唐繪筆者(素描篇)	藤田 經世	畫說	六一
日本の素描	奥平 英雄	畫論	五	平等院鳳凰堂本尊後壁畫圖の主題について	數田嘉一郎	史迹と美術	一三七	平安時代の「唐繪」と「やまと繪」下	秋山 光和	美術研究	一二一
古今遠近	西堀 一三	國畫	二ノ八	聖觀音像	解說	美術研究	一二七	東寺山水屏風の問題	下店 靜市	清閑	一四
名所繪に就いて	近藤市太郎	史蹟名勝物天然紀念物	一九四	彌勒菩薩圖	解說	國華	六一九	大和繪の成立と南畫の影響	同	日本美術	一ノ二
外敵撃攘の圖	北川 桃雄	大和繪研	一ノ一	醍醐寺藏	解說	美術研究	六二五	大和繪に於ける神祕感の表現	小林太市郎	畫論	一二
日本婦女圖考	木村 重夫	國畫	二ノ四	普賢延命像	解說	美術研究	一二三	やまと繪に於ける庶民描寫の源流	中村 亮平	大和繪研	一ノ七
日本人創案の命題	近藤市太郎	美術新報	一九	不動明王像	解說	同	一二四	上代倭繪景物畫の硏究	家永 三郎	美術研究	一二七
琴棋書畫圖	小林源太郎	畫論	七ノ一〇	不動八大童子像	解說	同	一二五	新に知り得る一倭繪作家(素描篇)	同	畫說	六一
桃山時代の金碧障屏畫を檢討して其日本的人格に及ぶ上、下	土居 次義	日本諸學振興委員會研究報告	一三	山本發次郎氏藏	解說	國華	六二四	歌繪と蘆手	白畑 よし	美術研究	一二五
桃山時代の繪畫	同	美術工藝	二	醍醐寺藏	解說	同	六二四	上代に於ける肖像畫の硏究	窪田 空穂	國畫	二ノ六
二條城の障壁畫	秋山 光夫	國民美術	二〇一	愛染明王圖	解說	同	六二一	屏風の繪と和歌	伊丹孝三郎	古美術	一四〇
二條城の障壁畫	邑木 幸一	美術工藝	三	根津美術館藏	解說	同	六二一	莊飾經のこと	小林太市郎	國華	六一七
日本版畫史論 上、中	梶崎 宗重	國寶	五四、五	醍醐寺太元帥法本尊の筆者に就いて(素描篇)	赤松 俊秀	畫說	六八	平家納經考證	三、四、五	同	六一八
日本版畫形式史考	同	大和繪研	一ノ四	十王圖	解說	國華	六八	觀普賢經冊子	長尾欽彌氏藏	同	六一八
日本版畫の發達	藤懸 靜也	同	同	法相宗曼荼羅藏	解說	同	六二五	繪卷物の變遷	田中 一松	日本美術	一ノ一
丹靑若木集と畫工便覽 上、下	田中 豐藏	畫說	七〇九	根津美術館藏	解說	同	六二五	平安期繪卷物の史的位に就いて	飯島 勇	大和繪研	一ノ六
密教美術の傳統と日本的特質	上野 照夫	日本諸學振興委員會研究報告	一三	佛傳圖	解說	同	六二三	神社緣起の起源に就いて	大川 廣海	國學院雜誌	四六ノ二
佛畫の線と色	大串 純夫	大和繪研	一ノ五	神道の繪畫	一	今村 龍一	古美術	論叢	一三五	一	
藤原時代佛畫の彩色に就いて	野間 清六	日本美術	一ノ二	春日曼荼羅について	藤井 教順	大正大學	一				

繪卷に現はれた戦闘畫	奥平英雄	生活美術	二ノ二	四天王寺藏平政之筆	望月 信成	國寶	四九	帝室博物館藏木挽町	鷹巢 豊治	大和繪研	一ノ六
高山寺繪本復原再論	福井利吉郎	文化	九ノ六	聖德太子繪傳について	橋本喜造氏藏	國華	六二〇	狩野家模本を通じて	赤松 俊秀	畫說	六六
高山寺繪本と年中行事繪卷(美術史雜記)	同	同	同	後園融院御影	雲龍院藏	同	六一五	狩野正信の足利義尙	三田文學	一七ノ一	一七ノ一
蓮華王院寶藏と六道繪卷(美術史雜記)	福井利吉郎	同	同	源頼朝像	北條時宗像	谷 信一	二〇四	傳狩野元信筆「富士曼荼羅」に就て	江口 正一	畫說	一七ノ一
沙石集「阿彌陀利益事」(素描篇)	藤田 經世	畫說	六四	隆信と寂蓮(素描篇)	仲田勝之助	史蹟名勝天然紀念物	二〇二	松榮畫に關する研究	土居 次義	寶雲	二八
善財童子繪卷殘闕	解説	美術研究	一二三	明兆筆聖一國師像	東福寺藏	畫說	六二	等伯松林圖屏風(名品小解)	土居 次義	畫說	七〇
天神緣起繪卷	津田本と光信本	同	二二六	一休和尚像(名品小解)わきもと	帝室博物館藏	畫說	六九	就いて	土居 次義	美術	一三四
北野天神緣起繪卷詞書	校刊	同	同	肖像畫の流行と豐太	魚澄惣五郎	美術工藝	三	長谷川左近に關する	清閑	一、二、三合冊	一、二、三合冊
日枝神社所藏の山王靈驗記繪卷	藤懸 靜也	國華	六二二	豐太閣の肖像畫	同	國寶	四九	傳海北友松筆月下溪流圖	解説	同	六二五
東壁抄一	田中 喜作	清閑	一二、一三合冊	土佐派雜考	谷 信一	日本美術	一ノ三	友雪筆海北友松夫妻畫像	解説	同	六二五
駿牛圖卷考	森 暢	同	一四	土佐行廣考上	美術研究	一二七	海北正之の助氏藏	細川侯府家藏	わきもと	畫說	六八
騷牛圖殘闕に就いて(圖版解説)	同	寶雲	二九	土佐一派研究の一節	近藤市太郎	日本美術協會報告	六一	傳狩野山樂筆「花鳥圖」	解説	清閑	一四
御物蒙古襲來繪詞の研究	藤懸 靜也	大和繪研	一ノ一	水墨畫・狩野派の色と線	松下 隆章	大和繪研	一ノ五	狩野山雪に就いて	土居 次義	國畫	二ノ三
蒙古襲來繪詞の妙義	奥平 英雄	同	同	東山返景	笹川 臨風	日本美術	一ノ三	像の補作と狩野山雪	同	國寶	五二
御物蒙古襲來繪詞に就いて	田中 一松	國畫	二ノ二	妙澤と不動畫	秋山 光夫	畫說	六四	雲谷等益筆山水圖	解説	國華	六二六
蒙古襲來繪詞の妙味	荻野三七彦	同	同	傳宗湛筆山水圖	松永安左衛門氏藏	美術研究	一二五	佐々木昌興氏藏	解説	同	六二八
山緣起との復原に就て(美術史雜記)	福井利吉郎	文化	九ノ六	雪舟破墨山水考	下店 靜市	南畫鑑賞	一一ノ一	雲谷等哲筆琴棋書畫圖	解説	同	六二八
蒙古襲來繪詞順位の復原	池内 宏	大和繪研	一ノ一	秋月蘆雁圖(名品小解)わきもと	渡邊善十郎氏藏	畫說	七二	久岡守景筆靈照女及牡丹圖	解説	同	六二三
魔佛一如繪詞考	梅津 次郎	美術研究	一二三	牧松筆山水圖	守屋孝藏氏藏	國華	六二八	後陽成天皇宸筆鷹獵芝	葛盛	同	六二四
魔佛一如繪詞考(公刊)	同	同	同	仲安眞筆布袋圖	根津美術館藏	解説	六二四	維御繪 高松宮家御藏	近藤市太郎	大和繪研	一ノ二
法眼圖伊について	林屋辰三郎	畫說	六三	尙量筆神農圖	桂泰藏氏藏	解説	六二〇	歐洲繪畫の東漸とそ	藤懸 靜也	同	同
一過聖繪筆者の考證	秋山 光夫	同	七二	結城合戰繪詞の出現	同	同	同	南蠻美術概説	同	同	同
上瑠璃繪卷	小林源太郎	畫論	一一								

開國文化と洋風繪畫	貴船 眞琴	美術新報	二六	酒と乾山 (美術史雜記)	同	同	同	青木木米筆「春景山 水圖」(名品鑑賞)	村田 良策	同	一一ノ三
近世邦人の南方發展 と繪畫	小野 忠重	大和繪研	一ノ三	日本南宗畫の源流	田中 喜作	美術研究	一二七	谷文晁筆林逋齊像に 就いて(素描稿)	谷 信一	畫說	七二
南蠻屏風追想言	永見德太郎	美術新報	二六	日本精神と日本的南畫	坂崎 坦	南畫鑑賞	一一ノ二	高久露庄雜進	人見 傳藏	南畫鑑賞	一一ノ一
南蠻雜話	高柳 光壽	大和繪研	一ノ二	南畫の論理	旭 泰宏	同	一一ノ四	高久露庄筆雪山行旅圖	解說	國華	六二二
長崎洋畫の道程	永見德太郎	同	同	望玉繪割記	森 銑三	畫說	六八	華山初期の作品	菅沼 貞三	日本諸學振興 委員會研究報告	一三
洋風畫に於ける線と 色彩の問題	近藤市太郎	同	一ノ五	池大雅の畫業 ―その描線に及びつゝ―	人見 少華	南畫鑑賞	一一ノ二	華山の花鳥畫	同	三田文學	一七ノ一
初期洋畫研究の一方 向―秋田藩の蘭畫について―	太田 桃介	同	一ノ三	池大雅評傳 一四	森 銑三	國民美術	二ノ一	華山の寫實	井上 昇三	畫論	一五
傳信方筆彈琴圖 解説	美術研究	一二六	大雅を繞りて	河野 桐谷	日本美術	一ノ三	一ノ三	田原藩御日記抄 一 ―三―華山傳資料―	大須賀初夫	南畫鑑賞	一ノ七
池長美術館藏 羅漢寺の阿蘭陀繪 (素描稿)	仲田勝之助	畫說	七一	大雅を繞りて	人見 少華	清閑	一一ノ一	田原藩御日記抄につ いて	菅沼 貞三	同	一一ノ七
南蠻屏風に描かれた るカビタン・モール について 上、下	外山卯三郎	大和繪研	一ノ二、 三	國寶「大雅堂の懷繪」 高野山通照光院藏(名品鑑賞)	鈴木 進	南畫鑑賞	一一ノ一	渡邊華山筆惡鬼退散圖	解說	國華	六二四
宗達に就て	武者小路實篤	國畫	二ノ一〇	柳里恭と池大雅の洋 風畫	山本 辰一	古美術	一三五	守屋孝藏氏藏	鮎澤信太郎	歴史地理	五〇四、 五〇五
宗達四季草花下繪光 悦書歌卷	矢代 幸雄	美術研究	一一一	法明院の障壁畫 ―大雅・應舉の模繪その他―	土居 次義	美術工藝	九	渡邊華山の世界地理 研究 上・下	鮎澤信太郎	國華	六二二
宗達蓮花小禽圖 馬越恭一氏藏(名品小解)	わきもと	畫說	六七	大雅燕村「十便十宜 畫冊」(名品鑑賞)	村田 良策	南畫鑑賞	一一ノ一	椿松平直顯氏藏	解說	國華	六二二
宗達高安圖扇面 帝室御物(名品小解)	同	同	七一	燕村の繪畫に於ける 二重性の問題 二	岡 直己	同	同	渡邊立の椿山先生を 祭るの文	相見 香雨	日本美術 協會報告	六一
宗達雜話	谷 信一	國畫	二ノ一〇	燕村の佛畫の發生 畫業―妙心法寺を中心として―	清水 孝之	美術工藝	三	立原杏所筆松鷹圖	解説	國華	六二一
相說筆四季草花圖に 就いて	田中 喜作	美術研究	一二五	丹後時代に於ける燕 村の修業	同	同	六四	菊池謙二郎氏藏	藤懸 靜也	大和繪研	一ノ八
尾形乾山筆花籠圖	添田 達嶺	國畫	二ノ一〇	燕村蘇鐵圖(名品小解) 妙法寺藏	わきもと	同	六二	天龍道人王璫	森 銑三	南畫鑑賞	一一ノ一
乾山のハッ橋(素描稿) 大口 理夫	畫說	九ノ六	萬の細道屏風 兼霞堂の日記(隨筆)	大口 理夫	古美術	一三九	圓山四條派論	鈴木 進	大和繪研	一ノ八	
光琳乾山の渡世に交 渉の深かつた一人(美術史雜記)	文化	九ノ六	宋紫石とヤン・ヨン ストン著禽獸魚介蟲譜	人見 少華	美術工藝	九	日本畫の寫生 ―特に應舉の寫生を中心として―	同	畫論	一五	
乾山圖錄序	同	同	浦上玉堂	岡村 千曳	茶わん	一三三	櫻齋翁追薦展畫錄 (校刊)同解題	田中 喜作	畫說	七〇	
繪卷物と乾山 (美術史雜記)	同	同	玉堂覺書	古川 北華	美術新報	二三	吳春筆山水圖 解説	國華	六二〇		
乾山の尙古と斬新 (美術史雜記)	同	同	田能村竹田筆山水詩 畫帖 解説	水澤 澄夫	美術新報	六二三	吳春筆千利休像 橋本喜造氏藏	同	六二六		
乾山と兄光琳との仲 (美術史雜記)	同	同	竹洞の逸話	森 銑三	畫說	七〇					
乾山と兄光琳との仲 (美術史雜記)	同	同	中林竹溪のことども	同	南畫鑑賞	一一ノ八					

吳春十三回忌追薦展 觀(素描篇)	田中 喜作	畫說	六二	蒙古襲來の版畫	松木喜八郎	大和繪研	一ノ一	俳幅の話	小林 逸翁	三田文學	一七ノ一
流芳遺事(校刊)同解題	同	同	六一	荻川師平筆風俗圖屏風 武内金平氏藏	解説	國華	六一六	俳趣とところどころ	鈴木 仁一	大和繪研	一ノ八
爲恭の天保施米圖卷 橋本喜造氏藏	解説	國華	六一五	春信版畫の巨川と沙鷗	森 銑三	畫說	六五	繪馬の話	北條 時宗	古美術	一三五
萬延元年の岡田爲恭 讃岐に來遊した顛末 (素描篇)	逸木 盛照	歴史地理	五〇六	「巨川と沙鷗」について (素描篇)	仲田勝之助	同	六七	倭扇雜考	野間 清六	大和繪研	一ノ六
爲恭の歌と今様 (素描篇)	同	畫說	六一	「巨川」と巨川傳の 問題	榑崎 宗重	同	同	朝鮮・支那・印度・南方	佐藤 良	美術新報	二四
田中訥言	山田 秋衛	國畫	二ノ一	歌麿の藝術	藤懸 靜也	美術新報	四五	新東亞藝術の課題と しての支那畫の問題	佐藤 良	生活美術	二ノ六
田中訥言先生	森村 宜永	南畫鑑賞	一一ノ四	歌麿に關する三題事 項の研究	滄洋 學人	大和繪研	一ノ七	支那繪畫の特質	ローレンス ・ビニヨン 村田育二譯	古美術	一三六
字喜多一蕙齋遺事 上、下	相見 香雨	國畫	二ノ一、	清長の大版役者繪 上、下	吉田 暎二	同	一ノ四、	支那繪畫の鑑賞	尾崎 洵盛	古美術	一四三
露艦入港と字喜多一蕙 藤森成吉	美術新報	一四	一四	寫樂と阿波侯	仲田勝之助	同	一ノ四	佛影窟考	松本 榮一	國華	六二〇
字喜多一蕙と安政疑獄 村松梢風	日本美術	一ノ一	一ノ一	初代豐國筆「三國社 頭圖」を前にして	高橋誠一郎	三田文學	一七ノ一	唐朝の繪畫	西丸 小園	書道	一、一ノ
海如利上と藝術家と 田中 海應	畫說	七〇	七〇	北齋の肖像畫に就て	織田 一磨	古美術	一四二	宋元畫の寫實 徐熙の問題	堂谷 憲勇	畫論	一五
阿國かぶきの圖	三井 高大	大和繪研	一ノ八	三代宗理と北齋の關 係	佐藤章太郎	大和繪研	一ノ八	支那山水畫論講話	河野 桐谷	南畫鑑賞	一、一ノ
觀能圖 解説 武内金平氏藏	國華	六一七	六一七	葛飾北齋の美術館建 設提唱	織田 一磨	南畫鑑賞	一一ノ七	花鳥畫題 「薛稷について」	堂谷 憲勇	文化	九ノ六
大津繪	美術工藝	一	一	廣重と生花版畫	山中保之輔	古美術	一四一	板畫記 大陸に於ける十六・七 世紀の銅圖像について	澁井 清	三田文學	一七ノ一
浮世繪史 一―四	大村 文夫	古美術	一三七―	安田雷洲雜綴	小野 忠重	新美術	一七	支那繪畫史の創始者 伊勢專一郎 寶雲	支那	二八	
日本版畫の民族的特 性とその歐洲繪畫へ の影響―様式交流に就いて―	榑崎 宗重	畫論	六	司馬江漢(隨筆)	中井宗太郎	美術工藝	九	下―故内藤湖南博士 の一遺業	熊谷 宜夫	畫說	六七
浮世繪と印象派 柳 亮	同	同	同	晚年の司馬江漢 上	西村 貞	日本美術	一ノ八	營城子古墳壁畫に關 して	同	同	七一
浮世繪の勃興と江戸 文化 上、下	玉林 晴郎	大和繪研	一ノ四、	亞歐堂田善 上	旭 泰宏	日本美術	一ノ八	漢畫像碑 大埠閣集古錄其六	堂野前種松	畫論	一六
浮世繪の境界 下	榑崎 宗重	南畫鑑賞	一一ノ一	畫人としての平賀源内	入田整三	歴史日本	一ノ一				
浮世繪版畫と問屋制度 高橋誠一郎	國華	六四	六四	白隱禪師の道畫	神山 白士	南畫鑑賞	一一ノ八				
浮世繪と時代風俗	江馬 務	國畫	二ノ四	木村靜隱の新資料に 就いて	鷹巢 豐治	古美術	一三九				
長崎版畫の研究餘地	永見德太郎	茶わん	一三二	畫僧愛石の研究	山本 辰一	茶わん	一三三				
浮世繪の武者繪及職 爭畫	長瀬 武郎	生活美術	二ノ二	畫僧白雲の終焉地に て	太田 桃介	南畫鑑賞	一一ノ一				

願燈之の雲雲山記	米澤嘉園	國華	六一七、六二一、六二二、六二五	王石谷筆扇面山水圖	解說	國華	六一四	神像(其一)	松田福一郎	古美術	一三九
下月大師の藝術	上、小林太市郎	思想	六二九、二四〇	宋旭筆山水圖	解說	同	六一九	見ゆる諸尊	田中重久	文化	九〇六
傳倭宗筆水仙鶴圖	解說	美術研究	一二四	清・高鳳翰筆「老松圖」(名品鑑賞)	村田良策	南畫鑑賞	一一ノ四	法隆寺金堂彫刻群の年代	相澤泰洋	歴史日本	一ノ四
傳牧溪筆洞庭秋月圖	解說	同	一二二	黃慎筆人物畫冊	解說	國華	六二五	甲州の塑像斷片に就いて	野間清六	古美術	一四〇
公卿徳川家正氏藏	同	同	一三三	南嶺片影	神田喜一郎	畫說	六七	白鳳彫刻私考	金森遼	美術研究	一二五
李營邱秋霜漁浦圖	堂野前種松	畫論	一三	郎世寧筆柳馬圖	解說	國華	六一五	白鳳の原型性	金原省吾	美術新報	二九
大陣閣集古錄其四	わきもと	畫說	六四	佐々木昌興氏藏	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一一ノ一	奈良時代の彌勒淨土弘仁の行動性	金原省吾	美術新報	一四二
傳趙昌筆林樹花圖	同	美術研究	一二六	盧山の煙雨	松本榮一	國華	六二一	鎌倉時代の彫刻に就いて	田澤坦	日本諸學振興委員會學報	一三三
秋江漁艇圖	阿部孝次郎氏藏	畫說	七二	倣皇本十王經圖卷雜考	同	同	六二一	鎌倉彫刻	大口理夫	大和繪研究	一ノ八
高桐院の宋元畫	田口信行	國華	六一七	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	運慶の登場	澁江二郎	茶わん	一三二
院畫四季山水圖卷	同	同	六一九	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	運慶承のよみ方	藤田經世	大和志	六六
守屋孝藏氏藏	同	同	六一九	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	「運慶顯經」の奥書	太田古朴	大和志	九〇九
秋冬山水二圖	同	同	六一九	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	大和路の非國寶古佛像一、二	田口信行	大和繪研究	一ノ六
守屋孝藏氏藏	同	同	六一九	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	武藏國分寺の佛像	澁江二郎	畫說	六三
黃公望江山勝覽圖卷	堂野前種松	畫論	一四	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	丹波達身寺の佛像	丸尾彰三郎	同	六六
大陣閣集古錄其五	同	美術工藝	五	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	出雲地方の佛像	同	同	六六
江山雪齊圖卷を觀て	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	續賞古遊心錄	同	同	六六
王維を聽く	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
元畫白衣觀音圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
武藤金太氏藏	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
朱德潤筆山水圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
守屋孝藏氏藏	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
陳汝言筆山居高隱圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
齋藤才三氏藏	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
品茶圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
阿部孝次郎氏藏	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
律天如筆水仙梅花圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
宮垣義隆氏藏	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
仇英筆金谷園・桃李園圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
智恩院藏	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
明・仇英修禪圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
明・唐伯虎山路松聲圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
董其昌溪山仙館圖	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
戴文進山水	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五
沈石田九段錦畫冊	同	同	六一六	倣皇本十王經圖卷	解說	同	六一四	法隆寺金堂釋迦(名品小解)	同	同	六五

日向藥師寶城坊の本  
尊拜觀  
久志 卓貞 古美術 一三九

田中藥王寺の荒彫像  
(素描稿)  
三森 達夫 畫說 六六

夢殿觀音と百濟觀音  
百濟觀音は日本作  
田中 萬宗 大和繪研究一ノ七 美術新報 一六

法隆寺佛像の再檢討  
兩寶院千手觀音立像  
川勝政太郎 史迹と美術一四一

(資料)附淨土院  
彌陀坐像、報土寺彌  
陀立像  
木村 小舟 茶わん 一三二

美江寺觀音拜觀記  
金剛寺如意輪觀音像  
松下 隆章 大和繪研究一ノ七

西大寺四王堂安置の  
十一面觀音像の造立  
米山 徳馬 史迹と美術一四一

三河平勝寺觀音像と  
平勝親王  
稻村 坦之 國寶 五三

虚空藏菩薩像 解説  
法輪寺藏  
美術研究 一二七

安祥寺五智如來像と  
同寺舊藏五大虚空像  
田中 重久 史迹と美術一四四

備後淨土寺騎師文殊  
像と南都津波居佛師  
若井 富藏 大和志 九ノ一

愛知の鐵造地藏尊  
香取 秀眞 畫說 六九

醍醐寺吉祥天造立願  
文(素描稿)  
藤田 經世 同 六三

清涼寺帝釋天像  
丸尾彰三郎 三田文學 一七ノ一

元慶寺の梵天・帝釋  
二像(資料)  
川勝政太郎 史迹と美術一三七

戒壇院四天王  
鶴飼壬子郎 清閑 一二、一  
三合冊

淨瑠璃寺四天王像の  
造立年代に就いて  
金森 遼 日本美術 六一  
協會報告

鷲峰四王像考  
若井 富藏 史迹と美術一四二  
日本美術 六二  
協會報告

榮山寺十二神將像に  
就いて  
澁江 二郎 史迹と美術一四〇

橘寺の觀部日羅像に  
就いて  
田中 重久 史迹と美術一四〇

快慶作東大寺僧形八  
幡像に就いて  
赤松 俊秀 寶雲 二八

聖德太子像 解説 下村仙氏藏  
金峯山寺聖德太子像  
と納入遺物  
太田 古朴 美術研究 一二三  
史迹と美術一四五

岐阜縣神戶山五社の  
神像  
景山畔四郎 同 一四〇

油日神社本殿の舞樂  
圖彫刻  
川勝政太郎 同 一四三

笠置磨崖石佛小考  
瀧坂朝日觀音考  
同 同 一三五  
同 同 一四一

地藏峯寺石佛と石大  
工行經  
同 同 一四四

京東古銘選釋八、  
和東漢彌勒磨崖佛  
同 同 一四一

伎樂面  
伎樂に於ける崑崙に  
就いて  
三井 高大 古美術 一四〇  
野間 清六 考古學雜誌三二ノ一

舞樂面(古美術隨想)  
能面製作の藝術的意  
圖  
三井 高大 古美術 一三五  
野上豐一郎 日本諸學振興 一三  
委員會研究報告

朝鮮・支那・印度・南方  
新たに見出された新  
羅の十二支彫像  
有光 毅一 考古學雜誌三二ノ一

西山靈光寺所見の一  
近代佛像臺座に就いて  
島田 正郎 同 三二ノ三

六朝時代に於ける佛  
像形成の問題  
森岡 美子 文化 九ノ六

雲岡の石佛  
雲岡石佛と我が國  
西田 正秋 畫論 八  
南畫鑑賞 一一ノ一

雲岡石窟調査記一昭  
和十四、十五、十六年度  
大同一四支那文化に於  
ける胡の味について  
雲岡石窟 調査班 東方學報 一三ノ一  
長與 善郎 季刊美術 春季

泰の古代佛像彫刻  
アンコールの彫刻  
川島理一郎 美術新報 一八

ボロブドゥルとジャ  
バ彫刻  
土橋 醇一 同 同

健陀羅菩薩像 解説  
根津美術館藏  
川路 柳虹 同 同  
國蓮 六二〇

### 建築・庭園

建築美學(遺稿)  
日支に於ける建築曲  
線の成立  
足立 康 建築史 四ノ二

建築と壁畫  
谷 重雄 同 四ノ三

鴟尾考  
安田 豐 建築雜誌 六九三

造庭藝術小論  
東西庭園の比較  
松本文三郎 東京學報 一三ノ一  
(京都)

久川 正雄 古美術 一三九  
日本諸學振興 一三  
委員會研究報告

純日本建築の南方性  
日本古建築に於ける  
堂階  
藤島亥治郎 畫論 八  
大岡 實 建築史 四ノ一

規矩木刻より見たる  
日本建築  
同 同 日本諸學振興 一三  
委員會研究報告 四ノ四

藤原時代の規矩  
同(二)  
同 同 同 四ノ五

三佛寺投入堂  
大和の大工藤井氏  
日本の古塔  
乾 兼松 同 同

縱と横  
法隆寺から桂へ  
柳 亮 史迹と美術一三六  
大岡 實 古美術 一三七  
新美術 一〇

四國路の旅 魚島村  
同 同 畫說 六四

同 祥雲寺觀音堂  
同 同 同 六五

同 國分寺本堂  
同 同 同 六七

同 丸龜城その他  
同 同 同 六九

上代に於ける神社建  
築の發展  
福山 敏男 日本諸學振興 一三  
委員會研究報告 四ノ四

春日造形社殿の分布  
に關する一考察  
黑田 昇義 建築史 四ノ四

鳥居に就て  
福山 敏男 古美術 一三五

神宮の鳥居  
同 同 史蹟名勝 二〇九  
天然紀念物

神宮の八重櫛  
同 同 建築史 四ノ三

宇治離宮と宇治上神  
社拜殿  
同 同 同 四ノ五



熱田神宮鎮皇門と加藤清正	近藤 喜博	史迹と美術 一三五	北筑紫の宮寺(下)	白井 源吉	新風土記 一八	日本の築庭と石の發見	久門正雄	古美術 一三五
香取神宮本殿	福山 敏男	建築史 四ノ五	豊公造營の建築	藤原 義一	美術工藝 二	山水并野形圖一―四	龍居松之助	國寶 四五一―四
甲良社本殿	大岡 實	同 四ノ三	城と古美術	鳥羽 正雄	古美術 一三九	毛越寺趾(圓隆寺庭園)解説	森 蘊	國寶 五〇
古建築小解其五	同	同 四ノ一	所謂「複連結式」天守に就いて	藤岡 通夫	畫說 六五	年中行事繪卷と東三條殿庭園	同	同 五〇
八坂神社本殿の形式	福山 敏男	同 四ノ一	安土のセミナリヨについて	岡田 章雄	同 六八	大和の庭園	清水 卓夫	大和志 九ノ二
神佛習合の一遺例に就て	奥田 眞啓	史蹟名勝 二〇四	三州岡崎城天守に就て(論文梗概)	藤岡 通夫	建築雜誌 六九二	河原者と作庭	吉永 義信	史蹟名勝 一九五
都城時代に於ける宅地班給について	關野 克	建築史 四ノ四	小田原城天守とその模倣に就て(論文梗概)	同	同 六九二	室町時代名園の性格	田村 剛	美術新報 三三
河内國中河郡に於ける條里遺制の新例について	山本 博	考古學雜誌 三二ノ六	伏見城に關する研究(二―五)(論文梗概)	城戸 久	同 六八四、六八九、六九二	書院庭の美的要素	龍居松之助	國寶 五三
長岡京の條坊(資料)	福山 敏男	建築史 四ノ一	江戸城の枳形城門	大熊 喜邦	新風土記 二一	初期慈照寺庭園の作者に就いて	芳賀幸四郎	畫說 六一
奈良春日山中の香山寺趾について	毛利 久	考古學雜誌 三二ノ七	史蹟龍岡城五稜郭	大井 傳重	歴史地理 五〇四	寶前供養としての禪宗庭園―西芳寺と龍安寺の庭―	中村 楚溪	日本美術 一ノ四
栗原寺の露盤に就いて(詩演)	足立 康	建築史 四ノ二	同 補遺	同	同 五〇五	醍醐寺三寶院庭園	田中倉琅子	三田文學 一七ノ一
國分寺に就いて	太田 靜六	古美術 一四二	上野の靈屋建築に就て(一、二)	田邊 泰	新風土記 七六、二	豐公の庭園趣味	吉永 義信	史蹟名勝 二〇一
上野國分寺伽藍の研究(論文梗概)	同 正一	建築雜誌 六九二	泉殿の考察 上・下	太田 靜六	考古學雜誌 三二ノ九	高臺寺雜記	重森 三玲	美術工藝 二
新藥師寺金堂について	千葉 眞章	考古學雜誌 三二ノ八	(論文梗概)	同	建築雜誌 六八九	庭奉行としての小堀遠江守	森 蘊	同 四四
興福寺東金堂の造營	黒田 昇義	國寶 四七	平清盛の邸宅に就いて上・下	同	史蹟名勝 一九八、一九九	桂御別業之記について	同	新風土記 一八
淨瑠璃寺本堂に關する疑	同	史迹と美術 一四一	君臺觀左右帳記の建築的研究―室町時代の書院及茶室考―	堀口 拾巳	美術研究 一二二、一二六	京都皇居御庭園と二條城庭園	重森 三玲	日本美術 一ノ四
鳳凰堂の構想	北川 桃雄	日本美術 一ノ六	金地院の新方丈・有樂好數寄屋(資料)	森 蘊	建築史 四ノ一	江戸時代庶民の遊園	關口鏡太郎	史蹟名勝 一九三
鳳凰堂十六懸觀の表現	田中 重久	考古學雜誌 三二ノ三	宿禰の本陣と其の建築 一―四	大熊 喜邦	史蹟名勝 一九八、二〇一	東海寺の庭園	森 蘊	建築史 四ノ一
現大寺南大門の創建時代に關する一考察	黒田 昇義	大和志 九ノ四	五箇山に於ける大家族住宅の建築に就て(資料)	佐藤 富雄	建築雜誌 六八二	京都古銘選釋 一字治橋斷碑	黒田 昇義	史迹と美術 一三四
京都古銘選釋 六	眞如堂木造上梁銘板	史蹟と美術 一三九	緒方洪庵私宅私塾の遺構	森 政三	史蹟名勝 二〇四	近江大講附近の石造美術(資料)	山田 弘通	史迹と美術 一三四
金閣の造營年代(資料)	森 蘊	建築史 四ノ一	日本庭園の源流とその形態について	森 蘊	建築史 四ノ三	石燈籠新講 四・五	川勝政太郎	同 一四一
東福寺三門の建築について	太田博太郎	同 四ノ一						
和歌山市鷺森本願寺別院御主殿及對面所の建築に就て	大熊 喜邦	同 四ノ三						
播磨小神廢寺	鎌田木三次	史蹟名勝 二〇三						
	天然紀念物							

紀伊總社三部明神社 石燈籠其他	田中 重雄	同	一四〇
密教寺院に於ける多 寶塔の意義 上・下	金森 遼	國華	六二三、 六二四
大和の石造寶塔	黒田 昇義	大和志	九ノ九
龍泉寺三重石塔(資料)	川勝政太郎	史迹と美術	一四二
紀伊定福寺の石造層 塔(資料)	田中 重雄	同	一四五
下乘石塔に就いて	川勝政太郎	同	一三八
算聖關孝和墓に就て	矢吹 活禪	國寶	五一
山の古建築	藤原 義一	美術工藝	六
古建築の避暑符	川勝政太郎	史迹と美術	一四二
古社寺保存會の想ひ出 ——伊東忠太博士を圍む座談會——	大脇 正一	史迹と美術	一三四
偶考二章	朝鮮・支那・印度・南方	畫說	六四
朝鮮の城(素描篇)	岡田 秀雄	同	六二
北鮮の校倉(素描篇)	同	同	六二
扶餘・百濟五層石塔 の意匠計畫(論文梗概)	米田喜代治	建築雜誌	六八九
林本源別墅庭園を觀 る	丹羽 木聖	史蹟名勝 天然紀念物	一九四
遼代佛塔概説 (論文梗概)	村田 治郎	建築雜誌	六八四
遼慶州城址の白塔	竹島 卓一	國華	六一六
滿洲國朝陽の遼代碑 文と佛塔(論文梗概)	村田 治郎	建築雜誌	六九二
五臺山紀行 上、中、 下	伊東 忠太	史蹟名勝 天然紀念物	一九三、 一九五、 一九六
北魏天安元年曹天度 塔銘について	西川 寧	史學	二一ノ一
水槽子其他石造物の 制度營造法式通解其八	竹島 卓一	建築史	四ノ一
宋代に於ける木刻の 單位營造法式通解其九	同	同	四ノ三
宋代に於ける科栱の 種類營造法式通解其一〇	同	同	四ノ四

宋代に於ける栱の制 度營造法式通解其一一	同	同	四ノ五
明代の一經幢	村田 治郎	國寶	五一
山東省滋陽縣の興隆 寺塔(論文梗概)	同	建築雜誌	六八九
南方の建築藝術	藤岡 道夫	國際文化	一八
南方の三大遺跡 上、 下	藤岡 治郎	建築世界	七、六ノ 三、八ノ 九
アンコール・ワット 上、下	伊東 忠太	史蹟名勝 天然紀念物	一九九
アンコール遺蹟	藤岡 道夫	新建築	一八ノ五
巨大な石宮殿	高田 秀二	古美術	一三五
アンコール・ワット 佛印事情とアンコー ル(講演)	藤岡 通夫	建築雜誌	六八二
佛印・泰の建築藝術	同	畫論	八
泰國の寺院と塔	鈴木 博高	新建築	一八ノ二
泰國の佛塔建築	藤岡 通夫	畫說	六二
チエンマイの古寺	同	新建築	一八ノ二
ボロブドゥル佛蹟	同	同	一八ノ九
印度文化巡歴 建築	伊東 忠太	國際文化	二一
クメール建築裝飾と チャム建築	藤岡 通夫	新建築	一八ノ六
クメール文様 (素描篇)	同	畫說	六六
工藝と風土 用と美	勝見 勝	大和繪研究	一ノ八
宗教と工藝	石井 眞峯	工藝	一一二
日本の工藝の性格	村岡 景夫	同	一〇九
豐公時代の笠師と塗師	長谷川如是閑	畫論	五
農村手工藝運動の意 義——農民美術より民 藝への展開——	藤壘 樸庵	美術工藝	三
民藝と東北	中村 精	工藝	一〇八
挿繪小註 東北の民藝	柳 宗悅	同	同
陸中雜記	同	同	同
奉天故宮の寶庫一・ 二・三(負喧雜記)	柳 守拙老人	古美術	一四一、 一四三

滿洲國國寶展覽會に 就いて	齋藤菊太郎	同	一四〇
泰國の美術工藝	宮原 武雄	茶わん	一三四
陶磁工	同	同	同
我國に於ける陶器の 起源	小山富士夫	日本諸學振興 委員會研究報告	一三
色彩から見た日本の 古陶器	鹽田 力藏	茶わん	一三二
日本及支那の古陶磁 を語る	反町 茂作	國民美術	二ノ一
宋窯と唐津	内島 北朗	清閑	一二、一 三合冊
名物茶碗に就て	高橋 梅園	古美術	一三七
利久好みの茶碗	渡邊 虹衣	同	一四一
豊公と陶業	加藤義一郎	美術工藝	三
歐趣和陶記	滿岡 忠成	大和繪研究	一ノ三
鳳凰文磚 解説	南法華寺藏	美術研究	一二一
古瀬戸茶盃	料治 朝鳴	古美術	一三七
藝術的に見た古備前	桂 又三郎	茶わん	一三二
備前の茶入	多田 利吉	古美術	一四三
古備前花生	桂 又三郎	同	同
初期信樂から古信樂 ——古伊賀まで	大村 正夫	美術工藝	五
信樂雜俎	藤壘 樸庵	同	同
茶盃「しがらき」	佐々木三昧	同	同
丹波の特色	井上吉次郎	同	同
丹波古陶を語る	杉木 捷雄	同	同
髯徳利の魅力	山田 宗有	同	九
九谷と伊萬里の觀察	加藤土師明	古美術	一三九
古今里と古九谷の觀察	金原陶片	同	一四一
仁清研究資料の新發見	山本辰一	同	一四三
陶工尾形乾山	鷹巢 豐治	美術新報	二七
乾山窯跡考一名續乾 山考——附「乾山異考」 訂正——	泥佛堂半泥子畫說	同	六九



寶相華銀平文雲裳箱 根津美術館藏	解説	國華	六二二
天野山金剛寺と雀蒔 繪手宮に就いて	吉野 富雄	茶わん	一三三
金剛寺の野邊雀蒔繪 手宮(名品小解)	よしの 畫説	六三	六三
秋草蒔繪手宮 根津美術館藏	國華	六一九	六一九
菊模樣蒔繪手宮 熱田神宮藏	同	六二七	六二七
石山寺蒔繪簾簾 根津美術館藏	同	六二四	六二四
豐太閣と蒔繪 南極蒔繪品に就いて	吉野 富雄 美術工藝二	同	同
光琳蒔繪硯箱と乾山の 箱書(美術史雜記)	岡田 讓 大和繪研究一ノ三	文化	九ノ四
大福寺鍍金裝髮解説 京都古銘選釋三、	福井利吉郎 史迹と美術一三五	同	一三六
北野神社木造文室 唐鞍と鏡鞍	關 保之助 古美術	同	一四〇
鹿島神社藏竹梅蒔繪 鞍に就いて	岡田 讓 日本美術 協會報告	同	六二
豫樂院の「兩後月」 花入	高原 慶三 清閑	同	一二、一 三合冊
角館樺細工の變遷 角館の樺細工に就いて	武藤 鐵城 工藝	同	一二二
樺細工の道 樺細工の傳習	柳 宗悅 工藝	同	一二二
諸國樺細工 挿繪小註 アイヌの木工品 挿 繪小註	同 同 同	同	同 同 同
樺太アイヌ・ギリヤ ク・オロツクの工 藝特に樹皮工藝に就いて	河野 廣道 同	同	同
染織・服飾 豐公の偉業と工藝 特に桃山時代の染織 に就いて	明石 染人 美術工藝	三	三

江戸の名物親和染考 清代文武官服制考 南方系時代染織品考 タチツケ考・タチツ ケの歴史的研究	島田 筑波 瀧川政治郎 宮田 祥治 故宮本勢助	新風土記 二三 史學雜誌 五三ノ一 茶わん 一三四 考古學雜誌 三二ノ九	其 他
手漉和紙の歴史地理 的研究序説	壽岳 文章 帝國學士 院紀事	一ノ三	
<b>書讀・印章・文書</b>			
日本書道史の時代區分 日本書道指點	齋藤好重 吉澤 義則	書道 一一ノ二 清閑 一二、一 三合冊	
日本上代書道史概觀 日本上代の書道	殿木 絢子 熊田傳一郎	書道 一一ノ二 同	
平安時代の生活様式 と書道	齋藤 好重	同 一一ノ七	
藤原時代の女性と書道 我國中世期の書道	同 相澤 春洋	同 一一ノ四 同 一一ノ二	
江戸時代書道史 和漢朗詠集に就いて	神郡 晚秋 加藤義一郎	同 同 美術工藝 七	
倭漢朗詠集に就いて 一、三	同	同 六、八、 九	
繼色紙 鳳凰堂色紙形筆者の 問題	同 川勝政太郎	清閑 一二、一 三合冊	
書道史上に於ける倭 柄上人(素描篇)	多賀 宗隼	畫説 六七	
龜山天皇宸翰を拜して 後醍醐天皇の御宸翰 と足助氏	中村直勝 伊奈森太郎	清閑 一二、一 三合冊	
後醍醐天皇宸翰御消 息(有頼卿事)に就いて	田山 信郎	史蹟名勝 二〇〇 天然紀念物	
後水尾天皇の御用筆 古文書「豊臣秀吉の 一錢切」	藤田 經世 竹 溪	畫説 七一 新風土記 二五	
ちんたの軸 良寛の畫	永久 義郎 神郡 晚秋	古美術 一四一 書道 一一ノ七	
良寛和尚自筆歌集「布 留散束」三、四	宮仲 串助	新風土記 二五ノ二	美術工藝 一、二
種子 一、三	田中 塊堂	史迹と美術 一三四、 一三六、 一三八、 一四一、 一四二	
古寫經講座 四、九	同	同	
天平寫經 天平寫經と古經堂徹 定上人	松田不空一路 井川 定慶	茶わん 一三三 古美術 一四二	
叡山慈眼藏 大楠公の法華經の奥 書について	岩橋小彌太	歴史地理 五〇四 同 五二	
藥師寺東塔模範新考 上、中、下、上	藪田嘉一郎	史迹と美術 一四三、 一四五	
道澄寺鐘銘考 道澄寺鐘銘の書風	平野 春帆 相澤 春洋	書道 一一ノ一 同	
京都古銘選釋 十 二尊院石造空公行狀碑	同	史迹と美術 一四三	
多賀城の碑 支那上代の書道 一六朝まで	太田 三郎 相澤 春洋	日本美術 一ノ四 書道 一一ノ一	
唐宋元の書道 明清の書道	野本 白雲 西川 寧	同 同	
王右軍書黃庭經考 一、二	須羽 源一	同 五、一、 一ノ	
日吉山王典籍考 古鈔萬葉集十五種の 印行に就いて	景山畔四郎 佐々木信綱	史迹と美術 一三七 帝國學士 院紀事	
東壁抄 二 偽印譜	田中 喜作 清閑	一四	

考古學・歴史・地誌

土器の三種と文化の三階	中村 直勝	工藝	一一	相模國大楠公松越遺蹟に就いて	原 敬造	同	三三ノ二	漢代あなぐら考	水野 清一	東洋史研究七ノ二、三合冊
日本古代の土器に就いて―彌生式土器及接觸樣式に關して	神林 淳雄	古美術	一四一	駿河國美和村半兵衛奥古墳遺物に就いて	濱田 齊	同	三三ノ一	齊都臨淄の調査―一三	關野 雄	考古學雜誌、三二ノ四、六、一一
繩紋土器の話―發掘より陳列まで―	大山 柏	茶わん	一三二	濱松市白羽町地内先史原史混合遺蹟發掘狀況(彙報)	伊藤 源作	同	三三ノ一	河北省順義縣に滿鐵調査班を訪ふの記	大島 利一	東方學報(京都)、一二ノ四
山口付繩紋土器に就いて	山内清男	古美術	一三七	大丸山古墳主體部構造の特異性	上田 三平	同	三三ノ八	東亞古代の指輪	齋藤 忠	古美術、一三九
日向國延岡地方の彌生式土器とその文様	石川恒太郎	考古學雜誌	三二ノ五	播摩國明石郡垂水の五色山古墳は擬塚なりとの説	福原潜次郎	同	三三ノ四	御遊の成立とその文	家永 三郎	歴史地理、五〇七
甕形土器彙報	弘津 史文	同	三二ノ一〇	恭仁京址に關する新説に就いて	大井重二郎	史迹と美術、一三五	七〇	泰澄大師と越知山大谷寺	梅原忠治郎	新風土記、二二
西ヶ原貝塚發見の奇形土偶(彙報)	松谷 貞義	同	三二ノ一	山城小栗栖法琳寺址出土の遺物(素掘篇)	梅原 末治	畫說	七〇	元寇前後	圭室 諱成	國畫、二ノ二
裝飾付須恵器に就いて	神林淳雄	茶わん	一三三	出分廢寺塔趾とその出土土瓦	齋藤 忠	史蹟名勝、二〇〇	二〇〇	中世に於ける神社の祭祀組織について	遠藤 三男	同、五三ノ一
子持脚付卍及異形須恵器と上代日鮮の交通	同	古美術	一三五	安藝國下北方經塚について	織田三郎治	史迹と美術、一四三	一四三	與佛敎に關する諸門題上、下、特に興福寺領越前國河口坪江庄を中心として	笠原 一男	歴史地理、五〇八、五〇九
古代の祭器に就いて	大場 磐雄	同	同	丹生の山田	福原潜次郎	考古學雜誌	三三ノ一	中世塔院に關する史實と問題上、中、下	村田 正志	同、五一ノ一、五一ノ二
磐座・磐境等の考古學的考察	同	考古學雜誌	三三ノ八	須賀ノ山の神籬磐境の遺蹟に就いて(彙報)	山根 辰治	同	同	當麻曼茶羅緣起考	猪熊 兼繁	史迹と美術、一三九
卑彌呼の冢墓と箸墓	笠井 新也	同	三三ノ七	扶餘發見の壺の一型式	齋藤 忠	同	三三ノ一	近世初頭の民政―我國封建制度の完成に於ける農民政策の動向―	土井 彬	文部時報、七五一
上代高塚墳墓に見らるゝ合葬の諸式に就いて	齋藤 忠	同	三三ノ一	滿洲の考古	島田 貞彦	史蹟名勝、二〇四	二〇四	東南アジアの文化圈	舟越 康壽	文部時報、七五一
神奈川縣浦賀町沼田城山横穴に就いて	赤星 直忠	同	三三ノ四	南滿洲遼陽に於ける古蹟調査(彙報)	駒井 和愛	考古學雜誌	三三ノ二	東漸せるイスラム文化の側面に就いて	田坂 興道	史學雜誌、五三ノ四
埴輪と武器武裝	神林 淳雄	古美術	一四〇	遼陽發見瓦製明器の並戸に就いて	同	國華	六四	社寺古圖に就いて	藪田嘉一郎	史迹と美術、一三九
上代の製銅遺跡に就いて	石川恒太郎	考古學雜誌	三三ノ一	滿洲國間島省琿春縣牛拉城に就いて	齊藤甚兵衛	考古學雜誌	三三ノ五	祇園社繪圖と鶴岡八幡宮修營目論見繪圖	福山 敏男	國寶、四四
銅双銀頭短劍	樫本 龜生	同	三三ノ三	滿洲國熱河省葉柏壽附近の遺蹟について	三宅 宗悅	同	三三ノ一	西國名所圖繪(續刻)	官尾 重男	新風土記、二四、二五、二七
奈良朝樣式の發掘刀	神林 淳雄	古美術	一四二	熱河省古山驛附近の石器時代遺蹟(彙報)	三上 次男	同	三三ノ四	伊能忠敬の地球圖について	鮎澤信太郎	歴史地理、五一〇
伊豫國今治市附近發見の環頭大刀柄頭(彙報)	岩城 三郎	考古學雜誌	三三ノ六	内蒙古古碑善達克沙漠に於ける遺物について	後藤 壽一	同	三三ノ二			
和同開珎に就いて	黒田 幹一	同	三三ノ五	河南省彰德府外候家莊古墓群の概観上	梅原 末治	寶雲	二九			
美濃國瀬尻村發見の古錢に就いて(彙報)	林 魁一	同	三三ノ一	甘肅の彩繪土器	堂野前種松	畫論	一〇			
山形縣黒森砂丘下の遺跡	阿部 正己	同	同							

雜

鑑賞について	原 杉太郎	大和繪研究一ノ六
繪から見た日本の技	三枝 博春	國畫 二ノ七
術の特徵に就て	頼原退藏	同 二ノ一〇
俳諧の輕みと繪畫の輕	木村 重夫	同 二ノ三
竹(四君子)考の一	脇本十九郎	畫說 六五
彫像略寫の一方式		
(素描篇)		
座談會「禪・禪宗・禪宗史の諸問題」	池上 俊夫	大和繪研究一ノ四
日本版畫摺の技巧	高橋 梅園	茶わん 一三二
刷毛と馬連	須田 古龍	畫說 六五
天真寺と不昧公		
曾根原魯卿の略傳		
(素描篇)		
機隨筆「雪の繪、雪の器、雪の茶、雪の國寶の問題、野點	清閑	一、二、三合册
大和古寺の印象	北川 桃雄	日本美術 一ノ四
花がたみ(二)長崎	檜崎 宗重	大和繪研究一ノ三
往還		
花がたみ(四)日向	同	同 一ノ五
藥師詣	同	同 一ノ七
美術觀賞甲信のあひだ	同	同
佐渡旅行記	澧江 二郎	同
旅に拾ふ	山際 靖	同
琉球雜記(琉球と南海諸國)	山里 永吉	古美術 一四二
雲岡雜記	八木 正治	東洋史研究七ノ六
雲岡から萬安へ一蒙	長廣 敏雄	同 七ノ二
疆の旅手帳より一	同	同 三
定裏縣の思ひ出	日比野丈夫	同 七ノ四
殿陽脩の文人生活と牡丹	堂谷 憲男	畫論 七
泰國佛教の種々相	津田 敬武	考古學雜誌三二ノ一
信長と其茶道茶器	田中 仙樵	古美術 一四一
豐公時代茶道美術史年表	美術工藝	二
豐太閤と茶道	西堀 一三	同

昭和十七年度美術文獻目錄

北野の大茶會	同	古美術 一四一
茶道一家風	いちろのや	清閑 一四
千利久 六十一	桑田 忠親	畫說 六七一、六八
利久の死	同	同 五〇六
初期の盆山に關する資料(素描篇)	家永 三郎	畫說 六七
日本花道の變遷一池坊專好花道傳書を中心として	西堀 一三	同 七二
西洋美術關係文獻 (定期刊行物所載)		
總 說		
イタリヤ美術界私見	有島 生馬	イタリヤ 二ノ六
ダ・ウインチの人間性	加茂 儀一	同 二ノ八
レオナルド・ダ・ヴィンチ點描	伊藤 浩	改造 二四ノ一
十八世紀	ロダン	高村光太郎譯畫論
フランス浪漫主義について	植村鵲千代	同 八
天才と歴史一レオナルド・ダ・ヴィンチに就て	泉 四郎	同 十三
戰時下獨逸の美術界	小塚新一郎	國畫 二ノ一
レオナルドと現代	柳 亮	造形教育 八ノ八
レオナルド・ダ・ヴィンチの性格とその技術的着想	隈部 一雄	同 八ノ九
ダ・プロオム	木下空太郎	思想 二三六
レオナルド・ダ・ヴィンチ展特輯號	新建築	一八ノ八
西洋美術史講話	長瀬 武郎	生活美術 二ノ七
レオナルド・ダ・ヴィンチ	川喜田煉七郎圖畫工作	十六ノ七
世阿彌、花の藝術論「花傳書」の敷衍	佐田 勝	畫論 七
人形の含有美と傳綃	西澤 笛畝	日本美術 一ノ四
古美術鑑定雜誌	今村 龍一	古美術 一三九
骨董教室 一一九	紫 松居	美術工藝 一一九
裏表蒐集話 續	森 繁夫	清閑 一二、一
銀座諸道具落札(公刊)	一五	國寶 七、四九
民藝館の仕事	柳 宗悅	工藝 一一〇
アイヌ書誌	式場隆三郎編同	一〇七
レオナルド・ダ・ヴィンチと近代歐洲文明の命數	鈴木 啓介	同 十六ノ八
レオナルド・ダ・ヴィンチ展を巡る記	岩下 行忠	同 一六ノ八
レオナルド・ダ・ヴィンチの構想力について	加茂 儀一	同 一六ノ八
ヴァサリリのレオナルド傳について	青柳 正廣	圖畫工作 一六ノ八
レオナルド・ダ・ヴィンチの足跡	同	同
レオナルド・ダ・ヴィンチは何故東方文化を憧れたか	泉 四郎	同
レオナルド・ダ・ヴィンチ特輯	日伊文化研究	八
「基督洗禮」と「岩窟の聖母」	兒島喜久雄	同
レオナルド・ダ・ヴィンチ一繪畫における	植田 壽藏	同
東方賢者禮拜圖	富永 惣一	同
最後の晚餐	山田智三郎	同
建築彫刻に於ける特殊性	板垣 鷹穂	同
其他デオコンダの微笑	羽仁五郎	同



希臘藝術的特質	荒城 季天	日本美術	一ノ七	セザンヌの水浴圖について	富永 惣一	同	二ノ六	ポール・セザンヌ	デオルデユ	同	同
アメリカの現代美術家	北川 民次	美術新報	一二	デッサンの變遷(一)(二)	アンリ・ゲラン	新美術	七、九	ラファエル論(抄譯)	植村鷹千代譯	同	二ノ八
メキシコの現代美術	北川 民次	美術新報	二四	肖像畫雜感—チシアンの肖像畫—	鈴木 啓介	同	八	コンスタンブルの郷里ベツクリンの「死者の島」	青柳 正廣	同	二ノ九
レオナルド・ダ・ヴィンチ特輯	森田 龜之助	同	三二	ダエルメル・ド・デルフト	鈴木 啓介	同	一〇	ニコラ・プッサンとノルマンディ	山田 邦祐	同	二ノ一〇
レオナルドと現代	柳 亮	讀賣	一七、七	グエラスケスと宮廷道化師達	尾川 多計	同	一二	フランス繪畫の印象	辰野 隆	造形教育	八ノ七
レオナルド・ダ・ヴィンチの性格	板垣 鷹穂	讀書	一七、七	ドミエ論	ジャック・ラツセーニユ	同	同	アントン・メツシーナ	同	同	四
レオナルド・ダ・ヴィンチ	加茂 儀一	都	一七、七	ポッティエチエリ	田近 憲三	同	一三	フランチェスコ・デ・グワルデイの「ピアツエツタ」	同	同	五
繪 畫	柳 亮	畫論	六	マソ・フイニグエラ	同	同	一五	ティツィアーノの「小鼓手」	同	同	六
吾世繪と印象派(ピトリスクとレアリスムの問題)	後藤 禎二	同	六	ファン・アイク兄弟に關するノートより	嘉門 安雄	同	一六	ヴェネチア畫派	須田國太郎	同	同
テオベの手紙に現れたヴァン・ゴッホの日本憧憬	後藤 禎二	同	六	ドラクロアのパレツ	ルネ・ビオ	同	一七	デュララーとイタリア	須田國太郎	同	同
エル・グレコ	森口 多里	同	一	サンドロ・ポッティエチエリ	三輪 啓三	同	一六、一	ティツィアーノの「古代ローマの繪畫」	兒島喜久雄	同	七
古典派ブツサン	須田國太郎	同	一三	リオネル・ロ	田近 憲三	同	二ノ一	十九世紀繪畫批判	青柳 正廣	日本美術	一ノ二
ヴェラスケス	ウージエ	同	一四	セナ見學—十三世紀の繪畫を中心として—	相良 德三	生活美術	二ノ一	畫家と食之—巴里派苦悶のあと—	荒城 季夫	同	一ノ三
ヴェラスケス	關 義	同	一四	イタリヤ繪畫の十三世紀	青柳 正廣	同	同	ヴァサリの「ミケルンデエロ傳」	青柳 正廣	同	一ノ八
ヴェラスケス	小松 清	同	一四	黎明期トスカナの繪畫に於ける東洋的要素	長瀬 武郎	同	同	日曜日の畫家—稅關吏であつたアンリ・ルウソ—	成田 重郎	美術新報	一二
シヤルダン私考	後藤 禎二	同	一五	その經緯と影響—	森口 多里	同	同	オノレ・ドオミエ	鈴木秀三郎	同	一五
ゴヤ—主として寫實精神について—	佐藤 敬	同	一五	パルマ洗禮堂に於ける十三世紀の壁畫	森田 龜之助	同	同	英國の水彩畫	石川 欽一郎	同	一七
デュラに於ける寫實	土方定一	同	一五	自然の發見—バルビゾン派の業績—	太田 三郎	生活美術	二ノ三	フォオヴを回顧す	木田 路郎	同	一九
デュララーの素描	嘉門 安雄	季刊美術	一ノ三	和蘭畫派の風景畫	田近 憲三	同	同	獨逸繪畫の本質と其の古典	森田 龜之助	同	二〇
シヤヴァンスの壁畫	荒城 季夫	國民美術	二ノ一	ロシアに在るラヌスの現代繪畫	赤松 俊子	同	二ノ五	ピエール・ボナール	益田 義信	同	二五
セガンチーニの生涯	伊原宇三郎	同	二ノ一	コロオをめづつて	ボオル・ヴ	同	同	レオン・ウ	川路 柳虹	同	同
アツシジのデオート	伊原宇三郎	同	二ノ一	コロオをめづつて	ボオル・ヴ	同	同	レオン・ウ	川路 柳虹	同	同
レムブランド・フアン・ライオン	嘉門 安雄	新美術	五	コロオをめづつて	ボオル・ヴ	同	同	レオン・ウ	川路 柳虹	同	同

人間としてのセザンヌ	成田 重郎	同	二七
ドガと近代生活	同	同	三九
ミケランジェロの藝術	田近 憲三	同	四〇
特輯	川路 柳虹	同	四五
ピカソの古典とその後	伊原宇三郎	同	四五
ピカソの人物と作品	猪熊弦一郎	同	四五
ポンペイ廢址とその壁畫	足立源一郎	同	四六
ブツアルマツコ	兒島喜久雄	文藝	一〇ノ六
ヴィンザーの素描二葉	同	三田文學	一七ノ一
西洋の版畫に就いて	長瀬 武郎	大和繪研究五一ノ四	
彫刻			
ロダン作「死の顔」と「空想する女」に就いて	赤塚 秀雄	畫論	六
デスビオ	レオン・デゼール	同	一六
マイヨールの作品について	後藤順二譯	新美術	九
ミロのヴィーナスとクニドスのデメテル	今泉 篤男	同	一〇
青銅像ヘニオコス	同	同	一一
ブルデルの思ひ出	清水多嘉示	同	一四
ルカ・デルラ・ロビ	青柳 正廣	生活美術	二ノ六
アの唱歌境	森口 多里	日伊文化	八
裝飾彫刻のローマ的性格	研究	同	
ロダンとブルデル	成田 重郎	日本美術	一ノ三
古代埃及の彫刻	荒城 季夫	同	一ノ六
ブルデルの作品とその生涯	金子丸平次	美術新報	二二
大彫刻家の隨想	成田 重郎	同	
アレクサンダー大王の石棺	中原 考	新美術	一六

十八世紀獨逸磁器美術	ローベルト・陶磁	シュレフト	一三ノ三
古代アツシリヤの美術	荒城 季夫	日本美術	一ノ八
建築			
英國都市計畫の檢討	トーマス・シャープ	建築世界	三六ノ一
Leonardo da Vinciの建築史的意義	田中 誠譯	建築雜誌	〇・一一
ザルツブルグの古城	藏田 周忠	同	五六ノ六
オージギスト・ペレー	西村 久二	同	一八ノ六
オージギスト・ペレーの諸作品	板倉 準三	同	一八ノ七
ローマ建築及び建築彫刻の本質	森口 多里	日伊文化	四
サンタ・マリヤ・デリアンデエリの禮拜堂	相内武千雄	研究	六
現代美術關係單行圖書			
其他			
西洋美術家の書簡	三輪福松譯	畫論	七、一一
基督教藝術に關する	外村吉之介	工藝	一〇九
ウラル山脈の藝術	アルフレツド・サルモニ	新美術	一七
ヴェネツィア點描	野上豊一郎	日伊文化	六
アルベルテイの手紙	三輪 福松	同	
ポンペイの憶ひ出	川路 柳虹	美術新報	四六
ロンドン復興計畫に就いて	戸塚 端	日本建築七三	一ノ二、三
死都ポンペイ新發掘の回顧	森田龜之助	美術新報	四六
フイレンツエの堂母	是則 高作	三田文學	一七ノ一

## 總 說

アイヌ文化	工藝編輯部	日本民藝協會	美術の現實を語る	一氏 義貞	綜合美術研究
類の形態美	西田 正秋	聖紀書房	美術の記	金原 省吾	青磁社
共榮園の文化—南方の美術	成田 重郎	二見書房	美術の眺め	中川 一政	三笠書房
藝術と環境	植村鷹千代譯	梁 座 社	美術用語辭典	藝術學院編	藝術學院出版部
宿命的藝術	式場隆三郎	昭和書房	美術論集	武者小路實篤	實業之日本社
全國美術展出品案内	石野 隆	藝術學院出版	美と善の歡喜	太田 三郎	崇文堂
造型美論	高村光太郎	筑摩書房	美と教養	木村 重夫	綜合美術出版部
造型文化と現代	板垣 鷹穂	育生社弘道閣	美の教養	相良 德三	愛之事業社
東洋美術論	金原 省吾	講談社	美の成果	朝倉 文夫	國文社
日本美術年鑑昭和十六年版	美術研究所	岩波書店	美の日本的完成—「寂び」の究明—	山口 諭助	寶雲舍
美術を語る	武者小路實篤	文藝春秋社	文化の樣相	上泉 秀信	大日本出版
美術誌	玉村方久斗	河北書房	文學と美術	本間 久雄	東榮堂

民族の美

繪畫

繪を見る目  
繪の科學  
繪畫  
畫房模範  
畫房隨筆  
硝子繪  
現代日本畫家論  
新體制國民講座第十輯藝術論  
水彩畫總技法  
墨繪の技法  
西人の浮世繪觀  
素描論  
東西六大畫家  
東洋畫論  
東洋繪具考  
日本繪畫三代志  
働く者のための繪畫  
水繪 技法と隨想

朝倉 文夫 婦女界社  
中川 紀元 生活社  
山下新太郎 錦城出版社  
モロオウラチエ  
大森啓助譯 春鳥會  
黒田重太郎 湯川弘文社  
廣瀬操吉編 錦城出版社  
内田 六郎 双林社  
木村 重夫 多摩書房  
中澤 弘光 朝日新聞社  
遠藤 教三綜合美術出版部  
平田禰木編 七丈書院  
旭 泰宏 デッサン社  
武者小路實篤 中央公論社  
荒木 十畝 小學館  
鹽田 力藏 アトリエ社  
石井 柏亭 創元社  
近藤孝太郎 東洋書館  
中西 利雄綜合美術出版部

熊谷守 畫集  
溪仙遺芳  
兒島善三郎畫集  
清水登之畫集  
畫人栖鳳  
關口俊吾滿洲北支畫集  
雪舟畫集  
すその  
土田夢僊  
富田鐵齋  
鐵齋翁作品集  
鑑賞と實習 南方スケッチブック  
野口彌太郎畫集  
長谷川利行畫集  
水彩畫家丸山晚霞  
武者小路實篤畫集と畫論  
印象畫伯木彫風俗人形圖錄  
文樂人形圖譜  
院展の日本畫  
猪熊弦一郎中支戰跡畫集  
(バステル)  
春陽畫集(二十回)  
春陽會畫集  
小林萬吾畫集  
新制作派作品集  
皇紀二千六百二十年水彩畫推  
獎畫集 記錄作品  
大東亞戰爭畫  
大東亞戰爭海戰畫集  
第十二回獨立展集  
二科畫集(二十九回)  
昭和十七年文展集  
第五回文部省美術展原色畫帖

長谷川仁編 同畫集刊行會  
大禮記念京 芸 堂  
都美術館  
兒島善三郎 美術工藝社  
清水 登之 美術工藝社  
沖長 璋彦 青年書房  
關口 俊吾 美術工藝會  
會宮 一念 春鳥會  
大原孫三郎 大原孫三郎  
正宗得三郎 錦城出版社  
鶴田 吾郎 崇文堂  
野口彌太郎 美術工藝會  
高崎正男編明治美術研究所  
小山 周次 日本水彩畫會  
堂本 寒星 座右寶刊行會  
宮尾しげを 時代社  
芳川 越國民美術研究所  
桶口正德編 朝日新聞社  
同 會 新潮社  
同 丹 會 造型藝術社  
内田 巖編 美術工藝會  
堂本畫塾東 富山房  
丘社同人 三光社  
松添 健 朝日新聞社  
岩田 岩二 朝日新聞社  
桶口正德編 朝日新聞社  
長谷川一躬 朝日新聞社  
美術工藝會

版畫・圖案

第五回文部省美術展覽會圖錄  
板散華  
版畫讀本  
日本版畫の美  
トリミングと作畫  
圖解圖案總說・  
最新圖案技法  
ポスター圖案技法  
實習指導漫畫の描き方  
宣傳美術 美術論と技法  
宣傳美術教程  
工藝  
現在の日本民藝  
工藝  
工藝廠 滿支工藝觀察余錄  
工藝文化  
日本の鍔金  
私は茶杓をかう創る  
純粹彫刻論  
彫刻の美  
建築  
建築の學と藝  
塔の世界  
日本建築の性格  
日本住宅小史  
橋の美學(アルス文化叢書)  
ブルーノ・タウト

棟方 志功 山口書店  
造型版畫協 双林社  
會編  
檜崎 宗重 不二書房  
冬木健之介 玄光社  
遠藤 教三綜合美術出版部  
上野正之輔 同  
下島 正夫藝術學院出版部  
下川 四夫 弘文社  
椎橋 勇綜合美術出版部  
同  
柳 宗悅 昭和書房  
式場隆三郎 中川書房  
西川 友武 同  
同 文藝春秋社  
柳 宗悅 文藝春秋社  
香取 秀眞 三笠書房  
楠瀬 日年 造型藝術社  
橋本 平八 昭森社  
本郷 新 富山房  
板垣 鷹穂 育生社弘道閣  
伊藤 忠太 三笠書房  
佐原 六郎 生活社  
田邊 泰 相模書房  
關野 克 同  
鷹部屋福平 アールス  
藏田 周忠 相模書房

開明(ブレンジョン)建築  
及都市計劃ノ現狀ニ就テ

## 教 育

子供の繪を考へる  
子供の描く繪の導き方  
兒童と繪畫  
新理念童畫の技法

## 雜

赤と綠  
衣・食・住  
美しい季節  
畫室の窓

ル・コルビュジエ  
古川達雄譯 二見 書房

山根 武士 甲鳥 書林  
古家 新 湯川弘文堂  
湯川 尙文綜合美術出版部  
西津 省二藝術學院出版部

里見 勝藏 昭 森 社  
朝倉 文夫 日本電建株式  
中川 一政 櫻井 書店  
碓 伊之助 日下部書店

## 古美術關係單行圖書

## 總 說

日本文化大觀 第一卷

歴史篇上

日本文化史編

日本古代文化研究

天平の文化 上、下

續禪と日本文化(岩波新書  
九四)

東洋美術史研究

東洋美術論考

日本美術聚英(佛畫篇)

日本美術の鑑賞(古代篇  
近代篇)

新體制國民講座第十輯

藝術篇

京都市古美術入門

淨土教の藝術(法苑叢書三)

室町時代美術史論

日本文化大  
觀編輯會

紀元二千六百  
年奉祝會

松本彦次郎 河出 書房

後藤 守一 同

朝日新聞社編輯朝日新聞社

鈴木大拙著 岩波 書店

北川桃雄譯

濱田 耕作 座右寶刊行會

矢代 幸雄 同

日本文化中央聯盟

北川 桃雄 帝國教育會

奧平 秀雄 朝日新聞社

京都教育精神文化課

小鹿 龍彦 淨土教報社

谷 信一 東京 堂

冠木門  
經濟・美術・工藝

樺

世路のシミ

大同小異帖

地を泳ぐ

日本橋繪物町

萬有色彩

法律・畫・釣

京都

日本寫真年鑑

大和の石造美術

日本美術年鑑昭和十六年版

日本諸學振興委員會研究報告(十三藝術學)

師範大學講座歷史教育十四

東京帝室博物館講演集十四

日本美術資料 第五輯

正倉院御物圖錄 十四

藝苑聚芳 一一四

國寶精華 八一十二

高野山靈寶大觀

青山莊清賞 第二書蹟第三

第四茶器第六古銅器篇

池田大仙堂古美術集芳上下

法隆寺

法隆寺圖說

田邊 泰 相模 書房

河田 嗣郎 精興 社

山脇 巖 アトリエ 社

中川 紀元 天理時報社

宮田 重雄 龍生 閣

藤田 嗣治 書物展望社

岸田日出刀 相模 書房

小村 雪岱 高見澤木版社

宮地 孝夫 新民 書房

勝本 正晃 河出 書房

京都寫真文 芸 艸 堂

化協會編 朝日新聞社

法隨寺の横顔

藝術論の探究

美の構造

日本美の創生

日本美の理念

美の教養

美の精神

美の日本的完成

美術の記

美術誌

經濟・美術・工藝

十七・八世紀に於ける

歐洲美術と東亞の影響

熱河古蹟と西藏藝術

支那文學藝術考

藝術の支那・科學の支那

アイヌの生活文化

東南アジアの民族と文化

印度支那の民族文化

根津美術館展觀目錄 第二回

賣立目錄

於東京美術館

二月 某家・杏華舍並某家

二月 某家

三月 某家・某家

五月 某家

六月 某家

十一月 某家

於京都美術館

六月 某家

七月 井上大丸

十月 對豐庵並某家

於名古屋美術館

釋 瓢齋 鵜 故郷 舍

岡崎 義惠 弘文堂 書房

金原 省吾 青磁 社

柳 亮 育生社弘道閣

孝橋 謙二 道統 社

相良 德三 愛之事業 社

廣隆 群 建設 社

山口 諭助 寶雲 舍

金原 省吾 青磁 社

玉村方久斗 河北 書房

河田 嗣郎 精興 社

山田智三郎 アトリエ 社

蘆谷瑞世譯

五十嵐牧太 洪 洋 社

青木 正兒 弘文堂 書房

後藤 末雄 第一 書房

應部屋福平 アル

ハイン・ゲルデン著

小堀甚二譯 聖紀 書房

松本 信廣 岩波 書店

根津美術館



日本建築の研究 上下

伊東 忠太

龍吟社

日本建築

天沼 俊一 弘文堂書房

日本建築の性格

藤島 亥次郎 科學知識普及會

日本建築 第一期十一—二

田邊 泰 相模書房

日本古建築行脚

天沼 俊一 白井書房

琉球—建築文化

伊東 忠太 東峰書房

支那建築裝飾 三

同 座右寶刊行會

橋の美學(アルス文化叢書)

岸田日出刀 相模書房

塔の世界

鷹部 屋福平 アルス

國寶建造物法隆寺東院南門及四脚門修理工事報告

佐原 六郎 生活社

城郭と文化

文部省宗教局保存課内法隆寺國寶保存事業部

國寶史蹟名古屋城 上下

鳥羽 正雄 大東出版社

二條城(建築新書)

所編 名古屋市役 彰國社

德川家靈廟

澤島 英太郎 相模書房

國寶能舞臺

田邊 泰 彰國社

民家と住居

北尾 春道 洪洋社

東海道宿驛と其の本陣の研究—附中山道宿驛と其の本陣

大熊 喜邦 日本電建株式會社出版部

先賢と遺宅

城戸 久 那珂書店

露地

北尾 春道 鈴木書店

庭の美

重森 三玲 第一藝文社

日本人の生活と庭園

上原 敬二 三省堂

近世の庭園

龍居松之助 三笠書房

京都皇居の御庭園

重森 三玲 晃文社

書蹟・印章

書論と書話

松井 如流 華文莊

樂韻論三種

清雅堂編 清雅堂

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五

弓場喜一編 松林堂

古寫經綜覽

田中 塊堂 鵜故郷會

日本寫經全集七

佛說彌勒成佛經

支那書道

支那古今書道通史

昭和法印大系

八・十一—十五 辻本勝己編

直讀本放大古法帖

二 魏龍門二十品

魏龍門文公下碑

吳昌碩刻顧盧印存

大和古印

拓本と魚拓

歷史と文藝

大日本史料 第一編之十一

同 第八編之二十一

大日本古文書家わけ和十六

國史辭典 三(きーこ)

聖德太子全集 一・四

神祇と祭祀

大禮と朝儀

神佛習合と日本文化

日本佛教史の研究

上代佛教思想史

高野山千年史

達磨の研究

南都七大寺の行事

寺領莊園の研究

東山時代とその文化

大名と御伽衆

日本傳説集

古琉球

藤原京

播磨上代寺院跡の研究

日吉山王光華

歷史・考古學・地誌

武田墨彩堂

後藤朝太郎 大河屋書院

麥 華三 大阪屋書院

芳賀 雄譯 五臺山

中根 貞臣 中央書道會

清雅堂編 清雅堂

廣瀬 保吉 同

同 同

篠崎 四郎 荳牙書店

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

東洋史集説

支那佛教史研究 北魏篇

歐米に於ける支那研究

五臺山

大唐西域求法高僧傳

大唐西域記の研究 上卷

考古學より觀たるアジア

黃土地帶

考古遊記

南方佛教の樣態

南蠻宗俗考

チベット

中央アジアの過去と現在

日歐交渉文化史

文化地理學

面と狂言

茶と美

茶道言行錄

千利久

日本花道史

日本人形史

日本人形大類聚

顏の形態美

日本の扇

奈良叢記

青衣女人

隨筆保存

和田 清編 富山房

塚本 善隆 弘文堂書房

石田幹之助 創元社

小野 勝年 座右寶刊行會

足立喜六譯註 岩波書店

足立 喜六 法藏館

L・ウーリ著 赤木 俊譯 白揚社

アンデルセン 松崎 壽利 座右寶刊行會

桑原 隲藏 弘文堂書房

龍山 章眞 同人書館

岡田 章雄 同人書館

フオスコ・マライニ 春 鳥會

前嶋 信次 博文館

寺田 顯男 葛城書店

外山卯三郎 岩波書店

辻村 太郎 岩波書店

高野 辰之 東京堂

柳 宗悅 牧野書店

西堀 一三 河原書店

桑田 忠親 青磁社

西堀 一三 創元社

山田德兵衛 富山房

西澤 笛吹 便利堂

西山 正秋 聖紀書房

本山 桂川 八弘書店

中村 清兄 河原書店

仲川 辰藏 殿々堂

森川 辰藏 殿々堂

飯島 繼司 全國書房

青戸 精一 昭和圖書會社



# 西洋美術關係單行圖書

## 總 說

- レオナルドよりマルコニ  
まで(サヴォルニヤン著)  
畫聖レムブランド光の信者  
バガニーニ譯 金城書房  
レオナルド・ダ・ヴィンチ  
デ・ウリウス 横堀 富雄譯  
式場隆三郎譯 冬至書林  
論考(ウアレリイ)  
吉田健一譯 筑摩書房  
發明家および技術家として  
フェルトハウス著 慶應書房  
のレオナルド・ダ・ヴィンチ  
中野研二譯 創元社  
ハート著 加茂儀一譯  
創造者レオナルド・ダ・ヴィンチ  
重夫 綜合美術出版部  
萬能の天才レオナルド・ダ・ヴィンチ  
グアテリ共著 第一出版協會  
コミット 板垣 鷹穂  
レオナルド・ダ・ヴィンチ  
の創造的精神  
ラオコオン 繪畫と文藝との限界  
美術様式論  
獨逸精神の造型的表現  
デユルクハイム 山田智三郎譯  
十七・八世紀に於ける歐  
洲美術と東亞の影響  
山田智三郎著 アトリエ社  
西洋美術史 蘆谷瑞世譯  
鼓 常良 三笠書房  
西洋中世文化史 田沼 利雄 厚生閣  
希臘の鉄 兒島喜久雄 道統社  
ギリシャの文化 谷口吉郎編 大澤築地書店  
(藝術と科學叢書第一輯)  
村田 潔

## 繪 畫

- ロートレック(生涯と藝術)  
式場隆三郎 二見書房  
マネ 石井柏亭 鶴 龜 屋  
嘉門安雄 解說  
ボンベイの壁畫 足立源一郎 アトリエ社

## 文藝復興期の素描

- ファイレンツエ派の巨匠達  
ピカソと其の友達  
ドラクロアの日記  
セザンヌの手紙  
畫聖セザンヌ  
その生涯 その言葉  
サンドロ ボッティチエリ  
ゴッホの手紙  
近代フランス繪畫思潮論  
グレコとペラスケス

## 彫 刻

- ロダンの言葉  
ロダン  
希臘彫刻史

## 其 他

- 獨逸の民藝  
チベツト

木下隆太郎 アトリエ社

杉田益次郎 アトリエ社

十條小市郎共譯 筑摩書房

フェルナンデス 益田義信譯

オリヴィエ 石原求龍堂

中井 愛譯 山下部書店

リウオールド編 岩田滿洲雄譯

成田重郎譯 東京 堂

ギヤスケ著 摩壽意善郎 アトリエ社

古澤岩美編 梧桐書院

土井義信譯 甲鳥書林

荒城 季夫綜合美術研究所

吉川逸治譯 筑摩書房

ポールグセル二見書房

宇田川嘉彦 洗林堂書店

レーヴィ著 創元社

原隨園譯

ハロム著 南海書房

丸山武夫譯 春鳥會

マライニ

附

錄

# 國寶保存會

## 國寶保存法

昭和四年三月二十八日

### 法律 第十七號

第一條 建造物、寶物其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歷史ノ證據又ハ美術ノ模範ト爲ルベキモノハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ヲ國寶トシテ指定スルコトヲ得

第二條 主務大臣前條ノ規定ニ依ル指定ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第三條 國寶ハ之ヲ輸出又ハ移出スルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ主務大臣ノ許可ヲ受ケベシ但シ維持修理ヲ爲スハ此ノ限ニ在ラズ

第五條 主務大臣前二條ノ規定ニ依ル許可ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第六條 國寶ノ所有者ニ付變更アリタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨリ主務大臣ニ届出ヲ爲スベシ國寶滅失又ハ毀損シタルトキ亦同ジ

第七條 國寶ノ所有者ハ主務大臣ノ命令ニ依リ一年ノ期間ヲ限リ帝室、官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ國寶ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭祀法用又ハ公務執行ノ爲必要アルトキ其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ命令ニ對シテ不服アル者ハ訴訟ヲ爲スコトヲ得

第八條 前條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ出陳シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付ス

第九條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶其ノ出陳中滅失又ハ毀損シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ其ノ所有者ニ對シ通常生ズベキ損害ヲ補償ス但シ不可抗力ニ因リタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ損害補償額ハ主務大臣之ヲ決定ス其ノ決定ニ對シテ不服アル者ハ決定通知ノ日ヨリ三月内ニ通常裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ニ付其ノ出陳中所有者ノ變更アリタルトキハ新所有者ハ當該國寶ニ關シ本法ニ規定スル舊所有者ノ權利義務ヲ承繼ス

第十一條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依リ必要アルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ國寶ノ指定解除ヲ爲スコトヲ得

主務大臣前項ノ規定ニ依ル指定解除ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第十二條 神社又ハ寺院(佛堂ヲ含ム以下同ジ)ノ所有ニ屬スル國寶ハ神社ニ在リテハ神職(官國幣社ニ在リテハ宮司、府縣郷社ニ在リテハ社司、村社以下ニ在リテハ社掌)、寺院ニ在リテハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)之ヲ管理ス但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ別ニ管理者ヲ定ムルコトヲ得

第十三條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ハ之ヲ處分シ、擔保ニ供シ又ハ差押フルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ處分シ又ハ擔保ニ供スルハ此ノ限ニ在ラズ

主務大臣前項ノ規定ニ依ル許可ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第十四條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ維持修理スルコト能ハザルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ニ對シ補助金ヲ交付スルコトヲ得

特ニ必要アルトキハ神社又ハ寺院以外ノモノノ所有ニ屬スル國寶ニ付前項ノ規定ヲ準用ス

第十五條 補助金ハ豫算額ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ精算ノ上剩餘アルトキハ之ヲ還付セシムルコトヲ得

第十六條 補助金及補給金トシテ國庫ヨリ支出スベキ金額ハ毎年度十五萬圓以上二十萬圓以下トス

前項ノ金額ノ外特ニ必要アルトキハ豫算ノ定ムル所ニ依リ臨時ニ補助金又ハ補給金ヲ支出スルコトヲ得

第十七條 國寶保存會ノ組織及權限ニ關スル事項ハ本法ニ規定スルモノノ外勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ關シテハ勅令ヲ以テ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

第二十條 主務大臣ノ許可ナクシテ國寶ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二千萬圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 國寶ヲ損壞、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百萬圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ國寶自己ノ所有ニ係ルトキハ二年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百萬圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第二十二條 第四條ノ規定ニ違反シ許可ヲ受ケベキ者之ヲ受ケズシテ國寶ノ現狀ヲ變更シタルトキハ五百萬圓以下ノ過料ニ處ス

第二十三條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ百萬圓以下ノ過料ニ處ス

第二十四條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ノ管理者又ハ神社若ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理者怠慢ニ因リ其ノ管理スル國寶ヲ滅失又ハ毀損スルニ至ラシメタルトキハ五百萬圓以下ノ過料ニ處ス

### 附則

第二十五條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本法ニ規定スル過料ニ付之ヲ準用ス

(昭和四年勅令第二百九號ヲ以テ同年七月一日ヨリ施行)

古社寺保存法ハ之ヲ廢止ス

古社寺保存法ニ依リテ特別保護建造物又ハ國寶ノ資格アルモノト定メラレタル物件ハ之ヲ本法ニ依リテ國寶トシテ指定セラレタル物件ト看做ス古社寺保存法ニ依リテ下付シタル保存金ハ之ヲ本法ニ依リテ交付シタル補助金ト看做ス

國寶保存法施行令

昭和四年六月二十九日  
勅令第二百十號

第一條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ出陳セシメタルトキハ當該博物館又ハ美術館ノ長、當該博物館又ハ美術館ノ長故障アルトキハ當該職制ノ定ムル所ニ依リ其ノ職務ヲ代理スル者ニ於テ出陳國寶ヲ管理ス

前項ノ管理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

第二條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ博物館又ハ美術館ニ出陳シタル國寶ノ出陳ニ要スル荷造運搬費等ハ當該博物館又ハ美術館ニ於テ負擔スルモノトス返送ニ要スル荷造運搬費等亦同ジ

第三條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケタル國寶ノ維持修理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス文部大臣ハ前項ニ規定スル權限ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

第四條 文部大臣國ノ所有ニ屬スル物件ヲ國寶トシテ指定シタルトキハ其ノ旨

ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所管大臣ニ通知スベシ國ノ所有ニ屬スル國寶ノ指定解除ヲ爲シタルトキ亦同ジ

第五條 國ガ其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ、輸出若ハ移出シ又ハ其ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所管大臣ニ於テ文部大臣ノ同意ヲ得ベシ

第六條 文部大臣前條ノ規定ニ依ル同意ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第七條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ付滅失、毀損又ハ管理換アリタルトキハ其ノ旨ヲ所管大臣ヨリ文部大臣ニ通知スベシ國ガ國寶ヲ取得シタルトキ亦同ジ

附 則  
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)  
明治三十年勅令第四百四十六號ハ之ヲ廢止ス

國寶保存法施行規則

昭和四年六月二十九日  
文部省令第三十七號

第一條 文部省ニ國寶臺帳ヲ備ヘ國寶ヲ登錄ス

第二條 國寶臺帳ニハ左ノ事項ヲ記載シ寫眞ヲ添付ス  
建造物ノ類ニ付テハ

- 一 名稱及所在地
- 二 所有者ノ氏名(名稱)及住所
- 三 員數
- 四 構造及形式
- 五 大サ
- 六 創建及沿革

七 其ノ他參考ナルベキ事項  
寶物ノ類ニ付テハ

- 一 名稱
- 二 所有者ノ氏名(名稱)及住所
- 三 種類
- 四 員數
- 五 品質
- 六 形狀
- 七 法量
- 八 作者及傳來
- 九 其ノ他參考ナルベキ事項

第三條 國寶ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

- 一 國寶ノ名稱及員數
- 二 輸出又ハ移出ノ期間
- 三 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地
- 四 荷造運搬ノ方法
- 五 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法
- 六 保險ノ方法
- 七 摸寫摸造等ニ關スル約束アラバ之ニ關スル事項

第四條 國寶ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第五條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 現狀ノ變更ニ關スル設計仕様、計畫圖並ニ工事擔當者ノ氏名(名稱)

三 建造物ノ類ニシテ位置ノ變更ヲ生ズル場合ニ在リテハ其ノ移轉先著手ノ時期及竣成期限  
第六條 國寶ノ現狀變更ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ノ現狀變更ヲ竣リタルトキハ實施仕様書、寫眞並ニ圖面ヲ添ヘ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第七條 國寶ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ  
國寶ヲ取得シタル者ハ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ出陳中ニ係ル場合ヲ除クノ外所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ滅失又ハ毀損ノ事實ヲ知リタル日ヨリ五日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

第八條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ヲ受領シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ所有者ニ受領證書ヲ交付シ返付スルトキハ之ト引換フベシ

第九條 前條ノ國寶ヲ受領又ハ返付シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ都度文部大臣ニ報告スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十條 第八條ノ國寶滅失又ハ毀損シタル

ルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ直ニ文部大臣ニ報告シ且所有者ニ通知スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十一條 國寶保存法第八條ノ規定ニ依リテ支給スベキ補給金ハ國寶一件ニ付一年六圓以上百圓以下トシ文部大臣ニ於テ出陳ヲ命ズル都度之ヲ定ム

前項ノ補給金ノ支給ニ付テハ月割ヲ以テ計算シ一月ニ滿タザル日數ハ之ヲ一月ト看做ス

第十二條 國寶保存法第九條ノ規定ニ依ル補償ヲ受ケントスルトキ滅失又ハ毀損シタル國寶ノ所有者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ申請スベシ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 國寶ヲ出陳シタル博物館又ハ美術館ノ名稱及所在地  
三 滅失又ハ毀損スルニ至リタル事由並ニ毀損ニ付テハ其ノ程度

第十三條 國寶ノ指定解除アリタルトキハ國寶臺帳ヨリ當該國寶ノ登錄ヲ抹消ス

第十四條 國寶保存法第十二條但書ノ規定ニ依リテ別ニ管理者ヲ定メントスルトキハ當該神職又ハ住職（佛堂ニ在リテハ受持僧侶）ニ於テ其ノ事由ヲ具シ新ニ管理者ト爲ルベキ者ト連署ノ上文部大臣ニ申請スベシ

第十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 處分ノ方法  
三 對價、報酬又ハ之ニ準ズベキモノ  
四 處分ノ相手方ノ氏名（名稱）及住所  
五 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十六條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ擔保ニ供セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 擔保ノ期間  
三 擔保權者ノ氏名（名稱）及住所  
四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十七條 國寶ヲ擔保ニ供スル許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶ヲ擔保ニ供シ又ハ擔保契約ヲ解除シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第十八條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ

一 維持修理スベキ國寶ノ名稱及員數  
二 維持修理ニ要スル工費豫算、設計仕様並ニ計畫圖及寫眞  
三 著手ノ時期及竣成期限  
四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ

第十九條 國寶ノ維持修理費ニ對シ國庫ヨリ補助金ヲ交付スル場合ニ於テハ當該國寶ノ所有者ハ少クモ維持修理費總額ノ百分ノ五十ヲ負擔スベキモノトス但シ特別ノ事情アルモノニ限り其ノ負擔ヲ輕減スルコトヲ得

第二十條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ管理方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

第二十一條 補助金ノ交付後ニ於テ設計仕様又ハ著手ノ時期若ハ竣成期限ノ變更ヲ要スルトキハ其ノ事由及變更設計仕様並ニ計畫圖ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ

第二十二條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ國寶ノ維持修理竣リタルトキヨリ二月内ニ實施仕様書、寫眞、圖面並ニ精算書ヲ添ヘ文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十三條 本令ノ規定若ハ補助金交付ノ條件ニ違反シ又ハ補助金交付ノ目的ヲ遂行スルコト能ハズト認ムルトキハ文部大臣ハ補助金ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトヲ得

第二十四條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理不適當ニシテ滅失又ハ毀損ノ虞アリト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ管理方法ヲ指定スルコトヲ得

第二十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ博物館、美術館又ハ之ニ準ズベキ場所ニ出陳シ其ノ他當該神社又ハ寺院外ニ搬出セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 搬出ノ期間  
三 搬出先ノ場所及其ノ所在地  
四 荷造運搬ノ方法  
五 搬出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第二十六條 前條ノ規定ニ依リテ許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶再ビ當該神社又ハ寺院内ニ搬入シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十七條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ撰寫模造シ又ハ模寫模造ヲ承認セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 撰寫模造ノ期間  
三 撰寫模造ノ方法  
四 模寫模造ニ從事スル者ノ氏名及住所

第二十八條 國寶ノ維持修理、現狀變更等ノ場合ニ於テ佛像、經文、器物、銘文、棟札、埋藏物ノ類ヲ發見シタルトキハ當該國寶ノ所有者ヨリ其ノ實況ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十九條 本令ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體ヨリ文部大臣ニ差出ス書類ハ地方長官ヲ經由スベシ第十八

條、第二十一條及第二十二條ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體以外ノモノヨリ文部大臣ニ差出ス書類ニ付亦同ジ

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）  
古社寺保存法施行細則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日  
勅令第二百十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一條、第五條、第十一條、第十三條及第十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス  
國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長一人及委員三十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス  
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ  
第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス  
副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス  
會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得  
第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク  
國寶保存會ノ委任ヲ受ケ其ノ權限ニ屬スル事項ノ一部ヲ處理ス常務委員會ハ國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタル者十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得  
第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ  
幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス  
第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ  
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則  
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）  
古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス  
國寶保存會職員  
〔會長〕 侯爵細川護立 〔委員〕 武内義雄、三矢宮松、飯沼一省、横河民輔、常盤大定、神津伯、新納忠之介、芝葛盛、渡部信、福井利吉郎、瀧精一、徳富猪一郎、土屋純一、溝口積次郎、奥田誠一、伊東忠太、辻善之助、藤島亥治郎、新村出、山田幸次郎、原田淑人、古宇田實、

上野直昭、山田孝雄、梅原末治、香取秀治郎、黒板勝美、藤懸靜也、田中豐藏、近藤壽治 〔臨時委員〕 岸熊吉 〔幹事〕 小山隆、丸尾彰三郎、大岡實

重要美術品等調査委員會

重要美術品等ノ保存ニ關スル  
法律  
昭和八年四月一日  
法律第四十三號

第一條 歷史上又ハ美術上特ニ重要ナル價值アリト認メラルル物件（國寶ヲ除ク）ヲ輸出又ハ移出セントスル者ハ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ但シ現存者ノ製作ニ係ルモノ、製作後五十年ヲ經ザルモノ及輸入後一年ヲ經ザルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 前條ノ規定ニ依リ其ノ輸出又ハ移出ニ付許可ヲ要スル物件ハ主務大臣之ヲ認定シ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知スベシ  
前項ノ規定ニ依リ認定ノ告示アリタルトキハ賣買、交換又ハ贈與ノ目的ヲ以テ當該物件ノ寄託ヲ受ケタル占有者ハ其ノ認定アリタルコトヲ知りタルモノト推定ス

第三條 主務大臣第一條ノ規定ニ供リ許可ノ申請アリタル場合ニ於テ許可ヲ爲サザルトキハ許可申請ノ日ヨリ一年ヨリ長カラザル期間内ニ當該物件ヲ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リテ國寶トシテ指定シ又ハ前條ノ規定ニ依リ認定ヲ取消スベシ  
第四條 認定、其ノ取消及第二條ノ規定

ニ依リ認定物件ノ所有者ニ付變更アリタル場合ノ届出ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 主務大臣ノ許可ナクシテ第二條ノ規定ニ依リ認定物件ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ三年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス  
附 則  
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス  
重要美術品等ノ保存ニ關スル法律施行規則  
昭和八年四月一日  
文部省令第十號

第一條 昭和八年法律第四十三號（以下單ニ法ト稱ス）第二條ノ規定ニ依リ認定ヲ爲ス物件概ネ左ノ如シ  
一 繪畫  
二 彫刻  
三 建造物  
四 文書  
五 典籍  
六 書蹟  
七 刀劍  
八 工藝品  
九 考古學資料

第二條 重要美術品等ノ所有者、管理者又ハ占有者ハ當該吏員ノ請求アリタルトキハ法第二條ノ規定ニ依リ認定（以下單ニ認定ト稱ス）ノ前後ヲ問ハズ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ムコトヲ得ズ但シ正當ノ事由アル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第三條 重要美術品等ニ付認定ヲ受ケントスル者ハ左ノ事項ヲ具シ現狀ノ寫眞ヲ添付シテ文部大臣ニ申請スベシ  
一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所



三 種類 四 員數

五 品質 六 形狀

キ現狀變更アリタルトキハ所有者ヨリ其ノ事由、實況竝ニ認定物件ノ名稱及員數ヲ具シ滅失、毀損又ハ現狀變更ノ事實ヲ知リタル日ヨリ五日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

七 法量 八 作者及傳來  
前項ノ申請アリタル場合ニ於テ必要アルトキハ文部大臣ハ當該物件ヲ文部省ニ提出セシムルコトヲ得

第七條

第四條 法第二條ノ規定ニ依ル認定物件(以下單ニ認定物件ト稱ス)ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由竝ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

認定物件ノ名稱及員數  
輸出又ハ移出ノ期間  
輸出又ハ移出港  
輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地  
荷造運搬ノ方法  
輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

一 認定物件ノ名稱及員數

規定ニ依リ國寶トシテ指定セラレタルトキハ其ノ認定ハ取消サレタルモノト看做ス

二 輸出又ハ移出ノ期間

法第三條ノ規定ニ依ル認定取消ノ外認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ現狀變更アリタルトキ其ノ他正當ノ事由アルトキハ文部大臣其ノ認定ヲ取消スコトヲ得

三 輸出又ハ移出港

前二項ノ規定ニ依ル認定取消アリタルトキハ其旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

四 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地

第八條 第二條ノ規定ニ違反シ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ミタル者ハ拘留又ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

五 荷造運搬ノ方法

第九條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

六 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

附 則  
本令ハ昭和八年法律第四十三號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第七條 認定物件ガ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リ國寶トシテ指定セラレタルトキハ其ノ認定ハ取消サレタルモノト看做ス

重要美術品等調査委員會規程  
昭和八年四月十一日  
文部省訓令第九號  
改正  
昭和十七年三月十九日  
文部省訓令第六號

第八條 第二條ノ規定ニ違反シ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ミタル者ハ拘留又ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

重要美術品等調査委員會ハ會長一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第九條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第十條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依嘱シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

第十一條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

要美術品等ノ保存ニ關スル法律(以下單ニ法ト稱ス)第一條ノ規定ニ依ル輸出及移出ノ許可竝ニ法第二條ノ規定ニ依ル認定(以下單ニ認定ト稱ス)及其ノ取消ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第十二條 重要美術品等調査委員會ハ會長一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第十三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依嘱シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

第十四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

要美術品等調査委員會ハ會長一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第十五條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第十六條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依嘱シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコトヲ得

重要美術品等調査委員會職員

〔會長〕 侯爵淺野長武 〔委員〕 岩橋小彌太、辻善之助、神津伯、原田淑人、天沼俊一、角南隆、和田英作、黒板勝美、柴田常恵、伊東忠太、大熊喜邦、中村直勝、男爵尾崎均盛、秋山光夫、香取秀治郎、脇本十九郎、田中豐藏、奥田誠一、佐々木信綱、藤懸靜也、三矢宮松、關係之助、梅原末治、石渡信太郎、近藤壽治〔臨時委員〕 吉野富雄、北原大輔〔幹事〕 小山西、丸尾彰三郎、大岡實

朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存會

朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存會

朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存會

昭和八年八月九日  
制 令 第六號

第一條 建造物、典籍、書蹟、繪畫、彫刻、工藝品其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範ト爲ルベキモノハ朝鮮總督之ヲ寶物トシテ指定スルコトヲ得

貝塚古墳寺址城址竊址其ノ他ノ遺蹟、景勝ノ地又ハ動物植物地質礦物其ノ他學術研究ノ資料ト爲ルベキ物ニシテ保存ノ必要アリト認ムルモノハ朝鮮總督之ヲ古蹟、名勝又ハ天然記念物トシテ指定スルコトヲ得

第二條 朝鮮總督前條ノ指定ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然記念物保存會(以下單ニ保存會ト稱

要美術品等調査委員會・朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存會

ス)ニ諮問スベシ

前條ノ指定以前ニ於テ急施ヲ要シ保存會ニ諮問スル暇ナシト認ムルトキハ朝鮮總督ハ假ニ指定スルコトヲ得

第三條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關スル調査ヲ爲ス爲必要アリト認ムルトキハ當該官吏ヲシテ必要ナル場所ニ立入り、調査ニ必要ナル物件ノ提供ヲ求メ、測量調査ヲ爲シ又ハ土地ノ發掘、障礙物ノ變更除却其ノ他調査ニ必要ナル行爲ヲ爲サシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ當該官吏ハ其ノ身分ヲ證明スベキ證票ヲ携帯スベシ

第四條 寶物ハ之ヲ輸出又ハ移出スルコトヲ得但シ朝鮮總督ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ  
朝鮮總督前項ノ許可ヲ爲サントスルトキハ保存會ニ諮問スベシ

第五條 寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ボスベキ行爲ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督ノ許可ヲ受ケベシ

第六條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關シ必要アリト認ムルトキハ一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施設ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ施設ニ要スル費用ニ對シテハ國庫ヨリ豫算ノ範圍内ニ於テ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第七條 朝鮮總督第五條ノ規定ニ依ル許可又ハ前條第一項ノ規定ニ依ル命令ヲ爲サントスルトキハ保存會ニ諮問スベシ但シ輕易ナル事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 寶物ノ所有者ニ付變更アリタルトキハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨリ之ヲ朝鮮總督ニ届出ヅベシ寶物滅失又ハ毀損シタルトキ亦同ジ

第九條 寶物ノ所有者ハ朝鮮總督ノ命令ニ依リ一年内ノ期間ヲ限リ李王家、官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ寶物ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭祀法用又ハ公務執行ノ爲必要アルトキ其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十條 前條ノ規定ニ依リ寶物ヲ出陳シタル者ニ對シテハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付スルコトヲ得

第十一條 第三條ノ規定ニ依ル行爲若ハ第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ノ爲損害ヲ被リタル者アルトキ又ハ第九條ノ規定ニ依リテ出陳シタル寶物其ノ出陳中不可抗力ニ因ルニ非ズシテ滅失若ハ毀損シタルトキハ朝鮮總督ハ其ノ定ムル所ニ依リ損害ヲ補償スルコトヲ得

第十二條 第九條ノ規定ニ依リテ出陳シタル寶物ニ付其ノ出陳中所有者ノ變更アリタルトキハ新所有者ハ當該寶物ニ關シ本令ニ規定スル義務所有者ノ權利義務ヲ承繼ス

第十三條 朝鮮總督ハ地方公共團體ヲ指定シテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ管理ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公共團體ノ負擔トス  
前項ノ費用ニ對シテハ國庫ヨリ豫算ノ範圍内ニ於テ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第十四條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依リ必要アリト認ムルトキハ朝鮮總督ハ保存會ニ諮問シ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ指定ノ解除ヲ爲スコトヲ得

第十五條 朝鮮總督第一條若ハ第二條第二項ノ規定ニ依リ指定ヲ爲シ又ハ前條ノ規定ニ依リ指定ノ解除ヲ爲シタルトキハ其ノ定ムル所ニ依リ之ヲ告示シ且當該物件又ハ土地ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ通知スベシ但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認ムルトキハ告示セザルコトヲ得

第十六條 朝鮮總督ハ國ノ所有ニ屬スル寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關シ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

第十七條 寺刹ノ所有ニ屬スル寶物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ズ  
前項ノ寶物ノ管理ニ關スル事項ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第十八條 貝塚、古墳、寺址、城址、窯址其ノ他ノ遺蹟ト認ムベキモノハ朝鮮總督ノ許可ヲ受ケタルニ非ザレバ發掘其ノ他現狀ヲ變更スルコトヲ得ズ  
前項ノ遺蹟ト認ムベキモノヲ發見シタル者ハ直ニ其ノ旨ヲ朝鮮總督ニ届出ヅベシ

第十九條 朝鮮總督ハ本令ニ規定スル其ノ職權ノ一部ヲ道知事ニ委任スルコトヲ得

第二十條 朝鮮總督ノ許可ナクシテ寶物ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二千萬圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 寶物ヲ損壞、毀棄又ハ隠匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百萬圓以下ノ罰金ニ處ス  
前項ノ寶物自己ノ所有ニ係ルトキハ二年前以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百萬圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第二十二條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百萬圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス  
一 許可ヲ受ケズシテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ボスベキ行爲ヲ爲シタル者

二 第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者

三 第十八條第一項ノ規定ニ違反シタル者

四 第五條若ハ第十八條第一項ノ規定ニ違反シ又ハ第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シテ得タル物件ヲ讓受ケタル者

第二十三條 第三條ノ規定ニ依ル當該官吏ノ職務執行ヲ拒ミ妨ゲ若ハ忌避シ、調査ニ必要ナル物件ノ提供ヲ爲サズ又ハ調査ニ必要ナル物件ニシテ虚偽ナルモノヲ提供シタル者ハ二千萬圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 第八條又ハ第十八條第二項ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

附 則

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府賣物古蹟名勝

天然記念物保存會官制

昭和八年八月八日  
勅令第二百二十四號

第一條 朝鮮總督府賣物古蹟名勝天然記念物保存會ハ朝鮮總督ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ賣物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

保存會ハ賣物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル事項ニ付朝鮮總督ニ建議スルコトヲ得

第二條 保存會ハ會長一人及委員四十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ朝鮮總督府政務總監ヲ以テ之ニ充ツ

委員及臨時委員ハ朝鮮總督ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス

會長事故アルトキハ會長ノ指定シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 保存會ノ議事ニ關スル規則ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第六條 保存會ニ幹事ヲ置ク朝鮮總督ノ奏請ニ依リ朝鮮總督府高等官ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

附 則

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府賣物古蹟名勝天

然記念物保存會職員

〔會長〕 政務總監田中武雄 〔委員〕 天沼俊一、鮎貝房之進、伊東忠太、池内宏、梅原末治、植木秀幹、大野謙一、小田省吾、小嶋恒吉、奥田誠一、鍋木外岐雄、金容鎮、吳世昌、崔南善、鹽田正洪、下郡山誠一、丹下郁太郎、田中豐藏、立岩巖、原田淑人、藤島亥治郎、藤田亮策、本多武夫、本田正次、水田直昌、三山喜三郎、森爲三 〔幹事〕 本多武夫、藤井宏 〔書記〕 有光敦一、杉山信三、森田正三郎

帝室技藝員

帝室技藝員の制度は明治二十三年十月我が皇室におかれて、明治維新以來藝術的に衰退し經濟的に困窮してゐた當時の我が美術界振興の思召しから制定せられたもので、帝室技藝員には人格藝術共に後進の師表と仰がるべき大家を、特にその爲に選ばれたる委員をして銓衡せしめ任命せられるものである。

〔帝室技藝員銓衡委員〕 清水澄、大谷正男、瀧精一、侯廣幡忠隆、侯細川護立

帝室技藝員名簿

日本畫 川合 玉堂 大正六年六月

朝鮮賣物古蹟名勝天然記念物保存會・帝室技藝員・帝國藝術院

日本畫 横山 大觀 昭和六年六月

同 橋本 關雪 同九年十二月

同 安田 靱彦 同

同 菊池 契月 同

洋畫 和田 英作 同

彫刻 山崎 朝雲 同

工藝 板谷 波山 同

同 香取 秀眞 同

同 清水 龜藏 同

帝國藝術院

帝國藝術院官制

昭和十二年六月二十四日  
勅令 第一一八〇號

第一條 帝國藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ヲ審議ス

帝國藝術院ハ藝術ノ發達ニ資スル爲必要ナル事業ヲ行フコトヲ得

帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付帝國藝術院ニ諮問スルコトヲ得

第四條 帝國藝術院ハ院長一人及會員八十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 院長及會員ハ藝術ニ關シ議見同歷卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

院長及會員ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

第六條 院長ハ院務ヲ總理ス

院長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル會員其ノ職務ヲ代理ス

第七條 帝國藝術院ニ主事ヲ置ク文部部

內ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第八條 帝國藝術院ニ書記ヲ置ク文部部

內ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國美術院官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ帝國美術院長又ハ帝國美術院會員タル者別ニ辭令ヲ發セラレザルトキハ夫々帝國藝術院長又ハ帝國藝術院會員ヲ命ゼラレタルモノトス

帝國藝術院職員

院長 清水 澄

會 員 朝倉 文夫 荒木悌二郎(十畝)

有島壬生馬(生馬) 石井 滿吉(柏亭)

板谷 嘉七(波山) 伊東 忠太

上村 常子(松園) 梅原龍三郎

梅若万三郎 多 忠 龍

尾上 八郎(柴舟) 大熊 喜邦

香取秀治郎(秀眞) 鍋木 健一(清方)

河井 又平(醉茗) 川合芳三郎(玉堂)

菊池 寬 菊池 完爾(契月)

北村 西望 清水六兵衛

窪田 通治(空穗) 幸田 成行(露伴)

幸田 延 國分 高胤(青厓)

小杉國太郎(放庵) 小林 茂(古徑)

小林 萬吾 小室貞次郎(翠雲)

齋藤 茂吉 齋藤 知雄(素巖)  
佐佐木信綱 佐藤 清藏  
志賀 直哉 清水 龜藏  
高濱 清(虛子) 谷崎潤一郎  
千葉 胤明 津田 信夫  
德富猪一郎(蘇峰) 富本 憲吉  
內藤 伸 中澤 弘光  
西山卯三郎(翠峰) 橋本 關一(關雪)  
平櫛傳太郎(田中) 藤井 浩祐  
藤田 嗣治 豊 時義  
寶生朝太郎 前田 廉造(青邨)  
正宗 忠夫(白鳥) 松林 篤(桂月)  
眞山 彬 南 薫造  
三宅雄二郎(雪嶺) 武者小路實篤  
安井會太郎 安田新三郎(歌彦)  
山崎 朝雲 山下新太郎  
山本 勇造(有三) 結城 貞松(素明)  
横山 秀磨(大觀) 六角注多良(紫水)  
和田 英作 和田 三造

主事 文部書記官 小山 隆

文部省美術展覽會

文部省美術展覽會は、明治四十年制定された美術審査委員會官制に基き同年第一回を開催、爾來毎年開催して十二回に及んだが、大正八年同官制を廢止して帝國美術院規程を制定、同年以後帝國美術院美術展覽會を開催し來り昭和九年第十五回に至つた。昭和十年帝國美術院を改組し新に帝國美術院官制を制定、同十一年春第一回帝國美術院展覽會を開催したが繼續されず、同年秋臨時に昭和十一年文部省美術展覽會を開催、同十二年六月

文部省美術展覽會規則

昭和十二年九月十一日  
文部省告示第三百十九號  
改正 昭和十三年八月三十一日  
文部省告示第三百三號  
改正 昭和十八年九月十四日  
文部省告示第七百四十四號

第一章 總 則

第一條 文部省美術展覽會ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ毎年一回之ヲ開催ス會場會期及事務所ハ其ノ都度之ヲ公告ス  
第二條 本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

- 第一部 繪畫
- 第二部 繪畫(油繪、水彩畫、バステル畫、素描、創作版畫等)
- 第三部 彫塑
- 第四部 美術工藝

第三條 陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經ベキモノトス

前項ノ規定ニ拘ラズ出品人ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ専門技術ニ依ル作品ニ限り無鑑査ニテ陳列スルモノトス但シ第四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル作品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス

帝國藝術院會員

文部省美術展覽會委員

三 當該年ノ文部省美術展覽會審査員  
四 帝國美術院美術展覽會、紀元二千六百年奉祝美術展覽會及文部省美術展覽會

會ニ於テ委員又ハ審査員タリシ者  
五 當該年ノ招待者  
六 當該年ノ無鑑査者  
第四條 本會ハ各部ノ綜合展覽會トシ鑑査作品及無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス

第五條 審査員ノ銓衡竝ニ本會ノ企畫運營等ニ關スル事項ノ審議ヲ爲ス爲文部省美術展覽會委員長及委員ヲ置ク  
委員長必要アリト認メタルトキハ前項ノ事項ニ付會議ヲ開クコトヲ得  
會議ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第六條 委員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ  
委員ハ帝國藝術院第一部繪畫、彫塑、工藝關係會員、美術ノ技能優秀ナル者及學識經驗アル者ノ中ヨリ帝國藝術院長ノ推薦ニ依リ文部大臣之ヲ依囑ス

第七條 委員ノ任期ハ一年トス但シ重任ヲ妨ゲズ  
第八條 委員ハ審査員ヲ兼スルコトヲ得  
第九條 鑑査、審査及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査員長及審査員ヲ置ク  
審査員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ  
審査員ハ文部大臣之ヲ依囑ス

第十條 鑑査ハ提出セル作品ニ付陳列スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ付優秀ナルモノヲ選定ス  
第十一條 審査員ハ審査員長ノ定ムル所ニ依リ第一部乃至第四部ノ各部ニ分屬ス

審査員長ハ各部ノ審査員主任ヲ任命ス  
審査員ハ各部ニ付鑑査及審査ヲ行フ

第二章 出 品

第十二條 出品スベキ作品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル  
故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第十三條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス  
第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第十四條 出品スベキ作品ハ同一人ニ付各部共一點トス  
第十五條 形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス

第十六條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ一箇ニ合裝セルモノハ之ヲ一點ト看做ス  
第十七條 出品スベキ作品ノ大サハ左ノ各號ニ依ル

- 一 第一部ハ縱物 横四尺 縱七尺以內(裝飾設備ヲ含ム)
- 二 第二部ハ五十號以內 横物 横五尺 縱四尺以內(裝飾設備ヲ含ム)
- 三 第三部ハ等身以內 浮彫横六尺以內(裝飾設備ヲ含ム)
- 四 第四部ハ屏風、壁掛類 六尺角以內(裝飾設備ヲ含ム)

棚及机類 正面三尺以内

奥行二尺以内

衝立類 三尺五寸角以

内(杵、足共)

額面類 二尺五寸角以

内(裝飾設備ヲ含ム)

第十八條 作品ノ搬入受付期間ハ毎年展

覽會開催ノ都度之ヲ公告ス

第十九條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品ス

ルコトヲ得ズ

一 製作後五年以上ヲ經タルモノ

二 既ニ帝國美術院美術展覽會及文部

省美術展覽會ニ陳列シタルコトアルモノ

三 風教ニ害アリト認ムルモノ

第二十條 鑑査ヲ受クベキ作品ヲ出品セ

ントスル者ハ金一圓ノ手数料ヲ納付ス

ベシ既納ノ手数料ハ如何ナル事由アル

モ之ヲ還付セズ

第二十一條 出品セントスル者ハ所定書

式ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ

差出スベシ故人ノ作品ヲ出品セントス

ルトキハ申込書中解説書欄ニ製作者ノ

氏名及履歷ヲ記入スベシ

作品ニハ命題及出品人氏名ヲ記シタル

紙片ヲ裏面ニ貼附スベシ

第二十二條 本會事務所ニ於テ作品ヲ受

理シタルトキハ直チニ受領書ヲ交付ス

第二十三條 受理シタル作品ハ撤回スル

コトヲ得ズ但シ審査員長ノ許可ヲ得タ

ルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十四條 第一部第二部ノ作品ハ額面

ト爲シ枠線ヲ附ス等出品人ニ於テ適當

ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第二十五條 出品人ハ陳列品ノ位置、配

列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十六條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ

出品人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ在ル

出品團體ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其

ノ費用ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ

第二十七條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ

充分ノ注意ヲ爲スト雖モ粉失、毀損、

其ノ他ノ損害ニ對シ一切責任ニ任ゼズ

第二十八條 作品ノ撮影又ハ模寫ハ出品

人ノ承諾ヲ得且文部省ノ許可ヲ受クル

ニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者會場ニ於テ作

品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントスルトキ

ハ許可證ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受

クベシ

文部省ハ作品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之

ヲ刊行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査

第二十九條 鑑査及審査ノ方法ハ審査員

長及各部ノ審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第三十條 鑑査ヲ經タル陳列品ハ總テ特

選ノ査定ヲ受クルモノトス

第三十一條 鑑査及審査ノ結果ハ審査員

主任ヨリ之ヲ審査員長ニ報告スベシ

第三十二條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ

異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及撤出

第三十三條 陳列品ハ本會事務所ニ於テ

其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス但シ開

會後五日間陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハ

ズ

第三十四條 陳列品ヲ購買セントスル者

ハ代金ヲ添ヘテ本會事務所ニ申出ツベ

シ

第三十五條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルト

キハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ

得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上ト

ス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂

ヲ爲サザルトキハ手附ハ之ヲ拋棄シタ

ルモノト看做ス但シ拋棄シタル手附ハ

當該出品人ノ所得トス

第三十六條 第三十四條ニ依ル代金及第

三十五條第二項ニ依ル手附ハ展覽會終

了後拂渡ヲ爲スモノトス

第三十七條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ

作品ニ其ノ旨ヲ貼紙ス

第三十八條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價

ヲ變更セントスルトキハ本會事務所ニ

届出ツベシ

第三十九條 出品人ニ於テ作品及代金受

領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ

其ノ住所及氏名ヲ本會事務所ニ届出ツ

ベシ

第四十條 陳列品ハ展覽會終了後三日以

内ニ出品人ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ期間内ニ撤出セザルトキハ文部

省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第四十一條 陳列スルコトニ決定シタル

作品以外ノモノハ展覽會開會後五日ヲ

經過シタル後十日間以内ニ出品人ニ於

テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ期間内ニ撤出セザルトキハ文部

省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第四十二條 陳列品中賣約済ノモノハ展

覽會終了後買主ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出

シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第四十三條 展覽會終了後陳列品ノ撤出

運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ本

會事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズ

ルコトアルベシ

第五章 觀覽

第四十四條 觀覽時間ハ開會中毎日午前

九時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依

リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコト

アルベシ

第四十五條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコ

トヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ

從フベシ

第四十六條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊

ルノ虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁ジ

又ハ退場セシムルコトアルベシ

## 美術研究所

東京都下谷區上野公園  
電下谷三四八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基きそ

の遺産を以て開始されたもので、昭和五

年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行

人より建物、諸設備及事業の一切を政府

に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國

美術院附屬として設置した。昭和十年六

月帝國美術院改革に伴ひ新に美術研究所

官制を制定、文部省所管、帝國美術院に



附置され、次で昭和十二年六月官制改正を見、文部大臣直接監督の下に獨立して既定の事業を進めることとなつた。その目的は美術に關する事項の學術的調査研究に在り、傍ら美術に關する研究資料を蒐集して美術圖書館的な貢獻をなさんとし、又調査研究の結果を出版、展覽、講演等に依つて發表せんとするものである。現在著手しつゝある事業は大略次の如くである。

一、研究資料蒐集  
美術品の寫眞其の他の複製、模寫模造等の標本、圖書雜誌其の他の資料

一、古美術に關する調査研究  
東洋及日本美術に關する美術史的調査研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東洋美術家辭典、美術關係史料、美術關係文獻目錄等の編纂

一、明治大正時代美術の調査研究  
明治大正美術史の編纂

一、現代美術に關する調査研究  
現代美術及美術界に關する調査、日本美術年鑑の編纂

一、其他美術行政及教育並に美術の技法及材料に關する調査研究

一、刊行物頒布  
「美術研究」隔月發行、「日本美術年鑑」「日本美術資料」毎年一回刊行、其の他臨時「美術研究資料」、「研究報告」を刊行頒布する。

一、研究資料閲覧及展觀  
研究者の爲に當所蒐集の圖書、寫眞、其の他の研究資料の閲覧を許可する、

又隨時陳列室に於て特殊なる資料を展觀して一般に觀覽せしめる。

一、黒田清輝作品陳列  
所内に黒田子爵記念室を設け、其の作品を陳列して定時（毎週木曜日午後）に公開する。

〔所長事務取扱〕 田中豐藏〔所員〕 田澤坦、隈元謙次郎、菅沼貞三〔助手〕 澤柳大五郎、中川千咲、河北倫明、黒川光朝〔書記〕 今關孝康〔囑託〕 田中喜作、大給近清、中根勝、渡邊一、梅津次郎、白畑よし、石澤正男、丸尾彰三郎、富永惣一、望月信成、福井利吉郎、兒島喜久雄、山田智三郎、須賀利雄、筒崎謙齋、吉川逸治、守中裕幸、大串純夫、秋山光利、根本新助、小山富士夫

美術研究所官制  
昭和十年六月一日勅令第四百十八號  
改正昭和十二年勅令第二百八十一號

第一條 美術研究所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ美術ニ關スル事項ノ調査研究ヲ掌ル

第二條 (削除)

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長  
所員 專任三人 奏任  
助手 專任三人 判任  
書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

第五條 所長ハ文部大臣ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌ル  
所員ハ所長ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌ル

第六條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス

第七條 書記ハ上司ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事ス

附 則  
本令ハ公布ノ日より之ヲ施行ス

東京美術學校  
東京都下谷區上野公園  
電下谷八〇二〇一―二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を以て設置せられ、文部省専門學務局長濱尾新が學校長事務取扱を命ぜられ、同十二年二月授業を開始した。同二十三年濱尾新に代つて岡倉覺三學校長となつたが同三十一年退官し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の教授、助教授が辭職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで同三十四年正木直彦學校長となり、昭和七年和田英作これに代り、次いで同十一年には芝田徹心學校長に任ぜられ、同十五年澤田源一學校長に任ぜられた。

本校の學科を本科（豫科、研究科を置く）と師範科（研究科を置く）とに分ける。何選科、聽講生の設置あり。

（本科）日本畫科、油畫科、彫刻科（塑造部、木彫部）工藝科（圖案部、彫金部、鍛金部、鍍金部、漆工部）及び建築科に分つ。修業年限四年。入學資格豫科修了者。授業料年額八十圓。在學中特定の學科目を修了したる者に中等教員無試験檢定の特典あり。

（豫科）修業年限一年。入學資格中學校

四年修了者、高等學校專科修了者、高等學校高等科入學資格試驗合格者。授業料年額八十圓。實技及學科の入學試験を行ふ。檢定料五圓。

（師範科）修業年限四年。入學資格中學卒業程度。授業料を徴收せず。入學試験を行ふ。檢定料五圓。

（研究科）實技、學術の二部に分つ。修業年限三年以内。入學資格、實技は本校卒業後二年を経過せず且卒業成績八十點以上の者、學術は本校卒業業者。授業料年額五十圓。

（選科）本科入學資格を有せざる者にして本科各科の實技のみを學習せんとする者を銓衡の上入學を許可す。近年募集せず。授業料年額八十圓。

（聽講生）生徒以外の者にして本校に於て教授する學科目中一科若くは數科を選び學習せんとする者は教授上差支なき場合に限り考查の上出席を許可す。聽講料一學年間一科目に付二十圓、一科目を増す毎に十圓。

昭和十七年四月一日に於ける各科豫科及師範科一年の生徒數は左の如くである。

〔日本畫科〕 二〇名〔油畫科〕 三四名  
〔彫刻科〕 塑造部一五名、木彫部七名  
〔工藝科〕 圖案部一四名、彫金部三名、鍛金部三名、鍍金部六名、漆工部八名  
〔建築科〕 七名〔師範科〕 二二名

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種の展觀を試み、何れも生徒學習の參考に



資する。

〔校長〕 澤田源一〔名譽教授〕 和田英作

〔教授〕 結城貞松、森井健介、多賀谷健吉、六角注多良、佐々木卓、小林萬吉、津田信夫、清水龜藏、朝倉文夫、北村西望、南薫造、和田三造、香取秀治郎、石田英一、田邊至、森田龜之助、小泉勝爾、海野清、關野金太郎、高村豐周、廣川松五郎、松田義之〔生徒主事〕 佐々木卓、森田龜之助、多賀谷健吉、北村西望、南薫造〔事務官〕 北浦大介〔助教授〕 松垣龜雄、水谷武彦、松田權六、山田康、岡四郎、森田武、山崎覺太郎、金澤庸治、常岡文雄、伊原宇三郎、丸山義雄、西田正秋、入谷昇、羽下修三、深瀬嘉臣、内藤春治、八田辰之助、羽野禎三、磯矢陽

昭和十五年十一月十四日勅令第七百六十九號を以て官制を公布、差當り東京美術學校に於て授業を行ふ。

工藝技術講習所官制

第一條 工藝技術講習所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ工藝ニ關スル技術ノ教授ヲ掌ル

第二條 工藝技術講習所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 專任二人 奏任

助教授 專任三人 判任

助手 專任二人 判任

書記 專任一人 判任

東京美術學校・工藝技術講習所

第三條 所長ハ文部部内ノ高等官ヲ以テ之ニ充ツ文部大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 教授及助教授ハ生徒ノ教育ヲ掌ル

第五條 助手ハ教授又ハ助教授ノ指揮ヲ承ケ授業及實習ノ補助ニ從事ス

第六條 書記ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第七條 所長ハ文部大臣ノ許可ヲ得テ講師ヲ囑託シ授業ヲ擔任セシムルコトヲ得

〔所長〕 澤田源一〔教授〕 兼務・津田信夫、森田武

東京高等工藝學校

東京都芝區新芝町電三田一一五六―八

本校は大正十年十二月の設立に係り、松岡壽初代の校長に任ぜられ翌十一年開校された。同十二年吉武榮之進代つて校長となる。同十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝實業學校として設置した。同十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造、同十六年鈴木京平が校長に任ぜられて現在に及ぶ。

本校の學科を工藝圖案科、造型工藝部、金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科及印刷工藝科（寫真部ヲ含む）に分ち、他に、研究生、選科生、聽講生、木材工藝別科を設置す。

尚昭和十二年十月一日より工業學校實

習指導員養成科を設置した。

〔本科〕 修業年限三年。入學資格中學卒又は専修合格者。授業料年額八十圓。

〔研究生〕 修業年限二年以内。入學資格本校又は實業專門學校卒業生。授業料年額八十圓。

〔選科生〕 修業年限三年以内。入學資格工業學校、中學校卒業生は一年以上、學歷なき者は五年以上志望學科の工藝に従事せる者。授業料年額八十圓。

〔聽講生〕 聽講料一學科一學期十圓。

〔木材工藝別科〕 修業年限二年。入學資格中等程度工業學校卒業生、又は中學校卒業生（作業科工作修得）。授業料年額五十圓。

〔工業學校實習指導員養成科〕 修業年限六ヶ月。入學資格縣立工業學校機械科卒又は中等學校卒業後六ヶ月間以上實地經歷を有する者。學費は毎月金四十圓宛補給せられ授業料は徴收せず。

本科生徒數

工藝圖案科 六二名

造型工藝部 一九名

金屬工藝科 七九名

精密機械科 二一九名

木材工藝科 七四名

印刷工藝科 六三名

寫真部 三〇名

木材工藝別科 二九名

工業學校實習指導員養成科 三三名

〔校長〕 鈴木京平

〔生徒主事〕 教授 近藤春文〔工藝圖案科〕 教授 宮下孝雄、築島棟吉、杉山豊

桔〔造型工藝部〕 教授 畑正吉、寺畑助之丞〔金屬工藝科〕 教授 豐田勝秋、益田森治〔精密機械科〕 教授 竹屋金太郎、永澤謙三、橋本宇一、長谷川一郎〔木材工藝科〕 教授 木槍想一、西海幸一郎、野村茂治〔印刷工藝科〕 教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮〔寫真部〕 久米福衛〔木材工藝別科〕 教授 木槍想一、築島棟吉、〔共通學科〕 教授 江崎敬藏、岡田楠次郎、和田香苗、馬場秋次郎、村尾力太郎

京都高等工藝學校

京都市左京區松ヶ崎御所海道町電上五七、五〇〇三、五七七〇

明治三十五年三月設置。中澤岩太初代校長となり、大正七年七月鶴巻鶴一之に代り更に大正十五年四月、村上宇一校長に任ぜられ現在に至る。

〔學科〕 色染科、機械科、圖案科、窯業科を置く。尚昭和十四年四月より精密機械科、人造纖維科の二學科を新設。昭和十七年四月より機械科及第二部精密機械科を新設した。第二部は修業年限四ヶ年。

〔本科〕 修業年限三年。入學資格中學校卒、實業學校卒及其と同程度。授業料年額八十圓。

〔研究生〕 本校又は他の實業專門學校卒業生が既修の學科目を更に研究しようとする場合詮議の上二箇年以内在學を許可されるもの。授業料年額八十圓。

〔選科生〕 修業年限三年以内。授業料一科目に付年額十圓。

〔校長〕 村上宇一〔名譽教授〕 中澤岩太、會田龍雄、本野精吾〔教授〕 村上宇一、

一

東京美術學校・工藝技術講習所

東京都芝區新芝町電三田一一五六―八

本校は大正十年十二月の設立に係り、松岡壽初代の校長に任ぜられ翌十一年開校された。同十二年吉武榮之進代つて校長となる。同十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝實業學校として設置した。同十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造、同十六年鈴木京平が校長に任ぜられて現在に及ぶ。

本校の學科を工藝圖案科、造型工藝部、金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科及印刷工藝科（寫真部ヲ含む）に分ち、他に、研究生、選科生、聽講生、木材工藝別科を設置す。

尚昭和十二年十月一日より工業學校實

習指導員養成科を設置した。

〔本科〕 修業年限三年。入學資格中學卒又は専修合格者。授業料年額八十圓。

〔研究生〕 修業年限二年以内。入學資格本校又は實業專門學校卒業生。授業料年額八十圓。

〔選科生〕 修業年限三年以内。入學資格工業學校、中學校卒業生は一年以上、學歷なき者は五年以上志望學科の工藝に従事せる者。授業料年額八十圓。

〔聽講生〕 聽講料一學科一學期十圓。

〔木材工藝別科〕 修業年限二年。入學資格中等程度工業學校卒業生、又は中學校卒業生（作業科工作修得）。授業料年額五十圓。

〔工業學校實習指導員養成科〕 修業年限六ヶ月。入學資格縣立工業學校機械科卒又は中等學校卒業後六ヶ月間以上實地經歷を有する者。學費は毎月金四十圓宛補給せられ授業料は徴收せず。

本科生徒數

工藝圖案科 六二名

造型工藝部 一九名

金屬工藝科 七九名

精密機械科 二一九名

木材工藝科 七四名

印刷工藝科 六三名

寫真部 三〇名

木材工藝別科 二九名

工業學校實習指導員養成科 三三名

〔校長〕 鈴木京平

〔生徒主事〕 教授 近藤春文〔工藝圖案科〕 教授 宮下孝雄、築島棟吉、杉山豊

一

東京美術學校・工藝技術講習所

古城鴻一、霜島正三郎、小島幸三郎、目賀田康一、山上操、向井寛三郎、田中隆吉、平岡尙、荒木長治、湯淺南海男、山田隆、高辻幸之助、瀬島巖、河村正義、鳴智惠人、芝原貞吉、藤田畔二、青木一郎、淺尾健次、鹿野治助、菊池武勝、松村彰一、脇村利一郎、立入明、淺山哲二、實藤玄、町田誠之、田邊武夫、吉武春男、加門建三、中條孝

本科生徒數

色染科	八九名
機織科	九〇名
圖案科	一二名
窯業科	九三名
精密機械科	二二一名
人造纖維科	九三名
機械科	七七名
第二部精密機械科	八四名

京都市立繪畫專門學校

京都市東山區今熊野日吉町  
電 祇園 一五八

明治四十二年三月創立。同校は「專門學校令」據り日本畫及圖案ヲ攻究セントスル者又ハ圖畫教員ヲラントスル者ニ必要ナル教育ヲ施ス」ことを目的とする。初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舍を營んだが大正十五年六月現地に移轉した。創立以來多數の日本畫家を輩出して今日に及ぶ。

(學科) 日本畫科、圖案科に分ち各科に豫科及本科を置き、別に研究科及選科を置く。

(豫科) 修業年限日本畫科二年。圖案科

一年。入學資格中學卒、專檢合格者。授業料年額(市内)六十圓(市外)七十二圓五十錢。

(本科) 修業年限日本畫科、圖案科共三年。入學資格同校豫科修了者。授業料豫科に同じ。

(研究科) 在學期間五年。入學資格同校各學科又は他の專門學校卒業者。授業料年額(市内)四十五圓(市外)六十二圓五十錢

(選科) 入學資格高等小學卒業者及之と同等以上の學力を有する者。授業料年額四十圓(京都市内に居住せざる者は五十五圓五十錢)

(校長) 中井宗太郎(教授) 入江波光、宇田萩郎、案本一洋、中村大三郎、石崎光瑤、榊原紫峰、宇都谷誠太郎、鹽津眞二、加藤一雄、大橋定、山口華陽

京都市立美術工藝學校

京都市東山區今熊野日吉町  
電 祇園 一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し本邦最初の畫學校である。初め普通畫學のみの教授をしたが、同二十一年應用畫學科を併置したのを初めに同二十七年には校則を改正、繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り、同三十四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改めた。大正十五年現地に校舍を移轉した。

同校は中等學校規程に據り、美術及び美術工藝に従事せんとする者に必要なる技能を授くるを目的とし、學科を繪畫科、圖案科、彫刻科、漆工科の四科とし修業

年限を五箇年とす。入學資格は國民學校初等科卒とし、授業料は京都市内に住者は一箇年五十圓其の他は六十圓五十錢である。

(校長) 中井宗太郎(實習科受持(繪畫科) 入江波光、藤田哲、登内微笑、西村卓三、多田敬一、小宮信一、辻宇佐雄、高木富三、猪原大華(圖案科) 千熊宇平、山鹿清華、田村春曉、山田江秀、片山行雄、丸毛又三郎、田ノ口青晃、太田喜二郎(彫刻科) 松田尙之、矢野判三、北村西望、太田喜二郎

工藝指導所

東京都豊島區西巢鴨一丁目  
電 大塚 七八六三  
大阪府西區江ノ子島上ノ町  
電 土佐 二六八〇  
仙臺市 堀六八〇  
電 仙臺 三七八〇

本所は商工省所管に屬し、我國固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求に合致せしむる」目的を以て昭和三年設置された。當初商工省内に假事務所を設け、同年十一月仙臺市に建築中の廳舎竣工と共に事務所を移轉し事業を開始したが、其の後事業の進展に伴ひ東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月商工省内に本所出張員事務所を設け當時所員を駐在せしむる事となつた。昭和十二年八月には官制の改正に依り、木工及金屬工品」を「工藝品」に改め職員を増員し、必要と認められる地に支所を置き事務を分掌せしむることとなつた。

尙輸出工藝雜貨改善に關する調査研究並に關西支所設置準備事務取扱の爲大阪府工業獎勵館内に當所出張員事務所を設け昭和十四年一月より事務を開始しつゝ、あつたが、同年八月大阪府江ノ子島に關西支所が設置され、昭和十五年十一月には職員を増員と共に、商工省告示を以て工藝指導所本所を東京市に移轉、又仙臺市に東北支所が設置された。東京本所は企劃部、研究部、指導部、庶務課の三部一課を置き、關西東北兩支所と共に三位一體となり一層本邦産業工藝の積極的改善指導に邁進、現在に至つた。

業務一般

一 調査研究

主として内外工藝情況に關する基礎的調査、工藝品の原材料・技術・意匠工具・機械に關する技術的調査、國內市場商品・生産・需要現況の調査、内外優良參考品の蒐集

二 試驗研究

工藝品の基礎的改善のために必要なる一切の技術的研究、市販賣品改善に必要な各種試驗並びに實驗

三 試作研究

研究試驗實驗に必要な各種モデルの試作、その結果に基き各種工藝品を試作し、工業的生産のために規範的原型を提供す

四

講習、講演、審鑑査その他の實地指導、當所の指導方針、試驗研究、調査の結果に基き、講習、講演會を開催し又は申請により地方講習、講演

會又は審鑑査のため職員を派遣し、實地指導をなす  
地方工業化促進

五 當所の研究、試作の成果が工藝品の改善發達に對し、基礎的の一般的なる場合は全國的普及を圖り、又特殊又は地方的なるものを目標とせる場合は、當該指導機關に移讓實施を促し全國的指導及全國的地方工業化を圖る。

六 製作加工圖案調製應需

依頼により工藝品の製作加工、又は意匠圖案の調製に應じ、又當所の研究に基く試作品及圖案的配布をなす。

七 製品、圖案、參考品の貸與及展示、本所の研究、試作、設計圖案又は參考品は申請により之を貸與し、或は展覽會、博覽會に出品す。

八 傳習生及研究生の養成

全國斯業の發達向上、近代化を目的とし、工藝各方面の業者及び子弟並に工業従業者に對し實務に必要な技術及び知識を短期間に修得せしむ。

九 質疑應答

工藝品の原材料、技術、工具、設備意匠、傾向その他工藝に關する質問に對し、口答又は文書を以て應答、業者を啓發指導す。

一〇 設備貸與

當業者の試験研究又は製品加工のため申請あるときは當所作業に支障なき限り、設備を貸與、便宜を圖る。

一一 刊行物の頒布

本所の試験研究及び調査に基き月刊「工藝ニュース」を編輯、その他不定期に「工藝資料」をまた年刊として年報を發行、各關係方面に頒布す

一二 各方面との聯絡

地方各指導機關其の他關係諸方面との聯絡を圖つて、研究試験其の他の重複、不統制を避けしめ、又各方面の力を集乘して指導計畫の綜合的効果的立案を圖る。

一三 一般指導啓發

適切なる方法に於て一般大衆の工藝への關心を鼓吹し、又工藝知識の普及、趣味の涵養を計り、以て工藝的水準の高揚を期すると同時に海外に我が工藝の特質、長所の宣傳啓蒙に當り、以て彼等の認識理解を深むるに努む。

工藝指導所官制

昭和十五年十一月十九日  
勅令第七百七十號改正

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル

一 工藝品ニ關スル試験及研究

二 工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 工藝品製作ニ關スル傳習及講話

四 試験研究ノ爲製作シタル工藝品並ニ加工シタル其ノ材料、調製シタル其ノ意匠圖案及製作シタル其ノ原型ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要

アリト認ムル場合ニ限り工藝品ノ製作並ニ其ノ意匠圖案及其ノ原型ノ調製ノ依頼ニ應スル事ヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク  
技師 專任十一人 奏任  
屬 專任 三人 判任  
技手 專任十六人 判任

所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ  
第四條 所長ハ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル  
第六條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス  
第八條 商工大臣ハ必要ト認ムル地ニ工藝指導所ノ支所ヲ置キ本所ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附 則  
本令ハ公布ノ日より之ヲ施行ス  
商工省內臨時職員設置制拔萃

昭和十七年  
勅令第四百六十八號改正

第二十條 不足物資ノ補填ニ關スル事務ニ從事セシムル爲工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

技師 專任 二人

屬 專任 一人

技手 專任 五人

同所處務規程拔萃

第一條 工藝指導所ニ企畫部、研究部、

指導部及庶務課ヲ置ク

第二條 企畫部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル  
一 工藝技術改善ニ關スル計畫ノ設定ニ關スル事項

二 内外工藝狀況ノ調査及資料ノ蒐集ニ關スル事項

三 工藝ニ關スル研究機關トノ連絡ニ關スル事項

第三條 研究部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル  
一 工藝品ニ關スル基礎的試験及研究ニ關スル事項

二 工藝品ノ意匠圖案ノ調製及其ノ原型ノ製作ニ關スル事項

三 工藝品ノ製作ニ關スル事項

四 工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事項

第四條 指導部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル  
一 試験研究ノ爲製作シタル工藝品並ニ加工シタル其ノ材料、調製シタル其ノ意匠圖案及製作シタル其ノ原型ノ配布ニ關スル事項

二 工藝品ノ製作ニ關スル實施指導ニ關スル事項

三 工藝品ニ關スル講習及講演並ニ工藝品ニ關スル展示會ニ關スル事項

四 傳習生ノ養成ニ關スル事項

第五條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル  
(以下略)

第六條 工藝指導所支所ニ支所長ヲ置ク  
支所長ハ所長ノ指揮監督ヲ承ケ支所全般ノ事務ヲ處理ス

第七條 所長處務細則ハ支所ノ處務規程ヲ設クルトキハ商工大臣ニ報告スベ

陶磁器試験所・附瀬戸試験所

シ、之ヲ變更スルトキ亦同ジ

第八條 所長試験又ハ鑑定ノ成績書ヲ作製スルトキハ其ノ擔任者ト共ニ之ニ署名又ハ捺印スヘシ

第九條 所長ハ毎年事業ノ成績ヲ商工大臣ニ報告スヘシ

職員

本所（東京）

〔所長〕 技師・齋藤信治〔研究指導部長〕

技師・寺坂毅〔庶務課長〕 屬・阿久津保太郎〔技師〕 中山修三、小池新二、西川友武、藤井左内、渡邊金三郎、安倍郁二〔兼任技師〕 小森弘業

東北支所（仙臺）

〔支所長〕 技師・松崎福三郎〔庶務係長〕 屬・苦米地竹次郎

關西支所（大阪）

〔支所長〕 技師・豊口克平〔技師〕 八井孝二〔庶務係長〕 屬・東海林榮

陶磁器試験所

京都市伏見區深草正覺町  
電長祇園一四七八・一四一一

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並にその輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關である。大正八年京都市より、元京都市立陶磁器試験場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたがこの際偶々瀬戸市に計畫された市立窯業試験所の土地、建物その他諸設備一切を

舉げて當所に移管し、同所を陶磁器試験所瀬戸試験場として當所に於て經營することになつた。

陶磁器試験所官制

大正八年四月五日  
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試験所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 陶磁器ニ關スル試験及研究

二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話

四 試験研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配付

第一條ノ二 陶磁器試験所ハ試験研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合ニ限り陶磁器ノ製作ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第二條 陶磁器試験所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 一人 奏任  
技師 專任 八人 奏任  
屬 專任 一人 奏任  
技手 專任 九人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

（第四條以下略）

同所處務規程抜萃

一、陶磁器試験所ニ第一部、第二部、第三部、第四部、瀬戸試験場及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第四部ニ於テハ特殊陶磁器ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試験場ヲ置キ陶磁器試験所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得

同所製品配付及受託製作規則抜萃

一、陶磁器試験所ノ試験研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式（中略）ニ依リ陶磁器試験所長ニ出願スヘシ

一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試験所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ

一 品種及數量

二 代金又ハ製作費及其ノ納付期限

三 引渡豫定期日

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日より五日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試験所所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程抜萃

一、陶磁器試験所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ

一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス

前項ノ期間及期日ハ陶磁器試験所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス

一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徴セス

附 瀬戸試験場

瀬戸市西茨町  
電瀬戸二四五六

京都本所の基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益々斯業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

陶磁器試験所職員

〔技師〕 所長・秋月透、瀬戸試験場長・中根俊雄、磯松敬造、水町和三郎、藤井兼壽、澤村滋郎、梶崎千代利、三津木力、保野福田郎（屬）滑川正雄、渡邊嘉昭

# 東京帝室博物館

東京都下谷區上野公園  
電下谷〇〇六・四六〇一

同館の創立は明治五年正院に於ける博覽會事務局の設置に始まり、其後同局を博物館と改稱し内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省へ移管となり、事務局（當時博物館と稱す）を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省管理となり、二十二年帝國博物館と改められ、歴史、美術、美術工藝、工藝、天產の五部を設け、三十三年現稱に改められた。天產部は大正十四年文部省に移管された。昭和十二年從來の歴史課、美術課を廢し列品課に改め、別に學藝課を新設した。陳列本館は震災に大破し、其の後表慶館を列品陳列に充てたが、今上陛下の御即位記念の事業たる帝室博物館復興委員會の復興大工事が七年を開して昭和十二年に竣工し、同年獻上せられ、同十三年十一月開館された。建物は地上二階、地下二階、總面積六千五百二十二坪、鐵骨鐵筋コンクリート造りの東洋風大建築である。館内を約二十室に分ち陳列は概ね第一、二室考古、第三、四室染織、第五、六、七室金工、第八室陶器、第九、十室彫刻、第十一、十二、十三、十四及十八室繪畫、第十五、十六、十七室漆工、第十九、二十室書蹟等に區分し、尙特別第一室に考古、特別第二、五室に彫刻を陳列する。以上の中繪畫、書蹟は毎月陳列

替を行ふ。尙本館開館と共に從來の表慶館には明治以降の日本畫、洋畫、彫刻、工藝を陳列し、近代美術館の機能を果たすことになった。

又構内には公爵九條道秀及益田孝より夫々寄贈され、昭和十一年開館された九條公爵記念館及應舉館がある。前者はもと東京赤坂なる九條公爵邸内の前公爵道實の居室で、昭和九年道秀が宮内省に前公爵の記念として獻納した。總坪凡そ四十四坪、二室、廻廊下附で一の間、二の間を通じて床張付、襖、腰障子に傳山樂山雪筆の著色四季樓閣山水圖が描かれこれはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したものである。後者はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附で一の間に松梅笹稚松が、二の間には蘆雁圖が共に墨畫で壁張付、襖、腰障子等に描かれ、何れも圓山應舉の筆である。又構内の茶室六窓庵は金森宗和の建立にかかり、もと奈良興福寺の慈眼院に在つたものである。何れも毎週一回晴天の日に公開する。尙外に校倉があり、奈良十輪院から移した奈良時代代の遺構で、扉に四天王を、内部壁板に般若十六善神を畫き、石臺には十六善神の彫刻がある。（總長）渡部信（事務官）河野勝彦（鑑査官）溝口順次郎、秋山光夫、三條西公正、石田茂作、矢島恭介、小林剛、野間

清六、鷹巢豐治、運實重康（御用掛）溝口三郎（鑑査官補）尾崎元泰、田中作太郎、金森遼、關根龍雄、堀江知彦、近藤市太郎、岡田讓、藏田藏、松下隆章、神林淳雄、守田公夫、岡田敬男、松村政雄、辻本直男、飯島勇、三木文雄（顧問）子爵岡部長景、清水澄、杉榮三郎、羽田亨、澤田源一、菊池豊三郎、飯沼一省、阿原謙藏、侯爵徳川義親、侯爵細川護立、池内宏、辻善之助、松本俊一、瀧精一、加藤正治、伊東忠太、男爵大倉喜七郎、男爵岡伊能、大橋新太郎、横河民輔（學藝委員）藤懸靜也、奥田誠一、香取秀治郎、關係之助、入田整三、吉野富雄（觀覽日）一月三日より十二月廿五日迄午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮す。（觀覽料）大人十錢、小人五錢、廿人以上の團體は大人五錢、小人三錢、教員引率學生生徒の團體は無料。

## 帝室博物館官制

大正十年十月六日  
皇室令第十四號  
大正十三年、十四年  
昭和十三年第八號

### 改正

第一條 帝室博物館ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ古今ノ美術品ヲ蒐集シテ公衆ノ觀覽ニ供シ兼テ美術ノ發達ニ資スル事業ヲ行フ所トス  
第二條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ置ク  
第三條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク  
總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬技手  
第四條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及

正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス  
第五條 事務官ハ專任二人奏任トス庶務ヲ分掌ス  
第六條 鑑査官ハ專任九人奏任トス美術品ノ鑑査解說陳列及保存ノ事ヲ分掌ス  
第七條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助ク  
第八條 屬ハ判任トス庶務ニ從事ス  
第九條 技手ハ判任トス技術ニ從事ス  
第十條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク  
館長ハ事務官ヲ以テ充ツ館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス  
帝室博物館顧問  
昭和十三年十一月七日  
宮内省令第八號  
宮内省ニ帝室博物館顧問ヲ置ク  
顧問ハ帝室博物館ニ關スル重要ナル事項ニ付宮内大臣ノ諮問ニ應ス  
顧問ハ二十五人以上以内トシ宮内大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス  
帝室博物館社寺寶物受託規程  
昭和十一年十一月三十日  
宮内省令第十二號  
第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル爲社寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ定ムル所ニ依ル  
第二條 寺社其ノ寶物ヲ帝室博物館ニ寄託セムトスルキハ寄託期間ヲ定メ書面ヲ以テ帝室博物館總長又ハ奈良帝室博物館長ニ申出ツヘシ寄託期間ヲ更新セムトスルキ亦同シ  
第三條 帝室博物館寄託ノ目的物ヲ受領



シタルトキハ附録様式ノ受託證書ヲ交付シ返還スルトキハ之ト引換フヘシ  
受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書ニ其ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押捺ス

第四條 受託物ハ寄託期間内ト雖モ之ヲ返還スルコトアルヘシ

受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ因リ寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三十日ヲ限り之ヲ返還スルコトアルヘシ  
前項ノ期間ハ修理其ノ他已ムコトヲ得サル事由アルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得

第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月ニ社寺交付金ヲ交付ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル荷造費及運搬費ハ帝室博物館ニ於テ之ヲ負擔ス

第七條 寄託期間六年以上ニ互ル受託物ニ付テハ特別ノ事情アル場合ニ限り寄託者ノ申出ヲ依リ帝室博物館ニ於テ其ノ修繕費ノ全部又ハ一部ヲ負擔スルコトアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託物ノ修繕ハ帝室博物館内又ハ指定ノ場所ニ於テ之ヲ行フモノトシ帝室博物館總長(奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長)之ヲ監督ス

前項ノ修繕ノ方法及程度ニ付テハ當該社寺帝室博物館總長(奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長)ト協議スヘシ

第九條 受託物ハ帝室博物館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗力ニ因リ滅失紛失又ハ毀損シタルトキ

ハ此ノ限ニ在ラス  
第十條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大臣ノ認可ヲ經テ帝室博物館總長之ヲ定ム

東京帝室博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ分陳センコトヲ望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、但シ書面ヲ以テ申出ツルトキハ其ノ品名形狀傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出陳ヲ承認シタルトキハ物品ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ辨スヘシ

第五條 出品ヲ模寫換造若ハ撮影センコトヲ請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ得タル後之ヲ許可スヘシ但シ各種列品集合全體ノ形狀ヲ撮影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ當時手入ヲ要スルモノハ本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕ハ此ノ限ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トス  
預期間ノ計算法ハ現品ノ領收六月以前ナルトキハ其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後ナルトキハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項

ノ通知ヲ受預シタルトキハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘシ  
第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テハ本證書ノ表面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延長スルモノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因リ若ハ本館ノ都合ニ因リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡スヘシ  
引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代理人ハ證書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記載シ記名捺印スヘシ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノト看做ス

預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三ヶ年ヲ經過スルモ引渡ヲ申出サルトキハ預證書ハ無効トシ現品ハ本館ニ於テ隨意ニ之ヲ處分ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタルトキハ速ニ本館ニ届出證書ノ再交付若ハ引換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發見セサル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ交付スヘシ

第十四條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ヒ預證書ヲ交付シ若ハ引換ヲ爲ストキハ其ノ理由ヲ證書ニ摘記ス

恩賜京都博物館

京都市東山區大和太路通七條上ル 電祇園五四

明治廿二年五月宮内省達を以て圖書寮

附屬博物館を廢止し、帝國博物館、帝國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が京都府廳に設置せられたが、廿五年工事に着手し廿八年現位置に竣工、三十年五月開館した。其の後官制改革により京都帝室博物館と改稱。大正十三年 今上陛下の御成婚に際し恩召を以て官内省より京都市に下賜せられ、同年二月一日より恩賜京都博物館と改稱し、京都市の經營に屬する事となつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳列し、一般の觀覽に供してゐる。陳列品を大別して歴史部、美術部、美術工藝部の三部とし、更に之を細分して左の如く部門を別けて居る。歴史部(一、圖書、二、古代遺品、三、祭祀宗教關係品、四、武器、五、禮式風俗關係品、六、貨幣、度量衡、信印)美術部(一、繪畫、二、書蹟、三、彫刻、四、建築)美術工藝部(一、金屬品、二、窯器、三、漆漆品、四、織織品、五、玉石甲角竹木品、六、紙草品、七、寫真竝圖繪)。現在の列品點數三千百七十六點。繪畫、文書、書蹟は毎月陳列替を行ひ、又隨時特別展覽會を開催する。

陳列館は九百十二坪、敷地總坪一萬六千二百坪、陳列室十六、他に中央室を設



け、講演會場に充つ。

〔館長〕則包末廣〔學藝委員〕猪熊淺磨、加藤修、源豐宗、禰氏祐祥、猪熊信男、水町和三郎、明石國助、植中直治郎〔主事〕棚田嘉藏〔主事補〕三田成人〔鑑査員〕松木聰二郎、土居次義、神田松之助、景山耕四郎、松田恒次郎

〔觀覽日〕一月五日より十二月二十五日迄。〔觀覽料〕大人二十錢、小人十錢〔特別觀覽料〕一人一點一圓、團體〔二十人以上〕大人一人十錢、小人五錢

大禮記念京都美術館

京都市左京區岡崎公園  
電上六七〇〇・七〇二〇

今上陛下の御即位の大禮を慶祝記念し奉るため京都市に於て建設せるもので、昭和六年起工し、八年竣工。爾來同市並に同館主催の美術展覽會を開催する他一般美術團體に陳列室を貸與する。尙十五年七月より明治以降の新美術品の陳列を開始し、毎月陳列品替を行ふ。本館は二階建鐵筋混凝土造にして建坪千四百八坪延坪二千八百三十二坪。

〔館長〕事務取扱・大石右一〔顧問〕飯田新七〔評議員〕西山卯三郎、太田喜二郎、植田壽藏、清水六兵衛、菊地完爾、中井宗太郎、安田耕之助〔主事〕川村泰敏〔囑託〕岡部三郎、瀬木忠夫、川口知雄

同館規則抜萃

第一條 本館ハ美術品及美術工藝品ヲ陳

大禮記念京都美術館・大阪市立美術館・奈良帝室博物館・朝鮮總督府博物館

列シテ一般ノ觀覽ニ供シ其ノ他斯道獎勵ノ用ニ供スルヲ以テ目的トス

第一項 新美術品及美術工藝品ノ常設陳列ヲナス〔茲ニ新美術品及美術工藝品トハ明治四十年以後ノ製作品トス〕

第二項 臨時ニ特別美術展覽會ヲ開催シ美術品及美術工藝品ノ陳列ヲナス  
第三項 一定ノ期間ニ限り團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館陳列室ノ使用ヲ許可ス  
第四項 右ノ外美術獎勵ノタメ美術品及美術工藝品ニ關スル參考資料ノ展觀ヲ爲シ美術關係圖書ノ閱讀機關ヲ設ケ又講演會映寫會等ヲ開ク

第二條 本館ハ前條ノ目的ヲ達スル爲本館ノ所藏ニ係ルモノ及官廳團體又ハ個人等ヨリ出品アリタルモノヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供ス本館ハ一定ノ期間ヲ限り團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ許可スルコトアルヘシ

第七條 本館ニ評議員若干人ヲ置ク、評議員ハ識見アル者ノ中ヨリ市長之ヲ委員ハ議見アル者ノ中ヨリ市長之ヲ委員トス

第八條 評議員ハ重要ナル館務ニ關シ館長ノ諮問ニ應ジ又ハ意見ヲ開陳スルモノトス

第十條 本館ハ一月五日ヨリ十二月二十五日迄毎日左ノ時間中開館スル但シ時宜ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ閉館スルコトアルヘシ

一月、二月、三月、十月、十一月、

十二月、午前九時ヨリ午後四時マデ  
四月、九月、午前八時ヨリ午後四時マデ  
五月、六月、七月、八月、午前八時ヨリ午後五時三十分マデ

大阪市立美術館

大阪市天王寺區茶臼山町天王寺公園内電天王寺六〇・六〇一

古美術品の常設展觀と一般美術展の展觀場としての設備を兼ね、昭和十一年五月落成。同月帝展作品の陳列を以て開館し、古美術の常設展觀は同年九月より正式に開館した。建物に鐵筋混凝土造、三階建て地階を加へ、建坪一二二二坪、延坪三八五五坪。陳列室、展覽會室、講堂圖書閱覽室等より成り、陳列室は同館の蒐集保存に係る古美術品―繪畫、彫刻、美術工藝、書蹟、考古學資料等を常設展觀し、展覽會室及講堂は一般美術展並美術講演會、講習會等の開催希望者に貸館し、又圖書閱覽室に於て同館所藏の圖書を規定に従ひ一般の閱覽に供する。

〔館長〕上野直昭〔主事〕高津滿、望月信成〔學藝員〕小林太市郎、藤井源一、片山喜之、前田泰次

奈良帝室博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せられ同二十八年四月開館。三十三年官制の改革と共に現稱に改められた。陳列品は古社寺所有の國寶等にして政府の命令出陳に依るもの、及社寺、個人その他より

の寄託による古美術品を蒐めて居る。概して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古より鎌倉期に至る優秀品が多數陳列されてゐる。出陳物を美術品、歴史品、美術工藝品及書蹟の四部門に分ち、彫刻繪畫等の美術品は各室別、時代參考順に陳列し歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚陳列をしてゐる。館内は十三室に分れ、

第一室より第三室まで彫刻、第四室より第七室迄工藝品、第八室は歴史品、第九室より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の順に陳列し、此中第一室より第八室に至る彫刻歴史及工藝品は六月、十二月に定期の陳列替を行ひ、第九室以降の繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙毎月第一、第三土曜日の午後陳列品に即しての解説的講座が開かれる。官制、社寺寶物受託規程等は帝室博物館の項参照。

〔館長〕宮野安〔御用掛〕大宮武庸〔鑑査官補〕龜田孜、松島順正〔學藝委員〕中村雅真、新納忠之介、梅原未治

〔觀覽日〕自一月三日至十二月二十五日〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢

朝鮮總督府博物館

京城府光化門通景福宮内  
電 光化門六六一

大正四年、施政五週年記念朝鮮物產共進會の開催に際し、京城舊王宮景福宮構内に新築した美術館を中心とし、同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開館。本館陳列品は朝鮮石器時代、金石併用時代遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時

代、新羅統一時代の遺物、高句麗時代の古墳壁畫、高麗時代の陶器、李朝時代の書畫、陶器、漆器及び中央亞細亞の發掘品等で、朝鮮各時代に互る美術考古資料約一萬四千七百餘點が蒐集されてゐる。猶ほ大正十五年慶尙北道慶州邑に慶州分館を、昭和十四年忠清南道扶餘邑に扶餘分館を開設し、夫々新羅、百濟の遺品を主とする蒐集並びに陳列を行つてゐる。

〔主任〕有光教一

〔觀覽日〕月曜日、大祭祝日の翌日、自十二月二十六日至一月三日の間を除き毎日開館。

〔觀覽料〕一人十錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料。

# 李王家美術館

京城府貞洞町五  
電光化門七五

朝鮮に於ける美術獎勵の思召を體し、昭和八年德壽宮を公開し宮内の石造殿を改装して日本近代美術の陳列館とし、日本畫、洋畫、彫刻、工藝品を陳列したが更に朝鮮の古美術をも一堂に陳列すべき美術館建設の適切なるを認め昭和十一年八月新館の工事に着手、同十三年竣工、同六月開館した。新館は近世復興式の三階建て、從來昌慶苑内にあつた舊李王家博物館の藏品中、陶磁器、工藝品、繪畫彫像、古瓦など朝鮮の古美術品を陳列してゐる。上記の石造殿並新館を李王家美術館と總稱する。

〔館長〕葛城末治 〔技師〕下郡山誠一

〔屬〕主任 平田武夫、李揆弼〔技手〕高橋喜太郎〔囑託〕李海善〔委員〕黒板勝美、和田英作、工藤壯平、澤田源一、川合芳三郎、山崎朝雲、香取秀治郎〔評議員〕藤田亮策、鮎貝房之進、金容鎮、黒田幹一、奥平武彦、伊東横雄

## 主要觀覽施設一覽

### 關東地方

大倉集古館 赤坂區葵町三 電赤坂七四〇〔館長〕齋藤忠郎〔觀覽期日〕自一月六日至十二月二十五日、月曜日及祝日を除く、自四月一日至九月三十日〔午前九時―午後四時〕、自十月一日至翌年三月三十一日〔午前九時―午後三時〕〔觀覽料〕無料

書道博物館 下谷區上根岸一二五 中村邸内 電根岸六九四〔館長〕中村丙午郎〔觀覽期日〕自一月八日至十二月二十七日、毎月曜日を除く、午前九時―午後四時〔觀覽料〕三十錢

早大演劇博物館 淀橋區戸塚町一丁目早稻田大學構内 電牛込五一四〔館長〕河竹繁俊〔主事〕印南亮一〔觀覽期日〕毎月曜及祭日の翌日を除く他毎日、午前九時―午後四時〔觀覽料〕無料

東京美術學校陳列館 下谷區上野公園東京美術學校内 電下谷八〇二―一二二〔館長〕澤田源一〔文庫課長〕森井健介

〔觀覽期日〕日曜日、祝祭日、其他學校の休日を除き毎日、午前九時―午後四時但土曜日は正午迄。

東洋文庫 本郷區駒込上富士前町一四七 電大塚三一二八、三一二九〔理事長〕清水澄〔主事〕岩井大慧〔觀覽期日〕自一月八日至十二月二十四日、日曜日、祝祭日、文庫記念日十一月十九日を除く、〔觀覽料〕無料

日本民藝館 目黒區駒場八六一 電澁谷二三九四〔館長〕柳宗悅〔觀覽期日〕自一月十一日至十二月二十六日、毎月曜日、祭日及八月十六日―三十一日を除く午前十時―午後四時

〔觀覽料〕三十錢、學生十五錢、團體百人以上十錢

根津美術館 赤坂區青山南町六ノ一五 電青山二五六〇〔館長〕三矢宮松〔觀覽期日〕定例的に展覧〔觀覽料〕無料

三井洋畫コレクション 麹町區平河町二ノ七 電九段二〇七二〔館長〕三井高國〔觀覽期日〕毎週日曜日、但夏季八月中休場〔觀覽料〕無料

陽明文庫 麹町區霞ヶ關三ノ四、霞山會館内 電銀座六七八〇、京都市右京區宇多野 電西陣七五五〇〔總裁〕公爵近衛文麿〔理事長〕河原田稼吉〔常務理事〕男爵水谷川忠廣〔觀覽期日〕定例的に展覧〔觀覽料〕無料

金澤文庫 横濱市磯子區金澤町二一七〔文庫長〕關靖〔觀覽期日〕四大節、十二月二十五日より翌年一月七日迄、毎日

を除き毎日〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢、但二十名以上團體割引

鎌倉國寶館 鎌倉市雪ノ下鶴岡八幡宮境内 電七五三〔館長〕鈴木富七彌〔觀覽期日〕自一月四日至十二月二十七日、自四月一日至九月三十日〔午前八時―午後五時〕自十月一日至翌年三月三十一日〔午前九時―午後四時〕〔觀覽料〕大人二十錢、小人五錢、學生、軍人十錢、二十人以上の團體は半額

### 中部地方

尾張徳川黎明會美術館 名古屋市中區徳川町二ノ二七ノ一 電東六六三六〔主任〕近藤眞太郎〔觀覽期日〕自一月六日―至十二月二十五日、月曜日、祝祭日を除く。自三月一日―至八月三十一日〔午前八時―午後四時〕自九月一日―至翌年二月二十八日〔午前九時―午後三時〕〔觀覽料〕十錢、五十人以上は一人五錢。四月及十月開催の特別陳列日は料金一人三十錢

### 近畿、中國地方

有御館 京都市左京區岡崎圓勝寺町四四 電上五〔第一、第二館〕京都市東山區圓山町圓山公園内 電祇園三〇九一〔第三館〕〔主事〕藤井脩維〔觀覽期日〕毎月第一、第三日曜日〔正午―午後四時〕に限り公開、但一月、八月は休館、内外貴賓團體見學等相當なる紹介者ある場合豫め時日を打合せの上臨時開館することあり。〔觀覽料〕無料

高野山靈寶館 和歌山縣伊都郡高野町

大字高野山〔館長〕堀田眞快〔觀覽期日〕自二月一日至十二月二十四日迄毎日開館〔觀覽料〕一圓〔金剛峯寺、根本大塔金堂、大講堂、靈寶館五ヶ所共通〕

神宮徴古館 宇治山田市外神田久志本

町倉田山 電一二一〔館長〕佐藤東〔觀覽期日〕自一月一日至十二月二十九日、自三月一日至十月十五日〔午前八時―午後五時〕自十月十六日至十月三十一日〔午前八時―午後四時〕自十一月一日―十二月末日〔午前九時―午後四時〕〔觀覽料〕大人十錢、小兒五錢、團體割引あり。

池長美術館 神戸市葺合區熊内町一丁目

電葺合二四七二〔館長〕池長孟〔觀覽期日〕自四月一日至五月三十一日〔觀覽料〕大人五十四錢、小人三十錢

白鶴美術館 兵庫縣武庫郡住吉村字落

合一五四五 電御影六〇〇一〔館長〕山本規矩三〔觀覽期日〕春期自五月一日至同二十日、秋期自十一月一日至同二十日、午前九時―午後四時〔觀覽料〕大人五十錢、學生、軍人、團體二十人以上及十五歲以下半額

大原美術館 倉敷市新川町三二ノ一

電五〔館長〕武内潔眞〔觀覽期日〕自一月四日至十二月三十日、祝日及月曜日を除く、午前九時―午後四時〔觀覽料〕普通三十錢、學生二十錢、學生三十人以上の團體一人十錢

九州地方

市立長崎博物館 長崎市爐柏町三五

主要觀覽施設一覽

電四四四〔名譽館長〕國友鼎〔觀覽期日〕

自一月六日至十二月二十八日、祝日を除く。自四月一日至十月三十一日〔午前八時―午後五時〕自十一月一日至翌年三月三十一日〔午前九時―午後五時〕〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢、團體二十人以上半額、教師引率の學生生徒は無料

鹿兒島市立尙古集成館 鹿兒島市吉野

町磯九六九八〔館長〕島津繁磨〔觀覽期日〕自一月四日至十二月二十八日〔觀覽料〕大人十五錢、學生、生徒、軍人五錢團體割引あり。

朝鮮、關東州

開城府立博物館 開城府東本町五

電四三〇〔館長〕高島裕〔觀覽期日〕自一月六日至十二月二十七日。祝日、市政記念日十月一日、毎月曜日を除く。〔觀覽料〕大人五錢、學生、軍人、團體、小兒二錢

平壤府立博物館 平壤府牡丹臺公園

〔館長〕小泉顯夫〔觀覽期日〕自一月六日至十二月二十七日〔觀覽料〕大人十錢 小人五錢、學生團體一人二錢

旅順博物館 旅順市大迫町二四 電八

〇〔館長〕村井榮藏〔觀覽期日〕自一月四日―十二月二十七日、祝日、始政記念日、五月三十一日、十一月三十日を除く。

自四月一日―十月三十一日〔午前九時―午後五時〕自十一月一日至翌年三月三十一日〔午前九時―午後四時〕〔觀覽料〕本

館及記念館各一人十錢、二十人以上團體半額

# 美術家團體

## 一覽（五十音順）

### ア行

- 愛知縣工藝協會 名古屋市西區御幸本町一丁目、愛知縣商工館内 縣下工藝の振興を圖り、意匠圖案の調査研究、展覽會の開催、宣傳等を行ふ。（總裁）愛知縣知事（會長）西南廣吉
- 青丹會（洋） 品川區大井庚塚町四八三一、田坂乾方 電大森二八五一 昭和七年文化學院美術科卒業生を以て組織。同人展開催。（會員）大石俊彦、大兼實、大橋文子、田坂乾、千葉明、千頭清策、近岡善次郎、納富進、眞下慶治、安井隆
- 青森縣工藝協會 弘前市百石町三六電四七 縣下工藝の振興を圖り、弘前地方の工藝品製作者、販賣者等を以て組織。年一回競技展覽會開催。（會長）橋本良雄（理事）奈良金一、八木橋文平、木村勇藏、齋藤熊五郎（會員）九十餘名
- 秋田美術會（綜合） 世田谷區代田一ノ七六六、福田豐四郎方 昭和三年、故平福百穂を中心として、秋田縣出身の在京縣美術家有志を以て組織した。年一回東京及秋田市に展覽會開催。（會員）八十名
- 池上傳洞畫塾（日） 下谷區谷中清水町一二、池上方 電下谷三六四〇 池上秀畝門下を會員とし隨時展覽會を開く（會員）約七十名
- 石川縣工藝獎勵會 石川縣廳内經濟部商工課内 大正十年創立。國策に順應し縣下工藝の改善振興を圖り、年一回金澤に展覽會を開催。會員美術工藝部一九〇名、産業工藝部二八〇名（會長）石川縣知事
- 石川縣美術協會（綜合） 石川縣廳内學務部 昭和十四年田邊孝次を創立委員長として創立。郷土に於ける美術、工藝の向上を計り、綜合展を開催す。（總裁）侯爵前田利爲（會長）石川縣知事
- 石川縣美術文化協會 石川縣廳内大政翼賛會石川縣支部内 縣内の美術能力を結集動員するため昭和十七年一月設立。展覽會開催。（會長）翼賛會石川縣支部長（委員長）玉井勲泉
- 一水會（洋） 澁谷區千駄谷五ノ九〇二、木下孝則方 電四谷一一三二 昭和十一年十二月、舊二科會員八名は「會場藝術を非とし、技術を重んじ、高雅なる藝術を尊重することに於て一致」同會を創立した。同十二年十二月東京府美術館に第一回公募展を開催し、爾後毎年繼續。十八年第七回。（會員）有島生馬、池部鈞、石井柏亭、木下孝則、木下義謙、小山敬三、碓伊之助、安井曾太郎、山下新太郎、高野三三男、中村善策、田崎廣助、安宅虎雄、近藤光紀、中村琢二
- 岩手美術工藝協會 盛岡市岩手縣工業試驗場内 電五一 昭和八年創立。縣下美術工藝の振興を圖り研究の助成及展覽會指導を事業とし特に郷土古民藝の現代的再生に努む。（總裁）岩手縣知事（會長）同經濟部長（會員）八十名
- 上野會 麻布區飯倉町三ノ一九、田澤良夫方 電赤坂四七八六 昭和十四年創立、東京市内の日刊新聞社に屬し多年美術記事を擔當、又は擔當しつつある記者を以て組織する。（會員）外狩素心菴、遠山孝、金子義男、高澤初風、田澤良夫、青柳隆治、坂崎坦、廣瀬滋六、山口久吉、宮川謙一、上島長健、島村一次、川上宏
- 大分縣美術協會（綜合） 大分市荷揚町縣文化會館内 昭和十二年石丸優三を中心として創立。縣下美術の向上を圖り、展覽會開催。（會長）松本古村（會員）約二〇〇名
- 大阪繪畫會（洋、版） 大阪市南區大寶寺町六〇、川島方 昭和十三年創立、同人展を開催、又大阪新美術家同盟に加盟。（會員）赤松大祐、入江令一、今竹七郎、岡本誠、片山一子、川島昇太郎、河野重軌、田川覺三、谷福太郎、南平
- 大阪漆人會（工） 大阪市住吉區北畠東一ノ二四 電住吉三〇八七 昭和十五年秋大阪在住の漆藝家を以て組織す。年一回展覽會開催。（會員）小澤裕、川合漆仙、川端近左、川口虛舟、橋外波、安原祥窓、越田尾山、三砂良哉、島野三秋、森田誠之助（顧問）柴崎風卿
- 大阪女人社（日） 大阪市天王寺區上汐町六丁目、藤枝春月方 大阪の婦人日本畫家により組織され、毎年大阪に於て「大阪女流畫家展」を公募により開催し、昭和十七年第九回展に及ぶ。（同人）
- 生田花朝、橋本花乃、星加雪乃、藤紅鸞、大江更圓、村岡小丘、矢島玉女、松本華洋、福田芳德、小松華影、木谷千種、四夷星乃、嶋成園
- 大阪美術家聯盟（洋、彫） 大阪市住吉區鷹合町四八七ノ二、田川寛一、關西に於ける各美術團體の合同展開催を目的とす。（現在參加團體）核眞美術協會、關西水彩畫協會、新畫人集團、大阪繪畫會、大阪彫塑會、阪神彫塑家協會（委員）木村孝三、藤田金之助、米良道博、難波架空像、田川寛一、池島勘治郎、青野馬佐奈、桂龍雄、寺田清四郎、川島昇太郎、田川覺三、宮島久七、白石正義、唐木政一、大西金次郎、森島包光、妹尾健太郎、河合芳男、森福太郎
- 大阪彫刻家聯盟 大阪市北區新川崎町一、宮島久七方 電堀川一三一 昭和十六年四月創立。大阪を中心とする彫刻家の團體で、大阪彫刻會、大阪彫塑會、大阪木彫作家協會、彫光會、八紘會の會員を始め無所屬の作家を以て組織する。十八年四月開展。（委員長）黒岩淡哉（委員）岩田千虎、井上重四郎、大栗和七、横田文夫、田中圭水、津田風雲、仲眞弘、上田曉、保田龍門、山野長江、佐伯量良、宮島久七、美濃村松雲、白石正義、清水要、日高政法
- 大阪日本畫家報國會 大阪市西區南堀江通二丁目二八 電櫻川七二〇一 肇國の傳統に則り、美術文化の職域に減私奉公せんと昭和十六年十二月結成。（理事長）矢野橋村（理事）福岡青嵐、中村

貞以、矢野鐵山、幸松春浦、赤松雲嶺、青木大衆、生田花朝女〔主事〕高山辰三、岩本一成〔顧問〕白川朋吉、菅橋彦、北野恆富、須磨對水、岡本大更、山口輝平、久保井翠桐、湯川松堂、水野燕青、岡田雪窓〔評議員〕若干名

大阪美術懇話會

大阪市東區大手前

之町、大阪府情報部內 昭和十四年二月、大阪情報部の勸奨により阪神を中心とする美術家が相集り同會を結成した。趣旨は「會員相互の時局に處する信念を固くし美術の振興と文化の向上に努め以て美術報國の使命を全うせんとする」にあり、之に必要な事業を行ふ。〔評議員〕矢野橋村、北野恆富、菅橋彦、庭園耕山、福岡青嵐、中村貞以、山口輝平、赤松雲嶺、幸松春浦、矢野鐵山、須磨對水、岡枝金三、鍋井克之、赤松麟作、松本銳次、藤堂李三郎、永瀨義郎、岡部晋、青木大衆、小西謙三、古家新、齋藤清二郎、上田曉、保田龍門、中島豐次〔監事〕庭山耕園、齋藤清二郎

大阪美術展覽會〔日〕

大阪市東區高麗橋、三越大阪支店內

大阪三越が主催となり、毎春一回開催する日本畫の公募展。昭和十七年三月第二十八回展開催。〔鑑査委員〕西山翠嶂、堂本印象、中村大三郎、宇田萩郎、山口華楊、矢野橋村、福田平八郎、菊池契月、北野恆富、水田竹園、菅橋彦

大阪府工藝協會

大阪市東區大手前

之町、大阪府廳商工第二課內 大正十三年十月創立。社團法人。美術工藝、產

業工藝、意匠圖案各種の工藝家斯道關係者を以て組織。調査研究、展示會等行ふ。月刊「大阪府工藝協會雜誌」發行。〔名譽會長〕大阪府知事〔名譽副會長〕大阪府經濟部長〔理事長〕商工第二課長〔會員〕三百五十餘名。

旺玄社〔洋〕

都下武藏境八四二、三

好俊一方 牧野虎雄を主宰者とする洋畫家の團體。昭和八年より毎春東京府美術館に公募展を開催。十八年第十一回展。〔贊助員〕川村貞四郎、東久世秀雄、森田龜之助〔評議員〕牧野虎雄、岩井彌一郎、橋作治郎、三好俊一、田邊嘉重、深澤省三、小林喜代吉、水戸範雄〔同人〕市村雄造、石井四郎三、新野歡一、新居廣治、保科米三、遠山陽子、千木良富士、沼田一郎、川城國司、横田豐子、村瀨眞治、村尾榮、梅野順三、梅澤照司、松本茂雄、藤森はつゑ、小林猶治郎、小林榮、青山爽、佐藤文雄、阪井谷松太郎、樹下行雄、皆見鶴三、三橋兄弟治、進藤清、〔社友〕二十二名

岡崎美術展覽會〔日、洋〕

岡崎市立圖書館內

電六五〇 岡崎市の美術の發達を圖り、大正十二年設立。昭和二年繪畫部と工藝部は分離し岡崎美術展を創設。十七年第二十一回展開催。〔會長〕岡崎市長

岡美會

岡山市中之町四四、金剛莊內

電四二八八 岡山縣在住並に出身者を會員とし一般美術の普及を計る。鑑賞展、講演會等開催。代表者金海達水。

【力行】

佳都美會〔工〕

右京區嵯峨野生田、神坂吉明方

電嵯峨一一九 明治四十二年神坂雪佳を中心に設立された佳都美會の後身、隨時作品發表をなす。〔會員〕伊東陶山、伊東翠壺、岩村哲齋、岩村光眞、一瀬小兵衛、太田光嶺、金江宗觀、神坂松濤、長坂古榮、迎田嘉亭、上原春光、魚野自醒、山鹿清華、山田江秀、前田良三、岸本景春、湯淺華曉、三木表悅、三木玉眞、皆川月華、清水六兵衛、鈴木表朗

香川縣文化協會

高松市内町一、香川縣廳內政部社會教育課內

昭和十六年十二月創立。從來の香川縣工藝美術展を繼承して開催す。〔會長〕香川縣知事華畝洋畫會〔洋〕京都市東山區泉涌寺東林町一六、南素行方

華畝洋畫會〔洋〕

京都市東山區泉涌寺東林町一六、南素行方

昭和十一年創立。舊稱劍步美術協會。十五年改組。十八年京都美術館に第四回展開催。〔會員〕伴庄兵衛、太田喜二郎、角野判治郎、吉田苞、坪井一男、赤松麟作、新井完、安藤義茂、南素行、森脇忠、霜島之彦、池田治三郎、井垣嘉平

海洋繪畫協會〔洋〕

京橋區新川二ノ

二、大日本海洋聯盟本部 電京橋三三六三 昭和十五年發足した七洋美術會が改稱したもの、海洋思想普及を計る。〔會員〕石川滋彦、井手宣通、脇田和、高橋亮、田邊稔、中西利雄、中西次郎、長屋勇、内堀勉、黒田頼綱、松下義晴、藤本東一良、佐々木孔、三木辰夫、宮川仁、元田幹行、竹内英雄

塊藝會〔彫〕

名古屋市西區臺所町三

ノ一一、石田方

昭和八年一月創立。名古屋に於ける新進彫塑家の團體。年一同市に展覽會開催。〔會員〕野々村一男、大嶽茂樹、石田清、等九名

塊人社〔彫〕

澁谷區代々木初臺町五九四、安藤照方

電四谷四六三八 昭和十四年春、主線美術協會が解消したので、同會の彫刻部は舊稱「塊人社」に復歸した。公募展を開催する。〔同人〕泉谷喜一郎、長谷川塊記、堀江起、小笠原貞弘、大屋義昌、渡邊徹、成瀬藤治、村田勝四郎、松田尚之、小室達、河内山賢祐、岸崎猪之助、安藤照、荒居德亮、三澤寛〔社友〕十名

革丙會〔日〕

本郷區弓町一ノ二六、

榎田眞樞方 明治四十年故小堀鞆吾門下に依りて組織。大和繪糸の國史畫研究並に創作を目的とす。〔會員〕磯田長秋、岩田豐磨、太田天洋、川崎小虎、川船水棹、榎田眞樞、山川永雅、安田敦彦、小山榮達、小堀安雄、森戸果音、永井幾麻、眞野滿、羽石光志、川邊菊二郎、飯島眞風、柳生燕千、兒玉輝彦、村田金次、齋藤弓弦〔幹事〕榎田眞樞

關西水彩畫協會

大阪市住吉區萬代

東二丁目三三、桂龍雄方 昭和十年關西在住の水彩畫家により組織。十七年第八回展開催。〔會員〕桂龍雄、青野馬左奈、池島勘治郎、別車博資、中谷武雄、吉倉三郎、田中丘人、福井逸郎、江本兼次、宮本宗一、青山岩松、中川隆史、筑井辰之助、小倉實海〔會友〕五名〔研究會員〕一三〇名



きつ、きん

淀橋區西落合一、一六

平塚運一

創作版畫の發達と普

年七月青樹社で第二回展開催。（會務委

地梅太郎、佐々木孔、下澤木鉢郎

○、大久保方 電大塚四〇三七 昭和

會で、同人展を開く。〔會員〕大久保作次

九元社（彫） 世田谷區玉川奥澤町二

昭和八年創立。昭和二年より八年までの

十八年七月第九回展を東京府美術館

四郎、村井辰夫、鈴木三郎助、長沼孝三

宏、奥山泰堂

原田直康方  
昭和十三年九月創立。二

向作家の親睦を圖り、併せて各自の研究

赤松俊子、青木壽、新井ふみ子、藤田金

石丸一、伊藤久三郎、伊藤研之、桂ユキ

岡田岡因、高井貞二、栃木宗三郎、山路

村田耕、平松豊彦、戸川串田、山形稔三、

中村鵬生、村田春緑、楠田撫泉、山鹿清

五條通東大路東入 電祇園一二五〇、一



越田尾山、古賀藤々、小林美奈、會田裕  
宣、坂口宗雲齋、柴崎風岬、島野三秋、  
日比野近三、平松宏春、杉田禾堂、中島  
義夫、橋田裕年、八井孝二、西出宗雄、  
中條繁雄、大塚文吉、翁チトセ、辻正雄、  
中村貞雄、能守安太郎、朝倉祥景、龜山  
竹司、佐藤壽惠雄、宮澤均、宮本忠平、  
柴野知聖、清水小菊、樋口壽光、森田誠  
之助

乾坤社(日) 大阪市外枚方町御殿山  
電二六二 昭和十四年二月創立の新南  
畫團體、十八年第五回展を開く。(同人)

矢野知道人、矢野鐵山(社人)直原玉青、  
村上景雲、清水石溪、中谷紀山、融紅鸞  
園外美術院(日) 大阪府池田市滿壽  
美六五二、瀧秋方方 昭和十四年十月  
瀧秋方を責任者として創立。同十五年よ  
り毎年大阪及び東京に公募展開催。昭和  
十八年國外社を現名に改む。(顧問)小杉  
放庵(主宰)瀧秋方(會員)堀田秀義、  
八百谷大樹、伊藤晴雨、小野智久牛、入  
江正巳、草刈樵谷、植田春甫、町田周穂、  
姉小路不眉(社僚、社友)二十二人(本  
彫)河合曉光

建築學會 京橋區銀座西三ノ一 電  
京橋一二三二、一二三八 明治十九年  
創立。社團法人組織。建築に關する學術  
技藝の攻究發達を圖るを目的とす。月刊  
「建築雜誌」、其他圖書の刊行、建築に關  
する調査研究、講演會、展覽會の開催等  
を行ふ。(會長)小林政一(會員)一萬四  
千名

玄潮社(日) 淀橋區上落合一ノ四二  
美術家團體一覽

五、小泉勝爾方 電落合長崎二五八九  
畫壇新發展の一翼を期して昭和十八年四  
月創立。(顧問)結城素明(會員)井上白  
揚、岩田秀雄、石井了介、一噌青水、池  
田幸太郎、友田陽國、大澤恒躬、大村雅  
祥、大山華環、川村暢洋、土岡泰郊、山  
口實、前坂順三郎、藤森德皇、小泉勝爾、  
小坂勝人、淺野正俊、宮澤鐵夫、下田舜  
堂、森元三樹三

現代工藝作家協會(工) 品川區上大  
崎長者九二六一、大隅爲三 昭和十五  
年創立。新人の發見、新素材の研究獎勵、  
我が國固有技法の保存等を趣旨とす。同  
年十一月、日本橋高島屋に公募による第  
一回展開催。出品者は會員の推薦による  
もの、鑑査合格者等である。(顧問)俣  
細川護立、子爵岡部長景(會長)川崎克  
「常任理事」大隅爲三、森田龜之助、評  
議員二十五名、名譽會員十三名、會員七  
十餘名

現代美術展覽會(日、洋) 中野區鷺  
宮一ノ一〇、現代美術協會內 電中野  
三五五七 現代美術協會主催公募。昭  
和十八年六月東京府美術館に第五回展を  
開催。(同會第四回展審查員)(第一部)  
奥村土牛、金島桂華、中村岳陵、山口達  
春、福田平八郎、宇田萩郎、小野竹喬、  
堅山南風、田中咄哉州、森白市(第二部)  
金山平三、牧野虎雄、川島理一郎、曾宮  
一念  
兒玉畫塾(日) 本郷區駒込林町三五  
電駒込一五三五 兒玉希望の塾生より  
なり毎年春季展開催。

興亞造形文化聯盟(假事務所) 麴町  
區丸の内九ビル二階日本輸出藝聯合會內  
電丸の内五三七二 日華兩國に於ける  
工藝、建築其の他の造形運動の連絡提携  
を圖り以て中華民國の造形文化を指導し  
延て東亞共榮圈生活文化の建設に資せん  
と昭和十七年十月設立。日華造形文化に  
關する紹介、斡旋交換並びに講演會、展  
覽會等の開催、その他中華民國造形文化  
の調査、研究、保護、振興等に關する諸  
種の事業を行ふ。(會長)藤山愛一郎(副  
會長)嚴家巖、股同(理事長)高村豐周  
「副理事長」大森光彦、孫湜(常務理事)  
小池新二、杉浦齊、沈立、寺畑助之丞、  
「理事」山脇巖、村岡景夫、藤島亥治郎、  
吉田源十郎、佐藤武夫、山崎覺太郎、齋  
藤信治、大山廣光、内藤泰治、田澤嘉一  
郎、王右之、汪紉熙(監事)清水孝平、  
新田寄利雄、胡敬修

興亞美術聯盟(洋) 目黒區原町一三  
五一、齋藤種臣方(中支事務所)中支那  
上海施高塔路四達路新四達邸一號田代博  
方 昭和十四年結成。繪畫を通して善  
隣友好の實を擧げることとする。  
「會員」齋藤種臣、倉垣辰夫、小川智、  
池邊一夫、清水七太郎、衛天霖(北支)、  
深澤省三(蒙疆)、田代博(中支)

興國美術院(日、彫) 瀧野川區瀧野  
川町六九二、赤堀方 電王子三三六三  
日本古典の精神に立つて彫刻と邦畫の研  
究をなさんとすもの。昭和十八年五月  
創立。(同人)赤堀信平、渡邊光徳、津田  
禎二、田中巖外

工藝濟々會(工) 瀧野川區田端町四  
三八、香取方 大正十四年創立。隨時展  
覽會開催。(會員)板谷波山、石田英一、  
六角紫水、飯塚琅玕齋、保坂光山、仰木  
政齊、香取秀眞、鹿島英二、河面冬山、  
桂光春、堆朱楊成、海野清、梅澤隆眞、  
山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原  
千鹿、清水龍藏、森川紫山

工藝美術作家協會(工) 日本橋區室  
町三越五階日本美術報國會內 昭和十  
五年十月創立。(會長)藤山愛一郎、會員  
は帝文展出品者であつたが、今回日本美  
術報國會に合流。  
光風會(洋、工) 大森區田調布四  
ノ二一六、清水良雄方 電田調布二二  
〇八 明治四十五年創立。舊帝展系洋  
畫家の團體。春季洋畫及び圖案工藝の公  
募展を開催。昭和十八年創立三十周年記  
念展を東京府美術館に開いた。(會員)石  
川欽一郎、石橋武助、池上浩、石川滋彦、  
井手宣通、伊藤梯三、岩崎勝平、伊藤四  
郎、岩船修三、服部亮英、橋口康雄、星  
野正三、遠山清、土佐林豐夫、太田三郎、  
大野隆徳、緒方亮平、大澤海藏、小川智、  
大河内信敬、和田香苗、和田清、梶原貫  
五、河井清一、川合修二、角野判治郎、  
花嚴巖、栢森義、川端實、吉田苞、武内  
鶴之助、田中實一、田村一男、柘馬其一、  
辻永、中澤弘光、中村研一、中田滿雄、  
長原坦、上野正之助、黒田頼綱、山形駒  
太郎、山喜多二郎太、山崎坤象、山下忠  
平、山口猛彦、牧野司郎、藤岡俊一郎、  
小林萬吾、小林鎮吉、小林眞二、小寺健

一一三

吉、小絲源太郎、江藤純平、寺內萬治郎、  
跡見泰、赤城泰舒、安達眞太郎、朝井閑  
右衛門、鯨島利久、鬼頭錫三郎、清原重  
以知、南薰造、南政善、三宅克己、耳野  
卯三郎、水上信雄、清水良雄、島野重之、  
新道繁、白川一郎、市木慶治、森山肇、

杉浦非水、鈴木榮二郎、杉村惇、須田惣太、西山眞一、高宮一榮、中尾達、益山雅衛、木村八郎、白石鑒一、本儀信、森田元子、田中義夫、山中清一郎、神保利幸、妹尾壽信〔會友〕伊藤應九、池田快三、西村應定、戸塚孝三郎、岡田又三郎、小田忠、大富準雄、斧山萬次郎、渡邊武夫、數見定一、金子德衛、高橋道雄、高木春太郎、巽勇、反町博彦、辻光典、中谷ミユキ、中上川蝶子、永田精二、黑田久美子、山村孝太郎、藤井芳子、藤彦右衛門、藤江理三郎、藤本東一良、小林貞三、古屋浩藏、足立眞一郎、齋藤齋、白井次郎、森標澄子、瀬戸千代三、鈴木三五郎、米本一郎、三輪孝、笠井忠郎、足

高橋慶仲方 荒井寛方門下に依り組織。  
毎月研究會を開く。昭和八年第一回展開  
催、十三年六月第六回に至る。(指導者)  
荒井寛方(幹事長) 高橋慶仲(幹事) 笹沼  
寛祐、座間素賢、菊地公明、鈴木三朝、  
三藤耕寛、廣原浩暉

耕人社（日） 京都市中京區釜座通二條下ル、三宅風白方 電上六六五五  
山本春舉門下よりなる早苗會解散後、有志相集り昭和十八年三月結成、同年七月展覽會を開催した。（理事長） 案本一洋、（理事） 武田鼓葉、中野草雲、三宅風白（參事） 林文塘、玉舍春輝  
皐陶會（日） 目黒區下目黒四ノ八四四二、安原喜明方 昭和十四年結成。  
窯業工藝の進展を期す。（顧問） 板谷波山（會員） 板谷梅樹、各務鑽三、安原喜明、宮之原謙  
煥土社（日） 杉並區上高井戸町五一八九〇、野田九浦方 野田九浦の塾  
昭和十八年五月第八回展開催。

吉田宗齋方 東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の牙彫家が大俵會を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。〔委員長〕吉田宗齋〔顧問〕中山昇民、森田藻己、藤田景雲、篠秀一、石坂錦一〔代行委員〕竹内土生、菊地規章、吉田尚秋、内田祐康〔委員〕安藤文雅、安藤綠山、松田道直、田中秀行、堀志光、平賀明吟、小川流水、今井雅邦〔會員〕三十九名

國畫會〔洋、工、寫眞〕 澁谷區松澤

町六七番地、福島方 電澁谷三四一番  
大正七年一月小野竹喬、土田麥遷、村上  
華岳、野長瀬晩花、榎原紫峰の五名は國  
畫創作協會を設立、爾來每秋東京及京都  
に於て協會展を開催し、又入江波光はじ  
め數名の若い作家を同人に推舉したが、  
同十五年榎原龍三郎、川島理一郎の兩名  
を迎へて第二部を新設し更に富本憲吉、  
金子九平次を加へて彫刻及工藝を同部に  
置いた。その後昭和三年七月解散となつ  
たが、第二部は存續して國畫會と改稱し  
大橋幸吉、榎原龍三郎、川島理一郎、金

子九平次、富本憲吉、山協信徳の舊會員に新に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が参加し、翌四年「第四回國畫會展」を公募の上開催した。十年梅原龍三郎及富本憲吉は新帝院會員に任命、同年六月川島理一郎は同會を脱退した。同十二年四月從來の會員會友制を同人制に改む。尙第十四回展には寫眞部を新設し、鑑査には福原信三、野島康三の兩名が當つた。

〔休止中〕〔幹事〕岩田豊磨〔會員〕安田  
毅彦、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、  
川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、小山榮  
達、荻生天泉、公文蘆洲、兒玉輝彦

國風彫塑會(彫) 荒川區日暮里町九  
ノ一〇四〇、石川方 電駒込二六九七

「民族彫塑の創造と建設」を目標とする  
同會は、元第三部會が昭和十五年十一月  
改稱せるもので、十八年第九回國風彫塑  
會展を開催した。〔會員〕石川雄治、濱  
田三郎、向山峽路、早乙女龜次、日名子  
實三、鈴木賢二、永原廣、名久井十九三  
〔會友〕新關國臣、大木芳朗、田村辰治、  
瀬川藤一郎、成田政男、石塚裕康

國民總力朝鮮美術家協會 京城府光  
化門通國民總力朝鮮聯盟宣傳文化部文化  
課氣付 電光化門一八五〇 昭和十六  
年二月創立。美術を通じて内鮮一體の實  
を擧ぐべく、展覽會、講演會、機關紙發  
行等を行ふ。〔會長〕矢鍋永三郎〔理事〕  
堅山坦、加藤小林人、金股鎬、李象範、  
遠田運雄、日吉守、三木弘、山口長男、  
山田新一、戸張幸男、淺川伯教、藤村彦  
四郎〔幹事長〕大橋實〔幹事〕二十七名

〔會員〕約二百名  
國民美術協會 丸之内、明治生命館  
マール内 大正元年、第六回文展洋  
畫部の出品者懇親會の席上で「美術全部  
門を包容する協會組織」の設立が發議さ  
れ、翌二年三月創立總會を開催し、森林  
太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田  
英作の五名が理事となつた。同會は作家  
並に美術關係者を以て組織し、繪畫(日

本畫、洋畫)彫塑、建築、裝飾美術、學  
藝の五部を設け、藝術家共通の利益擁  
護並美術の社會的普及を圖るを以て目的  
とする。既往に於ける主要なる業績は大  
正年間における美術館建設、美術學校改  
革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の  
美術行政上の諸問題に關する政府當局へ  
の進言及數回に亘る佛蘭西及獨逸現代美  
術展覽會の開催等、尙前後十二回に亘り  
本會員の綜合展を開催したが昭和三年以  
後中止となつた。〔理事〕小倉右一郎、  
黒田鶴心、小寺健吉、菅原榮藏、津田信  
夫、西澤留敬

國民美術研究所 小石川區小日向水  
道町五三 電大塚六〇六八 昭和十六  
年八月創立。美術に關する出版、講演展  
覽會開催等を行ふ。〔理事長〕芳川敏〔理  
事〕高木紀重、高田俊郎〔評議員〕浦崎  
永錫、中山貞夫、大山廣光

〔サ行〕  
佐賀縣工藝協會 佐賀縣經濟部商工  
課内 昭和十一年設立。縣特産工藝品  
の産業化並その海外的進出を圖る目的と  
し、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技  
會の開催、宣傳等を行ふ。〔會長〕佐賀縣  
經濟部長

佐賀美術協會(綜合) 佐賀市興賀町  
精町、山口亮一方 大正三年久米桂一  
郎、岡田三郎助を指導者として、佐賀縣  
出身の美術愛好者に依り組織。郷土美術  
の啓蒙を趣旨とす。年一回公募展開催。  
會員三十九名

豐島區駒込三ノ三九九  
阜月會(工)

山本安曇方 昭和十一年第一回展開催。  
十四年第四回展開催。會員の新作を發表  
する。〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚  
琅玕齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、  
香取秀貞、桂光春、鹿島英二、河面冬山、  
堆朱揚成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、  
山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原  
千鹿、清水龜藏、森川紫山

彩交會(日) 名古屋市熱田區王ノ井  
町八二、石川英風方 電南四九一七  
大正十年創立。舊名愛土社。名古屋市中  
住及同市出身にして京都に在住する京都  
繪畫專門學校卒業生を以て組織。〔會員〕  
織田杏逸、和田青雨、石川英風、淺井正  
臣、大岩聚星等二十名

催書會 澁谷區代々木上原町一一一  
一、山崎省三方 昭和十三年二月創立。  
同人展を開催す。〔會員〕池田榮一、石井  
了介、渡邊進、金井正、谷とし子、高濱  
虎喜、津谷鹿市、中西義男、奥田まち子、  
岡村進、山崎省三、山本鼎、政森敏男、  
湯尾留吉、三澤正三

綵尚會(日) 麹町區九段四ノ一五、  
關尚美堂方 電九段二六〇二 關尚美  
堂が主催する日本畫展覽會〔會員〕磯田  
又一郎、橋本明治、西村卓三、西山英雄、  
奥田元宋、奥村厚一、加藤榮三、村田泥  
牛、山本丘人、新井勝利、三谷十糸子、  
菊池隆志、高橋周桑、江崎孝坪、寺島紫  
明

讀岐美術協會(日、洋) 高松市兵庫  
町、古木堂本店内 電二七〇一 昭和  
四年創立。地方美術の向上發達を圖る。

毎年一回公募展を開催し、講習會、寫生  
會等を行ふ。昭和十二年二月高松三越に  
第八回展開催。〔會員〕井川敬通、小西光  
雄、高橋正三、谷口國介、社内正芳、岡  
田秀雄、黒田純二、小川誠一、高木靜雄、  
高尾雄次、中村重幸、本多一郎、藤田四  
郎、河部基一、平井爲成

三三美術團(日、洋) 王子區稻付町  
五ノ九八二 昭和十七年三月創立。日  
本畫油繪の差別を越えて新時代の繪畫道  
を拓かんとす。十七年第一回展開催。〔團  
員〕伊藤仁三郎、今井廬人、林司馬、新  
見虛舟、要橋平、高階重紅、成井弘文、  
梅原藤坡、野々口重、松下義晴、佐々木  
孔、澤田石民、宮川仁、椎野修

三春會(洋) 本郷區森川町四二、野  
崎方 昭和三年度東美校洋畫科卒業生  
を以て組織。十六年五月東京府美術館に  
第八回展開催。〔會員〕岩田芳助、伊勢幸  
平、波多野勝好、二宮不二磨、利佐良顯、  
大澤昌助、奥村義雄、加藤顯清、飯島誠  
二郎、勝見謙信、田中政美、田中孝夫、  
田淵巖、竹田讓、中井惣之助、野崎龍雄、  
山村孝太郎、山口猛彦、安田岩次郎、元  
山清六、松原勝、福島順之助、小松原義  
則、天野武吉郎、淺井景一、佐藤文雄、  
佐藤功、佐川源治、三木辰夫、加藤久幹、  
原田直康、關谷陽、杉山榮、鈴木重成、  
林清

三部作家協會(彫) 豐島區千川町一  
ノ二、長谷川方 電落合長崎二一六二  
舊稱文展三部作家協會、文展出品の三部  
作家中團體に屬せざる作家の集り、昭

和十四年來展覽會を開催。(會員) 四十八名(幹事) 藤井浩祐、吉田三郎、長谷川義起、中川清、木村桂二、白井保春、長田平次、小野田高節、中川爲延

山南會(日) 京都市上京區小山下初

音町一六、高橋方 故土田麥選の門下が昭和十四年十一月結成した會で、十八年第四回展覽會開催。(幹事) 高橋太三郎(委員) 稻田麥楓、岡村青空、丸岡比呂史、小松均、吹田草牧

珊々會(日) 日本橋區通二丁目、高

島屋美術部内 昭和十八年第九回展覽會。(會員) 西山翠峰、鎗木清方、菊池契月、結城素明、上村松園、小杉放庵

産業美術振興運動廣告作品展覽會

大阪市北區堂島、大阪毎日新聞社事業部内 大毎事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覽會で、年一回新聞廣告圖案並にポスター圖案及び染織圖案の懸賞公募による展覽會を開催す。昭和十六年春東京及大阪に第十回展を開催。

燦木社(日) 板橋區中村町三ノ六二

二、東谷桃園方 大正十五年五月創立。東美校圖畫師範科出身の在京日本畫家有志を以て組織、昭和十八年第十八回展覽會。(會員) 穴山勝堂、山田翠雨、東谷桃園、松垣瀧夫、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳春、山田武、石井進、志津輝雄、永山利男、大橋太郎、川合清、大浦正男

四元莊(洋) 本郷區駒込神明町四〇

四、鈴木千久馬方 昭和十一年十月鈴木千久馬門下に依り組織。十七年第六回

展を開く。(莊首) 鈴木千久馬(同人) 倉員辰雄、安藤信哉、新道繁、外十九名

滋賀縣工藝協會 滋賀縣廳商工課内

縣下工藝の發達を圖り、展示會其他を行ふ。(會長) 縣内政部長

時習園(工) 京都市東山區五條橋東

四丁目、淺見五郎助方 大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖案の創作並に其工藝品への應用を研究するを以て目的とし、年一回作品發表を行ふ。(顧問) 中澤

岩太(指導者) 霜島正三郎(會員) 澤田

宗山、稻葉七穂、淺見五郎助、井本米泉、小川文齋、中谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇峰、井田宣秋、平井香秋、

樫田光可、平野泰三、西澤玉舟、楠田撫

泉

七絃會(日) 日本橋、三越美術部内

昭和五年創立。毎年一回作品發表をなし昭和十七年第十三回展覽會。(會員) 鎗木清方、小林古徑、菊池契月、安田叔彦、前田青邨(物故會員) 平福百穂、速水御舟、土田麥選、西村五雲

七人社(圖) 牛込區東五軒町二、岸

秀雄方 電牛込四二七 大正十三年杉浦非水に師事する七名で發金、昭和元年東京三越に第一回創作ポスター展開催。

圖案、商業美術、挿繪等をなす。(會員)

岸秀雄、岸信男、野村昇、新井參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重敏、原萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川金重、金

田德郎、野依健、前島誠一

靜岡縣美術協會(綜合) 靜岡市綠町

地方美術の向上を圖る目的を以て昭和九

年靜岡縣出身並に在美術家を以て組織。

年一回靜岡市に於て繪畫、彫刻、工藝の

公募展を開催。(總裁) 靜岡縣知事(會長) 尾崎元次郎(常任幹事) 原川和雄

信濃美術協會(綜合) 世田谷區代田

二ノ七六三、川船水棹方 長野縣出身の美術家をもつて組織。年一回展覽會開催、昭和十七年創立。十八年第二回展覽會。(會員) 日本畫四三名、洋畫三八名、彫刻十一名、工藝七名

芝浦工藝會 芝區西芝浦一、東京高

等工藝學校内 東京高等工藝學校出身者及び同校關係者を以て組織す、芝浦工藝會報を刊行。(會長) 鈴木京平(副會長) 鎌田彌壽治(幹事長) 杉山豊祐、會員全卒業生

下萌會(日) 牛込區若宮町二九、川

合玉堂方 明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々生により組織。毎月一回定期研究會を開催し、又隨時展覽會を開催す。

(理事) 長野草風、菊池華秋、松本麥水、

佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島佳山、伊藤馨浦、古屋正壽、磯部草丘、石渡風古

朱玄會(洋) 下武藏野吉祥寺本田南

二四〇五、栗原信方 二科會の宮本三郎、田村孝之介、栗原信の三名により組織、同人展を開く。

朱弦會(日) 世田谷區代田二ノ七

六三、川船水棹方 故小堀賴晉の門下が組織する革丙會の會員の一部を以て結成する。大和繪の研究。國史畫の檢討を目的とし、展覽會を開く。(會員) 安田叔

彦、川崎小虎、川船水棹、磯田長秋、小堀安雄、森戸果香、眞野滿、羽石光志

朱葉會(洋) 澁橋區百人町三ノ三二

九、小寺菊子方 四谷八一三一 大正七年創立。年一回公募展を開く。(會員)

土肥正枝、達山陽子、大久保百合子、大

久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、八星三代、秋元松子、平岩夏子、一木徹子、

徳川禮子、仰木ゲルトルド、黒瀬雅子、

山口葉子、櫻井その子、下田愛子、友田みね子、小野信子、尾關梅子、渡部百合子、村井靜江、藤川榮子、藤江志津、安

藤孝子、佐藤敦子、佐伯米子、島あふひ、

岡本みち子、飯田彌生、上野ふみ子、野村百合子、山田文子、深澤紅子、荒木政江、安宅みち子、木村光江

十年社(日) 澁橋區下落合四ノ一六

八八、石田粧春方 大正十年度東美校日本畫科卒業生に依り組織。展覽會開催。

(同人) 池田幸太郎、中井三介、平岩三

陽、石田粧春、小野踏青、畠山錦成、山崎良夫、長谷川路可、柳晴一、花村晃、中村青以、榎本千花俊、遠藤敦三、鍋島紀雄

春虹會(日) 日本橋、三越美術部氣

付 三越の主催で昭和十年京都在住の畫家十餘名を以て組織。毎春東京、大阪の三越に展覽會開催。同十六年第七回展開催。(會員) 板倉星光、石崎光瑤、西山

翠峰、堂本印象、徳岡神泉、小野竹喬、

金島桂華、中村大三郎、宇田萩郎、上村松園、山口華楊、榎本一洋、福田平八郎、橋原紫峰、菊池契月、三宅風白、三



木翠山

春臺美術會(洋) 麻布區網代町一ノ

十號、内藤東方 電三四七八五 大

正十年本郷研究所有志に依り赤沱社繪畫

展が組織され、同十三年迄四回の展覽會

を開いたが、同十四年之を解散し改めて

本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三郎助

を副會長に片多德郎を推して同年より毎

春一回展覽會を開催、昭和五年「春臺美

術展覽會」と改稱、同十八年第十八回展

開催。(顧問)和田三造、辻永(賛助)中

村研一、太田三郎(委員)石川滋彦、緒

方亮平、和田清、内藤素、江藤純平、有

岡一郎、笹鹿彪、鬼頭鍋三郎、宮本恒平、

關口隆嗣

泰陽會(洋) 杉並區和田本町八三二、

木村莊八方 電中野四二四七 大正九

年秋、日本美術院元洋畫部を脱退した小

杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田恒友、

長谷川昇、足立源一郎の六名は同十一年

一月、新歸朝の梅原龍三郎を加へ、更に

九名の客員を迎へて同會を創立、春陽會

は從來屢々見たる如き既成會への社會的

對抗として興らず、單なる藝術家の心を

以て因縁相熟したるものです」と聲明し

た。翌年五月上旬野竹之臺陳列館に第一回

展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催

し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方

展を催して居る。昭和四年春陽會研究所

を開設し十二年迄續いた。十八年第二十

一回展。(會員)足立源一郎、石井鶴三、

伊藤慶之助、今關啓司、上野春香、岡底

之助、加山四郎、川端彌之助、木村莊八、

西盛義篤、倉田三郎、栗田雄、小穴隆一、

小林徳三郎、小杉放庵、田中善之助、高

田力藏、中川一政、中谷泰、南條一夫、

長谷川潔、原精一、前田藤四郎、三雲祥

之助、水谷清、横堀角次郎、山本鼎、若

山爲三、(會友)岩田榮之助、遠藤典太、

小栗哲郎、大澤鉦一郎、大嶺政寛、鬼塚

金華、兼平英示、木下公男、齋藤清二郎

眞田久吉、柴田恕夫、高木勇次、田中憲

太郎、田川勤次、土屋義郎、藤堂空三

郎、新沼杏一、本莊越、楊佐三郎、和田

歳一

如水畫談會 神田區一ツ橋、如水會

館内 昭和七年六月創立。如水會員及

其家族を以て組織、岸浪百艸居を講師と

する。會員八十名

昭和工藝協會 京都市岡崎公園、京

都市商品陳列館内 昭和二年創立。京

都在住各部門の工藝作家三十八名を以て

組織。毎年京都及東京に於て展覽會を開

催。(會長)村上宇一(總務)霜鳥之彦

〔顧問〕中澤岩太(主事)山田一江

昭和工藝美術展覽會 日本橋區通二

丁目、高島屋美術部内 昭和九年創立。

舊帝展系作家の集團。作品發表、新古工

藝美術の研究等をなす。同年高島屋に於

て第一回展を開催、以後毎年展覽會を開

く。

昭和みつゑ會 横濱市神奈川區岡野

町一三一 電神奈川六二五 昭和十年

十二月創立。別名日本水彩協會、水彩畫

の展覽會、講演會を開催す。(會員)桂龍

雄、青野馬佐奈、東本春水、古川弘、藤

田蔭、石野隆、芹生政夫等

上社會(洋) 豐島區駒込一ノ二八、

藤岡一方 昭和二年度東美校洋畫卒業

生に依り組織。昭和十八年第十六回展開

催。(會員)林炳東、張秋海、顏水龍、金

貞探、譚連登、都相風、池田幸太郎、石

井清夫、猪熊弦一郎、荻野映彦、染木勲、

加山四郎、田村義夫、高橋弘二、大館健

三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、

深井修次、藤岡一、小堀四郎、近藤啓二、

小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次

郎、日高榮聰、森寅雄、森達雄、菱田武

夫、橋口康雄、高野三三雄、岡田謙三、

青山襄、高嶋功、瀧波恒雄、中川規矩磨、

大月源二、杉浦俊雄、永田一脩、荻須高

徳、山口長男、太刀川英次郎

晨鳥社(日) 京都市上京區北野紅梅

町、山口華楊方 明治四十五年創立の

西村五雲塾晨鳥社は昭和十三年九月五雲

の逝去により解散、同年十一月六日舊塾

生の總意に依り新たに晨鳥社を結成し、

山口華楊、前田萩郎、西村卓三の三名が

總務となつた。研究會展覽會等を行ふ。

同人七十五名

新油繪協會(洋) 横濱市鶴見區東寺

尾町一六〇七、鳥羽方 昭和十八年終

巷會を脱退した鳥羽宗雄、小林三郎等が

新に結成、同年第一回公募展を開催。(會

員)伊藤秀樹、川口忠夫、小林三郎、小

林剛、鳥羽宗雄、檜原健三、廣田剛郎、

本間勘次(顧問)荒城季夫

新關西美術協會(洋) 大阪市南區南

炭屋町四九、池島勘治郎方 電南九一八

關西に於ける獨立美術協會系の團體で昭

和十七年十月に公募第二回展を開催した

〔常任理事〕小出三郎、豐藤勇、森有村

新東京美術院東京研究所 大森區馬込

東一丁目一三八、滿洲國新京特別市

の助成美術機關たる新京美術院の分室で

研究生の指導養成に當る。昭和十六年開

室。(院長)川端龍子(主事)川端清(教

授)鶴田吾郎、横川毅一郎、坂口一草、

中村直人(助教)木村鹿之介、玉井力

三(學生監)丸山忠夫

新古典美術協會(洋、彫、工) 世田

谷區玉川與澤町一ノ一九、金子方

昭和十一年創立、十八年第八回展開催。

〔委員長〕金子九平次(委員)松田候三、

中治武夫、橋本游川、木俣堯喬、蜂須賀

年子、竹村猛壽(客員)森口多里、成田

重郎、鹽月赴

新雪會(日) 京都市左京區銀閣寺前、

橋本關雪方 電上四六〇 大正八年橋

本關雪門下に依り組織。其後一時解散し

たが、昭和十年橋本關雪の帝國美術協會

員任命を機とし、有志の發起に依つて再

興された。(指導者)橋本關雪(會員)檜

崎鐵香、樺崎朱雀、三津川光胖、小笠原

彌、川田虛舟、宮瀨泉城、竹林愛作、竹

内貞親、高安龍雲、後藤杏島、石塚仙堂、

仙波久榮、稻垣錦莊、木村杏園、伊藤逸峰、

樺文峰、淺野鶴汀、小林直衛(幹事)木

村杏園、仙波久榮

新構造社(洋、彫、工) 北多摩郡小

金井町四四八、三村英一方 昭和十年

六月構造社有志幹事會は繪畫部の解消を

決議したが同部は翌月構造社總會を招集

彫刻部會員を退會者なりとして決議し同年十一月第九回構造社繪畫展を公募の上開催した。十一年七月彫刻團體十七會の加盟により名を新構造社と改稱、更に工藝部を新設した。十八年第十七回展開催。

〔會員〕(繪畫)市川兼治、本自勇市、改井德寛、神山恒、多比羅榮一、高野直一、内田正男、内島親晴、倉本七郎、山本好信、足立重興、北澤博生、三村英一(工藝)宇佐見弘業(彫刻)スエタケ・タツ

新興岐阜美術院(日) 岐阜市梅林(小鹽邸内)電二七六〇 純正日本美術の向上の爲、岐阜在住の畫人を集めて設立。創立、昭和十六年六月。春秋二回公募展を行ふ。十七年五月第二回展開催。(顧問)川崎小虎、水田竹園(同人)小鹽美州、小島紫光、杉山祥司(客員)大橋翠石、加藤榮三

新興美術院(日、彫) 下谷區竹町九五、芝垣興生方 昭和十二年、日本美術院を脱退せる元院友十二名を以て結成した。昭和十八年第六回公募開催。(同人)芝垣興生、吉田澄舟、森山夢笑、岡田魚降林、並木瑞穂、保原良朗、鬼原素俊、小林三季(準同人)福島秀行、眞島元枝、三好光志、吉田欽之助、重松謙吉、村山三魁、樋口英雄(彫刻部同人)杉本宗一、山内倉藏、杵谷精一(同客員)白井保春、大野明山

新興美術協會(洋) 大阪市東區北濱一ノ二七、永瀬義郎方 昭和七年田中善之助、若山爲三、國盛義篤により設立。

關西洋畫の發達を期し毎年一回公募展を開催する。昭和十七年大阪市立美術館に於て第十一回展を開催した。(會員)田中善之助、足立源一郎、齋藤清二郎、岩崎又二郎、田川勤次、三木朋太郎、木下公男、若山爲三、藤堂奎三郎、西村鳳山、前田藤四郎、和田茂一、國盛義篤、川端彌之助、伊藤慶之助、佐藤昌胤、山川清、飯田衛、加藤啓三、永瀬義郎、等

新自然派協會(洋) 目黒區中目黒四ノ一四四一 昭和十年七月小城基主宰にて創立。十七年第九回同人展開催。(主幹)小城基(顧問)荒城季夫、川路柳虹、黒田鶴心、森口多里、田邊孝次、外山卯三郎、會員其他四十餘名

新生美術家協會(綜合) 大森區池上德持町六五ノ一、西本白鳥方 昭和十八年一月西本白鳥を中心に結成された會展覽會を開く。

新制作派協會(洋、彫) 世田谷區世田谷四ノ六三六、伊勢方 昭和十一年七月、第二部會が文展に參加するに及び從來「帝院の獨立帝展の解消」を主張し來れる猪熊弦一郎、内田巖、佐藤敬、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は同會を離脱、脇田和、伊勢正義、鈴木誠の三名と、もに同會を設立、同十四年七月國畫會の彫刻部と合同した。同十八年東京府美術館に於て第八回公募展を開催す。

〔會員〕(繪畫部)猪熊弦一郎、伊勢正義、脇田和、中西利雄、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、鈴木誠、三岸龍子、須高徳、坂井範一、伊藤繼郎、小松益喜、

内田武夫、今村俊夫(彫刻部)本郷新、吉田芳夫、柳原義達、山内壯夫、舟越保武、明田川孝、佐藤忠良、菊池一雄、早川魏一郎

新挿畫家集團 板橋區板橋一ノ二五二七、渡邊太刀雄方 昭和十四年冬創立。研究會を開催し、春秋二回展覽會を開く。(同人)渡邊太刀雄、加藤一志、桂木謙輔、筒井直衛、直木久蓉、木原芳樹、京川敦美、結束菊彌

新東亞美術協會(日、洋) 下谷區清水町一 電神田一八八五 舊稱汎美術協會、毎年展覽會開催。(會員)牧島省三、小林茂、丸野豐、等

新燈社(日、洋) 荻屋市荻屋岸ノ下七二、山田皓齋方 電青屋四五二九 大正十一年創立。毎年東京及大阪に公募展を開催し、昭和十七年第二十回展に及ぶ。(名譽同人)青木大乗(同人)北村種三、寺田六華、葛浦大悦、山田皓齋、沖中陽明、西田製雄(幹部)三十五名

新日本美術聯盟 杉並區阿佐ヶ谷一ノ八八二 昭和十五年十一月創立。「我國戰時下の精神面を積極化し、皇國の風土、民族の特質に由來する獨自の新美術形態を確立し、新體制の文化的翼とならんとする」展覽會、講演會の開催、機關誌發行等を行ふ(理事長)樋利彦(理事)入江弘、尾崎三郎、河越虎之進、加藤新、金谷義敏、小牧盛行、兒玉徹、小室孝雄、谷口午二、鶴丸昭彦、中村新次郎、沼田城住、武藥夜舟、田村憲、飯森定省、遠藤章一、川村信雄

新日本洋畫協會 京都市左京區百萬通京都ア・バート、獨立美術京都研究所内獨立美術京都研究所の研究有志の組織する作品發表機關、十七年第九回展開催。(會員)服部勤、今井憲一、井澤元一、松崎政雄、篠原邦夫、高木四郎、高橋竹三郎、安田謙、大沼亮之助、齋藤鐵洲、藤岡展次、宇野善三、渡邊裕、奥田仁、仲光夫、木村修三、坂本正直、田村清一、古婦聰美、杉田杉

新版畫會(版) 蒲田區蓮沼二ノ二一旭方 昭和十五年十一月創立。展覽會を開く。(會員)旭泰宏、森田路一、大宮昇、前川千帆、畦地梅太郎、奥山儀八郎、鷹山宇一、前田政雄、三木辰夫

新興美術家協會(洋) 世田谷區世田谷四ノ五〇四、松本方 電世田谷三九三一 昭和七年鉦人社を改稱せるもの。年一回東京府美術館に同人展を開く。昭和十八年第十五回展。(會員)伊藤久三郎、服部正一郎、早川國彦、金子博信、柏原覺太郎、桑原實、大澤昌助、高田誠、田中忠雄、高橋庸男、田崎廣助、中村三樹男、中村善策、中村琢二、山尾謙明、野野正雄、松本弘二、田邊三重松、瀧川太朗、寺田竹雄、古家新、藤井二郎、近藤光紀、荒井一郎、酒井亮吉、宮川仁、新海覺雄、清水力根、王澤潤一、小野藤一郎、西阪修、小出卓二、榎倉省吾、加治屋隆二

新興美術協會(日) 板橋區常盤臺一ノ二二、岩崎輝方 昭和九年東京、京都の同志十七名により新日本畫研究會を結成、新時代の日本繪畫樹立を盟約し、



十三年二月同會々員により新美術家協會

展を設立、公募制を採用、十八年第六回

展開催に至る。(會員)岩崎鐸、海老原南

爽、大石哲路、神田禎之、久保田善太郎、

酒井亞人、島田良祐、柴田安子、福田豐

四郎、藤田隆治、藤田復生、間宮正、米

田莞爾、吉岡堅二、堀文子

新壁畫協會 目黒區下目黒三ノ五六

七 電大崎三八三三 新壁畫の研究團體

(顧問)小林源太郎、渡邊泰次(會員)

川邊實、有田秀夫、池澤賢、込山俊男、

高柳博也、森鐵一、山崎稔

水彩聯盟(洋) 豐島區池袋三ノ一三

六六、荒谷直之介方 水彩畫専門の會

で昭和十八年第三回展を開催。(會員)荒

谷直之介、春日部たすく、小堀進、荻野

康兒、齋藤大、渡部菊二

寸土社(洋) 兵庫縣寶塚局區内米谷

和正節方 洋畫研究團體。昭和八年

より略毎年大阪にて作品發表。(會員)池

永英夫、和正節、銅木順三、高岡義次、

高岡徳太郎、竹中良吉、向井潤吉、安藤

金一郎、樋口治、森島忠夫、鈴木總作、

宇佐美瀧三郎、植田堅治、熊澤嘉三、森

田良秀

瀬戸作陶會(工) 瀬戸市東南町一七

昭和四年創立。瀬戸古來の特技、傳統的

工藝の復興を趣旨とす。毎年東京及瀬戸

に於て展覽會を開催す。(會長)水野憲吾

(同人)大江文象、加藤積、瀧川七郎、栗

本儀三雄、龜井清市、松原廣長、加藤壽

郎、永野壽山、加藤英一、水野壽三三、

鈴木八郎

瀬戸市陶藝協會(工) 瀬戸市役所產

業課内 電二四〇〇 昭和十一年創立。

同市の陶工並贊助者を以て組織。事業と

して陶藝に關する研究、郷土工藝資料の

調査、展覽會、講演會の開催、他への出

品斡旋、圖書刊行、工藝研究獎勵金の交

付等を行ふ。(名譽會長)水野憲吾(理事

長)齋藤元男

正統木彫家協會(彫) 世田谷區玉川

田園調布二ノ七二六、澤田晴廣方 昭

和十五年五月結成。木彫の藝術研究、公

募展の開催を目的とす。十八年第三回展

開催。(會員)澤田晴廣、三木宗策、阿井

瑞峯橋、橋本高男、本田德義、長澤幸夫、

圓錐勝二、西山如堀、和田金剛、佐藤靜

司、錦戸新一郎、富田忠弘(會友)十餘名

世紀美術創作協會(日) 京都市左京

區下鴨森ヶ前町二六、戸田北造方 昭

和十五年九月創立。京都及び大阪に於て

展覽會を開催す。(同人)今尾景春、戸田

北造、大高爲山、奥村紅稀、寺田蘆秋、

佐藤空鳴、宮尾光峯

生活工藝聯盟 芝區西芝浦一、東京

高等工藝學校内 同校卒業の有志を以

て組織し、生活工藝に關する研究、發表

等を行ふ。(幹事)杉山豊祐、西川友武、

豐口克平、山崎幸雄、岩村朝彦、磯村卓

郎、石井華一、鈴木太郎、伊藤末次郎、

齋藤四郎、山口正城、古關弘之、大泉博

一 郎

生産意匠聯盟 大阪市浪速區惠美須

町二ノ一四六、上田儀一方 電或一九四

七五一 昭和十四年五月創立。意匠

的研究を中心として實用工藝の新しい展

開を促し、その科學的生產化と輸出商品

化を圖るを以て目的とし研究製作とその

發表を事業の樞軸として活動す。(會員)

跡部勇、近藤桂二、加藤清澄、中山正

人、須藤雅路、寺尾作次郎、上田儀一、

柏崎榮助、小池岩太郎、松岡武夫、須田

幸治、上田健一、安永良徳、村井次郎、

鈴木正道、小松榮、西野弘、久野久

生産美術協會 麴町區有樂町一丁目

四番地、日本産業同志會内 電銀座三八

九六 美術を通じて勤勞者の生活に創

造の温床を與へんと大政翼賛會並に大日

本産業報國會の後援によつて昭和十七年

十一月結成。勤勞者に對する美術指導そ

の他の事業を行ふ。(顧問)高田元三郎、

高村光太郎、吉阪俊藏(理事長)桐原藤

見(理事)足達義雄、伊原宇三郎、今井

俊介、今泉篤男、大下正男、椎貝日郎、

志賀健次郎、清水多嘉示、清水登之、須

田國太郎、戸川行男、中山巖、山口久吉、

山本豐市(評議員)桐原藤見、高橋健二、

野津謙、根上耕造、藤村利常、菅井準一、

上田久七、金子義男、黑崎貞治郎

青丘會(日) 日本橋區通二丁目、高

島屋美術部内 高島屋美術部主催。昭

和十七年第七回展開催。(會員)徳岡神泉、

山口華楊、奥村土牛、小倉遊龜、太田聰

雨、吉岡堅二、福田豊四郎、山本丘人、

上村松篁

青鈴會(日) 大森區池上本町一一

伊東深水方 電池上二二二 伊東深水、

山川秀峯を中心とする人物畫の研究發表

團體。

青樹社(日) 名古屋市外守山町文化

村、横山方 電守山一一四 舊稱白曜

會。毎月研究會を開き、展覽會開催。(同

人)横山龍生、安藤美登、宮坂一義、島

谷自然、我妻碧宇、加藤晨明

青驪社(日) 淀橋區下落合三丁目一

五〇一、岩田秀雄方 昭和十三年四月

創立。日本畫の研究團體。十八年第四回

展を開く。(同人)石井了介、岩田秀雄、

大山華環等十一名

青龍社(日) 大森區新井宿四ノ一〇

五三 電大森三〇一二 昭和三年川端

龍子日本美術院を脱退するに及び、龍子

及び其御形藝員の制作發表の機關として

同四年六月同社を創立。同年東京府美術

館に第一回展を開催同十八年第十五回展

に至る。尙秋期本展覽會に對して毎年

「春の青龍社展」を開催す。春期展は秋

期展に於ける入選者を出品資格者として

鑑別の上陳列す。豫て「健剛なる會場藝

術」を唱へ、且つ在野團體としての主張

を明瞭にすべく官展には參加しない。(主

宰)川端龍子(社人)川端龍子、坂口一

草、加納三樂、福岡青嵐、山崎豐、市野

享、安西啓明(社友)小島鼎子、木村鹿

之介、佐藤木草、時田直善、利谷及樹、

濱出青松、森省三、松宮左京、龜井藤兵

衛、渡邊不二根(社子)坂平安、結城天

童、岡部健一郎、大塚榮治、河野正長、

佐藤正一、鈴木茂子、里見公起、上條靜

光、直江義治、内池星子、銀治海雪、小

川茂麻呂、沼野匡志、林榮太郎、塚塚英

一、佐々木邦彦、丸山峻、高山晴雄、中川佐風路、古野新生、須藤尙義

清光齋(日、洋、彫) 日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル 座右寶刊行會内

昭和八年四月創立。東京、大阪に展覽會を開催す。十八年十回展開催。(會員) 小林古徑、安田敦彦、梅原龍三郎、安井會太郎、坂本繁二郎、佐藤清藏、高村光太郎(責任者) 後藤眞太郎

清流會(日) 牛込區拂方町三五、門井方 會員は鑄木清方の門下門井洵水、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞、西田青坡

舊我齋(日) 京都市御幸町三條下ル水田方 大正十年水田竹園門下を以て組織。年一回展覽會を開催す。(會長) 水田竹園(評議員) 水田硯山、安田半圃、幸松春浦(幹事) 栗田桃山、會員七十餘名

齊々會(彫) 板橋區練馬南町一ノ三 四七一、眞鍋忠行方 東美校彫刻科の最近の卒業生を以て組織。昭和十三年第三回展開催。(會員) 岩井藤吉、伊藤三子雄、井上信道、石橋史郎、堀田巖美、渡邊一八大、山内皓臣、眞鍋忠行、佐伯留守夫

仙臺日本畫家聯盟 仙臺市教養院丁二、渡邊丙午方 東北美術展二回以上の入選者を會員とす、慰問畫獻納展等開催。(相談役) 太田聰雨(幹事長) 渡邊丙午(幹事) 宇野松仙外九名

全關西美術協會 大阪市住吉區天王寺町三〇七三、塚口正一方 舊稱全關西洋畫協會。全關西洋畫界の綜合展開館

を目的として設立。昭和二年より毎春公募展開催。昭和十七年第十六回展開催。(特別會員) 濱田葆光、國枝金三、黒田重太郎、鍋井克之、横井禮市(會員) 古家新、小野藤一郎、高岡徳太郎、田川寛一、渡邊造酒三、岩崎重雄、藤井二郎、小出三郎、中村眞、西阪修、津田周平、伊谷賢藏、塚口正一、石丸一、錦義一郎、小出卓二、辻愛造、福島金一郎、西村五郎、榎倉省吾、石井元、伊庭傳治郎、田村孝之介、早川國彦、山本直治、松本鏡次、伊藤繼郎、飯田清毅、米良道博、池島勘治郎、玉澤潤一

全日本産業美術聯盟 牛込區東五軒町二 電牛込四二七 昭和十一年十月創立。各種商業美術家の團體を以て結成す。(委員長) 杉浦非水(常任委員) 多田北島、山名文雄、岸秀雄(加盟團體) H. L. 圖案研究會、N. C. デザイン研究會、構圖社、七人社、資生堂廣告美術研究會、新圖案協會、中央圖案集團、實用版畫美術協會、東京廣告美術家俱樂部、東京印刷美術家集團、東京包裝美術協會、銀座産業美術研究會、北海道商業美術家協會、靜岡商業美術協會、大阪商業美術協會、關西廣告美術協會、商業美術聯盟、新廣告美術作家同盟、日本新美術家協會、神戸創作圖案協會、廣島商業美術家協會、北九州商業美術家聯盟、長崎商業美術協會、熊本ポスター研究會

梳風會(日) 本郷區向ヶ丘彌生町三木島方 故島崎柳樹の樹々亭塾門下一同により組織。(幹事) 清田柳莊、木島柳

鴨、石川綠雨、高橋樞場、仲村眞齋(會員) 十八名

疎約會(日) 大阪府池田市瀧壽美六五二、瀧秋方方 昭和十三年九月創立。毎年春秋二回展覽會を開催する。(會員) 生田花朝、内田稻葉、梶川眞人、草刈樵谷、小松均、菅橋彦、菅江白華、岡田征二、立松玉泉、瀧秋方、津田青楓、西田逸堂、宮本頌、矢野鐵山

楚人社(洋) 札幌市北七條西五丁目能勢眞美方 電一六七六 昭和六年創立。主として札幌在住の洋畫家を以て組織する。同十二年五月第四回展開催。(同人) 今田敬一、繁野三郎、能勢眞美、久保守、山田正、伊藤信夫、大森滋、齋藤尚、本間紹夫(社友) 十六名

双台社(洋) 荒川區日暮里九丁目一〇三五、石井柏亭方 電駒込四七三 石井柏亭に師事する畫家を以て昭和十六年五月創立。毎春府美術館に展覽會を開催す。十八年第三回展(會長) 石井柏亭(評議員) 赤城泰舒、中川紀元、平塚運一、望月省三(委員) 二十名(同人) 百十四名

草芽會(工) 京都市東山區山科竹鼻塚本方 電山科一一五 昭和十五年創立。京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て組織。(同人) 川那部澄、塚本繁、赤澤鐵太郎、峯親吉、加藤八洲男、宮永友雄、爽々會(工) 下谷區墨門町六、神戸屋內 昭和十五年創立。工藝界に於ける新素材の研究、技術の發表をなす、展覽會開催。十七年第三回展。(會員) 原三郎、田中芳郎、内藤四郎、山脇洋二、増田三男、後藤年彦、齋藤桂一、下嶋

創元會(洋) 世田谷區世田谷三ノ二四四五、須田方 昭和十五年十二月創立。美術本來の精神に敬し、我が國文化の向上發展に寄與する。十八年第三回展覽會を開催。(會員) 阿以田治修、淺井政勝、飯島一、牛島憲之、榎戸庄衛、圓城寺昇、大貫松三、金澤重治、小柴錦侍、鈴木千久馬、須田壽、中野和喜、樋口一郎、山下大五郎(會友) 十五名

創立美術協會(日、洋) 臺北市京町一ノ三八、古川義光方 昭和十三年創立。文展、二科、獨立等各派の出品者を以て組織す。十五年第一回展開催。(會員) 古川義光、久保田明之、飯田實雄、蒲地薰、宮田彌一郎、横田太郎、吉見庄助、秋本好春、名島貢、有川武夫、小田部三平、大賀湘雲、宮田金彌、染浦三郎

創造美術協會(洋) 堺市甲斐町西四丁目一六、玉澤方 昭和十年創立。舊稱セクション・ガール。毎秋大阪市立美術館に於て會員の作品發表展を開催す。十八年東京展開催。(會員) 上島龍、河野通紀、小島大輔、小島詣治、小林武夫、下高原龍巳、高須操、高橋進、玉澤潤一、田村譽志郎、永田碩彌、西阪修、長谷川初女、堀澤好一、花谷時子

蒼原會(洋) 神田區淡路町二ノ一一水谷景房方 電神田一三二五 大正十一年日本水彩畫研究所の小山良修、富田通雄、中西利雄等が創立した東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫専門の

研究團體。(會員)馬場重次郎、不破章、小山良修、水谷景房、丸山東美男、松田寅重、中西利雄、野口健司、岡田正二、齋藤大、富田通雄、山中仁太郎、山崎政太郎、荒谷直之介、岡田節男、相澤光朗、藤江志津、本多信彦、小原博司、竹内麻治郎、間所一郎、三上信二

造型彫刻家協會 豐島區要町二ノ二六、山内壯夫方 昭和十一年二月創立。科學的造型性に立脚した彫刻藝術の創作を目的とす。(會員)芥川永、明田川孝、川口信彦、佐藤邦輔、清水要、谷本整映、本郷新、峯孝、宮島久七、柳原義達、山内壯夫、山本常市、尾島禎二、佐藤忠良、舟越保武、吉田芳夫、昆野恒、稻田健四、能美八重夫

造型版畫協會 京橋區入舟町三ノ一三、矢野桂一方 昭和七年、新版畫集團の舊稱を以て創立。十一年第六回展を経て組織變更、十二年三月造型版畫協會と改稱、版畫の純粹なる繪畫的造型性の確立を目的とす。十七年四月公募展により第六回展開催。(會員)清水正博、柴秀夫、小野忠重、水船六洲、末木東留、矢田桂一、宇治山哲平、畑野織藏、齋藤清、武井愛之助、東一雄

### 【タ行】

太平洋畫會(洋、彫) 淀橋區下落合一ノ三四八 海洲正太郎方 明治二十二年創立の明治美術會を同三十四年組織を一新し翌年一月太平洋畫展と改稱、第一回展を上野公園第五號館に開催した。同三十七年に洋畫研究所を開設、昭和四年

に太平洋美術學校と改稱した。昭和十八年第三十九回公募展に至る。(會員)石川寅治、石井柏亭、池田永一治、伊藤成一、飯田實、石井明、井口勇、今里龍生、早川芳彦、堀進二、星野二彦、堀澤、都島英喜、戸津文雄、岡精一、奥瀬英三、小野田元興、大沼靜巖、渡部寒也、金子保、海洲正太郎、吉田博、吉田ふじを、吉原甲藏、高村真夫、多々羅義雄、高橋虎之助、田原輝夫、玉井力三、鶴田吾郎、佃武昭、中野桂樹、中田恭一、中田信、野田半三、能見三三、山下繁雄、安田豊、前田眞一、布施信太郎、布施悌次郎、藤坂太郎、小宮宗太郎、江崎寛友、淺井眞、相曾秀之助、佐々貴義雄、澤田晴賢、齊藤俊雄、佐藤三郎、北島吾次平、木原二郎、三上知治、光安浩行、水戸敬之助、澁谷榮太郎、清水敦次郎、平澤定治、關口文雄、菅谷元三郎、杉本宗一、鈴木貫司、鈴木滿(會友)市原達夫、伊藤源右衛門、畑本一夫、半田圭治、小倉一雄、河本一男、加藤義雄、吉田遠志、吉田陽悅、田村政四郎、田村玄一郎、恒石敬磨、土橋忠美、名島貞、野呂正夫、國澤和衛、倉石隆、福王誠、小林森次、小坂健三、近藤洋二、有川武夫、佐藤武夫、坂本不二、齋藤茂、佐藤辰治、岸本廣義、三輪拾三郎、島添鶴雄、平尾良秀、平島信、鈴木隆

て、毎年秋季に日本畫洋畫の公募展を開催。十八年東京府美術館に第八回展を開催。(會長)小村捷治(常任理事)浦崎永錫(理事)多賀谷健吉(評議員)岩佐新、大下正男、垣見宣修、松垣鶴雄、藤本昭三、杉山司七、三浦直政  
大光會(洋) 大阪市北區免我野町七、胡桃澤方 東光會の大坂支部として昭和十五年一月結成。會員約七十名。(指導者)齋藤泉里、岡部晋生、胡桃澤源人  
大稻會(日) 名古屋市中區武平町四ノ二二、森村宜永方 電東四五六 昭和十五年創立。故森村宜稻の門下を以て創立。大和繪の研究を行ふ。(會員)服部有恒、林雲鳳、小寺禮三、喜多村光穂、森村宜永  
大東亞美術協會 麴町區丸ノ内三ノ六仲通四號館六號、山口内 電丸ノ内五〇〇六 アジア民族文化の昂揚を圖る爲、日本の傳統的特質を共榮國諸國に紹介すると共に、共榮國内諸方の美術、工藝等を將來して、東亞文化交歡を致さんと昭和十七年八月設立。法人組織で展覽會その他の事業を行ふ。十七年九月第一回大東亞共榮國美術展覽會を東京府美術館に於て開催した。(會長)有馬賴寧(副會長)菊地門也  
大東南宗院(日) 麴町區三番町七番地 繪畫藝術によつて日滿華三國間の完全なる理解握手に達する道程を築かうと、昭和十六年八月小室翠雲等の南畫人によつて設立。南畫道の専統精神を以て聊か大東亞共榮國確立の爲めの藝術的奉

仕に當らんと希ふものである。毎年一回日滿華三國の重要都市に於て展覽會を開催、其の他勸皇志士の事蹟彰彰に遺墨展等を開き、又學藝研究所を設置して東洋文化藝術の徹底闡明を期する。十八年第二回展(顧問)若槻禮次郎、久原房之助、町田忠治、青木信光、園分青崖、小川平吉、八田嘉明、金光庸夫、小泉又次郎(贊助員)岡部長景外二十一名(院人)心印畫塾一七三名、心印畫塾京都支部一八名、荻荻社七七名、乾坤社一〇七名、興亞南畫院三十一名、墨雲社三十四名、日本南畫研究會五八名、日本南畫松聲會八四名、無所屬四名、公土會三名、熊本之部二〇名、朝鮮之部二名、滿洲國一名、中華民國四名(北京)一名(上海)(委員長)小室翠雲(幹事長)岩切重雄(企劃部)河野桐谷、石川誠、古淵岨草(經理部)峰村北山、高島祥光、高須芝山(聯絡部)安田半園、栗飯原醒子、降祺算岳、河口樂上(宣傳部)福田浩湖、關谷雲巖、小山居泉、横内大明(研究部)河野桐谷、橋田永芳、石川誠、萩田東嶺、古淵岨草(主事)石塚彰吾  
大日美術院(日) (東京事務所)本郷區西片町一〇、結城素明方 電小石川一五七三(大阪事務所)大阪市天王寺區藤山通一ノ五四 電天王寺八一九 昭和十二年三月創立。在來の流派系統を超越して眞の日本精神に活きた新しい日本繪畫の創作研究を趣旨とす。十八年第六回公募展を開く。(同人)結城素明、川崎小虎、青木大乗、當岡文雄(院僚)加藤榮

三、菅澤幸司、藤森青雲、山田申吾、加藤英純、是永伸一、平口勝雄、東山魁夷、菅澤大悦、寺田六華、長嶺雅男、菊澤榮一、沖中陽明、池田尙之、山田皓齋、三河義太郎、山本英幾、荒木茂雄、清水保二、五十嵐揆一、伊藤神章

大日本鑛業協會 京橋區銀座西四丁目五ノ六、銀座商館第四階 電京橋五五一九 明治二十五年創立。社團法人。本邦鑛業の發達を圖り、雜誌圖書の發行、講演會、講習會の開催、調査、建議、公共事業の助長等をなす。京都、大阪を初め各處に支部を設く。〔理事長〕黒田泰造〔理事〕十四名〔監事〕二名

大日本航空美術協會 芝區田村町一丁目三ノ一、大日本飛行協會内 昭和十六年五月創立。航空思想の發達を計り公募展の開催其他の諸事業を行ふ。同年九月第一回展開催。〔會長〕堀丈夫〔理事長〕中村恒夫〔理事〕伊東深水、畠山錦成、島海青兒、太田聰雨、渡邊義知、加藤顯清、勝田哲、吉岡堅二、吉村忠夫、田村孝之介、名井萬龜、中村岳陵、中村恒夫、中村節也、中野利高、中山巖、向井潤吉、上村松篁、野口彌太郎、國盛義篤、栗原信、山口蓬春、前田萩郎、藤田嗣治、福田平八郎、福田豐四郎、小磯良平、澤田晴廣、北川民次、木村莊八、木下孝則、宮本三郎、水谷清、清水登之、鈴木千久馬

大日本海洋美術協會〔洋、日〕 澁谷區原宿三ノ二四九、海軍協會内 電青山二七七、二七七二 昭和十二年五月

海軍記念日を機として海軍協會主催、海軍省後援の下に在京洋畫家九十五名の出品を得て、日本橋三越に海洋美術展が開催され、同年六月海洋美術協會の創立を見た。昭和十六年二月その組織を擴充し、大日本海洋美術協會と改めた。毎年海軍記念日を中心として、朝日新聞社海軍協會共同主催で海軍省の後援のもと海洋に關係深い展覽會を開催する。〔洋畫〕石井柏亭、石川寅治、長谷川昇、奥瀬英三、田邊至、中澤弘光、中村研一、山下新太郎、小林萬吾、權藤種男、北蓮藏、南薰造、御厨純一、三上知治、三國久、清水良雄〔日本畫〕伊東深水、石本光郎、川端龍子、錦木清方、川崎小虎、吉岡堅二、野田九浦、久保田金僊、安田靉彦、矢澤弦月、松林桂月、町田曲江、新井勝利、坂口一草、結城素明

大輪畫院〔日〕 目黒區上目黒八ノ五三八 電澁谷三二四四 昭和十三年六月創立。小林彦三郎主宰し、主として明朗美術聯盟の舊同人に依り結成、春秋二回展覽會を開催し、秋季展は公募に依る。〔同人〕主宰・小林彦三郎、楠奉白光、立脇泰山、佐々木順〔院友〕廣井陵雲、西之坊水勢、篠田忠康〔準院友〕五名〔會員〕二十五名

體漆工房〔工〕 四谷區永住町二 電四谷八〇四九〔呼出〕 昭和十三年五月創立。漆工、乾漆の立體的工藝品製作研究を目的とす。〔顧問〕和田英作、和田三造、畑正吉、六角紫水〔主事〕大槻式雄〔漆工主任〕河面冬山

第一美術協會〔洋〕 蒲田區仲蒲田三丁目九、三木辰夫方 電蒲田二七五六 昭和四年創立。毎年初夏、洋畫の公募展を開く。十八年第十五回展開催。〔理事〕濱地青松、三國久、御厨純一〔會員〕石川重信、河邊梅村、黒越正二、松見吉彦、松坂康、三木辰夫、中原實、佐野忠吉、鈴木巖、谷井喜三郎、高橋賢一郎、高橋亮、宇田川繁三郎、山田篤、山田美男、吉澤廉三郎〔會友〕荒木菊次、袴田恒男、長谷川富三郎、星野勝治郎、川口精六、木村捷司、木下正治、小島三郎、三室美晴、中野うめよ、中島喜美、昭木廣一、土岐浩藏、横山群〔客員〕深谷栖州、今井伴次郎、古島松之助、葛城喜良、水平讓、門田敬止、西宮六白司、野村陸雄、鈴木啓二、竹野谷仁重、任補豐久、直江兼博

高松工藝協會 高松市市役所内 昭和七年五月創立。高松市の各工藝團體を綜合せるもので、展覽會、販路調査他への出品斡旋等を行ふ。〔會長〕高松市長 鍛金協會〔工〕 下谷區谷中眞島町一ノ一、平出方 鍛金工藝作家を以て組織す。展覽會其他を開催す。〔會長〕石田英一〔委員〕二十二名、正會員九十一名 圖藝社 板橋區常盤臺一ノ二九、西澤方 電板橋一二〇一 少國民に關係ある題材の繪畫發表、人形玩具の研究發表をなす。紀元二六〇〇年創立。年一回展覽會を開催。〔會員〕西澤留畝、牧野司郎、梅岡玉葩、小林猶治郎、近藤紫水、林萬壽人、外十四名

筑前美術會〔綜合〕 麻布區櫻田町二八、薄拙太郎方 筑前出身作家により昭和八年結成、帝展及其他有力の展覽會に三回以上入選せる者を以て會員とす。毎年展覽會開催。〔顧問〕山崎朝雲、和田三造 忠愛美術院〔日、洋、彫〕 北多摩郡保谷町東伏見五六五、木寺方 昭和十六年八月創立。皇道美術確立を目標とし十八年第三回展を開催。〔總裁〕中島今朝吾〔院長〕花岡萬舟〔同人〕〔油〕木寺轍、山田順治、淵上巖、大塚伊次、本多桃太郎、内藤外次、前田峰英、島津純一、増田英一、佐藤重雄〔日〕高須賀曉風、松宮光村、吉田廣洋、前原豐三郎、益田柳外、穗坂光希、花岡萬舟、森田秀一、小林亮三、小松砂丘、塚本觀〔彫〕土田實、長谷川八十、米林玄陽、西川宗舟、穗本東耕、山本鶴村〔工〕三浦竹軒 直土會〔彫〕 麹町區九段二ノ六、安田周三郎方 電九段二五八九 建昌大夢の門下を以て組織す。昭和十八年第三回公募展開催。〔會員〕服部仁郎、林謙三、大須賀力、渡邊弘行、黒田嘉治、倉澤興世、山本稚彦、安達貫一、杉浦藤太郎、伊藤芳雄、長谷川正雄、分部順治、中野昂、安田周三郎、江川治、酒井恒、木下繁、木内五郎、三木凱歌、明珍勝友、峯孝、白井謙二郎、廣井吉之助、建昌覺造〔會友〕石渡清三郎、富岡泰、小松彌六、小林南龍、坂上正秋、北地莞爾、宮本光庸、今村輝久晃、田淵勝章、曹圭奉、長島利雄、野口晴朗、荒木桃子、佐野文夫、



木村石斧、福田弘之、服部不二之、クルト・ドレーベス、篠田弘、毛利武士郎、藤庭賢一

朝陽社(日) 板橋區常盤臺一ノ二九  
西澤方 電板橋一二〇一 西澤笛畝の門下を以て結成し、毎年一回展覽會を開く。(會員) 酒井白澄、坂倉半徑、杉原留郎、牧野大成等十四名

圖案家協會 京都市伏見區桃山町宗和閣、澤田宗山方 電伏見六〇二 大正十一年創立。京都在住の圖案家を以て結成。展覽會、研究會等を催す。(總務) 澤田宗山(理事) 澤田宗山、山鹿清華、田村泰曉、落合萬水、狩野秀峰、福岡玉憐(正會員) 百六十五名

圖書教育獎勵會 下谷區櫻木町二電根岸三五六三 財団法人、出版、展覽會開催等を行ふ。(會長) 結城素明(理事) 岩田徳太郎(理事) 澤田源一、加藤賢

辻工房(工) 世田谷區赤堤一ノ二三

四 舊經緯工藝美術會 解體後昭和十六年改稱、毎年展示を行ふ。十八年第三回展。(同人) 辻光典、篠井欽治、佐藤正巳

帝國工藝會 芝區西芝浦一丁目 東京高等工藝學校内 大正十五年七月創立。本邦工藝の産業化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事業として生産業者、販賣業者、美術工藝家に科學者の聯絡提携に努め、産業工藝の状況を調査研究し、又地方特産工藝品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月雜誌「帝國工藝」發行。(事變中休刊) (副會長) 鶴見左吉雄

〔顧問〕 伯爵牧野伸顯(常務理事) 和田嘉衛

天香畫塾(日) 世田谷區深澤町四ノ一二二 電世田谷二七一七 松林桂月門下にて結成、三年に一回展覽會を開催(代表) 吉田登毅

東觀會 麴町區四番町八、甫喜山義夫方 電九段三七五四 東京府美術館の借館に就て協議すべく昭和九年組織された。(加盟團體) 一水會、白日會、二科會、日本寫真會、日本美術院、日本水彩畫會、日本畫院、東光會、東京表装師組合、獨立美術協會、讀畫會、東邦彫塑院、直土會、旺玄社、太平洋畫會、第一美術協會、第三部會、泰東書道院、南畫聯盟、構造社、光風會、國畫會、明朗美術聯盟、上杜會、塊人會、春陽會、春臺美術會、新制作派協會、新構造社、新美術家協會、新美術人協會、實在工藝美術會、表装同人會、青龍社、正統木彫會(理事) 甫喜山義夫、垣見泰山、藤本詔三(評議員)

石井柏亭、富田温一郎、田口省吾、東根徳夫、望月省三、熊岡美彦、香取重吉、兒島善三郎、湯原柳秋、小林喜代治、石川寅治、濱地清松、石川確治、福田浩湖、齋藤素巖、太田三郎、梅原龍三郎、狩野晃行、藤岡一、安藤照、木村莊八、笹鹿彪、内田巖、三村英一、酒井亮吉、福田豐四郎、高村豐周、栗山弘三郎、川端龍子、北村西望、澤田晴廣、野田九浦

東海美術協會(綜合) 名古屋市中區御幸本町、愛知縣商工館内 明治四十二年創立。美術及び美術工藝の振興を圖るを目的とし、毎年協會展を開催の傍、文展への出品の獎勵並に之に關する各種の事務の取扱、研究會、講演會の開催をなす。昭和十六年四月第三十回を開く。(會頭) 岡谷惣助(副會頭) 宮部鈴三郎(評議員) 石河有鄰、小林松仙、菊地香三、原田隆壽(主事) 大矢梅太郎、黒田忠讓、岡田良右衛門(正會員) (東洋畫) 六十一名(洋畫) 二十名(彫塑) 一名(工藝) 一名

東京鑄金會(工) 下谷區谷中眞島町一ノ一號 明治三十六年創立。主として東京在住の鑄金家を以て組織し、毎秋展覽會を開催する。(會長) 香取秀真(副會長) 渡邊長男(幹事) 山本安曇、會田富康、北原三佳、西村敏彦、長野埜志、(評議員) 山本目燧、林萬壽人、山口淨雄、山本純民、梅村豊舟、香取正彦、高橋榮翠、渡邊紫鳳、市橋雅堂、加藤龍雄、原直樹、川和曉雲、清水辰雄、丸谷端堂、山口壽雄

東京表具工業組合 日本橋區大傳馬町一ノ二 電茅場一九二一 東京市に於て營業をなす表装師を以て組織。技術の向上及同業親睦を圖るため種々の事業をなす。前表装師組合と稱したが、昭和十七年改稱、十八年獻納展を開く。(代表者) 香取重吉(委員長) 寺内新太郎(委員長) 根岸福太郎、前波鐵太郎

東京都工藝協會 東京都經濟局、總務課内 電丸ノ内一八一—一九〇 新興工藝品の調査研究をなすとともに相互の連絡、工藝品の輸出振興事業等を行ふ

目的で、昭和十五年九月創立。(會長) 都長官(副會長) 東京都經濟部長(理事長) 經濟局總務課長

東京みつゑ會(洋) 中野區上高田二ノ三五八、佐藤平太郎方 昭和二年春創立。水彩畫の研究及び同趣味の擴充、展覽會、講習會等をなす。(總務) 佐藤平太郎、會員二十七名、會友十名

東光會(洋) 淀橋區戸塚町二ノ一一二 電牛込一四四一 昭和七年、橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、熊岡美彦、齋藤興里の六名に依り結成。毎年春季に公募展を開き昭和十八年第十一回に至る。尙十一年創立會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七の三名は退會。(會員) 齋藤興里、熊岡美彦、岡見富雄、渡邊浩三、野口謙藏、佐藤一章、小早川篤四郎、水船三洋、岡部晉生、胡桃澤源人、平通武男、岩下三四、正田二郎、森田茂、石本秀雄、江藤哲、田代順七、松岡正直、辻利平、河原修平、家永駿三郎、河井達海、三田村榮、山本日士良、大和田富子、小貫綾子、徳永富士子(會友)

山本清、松岡正、松本富太郎、松居均、安達良雄、福井芳郎、西寺鐵舟、八藤勲人、鹽津誠一、藤田慎治、熊岡正夫、大寄丹次郎、野澤寛、山本貞子、井手祐子、清原武則、後藤愛彦、川本浩三、廣本森雄、西川高次、石田勝重、大平敬次郎、大木茂、水野一好、山形光壽、村田宏治、高橋雅子、桑原福保、佐野猛、大瀧斗良樹、境保博、河村俊子、久門元夫、齋藤久子、向井加壽枝、東斌、三井美尼子、

東京表具工業組合 日本橋區大傳馬町一ノ二 電茅場一九二一 東京市に於て營業をなす表装師を以て組織。技術の向上及同業親睦を圖るため種々の事業をなす。前表装師組合と稱したが、昭和十七年改稱、十八年獻納展を開く。(代表者) 香取重吉(委員長) 寺内新太郎(委員長) 根岸福太郎、前波鐵太郎

東京都工藝協會 東京都經濟局、總務課内 電丸ノ内一八一—一九〇 新興工藝品の調査研究をなすとともに相互の連絡、工藝品の輸出振興事業等を行ふ

目的で、昭和十五年九月創立。(會長) 都長官(副會長) 東京都經濟部長(理事長) 經濟局總務課長

東京みつゑ會(洋) 中野區上高田二ノ三五八、佐藤平太郎方 昭和二年春創立。水彩畫の研究及び同趣味の擴充、展覽會、講習會等をなす。(總務) 佐藤平太郎、會員二十七名、會友十名

東光會(洋) 淀橋區戸塚町二ノ一一二 電牛込一四四一 昭和七年、橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、熊岡美彦、齋藤興里の六名に依り結成。毎年春季に公募展を開き昭和十八年第十一回に至る。尙十一年創立會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七の三名は退會。(會員) 齋藤興里、熊岡美彦、岡見富雄、渡邊浩三、野口謙藏、佐藤一章、小早川篤四郎、水船三洋、岡部晉生、胡桃澤源人、平通武男、岩下三四、正田二郎、森田茂、石本秀雄、江藤哲、田代順七、松岡正直、辻利平、河原修平、家永駿三郎、河井達海、三田村榮、山本日士良、大和田富子、小貫綾子、徳永富士子(會友)

山本清、松岡正、松本富太郎、松居均、安達良雄、福井芳郎、西寺鐵舟、八藤勲人、鹽津誠一、藤田慎治、熊岡正夫、大寄丹次郎、野澤寛、山本貞子、井手祐子、清原武則、後藤愛彦、川本浩三、廣本森雄、西川高次、石田勝重、大平敬次郎、大木茂、水野一好、山形光壽、村田宏治、高橋雅子、桑原福保、佐野猛、大瀧斗良樹、境保博、河村俊子、久門元夫、齋藤久子、向井加壽枝、東斌、三井美尼子、

東京表具工業組合 日本橋區大傳馬町一ノ二 電茅場一九二一 東京市に於て營業をなす表装師を以て組織。技術の向上及同業親睦を圖るため種々の事業をなす。前表装師組合と稱したが、昭和十七年改稱、十八年獻納展を開く。(代表者) 香取重吉(委員長) 寺内新太郎(委員長) 根岸福太郎、前波鐵太郎

東京都工藝協會 東京都經濟局、總務課内 電丸ノ内一八一—一九〇 新興工藝品の調査研究をなすとともに相互の連絡、工藝品の輸出振興事業等を行ふ

目的で、昭和十五年九月創立。(會長) 都長官(副會長) 東京都經濟部長(理事長) 經濟局總務課長

上田素由、渡部文雄

東臺會(綜合) 奈良市雜司町、新納忠之介方 電三七五 昭和五年四月發會。奈良在住東美校出身並に奈良在住美術家有志の懇親並に研究團體。毎年春季同人展覽會を開催し、隔月集會を行ふ。

〔會員〕(日本畫) 富田一昭、立野雪郷、谷山介春(洋畫) 小野藤一郎、中村義夫、小松原義則、奥山堤(彫刻) 新納忠之介、吉川政治、奥田勝、菅原安男、竹林薫、(金工) 後藤年彦(漆工) 幸王好太郎、北村久造、北村久齊(圖案) 岸熊吉(染織) 井上清一

東土會(彫) 本郷區駒込神明町三四一、後藤良方 電駒込一一五五 昭和六年創立。東京生れの東美校彫刻科出身者にして舊常展出品者を以て組織。〔會員〕淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力、大橋清、金田豐、木内五郎、黒田嘉治、後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田久繼、武田榮

東北美術展覽會(日、洋) 仙臺市東三番丁、河北新報社內 電仙臺四一〇〇 昭和五年創立の東北美術協會の主催展覽會を同年より河北新報社が引き繼いだもので、仙臺市に年一回日本畫洋畫の公募展を開催する。十八年第八回展。(會長) 河北新報社長 一力次郎(審查員)(第一部) 郷倉千毅(第二部) 安井曾太郎(幹事)(第一部) 渡邊丙午(第二部) 佐々木簡郎、澁谷榮太郎

東陽會 豐島區巢鴨六ノ一二九〇、

宮尾方 電大塚六六一七 漫畫家を以て組織。昭和十七年四月第二回展開催。

〔會員〕岡本一平、北澤榮天、細木原青起、清水勲一、田中比左良、矢戸左行、麻生豐、服部亮英、水島爾保市、下川豐明、宮尾重男、堤泰三

等迎會(洋) 澁橋區角管三ノ一七八 長屋勇方 大正十一年度東美校洋畫科出身者を以て組織。臨時展覽會開催。〔會員〕飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳次、三田康、三谷浩三、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓三、榎本榮一、岡本喜藏、熊谷惣太

稻花會(工) 杉並區久我山三ノ一一三、三田村自芳方 大正十一年故赤塚自得の社中を以て組織。〔會員〕三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自人、岡本昇三、石川吉堂、關聰雨、井澤靈山、辻喜一郎、月尾慶水、金井正文、村田義忠、吉岡郁三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤喜代志、山浦等同調會(日) 板橋區常盤臺一ノ一一〇號、岩崎方 昭和十三年度東美校日本畫科卒業生を以て組織す。年一回展覽會開催。〔會員〕岩崎鐸、池澤賢、石田一郎、河原丈夫、川本壽一、加藤英純、神田禎之、米澤裕二、土田幸一郎、村尾博仁、野嶋清一、黒田哲二、山崎民士、小池平四郎、佐藤正衛、三浦眞一、宮川澄康、白尾殿理、澁谷保三

堂本畫塾東丘社(日) 京都市東山區八坂東大路西小松町二、堂本印象方 電祇園一〇八八 堂本印象の主宰する畫塾。塾員七十三名。毎年展覽會開催。尙同塾には三樹會、春風會、如月會等があり、臨時展覽會を開催す。

童心文化美術協會 中野區野方町一ノ七三五和光莊、西原方 昭和十六年一月創立。兒童のための繪本、玩具、演劇等に於ける美術文化の健全なる進歩を圖る。〔幹事〕脇田和、大石哲路、齋藤長三、中尾彰、寺田竹雄、西原比呂志、山下大五郎、宇田川種治

童寶美術院 澁谷區櫻丘町五 電澁谷一九一七 昭和五年創立。人形藝術並に童心を表現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及を目的とし、展覽會、出版等を行ふ。〔同人〕石井柏亭、笹川臨風、豐泉益三、西澤信敬、山田德兵衛、山本鼎、和田英作、倉橋惣三、津田信夫(顧問) 子爵岡部長景

童林社(洋、彫) 杉並區西高井戸一ノ一三三、赤津實方 昭和六年度東美校洋畫科及び彫刻科の入學者により組織十八年第十一回展覽會を開催。〔會員〕約五十名(顧問) 小林方吾(客員) 富岡東四郎

德島縣工藝協會 德島市中前川町、德島縣工業試驗場內 電二八五三 昭和十二年創立。工藝品製造者、販賣者等を以て組織し、同縣の木材及他種の工藝の發達を圖る。十四年六月第一回展開催。正會員六十餘名

獨立美術協會(洋) 蒲田區東六郷四丁目三一ノ八、鈴木保徳方 昭和五年十一月二科會の兒島善三郎、里見勝藏、

林重義等十一名、及び三岸好太郎、福澤一郎、高島達四郎を發起人として創立。同六年より東京府美術館に公募展を開催又自治制の研究所を現在京都に設く。同十七年第十二回展開催。會員には種々移動ありしも現在左の通り。〔會員〕居串佳一、海老原喜之助、川口軌外、菊池椿二、熊谷登久平、兒島善三郎、小島善太郎、小林利作、齋藤長三、清水登之、鈴木亞夫、鈴木保徳、須田國太郎、高島達四郎、田中佐一郎、島海青兒、中間朋夫、中村節也、中山麴、野口彌太郎、林武、藤岡一、松島一郎(會友) 今西中通、森有村、樋口加六、池田金之助、富樫寅平、佐藤英雄、中尾彰、青柳暢夫、菅野圭介、鳥居敏、赤星孝、大野五郎、加藤陽、出三郎、佐川敏子、島村三七雄、志村計介、竹中三郎、常安靜人、豐藤勇、山道榮助、藤川廣太郎、今井憲一、宇根元馨、赤堀佐平、山田榮二、坪内節太郎、小原雄二、岡部文之助、齋藤求、松島正人

讀書會(日) 本郷區駒込町三三七、湯原方 電駒込五三一 明治四十年荒木寛誠を主宰として設立。寛誠の歿後は十畝を會長とし、毎春展覽會を開催。昭和十八年第三十六回展に及ぶ。

栃木縣美術協會(洋) 栃木縣宇都宮市今泉町八八七、吉田雄一方(東京) 淺草區馬道町二ノ五、文挾勝方 栃木縣在住並出身者の結成する洋畫團體。昭和十八年第九回公募展開催。〔顧問〕川島理一郎、小杉放庵、清水登之(會員) 約四十名

巴會(日) 本郷區駒込東片町三〇、



鹽崎逸陵方 故寺崎廣業門下にして舊帝展所屬の作家を以て組織す。十八年第七回展開催。(客員) 飛田周山(會員) 野田九清、矢澤弦月、吉田秋光、水上泰生、菊澤武江、鹽崎逸陵、伊藤龍涯、岡部光成、町田曲江、角田磐谷、中士大至良、奈良裕功

### 【十行】

名古屋産業工藝會(工) 名古屋市役所職時經濟局工業課内 名古屋市の工藝家及斯界關係者を以て組織。調査、出版、展覽會開催等を行ふ。(會長) 木村清司(副會長) 中川貞三(顧問) 藤井達吉、津田信夫、板谷波山(理事長) 藤本鐵男

名古屋美術聯盟 名古屋市役所内

昭和十一年創立。愛知縣在住及出身の美術家を以て組織。郷土美術界の向上を圖り展覽會、講習會等開催の外美術獎勵に關する諸事業を行ふ。(會長) (市長) 縣忍(評議員) 川崎小虎、服部有恆、太田三郎、伊藤廉、鬼頭鶴三郎、毛利教武、長野埜志、狩野梅齋、朝藤其明、小川鴻城、横山施生、織田香逸、淺井正臣、石川英鳳、朝見香城、岩佐古香、井上安男、中野安治郎、船橋治彦、荻野正雄、渡邊多平、安藤邦衛、伊藤鐵、石井國義、杉本健吉、横井禮市、遠山清、市ノ木慶治、加藤忠三郎、原田隆謠、佐藤空鳴、加藤華仙、橋本良介、石田清、野水信吉、森本啓史

奈良縣美術協會 奈良市公園内奈良縣立商工館 縣下美術界の向上發展を期して奈良縣在住及び出身の美術家を以

て組織、昭和十五年十一月創立。十八年第四回展開催。(會長) 奈良縣知事(理事) 西本清城、立野雪郷、松井牧牛、飯田衛、濱田稔光、奥田堤、吉田直之、辰巳義人、中村義夫、山下繁雄、開澤謙平、新納忠之介、奥田勝、吉川政治、竹林薫、井上清一、吉田包春、幸王好太郎、久村大通、奈良洋畫會 奈良市法蓮佐保川町、曾根靖雅方 昭和七年設立。奈良縣美術家の指導養成を目的とす。(同人) 若山爲三、飯田衛、笠松春彦、森永泰雄、武若武作、辻操、小森重雄、廣瀬英男、岩井濱子、鎌田史彦、吉澤健二、曾根靖雅、御宮地保、庄司吉郎、保田貞治(顧問) 十二名

長野縣工藝美術協會 長野縣商工課内 長野縣在住及出身の關係者を集めて本縣工藝美術の進歩發達を圖るため、展覽會、表彰、指導、調査研究、販路斡旋等々の事業を行ふ。昭和十五年三月創立。(名譽會長) 今井五介(會長) 長野縣知事(常任理事) 長野縣商工課長 長野縣農民生產組合聯合會(工) 長野縣農經部農水產課内 電長野四三〇 一 縣下農村工藝品生産團體により組織。各團體の聯絡を圖り生産の指導、販路擴張並斡旋、展覽會開催等を行ふ。(會長) 經濟部農水產課長(副會長) 經濟部副主任江島次郎、中村實

南畫聯盟(日) (東京事務所) 麹町區四番町、小室方 電九段六二〇 (京都事務所) 京都市新町北大路上小柳北通西入、白倉二條方 電西陣三二一四 昭

和十一年九月日本南畫院及環堵畫塾の解散後、有志相謀り翌十月に結成した。南畫道の興隆を目的とし、研究會、公募展を開催する。(顧問) 小室翠雲(幹事) 岡田晴峰、白倉二條、人見少華、福田浩湖(委員) 關谷雲龍、大栗雄介、荒居翠湖、高須芝山、横内大明、村岡顯東、小川千裏、須藤幽邨、降旗篁岳、廣野穆亭、木内一焚、馬來田愛岳、峰村北山、宮原柳隱、渡邊黃華、松野自得、久保田王堂、小山居泉、佐々木喜堂、高橋暉山、横山松雲、高島祥光、栗飯原大醒子(會員) 七十七名 南紀美術會(日、洋、彫) 荒川區日暮里渡邊町一〇四〇、建島覺造方 電駒込一四〇一 大正八年紀州出身の美術家により結成。年一回東京或は郷里に展覽會を開く。(幹事) 後藤光行、木下繁、三木凱歌、中川藤次郎(會員) 二十九名 南洋美術協會(洋) 麹町區永田町、南洋廳内 昭和十六年七月發會。南洋に遊歴せし作家三十餘名を以て組織す。同月三越に第一回展開催。(會長) 小林萬吾(常任理事) 堀田清治、笹鹿彪(理事) 和田香苗、山崎坤象、布施信太郎

二科會(洋、彫) 四谷區愛住町一三ノ一 電四谷四九七八 大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月つひに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展開催の際の鑑査委員十一名は翌年そのまゝ、會員となり在野團體として獨立した。爾來同會は常に新進流派の作家を包容して我が洋畫史

上に啓蒙的功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻部加入を見た。昭和五年兒島善三郎、里見勝藏外會友七名は退會し、獨立美術協會を創立した。昭和十年會員石井柏亭、山下新太郎、安井會太郎、有馬生馬、藤川勇造の五名新帝國美術院會員に任命さるゝ、や同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その功勞を謝して名譽會員に推薦し、同會は從來の通り他くまで在野として行動する旨を聲明した。同十二年石井柏亭、有馬生馬、山下新太郎、安井會太郎等は名譽會員を辭退十六年藤川勇造は美術院會員に就任するに及び離脱した。毎秋東京に展覽會を開催し、引續き京都、大阪、福岡、名古屋等に於て臨時地方展を開催する。同十八年九月第三十回展に及ぶ。(繪畫部) (評議員會) 熊谷守一、北川民次、栗原信、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤吉、中川紀元、鍋井克之、野間仁根、岡田謙三、島崎鶴二、鈴木信太郎、東郷青兒、田口省吾、高岡德太郎、吉井淳二、横井禮市、黒田重太郎、國枝金三、濱田葆光、田村孝之介、坂本繁二郎、(在外) 國吉康雄、齋藤豐作(普通會員) 伊藤久三郎、松本弘二、酒井亮吉、峰岸義、服部正一郎、伊谷賢藏、錦義一郎、松井正、藤井二郎、古家新、福島金一郎、吉原治良、小林喜一郎、田中忠雄、榎倉省吾、小出卓二、柏原覺太郎(會友) 榎家猪知雄、岡部邦香、早川國彦、藤川榮子、橋本徹郎、加治屋隆二、桂ユキ子、大澤昌助、寺田竹

雄、山尾薫明、安部治郎吉、村田實史雄、野村守夫、鶴田宏、篠原來介、山本不二夫、松本俊介、高井貞二、佐野繁次郎、北島達夫、丹下富士男、神保俊子、清水刀根、藪野正雄、尾澤辰夫、飯田清毅、伊庭傳治郎、松村綾子、津田周平、浪江勘治郎、山本直治、加藤敏子、米良道博、井上覺造、田邊三重松、原勝四郎、旭亮弘、佐藤吉五郎、伊藤研之、坂宗一（彫塑部）（評議員）笠置季男、松村外次郎、泉二勝磨、水野欣三郎、渡邊義知、上田曉（會友）後藤一彦、柳田昌、川崎榮一、三浦舜太郎、中堀正孝、野水信吉、河合芳男、乘松巖、長野隆業

二科西人社（洋、彫） 福岡市大名町八七、青木壽方 昭和九年十一月創立。

九州出身の二科會出品者の組織する洋畫彫刻の研究團體で、十七年第八回展開催。廿四人會（洋） 中野區櫻山一一、樋口加六方 昭和七年創立の十七人會の擴大せるもので獨立展出品者の親睦團體隨時作品展開催。（會員）樋口加六、岡部文之助、法立昌雄、小島圭一、長島榮吉、横山清治、熊谷登久平、久保田久一、今西忠通、池田金之助、中尾彰、佐藤英男、竹中三郎、清水鍊徳、坪内節太郎、森有材、浦久保義信、赤星孝、小原雄二、坂本善三、赤堀佐兵、綠川廣太郎、富樫寅平

新潟縣輸出振興會 新潟縣經濟部商工課内 舊來の新潟縣工藝協會を改組して昭和十四年四月設立した。工藝品の調査研究講習會、展覽會の開催、作品の宣傳、斡旋其他を行ふ。（總裁）新潟縣知事（正會員）三七〇名（贊助會員）二二一名

西山畫塾青甲社（日） 京都市東山區八坂通東大路西入 電氣園一六八四 大正十二年西山翠嶂門下を以て創立。毎月研究會、年一回展覽會開催。（幹事）福田翠光（副幹事）水野深輝、本庄陶苑（研究會主事）澤安毅（學藝部主事）樋口富麻呂（評議員）山ノ内信一外十四名（常議員）堂本印象外九名

日東美術院（日） 大森區堤方町九〇七、岡部香峰方 美術に於ける肇國精神の發揚、日本畫の海外進出等を目的として昭和十五年創立。十八年第三回公募展を開催。（統裁）岡部香峰（同人）西村雨北、武田一路、武藤一夫、小出剛朗、平高主計（院友）齋藤修彦、五十嵐眞穂等十餘名

日本油繪會（洋） 世田ヶ谷區赤堤町一ノ一九七、福田方 昭和十六年創立。主として一水會出品中堅作家を以て組織年一回發表展を開催する。（會員）鈴木良三、瀧川太郎、林鶴雄、福田新生、矢崎重信、石川眞五郎、末松勇、能勢眞美、大月源二、矢野雄藏、高橋庸男

日本漆繪協會 杉並區三谷町一四〇松岡方 昭和十二年設立。漆繪及漆工藝の新生面開拓を目的とす。毎年發表展を開催する。十八年十月第三回展開催。（會員）片山佳吉、横井弘三、太齋泰夫、大村素峰、松岡素峰、三木義榮、森山珪秀等十一名

日本漆文化協會 本所區東兩國一ノ一兩國會館三階六號 漆及漆に關する文化事業の使命を遂行し適正の運営を圖らんとするもので、研究、調査、展覽會その他諸種の事業を行ふ。漆工藝に關する製作者、贊助者、組合並に團體等を主要會員とする。（會長）六角紫水（理事長）柴崎風岬

日本エツチング作家協會 麴町區麴町一ノ三、日本エツチング研究所内 電九段五一四 昭和十五年十二月西田武雄を中心に結成。エツチングの研究、普及を圖り十七年第三回展を開催した。（會長）田邊至（會員）西田武雄、今純三、曾我尾武治、松田義之、關野準一郎、中井平三郎、神原浩、内田進久、田中進、高羽敏、武藤完一、中田幾久治

日本畫院（日） 本郷區駒込千駄木町五九、望月春江方 電駒込二六四七 昭和十三年東京の文展系日本畫壇有志に依り結成、現下の日本畫壇の趨勢に鑑み之を横斷的に結束するのを痛感し茲に日本畫院の成立を見るに至る。吾等は協力以て清澄なる畫壇の先驅者たらんとす。」と聲明した。公募展を開催す。（同人）岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、川崎小虎、吉田秋光、吉村忠夫、常岡文龜、根上富治、野田九浦、矢澤茲月、町田曲江、松本泰水、小泉勝磨、穴山勝堂、飛田周山、望月春江

日本玩具統制協會（工） 淺草區菊屋橋一ノ二ノ三 電淺草一七四八、三三二二 社團法人、昭和十八年創立、全國玩具業各團體を以て會員とし、綜合的指導統制と運営の適正化を圖る。（理事長）倉持福雄

日本劇畫院（綜合） 澁橋區諏訪町一〇四、上野忠雅方 電牛込七二七〇 昭和十七年二月創立。演劇に關し理解と愛情をもつ美術作家を以て組織、演劇に題材を求めたる作品の發表、展覽會を行ふ。昭和十八年第二回展開催。（常任幹事）久保田金僊、上野忠雅（同人）井川洗厓、大木菊二、羽室邦彦、高橋幸雄、高崎重二、高根宏浩、上野忠雅、久保田金僊、藤澤瀧雄、名取春仙、數馬英一、秋草彌三郎、布施長春、佐原包吉、神保朋世、清水三重三、平田郷陽、近藤紫雲、森春島、宮尾しげを

日本建築士會 京橋區銀座西三ノ一建築會館七階 電京橋六二〇（近畿支部）大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四階日本建築協會内（名古屋支部）名古屋市中區南大津通安田生命館佐藤四郎建築事務所内（上海支部）中華民國上海市狄思威路五〇二號 大正三年創立。昭和三年社團法人設立認可。建築の設計監理に關する業務の改善進歩を圖り建築の發達に資するを以て目的とす。月刊雜誌「日本建築士」を發行。（會長）中村傳治

日本工作文化聯盟 品川區大井町三三三二、堀口方 電大森五一二〇 昭和十一年十二月九日發會、本會は科學、藝術其他工作文化に關與する諸分野の専門家を糾合し、且つ産業上の諸機能と提携して建築を中心とする工作文化の健全なる發達を圖らんとするもので、出版、展覽會、講演會の開催、諮問應答等を行な

三六

す。(會長) 伯爵黒田清(理事長) 岸田日出刀(理事) 堀口拾巳、佐藤武夫、關重廣、小池新二(幹事) 市浦健、關野克(特別會員) 澤島英太郎、鈴木道次、上野伊三郎、奥本新太郎、藏田周忠、坂倉準三、谷口吉郎、土浦龜城、中村彌三、服部勝吉、藤島亥治郎、前川國男、山越邦彦、山脇巖、吉田鐵郎

日本作家協會(綜合) 杉並區井荻二ノ一 昭和十八年創立。美術新協、明朗美術聯盟、歷程美術協會の三者合同せるもの、在野畫壇の相互協力發展を圖る。昭和十八年第一回展開催。(總務) 玉村方久斗(內務) 山岡良文(宣傳) 狩野晃行 日本挿繪畫家協會 淀橋區下落合四ノ二二一、林唯一方 電落合長崎二三五四 挿繪俱樂部を解消して新に組織した會で展覽會研究會の開催、出版等を行ふ。(名譽會長) 鏑木清方(會長) 石井鶴三(委員長) 林唯一(委員) 岩田專太郎、石井泰治、富田千秋、鴨下晁湖、吉田貫三郎、玉井德太郎、田代光、向井潤吉、野村俊彦、野口昂明、松野一夫、木村莊八、宮本三郎

日本山岳畫協會(洋) 杉並區上荻窪二ノ八七、末光鐵方 昭和十一年創立。山岳に關する繪畫の發表を行ふ。十八年第八回展。(會員) 足立源一郎、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、武井眞澄、吉田博、末光鐵、内野猛、中村善策、山川勇一郎、上田徹雄、河越虎之進、宮田熊雄、榎谷徹藏、山下繁雄(顧問) 小島島水、藤木九三

日本漆工會 神田區鍛冶町二ノ一六 電神田四一三九 財團法人、明治二十三年小川松民、柴田是眞、川邊一朝、池田泰眞、白山松松、田邊源助等二十四名の發企により設立。品川彌次郎子初代會頭となり、二代には田中光顯伯爵宮内大臣現職のまゝ、就任最も力を會勢に致した。爾來略隔年に漆工競技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一時其開催を休止したが昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。日本特有の蒔繪並に漆に關する傳統保存及進歩を圖り、事業として蒔繪に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽培の獎勵及其生産調査圖書標本類の蒐集、展覽會講演會開催等をなす。(理事長) 手塚千代吉(理事) 吉野富雄、大井貞雄、清水正雄、福岡羅太郎、渡利吉

日本女子美術院(日、洋) 淀橋區西大久保二ノ二五三 電四谷六三三五 昭和十六年二月創立。日本畫、洋畫の公募展を開く。(主幹) 垣見泰山(幹事) 伊藤鈴子、石田重子、石井克枝、西丸小園、陳進、尾形奈美、渡邊玉花、春日井細香、永井勝子、江崎照、宮内英子 日本水彩畫會 本郷區駒込神明町七二、望月省三方 故大下藤次郎、故丸山晚霞、故河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所を大正二年四月、石井柏亭、石川欽一郎、故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改制擴張して新に各派水

彩畫家の綜合團體として設立、毎春公募展開催。昭和十八年第三十回展に至る。(總務) 石井柏亭、石川欽一郎、石井鶴三、眞野紀太郎、南薰造、中澤弘光、相田直彦、赤城泰舒、小山周次、望月省三、富田溫一郎、板倉賛治、水野以文、石川達三、石川菊村、石川新一、市原義夫、山崎放太郎、草野米子(會員) 百十九名(會友) 十五名 日本彫金會(工) 本郷區駒込動坂町三二七 海野清方 明治中期に結成された日本金工協會が大正の末に解散されたの中の彫金家が金聲會を創立、其の後彫金會と改稱したが昭和九年會規を改め現在の日本彫金會となした。展覽會を開く。(會長) 清水龜藏(委員長) 海野清 日本彫刻家協會(彫) 目黒區自由ヶ丘二七七、林是方 昭和十一年五月結成。彫刻の研究團體、昭和十八年東京府美術館に第七回公募展を開催。(會員) 岩田滿平、林是、坂東文夫、大川逞一、大獄茂樹、奥田勝、加藤顯清、片山義郎、高澤七郎、武次郎、畝村直久、野々村一男、倉持芳、小柴利孝、明石順吉、雨田光平、金谷不二彦、三坂耿一郎、小寺昌三、菅沼五郎(會友) 伊室正次、國領辰彌、高田進六、來家末治、陳夏雨、北古賀一郎、川瀬永治、佛子泰夫、石田清、丹羽康晴、橋本次郎、松村禮一、高藤鎮夫、本多靜子、澤村吉光、吉野康彦、佐野義重、原利男 日本圖畫工作協會 世田谷區上馬町三ノ一〇五〇、三尾方 電世田谷二八七

八 全國中學校圖畫、手工、作業科教員有志を以て組織し、本部を東京に、支部を各府縣に置き會員相互の親睦を圖ると共に前記學科の振興に資するを以て目的とす。毎月雜誌「造形教育」發行。(會長) 伯爵平田榮二(理事長) 三尾興喜藏(理事) 關口晚三郎、松岡正雄、麻生隆秀、三浦直政、橋本興家、高橋重雄 日本陶藝研究會 中野區川添町一、電中野五八三五 大森方 昭和十四年舊來陶會系の有志に依り組織。研究會公募展を開催す。(會員) 長谷川怒、星野國太郎、土肥刀泉、塗師淡齋、小倉雅道、大森光彦、小川雄平、唐杉榮四、加藤閑陸、横山朝陽、竹内蘭山、松島一夫、小柳今朝一、湯山青屋、水野清一、鈴木木文子

日本陶磁彫刻作家協會 世田谷區赤堤町二ノ四六九、小川雄平方 電松澤三八九七 陶磁彫刻を専門とする會で昭和十五年十二月創立。(會長) 沼田一雅(監事) 長谷川怒、三澤寛(理事) 小川雄平、加藤顯清、小室達、雨宮治郎、伊奈辰次郎、山崎彌一、高山泰造、久保駒太郎、眞鍋知、船津英治、木村好雄、寺内信平 日本人形作家聯盟 瀧野川區田端町四六、鹿兒島方 昭和十五年創立。女展開係者を以てなり、人形美術の作品展、調査出版、海外紹介輸出斡旋等の事業を行ふ。(委員長) 鹿兒島壽藏(會員) 野口光彦、堀柳女、山本壽、佐久間珉市、綿貫朋春、久保佐四郎、推名靜枝、岡とよ

二

子、高濱かの子、鶴巻三郎等

日本人形美術院 下谷區上野櫻木町

五四、平田方 電下谷九二 白澤會、日

本人形社を経て昭和十六年十一月創設。我國人形美術の保護と育成を目的とす。

十八年第三回展を開催。(同人)岡本玉水、平田郷陽、外に會員八名

日本版畫協會 牛込區通寺町四一、

根本霞外方 大正七年創立の日本創作

版畫協會が、昭和六年版畫家の大同團結をはかり改組せるもの、十八年第十二回

公募展開催。(副會長)山本鼎(理事)石井鶴三、前川千帆、恩地孝四郎、平塚運

一、清宮彬、逸見亭、山口進、前田政雄(會務委員)下澤木鈴郎、橋本興家、畦

地梅太郎、田坂乾、關野準一郎、佐々木孔、柿原俊男、若山八十氏

日本版畫公會 麹町區麹町一ノ三 電九段〇五一四 全日本版畫家の總力を

を結集して日本版畫の振興を計るべく昭和十八年創立。諸種の事業を行ふ。(會

長)岩倉具榮(副會長)田邊至(理事長)恩地孝四郎(常務理事)西田武雄(會員)

約三百名

日本美術院(日、彫) 下谷區谷中上

三崎南町五二 電下谷二五一〇 明治

三十一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅邦以下

二十六名を正員として結成。新時代に於ける東洋美術の維持並開發」が創立に際

しての二大主張であった。同年十月第一回展を開催、研究所を下谷谷中初音町に

設置して後進の養成に努め雜誌「日本美

術」を發刊。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同人四名は岡倉

覺三と共に常陸の五浦に退去し専念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿する

に及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎南町に起し翌三年九月開院式

を舉行、十月再興第一回展を開催した。再興に當りしは横山大觀、下村觀山、木

村武山、安田靉彦、今村紫紅、小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、齋藤隆三等で其

の中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋畫部を設けたが

洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋

期に公募展を開き、又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリーブランド美術館の要請に應じ、同國主要都市六

箇所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努む。昭和十年帝院改組に際して、同人合議の上新帝院への参加を聲

明し、横山大觀、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、富田溪仙、平櫛田中、佐藤朝

山、藤井浩祐の八名が會員に就任した。十八年第三十回展開催。(經營者)横山大

觀、安田靉彦、齋藤隆三、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、平櫛田中(同人)(繪

畫部)横山大觀、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、中村岳陵、荒井寛

方、筆谷等觀、長野草風、橋本靜水、北野恆富、眞道黎明、橋本永邦、郷倉千觀、

堅山南風、酒井三良、富取風堂、小山大月、奥村土牛、小倉遊龜、田中青坪、太

田聰雨、中村貞以、新井勝利、北澤映月

(彫刻部)平櫛田中、佐藤清藏、石井鶴

三、保田龍門、喜多武四郎、新海竹藏、

大内青圓、山本豐市、中村直人、宮本重良、松原松造、村田德次郎、關谷光、辻

晋堂(院友)(繪畫部)西村青歸、牛田鶏村、兒玉素光、石原春秋、野生司香雪、

奥村藻山、大塚晃峻、橋本秀邦、黒田古郷、木下春、四田觀水、加藤洵毅、歸山

千蒼、奥村玲瓏、野田文雄、跡部白鳥、三石紅樹、中庭煥華、小島一齋、竝木瑞

穂、眞道秋晴、藤井白映、鈴木大藤、石本光太郎、柴宗廣、高橋萬年、中島清、

小谷津任牛、村田泥牛、高橋周桑、上田畦草、高橋秀佳、高橋都哉、中島榮刀、

岡田壺中、川手青邨、鈴木島心、島田納郎、岡田龍雄、松永成路、宮崎東里、河

村良孝、半田鶴一、我妻碧宇、丸儀太郎、宮田隆子、鶴飼節夫、横田仙草、花園朝

生、佐藤耕寛、冬木大丙、小林草悅、八ツ井舜圭、中澤一儒、對馬安正、佐野光

穂、岩橋英遠、河内舟人、小島丹溪、半田泰至、鈴木主子、里内久則、安孫子荻

聲、久保清子、中島萬木、鈴木三朝、菊池公明、柿沼宗居、岩田光壺、岡本彌壽

子、山口蒼輪、關曜明、岡茂以、長井亮、粥川伸二、三村石邦、佐々木京林、

鈴木麻古等、小松均、片岡球子、上恒候島、山本大慈、狗卷南名雄、酒井とし、

郷倉和子、鹽出英雄、後藤芳仙、館岡栗山、眞野滿、吉川朝衣、熊坂東夷、松坂

冬佐、船田玉樹、吉田善彦、木村武夫、相原萬里子、長谷川朝風、(彫塑部)

大橋敏男、松村秀太郎、杵谷精一、寺瀬

獸山、入江美法、大野隆一、林是、矢崎

虎夫、横田七郎、宮本理三郎、長濱虎雄、長谷川豐雄、岡村進、小林章、中平

四郎、古藤正雄、土井要輔、河野正造、關長造、柏木康兵、加藤泰三、武林興

吉、小林貞吾、森登一、櫻井祐一、山口眞一郎、菅原安男、小柳津三郎、板倉白

龍

日本美術及工藝統制協會(綜合) 日

本橋區室町一ノ七、三越本店内 社團

法人、美術及工藝技術の保存並に振興を圖り、製作、販賣、交易等につき國家目

的に即應したる綜合的指導統制を行ひ、併せて一般工藝産業の健全なる發達を圖

る。昭和十八年創立、本會は日本畫、油

給水彩、彫塑、工藝美術、産業工藝の五

部に分け、美術品及工藝品に關する生産者の認定、原材料の配給統制、販賣統制

検査、格付及價格の決定、輸出の斡施等

其他諸種の事業を行ふ。(會長)吉野信次(理事長)兒玉希望(理事)豐田雅孝、

阿原謙藏、橋本政實、山口蓬春、木村莊八、石井鶴三、加藤顯清、辻永、山崎覺

太郎、高村豐周、國井喜太郎、中村忠允、日野厚(監事)太田三郎、大島永明

日本美術協會(綜合) 下谷區上野公

園櫻ヶ岡 電下谷一九一〇 明治十一年日本美術の衰頹を憂ひ河瀬秀治等の同志會して美術品評會を開き十二年會名

を選んで龍池會と命名し、佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川宮織仁親王殿下を總裁に奉戴した。而して明治十三年



會を第二回より繼承して開催し明治二十年に至つた。此年十二月規則を改正し、會名をも亦日本美術協會と改め、其後毎年春季二回（彫刻、工藝及書、篆刻）秋季二回（日本畫及華道）の四回に分ち展覽會を開催するのを例とした。大正十四年組織を改めて財団法人とした。現在其組織は第一（繪畫）第二（書、篆刻）、第三（彫刻）第四（玉、石、木、竹、牙、角、介甲彫品、木鼻嵌、第五（彫金、鍍金、鍍銀）第六（鑄金、鍛金）、第七（陶磁、七寶、彫玻璃）、第八（漆器、蒔繪）第九（織物、刺繡）、第十（寫眞、製版）第十一（華道、盆石、盤景）の十一部より成る。尙同會列品館は大正十年の竣工で平家建、延坪五百二坪、同會主催展覽會に使用する外は希望者の依頼に應じ貸館する事がある。（總裁）高松宮宣仁親王殿下（會頭）中田敬義（副會頭）男爵東郷安（専務理事）溝口禎次郎（理事）山崎朝雲、香取秀貞、板谷波山、千葉胤明、大坪正義、今井爽邦、岡伊能、池上秀敏

〔監事〕杉山令吉〔主事〕日種義太郎、評議員二十三名、委員顧問七名、委員百五名、名譽會員十七名、特別會員二名、通常會員一千八百十五名

日本美術報國會（綜合） 日本橋區室町一ノ七、三越本店内 社團法人、全日本美術家の總力を結集して、日本美術を振興し大東亞文化建設に挺身すべく昭和十八年創立。本會は日本畫、油繪水彩、彫塑、工藝美術の四部に分れ、左の事業を行ふ。一、皇國美術觀の確立、二、美

術による國策宣揚並に戦力増強、三、美術家の練成、四、國民精神の作興並に國民資質の向上、五、美術政策の模立並に遂行への協力、六、國家目的に即應する美術の振興に關する各種の施設、七、戦争美術の振興、八、皇軍將兵及産業戰士の慰問激勵、九、新進美術家の育成、一〇、對外交化事業への協力、一一、各地域職域に於ける美術の指導育成、一二、優秀なる作家の表彰並に作品の推奨、一三、日本美術先覺者並に功勞者の顯彰、一四、古美術の保存、一五、美術家の互助施設並に美術資材用具の幹施、一六、美術に關する調査及出版、一七、諸官廳諸團體及文化各部門との連絡、一八、其他本會の目的を達成するに必要な事業（會長）

横山大觀（理事）安田敬彦、野田九清、山口蓬春、石井柏亭、辻永、木村莊八、齋藤素巖、石井鶴三、加藤顯清、香取秀貞、高村豐周、山崎覺太郎、兒玉希望、〔監事〕大智勝觀、太田三郎、關野聖雲、北原千庵

日本風景畫院（日） 北多摩郡狹江村岩戸一三一九 電話三一〇 日本風景觀の樹立を期して昭和十八年河口樂士が創設。公土會の後身。

日本文人畫協會（日） 小石川區小日向臺町二ノ二九、渡邊雪峯方 電大塚六三三七 文人畫の振興を圖るを目的とし、隨時畫及詩文書等の研究會、講習會展覽會等を開催す。（幹事）渡邊雪峰、中田雲暉、大久保楓閣、西丸小園、柏木玉郎（評議員）磯部羽州、伊藤紫雪、島田

日本民藝協會 芝區今入町一五、玉屋ビル 電話座七六三四一六 工藝の健全なる向上顯揚に寄與する目的を以て大正十五年創立。調査、出版、研究會、展覽會開催等を行ふ。昭和六年雜誌「工藝」發行。同十二年日本民藝館設立。同十四年雜誌「月刊民藝」發行。（理事長）柳宗悅（理事）式場隆三郎、河井寛次郎、濱田庄司、外村吉之介、井澤銈介、棟方志功、吉田璋也、淺沼喜實、淺野長景、村岡景文

日本木彫會 澁橋區諏訪町二三〇、内藤方 内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる木生會とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表の目的とし、毎年東京乃至大阪に於て製作展を開く。十五年五月正統木彫家協會の結成により二會に分裂した。同展は作品を公募せず、會員にて互選の上陳列する。十八年第十一回展開催。（幹部會務員）内藤伸、佐々木大樹、中野桂樹、三國慶一（會員）森

野園泉、山藤敏男、山口四郎、井口喜夫、大島胸藏、平澤信男、工藤敬三、西田明史、佐伯量良、外會友十三名、見學員二十名

### 【八行】

白壁畫會（日、洋、彫） 澁谷區轄ヶ谷原町八〇〇、安田豐方 昭和十年結成。壁畫藝術の研究及作品發表、實際仕事の應需を目的とす。十七年第六回展開催。（會員）鶴田吾郎、安田豐、布施信太郎、中村直人、島村三七雄、伊藤清永、奥村三七雄

白壁會（洋） 京都市東山區神宮道堀池町、山内善三郎方 電上二二五五 昭和二年九月關西美術院關係の同志を以て結成。昭和十三年十一月第十六回展開催。（休會）（會員）柴田又太郎、藤井義晴、水清公子、戸島宇雄、井上賢三、山内善三郎、伊谷賢藏、岩崎金雄、錦義一郎、飯田清毅、伊庭傳治郎、尾崎悌之助、永井朔夫、松村綾子、津田周平、藤田輝世、中西倪太郎、竹内喜助、廣田延造、豐岡孝子

白日會（洋、彫） 下谷區谷中清水町六、富田溫一郎方 大正十三年春組織。毎春東京府美術館に公募展を開き、昭和十八年一月創立二十周年記念展覽會を催した。（會員）（繪畫部）中澤弘光、富田溫一郎、大久保喜一、間部時雄、相田直彦、篠原薫、伊藤清永、荻野康兒、小堀進、灰野管通、渡部菊二、長明、川村精一郎、鈴木重成、島村三七雄、廣本了、山道榮助、古川弘、島田四郎、松平齊光、松平康南、佐藤功、大河内信秀、大石七鳳、坂江重雄、川口榮、川島實、小島直佐吉、福田義之助、渡邊百合子、栗林丈、市原義夫（彫刻部） 吉田三郎、木村桂二、笹野恵三、田島龜彦、岩崎良平、星野直弘、兒島正典、富田匠美（客員）三浦忠軒、三井高維、香山菴、富岡東四郎、金子日久連、河



津孝四〔會友〕(繪畫部) 渡邊柳次郎、岡崎金藏、兒玉道夫、朝田進、鈴木木次郎、南登志、小泉馨二、飯島八郎、谷部正、山内邦義、門脇耕、結田信、松岡次賀、神田橋信夫、高橋隆比古、長澤昇、山岸富五郎、古田芳雄、宮崎精一、草刈二郎、鹽澤祥悟、丸樹長三郎、藤江志津、江口賢一、畔上真雄、阿部七郎、西山閣二、金子富藏、前林章司、平松讓、矢戸章、三橋ふじ、大嶺正敏、安次嶺金正、三保義(彫刻部) 西田信、荒卷茂、竹内貞次郎、坂手讓

白朝會(洋) 淀橋區下落合一ノ五四〇、杉本貞一方 電大塚六七二六 昭和九年秋舊帝展第二部審査員級有志により組織、毎年秋二回東京及大阪に於て展覽會を開く。十四年三月銀座青樹社に第五回展開催。(同人) 金澤重治、金井文彦、吉村芳松、田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、楠木久太、杉本貞一

柏舟社(日) 京都市右京區御室小松野町二五、梅原藤坡方 電西陣五二三 京都市立繪畫專門學校の同期出身者で、故土田夢徳に師事した者を以て組織、會員は専ら柏舟社並に三三美術團展に作品發表をなす。(會員) 伊藤仁三郎、梅原藤坡、要樹平、澤田石民、新見虛舟、林司馬

環友會(日、彫) (東京) 下谷區谷中上三崎南町五二、日本美術院内(京都) 右京區嵯峨伊勢ノ上町一〇、佐野光穂方昭和十六年二月創立。日本美術院院友有志の組織する研究發表の會。尙從來の院

友俱樂部は社交機關としてのみ存置する十七年第二回展開催。

阪神彫塑家協會 兵庫縣武庫郡本山村小路一二三、妹尾健太郎方 電御影五一三一 昭和十一年創立。二科出品の彫塑家を以て結成。展覽會を開催する。(顧問) 上田曉(會員) 織田久馬一、唐木政一、山根顯一、木村敏一、妹尾健太郎、河合芳男、大西金次郎、道下長七、辻合喜代太郎、西井龜治、伊藤清芳、長谷川雅司、松本章

斑丘社(工) 下谷區上野元黒門町六神戶屋內 電下谷九八一 昭和五年度東美校工藝科入學者を以て組織する。展覽會開催。(同人) 鹿取一男、金田諒三、芳武茂介、松原泰男、寺井直次、下暢等三十二名 東京美術學校横濱會 廣濱市神奈川區松ヶ丘四九三、森達夫方 昭和十年五月創立。横濱在住若しくは出身の東美校卒業生、在校生、關係者を以て組織。親睦團體。展覽會を開催。(幹事) 三森達夫、會員九十二名

美術工藝大阪巧藝社 大阪市北區河内町一ノ二三、伊藤光秋方 電堀川二六八三 大正十四年創立の精美會を昭和八年會員を増加して現稱に改む。年一回同人の工藝展開催。(顧問) 白川朋吉(同人) 伊藤光秋、伊等鐵雄、今橋春齋、市川鏡瑠等十六名 美術懇話會 下谷區上野公園美術研究所內 電下谷三四八七 昭和六年十一月、美術研究所内に創立「美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健全なる發達に貢獻する」をもつて目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催。二、展覽會、講演會等の美術に關する研究的集會の開催。三、美術に關する出版を行ふ。昭和七年一月より十二月六月まで美術研究所の編輯にかゝる月刊「美術研究」を發行したるほか、美術研究資料(計四輯)、美術懇話會叢書(計二輯)等を出版してゐる。(理事長) 藤原銀次郎(理事) 二十五名(常務理事) 五名(會員) 百六十五名

美術創作家協會 世田谷區下代田二六四、小松義雄方 昭和十二年創立の自由美術家協會を十五年現稱に改めた。十八年第七回公募展を開催。(會員) 荒井龍男、濱口陽三、長谷川三郎、北尾淳一郎、小山昇、小松義雄、村井正誠、森芳雄、難波田龍起、中村眞、小野里利信、清野恒、植木茂、矢橋六郎、山口薫、山田光春、馬場顯三、文學沫、山口正城、今井繁三郎

美術新協(綜合) 杉並區荻町二ノ一 舊稱新興美術家協會。昭和十年七月創立。毎秋公募展を催す。十八年二月歷程美術協會、明朗美術聯盟と合同。(同人) 村井麗樹、榊原始更、玉村方久斗、五十嵐幸男、東宣正、井上秀雄、淺川藤治、杉本幸一郎、白井保春、圓山信一、小林良曹、野澤武美、山田稔、大久保實雄、關謙二(會友) 鈴木夢名子、菅野剛吉、村上杜夫、松竹正也、今井正、中靜杜六、森夜瀧

美術文化協會(綜合) 本郷區動坂町三二七、福澤方 獨立を脱退した福澤一郎を中心に主として獨立、二科の所謂前衛派の新進が昭和十四年に結成した。同會は繪畫、彫刻、寫眞、裝飾、圖案、文筆等各分野を網羅し、綜合的に前衛運動を爲さんとする。十八年第四回公募展を開催す。(會員) 淺原清隆、阿部芳文、櫻光、麻生三郎、土井俊夫、藤沼朝保、福澤一郎、古澤岩美、濱松小源太、濱谷次郎、井出則雄、井上長三郎、糸園和三郎、柿手春三、北脇昇、小牧源太郎、金子英雄、三崎孝雄、森堯之、丸木位里、小川原脩、大口登、大塚耕二、佐田勝、三水公平、杉本直、高橋迪章、鷹山宇一、寺田政明、土屋幸夫、渡邊武、數内正直、米倉壽仁、吉井忠、吉加江清、原田隆、高津守、杉原正己、内藤健一、金河健

美術問題研究會 淀橋區下落合四ノ二〇七一、尾川方 昭和十五年十二月美術に關する諸問題を檢討する目的を以て設立す。現在美術評論にたづさはる者により組織。(會員) 今泉篤男、蓮實重康、富永惣一、外山卯三郎、千澤横治、大口理夫、奥平英雄、尾川多計、嘉門安雄、横川毅一郎、田中一松、瀧口修造、田近憲三、谷信一、田中信行、仲田勝之助、中井宗太郎、長島喜三、仲田定之助、村田良策、内山義郎、黒田鶴心、山際靖、山田智三郎、柳亮、摩壽意善郎、小池新二、江川和彦、相良德三、荒城季夫、佐波甫、北川桃雄、金原吾香、水澤澄夫、三輪福松、土方定一、森口多里、森田龜

之助、鈴木進、鈴木道夫、青柳正廣、新  
規矩雄、税所篤二、嵯崎宗重、四宮潤一、  
鈴木仁一、坂崎坦、植村鷹千代、兒島喜  
久雄、何初彦、大島隆一、勝原雅大

兵庫縣新美術聯盟(綜合) 神戸市神  
戸區三宮町三ノ九二 電三宮三三五  
昭和五年結成の兵庫縣美術家聯盟と大正

十一年創立せる兵庫縣美術協會を合同し  
昭和十七年一月同縣在住の美術家を網羅  
して本會を組織した。展覽會研究會其他

美術文化に關する事業を行ふ。(會長) 大  
政翼賛會同縣支部長(委員) 鈴木清一、  
飯塚周悅、伊川寛、大石輝一、小磯良平、

杉浦三郎、森月城、八島遙雲、和田和一  
〔囑託〕大塚銀次郎、會員一九〇名、賛  
助會員二四名

表裝同人會 神田區東神田二ノ四、  
栗山方 電浪花二七一六 表裝家の團  
體で展覽會を開催す。(同人) 栗山弘三郎、

稻本金次郎、安見三郎、星野常吉、山越  
廉三、宇田川孝太郎、岡村辰雄、大坂泰  
藏、石井勇

廣島美術人協會 豐島區西巢鴨四ノ  
八八、野村方 廣島地方に於て美術文  
化發展に寄與し技術的指導を目的とす。

昭和十八年七月第二回展開催。會員十名  
廣島縣美術協會(日、洋、工) 廣島  
市猿樂町、縣產業獎勵館内 電一八三八

大正四年創立。美術及美術工藝の發達を  
圖るを目的とす。公募展を開催す。(會長)  
坂間裕〔副會長〕原貫之助、長尾富太郎

〔主事〕山根三三郎〔會員〕七十餘名  
伏虎美術協會(洋) 澁谷區千駄谷町

五ノ九〇二、木下孝則方 昭和十一年  
設立。和歌山縣下の洋畫の發達獎勵を目  
的とす。毎春和歌山市に公募展開催。十

二年五月第二回展開催。(會長) 和歌山縣  
知事〔會員〕木下孝則、木下義謙、濱地  
清松、川口軌外、碓伊之助、岡部邦香、

村井正誠  
福井縣漆藝會 福井縣今立郡河和田  
村小牧一ノ二、小牧作兵衛方 福井

縣漆工藝の發達を目的とし、漆藝の研究  
並發表を行ふ。(名譽顧問) 根尾謙兒、山  
崎覺太郎〔會長〕小林作兵衛、會員七名

福井縣美術協會 福井市、福井縣商  
品陳列所内 大正十五年創立。福井縣  
出身並在住の美術家を以て組織。縣下美

術及工藝の發達を圖り、毎年展覽會、講  
習會、講演會等開催の外他展への出品幹  
旋を行ふ。(會長) 根尾謙兒

福岡縣工藝協會 福岡市天神町、福  
岡縣廳内 昭和十一年設立。縣下工藝  
產業の發達を圖り、工藝に關する調査、

展覽會、講習會の開催、工藝功勞者の表  
彰等を行ふ。「福岡縣工藝展覽會」は同協  
會員が主としてその中心となる。(會長)

福岡縣知事  
福岡縣美術協會 福岡市天神町十七  
(東京事務所) 豐島區巢鴨町五ノ一四

一、吉村方 昭和十五年九月、福岡縣  
出身並に縣在住の美術家及同好者等を以  
て組織す。毎年福岡市に於て日本畫、洋

畫、彫塑、工藝に互る作品展(招待出品)  
を開く。十七年十一月第三回展開催。(會  
長) 本間精〔福會長〕畑山四男美〔第一

回委員(第一部) 阿部春峰、今中素友、  
水上泰生、吉村忠夫(第二部) 兒島義三  
郎、坂本繁二郎、辻永、中村研一、山喜

多二郎太、吉田博、和田三造(第三部)  
津上昌平、富永朝堂、早川朝洋、山崎朝  
雲、安永良徳(第四部) 仰木政齊、岡部

達男、豐田勝秋  
福岡美術會(綜合) 福岡市因幡町博  
物館内 電西一六七五 大正十二年創

立。福岡市在住並に出身美術家をもつて  
組織、綜合展を開催。(會長) 福岡市長  
〔委員長〕太田嘉兵衛

福岡美術會(日) 本郷區駒込林町七  
六、角田磐谷方 大正八年、福岡縣出  
身の日本畫家を以て組織。東京及び郷土

に於て展覽會を開催す。十八年第十五回  
展。(會長) 勝田蕉琴〔理事〕荻生天泉、  
太田秋民、酒井三良〔幹事〕角田磐石、

石塚省三、渡邊清年、酒井白澄、鴻集一  
善、須田善二、湯上昌久、猪卷清明  
扶桑會(綜合) 目黒區上目黒五ノ二

四七三、片山方 昭和十七年七月結成。  
同十二月第一回公募展開催。(會員) 今西  
洋〔陶〕大野平吉、大石俊彦、片山健吉、

角浩、高橋惟一、高林和作、山崎武郎、  
澤田美喜子、東山沙智子、清水鍊徳(以  
上油彩) 泉二磨齋(彫刻)、彌吉明(染色)

里見宗次(産業美術) 比田井小琴、上田  
桑鳩(書道)〔客員〕金原省吾  
邦畫一如會(日) 荒川區日暮里渡邊

町一〇三五、石井柏亭方 昭和十五年  
十二月組織。同人展を開催す。(會員) 津  
田青楓、小杉放庵、石井柏亭、藤田嗣治、

石井鶴三、鍋井克之、牧野虎雄、中川紀  
元、木村莊八、中川一政、東郷青兒  
邦畫教育研究會 赤坂區新坂町四七

大貫鏡心方 昭和十二年結成。東美校  
日本畫及び師範科出身の美術家により組  
織。研究會を開催す。(會長) 結城素明

〔評議員〕川崎小虎、矢澤弦月、小泉勝  
爾、山田庸、常岡文龜、多賀谷健吉、松  
田義之、松垣龜夫〔幹事〕狩野探道、大

貫鏡心、大島正記、白井剛夫、石田桂秋、  
松垣龜夫、淺野秀一、下田舜堂〔會員〕  
五十名

萌青會(日) 小石川區小日向臺町三  
ノ五三、長澤美枝方 電牛込二二二二  
女子美術專門學校の師範科高等科日本畫

部の昭和九年度卒業生有志を以て組織、  
十三年六月第四回展開催。會員九名  
報道美術協會 芝區西芝蒲一、東京

高等工藝學校内 電三田一一五六 昭  
和十四年設立。東京高等工藝學校卒業生  
有志により組織。報道美術の研究並に實

踐及び會員の自覺向上を目的とす。年一  
回以上展覽會開催。(會長) 宮下孝雄〔顧  
問〕鈴木京平、鎌田彌壽治、伊東亮次〔常

任幹事〕片野一男、樋口渡、大塚均、松  
本虎雄〔幹事〕大橋正、塚田敢、日置勝  
駿、伊藤憲治、松島義昭、山縣信輔、岩

瀬茂、山上謙一〔會員〕七十八名  
北海道美術協會(綜合) 札幌市北四  
條西七丁目三 大正十四年創立。爾來

毎秋展覽會を開催、昭和十六年第十七回  
展に至る。毎夏講習會を開く。(會長) 北  
海道長官〔副會長〕北海道帝國大學總長

【理事】荒瀧實、木下三四彦、小谷義雄、齋藤與一郎、鬼川俊藏、島崎貢、佐野四滿美、竹内武夫

北斗會(洋) 名古屋市昭和區若柳町一ノ二〇、東本春水方 北川民次を中心とした名古屋地方二科出品者の會、展覽會を開催。【指導者】北川民次【主宰】東本春水

北方美術協會(洋、彫) 小樽市色内町六丁目谷吉二郎方 昭和十年、小樽出身及在住の美術家に依り結成。毎年展覽會を開催。【會員】兼平英示、樹田誠一、三浦鮮治、中野五一、中村善策、澁谷政雄、谷吉二郎、竹部武一、山崎省三

北陽會(綜合) 世田谷區深澤町三ノ六三二、郷倉方 電世田谷二八七九昭和八年創立。東美校卒の富山縣出身在京美術家を以て組織。同人展開催。【會長】伯爵前田利男【副會長】高廣三郎【世話人】佐々木大樹、郷倉千毅、長谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島甚之助【會員】五十一名

墨雲社(日) 大阪府西區南堀江通三ノ二二、赤松雲嶺方 大正十一年、赤松雲嶺門下に依り組織。展覽會開催。【會員】四十六名

墨洋會(日) 下谷區谷中上三崎南町六一、堀進二方 電下谷六五〇〇 太平洋畫會の會員で、日本畫を描く有志を以て組織。展覽會を開く。【會員】石井柏亭他十三名

三重縣工藝協會 三重縣津市中茶屋町、三重縣商工課内 昭和九年創立。縣下の工藝品製造業者販賣者並に工藝組合團體を以て組織。工藝品の改善並に輸出増進を圖り、展覽會、講演會の開催、取引上の紹介斡旋等を行ふ。【會長】三重縣經濟部長【會員】百七十名

無所屬日本畫家聯合會 中央事務所、小石川區小日向臺町一ノ七四、古城方、大阪事務所、大阪府西區天下茶屋三ノ九八、山口方 各團體に所屬せざる日本畫家を聯合して昭和十八年七月結成。【代表】中央、古城江親、大阪、山口紳平【世話人】石山太柏、生田花朝、織田觀潮、尾竹國親、岡本大更、川口春波、鴨下晃湖、片山春帆、吉田白流、高木古泉、丹阿彌彌吉、南部春邦、丸木位里、舟山三朗、幸松春浦、三井萬里、島田柏樹、下村爲山、管楯彦【會員】岸波百輝居等五十七名

明期美術聯盟(日) 板橋區練馬南町一ノ三四八五、狩野晃行方 昭和九年一月青龍社舊同人落合朗風、川口春波に依り結成。同十二年盟首落合朗風逝去し川口春波が主宰となつたが、退會した。十七年第九回公募展開催。十八年二月歷程美術協會、美術新協と合同。【同人】狩野晃行、渡邊日向、東條光高、山下昌風、吉田錦穂

山梨美術協會(綜合) 世田谷區赤堤町一ノ一五四、土屋義郎方 甲府市百石町、山梨日日新聞社内 昭和十一年結成。山梨縣出身並に在住の美術關係者を以て組織。展覽會、講演會を開く。昭和十五年第四回展を甲府市に開催。【會長】山梨日日新聞社長 野口二郎【會員】六十一名

山形縣美術家協會(綜合) 本郷區勸坂町三二七、湯原柳畝 電駒込五三一山形縣出身美術家よりなる綜合團體で昭和十五年三月創立。十八年第三回展覽會を酒田市にて開催。【會員】(日本畫)根上富治、菊地華秋、石山太柏、湯原柳畝、松田修坪、高島祥光(油繪)椿貞雄、土田文雄、鈴木亞夫、新海覺雄、佐藤秀夫、石井彌一郎(彫刻)新海竹藏、小野田高節、熊谷幸太郎、櫻井祐一、長沼孝三、【工藝】結城哲雄、中川哲哉、中村元雄【會員】總數約六十五名

有秋會(日) 大阪市東住吉區山坂町四丁目七 健全なる邦畫の向上發展を計るを以て目的とす。創立、昭和十六年三月。十八年第三回展開催。【會員】押柄江春、大島文瑛、吉田晃嶺、中川雲煙、内田稻葉、久保田耕民、近藤宣彦、岸田直穂、南春章、姫島竹亭

羊和會(工) 大森區馬込町東二ノ一四二二、小林盛良方 昭和六年、舊帝展第四部入選者を以て組織。金工藝の發達を圖るを目的として毎年日本橋三越に同人展を開催す。【顧問】伊藤正見、石田英一、桂光春、海野清、北原千鹿、清水龜藏、鈴木美彦【會員】磯崎美夫、大木秀春、長島正親、梅垣景山、山下春興、府川一信、小杉芳盛、有田利章、宮本猛、鈴木春盛、鶴岡康次、小林盛良

徳川義恕〔幹事〕子爵織田信大、子爵松平定晴、大給近清〔會員〕十九名〔客員〕十五名

緑菴會〔洋〕 杉並區東荻町六九、神津方 電菴二四四三 神津港人が主宰する會で、公募展を開く。昭和十八年第五回展開催。〔會員〕神津港人、内堀一男、近藤博之、佐藤利平、中森放子、久光茂、村上誠〔賓員〕大澤佐一、平井爲成

緑土社〔洋〕 仙臺市東二番町九六、金澤男二方 電仙臺八七一 郷土美の發揚を期して昭和十六年創立。十八年第三回展開催。〔會員〕金澤男二、相澤輝治、佐々木威雄等九名

歷程美術協會〔綜合〕 世田谷區上馬町一ノ八六六、山岡方 京都市東山區五條坂油小路下ル、福井方 昭和十三年六月創立。新日本畫の創作を趣旨とし、公募展を開く。十八年二月明朗美術聯盟美術新協と合同。〔會員〕田口莊、山岡良文、蒔田皓成、村山東吳、福井日出夫、山崎隆、松本一穂、丹生公男、岸秀雄、新田實

連袖會〔洋〕 牛込區市ヶ谷砂土原町一ノ二、久野方 昭和十二年安井曾太郎の門下を以て組織。十八年第六回展を開く。〔會員〕奥田郁太郎、小野末、片多三吉、金子博信、狩野壽一、高田誠、中村琢二、二宮雪夫、高見耿太郎、久野昌康、本郷惇、三浦俊輔、渡邊正太郎、渡邊宗一、丸野豊司、菅野矢一

六潮會〔日、洋〕 目黒區大原町一一

六二、横川毅一郎方 昭和五年創立、研究をなす。〔會員〕中村岳陵、中川紀元、山口蓬春、牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩素心菴、横川毅一郎

六萌會〔洋〕 横濱市鶴見區東寺尾町一六〇七、鳥羽宗雄方 昭和八年度の美術學校出身者及び有志を以て組織。十八年第六回展を開く。〔會員〕鳥羽宗雄、中村新次郎、上田久之、小林三郎、小林剛、角浩

#### 【フ行】

和光會〔工〕 下谷區谷中天王寺一六 津田信夫方 電下一二三四 昭和九年設立。同人展を開く。〔會員〕和田三造、津田信夫、沼田一雅、高村豊周、廣川松五郎、山崎覺太郎、河村靖山、岩田藤七香取秀良、北原千鹿、富本憲吉

美術家及美術關係者名簿



## 凡 例

一、本名簿に載せた美術家及美術關係者の数は二六三三名である、わが國において美術家として社會的地位を有する人々を採録した。不備の點は次年度に補ひたい。

一、本名簿は氏名の頭文字の發音により五十音順に記載した。發音の同じ場合は字劃の少いものを先にし、頭文字の同じものは二字目の發音によりその發音の同じ場合は字劃の少いものを先にした。但し同字は訓音の異なるものも可成一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、本名簿に用ひた略語は大體左の通りである。

(日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑  
(工)工藝 (漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染色 (織)織物  
(繡)刺繡 (木)木工藝 (竹)竹工藝 (硝)硝子工藝 (圖)圖案 (建)建築  
(學)學者 (文)文藝家 (批)美術批評家 (教)美術教育家 (記)美術記者 (帝院)帝國美術院 (帝院賞)帝國美術院賞 (舊帝展)舊帝國美術院美術展覽會及帝國美術院展覽會 (舊文展)舊文部省美術展覽會 (文展)昭和十一年文部省美術展覽會・第一回以降文部省美術展覽會

(藝術院會員)帝國藝術院會員 (學士院會員)帝國學士院會員 (國寶委員)國寶保存會委員 (重要美術委員)重要美術品等調查委員會委員 (史蹟名勝委員)史蹟名勝天然紀念物調查委員會委員 (朝鮮寶物委員)朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存會委員 (東美校)東京美術學校 (日美校)日本美術學校 (女美校)女子美術學校・女子美術專門學校 (東京高工藝校)東京高等工藝學校 (東京高工校)東京高等工業學校 (美術院)日本美術院或は同研究所 (美術協會)日本美術協會 (太平洋)太平洋畫會研究所或は太平洋美術學校 (川端校)川端畫學校 (水彩畫會)日本水彩畫會或は同研究所 (本郷研)本郷繪畫研究所 (南畫院)日本南畫院 (葵橋研)葵橋研究所 (京都美工校)京都市立美術工藝學校 (京都繪專校)京都市立繪畫專門學校 (京都高工藝校)京都高等工藝學校 (大阪美校)大阪美術學校 (信濃橋研)信濃橋洋畫研究所 等  
一、住所中東京都のみは都名を略して區名を以て始めた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (47～98 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.47-98)

Cut for protection of the personal information

昭和二十二年三月二十五日印刷  
昭和二十二年四月一日發行

日本美術年鑑奧附  
昭和十八年版

定價八拾五圓

編輯者

東京都台東區上野公園

美術研究所

發行者

東京都新宿區下落合四ノ一九九五

後藤眞太郎

印刷者

東京都板橋區志村町五番地

楠末治

印刷所

東京都板橋區志村町五番地

凸版印刷株式會社

發行所

東京都新宿區下落合四ノ一九九五

座右寶刊行會

會員番號A一二六〇〇一